

とある転生者の憂鬱な日々 リメイク版

ぼけなす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

むかし、むかし。千年か百年かそれくらい前にある少年がいた。その少年はとある『魔法少女』との約束をし、戦場で絶望を知りながらも英雄となった。返り血を浴びず、傷無き死体を周りに作り出すその姿は——『無血の死神』と誰もが恐れ、崇めた。しかしその彼は親友である女の子に殺され、そして目を覚ませば転生していた。

そんな彼は第二の人生を平穏に暮らせる——わけでもなかった！

ヒロインは一部が変態、アホ、お姉ちゃん、苦勞人、そして腹黒!? しかもネタとノリで少年を振り回すばかり!?

そう、彼の悲しく絶望的な前世は終わった。そして始まるのは彼の混沌に満ちたコメディ全開の第二の人生だった！

果たして主人公は無事に天寿を全うできるのか!?(※無理だと思います)

この物語は苦勞人な主人公がイロモノとなってしまうたヒロインに振り回され、シリアスあり、ギャグあり、カオスありな第二の人生を過ごす憂鬱な人生を過ごすお話である！

※前作のリメイク版です。変態がいます。外道もいます。そして主人公は苦勞します！

しかもとある原作キャラがぶっ壊れており、もはやオリキャラレベルになっているので、免疫ない人にはキツいかも……。なので無理な

人は見ないことをお勧めします。

感想、批判、アドバイスがある方はぜひ送ってください！

目次

プロローグ

1

第一話 絶望からの覚醒

8

第二話 変わらぬ日常。再会したのは変わったあの子達

14

第三話 転校生が自分達と何か違うのは世の常

21

第四話 唯一の常識人

31

第五話 魔法少女集合！そして崩壊し始める（一部の）キャラ

39

第六話 英雄に勝てる一般人はなかなかいない

49

第七話 温泉旅行はカオスな件

60

第八話 はつきり言おう。やりたい放題だなオイ

68

第九話 観測された神器使い

77

第十話 泣いたところで意味無し。彼女は通常運行

84

第十一話 神器使い達

91

第十二話 ニヤン吉は裏切った

100

第十三話 英雄と魔女

111

第十四話 ジュエルシード戦

117

第十五話 魔女の結末と裏切り

126

第十六話 『魔女』と神器使い

137

第十七話 望まぬ戦い

151

第十八話 『無血』と『鮮血』

158

第十九話 一つの終わり

165

第二十話 五木雷斗は巻き込まれやすい

173

第二十一話 対話する。そしてカオス！

181

第二十二話 これってフラグ？

189

閑話 衛の決意

第二十三話 夏と言えば海。海と言えばカオス

番外編 VS 『最凶の悪夢』く夢うつつな物語

第二十四話 運動会はガチの争い

第二十五話 巡り会う

第二十六話 開戦——シリアスになれねえ

第二十七話 そして彼女は笑った

第二十八話 ヒーローと英雄

第二十九話 物語は遂に動き出す

第三十話 実はソラのファーストはまだだったな件

第三十一話 こいつらに関わってはいけない

第三十二話 この世に絶対はない

第三十三話 知らなかった……

第三十四話 報いを受ける！

第三十五話 幸せは夢にはない

第三十六話 なぜお前は……

第三十七話 偽りのキャラ

第三十八話 そろえ、登場人物達。ワルツの時間だ

第三十九話 ■■の物語

第四十話 リーガルな弁護士

閑話 バレンタイン、デス

第四十一話 天神小学校というホラーハウス

第四十二話 ホラーがモナー(笑)になった件

第四十三話 コーラスパーティー(※つまりカオスです)

第四十四話 マテリアルズ

第四十五話	●●●に冥土服Ⅱ視界の暴力	405
第四十六話	ネコネコにやんにやん団	410
第四十七話	無血と混沌のワルツ	418
第四十八話	化け物な戦士	423
第四十九話	エピソードと……	430
第五十話	孤独になった少年	433
第五十一話	だってあたしって馬鹿だから	442
第五十二話	良いヤツ化計画（絶対に真似してはいけないヤツ）	449
第五十三話	走れさやか	455
第五十四話	失う仲間	462
第五十五話	最凶の死神	470
第五十六話	神威ソラ	476
第五十七話	彼の絆	488
第五十八話	最高の味方	493
第五十九話	コラボっちゃいますその二（あれ？ 番外編じゃない？）	499
第六十話	byソラ	507
第六十一話	コラボっちゃいますその四（byあれ？ こんなヤツいたっけ？）	515
第六十二話	コラボっちゃいます（嘘つきと化け物とサッカーしようぜ!! byソラ）	523
とある第六十三話	コラボっちゃいます（友達——だといいなあ	
!! ……自信ねえよ。友達じゃないって言われそうで byソラ）		

第六十四話 コラボっちゃいますその五（友情がタイトルです…）

（遠い目） by ソラ 545

第六十五話 とりあえずテメエはぶちのめす 558

第六十六話 終わり？ いいえ、これは始まりよ 564

第六十七話 エピローグ的な、救われなかった少年の話 570

第六十八話 新たな世界へ旅道中 574

第六十九話 あ、ヤバツ!! 580

第七十話 革命軍と現状把握 584

第七十一話 救世主 590

第七十二話 巻き込まれるのはヤダ 597

第七十三話 ……それでも 605

第七十四話 負けない魂 611

第七十五話 変身（笑）。高町なのはは危険です 617

第七十六話 動き出すもの 623

第七十七話 女の戦いと風の守護者VS黒の剣士 629

第七十八話 水中戦って人間ができるものじゃない 637

第七十九話 わからない…けどやらなくちゃいけない気がしたんだよ 646

第八十話 想定外 654

第八十一話 救世主と魔導師 664

第八十二話 フェイト覚醒！（ただし、まともとは限らない）

672

第八十三話 最凶にして最狂 682

第八十四話 強い弱いの話じゃない。相手に勝てるか負けるかの話

第八十五話	これにて閉幕	688
第八十六話	彼女が残したもの	706
第八十七話	聖書談義（腹を割って話す雑談）	710
第八十八話	異世界へ遊びにいけます	721
第八十九話	変態クエスト	728
第九十話	お兄ちゃんだけど愛さえあれば関係ないよね!!	733
第九十一話	冒険は続くどこまでも	740
第九十二話	進撃の母上（笑）	745
第九十三話	奥様は〇〇少女	755
第九十四話	ピンチと秘密	762
第九十五話	弱体化	769
第九十六話	始動	777
第九十七話	バイバイ	787
第九十八話	嘆きの英雄	798
第九十九話	再現された伝説	807
第一百話	中途半端どけどエピソード的な続き	814
閑話	実はこんなことがありました（笑）	817
閑話	雷斗くんの前世 前半	824
閑話	雷斗くんの前世 後半	831
小話	やりたい放題シリーズ	841
第一百一話	機動六課（ただし『変態』がいる）	849
第一百二話	チビソラは弱い。けど天才なんだよ	859
第一百三話	電車に乗り込むのは駅からで	864
第一百四話	トラウマ劇場とある日常風景（笑）	873

第百五話	ホテル・アグスタ（え、ラブホじゃないのここ!?)	byま
どか)	—————	882
第百六話	F e l t a c t i o n	889
第百七話	それは違うぜ	900
第百八話	負けたくない少年	908
第百九話	和解と……	918
第百十話	休日	928
第百十一話	女の子を保護して終わりに思っていたら……	936
第百十二話	力を失う者	942
第百十三話	変態達の狂騒歌	954
第百十四話	えーと……?	962

プロローグ

むかしむかし、あるところに一人の少年がいました。その少年は夢見るお年頃で、誰でも助けられるヒーローに憧れていました。

そんな理想を求め、救いのヒーローになった気分だった少年はある少女達と出会います。絶望と希望の板挟みに苦しむ少女——魔法少女達です。

彼女達は絶望たる象徴である魔女と戦い、そして彼女自身が絶望すれば魔女となる人間ではなくなった悲しい少女達です。

少年はそうとも知らずでしたが、彼女達のために戦い、そして一人の親友を守ろうとした魔法少女の願いを果たそうしました。

しかしままならないのが現実です。その魔法少女の願いを否定するかのように、『抑止の存在』という審判者が彼女達と少年に立ちはだかりました。結果は言うまでもなかったでしょう。

仲間の魔法少女達三人が無惨な死を迎え、残された魔法少女と少年は無力のまま、望まぬ形で魔法少女の親友である女の子を『概念化』という結末を迎えさせてしまいました。

これが少年が救えなかった少女——『円環の理』になってしまった取り残された女の子の話です。

少年は『^{彼女}円環の理』を、『彼女の親友』の願いを果たすためにも強くなるうと決意し、師に呼ばれ戦争へ行きました。

そして少年はどうなったのかは………まあどうでもいいだろう。だってオレの黒歴史の話だし。てか、純粹なオレ⇨バカの結晶みたかったものだ。

まあそれはさておき。オレは今、死んで何もない空間にいる。

いやマジで暗い……。世界が闇に包まれた空間。夜空色に支配された何もない世界にいる。

そして何もないのに、海に沈むかのように墜ちていく……。

ここが死の国だろうか？ それとも地獄だろうか？

まあどうでもいいか……。『無血の死神』と呼ばれたオレ——最低最悪な殺戮者が迎える最悪な結末なのだろう。悪魔となった彼女のために戦い、その結果無惨な死を迎えた結果がこれだ。

とは言え、なぜ死んだオレに意識があるのだろうか？

死んでしまえば意識なんてないのに、なぜこんなに思考がクリアなのだろう。

そんなことを考えていると、老人の声が空間に響いた。

『フォッフオツ……目覚めたかのう。踏み台候補よ』

「踏み台？ なんぞそれ？」

『踏み台と言えば踏み台転生者じゃぞ？ それすらわからぬとはよほどの馬鹿のようだろう』

「見ず知らずのヤツに馬鹿って言われるのはなんかムカつくな。てか、お前誰だよ」

『わか？ わしは下級神じゃ』

「かきゆうしん？」

神つていやありえないから。だいたい神つて言えば神木の女神しか知らねえし。

『喜べ人間。貴様に我が主人公のための踏み台転生者になってもらおうぞ』

「マジで？ 残り二人できたら『ジェットストリームアタック』してもいい？」

『その踏み台ではないがのう。まあいい。貴様には呪いとして踏み台を演じなければ周りから嫌われる呪いを与えてやろう』

うわっ、いらねえ。そんな呪いもらうこいつロクな神様じゃねえな。

呪いを受けたのか、身体がやや思い感じがした。

『ん？ なんじゃその強固な肉体。そんな身体スペックなんぞ下げてるぞ』

オイ、人が鍛えに鍛えた肉体を下げんな……っつてうわ、最悪。身体がめちやくちや重くなった。なんか重りをつけられた感じがする。

『フォッフオツ！ 髪も銀髪に染めてやった。お金はそうじあのう、

まあ最低限支給してやるぞ。ではゆくがいい踏み台くん』

「ジジイ、てめえ……！」

オレは召喚術を使おうと手を出す。召喚術とは端的に言えば魔力によって発動する呼び出し転移だ。魔力のマーキングした物体をその場で喚び出すことができるがオレが喚び出すのは、マーキングした物体ではない。

魂の一部を武器にしたモノ——【神器】だ。

【神器】とは最古の英雄『ギルガメッシュⅡアーティファクト』が発した魂の一部を兵器にした魔法武具だ。かの英雄たる彼はあらゆる【神器】の使い手として君臨し、そしてたった一人で王国を立ち上げ、世界を支配したと言われている。

彼が開発したその【神器】は後の世に広まり、その使い手を『神器使い』と呼ばれるようになった。

まあ昔話はさておき、オレはその『神器使い』だ。そして英雄と言われた男だ。

その英雄の証であるオレの神器は——召喚されなかった。

(なんでだよ……！ 召喚術が使えないって……まさか)

『なんじゃい。今さら気づいたのか？ そうじゃよ。貴様の力は全て封印したのじゃよ』

ホントムカつくジジイだ。オレの専売特許を封印し、あまつさえ最低な呪いをかけるとはどこまで腐ったジジイだ。ギロリと睨み付けると面白くなさそうな声が響いた。

『ふんっ、生意気じゃ！ とつと転生しろ！』

「がっ……！」

腹部に痛烈な痛みを感じ、そしてオレはものすごい勢いで落下して意識が次第に遠くなっていた……。

(?? side)

銀髪となった青年が転生した後、彼を転生させた神は高笑いしていた。

「ククク……せいぜい楽しませてくれ。わしのおもちやよ」

頭がハゲており、なおかつ枝のようなシワクチャで醜い存在。

人間とは思えないくらい下卑な笑みを浮かべて、他人の不幸を楽しむ最低な存在。

それこそこの下級神である。もつとも下級神と言っても、神と言っても彼らを『管理者』と呼ぶ者もいる。

彼ら彼女達の目的は世界のバランスなのだが、この老人はさっそく崩してしまった。

「しかしなぜじゃ？ 銀髪オツドアイにしたつもりじゃが、なぜ髪が銀髪しかできず、瞳は青いままじやろうか……。おまけにヤツの力を取り除くこともできなかったしのう……」

まあよい、と切り替え。下級神は水晶玉を浮かべた。銀髪となった青年——転生した少年が家の中で目覚めた映像が水晶玉に映し出された。

「ふむ、周りを不幸にする呪いをかけてやるのも悪くないのう。ククク、そうと決まれば」

下級神が水晶玉に手に触れたとき、水晶玉が光の矢によって粉々にされた。その矢はピンクに輝く変わった魔力矢で、下級神は水晶玉を破壊した少女を睨む。

その少女は背中に天使のような光る翼を広げ、服は長いワンピースのような衣装。そして容姿は背丈よりも長いライトピーチの髪の色と金色に輝く瞳を持つ少女だった。

「貴様、何者じゃ！ ここは『管理者』のみ許された場所じゃぞ。いつたい誰の許しを得てここにおる!？」

「アタシや」

少女の後ろから現れたのはギリシャ神話に出そうな服装をしたそれは美しい女性だった。長い紅い髪でプロポーションは抜群。誰から見ても美しい女性がいた。

「貴様……ユグドラシルか！」

「神木、ユグドラシルちゃんと呼びなさい」

「女神さんの名前ってそうだったの？」

「うん。ほけ^作なすの野郎がやつとつけてくれたのさ」
「メタいね」

「なんの用でこの小娘をここに連れてきた!」

ギヤーギヤーと喚く下級神——もとい老人にユグドラシルは「はあ……」と嘆息を吐いた。呆れた眼差しを彼に向けていた。

「アタシのお気に入りに手を出しといて何様よアンタ。てか、何勝手なことしてんのよ。転生者を好き勝手に異世界に放り込むじゃないわよ」

「わしの勝手じゃわい。貴様なんか指図される必要はないわい!」

「……一応、これ警告だけど。今すぐ彼の呪いを解きなさい。出ないとヤバいわよ?」

「はん、貴様の脅しなんか怖くないわい!」

「いやアタシの脅しじゃないっての」

ユグドラシルはその続きを言おうとしたとき、老人の肩に誰かが掴んできた。気安く触れたその者に老人は裁きを下そうと杖を出し、向けようとした——が、できなかつた。

なぜなら彼を掴んでいたのは人間でも神様でも少女のような形ある概念ではない。

『ナニカ』だった。

『ルール違反』

『かの者は管轄外の契約した存在を貶めた』

『余分な力を一人の転生者に与え、その他を貶めた』

『呪いを私的に使用。それゆえ罪を重ね重ね』

『よって処分が妥当』

『『処分処分』』

『『処分せよ、処分せよ』』

女のような男のような。

子どものような老人のような。

少年のような少女のような。

そんな混ざった声が『ナニカ』の出した言葉だ。人型にとどめた影を老人は杖で押し飛ばした。

ピンクの少女の答えを現すかのように、魔方陣から二人の少女が現れた。一人は黒い髪のロングの少女で、もう一人は白髪の密編み少女だ。

「にゅふふふ……遂に、遂にシヨタ彼をあんなことやこんなことができるとだね！」

「そうね。ああ、早く彼に会ってほしいわ……束縛を」

「もう……そんなことしたら彼が泣くよ？ ……そんな彼を見たいけど、ティヒヒヒ♪」

なんとというか実は欲望に忠実な三人の少女だった。それを見た女神ことユグドラシルさんは思う。

(……………最初に転生送り出すさせる人選ミスった?)

こうして彼——『無血の死神』の憂鬱な日々が約束された……。

第一話 絶望からの覚醒

僕の名前は神威ソラ。どうも転生者らしい。

神様に転生させられ、普通に生きてきたのだが周りには嫌われ、僕を産んでくれた両親も僕に暴力を振るう毎日だ。

身体はアザだらけで至るところに父親から受けた煙草の火傷があつた。誰も僕を助けてくれようとは思わなかつた。むしろクラスからにも虐められていた。

極めつけにこの前、公園で泣いていた子を慰めようと思つたら、その子に泣かれ、知らない黒髪の少年に誤解され、ボコボコにされた。世界はいつだって残酷で最低だ。こんなことじゃなかつたばかりなことだらけだ。

僕はこの世界が嫌いだ。生きていたいとは思わない。

だけどそんな絶望の中でも希望は確かにあつた。

生田ミカ。僕の幼馴染みだ。僕がいじめられ、虐待され、苦しみの中で僕に手をさし伸ばしてくれた少女だ。

彼女がいたからがんばれた。

彼女がいたから生きようと思つた。

彼女がいたからまだ絶望しなかつた。

だから僕はいつか彼女を守るヒーローに、テレビで見る心優しい救いのヒーローになりたかつた。

だけどね……僕は知らなかつた。今の僕は『紛い物』で、本当の僕はそんなものになりたくないひねくれものであることを、ね……。

☆☆☆

春。海鳴市にある聖伴小学校の始業式が終わり、小学生になってからの僕はいじめられる毎日だ。周りから避けられて、殴られる無邪気な悪意がいつも僕に襲いかかる。

今日も机に花瓶が置かれ、死んだことにされているいじめを受けていたがもう慣れた。

二年生になっても憂鬱な毎日が変わらないが、このクラスになってから僕には希望がある。そう、ミカちゃんもこのクラスなのだ。

一年生のときは彼女とは別クラスだったのだが、なんの運命か彼女と同じクラスだ。

僕はそれにはとてもうれしく、顔をニヤける——が、なぜか違和感を感じた。

なんとというか、「ありえない」とか「目を覚ませ」とかそういう違和感が。

(僕はどうしてしまったのだろうか……。ミカちゃんと同じクラスなのに)

まあ気にすることじゃないだろうと思い、僕はミカちゃんに話しかける。

しかし彼女は僕の声を見捨ててさっさと行ってしまった。

次の日も声をかけたが無視された。

その次の日も、その次の日も……。

声をかける度にいじめはエスカレートしていった。靴を釘だらけにされたたり、教科書をびしょ濡れされたり、極めつけにガラスを割った罪を擦り付けられたりされた。

どうしてミカちゃんは僕を助けないし、声も聞いてくれないだろうか。

僕は悲しくなり、涙を流す夜を過ごしていたある日、下駄箱にミカちゃんらしき手紙が書いてあった。放課後に屋上に来てほしいという誘いだ。

「行くな」「罨だ」と頭の中で嫌な考えが浮かぶ。だけど僕は真相が知りたくて、放課後。屋上に来てしまった。

そこで待っていたのはミカちゃんと、僕を特にいじめるクラスメイ

トがいた。そのリーダーである工藤マサキは僕を殴る蹴ることを重点にするヤツだ。

心の中でトラウマが植え付けられた人物がニヤけていた。

「ど、どういふことなのミカちゃん……？」

「気安く私の名前を呼ばないで」

彼女らしくない冷たい態度だった。いつも気にかけてくれる優しい顔はそこにはなく侮蔑と軽蔑した目を向けた彼女がいた。

「知りたい？ 知りたいかあ？」

「こいつほんつつと馬鹿だよな！ 今まで生田が気にかけてる素振りを見せたのはこのためなのにな！」

どういふこと？ どうしてなの？

「お前は騙されてたんだよこの俺様の幼馴染みに」

そんな……嘘だ。信じたくないよ……。

「そうそう！ その顔が見たかったんだよ！ その絶望した顔が。弱いヤツが自失顔が見たかっただよな！」

「ぎゃはははははは！」

信じたくもなかった。嘘だと言ってほしかった。

だって、だって、僕は――

――悲しくなかったのだ

絶望した。でもなぜか「ああ……やっぱりか」と納得した自分がいた。

人間なんてこういうものだど納得した自分がいたのだ。

工藤は僕が絶望したと思いつみ、子分の二人に指示を出して僕を屋上フェンスに突きだした。

「もう苦しいのは嫌だろ？ なら楽になれよ。そこから飛び降りて

な」

ピシリとフエンスが腐っていたのかガシャアンと音を立て、僕の身体は押された勢いで後ろから倒れていった。それにはミカちゃんや子分もヤバいと思ったのか、反射的に手を伸ばそうとしていた。

でもそれは虚空を掴み、僕はそのまま落下していった。最後まで工藤は笑っていた。最低最悪な笑みを浮かべて。

身体が落ちていく。この感覚はもう二度目だ。

二度目？ あれ、僕はまた体験したのか？

そもそも僕は誰だったのだろうか？ 僕はなんだったのだろうか？

わからない。もうわかりたくもない。

世界に絶望し、僕は『魔女』になるのだろうか？ いやそもそも『魔法少女』でもないから無理か。

いや、そもそもどうして『魔女』や『魔法少女』などの単語を浮かべた。どうして僕は『魔女』という絶望した『魔法少女』のことを知っていた？

ピシリと僕の中にナニカが亀裂がはしる。その亀裂が徐々に大きくなり、そして遂には砕けた。

そのとき『僕』は思いだし、『オレ』となった。

思いだしたくなかった。こんな一人ぼっちな世界で思いだしたくなかったよ、前世を。

落ちていく身体は遂に地面に激突した。ベチャリと潰れたカエルのように、ザクロのようになるはずだったのだが、なんの拍子かオレの身体の呪いは解除され、前世と同じ体質になっていた。

つまりあれだ。ダンプカーに跳ねられても無傷な身体だ。衝撃を受けて「ぐえっ」と声に出したが、まあでも無傷だ。

「……思い出すべきじゃなかったのになあ。『神威』くんや」

『神威ソラ』という来世の自分は今ここで死んだ。ここにいるのは前世で敵を皆殺しにした英雄、『無血の死神』が生まれ変わったのだ。

屋上から落下したオレは何事もなかったかのように家に帰った。まあ家には穀潰しの父親とパートをしてる母しかいない。

やるなら今だと思いい、魔法で変声した声で児童相談所に助けを求めた。結果は言うまでもない。親権を失い、挙げ句の果てには刑務所に入れられた神威夫婦は最後までオレのことを忌々しそうな目で見ていた。

なお、オレは親権を魔法で作り出した幻影の自分（青年ver）にさせ、誰もいない家を手に入れることができた。

（呪いは身体能力のみ解除できた……か。【神器】も出せるようになったし）

おそらく【神器】が助けてくれたのかもしれない。オレはこれまでの戦いの日々を過ごしてきた相棒をこの手に召喚した。

その剣は黒く輝くカギのような剣。『開ける』と『閉める』という概念を与えることに特化した最高の武器——『全てを開く者』。

こいつのおかげかもしれないな。
「ありがとな……」

転生した今でもこいつはオレのもう一人の相棒であることには代わりがなかった。

『にゅふふふ……シヨタモードのソラ、ハアハア！』

『いじめたいいじめたいいじめたいいじめたいいじめたいいじめたいいじめたい』

『ティヒヒヒ、さあ。ソラくん、一緒に寝ようよ！　もちろん生まれたままの姿で！』

『お姉ちゃんと一緒にお風呂に入りましょう♪』

『ゲームしようよソラあく。え、お菓子？　ソラのはさつきあたしが食べた』

『まあ、そのなんだ……元気出せよ』

……その夜。オレは会いたかった少女達の夢を見た。

もちろん、悪夢で。なんだよこれ……。何があってこうなるんだよ……。

第二話 変わらぬ日常。再会したのは変わったあの子達

あれから一年。春。今日も、オレはいつものようにぼんやり屋上にいた。

いじめはあれからどうなったかって？

んなもん、社会的に徹底的に殺った。工藤の親父には身に覚えのない情報を広め、あとなんやかんやで社会的に抹殺した。

え、ひどい？ オレの師匠は経済的にもぶっ殺してるんだけど。

おかげで工藤家はどこかへ引っ越し、マサキは最後にオレに襲いかかってきたがトラウマが残るくらい痛め付けた。

痛みで泣こうが、泣いて許しを請おうがお構いなしにやつちやっただ、テヘ♪

……………自分でやっていてキモいなこれ。もうやらないけど。

こうして工藤家を社会的に抹殺してからいじめはなくなつたが周りからスルーされる毎日へとシフトした。花瓶は相変わらずだが、まあオレは気にせず授業を受けていた。

生田ミカはあの日以来、近づいて来なくて清々した。なんせ、前世のときと同じようなヤツに出会って最悪な形でお別れしたしな。

……………てか、あの頃のオレも友人の首チョンパはさすがによく耐えたと思う。

それはさておき、みなさんは原作ヒロインを覚えているだろうか？

そう『リリカルなんちゃら』という世界に転生させられたオレですが、実はそいつらには会っていた。

え、もちろん嫌われてますが？

なんか生理的に無理っぽいとか言っていたみたいだし、ぶつちやけ『全てを開く者』で呪いを全て解除した後も変わらずだ。

特にバーニング（※アリス・バニングス）とつけ麺（※月村すすか）との出会いは最悪だ。喧嘩の仲裁しようとしたら、八つ当たり殴ら

れ、蹴られた。しかも後から来たオリ主っぽいヤツに誤解されてまた殴られた。

痛くないけど心が痛いや。まあでも気にせず、今日も生きているわけだ。

ちなみに友人はいる。最近、踏み台転生者だった少年が改心したのだ。

名前は天道衛。金髪で赤目だ。初対面はいきなり勝負をふっかけられたが、肉体言語で黙らせ、彼の身体にも呪いらしき者があつたため、とりあえず解除したら謝られた。土下座で。

どうやら元来から臆病で誰よりも責任感のある少年だった。

まあでも改心したから別にいいが、しかし彼も不運だ。

これまでの行いによってオレと同じく原作ヒロインに嫌われたままなのだ。

「まあ気にするな。高町名古屋やアリア・バーニングやつけ麺タケルに嫌われたくらいで落ち込むな」

「いや我は気にしてないが、というか名前が全然違うからな? 『高町なのは』と『アリサ・バニングス』と『月村すずか』だからな?」

おっと。どうやらいつものくせで間違えてしまった。でもどうでもいいから気にしてないんだよね。

「というかね。もう最近、悪夢ばかりで疲れてるのよさ……」

「悪夢? それはどういう内容だ。我が友よ」

「鹿目まどかが淫乱で腹黒。暁美ほむらがDSでどこかのガハラさん。巴マミがお姉ちゃん化して暴走。美樹さやかがアホの子になつて振り回してくるし、唯一の良心の佐倉杏子が我関せずで助けてくれないという悪夢」

「……それ最早予知夢ではないのか? というかそやつらどこかで聞いたような……」

「にしてもここホントにアニメの中の世界? 信じられないんだけど」

「我が友が話しているおとぎの話は本当に異世界にあるという話は信じられないのだが……」

「信じられないだろ？ 白雪姫がシャインニングウィザードを継母にしたんだぜ」

「どこの世界にお姫様がシャインニングウィザードを決める世界があるのだ……」

異世界の常識さ。まあ何はともあれ、オレの日常は相変わらずであることには変わりない。

衛と遊んで、共に鍛練紛いをして過ごす毎日が悪くないと思った。

放課後。桜並木の道を通り、それから河川敷にやってきたオレは水切りをして遊んでいた。なお、ただの水切りではあらず。ターンして自身に返ってくる超絶水切りである。

「ぬ！ 出た。十回！」

「やられた。七回か……くそ」

「フハハハハ！ 我も上達したというわけだ！」

「なるお……。なら今度はこの石で……！」

オレが手にとったのはひし形の青い石である。それを見た衛はストップをかけたがもう既に遅い。

オレはサイドスローを決め投げきった！

「ぬおオオオオオ！ ジュエルシードを投げてしまうとはあツ！」

「ジェルミート？ トリコの食材なのか、あれ」

「違う！ あれは原作ヒロイン達に関わる事件の代物だ！ 何かを願えば歪んだ形で叶うロストロギアだ！」

「え、マジで？ ヤバ……」

ロストロギアって確かどつかの世界の進歩の結晶だっけ？ それをぶん投げたし、しかもタイミングが悪いことにある少女の魔女化を思い出してしまった。

すると河からバシャーと水面から化け物が出てきた。黒い帽子で

ムンクのような顔面。極めつけに魔女のような格好をした全長十メートルの怪物——『ホムリリイ』がいた。

「我が友よ……何を願った？」

「いでよ、魔女よ」

「何やってるの!?!」

オレと衛が回れ右して逃げたとき、『ホムリリイ』はムワーと宙に浮いて亡霊のように追いかけてきた。

「ぎゃあアアアアア！ 追いかけてきたアアアアア!?!」

「ヤベー。なんか知らないうちに人がいねえし、魔女結界ができてる。ジュエルミートめ、仕事したな」

「ジュエルシードな！」

どうでもいいだろ、んなこと。それはさておき、あの魔女をどう倒そうか考えていたらなんと車椅子に乗って「へっ？」とした表情の茶髪の少女が立ち往生していた。

衛は彼女の襟首を掴み、おんぶする形で逃走始めた。

「え、なんなんここ!?! 私いつの間ここにるん!?! てか、あの化け物なんなん!?!」

「オイ、衛。ちようどいい。オペレーションSだ。そいつ犠牲にして逃げるぞ」

「ちよい待てや！ 助けられたのに生け贄するなんて何考えとるねん銀髪！」

「そうだぞ我が友よ！ 犠牲にするのではなく囮にして戦うこそだろ！」

「アンタもおんなじかいッ！」

ギューツと離すまいと衛にしがみつく少女。衛はあたふたしてるのは女の子に免疫がないからだだったりする。

「ぬ、ぬオオオオオ！ 柔らかい感触が全身にイイイイイ！ 我がよ。どうすればよい！」

「背負い投げ」

「美少女投げるんかい！」

「自分で美少女って……。うわあー」

「なんでやねん!? 私美少女やろ? え、美少女ちゃうん!」

「少なくとも十人のうち六人が美少女って言うだろな」

「平均よりやや上ってこと!? えらいシビアやねキミ!」

「端的に言えば普通に美少女だな。というわけで普通、行き止まりだけはどうする?」

「その普通やめんかいッ。さりげなく傷つくんやでそれ! てか、ホンマに行き止まりや!」

逃げてきたオレ達だったが、遂には行き止まりまで差し掛かってしまった。これでは逃げられない。

「くっ……戦うしかないのか!」

「てか、お前。おんぶしたままじゃん。そいつ脚が使えないから座ったままで危険じゃん」

「ぬう……得意の格闘が足しか使えぬとは不覚。車椅子は先程置いてきてしまったし、どうしようもないな」

「そうやね。私のセバスチャンは犠牲になったんやね……」

車椅子の名前がセバスチャンとはこれ如何に。まあそれはさておき、魔女だ。久しぶりに戦う魔女だが、『ホムリリイ』ってどうやって戦うんだろ。

オレが死ぬ前に見た最後の魔女はクルミ割りの魔女だし。

そんなとき『ホムリリイ』の身体が背筋を曲げた状態になった。攻撃か?と思われたがどうやら違うようだ。

誰かが背中に衝撃を与えたらしい。

『ホムリリイ』は背中を攻撃した者と相対したが次の瞬間あと、『ホムリリイ』は第二波で倒れた。

魔女を倒したのは黒いローブで隠した謎の人だ。体格からして、オレと変わらぬ背丈だ。

その者がローブをとり、正体を現したときオレは驚愕の目をした。

ツインテールで魔法少女服。魔法少女服とはフリフリで可愛らしい衣装だ。そんな衣装を着込み、かわいらしいステッキを持った――

——
漢女おとめ

顔は世紀末英雄伝説に出てくるような霸王の顔をした漢女だった。

「「って誰だよ!!」」

「ミルたんだよ!」

「「いや知らねーよ!!」」

小柄だったのに、脱いだらスゴい人に助けられた。世界はいつだってこんなことばかりではなかったはずだ……。

謎の魔法漢女。ミルたんという漢に助けられたオレ達はお礼を言った後、衛は茶髪の少女を送って帰った。

オレも自宅に帰っていくとそこに待っていたのは自分の家ではなく誰かの家になっていた。

確か古い昭和に建てられてそうなオレの自宅だったのに今はなぜかヨーロッパのような西洋性ある建築物になっていた。

(間違えたのか?)

表札を見れば『神威』と書かれていた。ここで間違いないようなのだが。

オレは扉を開けた。そこで待っていたのは、白髪の少女の突貫だった。

「隙有りイイイイ! 今こそ君をいただきます!」

ルパンダイブしてきたその変態の動きに対応し、その無防備となった背中に踵落としを決めた!

「あうん！」

「なんで艶やかななんだよ」

「もつとカモン！ 痛みを、お仕置きを惨めで卑しいこのボクにお願いー！」

「……お前さあ」

頭を抱えたくなる。なんせ、相手は前世で言えば戦友。またはオレの苦勞の元凶がいた。

「なんで千香がここに……。てか、歳もおんなじだしどういうことだ？」

「それは私の口から説明するわ」

凜とした少女の声が、耳に届いた。黒い長い髪にアメジストの瞳。悪魔化した名残なのか、どこか妖艶さが残るオレと同年代の少女。

そしてその隣にはピンクの髪で赤い瞳の少女。幼い頃に救えなかった少女がそこにいた。

「……お前らは」

口がにやける。ああ、無理もない。なんせ、もう会えない巡り会わないと思っていた彼女達が目の前にいるのだ。

それがうれしくないと言うのは嘘だ。

「久しぶりね、ソラ」

「久しぶりだな、ほむら」

かつてオレを殺した少女と再会を果たしたのだ。

第三話 転校生が自分達と何か違うのは世の常

久しぶりの戦友達の再会。オレの寂しい孤独が今日をもつてさよならした。

オレの戦友である三人の少女達が転生してきたのはオレに会うためであるらしい。女神の計らいでオレが孤独のあまり死んでしまわないようにという考えらしいが、余計なお世話だ。

「ソラくんの様子を二十二時間体制で見っていたよ。寂しそうにしてたよね」

「マジでか。……ちよつと待て。オレのことを二十二時間監視していたのか？」

「ソラくんはまず腕から洗うんだね♪」

「人のプライベートを除いてるんじゃねえよ！」

「ちなみに残り二時間はベッドで『お祈り』していました！」

「カミングアウトするなよ！」

再会したまどかは頭もピンクになっていた。どうも『円環の理』の中に余分なまどか——『変態化』と『腹黒い』まどかも混ざっていたのだ。死後、彼女達は統合したことにより、誕生したのが淫乱腹黒まどかちゃんである。

神様、てめえどんだけオレが嫌いだよ……。

「その下級神なら『抑止の存在』に消されたわよ」

「マジでか。神は死んだのか」

「本来ならあなたは天命で死を迎え、魂を浄化してから生まれ変わる段階まで事を運んでいたらしいわ。だけど、それをあの老害が勝手に転生させて………やっぱ脳髄だけ残してホルマリン漬けにするべきよ」

「やめて。それはいろんな意味でトラウマを起こす光景だから」

思い出すのは破天荒なストーリー展開する野球ゲームとタケルちゃんがループする物語である。衛にやらされたが、あれはトラウマゲームだと思っわ。

つーか、脳髓エンドはえげつなき過ぎる……！

「ちなみに私達はもう魔法少女じゃないわ。代わりに得たのが神器よ」

「いや大丈夫かよ。お前容姿が小学三年生じゃん。重火器を撃つどころか持てるのかよ」

「魔法少女だったときのスペックしてもらったから持つことや発砲に起きる反動も耐えられるわよ。それにあなたと同じように神器を特典してもらったわ」

ふふんと胸を張るまどか。いや普通ほむらじゃね？

別に気にしないけどさ。

「この世界がどういうところなのかわかるか？」

「ええ。このリリカルなのはの世界は次元世界というふうに多次元の世界が分かれているのよ。私達がいるここは管理局という傍若無人な組織に目をつけられていない管理外世界。逆に目をつけられている世界は管理世界ね。そして、発展した技術によって滅んだか、はたまた他の理由で滅んだ無人世界。要する世界が星のように分かれていると考えればいいわ」

なるほど。宇宙世紀みたいだな。そのうちモバイルスーツで戦いそうなのりだな。

でも異世界があるのか気になった。オレがかつて数々の世界を渡ってきたのはほとんどが異世界で、残りは平行世界だ。

オレがほむらに聞くと、彼女は答えた。

「あなたが異世界と呼んでいる並行世界や幻獣界はもしかするとあるかもしれないわ。詳しく知りたいなら実験すればいいわ。失敗したら女神に連絡して聞けばいいし」

「連絡できるの？」

「187と電話番号を押せば出てくるわ」

「なんかヤな電話番号だな」

でもまあこれで異世界があるとわかった。また冒険しようと思えばできると思うとワクワクするのはオレが数々の世界を旅してきた楽しみが身体に染みているからだ。

「でもこれで冒険ができるんだな。やったね、また冒険できるよ！」
「……………異世界に行くことは管理局の技術じゃ到底無理なことだから、あなたはきつと目をつけられるわね」

「ゲツ、お前からあの傍若無人とか言われてたその組織に？」

「馬車馬のように働かせるに違いはないわね。もしくは侵略という形で使われる道具とか」

「おいおい……………ぜってーヤだなあ」

「そうならないように私達がいるのよ」

そう言つて光と共にほむらの一枚のカードが左腕に現れ、服装も魔法少女の衣装に変わる。バックラーではなくなってるのは意外だった。

『時を駆けるカード』。時間操作を可能にする神器よ。まあ、時間遡行はできなくなつたけど」

肩をすくめながらほむらはそう告げた。要するに遡行以外の能力が継承されているようだ。

オレは首を傾げながら、次の疑問を口に出した。

「まどかはどんな神器なんだ？」

「そうね。『慈愛の弓兵』という神器を持つてるわ。別名デストロイアーチャー」

「ちよい待ち。なんで慈愛なのにデストロイという物騒な文字が出てくるんだよ」

「あなたも覚えてるでしょ？ 救済の魔女を倒したまどかの魔法。あれが神器となつたことを想像して」

「……………なるほど、確かにデストロイの次にオーバーキルが付きそうだしわ……………あれ」

少し背筋が凍った。あれで生きていたら最早怪物どころの問題じゃなかつたりする。

核兵器レベルの攻撃に耐えられる知的生物なんて見たことない。

「この調子だとママさん達も来るのかな」

「来るわよ。でもなかなか神器に慣れなくて試行錯誤してるわ」

「ま、なんにせよ。また会えるってことだろ。オレはうれしいな」

「……………ほむら」

ほむらはおもしろくなさそう表情になる。オレの手の甲をつねる。

「イテツ。な、なんだよ」

「別に、なんでもないわ」

「だからつねるなよ。痛いって」

「……………じゃあ、私の言うことを聞いてくれたらやめてあげるわ」

「はいはい。わかったわかった。んでお願いってなんだ？」

「…………ギユツと手を握りなさいよ」

嘆息を吐きながら甘えてくるほむらの言うこと聞いてあげた。表情も鉄仮面から少女らしい微笑に変わる。それをかわいいなと思った。

そんなときまどかがガーンとした表情で言った。

「ほむらちゃんにヒロインの座を奪われた！ どうしよ千香ちゃん！」

「そういうときはソラにラッキースケベを起こせばいいんだよ。……待てよ？ そんなことせずとも押し倒せばよくね？ まどかちゃん、今度一緒にソラを襲おうよ！」

「うん！」

「目の前で夜這い計画暴露すんな！」

元魔法少女の神様と『混沌を継ぐ者』はとんでもないこと考えてたよ！

その夜、オレはたくさんトラップを仕掛けて寝たのだが、朝目覚めると満身創痍でやり遂げた顔をした千香が隣にいた……。せめて一緒に寝ようと思ってベッド寝たのだろう。

貞操は無事だったと追記しておく。

翌日、学校に行くのと転校生の噂ばかりだった。

曰く、美少女らしい。

曰く、凛々しいらしい。

曰く、変態がいるらしい。

……明らかに最後のはおかしいが、まあなんにせよ転校生が来るのはわかった。オレにとってはどうでもいいけど。

担任の教師が黒板に転校生達の名前を書いていた。どうやら今日転校という形で学校に入る小学生はこのクラスに入るらしいが、オレは別にどうでもよかった。

昨日、再会した彼女達はオレの居候することになっていた。戸籍とお金があるが、寝床はないらしいから仕方なくだ。

仕方なくだぞ？　ここ重要。

まあ、なんにせよ。

彼女達もまた学校に転校という形で行くことになっている。どこか知らないが、元気でスクールライフをしているだろう。

「はい、今日は転校生が三人います」

「先生ー、女の子ですか？」

「はい。とびつきり綺麗な女の子ととびつきりかわいい女の子が来ます。……………最後の一人は美少女だけどとびつきり変ですが」

オイ聞き捨てならないこと言ったぞ今。まあ、美少女に反応する男子達を尻目にオレは寝たふりをする。

「では転校生のほむらちゃん、まどかちゃん、千香ちゃんです」

「朱美ほむらです」

「朱美まどかです」

「天ヶ瀬千香だよん」

……………マジで？

つーか、学校ってここかよ。

「まずこの私、朱美ほむらから自己紹介をするわ」

そう言いながらほむらは壇上に立つ。堂々とし、髪を手でかき上げるのはいつもの癖だ。

おお、なんかすごい自信。しっかりしてるなあ。

「諸君、あなた達は妹をどう思う？」

訂正。しっかりしてない！

暴走してた。キリツとした顔で彼女は続ける。

「かわいい美人清楚という様々な容姿がありツンデレ、クーデレ、アマデレというスタンスを持ち、なおかつ年下または同い年というところがすばらしい。私の妹はかわいい。愛らしい。すばらしい。手を出すものに地獄をみせたい。そう、妹とは萌えの至高の地位!! だから宣言しよう。妹とは女神に等しい存在であるとツ！」

「いい加減にしろお前! 転校初日になに言ってるの!？」

さすがにツッコむわ! 誰か止めろよこの演説!

するとほむらは髪を流しながら、オレに向けて言葉を出す。

「あら、あなたはうちのペットのソラじゃない。こんなどこにいたのね。女王である私のお仕置が必要ね」

「いつからお前のペットになった!? つーか何様だお前!」

「そう私の名前は朱美ほむら」

「なんか始まった……!」

「団体戦のテレビゲームはいつも一人だった美少女よ……」

「まさかのボツチだった宣言!？」

予想外デス。いろんな意味で。というか病院時代の話じゃねえだろうな？

それが本当だったらメガネほむらことメガほむが哀れに思えてきた。

「次は私の至高の妹、朱美まどかの紹介よ」

「朱美まどかです。ほむらちゃんはずいぶん普通なおかしい人ですが、根は優しい双子の姉なので、妹共々よろしくお願いします」

さりげなく罵倒したよなこいつ。オイほむら。なに悶えてるんだよお前。「かわいいよ、かわいいわまどか………ハアハア」って。

ヤベえ、そろそろこいつ危ないな。主にまどか………いや、むしろバツチこいつか言いそうだわ。

再会して淫乱腹黒になってたんだわ。

「趣味はイスを集めることです」

前世からそうらしいが、どんな趣味だよ。集めるとなんか出るのかよ。

「それとここにいる銀髪青目なソラくんに言いたいことがあります」
はい、指名されました。てか、特徴的確に言われる指名なんて初体験だよ。

なんだよ、と聞くとまどかは妖艶な微笑みを浮かべ、

「私のイスになってください！」

「なに自信満々に言ってるんだお前！　なんでお前のイスにならなきゃならん。そんなもん他にやらせとけ！」

「えー？　せつかく渾身の求婚だったのに……」

「どんなプロポーズ!？」

「まどかは渡さないわ。欲しければ、この私を倒しなさい！　そして奴隷になりなさい、歓迎するわ！」

「オイイイイ!?　なんでお前が出てくんだよ！　つーかお前もかい!!」

奴隷とかイスとかになれて最早こいつらドS姉妹だよ。しかも百合百合な。

ほら見ろよ、今でもなんか二人だけの世界に入ってる。

「うれしいなほむらちゃん……。そんなに私のこと想ってるなんて」

「ま、まどか。駄目よ。みんなの前で……そんな」

「ティヒヒヒ、見せつけちゃおうよみんなに。私達姉妹の愛を」

「まどか……」

「ほむらちゃん……」

そうして二人の唇が重なるうと、つて！

「余所でやれええええええ！」

「ええー……」

「ソラ、今こそなのよ？　今だからこそ私達の愛が証明されるのよ？」

「いや証明しなくていいから！　てか、こいつらまだ小三だし、ガールズラブはまだ早い世界だからね!？」

「チツ」

「舌打ちするな！　オレが言ってるのは常識だから！」

そのとき脳内で「お前が言うな非常識代表」と聞こえたが気にしない。目の前で女の子同士のディープキスとかさされて、他が真似したら

どうするつもりですか！

いけませんよオレの目の黒いうちは！ 青いけど。

「最後はボクだね！」

「しまった。こいつがいた……！」

そうこいつがまだ残っていた。まどかとほむらだけでこんなにツッコんでるのに……。

「オレは思わず手を覆う。」

先程の百合姉妹のボケの応酬ばかりだったが、こいつは違う。

こいつは一言で表すと変態だ。

いや、ただの変態ではない。とびっきりのだ。

口に出すものは小学生にはoutなものばかりだ。

「天ヶ瀬千香です。趣味は盗撮、ストーカー、下着ドロなどを実行する人の下着を警察官に渡すことです」

（（どんな趣味!?!））

なんかクラスの心が一つになった気がした。ちなみに今は千香のボケだから。

「それとボクもソラくんに言いたいことがあります」

こいつもプロポーズか？ なんでオレはこんなおかしなヤツらに好かれるんだ？

「元々はまともなかわいい女の子だったのに……。」

「まともなこと言えよ？」

「大丈夫大丈夫。二人と違って普通だから」

深呼吸してヤツは言った。

「ソラ………ボクのダツチわい——げぶっ」

「言わせねえよ！」

オレは変態に腹部にドロップキックを決めた。

暴力？ ツッコミは暴力ではない。

「ふう、これで美少女三人はクラスに溶け込めそうね」

「いや溶け込めねえだろこれ！ 姉妹は未だに抱き合って百合空間だし、そこに倒れてる変態は息を荒くして興奮仕出してるし、というかこれぜってえ馴染めないだろ！」

「大丈夫。全て神威くんに押し付けるから」

「お前ホントここの教師!？」

生徒に全て押し付けるなよ!

「あ、ぶっちゃけ私、今日で寿退社します。妊娠三ヶ月のデキ婚で。彼氏を襲ったらできちゃった☆」

「なにすんごいことカミングアウトしてんのあんた!？」

教頭のヅラをあまおんで売ったという、伝説を残したアグレシッブな教師かと思えば、ここまでとは!

ていうか、ここで言うことかそれ!？」

「変わりの先生が今日来ているのでその人と仲良くしてねー!

……………そのうち生徒に手を出しそうだけど」ボソツ

「ちよつと待てエエエエエ! なんかマズイこと言ったよな今!? 生徒に手を出すロリコンを担任にしたのかこの学校は!？」

「んじゃ、シーユー!! じゃあな、また会おうぜ……………みんな!!」

「オイイイイイ、なに爽やか系主人公っぽいこと言ってるんだお前!! 逃げるなゴルアアアアア!」

あんのバカ教師走り去りやがった!

カオスな現場をそのままにして!

廊下に出たときもう遙か彼方!? どんだけ早いあの人!？」

オレは教室に戻り、今のクラスを見る。

百合空間でチュツチュツする朱美姉妹。

興奮しながら壇上に立ち、変態とは何かと演説する千香。

そしてそれをやめさせようと、バーニングとつきむーらとタカモチ

……………だっけ? 忘れた。

うん、カオスだ。混沌だ。お祭り騒ぎだ。オレは席に座り、腕を枕にしてうつ伏せに寝た。

ある意味悪夢なこれが覚めることを信じて……………。

「こんにちはは……………今日このクラスの担任になる早乙女和子です……………。ああ……………なんでフラれたの……………」

……………ほむらとまどかにとつて見覚えのある担任だったようだ。だつて百合空間にいたこいつらが目を丸くして彼女を見ているもん。ちなみに彼女がフラれた理由は目玉焼きの焼き具合の喧嘩である。うん……………妥協を覚えようよ。

第四話 唯一の常識人

転校生の自己紹介——もとい知り合いの羞恥を周りに見せる悪夢は終わり、昼休みとなった。

さすがにあの紹介の仕方ではドン引きである。しかもそのせいでさらに孤立化したかもしれない。

何せ、ドSで百合姉妹、ある意味究極体の知り合いである。関われば確実に染まるだろう。オレもそれはヤだけれどもう手遅れだろうなあ。

「ソラくんー、一緒にお弁当に食べようー!」

「こういうとき、まどかは女神見える。腹黒でなければ……。」

「つて、手作りか?」

「うん。さすがに居候だからこれくらいしないかね」

「将来、良い嫁さんになるよお前」

「なら……私を貰ってくれる?」

「断固拒否。恋する乙女の顔になっても媚びぬ摩かぬ」

「えー? なんで? こんなかわいいお嫁さん候補が目の前にいるのに?」

「今朝した自己紹介を思い出せ」

拙者はイスにはまだなりたくないでござる。軽口をいいながらオレ達が教室に出ようとすると、だ。

「ちよつと待ちなさい」

バーニングとつきむーら、高道に生田ミカが近づいてきた。生田だけオレに対して嫌な顔しているが。

「何かな」

「こんなヤツより私達と一緒に食べましょうよ」

わーお、直球ど真ん中。あとその三匹。うんうんと頷くな。なんかムカつく。

ま、事実オレはクラスから浮いてる方だ。あまり人と関わらないようにしてきたからな。

それに高道、つきむーら、バーニングの三人の美少女をしつこく口説いて嫌われているという噂が勝手に出回っている。

いや……口説いた覚えねえし、そもそもこいつら好きじゃないし。とかいっつに仲良くなったんだ生田とこの三人。

そんなことを考えているとまどかはニッコリ笑った。目が笑つてない怖い笑みだが。

「なんでそんなこと言うのかな？」

「そいつは女の子と出会う度に口説き回るサイテーな男よ。襲われるわよ？」

と生田に言われたが。オイ、いつの間になんな噂が出ているんだ？

口説いた覚えほんと覚えねえぞ。

そしてまどか。「ふーん」と言いながらダンダンと足を踏むな、痛い。ほんとにしてないから。

「で？」

「でって……」

「だからどうしたの？ 襲われたら、返り討ちにすればいいし、社会的に抹殺すればいい話だもん」

「さらに恐ろしいこと言うお前に戦慄を覚える」

「ソラくんならむしろバッチこい！ ベッドであなたを待ってる！」

「自重しろ！ いやホントマジで!!」

サムアップするこの淫乱ピンクに拳骨を落とした。上手く逃げたヤツのドヤ顔が少しイラツときた。

「で、でも……」

「でももなにもないよ高町さん。あなた達と違って、私はソラくんが大好きだから一緒にいたい。だから善意のつもりで言ったかもしれないけど、くだらない噂を信じるあなたのことを信用も信頼しない」「なんですって!?!」

「どうして怒るの？ ソラがそんなことするはずないって確信があるから言ったつもりだよ私。それにあなた達はソラを勝手に嫌悪しているのでしょ？ ならあなた達はもう関係ない。関わらないことをオススメするよ」

ヤベえ……………まどかキレてるよ。怒りで鬨気出しててるよ。

それほど嫌なんだなオレを馬鹿にされることが。

まどかはそう言っただけでオレの手を握り、四人を残してさっさと出ていった。

まあ、なんにせよ……………ほんのり温かいものが胸に広がった昼食だった。

そして、とある休日。良い天気なので散歩に出かけた。

その理由は家にリビングにエロ本が大量にあったからだ。

どうやら、千香の私物で入り切らなくなったものが溢れたらしい。それを片付けるためにまどかとほむらは千香を締め上げた後、オレを追い出した。

なんやかんやと言いながら二人は興味津々にまじまじ見ていたし、たぶん、そのうちどちらかが性的に暴走するだろうな。

百合展開は自宅でしないほしい。居づらいから。

さて気分転換のつもりに出た散歩だが、オレの目の前に赤い髪の少女が倒れていた。

身体的特徴から同い年だろう。

服装は薄緑のパーカーと短パンのようなジーンズ。髪にはポニーテールにまとめた黒いリボンが特徴的だ。

というか、どつかで見たことあるが知らん顔をする。しかし、少女の手がオレのズボンの裾を掴む。

「腹減った……………ソラ、なんか奢ってくれ……………」

「知らん。オレはお前を知らんぞ。佐倉なんとかさんというズボラな女を知らん」

「的確にダメ出ししてるよなそれ？」

「チツ」

「なぜ舌打ち!? ああ……………腹減ったあ……………」

ぐぎゆるるると腹の虫が彼女から聞こえた。

はあ……………なんでこいつもここに居るのか、近くのアミレスで聞くか。

というわけで今日の散歩はアミレスで奢ることで終了した。お金持ってきて大正解である。

杏子と再会してファミレスに入ってからいろいろ話を聞いた。杏子とマミさん、さやかも無事、ここに転生してきたそう。しかも設定では三人とも姉妹で、杏子とさやかは双子というオプション付き。無論、二人がどちらが姉かキヤッツファイトをし、決着はつかないままである。

ちなみに転生してきたのはほむら達と同じ理由である。

「もぐ……………んで、今女神に用意された寢床に向かったけど、はぐれて迷子になってんだよ……………もきゅもきゅ」

「しつかりしろよ。お前、成人した女性だろ。また少女に戻ったところでダラシなく——ってどんだけ食うの!?!」

「アタシが満足するまで!」

「そもそもお前の腹どうなっているんだよ!? よく肥らないなお前……………」

「適度に運動しときゃあ、問題ねーさ」

ニシシシと笑うこのブラックホール。さらりと全世界の女性を敵にしたぞ今。

「携帯で連絡とれないのか?」

「……………あ、あんなもなくなつて生きていけるだろ」

「壊したな……………」

「仕方ないだろ! 『すらいど』とか『ぼたん』ってなんだよ。黒電ありゃ充分だろ!!」

「逆ギレすんなよ！ あとお前のめちやくちや古い通話スタイルじゃん！」

そういえばこいつゲーム機以外の機械はオンチだったな。出来ても炊飯器や洗濯機を動かせるくらいだったしな。

「やれやれ。ママさんの電話番号わかるか？」

「えつと確か……」

スラスラと数字を答えた。つて………。

「その暗記力で公衆電話で連絡する手段思い付かなかったのか？」

「………あ」

「はあ……」

「な、なんだよその目は!？」

「いやお前つてさやかか双子として産まれたんだなあつて………」

「アホの子つて言いてえのか!?! あとさやかと血は繋がってねえよ!!」

「お前もそういうことさやかに対して思ってたんだな」

やれやれと嘆息を吐いてふとガラス越しの窓を見る。

そこにはジヨギングする大人。

買い物する親子。

小学生くらのカップルがジュエルシードで告白する幸せで平凡な——つてあれ。平凡か？ てか、ジュエルシード？

「つて、オィィィィィ！ なんだであるのあれが!？」

「うおつ、いきなり叫ぶなよ!？」

「ぼつ、そんなこと言ってる場合」

次の瞬間、木がこちらに迫ってくる光景が目に入り、気を失った。

☆☆☆

暴走したジュエルシードによって飛ばされたオレは目を開けた。

目に写ったのは木によってところどころ突き抜けたファミレスの姿だった。

ファミレスは幸い人は少なく怪我人はいなかった。

外に出れば、そこには赤い髪の少女が赤い衣装を纏い、右手で槍で迫りくる木を払い、空いた手で——注文した焼き鳥を食べていた。

帰る学生が食べ歩きしてるスタイルで。

「ってこんな状況でなに食ってんの!？」

「仕方ねえだろ。もつたいねーし」

「もつたいないどころじゃないから！ 普通に命が危ない状況だから！」

「テメー、食い物を粗末にするなって母ちゃんに言われなかったのか、ああん？」

「あ、スミマセン——じゃねエエエエ！ 食べるときと戦うときのメリハリつけろよ!!」

シリアスが台無しだよコノヤロー。

そうこうしているうちに杏子は焼き鳥を食い終わり、指をさす。あれって……。

「人？」

「ん。たぶん願いの核みたいなもんだろ。アンタならあれをどうにかできるだろう？」

ニシシと笑う杏子は「いけるだろ？」と言いたげだった。

なるほど……ならお望み通り。

「解放してやるその呪縛」

『全てを開く者』を召喚し、その剣先を核に向ける。

それを防ごうと木々が迫るが、杏子の数人分身を出し、それを払う。そのまま杏子は枝の対応に移り、槍でオレのサポートにまわった。

さて、どうやって核に行くつもりか、みなさんはどう考えているのだろうか。

オレは空にはあまり飛びません。では答えはなんでしょうか？

オレってジャングルファイト得意のよね。

スパイダーな男のように木々に飛び乗り、その間に神器から『解錠』を撃つ。『開ける』という概念——つまり解呪や解放を意味する。

よって核に当たると光が生まれ、そこにいたのは先ほどの小学生カップルとジュエルシードである。

ジュエルシードとカップルの繋がりが——もとい融合を解除したのだ。

「ふう、どうにかなった」

「相変わらずデタラメだなそれ」

「お前のもデタラメだろ。なんだよその神器」

杏子の胸にあるアクセサリーに指をさす。さつき見ていたけど、分身したり、槍を何もないところから出したりしていたぞ。

「これか？ こいつは『幻想は現実に』っていう神器さ。あることをないこと、ないことをあることにする——要するにあたしが創った幻想は現実にしたたり幻想のままにできるってことさ」

何その神器。どこぞのクフフフな人が使いそうなんだけど。

「とにかくここから離れるぞ。なんかめんどいヤツが来たし」

高町とオリ主に、生田ミカ……か？ なんかウザそうなヤツらが飛んでくるところを目にとらえた。さつさと行かないと余計なことになりそうだ。

「なあこれ貰っていい？ 綺麗だし」

「別にいいけど、後で何重も封印するから貸せよ？」

ということ言いながら疾風のごとくその場を去った。

(オリ主くんサイド)

僕の名前は天宮草太。転生者だ。

なのはとミカと一緒にジュエルシードの封印に向かっていたが、ジュエルシードの反応がなくなり、そのうえジュエルシードもなく

なっていた。原作にはなかった予想外なことに戸惑った。

しかし犯人はわかっていた。間違いなく神威とその協力者だ。神威と知らない少女の魔力を感じたからだ。

「にしてもこんな短時間で封印するとはね……」

「神威ってヤツも転生者も転生者だったってこと？ 落ちこぼれくせに」

「落ちこぼれは言い過ぎさ。でも勝てない相手じゃないよ」

「だね。草太なら勝てるよね！」

当然だ。僕は神様に認められた転生者だ。彼がもしこの世界をめちゃくちゃにするのなら、僕は絶対に阻止して見せる。

だって僕が主人公だから。

第五話 魔法少女集合！　そして崩壊し始める（一部の）キヤラ

逃げおおせたオレと杏子。家についたときそこに待っていたのは懐かしい顔の面々だった。

バمامィ——かつてオレがお姉ちゃんに慕っていた寂しがりな頼れる歳上の少女。世話焼きでよく甘やかされたのは懐かしい記憶だ。

美樹さやか——初恋が親友に寝取られて魔女化した自爆少女だが、それは誰よりも友達想いの真っ直ぐ少女だから。その真っ直ぐ心はまたの名をアホとほむらに言われている。否定はできないが。

とまあ、杏子達の居候場所は自宅でした。いやマジで。

嘘だドンドコーと言いたいくらい事実だった。

まさか帰ってきたらمامィさんとさやかが優雅に紅茶飲んでるとは誰も思わないわ。

「ソラは渡さないわ。ソラは私とまどかのおもちやよ、美樹さやか！」

「友江さやかかって言ってるでしょ!!　こっちこそソラはあだし達友江家のものよー！」

「よろしいならば戦争よ」

「上等。かかってこい」

青筋を浮かべて、第一次ほむさや大戦勃発。やる気全開バトルを開始始めた。

いや頼むから神器を出さないで。家がぶっ壊れるから。

「はい、ソラ君あーん」

「一人で食べれるから、مامィさん」

「もう、昔みたいにお姉ちゃんって呼んでいいわよ?」

「いえ、結構だから。というかまどか、膨れっ面でオレの首を締めないで。地味にキツイ……」

プクーツと膨らませたまどかさんがギユ〜とオレの首を締め付ける。死にはしないけど苦しいだよ。

というか杏子も見えてないで助けろよ。のんきにケーキ食ってるじゃねえ。

まあなんにせよ。

「カオスだなこりゃ」

杏子がツツコむか。

リビングにて彼女達三人のステータスを聞き出した。どうやら神器は魔法少女だった頃の魔法と似た力のようだ。

「マミさんは『結んで開くりボン』。さやかは『無限の音楽』か。『ピュエラ・マギ・なんちゃら』の頃の魔法少女が勢揃いだな」

『ピュエラ・マギ・ホーリー・クインテット』よ!!」

「マミさん通常運転だなオイ。なんかマミさん達も聖佯行くとか言つてたけどホント?」

「ええそうよ。私が一年上で、さやかさんと杏子さんが別のクラスだそうよ」

「マミさんが名前で呼ぶのってなんか新鮮」

「仕方ないさ。同じ友江だし。ぶっちゃけ女神がめんどいからひとくくりしたって言ってたし」

「なんとアバウトな……」

せめて考えてほしいな。まあ今となってはどうでもいいが。

「ちなみに名前で呼ぶのに何度も噛んでたぞ」

「きよ、杏子さん!」

「マミさんで萌えることになろうとは」

「わかるよほむらちゃん。これがギャップ萌えだね!」

「いろいろ台無しだよコノヤロー」

オレもまどかとはむらのギャップにドッキリしたわけだが。

そんな軽口をたたきながらオレ達の夜は過ぎる。なお、マミさんが

就寝のときに夜這いしてくるとは思わなかった。
いや寝惚けていたみたいだから違う……のかなあ？

☆☆☆

翌日、学校へみんなまで歩いて行った。杏子が若干寝坊しかけたがそれはまあ仕方ない。

なんせ、前世の彼女はだらしない生活をしていたわけだから。

「とうかオレって小学校すら行ったことないんだよな。年長の園児の歳で異世界に迷い混んだし」

「ということはソラはあたし以下の学力？ よっし、これなら勝てる！」

「あら？ さやかさん、前世のソラくんは小学校の歳でありながら英語をペラペラだったわよ？」

「絶望した。もう魔女になる……」

「いやあんたもう魔法少女じゃないし、魔女になつてるだろさやか」
笑い合える日々。そんな日がこれからもある。

プンスカ怒って追いかけるさやか。

「やーいやーい」と楽しそうに追いかける杏子。

そんなやり取りを見て微笑むママさん。

「……私達が求めたものがあるんだよね」

「うん……死んじゃってママやパパやたっくんには悪いけど、私たちが望んだありふれたものがここにあるんだよね」

「もう魔法少女という非日常は望まないって……ことかしら？ まどか」

「そうとは言わないけど、もうあの世界のような絶望は嫌だよ。誰も
が悲しみ、誰も救われない物語はあそこ^{前世}だけでいいよ」

「まどか……ええ、そうね」

しみりと今を確かめ合う親友同士。かつて求めた理想が今ここに
実現され、平穏で幸せな毎日がこの世界にある。

一人は自身の劣等感で無力と悔しさに嘆いた。

一人は大切な人を助けるために、何もかも犠牲にし、精神が摩耗していき、何度も嘆いた。

誰も助からない。目の前で友人が、大切なものが死ぬお話はもう彼女達の物語にはない。

そんな二人を見ているとオレは口に笑みが浮かぶ。千香は微笑を浮かべオレに聞いてきた。

「ソラ、今の君は幸せかい？」

当たり前前のことを聞いてきた。そして答えは決まっている。

「んなもん、幸せに決まってるだろ」

だってオレが、みんなが望んだ世界が目の前で実現されたのだから。

朝からなんかオリ主くんと呼ばれた。

スルー。めんどいから。

昼休み、オリ主くんと呼ばれる。

スルー。ウザいから。

放課後、ママさん出現。さあ一緒にお買い物しましょうと手をワキワキしていた。

逃げる。さやかが現れた。宿題手伝つてと、背後に『人魚の魔女』をちらつかせてきた。

怖い。なので窓から飛び降りる。杏子がロッキー食ってた。一本もらった。固い、でも旨い。

「無視するなっ！」

ポリポリとロッキー食ってたらオリ主くんが現れた。

あ、まだいたんだ。

「当たり前前だ！ お前に聞きたいことが——ぐふっ!？」

言い切る前に杏子が顔面へ右ストレート炸裂。オリ主くんがぶっ

飛んでバウンドしていった。なんでこんなことしたんだ？と聞くと杏子は、

「態度がえらそうだった。殴ったことに後悔してない」

「いや笑顔でサムアツプ。いやそんな笑顔で答えるもんじゃないだろ。第三者から見たら殴ったサイテーな人間じゃん。」

「大丈夫。痴漢されたって言えばアタシが正義になる！」

「黒ッ！ 黒いよお前！」

「ところで痴漢ってなんだ？ 電車でよくポスターで見るけど」

「違った。まさかの純粹無垢!!」

「よろしい。この変態の淑女たる千香ちゃんがご教授承ろう!!」

「一番教えてほしくないヤツが現れた!!」

なんてこった。純粹無垢な杏子さんに大人のエロスを教えさせてはならない。

というか、場がカオスになってきた。なぜなら殴られたオリ主くんがジャングルジム付近でヤムチャになっていた。それを見ていた早乙女先生がサスペンス劇場にありがちな悲鳴をあげた。

当然、オレは杏子と千香を連れて逃走した。だって明らかにオレが犯人になりそうだもん。

え、心配？ してませんよオリ主くんなんか。だってヤムチャなんて前世の戦争でよくあったもん。

逃走したオレと千香、杏子は公園に来ていた。海鳴の公園は普通に良い場所だ。

緑豊かなのどかで静かな空間に支配された場所なのだ。また遊具も豊富である。

ジャングルジム、ブランコ、シーソー。そして巨大な犬のオブジェ——あつれー？

「おかしいな……。なんかグルルって唸るオブジェってあったっけ？」

「リアリティーあるオブジェだねー。これ創った人は神だよ」

「マジでか。スゲーな最近の芸術」

「呑気なこと言ってる場合か！ ジュエルシードだよアレは！」

杏子のツツコミで正気に戻ったオレ達は神器を召喚した。犬と言ってもセントバーナードみたいな大型犬ではない。

しかし大型犬ではないものの、この黒のチャイコフスキー。全長が約十メートルくらいある。黒い毛並みをざわめかせ、オレ達を睨み付けていた。

そんなとき千香はふと呟いた。

「そういえば犬って食えたっけ？」

「食うつもり!？」

千香の爆弾発言にツツコむ。それは戦慄せずにはいられない。その瞬間のあと、いきなりが雄叫びを上げて突っ込んできた。

オレと二人は散開し、突っ込んだ犬はジャングルジムを破壊した。スゲー力だが、オレと杏子には見られている光景だ。

なんせ魔女という化け物もこれくらいの力で攻撃してくる。千香には初めて見る光景だが、戦いの日々には培われた順応性が生かされた。

毛針を飛ばしてきたが木や遊具を盾にしてそれから回避し、オレと杏子、千香は反撃に出ようとした。

そんなときだ。電撃が飛んできたのは。

黄色の雷が犬を貫く。犬は元のサイズに戻り、ジュエルシードを落とすとした。

誰だかわからないが封印してくれて助かる。

オレはジュエルシードを拾おうとしたとき————つて電撃がこちらにもきた!？」

「守護せよー」

バックラーの神器『守護神の壁』が発動し、半透明半円がオレが包み込む。バリバリと閃光が光るが、オレは無傷のまま半透明のシールドが解除された。

千香の神器が雷から守ってくれたのだ。

「ありがと千香。助かった」

「いえいえ。しっかし、いきなり攻撃するなんて物騒な女の子なこと」

千香が視線を向けたのは空中に浮かぶ少女だ。

黒のスクール水着のような衣装を纏い、金髪で同じ年の女の子。

うん、そんな女の子に一言言わせてもらおう。

スウーハアー深呼吸して、

「変態だアアアアア！ 痴女がいるウウウウウ!?」

「違います！ 初対面でひどいですよあなた!!」

オレの叫びに少女はガンとシヨツクを受けて否定してきた。しかしそれだけで終わらぬ。なぜならここにいる二人もまた少女に物申すからだ。

「ヤベー、あんな服装で見られたらアタシ間違ひなく引きこもるわー。あいつの変態力はパネエぞ」

「うんうん、同士がいて千香ちゃん感激！ しかも美少女！ ゲヘヘヘヘ………夢が広がるのお」

オレと杏子にドン引きされ、千香には視姦されてしまいついに痴女は「違うのに……」とウルウルと半泣きしてしまった。

ザマアと思ったオレは鬼畜だと思わない。いきなり攻撃したさつきのお返しだコノヤロー。

「うちのご主人様をなに泣かしてんだい!!」

傍らにいた大きな犬が怒鳴ってきた。普通は「犬が喋った!」と驚くところだがオレ達は違う。

オレと杏子は目を輝かせた。

「ソラあいつ捕まえようぜ！ サークাসに売れば儲けられる!」

「よっしゃあ!! 二人で山分けして買い食いしに行こうぜ!」

「なに考えてるのこのガキ共!?! とんでもないヤツらだよ、こいつら!」

驚くどころか捕まえて売却するのがオレらのスタンダード。だって珍しい動物いたら売るじゃん普通はさ。

ちなみにまどかとほむら場合だと、片方は普通にリアクションするが、もう片方は射撃の実験台にするとか言いそうだ。ほむらは未知の相手に警戒するからなあ。

「コースプレッ、コースプレッ！」

「ばーいしゅッ、ばーいしゅッ！」

「ひ、ひいッ」

さすがに怯え始める襲撃者達。もはや彼女達が狩る側ではない。狩られる側だ。

杏子と千香のテンションが高くなっており、掛け声が出ている。それが余計に彼女達に恐怖心を与える。

ジリジリと近づき、目を輝かせる外道なオレ達。

——彼女達の運命はここで終わらない

「ぬお!？」

「うわっ!？」

「うきよ!？」

いきなり黒い魔力弾がこちらに向かってきた。この魔法は……誰のだ？ 未知の魔法か？

これまで見てきた魔法ではないことがわかる。それを撃ってきたのが誰なのかは相手を見てすぐに理解した。

「か弱い女の子に何をしているんだお前は!!」

みんな大好きオリ主くんでした。

うわー、一番めんどーなヤツがきたー……。こいつなんかオレの話聞かなそうだし、何より勝手にオレを悪いと判断してくる。

オレが記憶を取り戻す前、つまり『僕』と言ってきたときもそうだ。オレがやっていないことを決めつけ、殴り蹴ってきた。最後までやっていないのに、ボコボコにされ、犯人が他にいることが判明した後、謝りもしないままでオレに関わらなくなった。

『僕』ころのオレにとってトラウマ。今のオレにとっては相手にしたくないめんどくさいヤツである。

そんなオリ主くんに杏子と千香は勝手に答えてやった。

「何って、その犬を捕まえて買収するつもり」

「その痴女を捕まえて着せ替え人形にするつもり」

「ソラが」

「お前らなに言ってるの!?!」

擦り付けられた! こいつらヒドツ!

こいつはオレの言葉を信じないし、他人の言葉は信じるヤツなのに!

「なんてヤツだ! もう許さない!」

しかもなんか知らないけど誤解された! オリ主くんは再びオレに向けて魔力弾を撃つ。

ああもう。仕方ない。

オレは魔力弾を神器で弾き返した。オリ主くんは防御したが返されたことに驚いていた。

「そんな……まさかこれを打ち返すなんて。お前は何者だ……!」

いやこの程度でやられるわけねえじゃん。

三年前にオレをボコボコしたことで調子乗ってるのかこいつ?

「だとしたら思い知らせてやるか。ああもう、大人げないなあ、オレも」

バキボキと骨を鳴らし、神器を構える。

剣道の横構え。相手に剣の長さを知られないように剣を隠すように構える型。実戦では使えにくいのが、達人や名人となればこれは武器になりうる。

相手は初めて戦う相手だからこそ、オレはこの構えをとった。普段は自然に構えているんだけどね。

さてと……お前が相手している敵がなんなのか。

未熟者ごときじゃ勝てない相手ってヤツを教えてやろう。

—— さあ、始めよう
誰もが恐れたオレの戦いを。

第六話 英雄に勝てる一般人はなかない

思い出すのはあの世界。

『無血の死神』としていた頃の話だ。

周りは死体。血も何も出さず、目を開けたまま息絶えた肉の人形へと成り下がった人だらけ。

その中にも血の匂いがするがオレが殺したヤツらではない。敵か味方かの血だ。

相手を殺したか殺されたかのどちらかの結末を迎えて死んだヤツらばかりだ。

血だけでなく硝煙の匂いもある。誰かが重火器を使ったのだろう。

ここには悲しみと苦しみと怒りしかない。女は犯され、子どもはコキ使われ、老人や男は殺される。

快楽を求め、愉悦を求め、そして勝利を求める。

それが戦場だ。ここには救いのヒーローなんていない。そんな偽善者なんて誰もなろうとしない。

憧れた者になろうとしたオレ。だけど間違いと気づいたときには大切なものを失った後。

戦場に求められたのは『偽善者』^{ヒーロー}ではなく、多くの人を殺し殲滅する英雄^{ばけもの}だった。

☆☆☆

オリ主くんは剣の鏢しかない機械的な柄を出し、オレに向かってきた。すると鏢から黒い剣が生えてきて、それで斬りかかる。

驚いた。まさかただの鏢しかない柄かと思っていたが、まさかビームサーベルになるとは。

ビームサーベルは西洋のような剣の形でしかも剣身は魔力ででき

たソードだ。魔力ならば自分の意識でいつでも修復できるし、硬化することも可能なメリットはある。

逆にデメリットと言えば魔力を放出し続けることだろうとオレは推理した。

オレはオリ主くんの斬撃を神器で迎え打つ。左手を離し、右手だけで思いきり振るえば、オリ主くんの魔力剣が弾かれ、大きく身体を仰け反らせる。

「くっ……!」

「しっ!」

怯んだヤツにオレは次々に斬撃を入れる。片手だけで相手を斬り込み、翻弄させる。

オリ主くんは戦い慣れしてないが、何度も打つオレの斬撃に辛うじて追い付いていた。

「ま、まだまだあ! 僕はお前なんか……!」

「んじや、もうワンランク上にいこうか」

「なっ!?!」

驚愕しても困る。なんせ、今ので二割の早さだ。常人ならまだ目で追える早さ程度だ。

さらに上になると目にも止りにくい早さである。オリ主くんは遂にビームサーベルで受け止めるのをやめ、後退し、距離をとる。しかしそれは悪手だ。

オレは攻撃的なバトルスタイルだ。相手が素人ならば退いたら攻める。

「くっ、ぞお!」

「へえ……まだ追いつくのか」

「高町、親子に鍛えられてるから、なっ!」

「じや、もう一段階」

今度の斬撃は目にも止まらぬ早さだ。遂にオリ主くんはオレの斬撃を受けてしまった。しかし、切り傷はなくオリ主くんがジャングルジムまで飛ばされただけだった。

「ッ……なぜ、峰の方に!?!」

「え、だってお前ごとき殺しても意味ないもん」

まあでも一般人なら全身骨折する程度だが、相手は打撲を受けた程度だ。さすがオリ主くん。鍛えているだけで身体だけは頑丈だ。

「お前、ナメてるのか!？」

「んなもん当たり前だろ。『ごとき』ってついてる時点で気づけつての」

そうやってオリ主くんは何度もビームサーベルを振るうが、躲し、何度も打撃を与える。ときには蹴りや拳でぶっ飛ばし、そして地面へ叩きつける。オリ主くんはそれでも立ち上がるが、オレはそんな彼を見てもなんの感心もなかった。

オレにとつてのオリ主くんははっきり言おう。

殺す価値もない。

見る価値もない。

相手にする意味も根拠も何もかもない。

無関心。無意味。無駄。

つまりオレはオリ主くんを敵としても味方としても見ないし、いてもいなくてもどうでもいい一般人である。

だってそうだろ？ 相手は確かに鍛えてるが戦士でも武人でもない。い。

素人で子ども。しかも前世のクラスで言えばせいぜい小将程度。本気を出せば瞬殺できる。

「くそ……くそっ！ 馬鹿にしやがって！ 『ラルド』！」

《承知！》

柄から機械的な声が聞こえ、葉莖が柄から飛び出た。まるで銃弾のカートリッジみたいだな。

するとオリ主くんの魔力が上がり、ビームサーベルが太くなる。魔力を上げるドーピングなのかあれは？

「『ソニックムーヴ』！」

オリ主くんの足に魔方陣が現れ、次の瞬間。オレの背後にはビームサーベルを振りかざすオリ主くんがいた。

高速移動か。油断した。けれど防げないこともない。オレはそれ

を受け流し、そのまま蹴り飛ばした。

オリ主くんは肺から息を出され、身体を滑走したがすぐに立ち上がり、また斬りかかる。オレは今度は避け、ヤツの顎に向けて蹴り上げた。

空中へ飛ばされたヤツが落ちてきたとき、ティーバツティングのようにぶっ飛ばそうと思ったが、オリ主くんは浮いていた。

（飛行魔法か……。また見たことない術式だ）

この世界の魔法は術式をプログラミングし、それを構築することで発動するようだが、術式をどうやって描き込んでいるのかわからなかった。

いつの間にか術式が構築され、それが発動していると言ってもいい。

（機械……。あの機械がパソコンみたいならばできるのか？）

そう考えればしつくりくる。仮にオリ主くんを無力化したいときにはその機械をぶち壊せばもう魔法は使えないと言ってもいいだろう。

するとオリ主くんは息を荒くしながら歯を食い縛ってから叫んだ。

『ラルド』！ 最強の魔法でヤツを撃つぞー！

《心得た！ ヤツに一泡吹かせてやろう！》

オリ主くんが急降下し、今度も斬撃を入れてきた。オレはそれを回避し、蹴り飛ばすとヤツはニヤリと笑って手を下ろす。そのとき魔力の球体がこちらに落ちてきた。

なるほど。あらかじめ、球体を上空に作り出し、設置していたのだろう。オレはそれを躲さなければならぬと踏んでいたヤツはビームサーベルの魔力を更に大きくし、それを天に向けた。

『ダークインパルス』——天よ、裁け！

そのビームサーベル下ろし、こちらに向けて放たれたのは魔力砲撃だった。その大きな砲撃はオレを呑み込んで視界はオリ主くんの魔力によって黒く染まった。

(草太 side)

フェイトを助けるために撃った魔力弾がまさか弾き返されるとは思わなかった。踏み台転生者であるが、こいつの実力は本物だった。だけど俺は勝てる自信があった。

なのはのお父さんとお兄さんと毎日稽古つけてもらい、それなりの実力がついたと自信がある。だから挑んだ。そして知った。

——敵が遥か彼方の実力を持つ者であったことを

全ての斬撃は回避され、しかも攻撃にまわれればこちらの防御が間に合わず、斬られ放題。

いや斬撃ではなく峰による打撃のみで翻弄された。まるで僕という存在を弱者と見定めたかのように。

何度も魔力の剣で斬り込んだが、ヒラリと避けられ、腹部や肩、そして胸部に的確に強烈な蹴りや拳を与えられた。

士郎さん——いや、それよりも重く強い一撃。まさか魔力強化しているのかと思われた。

しかしヤツには一切そういう魔法が使われた素振りや形跡がなかった。ならば特典だろうと判断し、『カートリッジ』を使ってスピードで翻弄しようと考えた。

最初の一撃だけがヤツを防御させた。しかしその後はどうだろう、ヤツは目で追いかけて僕を蹴り飛ばした。

まるで心を読んだようにヤツは避けた。それが堪らなく悔しくて何も考えず、突っ込んだ。

当然、神威にそれは通用しない。顎を蹴られ、上空に飛ばされた。意識が飛びかけたが辛うじて耐えた。おそらく辛うじてだったのは神威が手加減したからだろう。

腹部に受けた重い蹴りが顎に当たれば砕けていただろう。

僕は上空に浮かび、次の手を考えた。最強の魔法で相手を葬ること

を思い浮かび、それを使った。

スフィアを囿にしてとどめの一撃を与えるという戦法で神威に最強の魔法——『ダークインパルス』を当ててすることに成功した。

なのはのスターライトブレイカーの黒いバージョンの最強の砲撃魔法だ。さすがにヤツも……と思ひ、砂煙が晴れたとき僕は思ひ知つた。

「そんな……どうして!」

「いや驚かれても、なあ……。てか、さつきから何その機械。お前よりそちらに興味があるんだけど」

『ラルド』を興味津々と見ていた神威は無事だった。無傷だった。

確かに『ダークインパルス』は当たった。それなのに、無傷で剣先をこちらに向けていた。

神威は不機嫌そうに言ってきた。

「いきなり撃つなよ。ビックリしただろ」

「な、なんでお前は無事なんだよ!? あれほどの砲撃をどうやって!」

「え? 普通に『開いた』んだけど」

「どういうことだ!」

「いや『開けた』っていう概念をその砲撃にぶつけて切り開いたってことだけど」

概念に干渉する武器?

ヤツはどんな特典をもらったんだ! 踏み台が得る特典じゃないぞ!?

「なんかもうめんどいからとつと終わらせよう」

「ナメるな! まだ僕は——」

そう言いかけたとき、神威を見失った。

次に神威を見たときにはヤツの右足がこちらの腹部に食い込んだときだ。吹き飛ばされるも、足で耐えきる。足が滑走し、止まるとまた神威を見失い、辺りを見回す。

「遅い」

「ぐばっ!」

背中に衝撃を受けた。掌底を構えた神威がカギのような剣を構え、

地面を蹴る。

そこからキャッチボールのように打撃で飛ばされた。ペンタグラムを描くように、右へ左へ飛ばされ、そして最後に上空に飛ばされた。「ぐっ、ぞっ……!!」 僕は主人公だぞ! なんて、なんで踏み台なんかにイイイイイ!」

憎悪が僕を支配する。につつき相手を殺すつもりで魔力の剣にさらに魔力を込めた。

神威が目の前に現れたときそれを振りかざす——が、まるで否定するかのようには魔力の剣がヤツの剣に触れたとき、消えた。

神威は冷めた目で見ながら剣を上から振りかぶる。

「確かにお前の主人公という物語かもしれないよ、ここは。でも主人公だからってお前が絶対勝つとは限らないし、死なないとも限らない」

違う……!! それは弱いからだ!

僕は弱い主人公じゃない……!!

「弱いよお前は。自分が強いって勘違いしている単なる井の中の蛙さ」

「ツ……僕は弱くない! そうだ。弱くない! ヨワクナインダあああああ!」

僕は弱くない。そう何度も否定した。しかしそれすら否定するかのようには神威の斬撃が肩から突き刺さる。

強烈な打撃を肩から受け、骨が折れるくらいに地面にたたきつけられた。

……僕はヨワクナイ……ツヨイ——

(ソラside)

オリ主くんを地面にぶちのめして戦闘が終わった。

思いきり勘違いヤローだった。神様に与えられた特典を自分の力だと勘違いし、そして努力してるから最強だと勘違いし、踏み台だか

ら弱いと勘違いしていた大馬鹿ヤローだった。

そもそも主人公だからって必ず勝つとは限らない。

全線全勝という主人公は絶対にいない。必ずどこかで負けている。だからそいつは強い。

自身の敗北を理解し、そして反省し、強くなろうと努力する。こいつの努力は敗北しないように強くなろうとしていたことであり、それは敗者になった者よりも薄い。

所詮は一般人から力を得た転生者。主人公だからって英雄となつたオレと渡り合えるわけではない。つーか、英雄になれるわけでもないしな。

オレは寝ているヤツを縄で縛ってから呟いた。

「うん、つまんないや」

ここまで骨のない敵は久し振りである。まあ、オレが強すぎるせいか相手にならなかった。

つーか、千香と神器なしの模擬戦の方がまだマシだったと思うのは言い過ぎだろうか？

防御専門のヤツに負けるなんて、最悪だなこのオリ主くん。

「ブラボー♪ さすがソラだよー!」

「だな。勉強になるくらい弱い者いじめだったぞ」

「杏子、それ皮肉か？」

「いんや、純粋な賞賛。武器があるからって武器だけしか使わない戦法はねーってことがよくわかった」

シツシツ、と杏子はシャドウボクシングし始める。どうやらオレの対人戦にはおおいに参考になったようだ。

まあそれはさておき、先程の金髪少女を捜すがどうやらもう逃げたしまったようだ。

おのれ、オリ主くんめ。よくも邪魔してくれたな。というわけでオレと千香はゴソゴソとオリ主くんから物色し始める。

「んで、なにしてんのソラと千香は」

「いや金あるかなって。ほら、オレってまどかに財布握られてるし。あつたら返済無しで借りる予定」

「ボクはこいつの恥ずかしい写真をとってネットにばらまく予定」
「サイテーだなオイ。だが許可する。ゆけい、我が積年の恨みのため」

「やめんかテメーら」

結局、オレの復讐も杏子に止められた。ちくせう。

しかしオリ主くんは公園に放置したままだ。

あ、ちなみに縛り方は亀甲です。世間から変態扱いされてしまえと願って。

☆☆☆

翌日、学校を終え、すぐに帰宅。オリ主くんに遭遇しないように細心の注意を払い、帰った。

途中、ゴツくてケツ顎男性と遭遇した。「やらないか」と聞かれたとき、寒気がしたので逃走した。

追ってきたところを、通りすがりの金髪オツドアイを生け贄にした。オレは悪くない……………はず。

まあなんにせよ。貞操を守れたことがすばらしいことである。金髪オツドアイの少年に黙祷と十字を捧げてから家に入る。

「ただいまー」

「おかえりなさいソラ」

とほむらが出迎える。そういうえば、今日は買い物当番だったな。オレは着替えてリビングのソファに座るとほむらが話しかけてきた。

「ねえソラ。温泉行きたい?」

「うくん、別にどっちでもいいかもな」

「私達の裸体みたくない?」

「お前いい加減に自重しような」

昔はオドオドした大人しい文学少女だったらしいが最早面影ない

くらいのハツチャケキャラにシフトチェンジ。

何が彼女を変えてしまったんだ……。あ。オレか……。たぶん。

「自重しなくて何が魔法少女よ」

「何その某英雄王みたいな言い分。確かにあれはあれで自重してなかったけどさ。リアルファイトはアニメーションだけでいいよマジで」

『円環の理』だった頃のまどかに見せてもらった並行世界の一つの話だったりする。

あれはひどい。主にマミさんの死因が。

『オマエ、アタマ、マルカジリ』という結末を見て、衛に紹介されたタケルちゃんを思い出した。

恩師の女性が頭から食われるなんてトラウマにもほどがあるわ……。

ちなみに衛はあれから八神ハヤタちゃんという（自称）車椅子美少女と知り合い、仲良くしている。なんか衛の家が謎の戦いで破壊されて、寝床に困っていたので居候するようになったそうだ。

ホントに優しいハヤタちゃんである。……名前が覚えてないので、ハヤタじゃないかも知れないけど。

「とにかく温泉行くのはどっちでもいい。みんなが行きたいなら行くって感じ」

「あら、それは全員一緒に賛成したら行くってことかしら？」

「……………」

「女たらし」

「うっさい。オレは誰一人欠けたくないの」

クスツとほむらが優しい笑みでオレを見つめる。……凶星つかれるのって結構ハズいな。

ということでは、ゴールデンウィークは全員で温泉行くことになった。

心と身体をリラックスするには持ってこいだと思った。

「あ。移動と荷物持ちはソラの役目ね」

「なにその男女差別。解せぬ」

最近の社会が女尊男卑な気がする。でも世の女性って強かだから無理ないかも。

第七話 温泉旅行はカオスな件

ゴールデンウィーク。それは小学生にとって黄金の休日と言ってもいい。家族との旅行や遊園地、または映画館に行くのが彼ら彼女らの楽しみである。

本日の空は快晴で気分がよいことが起きそうな天気である。

あ。挨拶が遅れました。

こんにちは、みんなのソラです。

今日は昨日ほむらが当てた福引きの戦利品で温泉に行きます。ただし、ただいま絶賛荷物持ちをしてるでござる。

これが世に言う女尊男卑である。遂に時代は男から女によって尻に敷かれる社会となったのだ。

まあ男尊女卑も認めないけどね。平等で対等なのが一番です。

「お、あつちにあるもんうまそう！」

「コラッ、勝手な行動はしないの杏子！ あ、なんかいい石鹸見つけ」

「つてさやささも勝手な行動してるんじゃない！ あ、そこのお姉さまお茶しない？」

杏子は買い食い。さやかは石鹸。千香はナンパ。

スツゲーフリーダムなのが我ら転生者軍団である。

オイ、誰か労えよ。もしくは変わってよ。

この三人のやりたい放題な現場にオレは嘆息を吐いた。

「ふふ、みんなしてはしゃいじゃって♪」

「マミさんが唯一の清涼剤だ」

「お姉さんですもの」

お姉さん万歳。マミさん万歳。こういう包容力のある女性に尻を敷かれても良いんじゃないかなと思う今日この頃である。

するとほむらに足を踏まれた。痛い。

「なにデレデレしてるのいやらしい」

「そして鉄仮面によってオレのハートブレイクされる……」

「ほむらちゃんは鉄仮面じゃないよ。変人だよ」

「どうしようソラ。最近のまどかのセメント率が高いわ……」

まどかがこうなった主な原因は例の娘——生田ミカである。

なんかことあるごとにオレに対して悪い噂を広めたり、悪口を言っている。

高道名古屋(※高町なのはです)やバーニング(※バニングスです)、つきむーら武田(※月村すずかです)は最近大人しいし、近づくこともないから彼女達には何も言わないまどかだが、そういう陰口は嫌いらしい。

「もつと堂々と来いって毎回思ってる」

「やっぱ詢子さんの娘だったわけあるわね」

「ほむら、その度にオレのハートブレイクされるのヤなんだけど」

「安心しなさい。その時は私とまどかで弄いじってあげる」

「慰めないの!?!」

「あなたにアメを与えないわ。ムチにはムチ。徹底的にいじめてあげて鍛えてあげる。そうすればソラの涙目が見れて私ハッピーよ」

「ゴリゴリ精神擦りきれてる度にお前がハッピーなんて解せぬ……」

「そしてそのとき私がアメを与えて洗脳すればソラくんは私とほむらちゃんのモノになるね!」

「お前はお前で腹黒いしよ!!」

さよなら癒し、ようこそ四面楚歌。

ママさんは味方かと思えば、涙目なオレを見たいとか言ってるし。てか、現在進行でただ頭撫でるだけだし。

はあ………なんにせよ。

「リフレッシュできるかなあ」

このフリーダムで、セメントで、ぶっ飛んだ連中と宿泊することで。あれ、なんか目にゴミが……。

そんな眩きはギャーギャー騒ぐ転生者軍団の喧騒によって消された。

脱衣所で服を脱ぎ、オレは湯船に浸かった。石でできた日本の露天風呂である。

「まさかママさんも一緒に入るとか言ったときは焦った」

一応みんなの保護者という立場で大人バージョンになり、チエツクインした後、元の姿に戻った。

オレと千香の使う魔法で相手を大人にしたりすることはできる。逆に子どもに変えるのは無理だが。

そしてあのとき見たママさんの姿は将来優しい美人で母性的な女性になることを確信した。その後には鼻血を流しながらの混浴宣言でそれは台無しとなったけどね。

いや成長記録をとりたいからってオレの精神年齢考えてよ。二十歳越えたお兄さんだぞ、もう。

他のみんなも悪ノリしてくるし。まあそれはさておき温泉に浸かり、ゆったりする。

リラックスし、心が穏やかになる。

ふと、そんなとき誰かが入ってきた。若い男性二人だ。どちらも鍛えており、脱いだらスゴい人達だ。

身体が傷だらけなのでどこかの武芸者かもしれない。こんな時代に武芸者がいるとは思わなかったが。

にしてもそっくりな若い男性達だ。兄弟なのだろうか？

「ふうー、さすが月村さん所縁の旅館だ」

「父さんなんかジジくさいぞ」

「何を言う。私はまだ現役バリバリだぞ。見よ、この鍛え抜かれた身体を」

「身体をアピールされても困るのだが……」

……神よ。テメーはどれだけ試練を与えるつもりだゴルア。どうしてつきむーらの関係者とエンカウトするんだよオイ。

……あ。神は死んだんだ。下級だけど。

そんなとき、視線がこちらに向かれた。ヤバス。目をつけられた。ならばこの容姿を活かして異国人の振りしてやる。

「ん？ 君は確か……………」

「ヒトチガイデス」

「いやまだ何も言っていないんだけど」

「ワタクシ、ロバートⅡジョンソンデス。ニッポンノオンセンスバラシイダス」

「ダスってなんだダスって。というか温泉って言ってる時点で思い切り日本人だろ君は」

「アーアー、キコエナイイ。ニッポンゴ、ワカラナイイ」

「耳ふさいで現実逃避しないでくれないか……………」

「まあそう言うな恭也。彼も緊張しているはずダス」

「父さん悪ノリしない」

冷や汗止まらない。天敵の拠点にいるなんて、このままでは月村組にエンカウントするのも時間の問題か。

ちくせう。まさか月村家の本拠地に来てしまうとは、これが孔明の罠か！

おのれ月村。どこまで我が平穩を邪魔するか！

「私は高町士郎。こちらが私の息子の」

「高町恭也だ。これも何かの縁だ。よかつたら名前を教えてくださいませんか？」

「どうもロバートⅡジョンソンです」

「ダウト」

「ちくせう……………！ バレた……………」

「いやバレるだろ。その偽名は」

なんとオレが小一時間考えに考えた偽名がたった数秒で見破られた。この男達……………できる！

しかも高町親子だった……………！

どうしようヤベー。とりあえず名乗るところか？

仕方ない。名乗るしかないよなあ。

「どうも、ソラです。特技は変態変人に向かってドロップキックから

のプロレス技をかけることです」

「どんな特技?」

「ミイイイイプツ!と掛け声をあげてボディアタックするのが必殺技です」

「どっかで聞いたことある掛け声!」

「すばらしい特技だね。私もプロレス好きである妻にかけられたことがある」

「父さん、なにとんでもないことを息子や初対面の子どもにカミングアウトしてるの!?! とうか母さんプロレス好きだったの!?!」

まさか高町父がカミングアウトしてきた。やるな中年。中年には見えないお兄さんだけど。

「ちなみに夜のプロレスもしていると」

「そうだね。激しい方だよ」

「なるほど。これは脳内プロフィールに高町士郎という人をメモしよう。ある意味スゴい大人である」と

「誉められたぞ恭也。ふふん♪」

「いやなに誇らしくしているんだよ! むしろ恥じろ! 爆弾発言したことを!」

「そして息子はツツコミ役、と」

「そこはメモするな!」

いや思い切りツツコミ役まっとうしてるじゃん。

恭也はハアハアと息を荒らしながら疲れた表情となっていた。

「やれやれこの程度で疲れるとはまだまだ未熟。修行し直したまえ」
「納得できん。そういう君こそどうなんだ」

「……常日頃そういう変態と腹黒と変人によって振り回されている」

「……なんかすまん」

「いや慣れてるから大丈夫。私、もう怖くない!」

「なんかすごい死亡フラグだよそれ。主に金髪ドリルな女の子の」

「恭也がメタいなあ」

面白そうにクククと笑う士郎さん、あなたもそういう人と関わってください。

マジでゴリゴリ精神削られるから。そんな雑談しながらゆったり過ごしていると、向こうから声が聞こえた。

ほむらの声だ。

『ソラ、リンスあるかしら？』

「忘れたの？」

『ええ。どうもうつかりしていたわ。だから貸してくれない？』

「オーケー。受け取れ〜」

リンスのボトルを投げ、ほむらが「ありがとう」と言っていたので無事に届いたのだろう。

「彼女かい？」

「士郎さん、何そのニマニマした顔」

「だって女の子と旅行とは家族付き合かもしくは彼女との旅行しかないじゃないか」

「あの、小学生ですよオレ」

「そうかな？ 最近の小学生は発達してるからそういうものじゃないのかな？」

いやないから。ほむらとは相棒的な関係だから。

「そうだよお〜？ ほむらとソラは恋人同士じゃないよ？」

「そうそう。……………なんでお前がここにいるの千香？」

「ムラムラしてやってきた」

バスタオルを巻いただけの千香がいつの間にか湯に使っていた。いつの間に来た!?

「帰れ」

「だが断る！ さあ、ソラ。ボクが直々にその裸体をゴシゴシ——ぶっ！」

桶をぶつけて、気を失った千香を向こうへ放り投げた。バシャーンと水飛沫が高く上がり、向こうでは「わー」「きゃー」と叫ぶ女性達の声がした。

「よ、容赦ないんだな。平気なのか？」

「あいつは変態のマゾだから平気。むしろ興奮してるんじゃない？」

「何それ怖い」

それが天ヶ瀬千香ですぜ兄ちゃん。

☆☆☆

高町親子と接点をもってしまったオレは第一回ソラクくんどうしよ
う会議を開催するものの、ウーノというカードゲームによって全員欠
席という結末となった。

おのれカードゲーム。

オレだけでなく罪のないみんなを巻き込むとは。

そしてそれを発案したさやかちゃんマジ策士。めっちゃめっちゃ楽し
いぞコラ。

こいつが孔明だったのではないかと地味に思った。アホだが。

「お?」

なんかティンツときた。みんなもそう感じたらしい。これは……。

「敵? はっ……これがニュータイプ!」

「そんなわけあるわけないでしょバカ千香。これはあれよ。虫の呼び
鈴よ」

「どんな呼び鈴だよ。虫の知らせだろ、さやか。……ところでマミ、虫
の知らせってなんだろ。意味覚えてないや」

「色々台無しな杏子さんな件」

笑顔でそうツッコむマミさんも染まってきたなあ。そう思いなが
らオレ達は外へ向かう。

この反応は………魔力のぶつかり合いだ。誰が戦っているんだ
?

そんなことを考えながら着替えて外に出た。外は山のある森。多
くの木々を飛び移り、オレと彼女達はぶつかってる場所へ向かった。

「あ、ヤバい。カメラ持ってくるの忘れた。ちよつと待ってて」

「何撮るつもりだお前」

「パンチラ」

「相変わらずな千香な件について」

ちなみに千香はすぐに戻って合流した。どんだけ撮りたいのお前
？

第八話 はつきり言おう。やりたい放題だなオイ

真つ黒な夜空に浮かぶキラキラした星空。

そんな静かで幻想的な世界とは無縁に、桜色と金色の魔力がぶつかり合う。

お互い真剣に戦っている二人の少女は数回魔力弾を撃ち合って、杖を構え、戦う相手を見据える。

「どうしてジュエルシードを集めるの!？」

チヨポポポポ。

「話しても……………わからない」

ズズズズズ、フウ……………。

「話し合わないと何もわからないよ!」

あ。ママさん、そのせんべえとつて。ありがとう。

「話したところで何もわかつてくれない!! だから……………!」

バリバリ、ポリポリ、ムシヤムシヤ。ゴツクン。バリバリ、ムシヤムシヤ、モグモグ。

「だからってこんな————つてうるさアアアアい!!」

うなーと手を振り上げ、怒る高餅（※高町です）。

おや、ついに高道さん（※いやだから高町ですつて）の娘がぶちキレちゃったよ。やだやだ、最近の若い子ったら。

「そりゃ怒るよ! 人が真剣に戦っているのになにお茶しているの!?! 何しに来たの!?!」

何しに来たか、か………………。それぞれの目的を話すと以下の通りである。

「暇潰しにきた」と答える杏子。彼女は今まさにうまい棒を食べていた。

「面白そうだから見に来た」と答えるさやか。彼女は今携帯ゲーム機で一狩りしている。

「お姉ちゃん、ちよつと心配になって来ちゃった」と答えたのはママさん。彼女はリボンで作り出した机と椅子に緑茶を入れたコップをオレに渡していた。美味である。

ちなみにオレはお茶を飲んで観戦していた。それなりに楽しめてるから続けると思ってる。

フリーダムなオレ達に対して、まどかとほむらだけは真剣になっていた。

「気にせず戦いなさい。今、まどかとジュースを賭けてるのよ」

「必ず勝つてね金髪ちゃん！」

栗町（※高町）に味方はいないや。ちなみにオレはお前に賭けてるから絶対勝てよコラ。

「金髪のお姉さん以外まともなヤツがない！ あとほむらちゃんなに勝手に賭け事してるの!?!」

「気安く名前を呼ばないで。あなたごときのミジンコが名前を呼ぶなんて頭が高いは」

「何様!?! 何様なのあなた!?!」

それが今世のほむらである。ほむらはとんでもないもの覚えていますったようだねこれは。今宵もツンドラ通常運行である。

あとその高松（※高町）と金髪。千香がお前らのスカートの中を狙っている。そう言う今さらながらバツとスカートを抑えた。

「ツ!?!」

「高町だよ！ というか天ヶ瀬さんにしてるの!?!」

「美少女のパンチラは金になる。コレクションになる。なお、五月六日に聖伴ムツツリ商会で売買予定。カミングスーンだけガール！」

「やめて！ ホントにやめて！」

スタンダードな千香はやはり変態である。聖伴ってそんな団体あつたかなあ。

……でもあの千香だし、ないなら作るな絶対。彼女はホントに混沌をもたらず継承だわ。

「あ。ちなみにここにくる途中、小動物と犬が戦っていたけどマミさんが拘束した。………亀甲縛りで」

「ユーノ君が!？」

「アルフが!？」

「何かが目覚めそうとか言ってたけど………マミさんなんてことしちゃったんだ」

「ごめんなさいソラくん。ひどいことしたからせめて気持ちよくと考えて……」

何を思つて気持ちよくさせようと思つたのだろうか。彼女の思考回路がたまにわからない……。

「余計な気づかいだよ！ とんでもないことしてくれたよホントつ！」

「とにかくアルフを早く解放………え？ 別にいいって？ なんで？ えっと、気持ちよくなってきたからもういいって？ わかったアルフがそう言うなら私は………」

「フェイトちやアアアアん気づいて！ アルフさんが手遅れになる前にイイイイ!!」

高道がオーマイゴツトと叫ぶ。それにオロオロするフェイトという痴女。

カオスだ。そして変態が増えるという結末がユーノとアルフに訪れた。

たまに思うのだが、変態ってバイオハザードするのかな。

今度研究してみよう。

「そこまでだ!」

と言つて現れたのはオリ主くん。なんか服がボロボロなんだけど、どうしたのだろうか。

「草太くん!」

「草太！」

「待たせたね。知らないヤツが邪魔——ぐぼおオオオオ!?」

「草太アアアア（くウウウウウん）!?!」

登場早々マミさんのマスケットが火がついた!

登場早々退場させるなんて、マミさんさすがにひどくね? 今の。

「だってなんかムカついたもん♪」

「かわいらしく満面笑顔で答えるものじゃないから。普通に殺人だから今の」

「魔力の弾だから大丈夫!」グツ

「サムアップしてもらっても……」

ほら見ろ。親の仇を見るようにオレを………オレっすか?」

「なんでオレ? いやマミさんだから。犯人はこの人だから。実行したの見たでしょ」

「クスンツ……実はソラくんにそうしないとおっぱい揉むぞとマミさんは脅されて………ニヤリツ」

「誤解を招くこと言うなまどか! つーかお前笑ったところ見たぞ今。黒い方の!」

「あら、揉みたいの? ごめんなさい後六年待つて。そしたら揉ませてあげる」

「マミさんなに言ってるの!?!」

顔を紅くされても困るんだけど!

「というか、まどかよ。どうしてオレを窮地に追いやる? そしてマミさんその発言いろんな意味でアウトだから!」

「でも揉んでみたいでしょ?」

「イエス。だって男だもん。女性のお乳に興味があるのは仕方ないもん」

「サイテー……」

「女の敵だね……」

「あれ、余計に誤解されちゃった? てか、お前ら会話聞いてただろ!?!」

「計画通り」ニヤリッ

これもまどかの罨か！ しまった。正直に答えるべきではなかった！

というか節穴じゃないのこいつらの耳は！

っーか聞く持たずにいきなり攻撃して来やがった!!

「あぶねっー！」

空中に跳んで魔力弾の攻撃を避けることができたが、今度は金髪少女が大鎌の魔力刃でオレを地面へ叩き落とした。

さらに極太の砲撃魔法がオレのもとに追い打ちしてきた。

やむ得ず、神器で砲撃魔法を解錠でキャンセルし、金髪少女が放ってきた三日月の斬撃が迫ってきたが回避。なんとか避けられたけど一杯一杯だった。

オリ主くんでどんだけパワーアップして、コンビネーション発揮すんだよコイツら。敵同士なのかホント。

「お姉ちゃんとして見過ごせないわね、それは……」

そう言ったマミさんの顔からニコニコ笑うお姉さんから戦う少女へとシフトした。

マミさんはマスケット銃で高町達を牽制し、誘導させた。

誘導したふたりを待っていたかのように、蜘蛛の網のように展開されたリボンで二人を縛り上げることに成功した。

やはり、ベテランの魔法少女だっただけである。

さらにリボンで無数のマスケットを創造し——って！

「ちよっ、やりすぎじゃないかそれ!？」

「甘いわソラくん。女は甘やかしたら最後付け上がる生き物よ。殺るなら徹底的によ」

「字が物騒だし、改めて思った。女ってマジで怖い!!」

まどかとほむらというドS姉妹をつい思い浮かべてしまった。

あいつらマジでオレをイジルことに対しては全力だからな……。

すると、マミさんは金髪少女のもつジュエルシードを奪う。何するつもりだ？

「これね。二人が争う理由は」

「それは危険なものです！ 渡してください！」

高松……………あ。間違えた。高町ね。うん、高町。もう覚えたから。

高町はそう言うがマミさんは真剣な表情のままだ。

マミさんは正義感の強い女性だ。少女同士の争いの種となるものを見過ごせないのだろうか、彼女は表情を崩さずジュエルシードを見つめていた。

「争う原因があるなら……………」

そう言つて空へ放り投げる。そしてリボンから巨大な大砲を造りだし……………つてあれは。

「消えなさい♪」

『ティロ・ファイナーレ』。マミさんの十八番^{おはこ}で最高の砲撃魔法。薔薇の魔女を消滅させるほどの威力がジュエルシードに向かった。

ちなみにマミさんは笑顔でティロつた。笑顔のまま、だ。

ジュツツドオオオオンと遙か上空で爆発したジュエルシードはたぶんその理不尽さ泣いていると思う。

おそらく火力において神器使いの中でマミさんは随一だ。それを今証明してくれた。

……………さて、どうしようか。どんな恐怖の魔王も真っ青になるぞ今の。

現に高町なんかジェルシードと同じ末路を思い浮かべたのか、めちゃくちゃ震えているし、金髪少女なんか呆けているし。

「さてと……………もう喧嘩しない?」

「はい……………」

「ソラくんにひどいことしない?」

「ち、誓つて」

「誓いなさい。今すぐ」

「誓いますから銃をこちらに向けないで!」

魔王だ。魔王がいる。マミさんマジ魔王。

あれ? そういえばこの世界つて高町が魔王になる物語じゃなかったっけ。

ちよつ、一斉にこちらに魔力弾が迫つて――――

ぎやアアアアアアアアアアアアアアアア!

もう一人踏み台役の転生者、神条シンヤ。全身打撲および骨折により全治一ヶ月。

哀れ、彼の登場はまだまだ先である。

第九話 観測された神器使い

天気はやや曇天。それでも学校があるため登校する。これが学生なのである。

温泉旅行から帰ってきたオレ達は再び学校にいく日々が始まった。ここ最近、生田ミカによく見られてる。

これはもしかしてオレの時代来たコレ!!と思う人がいるかもしれないが、全然違う。

好意どころか憎悪を感じるくらいの敵意だよこれが。おそらくオリ主くんという大切な人を傷つけられた怒りだろう。

まつ。まだかわいいいくらいだ。

それよりスゴいのを体験してるから。戦場では常に殺意と敵意の渦の中にいたオレにとっては石ころ同然である。

ちなみに過去最も度肝を冷やしたのが悪魔ほむら。

あれは冷や汗どころか、魂まで握りつぶされるかと思った。

だてに神様、墮おとしてないよあれ。めちやくちや怖かった。

もう彼女で体験したくないけどね。

オリ主くんが話をつけて近づかせないようにしているから今は大丈夫だが。

まあ、なんにせよ。静観あるのみだ。どう転ぼうが敵対するのであれば、ぶちのめせばいい。

「ソラ、今日のボクのパンツは何色かわかる?」

「ノーパン」

「どうしてわかったの!?!」

「マジかよ……!?!」

千香にはその後、体操服のズボンを履いてもらった。スカートにノーパンはいけません。

バニングスがキレた。以上。

「詳しく説明しなさいよ。さやかちゃん、それだけでわかる頭脳じゃないのよ」

「アホの子だから?」

「シバくぞ」

腕まくりして脅してきた。

怖い怖い。

さて説明すると高町が頑なに何かを隠していたことに、腹を立ててバニングスの堪忍袋がキレたのである。

ありがた迷惑だと思った。

いくら友達とは言え、隠し事の二つや二つでキレないでほしい。むしろなぜ信じてあげないのか謎である。

「そりゃあ大切だからこそ想って感情が爆発しちゃったんだよ、きつと」

「まあ、わからないことないが周りに当たり散らさないでほしい。不愉快だ」

「よし、ならばこのさやかちゃんが癒してあげよう。税込み百五十円で」

「ノーサンキュー。つーか、ジュース一本の値段と同価値の癒しなんか頼りにならん。てか、奢れって言いたいのか?」

「どうしてわかったの!?!」

「さやかだから」

というかこのやり取り二回目じゃん。

まあ軽口を言いながらいつもの昼食場所に向かった。関係ないしなオレ達には。

「……………っ」

「ありま」

教室を出ようとしたらバニングスとバツタリ遭遇。どうする?・

ま、スルーの一択だが。

「待ちなさいよ」

「なんだよ」

バニングスに呼び止められた。なぜか敵意あるまなざしも兼ねて。「あんた、なのはがああなったの知ってるでしょ？　そうでしょ!？」

「知るか。つーか邪魔。オレは今すぐ食欲を満たしたいんで」

「ふざけないで!」

そう言っただけでさされた手をさやかが払いのける。彼女はいつもならオチャラけているが今は、すんごいニッコリと笑っている。

これ、明らかにヤバい感じだよな？

うわー、目も笑ってねー……。

「八つ当たりなんてひどいねあんた。ソラが何をしたって言うの?」

「そ、それは……!」

「別に友達を想うのは悪いことじゃないけど、ソラを巻き込むのはやめなさい。こいつは関係ないわ」

冷たくそう言い、さやかはオレの手を引く形で昼食場所に向かった。

やれやれ………こいつもこいつでオレを悪く言われるのが限界なのかもしれないな。

☆☆☆

放課後、買い物の当番だったのでオレはさやかと杏子と一緒にメモに書いてある通りに目的のモノを揃えた。

しかしオレ達はまたしてもジュエルシードというトラブルメーカーに巻き込まれてしまった。

「なあ、なんか世界がモノクロになってね?」

「そうだね。こう……なんか魔女の結界のような……」

「マジでか。また魔女が出てくるのか?　助けてー正義のアホ。さやかちゃん」

「ふはははは、よかろう助けてしんぜよう。ていうか、さりげなく馬鹿にしない?」

「つてチンタラ漫才しているんじゃないよ! 誰かが魔法の結界を発動したんだ!」

要するにここはバトルフィールドとなったのか。

ふむ、第一次ほむさや大戦のときにこれが自宅で発動してほしかった。

あのととき、結局ダンスとソファアが犠牲になったし。……ああ、君たちと過ごした二年間は三秒くらい忘れない。

「むむ、なんか魔力の波動が。これはなんで?」

「いやん。魔力の風が。あたしのパンチラはレアだよソラ」

「ノーサンキュー……!」

「オイこらっ。なんで『目がアアアアア目がアアアア』しているのよあんたっ。目が腐るって意味じゃないわよね!」

いや確かにスカートの中を見てラッキーと羞恥の感情が起こったけどさ。

水色のシマシマはなんというかその……。

「最近コイツが鼻血出した下着は黒とピンクの普通の下着とか、セクシーな下着だぞ」

「何さりげなくカミングアウトしちやつてるのかな杏子さん!」

「くっ、さすがはむらとまどか……あたしの一步も二歩の先に進んでアダルティな下着を装備するなんて!」

「悔しがるところそこ!? つか、あいつらそんな下着穿いてるのかよ!」

魔力の暴風というBGMの中で意外すぎるカミングアウトの嵐に巻き込まれた。

そういえば、下着だけは見ないでねって言われてたけどまたまた見たあのセクシーなものあいつらのモノなのか?

鼻血も吹くほどの大胆なモノだったし。

そんな謎が謎を生む中で、オレと杏子、さやかは爆風が起きたところへ向かった。

到着すると。

うん、なんか光ってるし、浮いてるな。

「さやか、あれってジュエルシールドだよな？」

「そうね。七つ集めると願いが叶うかな？」

「いや某神龍でないから」

杏子はツツコミを入れながら、神器を召喚し、さやかも召喚。それぞれ武器を創造した。

オレも召喚しようとしたが、再び魔力の突風で飛ばされそうになった。足でなんとか踏ん張り耐えきった。

「ソラはあれを封印して！」

オレは頷くとまた突風がきた。さやかはサーベルを野球選手のようにスイングした。

『『フォルテツシモ』!!』

刹那、大音量の音波が突風を打ち消した。

さやかの神器『無限の音楽』は大音量の音波や振動などを操作する音の力を操る能力がある。ちなみにサーベルは魔力の塊でできているらしい。

「オラ、捕まえた！」

杏子は『アミコミ結界』でジュエルシールドを捕らえ、こちらに向けて放り投げた。

充分だ。

ビルからビルへと猿のように跳び、オレはそのまま剣先をジュエルシールドに向けて差し込み、回した。

グサリと刺したとき、ジュエルシールドの鼓動は徐々に小さくなる。どうやら治まったみたいだ。

「さて……どうすんだコレ」

「先生ー不法投棄がよろしいかと」

「同じく」

「採用。だけどポイ捨て駄目だからな」

「杏子にだけ言われたくない」

「テメーら帰ったら一回話合う必要があるな。拳で」

杏子に注意されたくない。だって、お前の前世浮浪女子中じゃない

か。

そんなわけで思いっきりどつかにぶん投げて逃亡開始。
なんかヤな予感するもん。

その予想通りに後ろから高町の声が聞こえたが、無視だ無視。
砲撃を撃ってきたとき、杏子とさやかがかがキレて、お返しとばかりに
槍やサーベルを投げて、阿鼻叫喚になった光景は見えないことにし
た。

地獄絵図に説明はしたくない。

やっぱ女って怖いとまた思った一日でした、まる。

(??サイド)

とある艦にて次元反応をキャッチした。しかし、すぐに消えたこと
に目を丸くすることになる。

そしてその艦は行き先を管理外世界、地球に向けて発進するのだっ
た。

一方、神威家では――

「ぐおっ!! 配管工のおっさんが!」

「桃色生物がやられた!」

「亀さんがんばって。いやほんとマジで!」

「ふっふっふっ、今よ! ショータイムよ!!」

「二きやああああ特殊部隊のオツサンやめてエエエエ!!」

テレビゲームで遊んでいた。段ボールのオツサンを使うほむら
ちゃんマジ強す。

さてその一方で、路地裏には一人のローブを被る者が立っていた。その者はクスクスと笑い、そしてここにはいない彼に向けて言った。

「ねえ、ソラ……あなたはどうするのかしらね」

そいつが握る手には黒いジュエルシールドがあつた。そのジュエルシールドはどす黒く染まっていた。

ローブの人物はそれを持ち、そのまま空間の歪みと共に消えていった……。

第十話 泣いたところで意味無し。彼女は通常運行

誰も助からない。そんな絶望がある世界にあった。

オレには力があつた。けれど足りないと言わんばかりに、大切な友を失った。

かけがえのない戦友はあつけなく死ぬ戦場が当たり前だった。だからもう友達はいらないとさえ思った。

だからずっと一人がいい。一人の方が傷つきにくい。自分や周りも。

たぶん、オレの相棒の女の子もそう考えたじゃないかな……。戦場という最悪を体験してから彼女の苦しみを、悲しみを初めて理解したかもしれない。

今度会ったとき、彼女に言ってやろう。

『辛かったな、がんばったんだな。でももう大丈夫。お前はもう一人じゃないから』……って。

と、まあそんな前世の話を思い出していると背後から魔力弾を不意打ちされた。

痺れる魔弾は反則である……。

☆☆☆

本日は快晴。綺麗な青空に広がる世界。そんな世界で飛べるとは素晴らしいことである。

今まさにオレはそんな状態である。

こんにちわ、ソラくんです。

さてみなさん。今、オレは何しているだろうかわかるだろうか。

ヒントは目の前に高町と金髪少女とオリ主くんがいて、動けない状態です。お分かりだろうか？

「家から出たら拉致られた件」

「黙ってる」

厳しいオリ主くんである。背後から攻撃するなんて不意打ちとは卑怯なり。親御さんは泣くにちがいない。

「親はいない。死んでる」

「あつそ。で、暇だ。携帯ゲーム持ってきてくれればよかった」

「……お前は一応辛い過去とかに同情しないのか？」

「え、同情したところでなんになるの？ あとぶっちゃけお前の過去なんか知るか。興味のない人の過去なんかどうでもいい」

そもそも眼中にないし。

オレの答えが気に入らないのかオリ主くんの表情は険しい。いや基本そんなもんだろ。知らないのになんで同情しなきゃならん。

つか、なんで一触即発なの高町と金髪少女は。

はっ、謎は解けた！

「修羅場か……！ すばらしい」

「オイなんだその顔は。愉快そうに顔して」

「いやいや、まさに一人の男を巡って争う女性の姿はとても美しいと思ってる」

「本音は？」

「もつと醜く争え、馬鹿共！」

「最低だなお前！」

何を言う。まどかならば、さらに場を混乱させるために暗示をかけたオカマの人を参戦させるだろう。

質の悪いことに最後に残らせるのはそのオカマだろうな。

何を隠そう、ヤツは愉悦のためにそこまで考える腹黒い女だからだ

!!

いや、ね……昔は純粹無垢だったのよ。なんで黒いまどかが誕生したのか気になったよホント。

若干黄昏していると、いきなり黒い衣装を着た少年が割って入った。

……誰あれ？

「クロノ・ハラオウン。十四歳の管理局執務官さ」

『あ、悪夢だ……』

『あ、それと今すぐそこから離れてね』

『え。なにするつもり?』

『オリ主さんと黒い子もろともブツ飛ばすから♪』

『何おつそろいこと言っちゃってるのこの娘!?!』

『ティヒヒヒ……私のソラクンを拉致した罪——万死に値するよ!』

マジギレしちゃってる!?

って遥向こうにピンクに光る何かが!

あ。これはヤバイ。マジだわ。逃げよ。

「オリ主くん——早く逃げてね——今から悪魔がそこら一带ブツ飛ばすからな——」

「ちよつ、逃げるな——」

しかしスルーでござる。だつて命大事もん。

というわけで、オレは脚力を駆使してそこから遠くへ離れるが、迫るピンクの流星群。

ヤバイヤバイヤバイ! もうそこまで——

ジユツツツドオオオオオオオンンン!!!!

——その十秒後、ピンクの無数の矢が雨のように落ちてきて、そこら一带を文字どおりブツ飛ばした。

それはもう核兵器のごとくの威力で。

走馬灯の中でオレは、その攻撃はかつてほむらを助けるために撃つたキユウベえ殲滅の魔法だったと思ひ出した。

あの無限残機を全滅させるほどの魔法だ。

と、言っても生きてるけど。

その余波でオレの身体も空へ投げ飛ばされ、どこかの家の屋根に受け身をとらない形で叩きつけられていた。

「イッテー……」

屋根からブツ飛んだ一带を見ると黒いモノが三体あった。間違いない。生田とオリ主さんと少年だ。唯一無事だったのは遠くにいた

高町だ。

三人の物体に唾然とするしかなかった彼女である。

そしてマッスルな男性は……………あ、いた。なんか正気に戻ってどっかに行っちゃった。

なんであいつだけ無事なの？ 変態だから？

「あ、よかった。逃げ切れたんだね」

ピンクの悪魔がニコニコしながら舞い降りた。

まどか神モードと言われる『円環の理』の衣装をきたまどかだった。全力全壊のときに見せる姿だ。

「死ぬかと思った」

「ひどい人達だね。ソラをこういうことするなんて！」

「いや犯人お前だよ」

まどかにツッコむが彼女は口笛を吹きながら誤魔化す。拳骨を落としたい。

「どうせならどっかのヒーローのように助けてほしかった」

「その助け方をすれば惚れる？」

「惚れはしないけど見る目が変わってた」

「なんてこつたい。ますますフラグ立てて、即ほむらちゃん共々結婚というハーレムルートが潰えちゃった……………」

「自重してよホント……………」

ハッチャけるヤツの暴走は誰にも止められないか。まどかは元の姿に戻った。

『少しいいかしら？』

「よし、助け方はさておいてお礼に何か叶えてあげよう」

「結婚して！ むしろ抱いて！」

「あと九年待て淫乱」

「くっ……………法律国家め！」

『ちよつといいかしら？』

「ならギャルのパンティをもらって！」

「なにその新しいウーロン。与えるパンティってなんぞ。ていうか何気なく脱がないの」

「くっ……理性め！ 私の邪魔を!!」

「いや邪魔するわマジで」

『あの……聞いている？ ねえ』

「翠屋のシュークリームでどうだ」

「三色味のを二つ」

「例の高いのか。ま、いつか。ついでにママさんのを一つずつ買いにいくか。杏子が何かとうるさそうだし」

「やったー♪ ソラくん大好き！」

「うおッ!? いきなり抱きつくなよ！」

「えへへへ、照れてかわいいよソラくん♪」

「たくっ……」

こころいうときだけ甘えてくるから無下にできない。

「ソラくんの背中って暖かいね。ふぁー眠くなってきたよ……」

「寝ろよ。送ってやるから」

「ありがと……。……スースー」

「お疲れ様……。まどか」

眠る彼女を愛しそうに見ながらオレは眠り姫を背負い翠屋に向かった。

こころいうときのまどかは子どもらしくてかわいらしいよな。

きれいな青空が広がるそんな世界で、そう思う一日だった。

『話を聞いてよ………クスン』

知らない間に知らない女性が映るウィンドに気づいたのは翠屋の
シュークリームを買った後だった。

え、この人誰？

第十一話 神器使い達

宇宙戦艦。それは男子にとって心が燃える素材だったりする。スペースワールド的なものはかつての少年達の憧れであり、それは今でも変わらない。

今まさにオレはちよつとだけ感激している。

現在、昨日出会った女性と取引してオレ達は管理局の艦にいた。オリ主くんはいるが寝ている。

え、なんでつて？ うるさいから杏子がワンパンしちゃった。

ついでに生田もサスペンス風に失神させられた。どつから入手したクロロホルム。

杏子がそんな行動するとゾツするではないか。

高町もそれを見て震えながらもオリ主くんを背負っているし。それからユーノくんというフェレットは人間だったと暴露された。彼はほむら達から淫獣と罵倒されたが満更でもなかった。

どうしちまったユーノ少年……。

どうでもいいけど。

「ここが艦長室だ」

クロノ少年は扉を開けた。そこには見事なくらい似合わない和室だった。

なんか間違った知識外国人辺りが集めそうなものばかりだし。

「ご苦労様クロノ。ささ、座って座って。私はこの艦の提督のリンデイ・ハラオウンよ」

そう言つて艦長である女性はお茶を作っていた。異国人の和服は素晴らしいがお茶がいただけなかった。……緑茶に砂糖を大量に入れるものだったけ？

するとママさんがズイツと顔を彼女に近づけた。

「少しいかしら？」

「え、えつと、なにかしら？」

「あなた、お茶を馬鹿にしてるでしょ？　そうでしょ。そうと言いなさい」

「あ、えっ、その……………」

まさかのマミさんガチギレ。そういえばマミさんってお茶にはうるさかったな。

特に紅茶が専門だったりするが、リンディ提督が使う砂糖はそれなりのブランドだったはず。それが逆鱗に触れたようだ。

ガミガミとお茶の素晴らしさを語り始めたマミさん。もうこうなれば止まらない……………。

そして、小一時間経ってやっと終わった。艦長さんはぐったりと着崩れして正座の痺れに耐えていた。

長時間の正座はさすがに辛い。

「で、ではロストログアのジュエルシードの話に戻すわよ……………」

「休憩とった方がよくな？」

さやかの一言で休憩タイムに入った。ときどきこの子って人のためになること言うよね。

閑話休題

衛の言った通り、ジュエルシードの話を要約するとなんと願いを歪んだ形で叶える願望器らしい。

どこの聖杯だよと思ったのはおそらくオレが fate をしたせいだ。あれはすごい。主に士郎くんの女難と災難が。

それはさておき、ジュエルシードの案件は管理局が預かるらしくオレ達は帰っていいらしい。

高町達は納得してないみたいだが、別にいいや。

「よし帰るか」

「えーこの宝石貰っちゃだめなのかよー？」

「文句いわないの杏子さん。ここはプロに任せるのが一番よ」

「そーそー早く帰って大乱闘しようよ！」

「ほむらちゃん、帰ったら一緒にショッピングに行こ♪」
「ええ♪」

満場一致。んじゃ、お疲れ様でしたー。
と言ったらリンデイさんが止めてきた。

「ちよつと待ちなさい。あなた達はなのはさんの友人じゃないの？」

「「「うん」」」」

全く部外者だし。それにしてもなんだ、その協力してくれないのつて言う目は。

よし、ならば理由を言つてやろう。

「こんな頑固娘と勘違い男、そしてその腰巾着女が友達なわけないでしょ」

「つーか、どうでもいいし」

と答えたさやかと杏子。

「関係ないし、ソラくんをいじめた子だし」

「ちよつとね……」

「生理的に無理」

と答えたマミさん、まどか、ほむら。てか、ほむらのそれは言い過ぎだろ。容赦ないつて。

ほら見ろ。高町が泣きそうだぞ。ここまで露骨に嫌われたらなあ。同情しないけど。

「もう少し残ってくれませんか。あなたに聞きたいことがあります」

とある映像がうつし出された。これはまどかのデストロイアローだな。

「その技名はやめて」

「事実だろ。調子に乗って円環の魔力を使ったからこうなったんだろ」

「はりきり過ぎちゃって………ティヒ♪」

「許すー！」

「許すのかよ」

まあ、なんにせよ。説明しなきゃならないんだな。

「こいつは神器つて言う武器の力だ」

オレは神器について語り始めた。

神器――

自身の魂の一部を武器にした姿で、召喚術によって初めて出せる武器。

武器それぞれの能力や形状は違うが、共通点があるとすれば身体スベックの上昇。超人クラスもなれないことはないが、召喚術という力で魔力の塊として具現化しているため、魔力が減り続けているし、尽きれば消えてしまうのも自明の理である。

例外としてあげると、まどかは元々神様みたいな存在だったため、円環という無尽蔵の魔力が使えるなのでいつまでも具現化できる。

そして、その力をフルに使ったので辺り一帯を吹き飛ばすことができたのだ。

「概念に干渉できる神器もあれば、時を操作する神器もある。それを使う者を神器使いと言われている」

「それじゃあ君達はロストロギアを所持しているのか!？」

「まあそうなるか」

方や時を操作できるし、方やリボンでいろいろできる人がいるしなあ。するとクロノの少年は立ち上がり、

「艦長、今すぐ彼らを拘束すべきです！ ロストロギアの不法所持です！」

「不法所持って……。仕方ないだろ。自分の魂を武器にした姿なんだから。壊れたり、奪われたりして死ぬリスクあるし」

「そんなことで許されるか！ こんな危険な人物を、化け物はこうそ

――」

チャキ、カチャ、ジャキツ、スチャツ

……その言葉はいただけなかった。ほら、オレ以外のみんな神器使い達が一齐にクロノ少年の頭や首を向けて武器を向けたじゃないか。

「オイ……今なに言おうとしたテメー」

とぶちギレる杏子。

「いやーさすがに今のはさやかちゃん的に見過ごせないなあ……」

目が笑ってないさやか。

「まどかを化け物呼ばわりとはいい度胸ね。あとソラも」

オレはついでかよほむら。

「ふふ、おイタする子にはお仕置が必要ね……………」

「ティヒヒヒヒ♪ 殺っちゃうよ?」ニコッ

とニコニコ笑ってるが殺気を抑えられていないマミさんとまどか。

この二人が一番怖い。

「覚悟はできた? 懺悔は済んだ? なら死ねゴミ」

と完全にバトルモードとなつた千香。この子が一番危ない。なんせ、変態の上にヤンデレ要素があるのだから。

合計六人の殺気に囲まれていた。見事にぶちギレてるわみんな。

クロノ少年なんかめちゃくちや緊張した表情しているし。反抗しようとは杖を取り出そうにも、取り出せる隙すらないしな。

戦ったとしてもこいつらには絶対勝てないのに。

やれやれ、仕方ない。

「はいはい。そこまでだみんな。若造をいじめてあげるな」

「ぼ、僕は君より歳上だ!」

「年齢の話じゃないって。戦士としての歴史さ」

オレの話を聞いてくれたみんなは武器を引いてくれた。クロノ少年は思わずへたりこみそれを見下ろす形でオレは言う。

「オレ達はこう見えても人間じゃない化け物や化け物以上の化け物を倒してきた」

オレは英雄と言われるなら、彼女達は歴戦の猛者ところだろう。

そして、何回も魔女という化け物戦ってきたその経験が彼女達には残っている。

だから勝てない。勝てるはずもない。

勝つか負けるの話ではなく、生きるか死ぬかの殺し合い。命のやり取りを何度もかけた者が簡単に負けるはずがない。

クロノ少年もそういう戦いを経験したかもしれないが、まだまだ浅いと思えた。浅くなかったら、オレ達の実力を見ればわかるはずだからだ。

さて、その念には念を入れて。

「もしそれでもオレ達を管理とか抜かして、平穩を乱すなら覚悟しろ
——徹底的に滅ぼしてやるよ青二才」

「ッ……………」

凄まじい殺気を当てると完全に強ばった顔になる。周りに緊張がはしる。魔法少女達は慣れてるのかモノとは言わないし、千香なんてカメラを拭きながら、口笛を吹いていた。

殺気を収めてから、オレ達は部屋から出ていった。

(リンデイスイデ)

一瞬…………ほんの一瞬だけ殺された幻覚を見た。血も出さない死体へと成り下がる自分や、最愛の息子の姿が目には浮かんでしまった。

息が詰まるところだった。

あんな殺気を持つ子どもがいるなんて信じられない。どうすればあんな目ができる？

…………あの目は人を簡単に切り捨てる冷たい目だ。

「はあ…………はあ…………」

「クロノ、部屋に戻って休みなさい」

「わ、わかり……………ました……………」

さすがのクロノもキツいか。唯一震えながらも正気だったのはなのはさんと草太くんだけだった。

何度かそういう経験があるのかしら。ならば協力を申請しよう。

もしかすると敵と神威くんが組むという最悪な未来が起こるかもしれない。管理局…………ううん、それだけでなく全ての次元世界に敵をまわす可能性がある。

あれは火薬だ。刺激を与えれば周りも関係なく爆発する。ヘタに刺激すれば待つのは——死だ。誰も救わない、誰も助からないという最悪の結末を迎えることだってありえる。

(静観……いえ、管理局には知らせない方がいいわ。ロストロギア級の兵器を持つ者達を彼らが何をするかわかったものではないわ……)
私はそんなことを考えながら、事件の解決策を考えるのだった。

「あ、忘れてた。ジュエルシードを返した代わりにシュークリーム代の一万五千円を立て替えてください」

帰ってきた神威くんのその一言で全員がズッコけたのは言うまでもない。

(??side)

生田ミカは自宅に帰り、部屋に入った。そして大きなクマさんのぬいぐるみに拳を突き刺した。

(何様よ……あの落ちこぼれ!)

神威ソラ。気弱でダメダメだった少年。何もかもが無力で劣等した存在に生田ミカは愉悦感を満たすために、幼馴染みと一緒に絶望した顔に叩き落とした。

そして幼馴染みのマサキが屋上から落とすという暴挙にはやり過ぎ感があったが、所詮は底辺。死んだところで誰も悲しまないだろう

と思っていた。

しかし屋上から突き落とすことから彼は変わっていた。その後、マサキは家庭の事情で引越すこととなり、神威ソラを化け物だと彼女に忠告した。

どういふことかさっぱりだったが、マサキの取り巻きである少年達も彼を恐れるようになった。

いったいどうしたのかと聞くと思いに痛め付けられ、殺されかけたと言っていた。そんな馬鹿なと信じられなかった。

けれど嘘を言ってる雰囲気ではなかったし、何より神威ソラは誰かにも嫌われなくなっていた。

どういふことかさっぱりだったが彼女としては面白くなかった。落ちこぼれの男が成り上がることなど彼女には容認できなかった。

またマサキがいなくなってから彼女は周りから疎遠となっていた。マサキがいたから彼女は輝けていたが、彼がいなくなってから彼女の友人はいない。

だから一人ぼっちの孤独だった。そんなとき現れたのが天宮草太である。彼という王子様が現れてから彼女はまた輝けるようになった。

高町のような友達もでき、誰からにも避けられることなく、話しかけられるようになった。

天宮草太こそ、彼女にとつての救いのヒーローだった。だからそれよりも優れた存在など許さない。落ちこぼれはなおさらである。

(けど、あいつは並大抵じゃ敵わない。どうすれば……)

そんなとき「クスクス」と笑う少女の声が響いた。

『力がほしい?』

『誰!?!』

『誰だつていいでしょ? それよりもほしい? 力が。あの英雄を倒せる力が』

『ほしい……。あいつを、あいつを消し去れる力が……!』

『あら……。英雄を消せる力ねえ。それほどの力はないけど、そうねえ。私と契約しない? そうすればあの子を倒せる力をあげるわ』

「する！ だから……さっさと寄越しなさい！」

その刹那、生田の部屋は溢れんばかりの黒い光に包まれ、左の甲に呪印が刻まれた。

彼女は闇に呑み込まれるもその顔に恐怖はない。

狂喜。

狂喜。

狂喜。

狂喜。

愉悦の呑み込まれ、彼女という存在は闇がおさまったとき消えた。

そして、その日を境にして生田ミカという少女が行方不明となる

……。

第十二話 ニヤン吉は裏切った

ややじめじめし始める季節。梅雨が近づき、雨が多い日が多くなった。

蒸し暑さのある毎日に、まどか達は薄着に衣かえし、素肌を出す制服を着ていた。

まあ仕方ない。暑いから仕方ない。そんなある日、オレは図書館にて意外な再会を果たす。

そう、ハヤタくんだ。

「はやてやって！　なんでそないな貧乏執事と同じ間違いされるねん！」

「それが我が友だ」

「別名ソラクくんクオリティ。イエーイ！」

「威張るな調子にのんなや！」

ツッコむはやて（※覚えた）だが職員に注意されてううと肩を狭くする。

そりや、うるさかったしなあ。

「私のせいちゃうのに……」

「まあまあどんまいハヤタくん」

「ちやうって言うてるやろ！」

「静かにしろはやて」

「ムキイイイイ！」

ヒステリック気味なはやては衛に車椅子を押され、どこかへ運ばれた。やれやれ、これで静かになったな。

まあはやてのことはさておき、オレは猫の本を探す。

いや一ヶ月前、猫をまどかが拾ったんだ。その猫はなんと魔力で生きてる生物らしく、喋れるというすごい猫である。

まどかとほむらは猫を飼っていたわけなので、ペットとしてかわいがられているのだが、オレはそんな猫が微妙な気配がした。

なんというか、生きてるような死んでるようなそんなジレンマがあ

る感じ。

元々そういう猫なのかわからないがとりあえず、オレは猫の生態系、もしくは猫の妖怪などを調べることにした。

最初に言っておくが霊的な存在は重要だ。この世界に霊的なモノがいるかどうかわからないが、かつての世界ではそういう霊的な存在が黒幕だったりもある。要するにオレは猫の『ニャン吉』が何者なのか気になったのだ。

猫又なのか、もしくは新種の妖怪なのか判断するために……。

オレが次々に本を開き、そして閉じての繰り返しをした一時間後、一人の少年が近づいてきた。

髪は黒髪だが、瞳は金色。異国のハーフなのだろうかやや鼻が高い。極めつけに彼は顔が整っている。将来はモテモテだろうかと思っていると彼は口を開いた。

「あの、その本を読みませんでしたら、その……」

「あ、ワリイ。待たせたな」

「いえいえ。……あの、お聞きしてよろしいですか？」

少年はオレと前に会いましたかと聞いてきた。いや彼と会ったことない。

だが、この少年からただならぬ何かを感じた。心が落ち着くというか、なつかしいと言うべきか。

「会ったことないな。新手のナンパを男にするのか？」

「し、しししませんよ！　なんでナンパなんですか!？」

「その質問が女性にナンパする手口だからさ。ま、次回から気を付けろ」

「あう……まさかノエル姉ちゃんに騙されるなんて」

………気のせいだろうか。ノエルと聞けば千香の師匠だと思いついた。

いやあり得ないな。そもそもあの究極生命体がこんな穏やかな世界を訪れるはずもない。訪れたとしてもすぐに世界大戦とか起こして、兵士達にメイド服を着せて出兵させてるはずだ。

第一次メイド大戦で町が戦火に吞まれるはずである。

「あ、申し遅れました。俺は五木雷斗です」

「神威ソラだ。敬語はいらないぞ。オレはまだ九歳だし」

「あ。じゃあ言葉に甘えて。神威は猫が好きなのか？」

「いや、知り合いに頼まれて調べていただけさ」

「へえ。俺のところにも猫好きがいるぞ。……スツゲー金持ちの」

「ブルジョアか。でもモフモフできるからいいだろ」

「うん」

そんな雑談を数分してからオレと雷斗は会話をやめて、別れた。また会えるといいなと彼は思っているのか、別れ際に口角が緩んでいたな。

そんなこんなで家に帰る途中、何やら視線を感じた。誰かがつけているのだろうか。

まあすぐに振り切って帰ったからもう安心だろう。

それこそが油断とは気づかずに。

曇天の空。今日はあまり出掛けたくない日である。

だが、今日は新発売のお菓子があるのでスーパーに行くことにした。

「こんにちわ」

ところがどっこい。扉を開けると、金髪少女が玄関前にいた。名前は確か、フェイトだっけ？

というかいつの間にもオレの家を調べた。そう聞くと彼女は、

「アルフの嗅覚です」

「どんなもんだい」

犬を使ったか。なんてこったい。まさか敵かもしれない知れないヤツに拠点知られるなんて。

「一緒に来てくれませんか？ お母さんがあなたにお話が」

オレはそのまま扉を閉めよう——

「なにスルーしてんだい！」

「離せ！ ただでさえ管理局という労働基準を無視した鬼畜組織にバレたつてのにこれ以上面倒事はノーサンキュー！」

「グググググッ！」

ギギギギと力と力のぶつかり合い。この勝負引けば負ける！

負けてたまるかアアアア！！

「なにしてんの？」

さやかが現れた。ソラは協力を求めた。彼女は目を光らせて、

「面白そう！」

スカウト成功！ すると金髪少女まで参加してきた。

ぐっ、ならば——いでよ杏子たん！

召喚術でリビングにいる杏子を召喚した。まあただの転移だけだね。

「おっ、なんかおもしろいことしてんじゃん！ 負けるなよさやか、ソ

ラ！」

「わかってるわよ！」

「おう！」

オレ達神器使いの友情パワーで徐々に閉まる扉。どうだ参ったか！！

「くっ、このままじゃ……！」

「誰か……誰か……助けて！」

フツ、甘いな。そう簡単に天は彼女を——

「諦めないでフェイト！」

——見放さないかい!?

なんかナースキャップを被った女性が助っ人にきた!?

「えっ？ リニス……え、あれ？」

「前を向きなさいフェイト！ これを逃したら機会はありませんよ！？」

「はっ、そうだね！ わかった。がんばってみる！」
「その意気です！」

徐々に閉まっていった扉が再び開け始めた。魔力感知して見ればこの女性はまどかが飼っていたニャン吉だった。

人間の姿になれるとは聞いてない！

「おのれニャン吉。裏切るか！」

「私は元からフェイトの味方です！ あとその名前なんかヤです！」

「なんだと？ オレのお気に入りの名前だぞ？ メスオスにも付けられるお得な名前だぞ!？」

「だからってニャン吉はないでしょ、ニャン吉は！ これからはリニスと呼んでくださいソラ！」

「嫌だ！ ニャン吉はニャン吉だ！ こうなったらこれが閉まればニャン吉！ 開ければリニスって呼ぶことを賭けた勝負じゃアアアアア！」

「望むところです！」

！
綱引きもといドア引きが始まる。負けられない……………この戦い

「あれ？ なんか主旨が変わってない？」

「気にするなさやか！ あの猫の名前を賭けた一世一代の勝負だぞ。気を抜くな！」

「そうね！ わかった！ ちなみに本音は!!」

「アタシも実は気に入ってる名前なんだアアアアア！」

熱血要素を交えた勝負は白熱する。オレは、絶対、負けない！

「なにこの熱血展開」

「まどかさん、お茶できたわよ。あら、お客様？」

「うん、どうしようかコレ」

「そうね……………よし！ 殺っちゃって♪」

「オッケー！」

「最近のマミさんは私達に毒されてきたわね」

ピンク色の地獄がオレ達に降り注いだのが、この直後だった。マジで死ぬかと思った。

てか最近、容赦ないねマミさん。……なんかシビアです。

「ドアが壊れるでしょ」

「壊れましたよ、まどかのせいで」

「ティヒ♪」

「まどかさん、ドアを壊しちゃ駄目でしょ。めっ」

「いやマミさんが指示したことじゃん」

「私は殲滅して良いと命じたのはドアで争うあなた達のみよ。だから私は悪くないもん」

「うわ……完全に責任逃——なんでもないですよ。うん、マミさんはワルクナイデスヨ」

マスクットを肩間に押しつけられたので誤魔化すことにした。まどかに足をグリグリ踏まれたが。

オレ達は金髪少女の住居に来ていた。ラスボスのラストダンジョンっぽいのでさやかか宝物を探そうとしていたが、リニスに止められた。

「ニヤン吉って名前気に入ってたのになあ」

「諦めてください」

ここに来るまでフェイトとその犬になぜリニスがここにいるのか聞かれたので答えた。

なんでもまどかがさやかと出かけていたときに衰弱した彼女を発見。魔力の枯渇による衰弱だったので優しいまどかはそれを助ける。

しかしヤツはいたずらっ子だ。

魔力を与えすぎるといふことで、起きて早々魔力酔いをさせるという鬼畜所業を行って、しばらく寝込ませた。

「反省している……でも後悔してないよー！」

サムアップした彼女にヘッドバットしたことは悪いと思っていない。そのせいでリニスが記憶の半分を喪失したらしい。

まあその後、回復して喋る猫と判明したが、まさか記憶を取り戻したら、あら不思議。金髪少女の親族だったとは。

「あの……金髪少女じゃなくてフェイト・テスタロッサですよ」

「ごめん。オレは知り合い以外の金髪の女に私怨で名前を呼ばないことにしてんだ。諦めろ」

「ひどッー！」

そうは言ってもお前さんさつきからリニスの後ろに隠れて怯えた顔してんじやん。そのせいでオレのハートもダメージ有り。

くっ、これが呪われた身体の運命か!!

「厨二くさいからやめなさいバカ」

「容赦ないなーほむら」

「当たり前よ。……厨二に恥ずかしい目にあったことがあるのよ」

数あるループした世界のひとつのと言ってるだろうなあ。

ちなみにママさん。「ひどいわねその人」って言ってるけど、たぶんあなたのことを言ってるのだと思うから。

「そろそろです。準備はいいですか？」

とりニスに聞かれて、それぞれが答えた。

「OK。いつでも殺れるわよ」とほむらはグロッキー7を構え。

「先手必勝だね♪」と魔力矢を装填するまどか。

「ふっふっふっ、このさやかちゃんの実力を見せるときだね」とさやかもサーベルを構えていた。

「オイ、お前ら何と戦うつもりだ？」と唯一何も持たずに杏子はツッコんだ。この中で一番まともなのは杏子だった。

やる気ではなく、殺る気満々な彼女達を止める杏子は彼女達に武装するな、と言いつける。

あと千香なんか鼻の下を伸ばしてなに考えているんだ？
まあ手にある写真がロクなことじゃないって証明してるけど。

(プレシアシード)

フェイトを使つて神器使い達を招待することに成功した。

彼と彼女達の力があればアリシアが生き返るかもしれないという
希望的観測をもって招待したのだ。それが駄目でも他に方法を知つ
ているかもしれない。

神器使い。そう、彼女の話の聞けば彼らには不思議な力があるそう
だ。その力があればもしかすると私の願いが叶うかもしれない。管
理局とも交遊関係はないため、協力者になるかもしれない。

そんな期待を胸に私は顔をあげる。扉が開いたからだ。
やっときたようだ。私はそこで見たのは――

「みんなお姉さん、友江ママ！」

「元気百倍、正義の味方！ 友江さやか！」

「じよ、情熱少女……友江きよ、杏子……」

「天使な笑顔であなたを魅了、朱美まどか！」

「シスコンで何が悪い？ クールビューティ朱美ほむら参上」

「五人！」(ママとさやか)

「揃って！」(まどかとほむらと杏子)

「ピュエラ・マギ・ホーリー・クインテット!!」(全員)

……………何を言えいいのかしら……………

五人の少女がそれぞれ衣装を着てポーズをとっていた。どこかの
テレビに出そうな女の子向けの戦隊ヒーローのように。

あ、そういえば、昔アリシアもテレビでよく見ていたわね。確か、
プリプリでキュアキュアな少女戦隊を。

「リアクションが薄い!？」

「くっ、何が悪かったのかしら……」

青髪少女と金髪ドリル少女は悔しがり、

「は、恥ずかしいわ……」

「よくがんばったよほむら。アタシがアンタを褒めてやるから泣くな。ていうかアタシが泣きたい」

「涙目なほむらちゃん………スゴく萌える!!」

羞恥に苦しむ赤と黒の少女。それを見て鼻息を荒くする桃色の少女。

うん………何このカオス。責任者呼んでよ。……いないと思うけど。

「恐らく萌え萌えパワーが足りぬからじゃ」

「「は、博士!」「」」

「いや博士って誰だよ。っーか千香かよ」

博士と名乗る白衣を着て、ちよび髭つけた少女に赤い少女はツッコむ。

そんな博士の傍らには死んだ目をした犬耳をつけた少年がいた。哀れ見えたのは気のせいではない。

「ポチ、例のモノを」

「わかったワン。……お前後で覚悟してろよゴラ」

ポチは最後に物騒なことを言いながらカバンからジュエルシールドを………つて!

「なぜジュエルシールドがここにあるのよ!」

「ちよつと深海から一つとつて来ました!」

「さりげなくすごいこと言ったわね! な、何に使うつもりなの!?!」

「ふっふっふっ………聞きたいかい? その紫ガール」

寒気がはしる。嫌な予感がして一歩下がる。

「喜びたまえ紫ガール! このジュエルシールドを使い、今日からピュエラ・マギ・ホーリー・クインテット一員となるのだ!」

とんでもなく恐ろしいことを言い出したよこの子ったら!

「グフフフ………熟女のコスプレは一部のマニアでは高額品。そしてその一人である私にはご褒美!」

※ここから先は本人の矜持のためにカットします

第十三話 英雄と魔女

痛みがあった。

悲しみがあつた。

オレ達が歩む道は誰もが悲しみ苦しんだ。それでも生きようと思つたのは、そんな人生でも楽しみや嬉しさがあつたからだ。

青年の頃——十四歳の頃ではそういうことが少なくなったけど、友達ができ、喧嘩し合つて、そして馬鹿やって笑い合つた。

……もうそういう友達はいない。みんな死んだり、どこかへ別れて旅立つた。

アルスもその中の一人だ。初恋の人——幼馴染みの女性に裏切られる悲劇を迎えた。

悲しい結末がある——それは当たり前のことなんだ。

何が言いたいかつて？ それは目の前で泣いてるフェイトの母親が原因である。

「汚された……汚されちゃったよう……アリシア……」

おばさんのコスプレ劇場が終わり、千香はホクホクと満足した表情をしていた。

プレシアさん、三角座りでマジ泣きしているし、カオスな現場になつてしまったのでオレは流れを変えるために口を開いた。

「いい加減に立ち直つてください露出女」

「あなた達、私をそんなにいじめて楽しいの!？」

涙目でなぜか怒られたし。解せぬ。

「んで、オレ達になんの用か説明してくれ。さもなければこの写真を管理局に送りつける」

「やめて！ ホントお願い！」

さすがにこの写真をばらまかれたくないので、プレシアさんは金髪少女を部屋に戻してから話を始めた。

大切な娘を蘇らせるためにクローン造って、ジュエルシードを集めてアルハザードに行こうとしていたが、オレ達の力を知り、娘を蘇らせる神器はないか聞いてきた。

「可能と言えば可能だ。だけどたぶん無理だ」

「どうしてよ!?!」

納得してないプレシアさんにオレは説明することにした。

「この世界——いやこのことは全く歴史が異なる世界があるのはわかるか?」

「次元世界ってこと?」

「違うとは言えないが更にワンランク上の話になる。まあ端的に言えば、この世界を一つの物語だとする。ほら、本の話は一つ一つ話の流れが違うだろ? オレが言う異世界——つまり例えを出すと一つ一つの物語の世界となる」

そう、そしてそれぞれの世界にはそれぞれのルールが存在する。

人を生き返らせる、過去を改変するなど理を覆すものを禁止したり、容認したりする世界があるがルール通りではないもしくは、反則を行えば、それを阻止する力が発動する。

その名前は『抑止の存在』。審判、世界の断罪者である。

かつてワルプルギスの夜を倒した後、救済の魔女が現れたように、世界がそれを認めないとそいつは現れ、断罪する。

それは本当にあるとオレの師匠から後から教えられた。

「そんな……じゃあアリシアは……」

「絶望することはないさ。これは仕方ないことだから」

あのとオレは神器の力を使って戦ったから『抑止の存在』が動いた。ほむら達と一緒に挑んだがあれは絶対に勝てない相手だ。

負けるのは仕方ない。

勝てるとしたらまどかのような大量の因果を持ったルール通りの願いかほむらの理を反逆の力のみ。

もうほむらには反逆の力はないが。

絶望したこの人をオレはあまりに不憫にあることを教えることをした。

「まあ、あくまで神器による蘇生は無理って話だけど」
「えっ？」

「神器はこの世界のルールでは反則だがアルハザードの技術は反則じゃないつまり蘇生することはできるはずだ」

この世界のルールに乗っ取ったの蘇生は問題ない。つまりアルハザードに死者を蘇生させる技術があれば蘇ると思う。まあ蘇生そのものが反則なら不可能だが。

それにアルハザードに行ける事態はオレの神器全てを開く者を使えば可能かもしれない。

だけどオレはあえて教えないことにした。

喜びに声をあげているプレシアを見ると、まどかが肩をつつく。気づいているのだろう。

「どうして？ ジュエルシードを使わなくてもソラクんの神器なら」

「……まずプレシアが言ってる場所があるとは限らない。リニスから聞いた話じゃ、おとぎ話とも言われてるしな」

いくら異世界と言えど、空想の世界は無理だ。前にさやかに『青い狸の世界に行きたい』って頼まれたが神器は応えてくれなかったし。

「それに……」

「それに？」

これがオレが一番で、プレシアに対して快く思わない理由。

「気に入らないから」

どこまでも平坦な答えだ。しかしオレにとってプレシアの理想は気に入らない。

死人を蘇らせる？

ふざけてるとしか言いようがない絵空事だ。ご都合主義は本の中の話で充分だ。

たとえ死ということを否定することができたとしても、生き返った
そいつは普通からすれば化け物に変わらない。

それにフェイト・テスタロッサを娘と見ず、道具としか見てない彼
女の目にムカついた。

少しだけ自覚しているみたいが、完全と少しでは月とスッポンくら
いの差がある。

過去にとらわれ、今を大事にしない人間が未来を、幸せを掴めない。
絵空事ばかり見る人間に、オレは快く手を貸さない。

「ひどいか？」

「……ううん。ソラくんは怒りはもつともだしね」

かつてオレ達は精一杯生きていた。ほむらなんかは簡単に大切な
人が死んでいる光景を目の当たりしてる。

だから気に入らない。気に入らないから教えてやらない。ご都合
主義を信じてるこの女に助けることを。

オレは聖人君子でもヒーローじゃない。ヒーローという絵空事に
はなれないし、なりたくもない。

まどかは無言でオレの手を握り、オレはそれを握り返すのだった。

プレシアのジュエルシード集めはリニスに頼まれる形で協力する
ことになった。あくまで友人というためで、ジュエルシードが集まっ
たらおさらばする予定だ。

「リニスは残るんだな」

「はい。私の大事な家族ですから」

そう言ってオレ達に別れを告げて、時の庭園に残ってプレシアのお
世話をする事になった。少し寂しいが彼女の意思を尊重したくて
何も言えなかった。

それからオレと千香は海の上にいた。天気は曇天で雨が降りそう
だ。時間をかければここも危なくなる。

オレと千香はフィールド魔法『エアロフィールド』という空気の板

を使って空中に立っているだけだ。

ホントは空に飛びたいが、オレは空中に飛ぶ魔法が苦手だし、千香も陸上でしか戦えない。

「そういえば海から拝借したってことは残りも海にあるのか？」

「そうだね。たまたま潜って見つけたんだよ」

「いや潜るって海底までよく息が続いたな……」

「変態に不可能はない！」

「んなわけあるか」

「バレた？ いやー神器の力でちよつとね」

大方守る力で酸素ボンベを作って潜ったのだろう。オレと千香は魔法を使って、海の上空で金髪少女が魔法を撃つのを待っていた。

残りのメンバーは時の庭園で優雅にお茶をとって歓声するとか言ってたな。

ちくせう、まさかジャンケン負けた上に千香と組むことになるなんて。

「こんな美少女と一緒にいるのに何が不満なの？」

「ぬかせ変態。お前が美少女だったらカエルは美女だ」

「それひどくない!? あ、でもなんかジュンときた。もっかい言つて！」

「この……変態！」

「ハアハア……いいわ。もっと罵ってちょうだいな！」

「もうやめて。ソラくんのライフはもうゼロよ……」

こいつの変態性が増す中、金髪少女がジュエルシード強制発動成功。んで合体して水龍が出現。

オイ、龍が出現って、初っぱなからハードじゃねえかい。

「でも倒せない……ってことはないでしょ？ 化け物殺しの英雄さん♪」

「そだな。んじやとつと終わらせるか。いつも通り」

オレ達は神器を召喚し、水龍に向けて言った。

変わらない宣言。

変わらない言葉。

戦場で全てを滅す誓いと決意のある言葉。

「精一杯生きただろ？」

「悔いはないでしょ？」

「ならば、安心してとつと死ね」

物騒？　これがオレ達二人の戦場の頃に言ってた決めセリフだけ

ど、何か？

そんなことを考えながら水龍へ突貫した。

第十四話 ジュエルシード戦

高ぶる心。それはオレが体験してきたものばかりの感情だ。戦いになるといつも心を燃やす。敵意を向ける。神器を握る手を強くする。

水龍は龍らしくない触手を出して、オレ達に攻撃してきた。ニューンではなく、ブボツと空気が破裂するくらいの音を出して伸びてきた。

オレは神器全てを開く者で切り裂き、千香は盾を使って、防ぐ。早い。特に伸縮する触手の早さはスゴい。

オレは『エアロフィールド』を増やしながら、水龍に近づく際に、フェイトとその犬に言った。

「んじゃ、金髪少女とその犬。さっさとそいつ離れてろ。お前魔力がなくなっているだろ」

「犬じゃなくて狼だっ!」

「まだいけます!」

「うーん、でもやめておいた方がいいよ? ソラに巻き込まれたくなかったら……ね」

千香の声色は冷たく金髪少女に向かって言い放つ。ここから先はオレの動きは早くなる。

足場を使った機動力をもって飛び回るため、周りに気にしていられなくなるためチームプレイはできない。だから千香も参加せずに遠方からサポートすることを決めたのだ。

金髪少女ことフェイトは納得できなそうな顔になったが、大人しく千香の隣にいた。

それでいい。足場を蹴り、オレは水龍に向かって斬り込む。スパツと身体を斬られ、龍は激昂の雄叫びをあげた。

『ギャアオオオオ!!』

咆哮をあげ、オレに食らいつこうとする。それを右へ回避し、龍の左斜め下の足場に着地し、また跳躍する。

また斬り込もうとすると、水龍の身体にできた大きな切り傷は水音を立てて、再生されたところを見た。

「再生機能があるのか？」

「それじゃ、ボクが動きを止めて『閉じちゃって』よソラー！」

千香はそう言つて半透明の檻を造り出した。オレは剣先を水龍に向け、封印する。黒い光線が水龍に直撃した後再び、接近した「くらえー！」

斬撃でその身体を切り裂く。プシャアと水しぶきをあげた。そして水龍は再生させようとするが、再生が発動はしなかった。

龍の能力を閉じて封印した。解除したきやオレの解錠の波動を受けないならぬ。ま、解除する気ささらさないが。

オレは神器を首に向かつてブーメランのように投げつけた。水龍の首は跳ね飛び、光の粒子を出しながらジュエルシードへと変化した。

「二丁あがりー！」

オレは帰ってきた神器を受け取りながらそう言った。千香は一息をついて近づいた。

「やった？」

「いんや……まだだ」

オレが否定した直後、ジュエルシードは今度は数本の竜巻へと変えた。

第二形態つてヤツか？ バラバラに分かれるなんて予想外だ。

「フェイトに伝えてくれ。早急に手伝つてくれってな」

本当の戦いはこれからだ。相手は自然災害。油断すればバラバラだな、こりや。

(フェイトside)

彼の実力は圧倒的だった。水龍をものの数分で、自分が無傷で仕留

めた。

すごい……これが神器使い。

反則クラスの能力とその身体スペック。私やアルフが束になっても勝てない相手。

私は最初に彼と出会ったときに感じたのは忌避だ。

生理的というか、本能的に彼が近づきたくなかった。怖かったからだ。

——畏怖

尊敬と恐怖が混じった感情だった。

怖い、恐い、コワイ。けど、味方であれば頼もしい。自分なんかと一緒に戦っていい存在ではない。

「おーい、お嬢ちゃん手伝ってー！」

彼の相棒がそう言って私を呼んだ。ジュエルシードは今度は竜巻に変わったようだ。

「いくよ、アルフ」

「はいよ!!」

私はその手伝いに向かい、竜巻と立ち向かう。

身体は魔力の枯渇でまだダルい……けどお母さんのため!

「無駄無駄無駄無駄アアアアア! 今のあたしは痛みに喜びを覚えた雌犬! こんな攻撃屁でもないね! ハアハア………ていうかむしろもつと来いやアアアアア!」

「アルフが……私のアルフが知らないナニカに目覚めてしまった……」

ほら、神威が顔をひきつらせて同情的な目で私を見てるよ。

かつてまともだった面影のない使い魔を見て、私は天ヶ瀬千香を怨みを込めた目で睨むのだった。

(ソラside)

「同士が増えた！ 万歳！」

「よし死ぬ」

千香を竜巻に向けて蹴り飛ばした。「あばばばばば!」と電撃を受けたような声をあげながら、竜巻に耐えていた。

そのとき聞こえた艶声と荒い息は聞かなかったことにしたい。

「ヤベーそのうちユーノ少年も目覚めてはなからうか……」

未来ある少年を修羅の道引き込んだかもしれない元凶は自身を巻き込んだ竜巻を一つ倒していた。

アルフという犬もなんかダメーஜ負いながらも、魔力弾で竜巻を一つ消しているし。

あいつら不死身じゃね？ というか変態属性って無敵？

変態最強説が浮上する中、何やら空から誰かが降ってきた。

「時空管理局だ！」

「フェイトちゃん無事!?!」

「神威、なぜお前がここに!?!」

「おのれ、アルフ！ 自分だけご褒美もらってるんだ!?!」

「ユーノ（くん）!?!」

「彼は元からこうだったのかい?」

違うと思う。つーか、ユーノ少年、もう手遅れだったのかい。

金髪少女はなんか飼い主見つけた犬のごとく涙目ながらの顔を明るくしていたし、そんなに普通の友達ほしかったの?!

すると、オリ主くんが状況を聞いてきたので答えてあげた。

「ありのままに言えば、プレシアさんに脅されて協力中。イコールフェイトという金髪少女の味方になった。そしてアルフとユーノを目覚めさせたあの変態はまた生身で竜巻に突っ込んだ模様」

「なんだこのカオス展開!?! 原作にはなかったはずだろ!?!」

「いや原作ってなんぞ? この小説はノリとカオスと変態でできてるギャグ有りシリアス少々ある作品だぞ」

「メタい発言禁止なの!」

原作主人公にツッコまれたでござる。もう……お嫁にいけない。「ボクがもらってあげる!」

「だが断る。変態属性抜けたら、考えてやる」

「解せぬ。変態の何が悪い」

いや心労の五割はお前だから。ちなみに残りはキチガイ姉妹である。誰か助けてマジで。

「とにかくとつと封印するか」

オレは竜巻に向けて封印光線を放つ。いやネーミングセンスのはわかるよ？ でも『封印』だけじゃ空しいし、わかりにくいじゃん。だから今命名したこの光線を撃った。

するとあら不思議。封印されたジュエルシードが浮いてるではありませんか。

「さて残りは——って終わっとる」

そりやそうか。高町や金髪少女のような高魔力保持者やクロノ少年やオリ主くんのような経験豊かな人材。

そして認めたくないが変態三人衆の活躍である。

あの三人の属性って変態であるデメリットがある代わりに最強がついてるではなからうかホント。

「友達になりたいんだ、私。フェイトちゃんともっとお話したい。もっと仲良くなりたいたいんだ！」

「なのは……さん」

なんかドラマが始まってると。まどかとはむら辺りが画面に釘づけにしているだろうなあ。

と香気に見てたらいつの間にか後ろから剣を向けられてた。オリ主くん、空気読めよ。

「動くな。お前にまだ聞きたいことがある」

「いや空気読めよ。あそこでドラマ始まってるとだから鑑賞させろよ」

「知るか。どうしてお前が『まどかマジカ』のキャラと一緒にいる？なぜプレシアに協力する？」

「答えを出すならあいつらは前世の友達で、プレシアさんは期間限定のアルハザードへ行きのジュエルシード集めに無理矢理協力させられた歪な関係。理由はそれを断るとなんかうるさそうだったから」

「そんなこと信じられるか！」

「いやー事実なんだけど……。お？ まどか、どうした？ えっ？」
空から落雷注意ってなんだ？

ってプレシアが紫の落雷を金髪少女に当てちゃった！

「ひどい……。それでも親か」と言いたいが「どうせ親じゃないもん、娘クローンだもん」とか言いそうだ。

プレシアマジパネエ……………。

「ズルいよフェイト！」

「プレシアさんこちらもバッチこい！」

彼と彼女の発言を聞かなかったことにしたい。これ以上犠牲者が
出ないことを祈ろう。

「な、なんてこと——ぐは！」

「隙ありません」

オレはオリ主くんを殴り飛ばし、浮いてるジュエルシードに向か
う。千香も同様に行動する。しかし、クロノ少年も行動してきた。

そしてそれぞれが何かを掴んで、通り過ぎた。

「チツ、半分しか取れなかったか」

「そう易々は取らせないさ」

不敵に笑うクロノ少年も半分か……………あれ？

んじやあ千香は何を掴んだんだ？

あいつもなんか取ったみたいだし。

「美少年のパンティーゲットだぜ！」

「ブツ！」

バーンと千香が出したのは、ヒラヒラ揺れるトランクスタイルのパ
ンティー。

さすが変態。求めるものが違う。

「……………ノーパン少年、今すぐに残りのジュエルシードを渡せ」

「誰がノーパンだ！ というどうやってとった！ 僕はズボンだぞ
!？」

「変態に不可能は……………ない！」

「なんだそれ!？」

「座右の銘みたいなもんだ。諦めてジュエルシード渡せノーパン野

郎

「ただの変態じゃないかそれ！」

「同士が増えた!!」

「仲間に入れるな！」

やはりこの展開は避けられない。

なんでだろ。こいつがいるとシリアスが続かないや。

「次のターゲット……………君に決めた！」

「私!？」

ポケットな主人公よろしくとばかりに、高町さんがロックオンされた。千香は邪悪でゲスい笑みを浮かべる。

「ふっふっふっ、小学生の生パンは最高級のご褒美よ……………グへへへへ」

「誰かこいつ止めて……………杏子さんヘルプー」

「あ、ちなみにその次はソラだから！」

ブルータスお前もか。カエサルさんと同じくと味方に裏切られた気持である。

オレがロックオンされてしまった。こうなったら是が是非でも高町に逃げ切ってもらわなければオレの下着と貞操が危ない。

千香が動きだそうとしたとき、足元から魔法陣が展開された。金髪少女やアルフからにもだ。

これって転移魔法？

「チッククショオオオオオ！ 目の前に、目の前にお宝があるのにイイイイ！」

邪神は消えた。悪は去ったのだ。いやさすがに見てられないよなアレは…………。

そんなこと考えているとクロノ少年とオリ主くんがこちらを見て何か言いたそうだった。

ふむ……………何か言つてやるか。

「あ、どうでもいいけど高町の体重増えてたって千香が言ってた」

「ノオオオオオオオオオオ!？」

悪役らしくないって？

あいにくオレは悪役でもなければ正義の味方じゃないもので。

最後に見た高町の狼狽とオリ主くんの啞然とした顔は面白かった。ただしユーノとアルフ。未だにプレシアさんのお仕置きに興奮してるお前はもうダメだ。そう思う今日だった。

(??side)

闇。何もない黒い空間があった。天や大地の概念がないのか、その空間にはどんなところにも足場がある。

そんな空間に生田ミカはいた。彼女が目に向けるのはテレビ画面だ。アナログテレビをつけて、外の様子を見ていたのだ。

(忌々しい……。ムカつく……。！)

「クスクス、苛立ってるわね」

ミカの隣に現れたのは人型の形をした黒い塊だった。口振りからすれば、女性だと窺える。

「……アンタ、ホントにあの猫が役に立つの？」

「立つわ。なんせ、あの女にとって深い関わりがあるしね」

「……まあいいわ。私は神威が死ねばそれでいい。主人公は草太以外認めない」

ミカの目はもはやかつてのような輝きはない。憎しみに染まった憎悪の眼差しに、黒い塊は「クスクス」と笑う。

(にしても、こいつも簡単に思惑通りに動いてくれるなんてね……)

彼女の口が三日月描き、笑う。

(誰も、渡さない。私の恋は、私の想いは渡さないわよ……。？ ねえ、まどか)

ナニカは笑う。

ナニカは喜ぶ。

ナニカは楽しむ。

そいつはソラと千香にとって、魔法少女達にとって、因縁のある敵
だった。

第十五話 魔女の結末と裏切り

戦いを終えて、高町にちよつとした復讐を終えたオレは『時の庭園』に帰ってきた。そのとき、まどか、ほむら、マミさん、杏子が出迎えてくれた。

「ただいま」

「お帰りー。めちやくちや楽しめた余興だったよ。だがしかしこのまどかちゃんの前では所詮は余興。さあ、本番を始めよう………ベツドで！」

「いい加減にしろ」

まどかをチョップで止める。ほぼ停車なしの特急並みの暴走している今日この頃な彼女に思わず嘆息を吐く。

ちなみにほむらが文句言いそうだったので、偶然もつてたチーカマを口に突っ込んでふさいだ。

もぐもぐと小動物のごとく食っているのがちよつと癒された。

「強引！ ソラくんったら男らしくなっちゃって。お姉ちゃん、寂しさと嬉しさとで複雑だわ」

「これは強引と言うべきかなあ……」

「なににせよお疲れ様」

杏子に癒される日が来るとは。なんかちよつと複雑である。

それよりも金髪少女ことフェイトはどうなったか気になった。

「それでフェイトな金髪少女？」

「いやフェイトでいいだろ。なんか母親にお仕置きされてる。………胸くそ悪くなることだがな」

ま。家族のために奇跡を願ったこいつからしたらプレシアさんのしていることは許されないことではない。

かと言ってオレ達が言ったところで何も変わらないが。

プレシアさん狂ってるし、止まらないだろ。

「それでアルフは？ あいつは黙ってるはずないだろ」

「ソラの言う通り代わりに鞭を受けてただけど、途中から悦び始め

て、終いにはプレシアにもっと強くと懇願してきた」

.....

「いい加減にウザくなつたからどっかに転移させたけど、帰ってきてまた転移の繰り返し。そして、キレイなプレシアの最大電撃で高らかな艶声と共に転移していった。……まだ知り合つたばかりだけど、あそこまでドン引きしたあの顔は初めてみた」

「うん、言わせてもらおうよ。どんだけ千香に染まつてるんだよあいつ!？」

「つーか末期どころか進化してないか!? 悪化してる！」

「さすが変態。レベルが桁違いだ……。」

「それでこれからどうすんだ？」

「管理局と敵対しちゃったんだけどほんとどうしよか……」

「よくもやってくれたわねと言いたいわ全く」

「ほむらが呆れた半目で睨む。うっ、そんな目で見つめられると――

「興奮しちゃう！」

「よし黙れ千香」

「おふん?」

腹部に裏拳が直撃が悶絶する千香。苦しそうなうめき声と興奮した荒い息が聞こえたりする。

相変わらずなオレ達である。

さて時間は進んで、オレ達はビルが並ぶ都市にいた。そこは結界が展開されており、やや現実とは色が違う世界となっていた。そんなところで空中で金色と桜色の魔力がぶつかっていた。

フェイトと高町が戦っているのだ。魔法と魔法のぶつかり合いにより、魔力の色が花びらが散るように舞っていた。

アルフが管理局に寝返ったので、この戦いが勃発した。ちなみにそのときオレ達はクロノ少年率いる小隊に囲まれ、事情聴取を受けていた。

「それで君達は人質をとられて協力させられていたのだな」

「……はい、嫌がる私にソラくんが無理矢理」

「あらぬこと言うな、まどかさん」

「という願望があったり……ティヒ♪」

「昔のまどかが恋しい今日この頃」

いろいろハツチャけたキャラになってしまった。『円環の理』のとき統合したまどかをチョビつと怨むよ。特にぶつ飛んだまどかよ。

ちなみに罪を全てプレシアさんに擦り付けた。うむうむ、安泰である。

「ちよつとひどくない？」

「罪悪感あるわね……」

さやかとマミさんはどこか納得できてなさそうな表情だったが、これしか時空管理局から逃れる手はない。

まあ無理矢理引き込もうものなら、皆殺しだが。

「おお……なんか無数の魔力弾を茶髪の少女に当てたぞ」

杏子の言う通り金髪少女が高町に最強クラスの魔法をぶち当てた。鬼だな。ていうか無事だった高町も高町だが。

「うわっスッゲー。マミの『ティロ・ファイナーレ』より大きな砲撃を撃つぞあいつ」

「あんなの防ぎきれないわねえ……」

淡々と語るマミさんと杏子よ、それよりえげつない魔法があるピンクの悪魔をお忘れではないか？

「これが私の全力全開——の八つ当たり!! 体重を友達の前で暴露された乙女の怒り!」

八つ当たりって言ったぞあいつ。思いきり私怨だなオイ。

だんだんと集まるピンクの元気玉が金髪少女に向けられる。

「『スターライト・ブレイカアアアアアアアアアア!!』」

高町の全力全開という名の滅びの一撃が金髪少女を呑み込んだ。

あれは防御するより回避する方が得策だが、バインドという拘束魔法で動けなかったようだ。

金髪少女にトラウマが残らないことを祈ろう。アーメン……。

「ハアハア……いいなあフェイト……!」

「なのは、次は僕にカモンツ!」

変態二匹は高町に向かってそう言った。顔を引きつつてるぞ、あいつ。

そしてアルフ……せめて心配しろよフェイトを。海にプカプカ浮かんでいから助けてやれよ……。

まあなんにせよ。これで戦いは終わり———と思われたが紫の雷によりジュエルシールドが奪われた。

抜け目ないねプレシアさん。オレ達はもう協力しないけど。

☆☆☆

そんなこんなで、呑気に観戦してたら、アースラに隔離されてしまった。そりやそうか。こんだけ引っかけ回したら、信用されないよなあ。

「とういうわけでリニスさん。プレシアさんなにしてるの?」

『局員を蹴散らしてフェイトに真実を打ち明けてしまいました。なんで………なんでこんなことを………』

「あークローンだったぜってこと? 大丈夫じゃね? オリ主くんが慰めているし」

『慰めているって……まさか!?!』

「そう……弱味につけこんであんなことやこんなことを!!」

『おのれ……許せません! 今すぐ鉄槌をオオオオ!!』

電話が切れて、オレはマミさんに用意された紅茶を一口飲む。

「よし、これであいつに修羅場フラグ立った!」

「なんてことしてんだよテメーは!!」

杏子にドロップキックされた。いと痛し。

「すばらしい、エクセレント。愉悦を楽しませるとはさすが私の嫁ソ

ラくんだね♪」

「誰が嫁だ。婿にしろ」

「いやツツコむとこ、そこなの!? あと、最近のまどかの黒さに親友であるさやかちゃんドン引きなんだけどー!」

さやかにまでツツコまれる。

最近まどかが黒いのはスタンダードだ。黒くした原因はほむらの影響だったりするけど。

「さてさて、どうする皆さん? 帰るか観戦するか?」と聞いた。以下がその答え。

「最後まで見届けるわ」(ほむら)

「私も」(マミさん)

「あたしも」(さやか)

「当然」(杏子)

「修羅場見たいし」(まどか)

「マイツチング予感がするから行く」(千香)

うむ、全員満場一致だな。最後のヤツはおかしな理由だけど。まあいいや。

オレは神器全てを開く者を召喚した。

何もないところから鍵穴が現れ、それに向けて、神器から一筋の光が差し込む。カチャリと何かが開く音と共に開いた扉が現れた。

『ドコでもドア』。

某タヌキが使っている秘密道具と同じ能力を持つ神器の力で作られたドアである。

「下手な転移より便利だよな。そのドコでもドアって」

「異世界にもいけるしね」

まあなんにせよ——オレ達はドアへ潜り抜けた。そこを抜けると崩壊し始めてる時の庭園であった。

なんかヤバいところ破壊したのか?

「お人形さんがいっぱいだね」

「壊れてたヤツがほとんどだけだな」

杏子とまどかの感想を耳に入れながらオレ達は奥へ進む。

奥の間にはプレシアさんと金髪少女が何かを言っていた。オリ主くんは……やっぱロボロボになって倒れていた。リニスが彼を踏んでガッツポーズをとっていた。

『YOU WIN』ってヤツがテロップに出てると思う。

シリアスとコメディが合わさったシユールな光景だなオイ。

「修羅場終わってたかー……残念」

「ま、いい気味だっと思える光景見るだけで良いじゃないかしら、まどか」

ドS姉妹通常運転である。すると、プレシアさんがジュエルシード六個を展開して、次元の狭間を展開する。

是が是非でもアルハザードに行くつもりか。

「そうは……させない！」

「きやつ」

リニスに踏まれてオリ主くんがリニスを払いのけ、ジュエルシードに魔法当てた。プ

レシアさんは達成感で油断していたのか、防御を張ることができなかつた。

「そんな……私の、私のジュエルシードが……」

射殺さんばかりとオリ主くんを睨むプレシアさん。それに対してオリ主くんは真剣な表情で言い出す。

「死んだ人間は生き返らないんだ。だからこそ、人は今を生きようとするんだ！ これ以上、フェイトを悲しませないでくれ！」

うん、正論だ。お前は正しい。認めるよ……それは。

だけどお前は勘違いしてる。その正論が通用するのは正気の間だけ。狂った人間には無意味さ。

何が言いたいって？ そりゃ簡単さ。

「私はアリシアを………そして失った時間を……。あんな人形なんかより………」

オリ主くんの言葉は狂人プレシアさんには通用しないってことさ。

もし、彼女にフェイトを娘のように愛する心が、過去を乗り越えれる強い意思があれば、通用していたはずだとオレは思う。

「けれど、彼女には届かない……そこにいるのは壊れた人間だから。やれやれ……気に入らないから協力するつもりはなかったが……」

オレは神器を召喚する。そしてリニスに近づく。

「リニス、プレシアさんの望みを叶えるべきと思うか？」

「思えません。……けれど、もう心も身体も限界なのですよ、あの人は」

「確か不治の病だっけ？ 悪い。オレ達の中にそれが使えるヤツはない」

「わかってました。だからこそ、お願いしていいですか？」

「……わかった。終わらせてくるよ」

「フェイトには私から言っておきますから心置きなく……」

リニスの言葉を聞き、オレはプレシアさんの前方に神器全てを開く者を向けた。鍵穴が開き、ドコでもドアが出現した。

「これは……」

「オレの神器の力で創ったアルハザード行きの扉さ。一応やってみて成功したけどもしかすると失敗してるかもしれない」

「ほんと!? じゃあ……じゃあアリシアは!」

「ただし、帰りのはない。片道切符の扉だ。ここに未練がなく、そして命を捨てる覚悟があるならその扉を開けろ」

「……っ。……」

「行くなプレシア! フェイトを残していいのか!」

プレシアさんはしばらく考え込む。オリ主くんは止めようと躍起になるが、千香がそれを止める。

まどかやほむらは高町を抑え込んでいる。

残ったメンバーはクロノ少年に対峙し、動かせない状況にした。フェイトはプレシアさんについて行こうとしたが、リニスに止められている。

これで邪魔する者はいない。彼女が選択する阻む障害はない。そして——扉のノブに触れた。

「……いくわ」

「いいのか？」

「元から後に引けない身だし、病で少ない命よ」

「……そうか」

やっぱり……そうだよな。

かつてオレは大切と思うが故に狂ってしまった一人の少女を知っていた。

彼女は相棒だったオレですら殺すくらい狂っていた。

——大切だからこそ、目の前のものばかりしか見てなかったから見失ってしまった。

まあ今じゃあドSで容赦ない女の子になっていたが。

プレシアさんがあの少女の姿と被って見えた。だからだろうか。なぜか最後には協力しなくなった。

「……ありがとう」

彼女はそう言って、アリシアが入ったポットと共に扉の中へ消えていった。そのとき見た顔はなぜか印象に残った。

☆☆☆

「なんであんなことをしたんだ！」

オリ主くんが責める声をあげた。まあ当然だな。オレのしたことは正しいことじゃないかもしれないしな。

「プレシアを逃がすようなことをして許されると思っているのか!？」

「逃がしたつもりはないし、どのみち助からないらしいじゃねえか。なら、彼女が最期にしたいことをさせたまでだ」

「だからってこんなことしたのか！ フェイトを一人にさせたのか。ふざけるなよ！」

……。

「彼女はフェイトと生きるべきだった！ なのにお前は彼女の下らない我が儘に協力した！ わかってるのか!？」

……今なつつた？

「下らない……だと。じゃあお前はアリシアを蘇らせることができたのか？ プレシアさんの狂気をどうにかできたのか？」

ふざける……ふざけるなよ。そんな甘いことでどうにかできた人じゃない。

「お前にあの人がどういう想いで過ごしてきたのかわかるのか？ ぽっかり空いた心の隙間をどうにかできたのか!？」

「そ、それは……!？」

「オレにはわかる。あの人はほむらと同じだ。もしあのとき、止めていたら、あのとき力があれば大切な人を失わずに済んだ。見失わずに済んだ後悔する彼女の気持ちが！ お前みたいな口ばかりの偽善者ごときが何をわかって下らない我が儘って言えた!？」

思わずこの偽善者を殴った。彼が床へ叩きつけられたとき、オレはさらに言葉を投げる。

「フェイトを人形って言われてたな。その通りだよ。プレシアさんにとってクローンはクローンだったんだよ。娘の代わりにならなかつたんだよ」

「お前……自分が言ってることわかってるのか!? フェイトの存在を否定しているんだぞ!？」

「だってそうだろ？ 事実なのだから」

「ツ……お前!？」

「理不尽？ 違うだろ。これが現実だ。残酷で、冷酷で、救いのようなものばかりが溢れかえっているのが当たり前の世界だ。そして弱いヤツが簡単に死ぬ」

心が弱いから壊れた。

立場が低いから虐げられる。

力がないから殺される。

そんな世界に生きてきたオレにとってこいつの言葉は許されない。「プレシアさんは心が弱かった。心が壊れていたんだ。耐えられなかつたんだよもう。だから優しい過去に戻りたかつた。取り戻したかつたんだろうよ、大切な人を。何もかも見失ってまでな」

オレはそう言つて、『ドコでもドア』を出した。すでに神器使い達は

集まっている。あとは帰るだけだ。

「なんでもかんでも綺麗事でいくと思うなよ……青二才が」

捨てセリフを吐いてオレ達は時の庭園から出ていこうとドアノブに手をかけた。

最後の最後でとても胸くそ悪い結末となったな……。

「よくも、よくも草太を殴ったね！」

直後、オレ達は散開し、その場から飛んだ。『ドコでもドア』は黒い球体によつて破壊され、オレは目の前にいる女に剣呑の眼差しを見た。

「なんだ。お前？ 誰だっけ？」

「覚えてない？ 覚えてないのこの私を！」

知らねえよ。というかホント誰だ？ そんなときほむらが説明してくれた。

「生田ミカよソラ」

「忘れてた。どうでもいいヤツだったから」

まあ思い出した。そういえば勝手にいなくなった女だっけ？

その女がなぜこんなところに？

「アンタを殺すためよ」

「お前ごときが殺せるのかよ」

「できるわ。アハ、アヒヤ、ハハハハハハ！」

生田ミカは笑う。その姿はとてもおぞましいくらい狂っていた。

突如、顔を歪め笑い出すこいつにオレは彼女に向かって突っ込む。

どういふつもりか知らないがとつと殺つた方がいい。

剣を振り上げ、飛びかかると球体状の結界がオレを包み込んだ。

誰かがオレを閉じ込めやがった。しかもそいつはオレがよく知る人物こそ、懸念していた者――

「どういふつもりだリニス」

生田ミカの隣に降り立ったりリニスはただ申し訳なさそうに項垂れていた。

第十六話 『魔女』と神器使い

崩壊していく庭園。もうじきここが崩れることもあり得る話だが、オレは目の前の敵に目が離せなかった。

「リニス、なんでお前がそこに立つ？ お前はフェイトの隣が席だろ」
「……申し訳ありません。私はそこにはもう立てません」

どういうことだ？ フェイトの隣に立てないってどういうことだ。

オレの疑問にリニスは衣服をはだけて胸を見せた。そこにあるのはたわわに実った果実だけではなかった。

ドクンツ、ドクンツ。

黒いひし形の宝石が鼓動をしていた。あれはまさか……。

「ジュエルシード!？」

「そんな……だって母さんが半分だけ奪って残りはアースラに……」

十三個目のジュエルシード？ いや違う。あれは似て非なるモノ。しかもオレはこの感覚を知っている。

寒気と妖気を感じさせる嫌な感覚。

『『叛逆の力』……?』

「ありえないわ。だってそれはまどかによって私から切り離されたものよ！ もう消滅したはず……!」

まどかとほむらは驚愕していた。

オレの死後、まどかがほむらを救ってくれた話のようだが、彼女達の話からすればもうないはずだ。切り離され、どこかへ消え去ったはずなのだ。

なのに、存在していた。消滅しなかった。

ほむらにとって黒いジュエルシードは見過ぎすことのできないモノに違いなかった。

「私はある人により、生かされました……。ソラ。あなたと会うために」

「オレと?」

「はい、私は監視。あなたがどう動くのかあの人に教えなければならぬ。生きてきた傀儡なのです……」

リニスの話によれば彼女は既に死んでいたところをそのジュエルシードにより蘇させられたようだ。

つまりリニスは死んだ身体でありながら生かされていたのだ。

(リニスが死んだ四年前……誰かに運悪く生かされたってことか)

そんなことを考えていると、ほむらは剣呑な視線を生田ミカに向けていた。

「どこでその力を手にいれたの生田ミカ。答えようによつては殺すことも躊躇わないわよ」

「クヒヒヒヒヒ……話？ 誰がするかバーカ！」

生田ミカは黒い穴を出した。そこから出てきたのは人だった。中年の男性だ。

しかしその人は目が死んでいた。いや精神が壊されていた。おそらく、生田ミカが壊したのだろう。

生田ミカは向けてその人に手を向けた。

すると地面から召喚陣が浮かび上がる。見たこともない召喚陣だ。日本の陰陽道をベースにしているような初めての陣に見とれていると男性が苦しみだした。

「ぐぎやああああアア！ 嫌だ！ 死にたくないイイイイイ！」

彼の言葉にオレはやつと二人の立場を理解した。すぐに結界を『解錠』しようとしたが、何重の結界が張られているため、解除できたのは一層だけだった。

「ほむらー」

「わかつてるわよー」

ほむらが『時間操作』で加速しようとしたとき、彼女達。いやみんなの前にプレシアさんが作った傀儡が現れた。

しかも鎧がそのまま動き出したかのようなようなゴーレムではなく、マリオネットみたいな木でできた傀儡だ。そいつらの手首には刃が生えていた。

「邪魔をさせません」

「リニス、お前え……！」

リニスのせいでみんな対応せざる得なかった。傀儡が現れたせい

で全員、生田ミカを止めることができなくなっていた。

クソツ、時間稼ぎされた。このままでは不味い……！

そう思い、何度も『解錠』した——だが、時既に遅かった。

男性は塵に包まれ始め、人型を作り出した。

その人型は徐々に顔を形成していき、髪もカラフルだったものから金髪へと変わり出した。

金髪の金色の瞳。さらに異国人漂うイケメンで黒い動きやすい衣装を着た男だ。その人はハツとオレを見て哀しみを浮かべた顔になった。

……オレはその人のことを知っていたが、今は生田ミカの所業を許さずにはいられなかった。

「やりあがったな……！」

「何をしたんだ彼女は？」

「わからねえ。でもオレの知る知識の中に似たようなものがあつた」

召喚術に種類がある。

まずオレが神器を出すような『通常召喚』。これは単に魔力を消費するだけだ。

その次に『特殊召喚』。条件さえクリアすれば魔力やデメリット無しで召喚できる。とは言ってもその条件が召喚するものによって超ハードである。

そして最後に『儀式召喚』。これは魔力も条件も必要もない。

必要なもの、それは……。

「生きた人間を代償に発動する召喚術。生け贄して召喚しやがったんだよこいつは！」

オレの言葉にクロノ少年は足を一步引き、驚愕していた。シヨックだろう。なんせ、さっきの召喚で人が死んだ。

信じたくない話だ。

「そおだよお！ あの女から与えられた術、『穢土転生』だよお！」

「ミカ、なんてことを！ なんて君が、君がそんなことを……！」

オリ主くんは生田ミカに対して理由を聞いた。すると彼女は妖艶な笑みを浮かべた。

胸ぐら掴んでキレるさやかだが、こんなときは状況を見てほしい。なんせ、目の前にいるのは明らかに『魔女』なのだから。

『アヒヤヒヤヒヤヒヤ！ コロス！ コロシテやるウウウウ！』
腕を一本下ろし、オレとさやか達から分断した。しかもご丁寧に、金髪のイケメンによって結界まで張られた。

クソツ……二人だけであの大型魔女はキツすぎる！

「自分の心配とかしたらどうだ？」

金髪イケメン、いやこの人にはちゃんと名前と言うべきか……。

「お久しぶりです……。」

——師匠……！——

「ああ。ホントに変わったなお前……。目が戦士そのものだ」

師匠——『ライトⅡトランシルバニア』。『閃光』と呼ばれ、オレが英雄となる前に活躍していたお人。

雷のような光の早さで移動し、暗殺執行する最凶の断罪者。敵国において知らない者はいない。

（あのクソヤロー……情とか云々以前な厄介な人を喚びやがって……！）

情けとか、かけてしまえばあつという間に死ぬのはこちらだ。どこでこの人のことを知ったのかは知らないが、とにかくさつさと倒せない怪物なのは変わりない。

「さつさと倒せないから怪物だろ」

「なぜに地の文がわかった……。まあいいや。ぶっちゃけ、あんたを殺すのに気が引けないし」

「……オイオイ、一応師匠だぞ？ 情くらないのか？」

「ない。師匠はオレのせいで死んだ。情を与えたオレの甘さであんたは死んだんだ」

もしあのときオレが覚悟しておけば。

もしあのときオレが不殺を捨てていれば。
何度思ったことか。何度後悔したことか。

オレは師匠に向けて神器を向ける。死人はもう死人だ。割りきらなければまた失う……。

「復活したことに申し訳ありませんが……死んでくれ」

「できるかな？ クソガキめ」

最低最悪の再会をしたオレはわだかまりを残したまま、師匠に挑むのだった。

(ほむらside)

ソラ達が生田ミカの力によって呑み込まれた後、傀儡達が一斉に襲いかかる。リンデイ提督は援軍に傷口が浅い局員を送ってきたため、少し楽に傀儡達を倒すことができた。

「どうして……どうしてこんなことするの!? リニス！」

「フェイト……」

リニスとフェイト&アルフの戦い。言葉からすれば二人のフェイト達が有利に思われるが、経験値からすればリニスが上だ。

まずいわね。おそろくだが、心理的に二人が動揺してるため戦いに集中できてない。

「ほむらちゃん……これって」

「傀儡かと思ったけど……どうも違うわね」

先ほどの傀儡はリニスが操作していたように見えた。だが、実際は違った。

リニスは指示を出していたのだ。そしてこれはリンデイ提督が言う傀儡ではない。

まさかこんなところでお目にかかるなんて……。

『使い魔』……。そしてソラ達を呑み込んだ結果は『魔女結界』ね」「さやかちゃんと千香ちゃんと……名前忘れたけど誰かが呑み込まれたね。マミさんと杏子ちゃんが向かおうとしてるけど、あの結界から出てくる『使い魔』達のせいで近づけてないよ……」

外に出る使い魔なんて聞いたことがない。おそらく新種の『魔女』ね。

しかし生田ミカが『魔女』になるなんて……。

「あの女……いつから『魔法少女』に」

「ほむらちゃん、今は考えない方がいいみたいだよ」

まだまだ『使い魔』は出てくるけど局員も辛うじて戦えているが持久戦ではこちらが不利だ。

「……仕方ないわ。まどか、手を」

私はまどかの手を握り、『時間停止』を発動した。まどかは停止した世界で天へ向けて魔力矢を放った。

『時間停止』は解除されると天からピンクの雨が降り注ぐ。それにより多くの使い魔達は駆逐された。

するとリニスの身体はこちらに向ける。フェイト達は地に倒れている辺り、敗北したようだ。

「すみません……ほむらさん。あなたを始末しろとこのジュエルシードから命令されて……」

「安心しなさい。私は引導を渡してあげるわ」

グロツク17を右手に、左手をバックラーに変えていつでも戦える状態にした。

リニスが杖先が尖った錫杖を取りだし、突いてくる。右へ回避して右手の魔力の弾が装填された拳銃を発砲するも、魔力障壁により防がれる。

（ホントは世界に『時間停止』をかけた。けれど、これは大幅に魔力が消費するわね……。それにそれで彼女が停まってくれるとは限らない）

彼女はまどかの魔力矢を回避していた。つまりソラのように『時間停止』が効かない体質になっている。

なので『時間停止』を使わず、倒すしかないようだ。

リニスは光の鎖のような魔法で私を拘束しようとしてきたが、近くにいた傀儡を囮にして躲した。

おそらく今ので捕まればフェイトの必殺技で殺られていたわね。

「さすがですね」

「こちらだつて長く戦つてるのよ。負けてたまるものか」

リニスは私を捉えようと鎖の魔法をガンガン使ってくる。どういふつもりかは知らないが、私は囚われるわけにはいかない。

早くまどかのサポートにまわらないと。

そう思っていた刹那、リニスは鎖を引いてきた。そして繋がっていたのは局員達だった。

局員達によってぶつけられて止まってしまった。

「ッ、まさか!」

「すみません!」

局員達諸とも滅びの光線を放つ。ソラなら盾にしてもなんともなさそうなどころだが、どうも私にはできそうにもない。

私はやむ得ず『時間停止』を使い、世界を止めた。光線も止まり、その場から彼らごと飛んだ。触れてる局員達は謝ってすぐに私から離れると、また停止した。

「避けて!」

リニスの錫杖が私の脇腹を貫く。咄嗟に避けたお陰で、急所は避けられた。

『時間停止』を解除すると光線は誰もいない場所を破壊していたが私は右膝に着き、痛みを堪えていた。

「ほむらさん……すみません。身体が勝手に……」

「ホント、嫌らしい黒幕ね……!」

苛立たしい。まさか援軍によって自分がピンチになるとは、最悪だ。

と、私はふと思ひ出した。バマミと戦ったときのことだ。

(できるのかしら……)

あれは計算というより、運良くという感じだ。それに私が使う魔力弾は葉莢が飛び出るため、普通の銃弾と変わらない。要するに弾数に制限がある。

全ての弾と魔力を使う。たぶんこの後は辛い戦いになる。だけど……!

(やるしかない……！)

私は覚悟を決め、『時間停止』を発動した。モノクロの世界により、色がある私とリニスは動き回る。

私はまず魔力を纏ったゴルフクラブをブーメランのように投げて、それから一発目をリニスに放つ。当然、回避された。

撃たれた魔力弾はその場で停止され、次に撃った弾丸も回避される。

それから動きながら、バンバン撃っていく。

「闇雲に撃たないでください！ そうしてしまおうと弾が！」

「安心しなさい……！ これも使ってあげるわ！」

合計十発を放った後に手榴弾の安全ピンを抜いて、リニスへ投げた。それも私から五メートル離れた地点で停止した。リニスは爆発すると判断したため、その場から離れた。

「万策は尽きたのですか……？」

残念そうに言うリニスは錫杖を構える。そして突貫してきた。私はそんな彼女に対して一言言った——してやったりという顔で。

「いいえ、チェックメイトよ」

『時間停止』が解除された刹那、銃弾が動きだし、手榴弾も軽い爆発を起こした。爆発したのはリニスの天上だ。上は視界でわからなくなった。

錫杖が迫る中でリニスは能面のような顔だったが、次の瞬間驚愕に包まれた。

それもそのはずだ。魔力弾が天から一直線に降り立ち、リニスの両手足を貫いたのだ。

「ッ、なん、で……」

「簡単な話よ。停止した銃弾が弾きに弾いて、ここに降り注いだのよ」
まず一発目はリニスではなくゴルフクラブに向けて撃った。そしてゴルフクラブによって弾かれた魔力弾の先に新たな魔力弾に撃ち込み、そして弾かれた両方にも魔力弾を撃ち込む。

最後に上空の様子を見えなくさせるために手榴弾を投げ

、リニスをこちらに来るように仕向けた。

全ては彼女の動きを封じるための無謀な所業だ。

「……最近、算数ばかりで演算能力が衰えていると思ってたから不安だったけど、案外上手くいくものね」

「全て、計算で……!？」

「あら、知らなかったの？ 私って統計とかして怪物を爆死させてたりもしてたのよ？」

トラップ式で『使い魔』や『魔女』を追い込んでよく倒したものだ。まあ、でも今回のような銃弾をビリヤードのような芸当は無謀な賭けだったけど。

「……さすがです。あなたが最後の相手でよかったです」

リニスの身体はもう動けない。ジュエルシールドが命令しても彼女の神経は先ほどの魔弾でやられた。リニスに最後の一発を向けようとしたとき、彼女の前に金色の髪が立ちはだかった。

「どきなさいフェイト。彼女は殺さなければならぬ」

「いや、です……」

「彼女はもう死んでるのよ？ しかも生きた傀儡扱いされている。……もう彼女は黒のジュエルシールド無しでは生きられないし、それを破壊しない限り私達は危機に落ちる」

「それでも……!？」

フェイトは声を上げて言った。

「それでもリニスは私の家族です！ 大切な師匠です！ 見捨てることなんか……できない!？」

「……………」

彼女の言いたいことはわかる。しかしこのままだりニスを放っておけば危険なのはこちらだ。

その甘さが私達を苦しめるなら、と思いフェイトを撃とうとしたとき、私はハッと目の前に気づいた。

「フェイト！ 後ろ!？」

アルフの声で彼女はやっと気づいた。振り向くとそこには刃物を生やした傀儡が迫っていた。

フェイトは戦斧を構えようとしていたが間に合わない。

私は魔弾を撃とうとしたが、魔弾は出なかった。

(詰まった！)

グロック17を捨て、魔力矢にシフトしようとしたが刃物はフェイトに近づき、そして――

――貫かれた……。

「え……？」

「……そんな」

フェイトは無傷だった。傷は一切ない。しかし血で濡れていた。では誰の血だ？ そんなの決まっている――彼女のモノだ。

「リニス……！！」

凶刃がリニスの胸を貫いていた。黒のジュエルシールドも刃によって貫かれていた。

ピシ、ピシピシ……とひび割れ、砕けそうだった。

傀儡は刃物を抜き取り、フェイトを今度こそ刺そうとしたとき、まどかの矢により串刺しになった。

「リニス！」

「しっかりして！」

フェイトとアルフは倒れたりニスを介抱する。彼女はフェイトを庇い、盾となったのだ。

息絶え絶えなりニスは愛しいような視線を彼女達二人に向けていた。

「フェイト……アルフ……。ごめんなさい……。私は、あなた達二人に……」

「ううん！ 気にしないよ。リニスのせいじゃないよ！」

「そうさ！ アタシ達はまた会えてうれしいよ！」

彼女達の言葉にリニスは微笑む。しかし私でもわかる。

……もう彼女は長くないと。生かされるのに使われた核を破壊されたため、もう彼女はどうなるなんて容易に予想できた。

「フェイト……どうか。どうかプレシアを怨まないでください。彼女は確かにあなたのことを人形としか見ていなかったかもしれない……。けれど、ほんの僅かかもしれませんがあなたのことを大切に思っていたかもしれない……」

「リニス……」

「私には、彼女の心の穴を埋めることができませんでした。もしかすると、誰にも埋められなかったと思います……ガハッ」

吐血し、元気な肌色が青白くなっていく。しかも彼女の足が光の粒子となっていた。

使い魔の死は消え去ることだろう。

「フェイト……アルフ。これからも二人で生きて、ください……。何者にも負けず、強く生きて……ゴホゴホッ」

「リニス、しっかりして！ 死なないで！ 私を、私を一人にしないでよお……！」

フェイトは迷子になった子どものような泣き顔になっていた。するとリニスが最後の最後で、力を振り絞り、彼女の頭を抱き締めた。

「私は、あなた達に会えて……——しあわせ、でし……た

……——」

笑顔。とても綺麗で満面の笑顔を彼女は最期に浮かべた。

そして、その一言を最後にリニスは消え去った。光の粒子となり、フェイト達の前から消え去った。

フェイトは呆然とショックを受けていた。彼女の死により、人形のように項垂れる。

「フェイトちゃん……！」

高町なのはが傀儡をなぎ払い、彼女を抱き締める。それがトリガー

に彼女の涙腺が決壊した。

「ひぐツ、ううああアアア……！」

年相応に泣くフェイトに私とまどかは静かに傀儡達に視線を向ける。拳銃はもうない。マシンガンなどの重火器は家だ。

ならば、と思い、私はバックラーをあの武器へと変化させた。

親友が愛用していた武器。

彼女が消えた後、これで戦い続けてきた最高の武器。

そう……私が使うのはまどかと同じ弓。魔力矢を使って滅ぼす最高の武器だ。

「……よくもやってくれたわね」

かつて親友は言った——私の名前の由来を。

「……よくもまどかかの友達を殺したわね」

かつて親友は言った——私の名前の良さを。

「……よくも、よくも…………！」

燃え上がる心。

燃え上がる魂。

燃え上がる怒り。

かつて親友は私の名前をこう言った。

「よくも、私達の家族に手を出したな……！」

『焰』と。

燃え上がる情熱。永遠に消えない炎。

それが私だ……！

背中から黒の絵具で汚された翼を生やし、飛び上がる。その翼から突起のある羽を浮かび上がらせ、弓矢を構える。

そして矢と羽を飛ばして傀儡達を串刺しにしていく。

「後悔しろ、懺悔しろ、反省しろ……！ 私を怒らせたからにはただで済むとは思わないことね、木偶の坊達！」

止まらぬ怒りと消えない闘志を燃やし、私は傀儡達を殲滅し始める

の
だ
っ
た。
。

第十七話 望まぬ戦い

剣と短剣がぶつかる。金属音と火花を散らし、そして視線を交わす。

戦いは優劣無く、互角だった。いや本来なら優劣はないはずだった。師匠が上のはずなのだ。

しかし『穢土転生』は神器にまで作用してなかった。師匠の神器『閃光のマント』を出されれば間違いなくこちらが即死している。

『閃光のマント』は雷を纏い、身体を極限に高めて高速化する神器だ。ゆえにそれがないだけありがたい。

(師匠の持ち味である早さ……それがいいからこそその互角だ)

オレが有利だって？ 違うな。経験の差で負けている。そのため、攻撃しにくいところを攻められているため、早々の決着ができないでいた。

「まだまだいけるだろ。なあ、ソラ！」

師匠は腰にあるポーチから札を取りだし投げた。その札には魔法式が書かれている。

陰陽道をベースにした記録型魔法術である。魔力を込めれば発動できる弾丸みたいな魔法だ。

札から出てきたのは雷の龍。その龍はオレに食らいつこうとしてきたところを、魔法を『解錠』でキャンセルした。

しかし目の前には師匠はおらず、直ちにオレは耳と鼻を濟ませる。そして地面が盛り上がったとき、咄嗟に身を退くと師匠が地面から飛び出した。

直感に従って正解だ。今の当たっていたら顔を貫かれていた。距離をとったオレに師匠は新たな札を二枚投げた。

「なら、次はこうだ！」

「ッ！」

今度は水の鳳が突貫してきた。その上、ぴきぴきと凍結していき、

氷のフェニックスとなった。

オレは真つ正面からそれを打ち、キャンセルを発動するが、解除されたのは氷だけで残りは水となり、オレを湿らせた。

師匠は雷の狼を出し、オレに当てようとしてきた。狙いは感電か……！

(チツ、『全てを開く者』の弱点を理解されている……)

この神器の弱点は『開く』『閉める』の対象は一つまででそれ以外はただの斬撃になる。おまけに魔力の塊もしくは何かを結合された力でないとキャンセルができない。

つまり、対象は一つまでで魔力で作られてない鉄や炎などをキャンセルできないのだ。

その上、この神器にはまだデメリットがある。

「早く決着着けないとバテるぜ」

「ッ、うるせえ……！」

師匠にもわかっていた。この神器ははつきり言って燃費が悪い。

『開ける』や『閉める』を使えば大量の魔力を喰らう。しかも常時展開するため少し魔力を消費しなければならぬ。

この神器は短期決戦でしか向かない武器なのだ。戦争のときはまどかとリンクしていたため、バテることはなかったが今はそのリンクはない。

そのためオレの魔力量だけではこのままではいずれ早々と尽きる。

(考える……。何か、秘策を……。この状況を打開する策を)

オレは札から放たれる雷から躲していると、師匠はニヤリと笑って五枚の札を出した。

「んじゃ、次は凍ってるー！」

札から出てきたのは氷の龍が五匹。オレを狙って、一斉に飛んできた。回避したとき地面は凍結された辺り、威力は凄まじいことこの上ない。

さらに龍が通過する度にオレの身体がやや凍っていた。

「ぎ、む……！」

「そりやそうだ。なんせ、湿った衣服を凍らせたからな。それに体温

も奪われ、体力も減る。一石二鳥だろ？」

なるほど、身体の身動きを鈍らせ体力もより消耗させる。この魔法は当てるためではなく、オレを凍らせるための魔法だ。

凍結されてしまえば、魔法ではないためこの凍った身体に解除はできない。魔法でなければこの氷は解除できない。

「次は土だぜ」

師匠は札を投げてからこちらに向かってきた。札に触れた大地が突起物を生やし、オレに迫ってくる。地面に突き刺して解除はできたが、師匠が次に投げってきた札により、拳の形に盛り上がった地面がオレの横腹に突き刺さる。

「ゴバツ……！」

「とどめだ」

顔を掴み、喉に向けてナイフを振る師匠。しかし彼もまた油断していた。

オレは動き回ってときゆセットしていた魔法式が、師匠の足元に発動した。

ボオオオンツ！

「ぐおー！」

地雷式の爆破魔法だ。戦時中に敵を嵌めるためによく使っていた魔法でもある。

吹き飛ばされたオレは身体を滑走させるも、立ち上がり様子を見た。すると師匠の足は吹き飛んでおり、消失していた。

しかし次の瞬間、彼の足に塵が集まり元に戻っていく。

「マジかよ……！」

おそらくこれが『穢土転生』のメリット。魂が有る限り、永久に甦りそう続ける。

(ヤベーな。完全に持久戦にもってこいの術だ)

塵が完全に足を復元するまでオレは考えた。師匠を倒すには魂と死肉である身体を切り離す必要がある。そのためにはどうすればいい……。

周りには何も無い。岩影も、武器となるモノも一切……。

(いや……あつたじゃないか)

手にある神器。それこそオレの最大の武器だ。

そうだ。こいつを使いこなせばいい。

残りの魔力も余裕はない。覚悟を決め、神器を握る手を強くする。

足が復元された師匠はナイフをこちらに向け、駆け出す。

「時間切れだソラー！」

「……………」

思えば師匠を戦うことにどこかに戸惑いがあった。

なんせ、オレのせいで死なせてしまった。だから罪悪感と申し訳なさに本気にはなれなかった。

だから、ここから先は……………！

「ツらあアアアアア！」

咆哮を上げ、駆け出す。経験はあちらが上。ぶつかり合えば勝てる保証はない。

「なっ!? 神器を投げた！」

ブーメランのように神器を師匠に投擲する。当然、それは弾かれた。しかしそのインターバルに魔法式を描いた。

発動した魔法式は雷。それもただ光が強いだけの雷だ。

威力も高くはない。しかし師匠は突如と眩い光により、目を閉じた。

その隙についてオレは蹴り込み、カギのような剣を再び手に召喚した。

そして斬撃を入れた！

「なるほど……閃光で目眩まししてその隙にこの俺を斬るか」

斬撃はナイフにより防がれた。師匠は読んでいたと言わんばかりにニヤリと笑っていた。

「だが、まだまだだな。この程度。老兵には見破られるぞ」

「そうだな……」

「なんだ？ 降参か？ なら……」

「いんや。あんたの負けだ……！」

右手をそのままにし、左手に新たに『全てを開く者』を召喚した。

師匠は驚愕していたところを、左手の神器が彼を斬り裂く。袈裟斬りされた師匠はなぜ、と言った顔でオレを見ながら倒れた。

「なぜ……『全てを開く者』、が二つある……!?!」

「二つねえよ。投げた神器を左手に召喚したんだ」

「じゃあ……右手、は……」

「偽物に決まってるだろ。ま、ハツタリように作ってたレプリカさ。形はそっくりだが、効果も何もないただ斬れにくい剣さ」

『カギのような剣』Ⅱ『全てを開く者』と誰もが思いがちだ。だから前世のように錬金術を使って試行錯誤に作り出し、相手の不意を作るために使っていた。

と言っても似ているだけだし、家から召喚したものだから剣に『全てを開く者』にはないマークがついている。

「……クク、まさか。そんな子ども騙しの手を使うとは……」

『周り武器だ。あらゆる可能性を想像しろ』——それがあんたから教えられたことだろ」

「確かに、な……」

師匠の身体は光を放ち、ボロボロと崩れていく。魂を切り離れたことにより、彼はまた死の世界に旅立つのだ……。

「師匠……」

「そんな悲しそうにすんな……」

「オレは……オレは謝りたくて……。あんな理想を望まなきや師匠は……！」

「馬鹿言うな……」

師匠は頭を小突いてきた。少し痛かったが、すぐに掌を広げて撫でてきた。

「過去を否定するな……今のお前がいるのも、いや今のみんながいるのもお前が戦ってきたからだろ……? なら、過去の自分の夢を否定するな」

「……………」

「それに、お前の馬鹿馬鹿しい夢は俺も好きだった……幼い頃、夢見た自分の……ようで」

師匠の身体は上半身しかなくなりかけてきた頃、オレはもう彼が逝くことを理解した。

また失うのか……。

また見ているだけなのか……。

またオレは……。

後悔と無念さの中で師匠は笑みを浮かべて言った。

「俺は、転……された、身なんだ……」

「え……？」

「ようする、に……——大丈夫。また会えるさ……きつ、と……な……」

師匠は遂に灰となり、この世から去った。そのとき彼は笑顔で逝った。

あの頃、幼い頃のオレと過ぐしてきたときに見せた優しい笑顔で……。

「……………」

天を見上げる。まだ『魔女結界』は張られている。まだ『魔女』が死んでないということだろうな……。

オレはレプリカの神器を家に転送し、右手に『全てを開く者』を持ち帰る。ギリギリと歯を食い縛り、目が飛び出そうなくらい見開く。

怒りが、治まらない……！

足を進ませる。道は険しくなく、果てしなく平面と『魔女結界』の作り物だけ。

生田ミカ。認めるよ……。

——お前は『敵』だ。死者を冒流した罪をもって、ぶち殺す……

!

(??side)

とある民家にて、一人の少年が目を覚ました。その少年は先ほど謎の昏睡状態に陥り、倒れたのだ。

その少年の視界には自分がよく知る茶髪のロングヘアの女性が目を潤ませていた。

「……ねえ、さん？」

「うわぁーん！ ライトライトおー！」

ヒシツと抱き締められ、少し苦しそうだったが、近所のお世話になつてお姉さんに心配かけたことに少し罪悪感を感じていた。

「よかったよかったよお……ライトが倒れてワタシ、ワタシいっ！」

「うん……もう大丈夫だから」

少年はベッドから身体を起こし、寝ているときに体験したことを思い出した。

(……ソラと戦っていた夢を見るなんて)

その戦いは悲しいものだった。

自分にとって息子ような少年が。

自分にとって弟のような少年が。

自分にとって家族と呼べる少年と戦わされた。それはとても悲しく辛いものだった。最後には彼を泣かしたことに、少年の胸は苦しくなった。

(あの人はソラの大切な人だっただね……)

五木雷斗。彼がその夢を見たことに意味を知るのは、彼が大人に近づいてきたときだ。

第十八話 『無血』と『鮮血』

(??side)

遙か昔、とある世界でその英雄はいた。

その者の周りには血が噴き出さない死体ばかりで、歩む道には溢れんばかりの敵だらけだ。その英雄には恐怖はない。

ただただ、途方もない無情だった。自身の師を夢によって殺され、理想に絶望し、彼は修羅へと身を落とす。

もし敵が降伏しても彼は止まらない。捕虜なんて作らない。いないと言わんばかりに彼は敵と決めた者は生かさなかつた。

『無血』の勝利。血を流さず勝利した。故に彼のことを『無血の死神』と呼ぶには時間がかからなかつた。

しかし、実のところ全て『無血』には終わらなかつた戦いもある。『無血』の勝利が多かつたゆえに、この呼び名が広まつたが彼もまた血を何度も流している。

当たり前だ。英雄と言えど無傷では済まない。浅かろうが深かろうが彼は傷ついている。しかし彼だとは限らなかつた。

敵もまたおびただしい量の血を流して死んでいるのだ。

事情を聞けば、「子どもを犯したクズだから」「殺戮ばかりしていた異常人格者だったから」という理由で彼は首を、腕を、足を、胴体を、引きちぎり殺した。

誰もが惨いと思つただろう。そして誰もが彼が怒つていたことを理解した。

敵には『無血』が広がるも、味方の中で彼のもう一つの異名を知らなかつた。

『鮮血の断罪者』

血で汚れ、赤く染まった処刑人である。

『無血』は不気味で捉えられ、『鮮血』を残酷で捉えられた。

だからだろうか。軍の中で規律違反者は出なかった。ルールを守らぬ犯罪者は断罪されると恐れたゆえに。

戦時中の彼の人生は孤独だった。少数の理解者はいたが、下級兵などは誰も近づきはしなかったようだ。

そして戦争が終わり、彼は消えた。どこかへ旅だったと彼の上司は悔しそうに言っていたが、「地獄に帰った」やら「魔界へ帰った」やらと理解者の中に冗談と言っている者がいたが、何も知らない者にとつては冗談では思えなかった。

とは言え、彼によつて救われた者達はいなくなった彼に永遠の感謝を送っていた。復讐を、勝利を叶えてくれてありがとう、と……。

そして今、『無^{神威}血の死神^{ソラ}』は怒り狂っていた。かつてないほど、赤く燃やした殺気を灯して。

(千香 side)

『GYA O O O O O O O O O O!!』

生田ミカだった化け物は六本の腕を使って、ボク達を潰そうとしてきた。

うーん、ぶつちやけ。遅いし、パワーしか取り柄なさそうな魔女に幻滅だよ。おまけに『使い魔』なんて使ってこないし、直接攻撃がやりやすい。

さやか『魔女化』なら『使い魔』使った物量作戦で攻められるからやりにくいしね。

普段通りならボクとさやかで倒せるが時間がかかっていた。理由は簡単だ。

オリ主くんのせいだ。彼がボク達が攻撃しようと邪魔してくるた

め、ただ避けてるだけしかできなかった。

「いい加減にやめてよ！ あの『魔女』を倒せないじゃない！」

「駄目だ。ミカを助けるんだ！ 彼女を見捨てることはできない！」

「あれはそんな甘さでなんとかなるもんじゃないわよ！」

さやかの言う通りだ。『魔女』とは災厄を振り撒く存在であり、呪いの結晶だ。

『魔法少女』だった人格は消え、化け物となり、そして憎悪と悲嘆と後悔の渦の中で苦しみ続ける——それが『魔女』となった身で感じた苦しみだ。

ボクときやかはかつて『魔女』になったからこそ、その苦しみがわかるんだ。

（邪魔だなあ……。いつそ殺した方がいいかな。ここで殺せば『魔女結界』ごと閉じ込められて死体は見つからなそうだし）

それにソラが心配だ。今の彼は生田ミカによって蘇った師匠と戦わされている。苦痛と後悔のある戦いになってるっていない。

絶望したソラをちよつぱり愛しく思うが、長くそんなところにいさせてたくないのは本心だ。とにかく早く手助けしないと彼が死ぬ可能性が出てきた。

ボクはジャックナイフを構え出すとザツザツと足音が聞こえた。姿を見せたのはソラだった。

そしてその顔はうつ向き、どんな表情かわからなかった。

「……………」

ボクの横を通ったときその表情が見えた。そう、あれはあのときのソラだ。

——怒りで顔を歪ませたときのソラだ

もうこうなってしまうば、決着は見えたものだ。彼はボクの前を数歩歩いてから、ズドオンツと地を蹴って、魔女の顔面まで飛び上がった。

そして大振りの斬撃が魔女の顔面に直撃し、魔女は転倒した。

る。

大切な人呼び戻し、拳げ句の果てに自分の手で殺させる。それが許されず、彼は斬り込む。

『オノレ、オノレエエエエ！』

「安心してとつと死ぬエエエエ!!」

最後の縦の斬撃が降ろされた。その一撃は『解錠』を込めた魂を切り離す一撃。

その一撃で『魔女』の身体に線が走り、ジュウツと消滅していった。

『魔女』は消えた。そして残された銀髪の少年は消えた彼女を無情な目で見ていた。

オリ主くんの嘆きの叫びをBGMにしながら……。

(??side)

『魔女』は消えた。それにより天宮草太は自身の無力さに嘆き、悔やみ、後悔している一方で、白い空間にて『生田ミカ』は生きていた。

彼女もリニスと同じように黒いジュエルシードで『魔女化』していたのだ。そのため切り離されたのは黒いジュエルシード——つまり『叛逆の力』の核のみで生田ミカ自信は無事だったのだ。

「なんて……ヤツなの。『魔女』の力を……怪物の力を人間でありながら破るなんて……!」

ようやく彼女は敵にした男がどういう存在か理解した。次に合間見えるときはそれなりの準備と環境を整える必要がある。人質や毒を盛って相手を殺すことこそ、相手を倒すのに最上だと判断していた。

「見てなさいよ……神威。アンタは次こそは——」

「次はないよ」

生田ミカは振り返る。そこにはソラ担任だった女性が、彼女の元担任だった女性がいた。

寿辞職した彼女がこの空間にいるはずがない。それは普通ではな

いことを意味していた。

「なんで、アンタが……」

「ヌフフフ、そりゃワタシが普通じゃないからだよん♪」

「ツ！」

ミカは思わず杖から魔力砲を吐き出す。『非殺傷』にした強力な砲撃だ。

それを直撃した元担任は顔の半分が消失した。

なのに、彼女は変わらない笑みを浮かべていた。どういうことだろうか？

「なんで……なんで死なないの!? アンタ何者なのよ!」

「何者かあ……。そういえばあの姿で自己紹介がまだだったね!」

元担任の身体が蜃気楼が消えるように歪み、姿が変わった。栗色のロングがエメラルドカラーとなり、瞳も黒から紅く染まった。

「あるときは近所のお姉さん、あるときはセクシーでアグレッシブなソラの元担任!」

——そしてあるときは究極生命体と言われるくらいの変態!

ノエル||アーデルハルトちゃんよ。エルちゃんって呼んでね!」

パチリとウインクと投げキッスするノエルに、ミカは苛立ちも呆れが起きなかった。なぜか、一種の不気味さを覚えた。

(なんで……この私が怯えるの?)

彼女は笑っていた。悪魔の微笑みだ。邪悪の微笑みだ。

なぜかミカは彼女に対して恐怖を感じていたのだ。

「うんうん、それが普通だよ。一般人なキミが恐怖を感じないとなるとそれこそ狂人の領域さ。それ以外は名のある武人か軍師だね。つまり、キミは普通なのさ!」

「そんなこと……!」

「まあこの際キミが『普通』とかどーでもいいんだけどね」

ノエルが一步を踏み出した——刹那、既にミカの目の前に現れ、彼女の頬を触れていた。

「え……あ……」

「よくも転生仕立ての『ライト』を無理矢理引っ張り出したね……。もうワタシは激おこぶんぶん丸だよ？　だーかーらッ♪」

ノエルは笑った。そしてミカの身体がネジリ始めた。

痛みはなく、彼女の意味とは関係なく、身体がネジ曲がり始めた。

「い、やあアアアア!?　何これ！　なんなのこれエエエエ!?」

ミカは恐怖のあまり泣き始めた。惨めに鼻水を流し、涎を滴ながら彼女はノエルに懇願する。

しかし彼女はただ笑っていた。無邪気に、嫌がる子どもを見て楽しむ悪ガキのように。

「消えちゃえ。この世から。何もかも残さずに……。ねえ？」

「あ、ああ……。い、や……。あアアアア……。――」

『生田ミカ』は消えた。この世から何も残さず消えた。

周りから彼女はこうして行方不明扱いされるだろう。それに悲しむのはオリ主さんと一部の人間のみなのはなんとも哀れな結末だろう。

そして『死』ではなく『消滅』という運命を知ってるのはこの場にいるノエルしか知らないということになる。

「うーん、まさかソラがここにいるなんてなあ。そしてライトも彼と会うなんて……」

ノエルは気まぐれに世界を引つ掻き回す。その果てにあるのは混沌という破滅だ。

……変態だらけの世界という破滅なのだが、シャレにならない話なのは事実だ。彼女が混沌をもたらせばだいたい破滅の運命なのである。

「やっと見つけた……。ワタシのライト。今度は離さないよ？　どこまでもずっと、ずーつと一緒だよ？」

舌なめずりし、微笑するその姿はなんと妖艶で蠱惑的なのだろうか。そしてノエルは指を鳴らすと、空間の歪みをつくり、そこへ消えていった。

第十九話 一つの終わり

エピローグ的な話をすれば、生田ミカという『魔女』を討伐し、プレシアさんは『アルハザード』へ旅立った。そしてオレ達は管理局からお尋ねものにはならなかった。

理由はプレシアさんに全て擦り付けたことと、彼女がかつて巻き込まれた事件の真相が書かれた書類をリンディ提督に渡したから。

いつそんなものを手に入れたって？

管理局まで行って、ほむらと一緒に時間停止で盗みましたが何か？

あ、そうそう。この一件でオリ主くんに敵視されました。生田ミカを殺ったことに対しての八つ当たりかどうか知らないがいちいち突つかからないでほしいと思う今日この頃である。まあ、どうでもいいけど。

んで、フェイトと高町名古屋（※なのはです）は仲良くなった。別際にヒシツと抱き合っていた辺り、もしかするとガールズラブの誕生への序章ではなからうか？

……第二の『まどほむ』の誕生だなこりゃ。

あ。重大発表があった。ほむら、よろしく。

「なんかクラスや近所からあなたのことを好印象ととらえていたわ」「やったね。この調子でモテ期にいくぜ。さよならモテないオレ！」「こんにちわモテ期なオレ！」

「あ、でもモテたら私とまどかが全力で邪魔するから。私達以外の別の人と結婚したらソラクくん殺して私達も死ぬから」

「さよならモテ期。ようこそヤンデレ……！」

ガーン。まさかここに好意を持つ乙女がいたとは。しかも病んでいるほど。

ちくせう。こうなったらママさんが入れた紅茶で一息でい。

「うーむ、やはりママさんの紅茶はおいしいなあ……」

「ふふ、お粗末様。よかつたらお嫁さんにもらつてくれてもいいわよ？」

「あいにく、オレはこんなでできた人とは似合わないのと、ソファアールでゲームしていたさやかか立ち出した。」

「じゃあこのさやかちゃんになってあげてしんぜよう！」

「元気すぎて処理できないから却下」

バツサリである。さすがのさやかもショボーンになる。

同じく座っていたまどかと千香が立ち上がる。

「さやかちゃんがだめなら……!!」

「いやいやこの超絶美少女であるボクが！」

「お前らは論外。昔のまどかだったら話は変わるけど」

「ほむらちゃん、昔の私ってなんだったつけ！」

「今も変わらないかわいいまどかよ」

「それじゃあOKだね！」

「違うし。ていうか外見じゃなくて内面みろやお前ら」

フサアと髪を流して言ったほむらの言葉を否定し、オレは嘆息吐いて立ち上がる。

まあなんにせよ……………。

「帰ってきたなあここに」

さあさあ、この平和を謳歌しようか。

「ま、どうせトラブルに巻き込まれるだろソラって」

「誰がソゲフさんだと杏子」

よろしいならば戦争だ。オレ達は平和的にテレビゲームで雌雄を決することにした。

☆☆☆

快晴な天気にて二人の男女が町に出掛けていた。

今日はまどかと散歩出かけである。そろそろ夏に入る季節なので、半袖半ズボンというスタイルなオレに対して、まどかは清楚な服装という可愛らしい格好をしていた。

人形を買って、服も買った後、ソフトクリームを買いに言ったオレがまどかが待つベンチに向かったが………いない。

はて、どこに行ったのやら。

すると某残酷系魔法少女アニメの着信音が流れる。

最近流行の若手二人組の少女『倉リス』の着信音である。もちろん、相手はまどかからだ。

オレはスマホの通話モードに耳に当てた。

『誘拐されちった、ティヒ♪』

「いや楽しそうな声で言うなよ。ていうか、なぜにそうなった!?!」

『いやーなんか月村さんとバーニングさんとなんか捲き込まれちゃった少年が誘拐される光景目撃しちゃって、私の中に眠る正義の心赴くままにドロップキックで助けようとしたら捕まっちゃった♪』

「あのなあ……」

楽しんでるなチクショウめ。こちらら心配してたのに、意外に呑気なヤツめ。

とにかく、場所を聞かないと。

『あ、こいつケータイ持ってやがる!』

『てめえ、いつの間に——おふうっ!』

『乙女の必需品に手を出さないで!』

『頭あ、無事ですか!?! 息子とたまは無事ですか!?!』

『ちよつと新しい世界が見えた……』

ヤバいな。いろんな意味で危ないし、バレた。

このままじゃ居場所がわからなくなる。そうなるとマズイな。

っーか、頭の急所に男として同情する。

『良いから寄越しやがれ!』

『あう……絶対データ覗かないでね! 寝ているソラくんのあられない写真コレクションが保存されているから!』

「今携帯持つてるヤツ、それぶつ壊せエエエエ！」

全力でスマホにシャウトした。

あられのない寝姿つてなによ!?

いつの間に撮ったんだよオイ!

そうこう言ってる間に通話がプツンと切れた。

……うん、その携帯が破壊されていることを祈ろう!! 頭さんお願い!

まあ、それはさておき……。

「つーか、最初からあいつに聞けばいいじゃん」

オレはその人物に電話をかけた。頼むぜ………王子様。

(まどか side)

そして私のターン。私と月村さん達は廃工場でグルグル巻きに縛られていた。

廃工場は既にコンベアとかそういうのはなく、何も無い薄暗い空間だ。

テンプレ的に言えば、囚われたヒロインだねこれは。

「私達をどうするつもりよ!？」

「用があるのは月村だったが……まさかバニングスの娘まで捕らえることになるうとはな。まさか化け物とつるんでいるとはな」

これまたテンプレ展開だった。バニングスさんが話している相手はいかにも悪者ですと言ってるような人だった。

黒スーツにサングラス。おまけに頬に痛そうな傷がある人って本当にいるんだなあ。

「さすがが化け物つてどういうことよ!」

「知らないのか? ククク、滑稽だ。滑稽だぞバニングスの娘! ま

さか本当に何も知らずそいつと関係をもってたのか!？」

「何がおかしいのよ!？」

「教えてやるよ。こいつの正体をなア！」

頭っぽい人が勝手に話始める。

なんでも月村さんは血を吸う吸血鬼という夜の一族という人種らしく、紅い瞳になったり、催眠をかけたたり、そして人間とは思えないくらいの怪力があるらしい。

何度も月村さんは頭っぽい人にやめたと懇願するが、ゲスい笑い声を出しながら最後まで言い切った。

うわあ、酷い人だねー……。

「んん? なんですか? 黙っちゃって? もしかして今さら恐ろしくなったのですかア?」

なんか私に変な誤解されちゃってる。

心外な。そんな人達より怖い相手なんかいるのに。

「バカ言ってるんじゃないわよ! すぐかは私の親友よ! 絶対怖がつてやるものですか!」

バニングスさんは吠えた。

うん、さすが親友だけである。彼女のそういうところが好ましいと思える。

私も親友を大切にする人だから。

「ククク、そうですか。でも残念無念。君達はこので殺されるのです! 月村以外は用がないですからア!!」

そう言つてマシンガンやらライフルを構える黒スーツ達。

ちよつとマズイかも。さすがに一人を犠牲にする覚悟じゃないと乗りきれないかも。

「夜の一族の当主の座の交渉材料として月村ちゃんには人質になってもらいまーす。けど、君達はいらぬ。バニングスは身代金を要求するのはまだしもこんなチンチクリンな少女と物静かな少年が使えるはずないから殺しちゃうん♪」

「ひどい……ほむらちゃんやソラくんだって言われたことないのに!

『まどかつて幼児体型だよね』って言ってるのに!」

「いや対して変わらないって。つーか、さりげなく罵倒してるからひどいなそいつら」

同情的な目で見るなら殺さないでよ、もう。

「あははは、ちよつとマズイね。うん、これはピンチだホント」

「なにカラカラ笑えるのよあんた!?! なんて銃口向けられているのに平気なのよ!?!」

「そりゃあ毎日見えますから。主にほむらちゃんがソラくんに向けている光景で」

「あいつ、ホント何したの!?!」

バスルームでラッキースケベが起きちゃってね。なんで毎回、起きるのかな。

ソラくんってそういうスキル高いのかな？

よし、今度は下着姿でスタンバつとこ。ラッキースケベを作り出して、そのまま既成事実にもっていけば。ティヒヒヒ……。

「なんなのこの少女？ めちゃくちゃ笑ってるけど、随分余裕じゃないですか。死ぬ覚悟ありますってことですかア?」

「冗談キツイですよキモイ人」

「キモイ人!?!」

「そりゃそうですよ。だって月村さんの一家をストーリーカーレベルまで知っているし、しゃべり方が気持ち悪いですよ♪」

「君ってよく満面な笑みで毒が吐けるね!?!」

吐きますよそれはもう。姉に鍛えられていますから♪

「それに私は一切死ぬ覚悟はありません。怖い時は怖いですが。今でもビクビクしてます」

「じゃあ、なんで悲鳴の一つも上げないのですかア?」

「そりゃあそうですよ。もうすぐ王子様が来ますから」

この人達にメルヘンな娘って目で見られてるね私。呆れた彼らはトリガーを引こうとする。

でも怖くない。だって約束したから。

いつだって、どこにいたってあの人達は来てくれる。

ドツツツゴオオオオオン!!

「なんですかア!？」

「大変です! 表にいた連中がバズーカで——ほむん!？」

「部下一号オオオオオオ!？」

ゴム弾が部下一号な男の人に直撃した。

私は銃を使う人を知っている。ああ……………やっぱり——

「ほら、来てくれた」

私の王子様と白馬が。

ヒーローとその相棒がそれぞれ信頼する武器をもってね。

最高の友達と、最高のお助けキャラが、ね♪

第二十話 五木雷斗は巻き込まれやすい

(雷斗side)

どうも五木雷斗です。なぜか知りませんが巻き込まれた人です、はい。

確か一つ上の学年の『アリサーバニングス』さんと『月村すずか』さんでしたっけ？

その人達の事件に巻き込まれてここにいます。

どうも俺には関係ないことなのに、その場に近くにいたという理由で連れて来られた挙げ句殺されそうになりました。

ずっと静かにしていると桃色髪の女の子が真正面に向かって言った。

なんでも彼女には救いのヒーロー的な人がいるそうです。俺には到底理解できないことだった。

そんな最中、爆発が起きて部下の一人がゴム弾で撃沈した。

薄汚い廃工場にて、誰もが刮目した。ヒーローのごとくその男女は堂々と真つ正面から現れたのだ。

一人の少女は『グロック17』を片手に黒スーツの連中に向けて構え、もう一方の手で鎖を掴んでいた。

一応、鎖は武器ではない。

理由はもう一人の少年でわかる。

少年の片手にはカギのような黒い剣と——首には鎖で繋がった首輪。

ザ・ワンちゃんな状態であった。

「なんで神威に首輪がついてるのよ!？」

ごもつともです、バニングスさん……。あとソラ、なんでそんな死んだ魚の目なの？

(ソラside)

バニングスのツツコミはもつともだよ。ここに来るまでにほむらにいきなりつけられた。

外そうにも外れないとても強力な首輪である。

なんでオレにこんなものをつける必要があるんだ？

そう聞くとほむらは、

「私の願望という名の趣味よ！」

「堂々と言えることそれ!？」

「そう私の名前は朱美ほむら………趣味とネタには全力全開が私のモットーよ!!」

「力に注ぐ方向がなんか歪よあんた！」

「さすがお姉さま！ 同感だから後でそれ貸して！」

「朱美妹?! あんた鼻息荒くして何するつもり!？」

バニングスがツツコむものの、朱美姉妹は愉快そうに笑うばかり。

シクシク………彼女達にとってオレはオモチャなんだね
………頼むからバニングスと月村、それに呆然としている雷斗よ

………同情するなら助けてよ。

誰か癒しをください。

「逝きなさいソラ。かみつく攻撃！」

「ウ ガアアアアア！ もう焼けクソソじゃコノヤ
ロオオオオオオオオオ！」

オレの怒りのキャパティシーは越えた。

どこぞのポケットに入るモンスターのごとくヤツらに向かって駆け出した。黒スーツ連中は撃ってきたが神器全てを開く者を盾にし、一人の男の頭にかぶりつく。

「ぎやアアアアア!？」

「部下二号オオオオオ！」

「撃て！ 撃て！」

「だめです！ 撃てば部下二号まで巻き添えです！」

混乱した中でほむらもまた『グロック17』で彼らの銃を撃ち落としました。そして、茫然としていた一人に華麗に自身の美脚で踵落としを決めた。

「蹴り心地悪いわ。やっぱりソラじゃなくちや」

「気合い入れてあいつを満足させろやコノヤロオオオオオ！」

「なにそのりふじ——ぎやアアアアアなんか吸われるウウウウウ!？」

とある吸血鬼さんから伝授してもらったエナジードレインという魔法である。

魔力、活力、生命力などあらゆる力を吸いとれる。

まあ個人の絶対量までしか吸えないけど。

「こいつも夜の一族!？」

「誰が淫乱だとオオオオオ!？」

「そっちの夜じゃねエエエエ!？」

関係ねえ！ 全員一人残らずぶっ潰す！

オレは次の獲物に噛みついた。

「ね？ 王子様が来てくれたでしょ?」

「いやアレ王子様!?! 怒り狂った番犬にしか見えないのだけど!?!」

「王子様はほむらちゃんだよ。ソラくんは……………うん、その、犬でいいかも」

「そっち!?! ていうか神威は犬なの!?!」

「というかもう獣になってるよね?」

あーあー! 聞こえない!

雷斗とバニングスが何か言ってるがもう知るか!

全員倒れるまで噛みつき、吸いとる!

「待て！ 月村は吸血鬼だぞ?! なぜ化け物を助けようとするのですかア!?!」

「知るかボケエエエエ!」

頭っぽい人の顔面に懇親の右ストレートが入る。

水平に吹き飛んだソイツはほむらに向かっていき、そしてトドメと

うん、さすがいないそれ。ボディービル顔負けの肉体変化が起きる吸血鬼とか見たことないし、見たくないよ……………。

結論。月村家化け物説は――

「二化け物説ガセじゃん……………。」

「なんであからさまにガツカリされるの!？」

全員から吐かれた嘆息に抗議してきた月村。いや……………だつてねえ……………。

「いやーなんか知り合いの仲間がこんなところにいたのかと期待してたから、ちよつとガツカリ」

「初めての吸血鬼がこんなのだなんてガツカリだよ。私のワクワク返してほしいよ」

「ガハラ先生の恋人の僕の仲間しもべと思つたじゃない。私もガツカリだわ」

「アリサちゃん、私もう泣いていい?」

もう泣いてるじゃん月村。バニングスのまっ平らな胸で。

あとほむら、まさかと思うけどお前がそんなツンドラになったのがハラ先生のせいじゃないよね?

恋人さんの下僕つてキスでシヨットな名前だった吸血鬼じゃないよね?!

「なんなんですかア……………なんなんですかアお前らア!？」

頭つぽい人があげた疑問にオレ達は腕を組んで考えた。
なんだつて言われても。

「神器使い」

「元女神」

「元悪魔」

「ふざけてるのかテメーら!？」

どうやら怒らせたみたいなのでヒソヒソ話の会議を開始。

「オイどうしてくれんだよ。まどか、ほむら。お前らのせいであの人ら激おこポンポン丸じゃねえか」

「仕方ないでしょ。何者かって問われたら、最初に出てくるのは悪魔だし」

「同じく」

「統一しないと逆に混乱するじゃん。それに二人が言ったそれこの世界じゃかなりイタイぞ」

ヒソヒソ会議を始めていると頭っぽい人がキレ出した。

「ヒソヒソ話でデイスらずさっさと答えろオ！ 何者なんだよテメーらはア!？」

「うっせーな。それを今デイスってるんだから黙ってる」

「ピーピーうるさいわね。『グロック17』の実弾受けたいのかしら？」

「眼を抉るよ♪」

「なんで自分がここまで言われるの!? つーか最後のヤツめちやくちやコワッ!」

ツツコミうるさいなあ。ガムテープで黙らせるか？

「いやいつそ『閉じる』か」

「何言つて——……? ……?!？」

全てを開く者
神器を向けて封印砲発射。当たってガチャリと口から音が聞こえ、頭っぽい人の声は『閉じた』のだ。

声帯を閉じればそうなるわな。

「あ、今さらだけど一言で言い表せる言葉あるわ」

「奇遇ね。私もよ」

「それじゃあ一緒に言ってみようよ♪」

まどかの提案を飲んで、一息をついて言った。そのとき頭っぽい人は恐怖のあまり顔を青くしていた。

「二(化)け物(さ)(よ)(だよ)二三」

それを聞いた頭っぽい人は恐怖のあまり、ブクブク泡を吹いて倒れた。情けないねえー。

「すずか無事!？」

「助けにきたぞー!」

ありま、今さら救出かよ。さてと邪魔者はとっと退散——

「あんた、うちのすずかになにしたのよ……?」

……………えっ?」

なんで睨まれてるの？

なんで銃口向けられてるの？

ちよつと整理してみようか。

泣いてる月村。

慰めるバニングス。

知らない少年とその武器。

………明らかに悪役じゃね？ オレ……。

「そうよ。月村さんに乱暴して『ズツキュウウン』なキスを無理矢理したのよ。それで月村さんは泣いちやつて……」

「何あらぬこと言ってるんほむら!? ってあれ？ さっきいた連中は!?」

「時間停止で外に放り投げたわ。ソラを悪役にするため」

「なんでこんなことするんだよ!?!」

ほむらは、妖艶で、満面で、周りが魅了されそうな笑みで答えた。

「好きな子をいじめたいってヤツよこれは♪」

「シヤレになんねエエエエ!?!」

「オルアアアア! うちの妹泣かした男はテメーかアアアア!!」

「キヤラ全然違つてないお姉さん!?!」

「ディア、マイ、シスタアアアアアアアア!」

ウガアアアアア!?! マシングンの嵐がきたアアアア!?!

オレはそれから逃走を開始するのだった。

「ほむらちゃん、さすがにやり過ぎじゃないかな……」

「そうね。でもまどかとデートした彼が少し許せなくてつい、ね。嫉妬しちゃったわ。まどかとソラに……。それに……」

「それに?」

「今泣いてるソラはめちやくちやかわいい!」

「同感だよ!」

ほむらサムアップ。まどかサムアップ。

マジでそんな理由!?

「これはまどかの魔法少女で涙目に匹敵するわ! 激シヤよ激シヤ!」

「なんか不穏な発言あったけど、私も激シヤ！　そして泣いてるソラくんを慰めればベッドインになるという策略完成！　まどかちゃんマジ策士！」

「私も混ぜてねまどか」

「いいよ♪」

本人そっち退けてなにやってんだお前らアアアアア!?

前半ちよつと反省したのに、後半で台無しだよ！

「離して恭也！　ここで妹を犯したこいつを亡き者しなくちやいけない使命があるのよ！」

「だからってここでRPGはシヤレにならんから！　というかソラくん逃げてエエエエエ！」

壁際まで追い込まれたオレはめちやくちや目がウルウルして泣いてたそうだと二人は語っていた。

ちなみにカオスな現場が収まったのは、数時間後の月村とバニングスの説得だったりする。

せめて早く止めてよ。え？　なんかキユンときたからあえてしなかつた？

彼女たちの将来が不安になった。

第二十一話 対話する。そしてカオス！

その日の夕方、オレ達三人こと誘拐に関わった組全員が月村邸に呼び出された。

月村邸はアンティークな造りの洋館で、まあお洒落と言えばお洒落だ。庭に某宇宙戦争のドロイドを見るまでは。

なんだよドロイドって……。

『月村の技術力は世界一イイイイツツ！』なのか？ ドイツ軍に所属なのですかコノヤロー。

それはさておき、豪華な洋館のとある一室にて、青年と女性に相對する形で、オレ達はソファーに腰かけていた。

青年の名前は温泉で出会ったナイスボーイ——高町恭也さん。

んで、その隣に女性の名前は月村忍さんという、月村すずかの姉である。

ていうか、この人シスコンだった。バーサーカーと化したシスコンは恐ろしいと思った。

ちなみにあの後、誘拐犯達は月村家の関係者によって連れて行かれたそうだ。

彼らが日の光を浴びる日は来ないかもしれないと思ってたりする。

「話を始めよう——としたいが良いのかい？ 彼女達は……」

「はい。これで良いです」

友達と言えばまどかかとほむらである。家に連れて行かれる前、彼女はオレが首輪されてることを良いことにワンちゃんプレイをしようとしやがった。

なので何をしたかと言うまでもない。

拳骨制裁である。

「うう……頭がクラクラする……」

「あうう……いつになく容赦ない……」

頭のタンコブを抑えて痛みに耐える二人の少女が絨毯に転がって

いた。そりゃあ、オレの全力全開の拳骨ですから。

「ひどいわ……女性に手をあげるなんて、いつからそんな鬼畜になったのかしらソラ……」

「ほう？ オレに今までしてきたことを踏まえての発言なんだなそれは？ ならお前にはこの後にクラスメイトの前で公開オシリペンの刑を考えてやろうか。あ？」

「ごめんなさい！ それだけは無理！」

ニツコリとほむらにそう言うのと土下座してきた。

クールビューティーを貫いてる彼女でもさすがにこの羞恥と痛みは嫌なのだろう。

「うう……でもこれも試練だよほむらちゃん。そう、ソラくんをお嫁入りするにはこんな試練を乗り越えなくちゃ！ さあ、カモン！ 私はSでもMでもいけるから！」

「お前は全力全開のチョップな」

「ふぎやー！」

潰れた猫のような断末魔をあげて淫乱生物は地に伏した。頭のタコブから湯気が出ているのは気のせいじゃない。

「オレさ……もう遠慮しないことにしたんだお前らに……。千香は究極の変態だからいつも遠慮しなかったけど、もう我慢が天元突破しちゃった。女子だろうと、子どもだろうと、老人だろうと関係なくセクハラには遠慮なくツツコミとお仕置きしてあげる♪」

「ひう……！」

おやおや、ほむらちゃんが怯えちゃって。オレはそんなに怒ってないからねー？

アハハハハハハハ！

「忍、どうしよう。ソラくんから般若の化身が出ているのが見えたよ。うな気がする……」

「奇遇ね……私もよ。なるべく彼はからかわないようにしないと……」

二人は何を言ってるか僕わかんない。

閑話休題

二人の説教が終わり、オレ達はなぜ月村達と一緒にいた経緯を話した。納得してもらったが、月村達をなぜ助けたか聞かれた。

「私は彼にお願いされたまでよ。まどかのついでよ、ついで」

「なんかクラスメイトがいなくなるのが少し嫌だったからなあ」

「ソラ、本音は？」

「ぶつちやけ、いなくなると恭也さんの妹さんにさらに目の敵にされそうだったし。正直、めんどいから」

「ぶつちやけすぎだろ……」

そう答えると思わず手を覆い隠す恭也さん。

いやあ、自分は正直者ですからねー。

「それに君が神威だったとはね。なのはから聞いた話と大分違うが……」

「私もよ」

話が違うつてなんだよ。

ちよつと不安になってきた。なので、どんな話ですかと聞いてみた。

曰く、女の子に気持ち悪い目で見てくる。

曰く、女癖が悪い。

曰く、六人の少女をとつかえひつかえで侍らせている。

そんな誤解をされていた。何そのクズの権化。オレはここまでひどくないはずだぞ。

「ちなみにソースはどこから？」

「生田ミカという行方不明になってる女の子から」

(死んでも迷惑かけるヤツだな)

こう言つちやあなんだが殺して正解だった。このまま悪い誤解を生み出し続ける存在がいたらいずれ社会的に抹殺される。とりあえず、その誤解を解くか。

「そんなわけじゃないですよ。気持ち悪い視線はつきり言えば、『邪魔、消えろ、どっか行け小娘』って言う嫌悪の視線でしたし、女癖は明ら

かに噂だし、六人の少女なんて勝手にこっちにくつついてくる友達ですから」

「物凄く毒を吐いたね君は。わかったことがあるとすれば君はなのは達を嫌っているのかな？」

「さあ？ 無関心、と言った方がいいですかね。嫌われたらもう嫌って結構。近づかなきゃいいし、視界に入れなきゃいいと思ってます。嫌らう者がいるなら、オレもそいつのことは嫌いですから」

逆に言えば好意的であればそれなりに返すが。

ニツコリとそう言って笑顔で返すが、オレの目は笑っていない。恭也さんもそれはわかっていているだろうか何も言わない。

「だからと言ってあなた達二人を敵と見ませんし、嫌いにはなりません」

「どうしてだ？」

「神威と言う名前と聞いて警戒はしましたが嫌悪的な目でみなかったからです。さらに恭也さんとは温泉で良好的でしたしね」

オレはそう言って立ち上がる。そろそろ帰らなきゃママさん辺りに説教されそうだ。

「さて、もう話すことはありませんから帰ります」

「そうは行かないわ。あなたには私達の秘密を知った。帰すわけにはいかないわ」

恭也さん達と同じく廃墟に突撃してきた二人のメイドが構える。一人は小さいがもう一人は大きな女性という姉妹と思われるメイドさんだ。

やれやれ……。

「はつきり言って分が悪いですよねそれ。未知なる力があるオレ達に挑むなんて。それにオレはバニングスや月村すずかを先に狙わないと思ってますか？」

「っ……！」

「なんでそんな顔をしますか？ それが戦いというものです。生き残るためなら、誇りや名誉なんていらない」

というか戦争じゃ当たり前だった。

そして捕まった仲間を問答無用に仲間ごと葬ることが多かった。幼い頃のオレはそれに何度も納得できず、抗議をしたものだ。

結果、大切な師を失ってしまったが……。

「あなた達が敵対するならそれでいいですよ。こちらも全力で排除するまでです」

「まどかを傷つけるなら一族全て葬るわ」

「あの……物騒なこと言っていますけど、とにかく敵対してほしくないなあって私は思っています」

まあ、まどかは元来から優しい少女だがほむらはマジでやりそうだな。

それからオレ達の間には沈黙が流れる。

「……………」

月村のお姉さんとの緊張はしばらく続いた――

「騒ぎに乗じて!」

「さやかちゃん参上!」

「助けにきたわよソラクくん!」

――時に、それを見事に空気と天井をぶち壊してくれたよこの三姉妹と変態は……!

「まさか天井から侵入するとはソラクくんマジびつくり」

「どうしようほむらちゃん! 見るからに高そうな天井壊しちゃった!」

「落ち着きなさいまどか。こういうときはソラのお小遣いから差し引けば全て解決よ」

「なるほど!」

「納得するな! なんでオレ小遣い減らされるんだよ!」

「まどかを泣かせるつもり?」

「真顔で『グロック17』構えるなよ」

解せぬ。これ以上小遣い減らされたら、金欠どころじゃすまん。拙者はお小遣いを所望する。

「まあなんにせよ。お前ら今更来ても――」

そう言いかけたとき、オレの直感が危機を告げた。すぐに神器を構えたが時すでに遅し。恭也さんがまどかを人質にとった。

「心苦しいが……その武器を収めてもらおう」

恭也さんはまどかの首辺りに小太刀を向けてそう言った。

チツ、見破られたか。この中で一番非力なのはまどかだ。

いくら殲滅力最強の神器使いでも彼女は物理的で殴り合うクロスレンジが苦手だ。こうなってしまうえば、まどかは人質にされたままだ。

当の本人は呑気に「うわあ、本物の刀だ」と言っていた。余裕だなオイ。

いやオレも心配してないけどさ。

「はいはい、みんな神器を」

なんせここに居るのは『神器使い』——人間のくくりを越えた猛者達。

要するに、甘いですよ恭也さんってことだ。

ここに居る神器使いの中で一番役に立つ神器がある。オレはそいつとアイコンタクトをとり、合図した。

——カチリ、とスイッチが鳴った。世界は白黒になり、そいつ以外は止まり、そいつはまどかを助けて、再び『神器』を鳴らした。

カシヤリ、ブーン

「やっぱ出しておいて、警戒して頂戴」

その音が鳴り終わり、オレがそう言ったときには、まどかは既に恭也さんの手の中にはなく、まどかはほむらによってお姫様抱っこされていた。

「何をした!?!」

「ほむらが『神器』を使ってまどかを助けただけですよ」

「『神器』……だど?」

「魂を武器にした物。特殊な力がある武器です」

「……………」

「まだやるつもりですか？」

「……いや、このまま戦えば明らかにこちらが不利だ。そうだろ忍？」

「ええ……まさかこんな化け物染みた力があるなんてね……」

やや呆れ気味に戦意損失してくれたようだ。

「私達の秘密を喋らないほしい。これは警告であり、お願いよ」

「周りからしたらイタイタしい人と思われますから承りました。ちな

みに夜の一族が吸血鬼つてのも些かオーバーだと思えますしね」

「どういうことよ？」

「どういうことつて……」。

「本物にも会ったことありますよオレ」

「ええ!？」

「あ、私もあるよ」

「まどかと私が幻想卿に迷い混んだときにね」

「いやーあれはかわいい見た目で攻撃がめちやくちやエゲツなかった

なあ」

そんな吸血鬼いたんだな。ポカーンとなぜか恭也さん達は呆然と

していたが。

「んじや、帰るか」

オレ達は『ドコでもドア』を展開してその場から去るのだった。

その夜、自宅にて。

「見て見て。さっきのイケメンさんの技！」

「おお、スツゲー！ あつという間に消えた——……あれ？ どうしたのさやか」

「ものすごく……頭が痛いです杏子先生、ぐおお……」

「さやかちゃんの規格外に開いた口が塞がらない」

恭也さんの技を一目見てコピるこいつやっぱ天才だよ。アホだけどね。

第二十二話　これってフラグ？

やや曇り空な天気。そろそろ夏休みが近い今日この頃な日にて、オレはさやかと杏子共に公園に向かい修行していた。

昨日覚えた『神速』という技をマスターするためだ。厳密には恭也さんからコピった技だけど。

「あ、慣れた」

「規格外過ぎじゃね？　お前、前世でオレと剣の鍛練したときあつという間に追い付いたじゃん」

「天才完璧美少女さやかちゃんには不可能はない！」
「敢えて地雷へ突っ込む欠点さえなければね」

この前なんか体重のことでほむらと喧嘩したもんな。第二次ほむさや大戦は回避されたが、もうあれは勘弁してほしい。

「時間余ったね。どうしようかね〜？」

「チラチラたい焼き屋とオレを見んな……」

「じゃあ買ってくれ！」

「お前に遠慮という文字はないのか杏子よ」

堂々と言うのは美点だけどき。ここ最近金欠なオレにはたい焼きは辛いのをわかってるのか？

まあ買うけど。なんやかんや言ってオレは甘いな。

オレはたい焼きが売られている屋台に足を運び、カスタードとアンコを二つずつ買った。

すると帰ってきたときにはさやかが知らない金髪オッドアイ少年に絡まれていた。

金髪少年は衛というポジションなのだが、あいつは赤目だったなあ。

「貴様、俺様の嫁になに話しかけている？」

「さやか、いつの間に結婚したの？　聞いてねーぞ！」

「んなわけないでしょ！　こいつがいきなり絡んできたのよ！」

そうなの？ てつきりそんな関係かと。プンスカ怒るさやかはオレと杏子に向かつて言ってきた。

「あたしをなんだと思ってるのよ！」

「アホ」

「バカ」

「やっぱりかククショウー！ てか、アホじゃないって言ってるでしょ!? というか杏子にだけには言われたくない！」

「アホだからキュウベえに騙されたのにか？」

「うん……そのせいで恭介取られちゃって……ああなんで契約しちゃったのかな私………」

出た、鬱モードさやか。天真爛漫な彼女にとってこの話はトラウマである。タブーである。

ヤベー地雷踏んだ。

「貴様！ 我的嫁をなに落ち込ませてやがる！」

「いやーまさか自分も地雷踏むとは思わなかったなあ……失敗失敗」

「そのわりにはなんで笑顔!？」

「最近キチガイ姉妹にいじられる毎日でこんな愛玩生物いたら癒されるだろ普通」

「動物!? 美樹さやかを愛玩動物扱い!？」

シユンツとなったさやかはかわいいなあもう……。

さてと、堪能したし。ちよつと真面目になるか………。

「なんでお前がさやかの前世の名前知ってる？」

「だな。何もんだテメー」

「貴様らも転生者ならわかるはずだろ？」

こいつ……まさか………。

オレが驚愕した顔になると偉そうな顔でオレと向き合う。

「そう我もまた転生者。名前は神条シンヤ！ そしてこの世界では――」

「さやかのストーカーだ?! 馬鹿な！ こいつにストーカーついたことないのに！」

「オiiiiiiii! なに変な誤解してんだお前エエエ!？」

違ったの？ シャウトされちゃったよ。

「いやオレの中ではもうオリ主くん決まっているし、残るはストーリーカーと海蘊もずくしかない」

「ちよつと待て！ モブという役職は!? そしてなぜ海蘊もずくという役職が存在する!?!」

「さやかの親友兼泥棒猫さんにあつた役職を踏まえて」

「ワカメか!? あのワカメことを言ってるよな!?!」

仁美のことも知ってるとはさすがさやかのストーリーカー。マジ物知り。

「違ふと言ってるだろう！ ストーカーから離れろ！ 美樹さやかと佐倉杏子のことはアニメ原作で知ってる!」

「ハハハ、何言ってるのだコイツ。アタシとさやかがアニメの住人なわけねーだろ」

「だな。てか、あつても『寝取られ少女 さやか☆エンド』だろ」

「それぜつてーアニメ化しちやいけないヤツだろ。てか、『ねとられ』つて知らねーが不穏な単語使うな」

杏子さんがお怒りだ。ロッキーを与えねば。

与えろと小動物のように食べ始めた。

あらやだ。かわいい。

「くそつ、もう許さん!」

なんかストーリーカーくんの背後から槍やら剣やら武器がたくさん出てきた。『召喚術』というわけでもなく、黄金の穴から武器が飛び出すというものだ。

「王の財宝の前にひれ伏せ!」

そして一斉に射出。一見逃げ場なしかと思われるが、バラバラなタイミングで発射されているため、僅かな隙間があるのでまだ回避できる。

というかこれと似たビームバージョンの神器使いと戦ったことある。

あのときは神器をマジでバットののように打ち返すしかなかったなあ。まあそいつはもちろん惨殺したが。

そんなことを考えていたオレはヒラリヒラリと回避し、さやかのもとに近づく。

「バイオリン壊すバイオリン壊すバイオリン壊すバイオリン壊すバイオリン壊す……ブツブツ」

トラウマでさやかに眠るバイオリン破壊症候群が再発したようだ。そんな彼女の耳元にオレは呟いた。

「あいつ、バイオリンをたしなんているらしいよ」

「ブロークン・オブ・バイオリイイイイイイインツツツ！」

覚醒。

説明しよう！

さやかちゃんは過去のトラウマにより発症したバイオリン破壊症候群でバーサーカーと化し、バイオリンをたしなむ者及び持つ者を殲滅する能力があるのだ！

つまるところ………計画通りである。ニヤリッ。

「グルアアアアア！」

「何いイイイイイ!? 全ての王の財宝を掴んで投げ返しているだど!?!」

「ユルサンゾオオオオオ！」

「み、見えなくなっ——くぺ!?!」

さやかがストーカーくんの背後を取り、背中に飛び膝蹴りを決めた。

こうかばつぐんだ！

ストーカーくんはそのままゴロゴロ転がり立ち上がる。

「おのれ……このオリ主である我が……我が………」

「うーん、このまま帰すのもなんか厄介そうだし。よし、いきなり襲ったお前さんには罰を与えよう」

オレはニコニコしながら神器でストーカーくんの身体に差し込む。グツと苦痛に苦しむがそのまま神器を回して、ガチャリと閉じた。

「馬鹿め！ 近づいたのなら串刺しに……あれ?」

「お前の……王の財宝だっけ? あれと残りものも使えなくしたから」

「な、なんだと!?! くそっ、ホントかよ!」

ストーリーカーくんはオレの胸ぐらを掴んで抗議してきた。

「さっさと解除しろ! でないと——」

「でないと……どうする?」

オレは手でゆつくりとストーリーカーくんの掴む指を一本一本服から離していく。

「今のお前はなにもないただの人間だろ? そしてもう特別でもない」

「っ……!?!」

「しかもモブとたいして変わらない、一般人とたいして変わらないただの普通の子ども。そんな子どもが能力を封印した化け物を脅すなんて………随分無謀で勇敢だねえ」

三日月を描いた笑みをしてやるとストーリーカーくんは尻餅ついて後ずさる。ブルブル怯えた彼にオレはさらに追い撃ちをかけるつもりで、神器の剣先を彼に向けた。

「これって封印だけでなく、肉体から魂を切り離せることもできるんだぜ? つまりリアルな幽体離脱ができるんだぜ?」

「あ、ああああ………」

「んじや、一回——シンデミル?」

「うああアアアアアアアアアア!!」

恐怖に歪んだストーリーカーくんはオレから逃げ去った。別に殺すつもりは最初からないので追わない。

転生者とはいえ、あれはトラウマは確実だな。本物の化け物と出会って改心することを祈ってやろう。

「グルルル、おのれ………バイオリンめ………あたしから初恋奪ったバイオリンめ………」

とりあえずこのバーサーカーを止めるか。ちなみにアンコとカスタードのたい焼きを食わせたら元に戻った。

☆☆☆

本日は晴れなり。そして訪れた夏休み前の初夏にダルそうに学校にきたオレはボーと空を眺める。クーラーがガンガン効いていたことに密かに喜んだりする。

ちなみに昨日出会ったストーカーくんもとい神条シンヤくんは今日は休みらしい。

女子には人気らしかったのがっかりしていたと杏子は語る。

あいつ、どっかで見たような……………ま、いつか。

今はこのユートピアを楽しもう。あークーラー気持ちええー。

「ソラ、海にいくわよ」

「唐突すぎますな、ほむらさんや」

「そう、私の名前は朱美ほむら」

「また始まった……」

「唐突と理不尽という名の元にソラを生き埋めにするお茶目な女の子」

「お茶目という次元じゃねえだろそれ!？」

「好きな人ほどうじめたい乙女心よ」

「お前の乙女心は重すぎるー!」

いつも通りなオレ達である。ということ明日は夏休みである。

明日は海に行くことになった。

さてきて、どうなることやら。

「まどかがアダルトイナビキニ挑戦させようかしら」

「よろしい説教だ」

ほんつといつも通りだなオレ達って。

なお、その日。またストーカーくんが衛をボコってはやてをナンパしていたところを遭遇したので、徹底的にぶっ潰したが。

(??side)

神条シンヤは病室にいた。あの化け物——神威ソラにボコボコにやられ、なおかつ腕や足を折られたのである。

（おのれおのれおのれおのれえ……この俺様があのモブなんか遅れをとるなんてえ……！）

憎い。悔しい。妬ましい。

原作キャラとの邂逅が遅れ、それを取り戻すために八神はやたと遭遇したがすではやては見ず知らずの男と仲良くなっていた。

邪魔だと思い、その男がはやてを洗脳していると勝手な解釈をして、その男——天道衛を殴って蹴った。

普通なら倒れてもおかしくないのだが、衛は何度も何度も立ち上がり、はやてを守ろうとしていた。いい加減に鬱陶しくなってきたのでデバイスの魔力刃で殺そうとしたが、そこにやってきたのが神威ソラ。

彼は素手でシンヤを無効化し、そして徹底的にやられた。

友達をやってくれたお礼だと言わんばかりに。

腕、足、歯、肋骨、指という骨という骨を殴打で折った。もちろん、はやては衛の手により『見せられないよ！』をされていたため、悲鳴をあげることなく、ただブルブル震えていた。

BGMが苦痛の断末魔と痛々しい打撃音なので無理もない話である。

それはさておき、神条シンヤは怨めしく思っていた。神威ソラにより、自身の一番の特典が『封印』されてただの人間され、しかもただの人間とも言える男すら倒せなかったという自身の不甲斐なさ。

ゆえに彼は黒い炎を胸中に燃やしていた。

（殺す……いつかこの手でヤツを……ヤツらを殺す……！）

その想いに答えるかのように病室の壁からヒョッコリと黒いロブを着たモノが現れた。

その者は彼を見てただ口角を上げ、見ていた。

翌日、神条シンヤは消えた。行方不明となった彼を心配する者はいなかった。

——
ゆえにその異変にソラ達は気づかない。

閑話 衛の決意

我……いや我の名前は天道衛。転生者だ。

神のミスというテンプレな転生をした。いやあの老人はワザとそうしたと言っていたな。

とにかく我は最強の肉体とニコポ、ナデポという特典にされ、髪も派手にされ、『リリカルなのは』の世界に転生された。

転生される前、我はあの神により『原作キャラに嫌われる』という呪いをかけられた。この呪いは踏み台を演じないと身体を蝕み、苦しみを与えるという辛い呪いだった。

そのため我は感情を殺し、踏み台を演じた。

辛かった。

悲しかった。

苦しかった。

なんで自分はいつもの思いながら、と思いながら生きてきた。そんなある日、我は踏み台として一人の少年を手をかけようとした。

銀髪で青目の男である——神威ソラである。

罪悪感と謝罪を込めながら、我は彼と襲撃した。そうしなければ我はまた心臓を蝕まれ、苦しみと痛みの地獄に追いやられるのだ。

まあでもいつそのこともあった。彼が強ければ我は死ねるかもしれないと思っただからだ。

そして戦い、敗北した——我の呪いを解いて。

驚いたことに、彼には呪いを解く術があったのだ。我は感謝した。泣きながら何度も何度も自身のした行いに謝った。

それから彼のところに何度も赴き、関わった。天宮草太には怪訝な顔されていたが、神威ソラこそ我が友と呼べる盟友だった。

当初は近づきがたい雰囲気を出していたが、次第に柔らかくなり、いつの日か一緒に遊ぶ間になった。

遊んで、笑って、泣いて。

そんな毎日を過ごすうちに、我は車イスに座る薄幸そうな少女に出会う。

八神はやて。原作ではどうだったか忘れてしまったが無理した笑顔をするという印象がある少女だった。我はその顔は忘れられそうもなかった。

一目惚れ、ではなく悲しそうな寂しそうな迷子になった子どもになったそんな表情。

我はその顔を忘れなかった。

そんなあるとき、我の家がどこかの争いにより全壊してしまった。帰る家を無くし、最低限の荷物を持った我が浮浪していると、はやてと遭遇。

事情を説明したら「だったらうちに来たらええやん」という提案だった。もちろん断りはした。

いくら幼いとはいえ、婦女子のお宅に居候するのは些か気が引けた。

しかしはやては気にしておらず、まどろっこしいと思ったのか荷物を奪われて家に連れて来られた。

こうして我ははやてとの居候が決定したのだが、まさかこうなると思わなかった。

原作キャラの少女と居候することになるのは誰も思わないことだ。しかし我はふと思うのだ。

——我は、我が友と違い……特別じゃないから

強くないから。

弱いから。

ゆえに劣等感を感じるのだ。

それははやてにも対してだった。

なぜならはやては『強い』から。

☆☆☆

我とはやてはスーパーにて買い物を買って済ませ、少し休憩をとっていた。近くの公園でそろそろ夏が近い。

我が学校もまたそろそろ夏休みである。夏休みが始まれば遊ぶ学生は多いが、私の予定には全くない。

我が友と遊ぶという予定なら立てられるが、まあ学校には我が友以外の友と呼べるものがない。

元々、草食系男子だったゆえにな……。

我ははやてを休ませているベンチに向かうとそこにははやてに絡む金髪のオッドアイがいた。

名は確か、神条シンヤだったか……？ はやては迷惑そうに困った顔で彼の相手をしていた。

「はやてよ、そろそろ帰るぞ」

「ああん？ テメエ、何者だ」

「はやての知り合いだ。彼女の介護を請け負っている。ゆえに彼女の持つ荷物を持たねばならぬ」

「だったら荷物だけでもってさっさと失せろよ。テメエには用はねえんだ」

「そうもゆくまい。冷蔵庫の中に置く位置をはやてに指示してもらわねば彼女には不服の結果を残す。ゆえに連れて帰った方が効率がよい」

私の言葉にだんだん苛立つて来たのか、剣呑に睨んできた。少し怖いだが、ここで引くのはゆくまい。

はやての友であるがゆえに、我が彼女を助けねばならぬのだ。

オッドアイは私の胸ぐらを掴むや否や、我を殴ってきた。

「調子にのんなよモブが！」

「ぐがっ！」

腹部を殴られた。少し後退すると追撃の拳が我に当たる。

はやてが「やめて」や「衛くん！」という悲鳴をあげる。

神条は今度は、デバイスを取りだし、セットアップして魔力弾を

放ってきた。

「ご丁寧に結界を張っており、周囲にははやて以外の人の気配がなくなっていた。」

これでははやてがいくら助けを呼んでも届かないだろう。

我もまたセットアップしようとしたとき、はやてを『バインド』で拘束し、魔力弾がいつでも撃てるように設置していた。

「おっと動くなよモブ。テメエが抵抗すればはやてはどうなる?」

「卑怯な……!」

「関係ねーよ。テメエをボコボコにしなきゃ気がすまねーし、あのはやてはどうせテメエに洗脳したんだろ? だったらテメエを倒してからゆっくり俺様の愛で解いてやるよ」

気持ち悪い笑みを浮かべ、我に次々と魔力弾を撃つ。その上、殴打されていく。

身体中が鬱血し、腫れてきた。

痛いし、辛い。痛みと苦しみにより、自身の弱さが滲み出てきた。ならいつそのこと倒れてしまえ。

はやてにはすまないが我が身がかわいいだろ?

だって仕方ないだろ?

我は弱い。弱いから助けられない。

結局、人間は自分のことしか考えられないのさ。

我の弱さ——小心の自分がそう呼び掛ける。

何度も倒れそうになっていた。なら倒れるか……?」

否……我は倒れるわけにはいかない……!」

我が倒れてしまえば……倒れてしまえばはやてがああ男に何をされるかわかったものではない。

二度と会えないようになるかもしれぬ。

何度も何度も意識を失いそうながらも、倒れてやらなかった。

我のそんな姿勢に神条はムカつき始める。

「なんでだ？ 弱いくせに、モブのくせになんで倒れねえんだよ！」

その叫びに我は嘲笑した。滑稽だ。なんと滑稽だ。

「もうやめて衛くん！ もうええから……お願いやから」

「たわけ……我ははやて。貴様を家に帰すまで倒れぬ」

「だからって衛くんがそんな無茶する必要ないやん！ 衛くんが死んで悲しむ人がおるやで!？」

悲しむ人……か。我はその言葉に答えた。

「我にはいない、そんな人……」

「えっ……?」

「私の家族はな……両親が既に離婚して、引き取った父親も女遊びばかりするクズみたいな男だったんだ……。おかげでクラスからいじめられるわ、借金で働かされるわで散々だった……。なんで前世の話をはやてに話しているのだろうか？」

……いや話したくなつたのかもしれない。

その話は事実だ。今も両親はいない。いなくてもトラウマで甘えることはしなかつたと思う。

「親戚に引き取られた後も、身内から疎まれて、引きこもったさ。だが……だけど、そんなときに我は見た。あるゲームをやつて、我は感動した」

ありきたりな物語と記憶に残っている。ヒロイン達と共に戦い、そして悪を滅ぼす姿が憧れた。

いつかそうなりたいと夢を見ながらも一度がんばつた。

結局、交通事故で死んで転生したが。

「転生した後、この世界でそうならうと何度も考えて……ああ……そうだ。思い出した……我は……」

——誰かのヒーローになりたかつたんだ」

そう呟いて理解した。なぜこの少女のためにがんばろうとしたのかを。

モテモテじゃなくていい。

お金持ちじゃなくてもいい。

家族がいなくてもいい。

誰かに見てほしかったんだ。

誰かに認めてほしかったんだ。

誰かに理解してほしかったのだ。

ただ純粹になりたかったんだ。そんなヒーローに……………。

「だが、所詮は神条の言う通りか……………。所詮、我は特別じゃない。だから……………」

「……………れるやん」

「？」

「ヒーローになれる！」

はやては涙を流しながら言った。それは夢を諦めないでと叫ぶ少女のように。

「ヒーローはな、特別じゃなくてええねん。無力でええねん。その人の心が救われたならソイツはヒーローやねん！」

「でも……………だけど……………」

「誤解してるねん衛くんは。ヒーローは完全無敵じゃなくてもええねん。人間でも、普通の人でもヒーローにはなれるねん!!」

「あ……………」

前世で言ってたヒロインの言葉と同じだ……………。

主人公は自分の弱さに嘆き、悲しみにくれながらもその言葉を思い出して立ち上がった。

その主人公

彼は特別だ。特別だったが、弱かった。

心が脆く、精神的に大人になりきれず、何度涙を流したことか……………。

その言葉を聞いて我は、気力が沸いた。力がみなぎってきた。

「我には……………もう力がないぞ」

「力がなくても大丈夫。守れることができる！」

「我には……悲しんでくれる人はもういない」

「なら私が悲しんだら。思いつきり泣いてやるで！」

「我は……我は……」

「うん……うん……うん……」

——生きて……いいのか？

そう呟くと彼女は太陽のような笑顔で、

「もちろんや……」

彼女の言葉が我を救ってくれた。もう絶望しない。

私の心は救われたのだ——彼女というヒーローに。

——何か成さなくてもいい。

——何も力がなくてもいい。

——誰かを救う意思と根性——そして優しい心があれば
ヒーローになれるんだよ。

かつて、言っていた我が友の言葉を思い出し、我は最後の力を振り
絞り突っ込んだ。

神条は魔力弾を撃ってきた。だが、気にせず突っ込んだ。

魔力弾が当たろうがお構い無く、ただ前へ走る。神条は私のその特
攻姿勢に焦燥したが、もう既に拳が届く距離。

私の拳は神条の顔面を——とらえることがなかった。

理由は障壁だ。魔力でできた障壁が我が拳を塞いだのだ。

我はズリりと身体が倒れ始めた。もう力が湧かない……。疲労と
痛みで身体が限界だったのだ。

「モブの分際で、調子に乗りやがって！」

神条は魔力刃を出し、我を突き刺そうとした。もう動けない我には
それを防ぐ手だてはない。

その魔力刃が迫る中で、我は神条の背後に何かいたのを見た。

その者は神条の腕を掴み、こう言った。

「よくがんばったじゃねえか、衛」

我が友だった。我が友——神威ソラは普段から見せない獯猛な笑みを浮かべ、言った。

「あとはオレに任せろ。ヒーローの役目は終わりで、

——こつからは処^英刑^雄人の役目だ。大人しく寝てろ」

我が最後に見たのは『バインド』から解放されたはやてだった。

(はやてside)

わけのわからないヤツに傷つけられた衛くんに急いで近づいた。勢いのあまり車イスから飛び出してしまったところを、白髪の少女に受け止められた。

「あんたは……?」

「天ヶ瀬千香ちゃんよん。まあ、あそこでぶちギレてる少年の奴隷だよ」

「オイ、いつからオレはお前を奴隷にした?」

金髪のオッドアイから目を離さず、背中からツッコむ。彼女はそんな彼をスルーして、衛くん^に光を当てる。

「それはなんや?」

「ボク達を使う治癒魔法だよ」

「そんなファンタジーなんて……あ、ごめん。前にあったわ。衛くん^に気をとられ過ぎて思い出せなかったわ」

「でしょ?」

あのとき『魔女』という得たいのしれない化け物に追われて、謎のマッチョが戦っていたときのことや。あれ、一応ファンタジーやったわ。

異論は認めへん。

「てか、ソラくん一人で大丈夫なん? あのファンタジーな力なんか、あの金髪オッドアイにも使えておったし」

ボキボキ!!』と碎ける音と共に地面に叩きつけられる。

いったいどうなったかみたいところやけど、おそらく『見せられないよ!』と妖精さんがプレートで覆い隠してる光景やろな。

『NARUTO』最高オオオオオ!』

『螺旋丸』かけエエエエ!!』

『ここで別作品宣伝すんなやアアアア!!』

ソラちゃんと千香ちゃんのメタ発言についてツツコンだのは無理のない話やで。

(衛side)

そんな事件から数日後、我は無事完治し、学校を終えてから我ははやての家に帰ってきた。

神条はもう立てないくらいやられたそうで、まあ死んでないから大丈夫だよ!と我が友は言っていたが、いつ慰謝料を追求されてもおかしくないからな?

それはさておき、今日ははやてにお知らせがあったのだ。

「あ、おかえり衛くん」

「ただいま、はやて」

我はカバンを置いて、はやてに聞いた。我が友に誘われた海水浴とというのが、今回のお知らせだ。

それを伝えるとははやては「よっしやあ! 水着の姉ちゃん拌める!」と親父発言をしながら喜んでいた。

(元からこういう少女だったっけ? ……いや元からか。うろ覚えだがなんか原作キャラではこんな感じだったな)

後におっぱい星人の誕生やもしれぬ。まあいいか。

我が微笑を浮かべているとははやては意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「ほほう、この美少女と共に住むことがうれしいやな?」

「そうだが?」

「ふえ!？」

自分で言っておいて顔を紅くするはやて。何を紅くしているというのだ？

事実だろうに。

ま、こんな幸せいつまでも続いてほしいものだ。

——— 我の名前は天道衛。はやてを『護る』ヒーローだ。

第二十三話 夏と言えば海。海と言えばカオス

海——それは母なる地球が七割を占める青き世界の源である。

青い空、白い雲、そして——水着のお姉さま。

この三大要素があつてこそその海だ。

すばらしい。絶好の海日和である。今こそ、オレの双眼鏡が火を吹くときなり！

「オイこら。ここに美少女達がいるのに他に目移りするな」

「ああ！ オレの双眼鏡が！」

双眼鏡を奪われ粉碎。千円がさやかの手により粉碎された。

おのれ、さやか。セパレートな青の水着で我輩の娯楽を消すか。

「だが許す。かわいいし」

「よろしい。さあもつと見てちようだいな。そしてメロメロになりなさい！」

「あ、ごめん。あと六年くらい経つてからメロメロになるわ。子ども体型に欲情できないから」

「解せぬ」

ゲシゲシと脛を蹴られる。地味に痛い。

いや悔しがつてもらつてもねえー……………。

オレってロリコンじゃねえし、欲情したらしたらで大問題だし。

あと子どものオレってまだまだ欲情という言葉は程遠い。思春期になつてからの話だそれは。

蹴ることをやめたさやかは踞つてのの字を書き始める。

「おいおい、なんでさやかが落ち込んでるんだ？」

「自分の不甲斐なさに愕然としているのさ、杏子さんや。にしても……………」

「な、なんだよ?」

「お前もお前でもいいな」

「なっ!?!」

杏子の水着もすばらしい。赤を基調とした競泳用の水着である。

恥ずかしがるその姿がその魅力を更に引き出す。つまるところ萌えである！

「あ、あう……」

「え、何このかわいい生き物。千香、写真」

「富竹フラッシュユ！」

「どっから出てきやがった!? ていうか撮るな！」

スクール水着を着た千香が現れる。

千香は杏子の萌え写真を撮る。それを取り替えそうと必死になる杏子だが、また撮られて吠える。

威嚇発動。杏子がガルルルと顔を真っ赤にして吠える。

しかし、哀れなことにその姿もまた千香にとって格好の撮影対象である。

「千香の水着、あれってワザとか？ ご丁寧に『あまがせ ちか』とひらがなで書かれているし」

「くっ、さすが千香ちゃん！ 私のポジションをやすやすとるなんて！」

「せっかくの水着だが、まどかよ。今の発言で台無し」

かわいいピンクのフリフリ水着だが、残念発言で台無しである。

一緒に来たほむらは黒のセパレートでスリムさを表現している水着だ。

そしてママさんはやはり黄色のビキニ水着。同年代と比べると少し大きな胸にオレもタジタジである。

「なに鼻の下を伸ばしているのかしら」

「いひやいでふ、ほむらしゃん」

「なら、私に向かってその美しさを。まどかにはかわいさを称えた発言しなさい」

「鼻血が………出そうです先生」

「よろしい」

「よろしくないと思うんやけど！ ってなんでほんとに鼻血が出てるの!?!」

「さつき食ったチョコレートで」

一緒に来ていたはやてがツッコむ。彼女も水着に着替えている。フリフリの着いたかわいらしい水着である。なお、衛も水着だが、なぜかブルーメラン……。誰得？

「まどか殿に勧められてな」

「よりにもよってまどかかよ！」

「どう？ 鍛えぬかれた筋肉を魅せる水着は！ ソラくんもどぞ！」

「お断りだ！」

「大変やなあ」

八神に同情されて少し心が楽になった。

☆☆☆

ビーチバレーとは一種の遊びである。ビニールでできたボールをバレーと同じく地面に着けば負け。

顔を狙うラフプレーも許されている。

「どおりやアアアア!!」

「ヒデブツ!!」

その今まさに中学生らしき男子が杏子にラフプレーされている。

杏子さん、ビニールで出来てるよねそれ？ ズゴオンって音が顔面からしたよね今。

「トシオクウウウウん!!」

「あのアマもう許さねえ！ 美少女だからって顔面ばかり狙ってくるなんて——興奮するじゃないか！ さあ今度はオイラにカムヒア！」

「山崎!? お前そんな性癖だったの!」

オレが昼飯を買い出しに行ってる間になんか六人娘が中学生の不良共にナンパされていたようで、デートをかけた勝負をしているらしい。ちなみに五対零で圧勝中。

「マミィ！ 確か、バレーって相手を全滅する競技だったよな？」

「全然違うわよ!」

「友江杏子、そうよ。ビーチバレーとは相手を殲滅するのが真骨頂。さあ、薙ぎ払いなさい全てを！」

「ほむらさんも乗せないで！ バレーってそんな物騒なスポーツじゃないから！」

時既に遅し。杏子のサーブが不良中学生Aをぶっ飛ばした。いやー人って綺麗に飛ぶなあー。

「見てはやて！ 人がゴミのようだよ！」

「遊んでないで止めてや千香ちゃん！」

「バルス！」

「ぐあアアアア目が目がアアアア!?」

「まどかちゃん、ノリで千香ちゃんの目に海水をぶっかけやんといて！」

まどかと千香がミニコントをしていることを尻目にオレは青空を見ることにした。

現実逃避？ 違うね。俗世から逃れたいのさ。

「逃げるな我が友よ。戦え」

「えー……」

そんなカオスな展開後の昼食を食べたあと、オレと杏子は海にポツカリ浮かぶ岩まで競争していた。

他のみんなは水かけやら、写真を撮るやら忙しい。なので対戦相手は杏子オンリーである。

勝負の結果は敗北。

あと少しで勝てたことにちよつと悔しい。

「はあはあ……速い……」

「なははは、伊達に魔法少女やってねえからな♪」

「関係ないと思うが……」

這いつくばったオレを見下ろす彼女は優越感に浸る笑顔をして
いた。うぐ……悔しいなあホント。

「……なあソラ」

「なんだよ……今ホントに疲れてるんだから」

「いや別にそのままでもいいからさ。聞きたいことがあるんだ」

「聞きたいこと？」と聞き返すと杏子は少し不安そうな表情をして
いた。

「たまに、さ。こんな幸せいつまでも続くのかなって思っちゃうんだ。
アタシ達って何気なく悲劇的なことばかりあったからさあ」

「……………そうだったな」

前世の杏子の両親もその悲劇の一部である。信じていた自分の願
いを否定されるような形で彼女の両親は自殺した。

「あのときの杏子って素行悪かったな。今は丸々してるけど」

「う、うっせえな！ 別にいいだろそんなこと。とにかく、たまに不安
になるんだ。また誰かがいなくなるのかなって……」

顔を下に向けた杏子の表情は見えない。けれど、迷子になった子ど
ものような顔をしていると思えた。

そんな彼女の手を握った。

「大丈夫。オレはいなくならない」

「ソラ……………」

「オレは死なないし、どこかにいかない。いなくならない。約束する。
だからさ——

——いつものように笑ってくれ」

一息ついてオレの願いが口に出た。杏子だけでなくみんなに対し
てもある願い。

オレはもう見失いたくないゆえの願望だ。

杏子はオレの目を見ずに握った手だけを見ている。その顔は紅く
染まっていた。

「照れてるのか？」

「ばっ、そんなわけないじゃない！」

「わーお、怒った杏子たんかわいいー♪」

「て、テメー！」

手を上げながらオレを追いかけてきたのでオレは海へダイブして逃走開始。

「はっはっはっ！ さあ、ここまでおいでよハニー！ 私を捕まえてごらーん？」

「絶対許さねえ！ ボコボコにしてやるから待ちやがれエエエエエ！」

顔を真っ赤にした杏子はオレを追いかける。

辛気くさい雰囲気はもはやそこにはなく、あるのは友達とじゃれ合う二人の男女のみだった。

「おのれ、私を差し置いて杏子ちゃんとラブコメしちゃったって……………」

「まどか、協力するわ。さあ、駄犬にお仕置きの時間よ」

「お姉ちゃんを無視して杏子さんと遊ぶなんて……………ふふ、悪い弟ね……………」

鬼ごっこが終わったら、そこにいたのは本物の鬼だった。その後

リアル鬼ごっこが始まったのは言うまでもない。

「騒がしいなあ」

「まあ、アヤツらしいな」

「そうやね。……………てか、衛くん、何してんの？」

「筋トレ」

「……………なんやろ。なんかほったらかしにしたらあかんような気がする」

番外編 VS 『最凶の悪夢』く夢うつつな物語

(??side)

——それは『いた』

暗闇の世界。

何もない世界。

そんなところに一人の少年がいた。年齢はソラと変わらない。

どこまでも深く濃い黒色の髪。

髪形は前髪は顔が見えないほど長く、後ろをやや長めに伸ばし纏めている。

瞳は本物と見紛うような金色で肌は病的と言えるほど白い。顔は基本は髪で隠れたしまっているがかなりの女顔、女装すれば本気で美少女に見える。所謂男の娘のように見える。

服は基本黒色の物を着ており、黒づくめと言えばそう言える。

その少年は狂っていた。嘆いていた。憎んでいた。

自身の大切な人を奪われ、それを追いかけてこんなところまで来ていた。

少年は何の因果をもたらしただのか、ここは少年が来るべきところではなかった。

現に少年は白い触手に拘束された。その触手——『抑止の存在』は少年の来訪を歓迎しなかった。

普通ならばその触手によって少年の身体は握りつぶされていた。しかし、

『ジャ、まア!!』

なんと『抑止の存在』の拘束を解いたのだ。

ありえない。世界のルールに抗うこの少年はいったい何者だろうか。

『抑止の存在』が思案していると、少年は次元の穴を開けてそこへ飛び込んだ。

『なんてことでしよう』

『異物が世界に侵入してきました』

『このままでは世界が……』

『いえ、心配はありません。あの異物は世界に認められていないため、存在が不安定。よって長くはいられません』

『だが、その間に世界の住人が』

『……やむ得まい。切り捨てるしかあるまいよ』

『抑止の存在』はあくまでも審判。ジャッジを下す者であり、断罪を下す者ではない。

世界に異物が入った。

それは彼と少年の戦いの始まり。

『そういえばどうしてあの少年はここに迷い込んだのでしょうか？』

『『さあ……？』』

「ワタシの仕業だ」

抑止達は悟った——「あ、コイツが原因だ」と。

(ソラ side)

オレこと神威ソラはぼんやりと日向ぼっこしていた。夏真っ盛り、ミンミンと蝉が鳴くこの季節だが、どうも今日だけはやけに風が吹いて心地よい温度であった。

公園のベンチに座り、空を見上げていると綺麗な青空が広がっている。今日も良い天気である。

「平和だな」

「平和だねえ」

まどかはシャクシャクとソーダバーを食べていた。まあこんな日には冷たい何かを食べたくなるのもわかる。

夏休みが始まり、そして海へ行ったオレ達はそんな平和を噛みしめていた。

「ソラ！ 見て見て。キラキラしたもの拾ったよ！」

「交番に届けてこい」

「ホント、どこからそんなモノを拾ってくるのよ」

やれやれと千香といたほむらも彼女の行動に呆れていた。

千香が宝石を拾ってきたようだ。その宝石はサファイアのように見えるが、なんか見たことのない輝きを放っていた。

透明のような、いやあらゆる角度から見たらいろんな色に見える？

そんな変わった宝石だ。

「ええー、これ綺麗だよ？ こんな綺麗な宝石あったら普通は我が手について言うところでしょう？」

「いやお前前科思い出せよ。リメイク前の前科を」

「ソラくん、それメタい」

やかましい。こいつの行いでひどい目にあっただのは事実だ。

前世なんか宝石を拾ったらと言っておいてタイマーが起動した時限爆弾を渡して来やがった。

……本気で死ぬかと思ったぞあれ。まあ何はともあれ、こいつの行動は時たまにトラブルを招く。

油断はできない。

「うーん、仕方ないなあ。元にあったところに……あれ？」

「どうした？」

「なんか手から離れなく……え、あれれ？」

宝石を引っ張る千香。オレやまどかも参加して引っ張るもとれない。い。

千香の手から宝石が離れなくなっていた。どういふことかこの宝石、千香にとりついたようだ。

しやーねえな。

「ちよ、ソラ……なんで『神器』出してるの？」

「その呪いのアイテムを『解錠』で切り離す」

「いやあく、それ前にもやったよね。前世でそれやって魔神らしきモ

ノが出てきてボクがひどい目にあつたよね?」

「元から拾つてきたお前が悪い。覚悟しろ」

「にゅきやあアアアア!! まどかちゃんヘルプミー!」

千香の手をぶつ叩こう。そんなとき空気がビリビリとした。

オレはその場から千香を突飛ばし、突撃してナニカと衝突した。そいつの握られている剣とオレの『神器』がギリギリと軋み合う。

こいつは……!」

「ソラ、気を付けて。そいつ、手強いよ!」

「わかつてる!」

オレはその場から飛び退くと、変身したまどかとほむらの魔力矢の援護射撃が飛んできた。

突き刺さる身体。普通ならば絶命しているはずだ。

なのに、

「そんな……!?!」

「無傷ですって……!」

彼が矢を引き抜くと身体には刺さった矢の傷は一切なく、無傷の姿でそこにいた。

「……ヤベえ、これはマジで六人揃わないとマジで死ぬな」

「とうかあの人、さつきからボクの手を凝視してるんだけど。手フエチなの?」

「いや明らかにお前の宝石狙いだろ。とうかあのかあの霧状になつてるヤツが尖つて……」

尖つた黒い霧が槍のように千香に向かってきた。

その場から跳び、地面に刺さる地面を見ながら千香は言った。

「あ、あれは触手!? ボクにひどいことするんだね! エロ同人みたいにー!」

「死んでいー!」

「にゅばは?」

千香を蹴飛ばして黒色少年をぶつける。変態シユート。これを受けたら全治一週間くらいかかる。

前にオリ主くんにしたらそうなった。そして千香は無傷なんだよ

ね、これが。

理由は『神器』だ。『守護神の盾』を身体中に覆えば、無敵の鎧の完成である。

『神器』によって全ての攻撃もとい衝撃は弾かれる。

千香によつて、黒色少年はビリヤードのように飛んでいった。

千香は「いきなりひどい！」と喚いていたが、なぜか期待するかのように見つめてきた。もう一度やりたいのかこいつは。

「てか、まだ立ってる」

「スゴいねー。さつき身体で受けたとき『ボキボキメリメリ!!』って鳴っていたよあの子」

「それ身体中の骨がやられてね?」

とは言え、相手は未知の存在。『神器』でもない何かを持ち、千香にくつついた宝石を狙ってきた。

何者なんだ……。

『……かえせ、■ツキのたましいイ』

声色のノイズがひどい。『抑止の存在』によつて拒絶しただろうか。本来、拒絶された存在はこの世界には来られない。だが、こいつが来たということは拒絶を振りきり、訪れたということだ。

……恐ろしいヤツだ。『抑止の存在』の拒絶を振りきり、ここに来たとは。

しかしただでは済んでいない。先ほどの雑音混じりの声は拒絶で、存在があやふやになっているということだ。

(長くはいられない。短期決戦しかヤツは戦えない)

持久戦に持ち込めば勝てる。そう思い、『神器』を構えた。

「お前は何者だ。なんでここに来た?」

オレの言葉に反応してか、黒色少年は静かにオレを見据えていた。

『夜……』

「それがお前の名前か?」

コクリと頷く。千香の手にある宝石が狙いかと聞くとコクリと頷いた。

なるほど、大切なものなのだろうな。

「でも宝石を渡したいのは山々なんだけど、どうも千香の手から離れなくてなあ」

『じゃあ、』

ニッコリと、ヤツは言った。

『切断、する』

夜は千香の背後に現れ、そして彼女の腕を切断した。宝石を持つ手がクルクルと宙に舞い、千香の腕からおびただしい量の血が出てきた。

「あ、……ソ、ラ」

出血により千香は倒れた。オレはニコニコ笑うヤツを蹴り飛ばした。しかしそれは霧状の黒い何かを纏ったヤツに防がれた。

飛ばしただけでいい。千香から突き放したオレは止血に移る。

くそっ！　今ので千香がやられた。死んではいないが、重傷だ。

夜は笑みを浮かべながら千香の腕を手にとり、嬉しそうだ。何が目的で手にある宝石を求めたのかは知らない。

ただ言わせてもらう。

「殺す」

敵だ。ヤツはオレの仲間を傷つけた。殺意と憎悪に反応したのかこちらを向くが、既にオレは『神器』を振りかざしていた。

『解錠』で魂を切り離すつもりでやった。手応えはあつた。

斬った——そのはずだったのに、

『??』

魂と肉体が切り離されていない!?

確かに斬った。人を殺すつもりでやった。なのに、死んでいない。

(魂がないのか……? いやそんなはずはない!)

生きてる限り、そいつには必ず魂と肉体が結ばれている。魂は必ずある。

人形かはたまた作られた人工物でなければそれはあり得ない。

『やるつも、り?』

「当然だろ。お前をぶち殺す——それ以外はない」

夜という存在は人工物ではない。生き物だ。なら、どうして『解錠』

できなかったのか考えた。

対象が定まっていなかったからだ。

人間ならば人間。概念ならば概念。

つまり鍵穴が定まっていけないと開け閉めができない。それがこの『神器』のデメリットだ。

夜の触手のような槍がこちらに一斉に飛んできた。身体を捻り、掠りながらも回避し、回避できないところは『神器』で滑らせる。

電車のブレーキのような音が鳴り響き、身体を回転しながら地面を四つん這いにして着地する。

(さっきからほむらとまどかが静かだ。どうしたんだよ)

視線を向けると彼女は膝について濁った瞳をしていた。ブツブツと何かを呟いていた。

「ごめんね……ごめんね……」

「まどかが……また私が……」

「何やってるんだよ！ ボーとしてるなら魔力供給するぞ！」

オレは『コネクト団結せよ』を使いラインを繋げるが、すぐに取り止めた。

やっとわかった。二人は戦いたくても戦えなかったんだ。そのためオレはラインを切った。

——彼女達が見ていたのは悪夢だ

『鹿目まどか』は無力な自分がただ友達が死んでいくという悪夢を。

『暁美ほむら』はまどかを何度も死なせてしまう悪夢を。

『前世』の痛みと悲しみを何度もループして受けていた。

その負の感情がこちらに流れてきたため、耐えきれなくなったのだ。

「なんだよ、これ……」

まどかは根は優しすぎるくらい良い子だ。そのため『前世』の悲劇は彼女の心を何度も苦しめる。

「ふざけんなよ……」

ほむらは友達想いだ。『愛』するくらいまどかを想い、何度もループ

して、そして彼女の死を見てきた。

二人は途方もない悲しみを、痛みを、悪夢として感じていたのだ。

「なんで二人は……！」

『【惨劇の悪夢】。僕の、霧を転移のときに、軽く肌に、フレタ』

悪夢を見せる——いや見せ続ける。だからまだか達は覚めない悪夢を見続ける。

オレは気をとられ過ぎた。そのため、目の前に夜の霧が向かっていった。

『おまエ、も、ミロ……』

霧がオレを呑み込み、全てが闇に包まれた。

(?? side)

思い出すのはあのとき。

師匠が目の前で死にゆく悪夢。

自身の理想は間違いだった。間違いを貫き過ぎた。

そんな悪夢をソラは見せ続けられた。彼はスクリーンで見るかのように、何度も悪夢を見続けられていた。

(でもこれ、意味なくね?)

しかし当の本人はなんか冷めていた。理由はこういう悪夢というか、覚めない嫌な夢はぶつちやけ『前世』で何度も見てきたからだ。そんな彼に気にくわないのか、次の悪夢へ移った。

何度も身体を串刺しにされる夢だった。激痛と死に続けるという恐怖に常人ならば狂い死ぬ。

しかし彼の場合、

(いやほむらで体験済みだから。目や腹を貫かれたし、胸や頭を弾丸で受けて死んでるから痛み慣れしてるから)

スゴい死に様を体験していたため、拷問としてはものともしなかつ

た。

(どうも【惨劇の悪夢】というのは悪夢を見続ける力らしいなあ。……本来なら精神がぶっ壊れるくらいの悪夢なのかもしれないけど) そう、これが本来の【惨劇の悪夢】ならば骨を抉り出されるか、またはまどか達の死にゆく様を何度も見せ続けるのだが、弱体化していた。

『抑止の存在』によって力は弱まり、彼の力が充分発揮してなかったのだ。

(暇だ……なんか脳髓出される悪夢とか来ないだろうか。激痛のなく、悲劇もなく、ただ知ってる痛みと悲しみってなんか逆に苦痛なんだけど……)

とは言え、見せたら見せたで慣れてしまうのがソラクオリティ。

順応性が高すぎるため、どんな温度も世界も痛みも耐えきつちやう超人である。宇宙空間は駄目なようだが。

そんなときソラは見た。

夜の記憶だ。彼の記憶がここで流れてきたのだ。

—— 大切な人の死を

—— 虐殺して紅く汚れていく手を

—— 大切な女の子を悪意の塊に連れ去られてゆく様を

悲しみと痛みがそこにあった。

苦しみと辛さがそこにあった。

ソラもまたそれを見て納得した。千香の腕を切断するのも納得だ。なぜならそんな辛い過去が、昔があったから彼はこんなことをしたのだろう。

ソラは夜の記憶の光景にいながら嘆息を吐いた。それから『神器』を召喚して、自身に刺し込んだ。

彼が幻覚を解くときにはこのようにして、幻想から脱出する。よって彼は【惨劇の悪夢】から脱出できた。

(ソラside)

脱出し、元の世界に帰ってきたオレはただただ夜を同情的なまなざしで見つめていた。

「夜……お前がかわいそうなヤツだよ。大切な人を奪われ、失い、そして狂っていき、自分が無くなっていく——うん、オレよりもひどいな。だからこそオレはお前に言いたい」

消えた『神器』を再び、召喚して向けた。

「お前には同情するけど救ってやらない。だってそうだろ？ お前はオレ達に矛を向けた。だから、覚悟しろ」

後悔しない。

謝りはしない。

「だから安心して、とっと死ね」

地を蹴り、肉薄する。夜の触手のように伸ばされた槍がこちらに向かってきた。

それを『解錠』で元の霧状に変える。霧状を固形物にしたのがこの槍だ。そしてこの霧が肌に当たれば悪夢の世界へだ。

つまりこいつの槍に触れなければ悪夢は見ない。そう頭に入れて、蹴りを放つ。

槍だった霧状のモノがレインコートのようになり防がれた。デイフエンスもできるのかよ！

『【明けない夜】』

「ッ!!」

何か来る。そう思い、構える。すると世界が停止したかのようにピタリと止まり、オレは夜から目を離さなかった。

時間を停める。それが【明けない夜】の力。

夜の手刀が伸びてきたが、腕を掴み、投げる。

黒い霧に触れたが、『神器』によりキャンセルした。

「はああああア!!」

地を蹴り、斬り込む。

右から、左から、下から、上から、斜めから。

槍がに何十本も刺さる。弓矢のような小さな槍がオレを貫く。目がやられ、肩は貫通し、血が針ネズミのように出てきた。

「ソ、ラ……」

ほむらがこちらを見ていた。その姿に思い当たることがあったのだろう。

前世の最期。

ほむらに串刺しされたときだ。

彼女はまたオレのこんな姿を見て呆然としている。

今にも泣きそうで、叫びそうで、オレはそれが嫌だったから――

「ごめ、ん……」

最期の最後で笑ってそして夜によって首を跳ねられた。

暗い。また闇の中か……。

死後の世界……なのか？

全く何もない世界。

オレは死んだのか？

死んだんだろうな……。だって首を斬り飛ばされたのだから。

まあでもこの世界に来たのは二回目だ。だが、違うところがある。

一つ目は落ちていく感覚がないこと。ちゃんと足場があるし、重力もある。

二つ目はなんか机の上にボタンがある。明らかに何かありますという感じのボタンである。

その上、張り紙らしきものもあった。

『オチ』……って何これ？」

気になるので押してみた。すると『パンパカパーン』というファンファーレがなり、闇の世界が光に包まれる。

そして次に目を開けると見慣れた天井だった。

オレの部屋だ。起き上がるとベッドの上にいた。

オレが起き上がるとそこにはニコニコ笑う千香とまどか、ほむらがいた。

元気で五体不満足な彼女達が……あれ？

「千香って右腕飛ばされたんじや」

「あ、『そっち』じゃそんな感じだったんだ」

『そっち』って……？

話を聞いてみるとオレは襲ってきた夜によって最初に悪夢を見ていた。

つまり、オレが最初に剣で受け止めたときに、霧が肌に触れていたため、『惨劇の悪夢』を最初に受けていたのだ。

「えっと、んじや。夜という少年は実際にいたってことか？　じゃあ、

千香にくっついてた宝石はどうしたんだ？」

「無理矢理皮膚を剥がして、渡した」

「ちよっ……マジで!？」

「マジよ。この子だったらソラが倒れてからもうそれは大慌てで、皮膚をバリバリ剥がしてくっついた宝石ごと皮膚を夜に渡したのよ」

「渡したら喜んでいたよ」

グロ描写!?! てか、夜も夜で喜ぶなよ!

「でもその宝石、夜くんが探していたものじゃなくて砕かれたけど」

「千香の痛い想いが無駄じゃん!」

「ぶっちゃけ、激痛だったけどソラに攻められてると脳内変化から、キモチ良かったあ……」

「千香さんんんツ!？」

どんな妄想で乗り越えんでんだよ!?

っーか、返せ。オレの心配!

「あ、それと夜くんがここから去った後、なんか美人のお姉さんがソラくんにつて」

まどかが渡してきたのはハガキだった。それを受け取り、見るとこう書かれていた。

『ドッキリ大成功？ byノエルちゃんより』

「ノエルウウウウ!!」

あの変態の仕業かアアアア!

まさか夜を招いたのもヤツか!?

まさかヤツが『抑止の存在』を妨害したのかアアアア!!

「いや、師匠から電話をもらって、まさかソラを嵌めるドッキリとは思ってもよらなかったよ」

「なんで起こしてくれなかったんだよ!」

「だって面白いかったもん!」

……それを聞いて、オレはベッドから降りた。

「あのお姉さまのおかげでうなされてるソラくんに萌えだし、あと夢の中をこのモニターで実況中継できたんだよ!」

スポーツバッグに衣服と洗面セットを入れる。

「さすがソラよ。まどかに継ぐ萌えだったわよ♪」

財布をポケットに入れて『神器』を召喚する。

「最高のドッキリだったよ!!」

「オレ、家出するわ」

濁った目でそう言って『ドコでもドア』に入った。

た
——このドッキリのせいでオレはマジで軽い人間不信に陥つ

神威ソラは傷心旅行にいきます。

………あ、なんか知らないけどマミさんと杏子、さやかがついてきたけど、もうどうでもよかった。

(??side)

「いや、面白かった！ さすがナイアちゃん。良い配役呼んでくれた！」

ナイアちゃんとは謎の神秘的悪女な美女である！

ノエルは彼女がどういう人物なのかは知らないが、まあ仲良くできてるから別にいいやと考えている。

——その人が邪神だと知らずにだが。

「ヌフフフ、ソラのマジモードを久々に見れたし、夢の世界なのに本気になっちゃって……プークスクス」

『やっと思つきました……！』

「ゲツ、抑止さん!?!」

『あんな異物をこの世界に入れないでください！ とんでもない事態が起きるか否やでこっちは胃が天元突破しそうだったんだよゴルアアアア!!』

「ぬきやアアアア!! 抑止さんが壊れたアアアア!?!」

ノエルは逃げる。抑止さん（巨人さん）が追いかける。

彼女達の追いかけてこはこれからだ!!（打ち切りエンド?）

第二十四話 運動会はガチの争い

夏休みは終わって始業式。

あんなに暑かった夏も残暑となり、身を潜めた。

え、展開が早い？

いやだって、あんま話すことないじゃん。主に馬鹿やらかしたのは千香とかだし。宿題もみんな協力して終わらした。

杏子とさやかがか全く手をつけてなくてオレが徹夜するはめになったがな。そのときぶちギレて涙目になった二人は忘れない。

そして、季節は秋。紅葉が舞うこの季節にはいろいろな催しがある。

食欲の秋、読書の秋、それから――

「第四十六回！ 聖伴小学校運動会の幕開けです！ 司会は私、三年四組の早乙女和子と！」

「ことみなぎれい事嶺儀礼だ」

「ハイ、そんな事嶺さん。今日みなさんに一言お願いします！」

「なるべく物品と施設を壊さないでほしい。あとなるべく安全に競技を行ってほしいものです。ぶっちゃけ事後処理がめんどいです」

「はい、リアルで生々しい大人の事情を知って士気が高くなったところで最初の競技に移ります！ ゆけ、若人達!!」

士気高くならねえからな早乙女先生。っーか、この先生テンション高いな。

何か良いことであつたのかい？

「なんか彼氏できたみたいだよ」

「どうせ別れるだろ」

「確かに」

「何気なくひどいわね。まどかと、ソラ」

ちなみに通算二十の失敗例があったりする。早乙女先生の失敗談のせいで大半の女子生徒が男性恐怖症になったりしないよな？

ある程度の競技を終わった。

千香がバレーリーナしながら一位をとった。こんなヤツに負けるとは哀れである。

大玉転がしではさやかが下敷きになった。張り切っていたのに、最後の最後で自分の大玉で自滅するとはいと哀れ。

二人三脚ではまどかとはむらがいチャイチャと走っていた。世の男子が血涙流していたのは同性に負けたからである。

杏子はパン食い競争で全てのパンを食らった。当然、失格になったがなんか幸せそうだった……。

マミさんはリレーで一位をとった。一緒に走っていた男子が途中から減速した理由は少し揺れるお乳に目に入ったからである。

まあ眼福だった。目をまどかに潰されたが。

とまあ、前半の最後の競技である騎馬戦となった。その代理としてオレは参加することになった。

まさか中沢くんが怪我して欠場というアクシデントが起こるとはな。

おのれ、石ころ。たった一つで中沢くんを戦闘不能にさせるとは。「はっはっはっ！ 現れたわねソラ！ ここで雌雄を決してやるわ！」

「テンション高いな、さやか」

「ぶっ潰してやる！ オラアアアア!!」

「お前は単純に怖いよ杏子」

やる気と殺る気満々な彼女達を尻目に馬役である名も知らない彼らに激励をかける。

「とりあえずあいつらに遭遇しないよおー頼むわ」

「俺らタクシーじゃねえよ!」

「ちなみに遭遇したらいけに——じゃなかった。緊急脱出するから各自備えてろよ」

「いま生け贄って言ったよな!?!」

「さあ、なんのことやら?」

ピストルが鳴り、競技が始まった。

最初に襲ってきたのは名も知らない別クラスのとある少年。そいつが帽子をとろうする。

これを取られたら当然負けが確定する。

オレはそいつの手を掴み、こちらに引っ張る形で馬ごと崩した。

「死ねや! 優男オオオオオ!」

「うぎやアアアア!?!」

どこからか凶悪な掛け声に思わず反応するオレ。

あ、オリ主くんが杏子の凶手に倒れたんだ。思いつきり殺意が込められてた拳だったと思う。

何がそんなに気に入らないのかは少しわかってたりはする。杏子って口先だけのヤツは嫌いだしな。

高町も心配するような声をあげるが、さやかは心配して気を取られた月村とバニングスを倒した。

必殺仕事人ごとくシユバツと帽子を奪った。

……てか、ヤバい。杏子とさやか以外は倒せたけど、残りはオレを含めた三人しかない。

「あとはテメーだけだぜソラ?」

「ふっふっふっ、この美少女コンビに勝てるかな?」

「自分で美少女とか恥ずかしくない」

「……ちよっぴり恥ずかしい」

「じゃあ言うなよ。」

「隙あり!」

って、杏子め。予想通りにオレの馬は崩しに来たか。

馬は完全に崩れて、身体が地面に近づく。

確か地についたら負けだよな？ やれやれ……………。
「なっ!？」

誰かが驚愕した声を出した。そりやそうだ。

オレは他の騎馬戦選手の騎馬に飛び乗ったからな。

「くらえやー!」

「甘い!」

オレが乗った騎馬戦選手は崩されたが、杏子の騎馬を崩すことができた。

オレは最後の一人のところへ飛び乗った。

杏子もまたさやかかの騎馬に飛び乗ったようだ。

「ワリーさやか。助かった!」

「いいって。でもさすがソラだね。ジャングルファイトが強いだけある」

「アイツのエキスパートだからな」

前世の頃の話である。幼い頃から障害物を駆使して戦うことが多かったからな。

さやかと杏子の二人は体勢を立て直したか。そして、周りが静かになる。緊張が周りを支配する。

冷や汗が落ちた——刹那、動き出した。

「はアアアアア!」

「どりやアアアアア!」

オレと杏子は同時に飛び出し——帽子を奪った。両方とも帽子がない。

「チツ、引き分けか」

「さすが杏子だな。ギリギリだったぞ」

「アタシもさ。良い勝負だったぜ♪」

オレ達は握手してお互いの健闘を称えあった。周りの歓声が一斉に沸き上がる。

「スツゲー歓声」

「ああ…………」

「そりやそうだろ。あんなだけ動きまわったらな」

体育教師の円山先生が拍手しながらやってきた。

「お前らの戦いは素晴らしかった。小学生とは思えないくらいの働きを見せてくれた。だから――失格」

「は？」

先生の一言に歓声も静まった。

「いやなんですって顔をされてもルールには殴る蹴るもしくは他人の馬に乗ることを禁ずるって書いてあるからな」

マジで……？ オレと観客達はガツクリしている中、杏子は挙手。

「先生、それじゃあ屋上で決着つけていいですか！ アタシの熱いハートが冷めてない！」

「冷める。頼むから」

お前まだ元気だな……。ちなみに騎馬戦はうちが負けた。

先にさやかからやればよかったなあ……。

少し太陽が隠れた天気の中にて、昼食を終わらせてから後半戦。

白熱したオレ達の応援合戦が終わり、借り物障害物競争という種目が始まるうとしている。

借り物競争と障害物リレーを混ぜた競技である。

「ちなみに封筒に入っているお題の変更は無理です。何か質問は？」

「先生ー、なんであそこにかにも危ないですと言えそうな刺が生えているのですか？」

「レプリカです。リアルではありませんが死ぬほど痛い罠なので綱をしつかり渡ってください」

「そんな罠しかけるなよー！」

思わずツツコんだオレは悪くない。

なんだこの配管工事のオッサンが挑むステージは!?

しかも最後の坂道なんかヌルヌルテカテカしたもので濡れている

んだけど!?

何これ、どこの芸能界!?

「まどか、あなたこの競技参加するのかしら?」

「ううん。ローションが出ると聞いてやめた。ヌルテカちよつと苦手だから」

「シヨボーン……」

「でもソラくん出るよ!」

「さあソラ! その濡れた姿を私達に見せてちょうだい!」

「見せるつもりないし、カメラ構えるな!」

ほむらは一体何を撮るつもりだったんだ? つーか千香も準備するな!

ツツコミ終えたオレはスタートラインに立つ。ピストルの合図で一斉に走り出す。

そこそこな速さで走って封筒を手にした。

「さてとお題は?」

以下がお題。

『やあやあ、この封筒を開けたというラッキーボーイは君だね? 君は運がよい。思えば私の伝説が始まったのは十二世紀……いや十六世紀だったかな? とにかく私は』

うん、これは……はつきり言おう。

「うつつぜエエエエ! お題読むのにどんだけ時間かけるんだよ!?!」

他のヤツもそうだし! ええい、二枚あるからさっさと二枚目を読む!

『ギャルのパンティー』

「誰だアアアア!! これ書いたバカはアアアア!?!」

「ちなみに今回封筒のお題を考えてくれたのは天ヶ瀬千香くんだ」

「千香テメエエエエ!!」

テヘツと茶目つ気ありありな顔で目を逸らす千香。

あとであいつ絶対シバく！

くつ、とにかくギャルのパンティーを誰かにお願いしないと。

「だ、誰か……………その……………女性の中に……………えつと」

言えるかアアアア!! 公衆面前で言えるもんじゃねエエエエ

!

ガク……………もう駄目だ。こんなオレにはできないよ……………。

オレは膝について愕然としていると誰かが肩を叩いて励ましてく

れた。その人は――

「お困りみたいね」

「ま、マミさん……………」

「お姉ちゃんが力を貸してあげるから元気出して♪」

微笑を浮かべて、彼女が励ましてくれる。

「でも……………これは!」

「ソラくんが何に苦しんでいるかわからない。けれどお姉ちゃんはソラくんの味方だから。どんなソラくんでも受け入れるから、ほら。

言って見てちょうだい♪」

「ま、マミさん……………」

勇気が出た。希望が沸いた。あとは根性を見せるだけ!

「マミさん、お願いします」

「はい、なんでしょう?」

「その……………あの――

――い、一緒に来てくれませんか?」

オレが出せたお願いはこれが最高である。

いや普通に下着貸してって言ったら、変態じゃん。

☆☆☆

「ぎやアアアア！」

「ママアアアア！」

綱渡りの障害を乗り越えたが、オレの後ろには未だに阿鼻叫喚な世界がある。

よく乗り越えたと言いたいオレである。

てか、スネちやまいた気がする？ ああさつき落ちたヤツね。

どうでもいいだろ。

「んで最後の関門のローション坂道か」

「なんで最初は普通なのに、最後の二つの関門だけハードなのかしら？」

いや、ママさんのツツコミ通りだけどき、中間もかなりしんどかったよな？

なんで配管工から巨大な食虫植物が出てくんだよ。

まあ、それはさておき。これを乗り越えなければ勝利はない。

「だけど、越えられないことはないけど」

「へ？」

オレはママさんをお姫さま抱っこして坂道を飛び越えた。あまり長くなって助かった。

「そ、ソラくん、降ろして！ は、恥ずかしいわ！」

「無理。拒否。とつと行かないと杏子が来やがる」

振り返るとそこにはカツラを手にした杏子がいた。

「追い付いたぞソラ！」

「くつ、ヤバいな！ ……ていうかそのカツラ、誰のだ？」

「教頭先生から拝借したぜ！」

「だから泣いてるのね教頭先生……」

ママさんの言う通り、三角座りでさめざめ泣いてる教頭先生いと哀れ。

とりあえず忘れてやるのが優しさだ。

「この勝負もらった！」

「オレを足で勝とうなど笑止千万。小学校の頃の疾風の異名を見せちやる！」

「お前いまも小学生だろ!？」

杏子にツッコまれた。

だよねー。そうこうしているうちにラストスパートである。最後の全力疾走である。

「うオオオオオオ！」

「どりやアアアアア！」

そしてゴール。勝ったのは――

――オレだ。

「はえーなソラ……………はあはあ」

「伊達に駆け抜けてないからな」

「いい加減降ろしてくれないかしら。……………ものすごく恥ずかしい」

ママさん真っ赤になった顔を覆い隠している。そんな萌え萌えなママさんに千香のカメラが光を出す。

歓声はやはりすごい。特に女子の。やはりママさんのお姫さま抱っこが原因かもな。

「次は勝つ」

「望むところだ」

オレと杏子。親友であり、悪友であり、ライバル関係のようなオレ達。

そんなオレ達はニシシと笑い合うのだった――

「ソラくーん？ 帰ったらちよつとお話しよーねー？」

「……………」

まどかは死刑宣告を、ほむらが重火器を並べて帰りを待っていた。

「解せぬ……………」

思わず空を見上げる。改めて、オレは今の光景を見て、思う。

千香に写真を撮られて、ついに恥ずかしくなつて逃げ出すマミさん。

腹減つたとぼやく杏子。サクサクとチョコ棒を食うさやか。

良い笑顔で待ち迎えるまどかとほむら。

うん、いつも通りに――

「カオスだなオイ……………」

その感想は騒がしい雰囲気の中に消えていく。

――まあ、これがオレ達の日常だ。

第二十五話 巡り会う

(??side)

その日、八神はやては誕生日だった。診察を受けた彼女は帰宅時に、衛と合流した。

衛の手には既に関い物袋があり、そこには誕生日のために買った料理の材料だ。

今日は彼女のために衛が料理をするつもりだ。一人暮らしをしてきた彼にはそれくらい造作でもない。

(しかし誕生日プレゼントが我的手料理とは……)

孤独ゆえに求めた温かさなのだろう。と衛は考える。

彼もまた一人ぼっちだったからわかる。誰もいない家に一人でいるということは誰だって人恋しくなる。

(しかしそれだけではつまらぬ。サプライズも用意しておいたしな)

彼女のためのプレゼントを、衛は買っていた。よく女の子が来るというアクセサリーショップに行き、彼ははやてに合うアクセサリーを購入したのだ。

そのとき、店員さんのアドバイスをよく聞いていたが……なぜか、その店員さんはムチとろうそくを勧めてきた。

エメラルドヘアーのその女性店員さんを衛は忘れそうにもない。

閑話休題。

衛の手料理はキノコの和風パスタだった。パスタはあらかじめ作っておき、キノコとぽん酢を使って作った料理だ。

パスタはソラの家で、ママさんと合同で作った代物だ。腰がよく効いており、なかなかのパスタとなった。

とは言え、はやての手料理に比べれば軍配は彼女に上がる。春頃に作ったナポリタンは絶品だったからである。

「ごちそうさん。おいしかったで」

「お褒めに預かり光栄だ。我も作ったかいがあるものだ」

衛はそのまま食器を洗う。はやても参加しようとしてきたが、それを断りリビングで待たせる。それから他愛のない話をして、寝室に向かうとき、衛はハツと気づいた。

プレゼント渡してない……！

まさか会話が楽しそうだったから自分も満足してしまうとは思いませんでした。

衛ははやてのいる寝室に向かうとそこには扉の隙間から光が射し込んでいた。

「何事だはやて！」

衛は扉を開ける。そこにはインナーの格好した男女がいた。男は犬耳があり、残りは女性二人と幼女だ。しかしその目には戦士と同じモノがあった。

衛がそれを目にしたとき、腕をガードを構えていた。

その瞬間あと、ポニーテールの女性の足が衛の腕に当たる。苦痛に耐えながらも、踏ん張り衛は肉体強化をかけ、失神しているはやての元へ向かう。

が、それは『バインド』により阻止される。身体を拘束され、床にそのまま倒れる。

それでも彼ははやてを護ろうと、身体を動かそうとするも幼女が彼に馬乗りして押さえ込む。

「テメーなにもんだ!!」

「貴様こそ何者だ！ 我が愛すべき友に何をしたのだロリ娘！」

「んだと？ 誰がロリだオラ！」

「ふん、鏡を見てこい。貴様の姿をロリ以外なんと言う！」

「テメー!!」

……一応、言っておくがシリアスな場面である。しかし中身が次第に子どもの喧嘩になってきた。

それにはさすがの仲間である彼女達もポカーンとあきれていた。そして、

「ギャーギャーうつさいわ！ 近所迷惑や！」
はやての弦の一声で二人を静かにするのだった。

——これが始まり。彼女が物語に関わる……そんな機会。

(ソラside)

やや夕暮れのくもりな天気。

秋の季節から冬の季節に近づいた今日の頃。

空は雲で太陽が隠れり、出てきたりと繰り返す晴れである。

オレは最近買ったコタツの装飾品もとい食料であるミカン箱を買いに行っていた。

やはりジャンケンに弱いオレ。

「そして世界はモノクロである。いやモノクロじゃなくて若干ピンク？ どうしよう、淫乱空間に迷い込んだっばい」

実況しても状況は変わらなさそうだし、とりあえず歩いてみる。

ふと、背後に気配を感じて振り返る。そこにはポニーテールなお姉さまと赤毛おさげがいた。

「お前には悪いが魔力を奪わさせてもらう」

魔力泥棒ってヤツか？ これが最近の犯罪なのか？

まあいい。とりあえず——

「変態がいるー!! 誰か助けてー! ショタを狙う痴女とロリがいるー!」

「誰が痴女だ!」

「誰がロリだどこの野郎!」

憤慨している彼女達。

やっぱり助けは来ないか。近所のおばさま辺りも来ないとか薄情な住居区である。

そういえばこれどつかで見たことあると思えば、もしかして魔女结界みたいなものか？

とにかく青の国家公務員にスマホ、スマホっと。

ドコオンツ

とつさにさがるといきなり赤毛ロリのハンマーが目の前に下ろされる。危ないなコノヤロー。

「仲間に連絡はとらせねーよ！」

「国家公務員は仲間じゃないよ。つてああ！ ミカン箱が……」

見事に果汁が散ってペチャンコ。ヤベー置いて回避するじゃなかった。

「何しやがる赤毛ロリ。お前のせいで定価345円のミカン箱が台無しじゃねえか」

「誰がロリだ！ 馬鹿にしてるのかてめえ!！」

なんかどつかで聞いたことあると思えば、こいつって杏子みたいな口調してるな。

オレはその場を右へ飛ぶ。さっきいたところにポニーテールなお姉さまが斬りかかる。それをバックステップで躲す。

「バリアジャケットを纏わないのか?！」

「何それ？ そんな防具服っぽいのがあったら戦時中に使いたかったんだけど」

「こいつ管理局じゃないみてーだな」

あんなキチガイ組織と同じにされるとは侵害な。

とりあえず味方を呼ぶために、召喚術発動！

地へ手で触れると、魔法陣が地面から浮かび上がる。

「転移魔法!?! いや……違う!！」

「見たことねー魔法陣だな」

彼女達はオレの『召喚術』に驚いている。見たことないってことはオレと同じ『神器使い』ってわけではなさそうだ。

「これは『召喚術』。異世界の住人や『神器』を魔力の塊で具現化させる魔法さ。まあ、ここの住人を召喚するから転移になるけど」

「馬鹿な……シヤマルの結界をも無視する転移魔法だと!?!」

おー出てくる出てくる。魔法陣から現れたのは――

「ハァーイ♪ 正義の変態 千香ちゃん召喚! 月に変わって、お仕置きよん!!」

「なんでお前だアアアアア!」

「イナバ!」

思わず召喚されたお面つけた変態にドロップキックをくらわした。

ゴロゴロ転がってそれから立ち上がり復活。チツ、まだ動けるか!

「杏子かマミさん辺りの武道派ベテラン組を呼んだつもりなのになんでお前だよ!?! 盾専門はお呼びじゃねえよ!」

「ふっふっふっ、ソラの近くにロリと巨乳の反応を感じたから変わってもらったんだよ!」

「どんな索的能力だよ?! チェンジだ!」

「断る! 現にたわわに実ったお姉さまと着せ替え人形にしたいロリっ子が目の前にいるじゃない! 揉んで、いじって、写真撮るまでボクは帰らない!」

「敵だぞこいつら!?!」

「敵だろうと味方だろうとセクハラする――それが千香ちゃんクオリティ!!」

「帰れ変態! そして色んな意味で帰ってこい過去の千香!」

どや顔するこいつに頬をぶっ叩く。すると、とてもうれしそうに悦んだ。

元々クールで人形みたい少女だったのに、師が師だったので今の変

態ドM少女になってしまった。

頼む……あのときの千香、帰ってきて、ホント。

「てめえら、アタシ達を無視してるんじゃないよ!!」

「うっせえロリ！ 今この変態に説教してるんだ。しばらく黙ってる！」

「むしろ説教という名のお仕置きをお願い！ 調教バッチこい！」

「シリアス展開のときは自重しろ変態！」

「うがアアアア！ 無視してんじゃねエエエエ！」

赤毛ロリがハンマーから薬莖を射出させる。

すると、ハンマーが變形させ、ロケットの噴出のような勢いでオレ達に向けて降り下ろした。

『ラケーテン・ハンマアアアア！』

ドゴオンと何かとぶつかり、砂煙が舞う。赤毛ロリは直撃した手応えありとニヤリと笑っていた。

——だが残念。物理と魔法は千香の前では無意味である。

「な、なんだこの防壁!? アタシのラケーテン・ハンマーを防いだ!」

「この程度の衝撃で壊せるほどボクの神器は弱くないよー♪ ね？ ソラ」

「まあな」

千香が神器で創ったシールドで防いだ直後。オレは赤毛ロリの背後にいたポニーテールの女性に斬りかかる。

「くっ！」

「おら、よっと」

「っ！」

剣で防いだ彼女を飛ばしてオレはもう一度召喚術を使う。

「させん！」

女性はオレの召喚術を妨害しようと接近してきた。さすがに止めに来るか。

かと言ってオレは止めない。なぜなら、あいつがいるから。

「なっ!? ヴィータの攻撃を防いだ防壁か!」

ポニーテールの女性を球体の防壁にがその進行を阻んだ。

ご名答。千香の神器は何も攻撃を防ぐためのものではない。
敵を拘束する檻にもなる。

それが『守護神の壁』の応用した使い方である。

再び地面から魔法陣が展開される。喚ぶのはオレが知る最高の剣士。騎士には剣士ってな。

「つーわけで来い——最高の剣士様!」

魔法陣から現れたのは青い短髪。いつも家で着ているラフな冬の服装をした少女。

——そんな最高の剣士様は——

「モシヤモシヤ」

オレのうめえー棒食ってた。

「ってそれオレが買ったコーンポタージュ!?」

「あ、ソラ。やっほー」

「やっほー………じゃねえよ! なに人のお菓子食ってんだよ! それ、杏子に見つかからないように隠したヤツじゃね!?」

「いやーお腹空いちやって、ついね。あとで買ってあげるから」

「それ昨日までの期間限定だからもう売ってない!」

「え、そなの? んじゃ、あたしと一緒に風呂に入る許可を与えよう。さやかお姉さまがゴシゴシしてあげる♪」

「いらねえよ! マミさんかお前は!」

あの人もあの人でナチュラルに入ってくる。

いくらみんなのお姉ちゃんだからって異性と一緒に入っちゃいけません!

男の子だって恥ずかしいです!

「見るからに失敗したようだな」

「ゲッ、関羽」

「誰が関羽だ。私の名はシグナムだ」

「シグナル?」

「違うってジニナルよ」

「オイこら貴様ら。なに勝手に名前を改変しとる。そして青髪少女、貴様のそれは許せん。ぶった斬る」

解放されたポニーテールの女性は青筋を浮かべながらさやかを見据える。

逆鱗に触れたなさやか。

ま、どのみち戦うことは避けられないし、別に問題ないか。

「さやか、頼むな。オレこういう騎士っぽいあんま相手したくない」「苦手なの? ソラにも苦手相手いるんだね」

「昔、悪逆非道って言われるくらいのイタズラしてやって追いかけられたトラウマある」

「あんた何したのよホント!?!」

若さ故の過ちというヤツさ。

まあなんにせよ………オレは『神器』を召喚し、赤毛ロリと相対する。

さあ、始めようか。

「充分生きてただろう? 満足したただろう? なら安心してとつと死ぬ」

「上等だ返り討ちしてやる!」

『神器』とハンマーがぶつかる。サポートは任せたぞ千香。

「ごめーん、なんか結界張った人見つけたから——潰してくるよ」と久しぶりに冷えた一言を吐いて、戦いの地に向かう。

やれやれ、仕方ない。あまり一人で戦いたくないが、やるしかない。

——こうして、それぞれの信念と思惑がぶつかり合った戦いが始まる。まあ、なんにせよ。

「とつと終わらせてミカン箱を弁償させる」

第二十六話 開戦——シリアスになれねえ

生き物のいなさそうな静かな世界で、オレ達は空中戦をしていた。オレが斬り込むと赤毛ロリもといヴィータはハンマーで防いだり、回避したりする。

お返しとばかりにヴィータもハンマーで叩き込む。あれが身体に直撃したら痛いだけでは済まない。

なので回避か受け流ししかオレにはできない。

おまけにこいつ、見た目がこんなのくせに動きは歴戦の戦士だな！「なんか不穏なこと思ったか？」

「直感スキルは高いロリだなと」

「なんだとテメエー！」

一旦離れてヴィータは魔力で球体を数個造り出した。空中に浮かぶ赤い球体にハンマーをぶち当てて発射。

それがこちらに向かってきた。

「ゲートボールかー！」

ゲートボールの魔弾をオレは右へ左へとヒョイヒョイ避ける。しかし、辛うじてという感じだ。

ああくそ、なんとか避けることはできるが元々オレは空中戦が苦手な神器使いだ。

別に浮遊魔法が苦手ではないが、神器を使ってる間に魔法はあまり使いたくなかったから空中戦の練習はしてない。むしろオレはビルや建物を使って飛んで戦うジャングルファイトが得意方だ。

「隙ありー！」

「ゲツ」

二個だけ回避できない球体がオレの目の前にあった。仕方ない。戦時以来だが——

「『跳ね返せ』！」
ミラーシルド

防壁を展開し、球体を防ぐだけでなく——”跳ね返した”。

跳ね返した魔弾はヴィータのハンマーによって弾き出された。

「なんだその魔法は!? 見たことねえぞ!」

そりやそうだ。オレ達が使う魔法とこの世界の魔法は違う。

デバイスという補助機はなく、脳裏に描いた魔法陣を展開する——

——それがオレ達の魔法だ。

「チツ、自分の攻撃でやられて——」

「たまるか……ってか?」

「っ!」

魔法で速さを高めたオレはヴィータの背後をとる。

振り向き様にハンマーをオレにぶつけようとするが、それは既に”

予想”している。

その前にオレはデバイスに向けて神器を差し込み、封鎖した。

「なっ、デバイスがスリープモードにさせられた!」

パソコンで強制停止させるようにデバイスを機能停止させることができた。

自らの相棒が停止したことでヴィータは落下していく。

本来ここで落下させてミカン箱のようなスプラッタな結末にした
いが聞きたいことがあるので、クロノ少年のモノマネの『バインド』で
拘束してから地にゆっくり下ろす。

「さあ話してもらおうか。お前らの目的を」

「くっ、誰が!」

「くらえ! 『フォルテツシモ』!!」

ズドオオオオオン!!と凄まじい勢いで地面に何かがぶつかり、砂煙
が舞う。

轟音と煙と共にシグナムがヴィータの前に吹き飛んできた。

「ガハッ!」

「シグナム!」

さやかかのヤツ。最大奥義でぶっ飛ばしてきたな。

オレがシグナムのデバイスも機能停止にしてからバインドで拘束している、さやかが着地してきた。

「空に飛んだり、剣がバラバラになったりと苦労したわよ。あの人がなり強かったし」

「それでも勝てたお前はスゲーよ」

空へ飛べないハンデを抱えながらも勝てたこいつに健闘を称えて頭を撫でた。

「へへ……」と照れ臭そうに笑みでさやかはオレに言う。

「それじゃあ、うめえー棒の件許して」

「だが断る」

「解せぬ」

食い物の怨みは深いでごわす。

きやアアアア!!と絹を裂くような悲鳴が響く。それにヴィータとシグナムが驚いていた。

「この悲鳴はシヤマル!?!」

「テメエらシヤマルに何しやがった……!!」

「……………」

「いや、なんだその『またヤツか』って顔!?! なんだよ、シヤマルに何が起きたんだよ!?!」

懇願するかのようにヴィータは聞いてくる。その答えを出すかのようにシヤマルがシグナムと同じく飛んできた。

—————
バニーガールの姿で

編みタイツと赤いバニーの格好をしているその姿はとても轟惑的だ。ここがシリアスの場面じゃなかったらよかったのに。

「はっ…」

「うう……まさかこんな格好させられるなんて……………もうお嫁にい

けない……」

「シヤマル、なんでそんな格好してるんだ!？」

「むしろ何があつたか教えてほしいよ……」

オレもだよ。どうやったらかうなるんだよ。千香もさやかと同じように着地して彼女達の疑問に答えてくれた。

「よくぞ聞いてくれました。これぞ師匠直伝、名付けて『高速着せ替えアタック』だよ！　ちなみにそれは師匠お気に入りのコスだよ！」

「あなたの師匠はとんだスケベオヤジだよ」

「師匠は女だよ？」

「あなたの師匠はとんだエロオヤジだよ！」

さやかがツツコむ。

ろくなこと教えてないなあの人。戦時中にお世話になったけど、ほとんどがギャグとノリで敵を殲滅してたな。

しかもほとんどがメンタルブレイクという名の強制コスプレだったりする。

ついた異名が『混沌の神器使い』である。光と闇ではなく、場を混沌させる力オスな神器使いと称えて。

オレの師匠もよくそのことで愚痴とか言ってたな。

「ふっふっふっ……ええのうええのう。この乳に、腰、そしてヒップ。美女のコスプレが一番でゲスう♪」

「フラッシュするな変態。本人の意思関係なく撮るなよ」

「恥ずかしい……。でもなんでだろう……。この羞恥心に爽快感があつて、新しい何かが……」

「シヤマルというお姉さん、頼むから目覚めるな！」

これ以上変態が感染するのだけはやめてほしい。

「これで一件落着だね！」

「「落着じゃねえよ!!」」

「あべしっ!!」

オレとさやかの拳骨ツツコミで千香は地面とキッスした。

とんだ置き土産を残してくれたよ。

オレとさやかは目覚めそうなお姉さんを正気に戻そうと奮闘する

の
だ
っ
た。
。

第二十七話　そして彼女は笑った

シャマルさんを正常に戻し、オレとさやか、千香はドナドナのBG Mを流しながら、彼女達の一軒家にお邪魔するため向かっていった。やんちゃ娘三人に叱ってもらおうと思つてのことだ。プンスカ怒つてやると彼女達は借りた猫のように静かになってくれた。

いやーわかつてくれて何よりだ♪　お兄さんはうれしいぞー♪

「久しぶりにソラのガチギレの拳骨を見た」

「自重しないとイケないかなあ、と思つたボクであつた」

何を言つてるかな二人はー？

オレはそんなに怒つてないよー？

反抗と言ひ訳ばかりなヴィータちゃんに拳骨おとして気絶した光景を見たシグナムさん達が怯えて教えてくれたなんてことないよー？

「あのお願いだからその笑顔やめてほしいわ……」

「あははは、何を言つてるのかなシャマルさん？　……オレの笑顔、そんなに嫌なものデスカア？」

「どうしよう………めちやくちや怒つてるこの子」

いざ行かん。ミカン箱の怨みと三人娘の親の説教へ！

とある一軒家にて、三人娘の保護者的な人が彼女達を説教していた。ていうか、その、

「お前がこいつらのオカンだったのか」

「オカンちゃうわ」

「こんな身で母親とか。そりや、やんちゃになるわー」

「誰が母親や。あんたと同じまだピチピチの九歳や」

「ピカピカじゃね?」

「よろしい戦争や」

車イス少女ことはやてが彼女達、『ヴォルケンリッター』という守護騎士達の主らしい。

まさかこないろいろ小さな少女が闇の書というロストロギアの主とは誰も思うまい。

「ごめんなあソラくん。うちの娘達が迷惑かけて」

「良いって別に。345円払ってくれたら許す」

「あのミカン箱って何気に人気やしなあ。……まだ売つとるかなあ」

「主はやて! ここは私が責任をもって!」

「シグナム、誰が正座解いてええって言った?」

あ、シヨボーンとシグナムが落ち込んだ。

さすがみんなのオカン。車イスでありながらもそのオーラは偉大である。

「ただいまー。今日の鍛練はザフィーラのおかげでうまく——あ……………」

「ん? お前は確か……………」

そう、ヤツこそオレの友人。

「八神タケル!」

「違うぞ我が友よ!」

「違うの? んじゃ、三丁目の夕陽ヶ丘にいる田辺くん?」

「誰だよソイツ!? 我は天道衛! 貴様のクラスメイトだろうが!」

「……ああ! 確か運動会で杏子の騎馬に最初に轢かれた押谷くん!」

「天道衛って言ってるだろ! お前の耳は大丈夫か!」

失礼な。オレの耳は五十メートルも離れた場所からでも音が聞ける優れものだぞ?

「というか最近、ソラって俗世に離れてたから忘れてたんだよ。なんか、異世界から来た少年を使ったドッキリしたら家出された(番外編参照)」

「つまり、我のことを忘れたのだな? さりげなくひどいな貴様……………」

「いやー♪」

「誉めとらん！」

そんなやり取りに呆れるはやて達だった。
え？　これが普通じゃないの？

☆☆☆

闇の書——魔力を蒐集を集め、666ページまで蒐集すれば、
絶大な力を得るとされるロストログア。

とりあえず聞きたいことができたので八神に聞いてみた。

「集めたら神龍出るの？」

「いやドラゴンでボールなお話ちゃうから出ないちゃうん？」

「そーなの？　チツ、願い事あればギャルのパンティーお願いしたの
に……」

「どこの喋る豚だお前は」

千香を叩きながら状況を整理。

闇の書は魔力蒐集しないはやてにムカついて宿主の彼女の魔力を
吸いとる。

結果、下半身不随に陥る。

このままでは死ぬとメデイカルなシヤマルの診断で守護騎士達は
『蒐集のような迷惑を他人にしないでほしい』という願いを無視して犯
行に及ぶ。

「……要するにだめじゃんお前ら。お母さんの言うこと聞かないと」
「このままはやてが死ぬのを見過ごせて言いてえのかテメエは!？」
「そこまで言っただけだし、せめて蒐集行う前に専門家に聞こうと
しろよ。蒐集以外の方法があつたかもしれないじゃん」

「ていうか、なんか聞いた話じや管理局の人にも蒐集しちゃったそう
じゃない。犯行に及んで、もう専門家にも頼れない詰み状況に陥っ
ちやつてるじゃないこの馬鹿ちん達」

さやかかの毒舌に「ウグツ」と守護騎士達はグウの根も出せなくなる。

「今回は管理局に通報しないけど次は襲うなよ。襲うならオレの仲間達以外と生物だけに限定して、ひっそりと蒐集して」

「同じく。千香ちゃんと良い子のみんなと約束だよ♪」

「黙認するんだあんた達。まあ、私もこういう重い事情があるなら仕方ないなあーって思ってるけど」

「さあ帰るべ、帰るべ。オレ達はリビングの扉を開けようとした。」

「待ってくれ!」

衛が制止の声をかけて、いきなり土下座してきた。

「別にお前らのしてること通報する気はさらさらないけど?」

「違う! そうじゃない。貴様に……我が友に頼みたいことがあるんだ!」

「頼みたいこと?」

「はやてを……我の恩人を救ってくれ」

その言葉にオレは呆れて、嘆息を吐いた。

「だからって犯罪者になれって言うのか普通? 巻き込まれたオレ達に? 随分自分勝手なお願いだな」

「ああそうさ! そうだよ! 我は貴様に頼みたいんだ! エゴだ。」

「醜いお願いだ! でもこのままはやてを失いたくないんだ! 我を、我を死ぬことを悲しんでくれる彼女を!」

……………。

「頼む!! この通りだ!!」

真摯に頼む衛にさやかと千香は無言で、土下座の彼を見下ろす。オレも口を開かない。ただ彼の言葉を聞いていた。

「我が友よ……貴様の力は恐ろしくもすごい。そのすごい力が我にはない。羨ましいくらいだ。だから、どうかどうか……」

「はあ……やれやれ……」

「どうしたものかねえー。面倒事は関わらないつもりが、ここまで真摯に頼まれたら――」

――関わりたくなっちゃったじゃねえか。

というか元から友人には手を貸す。それがオレのポリシーだ。

「さやか、千香。まどか達を呼んでくれ」

「そうね。そうしましょうか!」

「やる気が出てくるね!」

それぞれがやる気満々である。

八神家VS管理局。

言葉からすれば圧倒的な差を感じるが、負ける気なんて全くない。むしろ上等。敵は強大、だがオレ達は無限大だ。

「ありがとう……ありがとう……」

衛は泣きながらオレにお礼を言ってくる。

まあなんにせよ……こんな真剣なヤツに協力してもあいつらも文句は言わないだろ。

なんやかんやで言ってお人好しだからな、みんな。

(??side)

一方、その頃。とある管理局時空艦にて、一人の少女が『PT事件』の報告書が書かれたウィンドを見ていた。

その報告書をしばらくしかめ面を見ていたが、ある一文を見た彼女は目を見開いた。

そして口角をあげて、拳を握った。

「ククク……そうか。キミもここに転生したのだな。ホント、わたしは幸運だ。まさかキミがここでも暴れているとはね」

艦長室の椅子から降り、彼女は笑みを浮かべる。その目には野心を求める力強さがあり、同時に愛しいと想う少女の目をしていた。

彼女の容姿は変わっていた。ソラと二つ上の年代にも関わらず、リンデイ提督と同じ格好——つまり、彼女と同格の位である。

髪は背中にかかるくらいロングで、その先を結っている。また彼女の左目はある事情のために眼帯がつけられていた。この眼帯を外すときは彼女が戦うときなのだが、今はいい。

彼女が部屋を出ようとしたとき、寒色系に輝く綺麗な髪が揺らめ

く。

「待っていたまえ、『無血の死神』。今度こそ、キミを手に入れてみせる」

『キアラ・グレアム』。それが今の彼女の名前である。

第二十八話 ヒーローと英雄

(??side)

ヒーローと英雄。

この二つには英訳、和訳関係では同一だが、何かが違うと考えている。

ヒーローは仮面のライダーやパンの正義の味方のような『生かす』を志す存在で、怪人は爆殺ことはありますが人を殺すことはまずない。

しかし一方、英雄は神話で出てくるように化け物や強大な悪を殲滅し、滅ぼすような『殺す』を追求する存在だ。大義名分で人を殺すことを問わない人を指す。

ゆえに彼らは相容れない。

現実と理想。水と油のように混ざることはない。

どちらも正しい。そしてどちらも間違っている。

神威ソラは理想を求めすぎたあまりに、大切な人を失った。しかし現実を求めても彼は大切な人を失った。

どちらも失う結果だった。しかしダメージが大きかったと言えば、理想を求めすぎたという点である。

夢を求めた人間が挫折すれば、とても落ち込むことである。

まあとは言え、夢を求めるからこそ目標が生まれる。そのことを理解してほしいと思う。

今の彼の夢？ そんなの決まっている。

彼女達と過ごすこと。平和で馬鹿馬鹿しく笑える物語をつくることだ。

(ソラside)

まず結論を言わせてもらおう。オレ達も蒐集活動することになった。

八神はどこか納得していなかったが、最終的には衛の熱意に負けて、魔力を持つ生物ならば、蒐集していい許可をもらった。

まどか達を八神家に呼んで事情を説明すると予想通り、協力してくれると言っていた。

まどかやママさんというお人よしがいると思えるが、ほむらまで乗り気に賛成したのは意外だった。

なんでもジュエルシードの事件で余った取引材料がまだあるからであるらしく、いつでも脅せる武器らしい。

「お主もワルよのう越後屋」

「いえいえ、お代官様ほどではなく」

「知ってるのが意外」

「病院でよく水戸黄門見てたから」

まさかの意外な事実である。ちなみにオレ達のおくどい顔を最初に見た八神は少しドン引きだったとか。

失礼な。この美少年と美少女にドン引きとは見る目がなさすぎる。

まあ、どうでもいいエピソードだが。

すると、魔法陣が現れる。

衛がオレ達に鍛えてくれと言ったので、とある無人世界では衛くん魔改造計画を開始した。

彼にはこれと言った武器がないので、槍の杏子、剣のさやか、マスケット銃のママさん、弓のまどかという風に相手したり、教授してもらっている。

名付けて『経験値を高めようぜ作戦』だ。

え？ ネーミングセンスない？

文句があるなら命名したまどかまで。『グロック17』と『デストロイアーチャー』でおもてなしします。

普段はボロボロになって帰ってくるのが毎日な彼であるが、今日は疲労困憊だがボロボロではない。

成長している証拠だろうな。

「まどか、どうだったかしら?」

「うーん、なんか弓を使うのはしつくりこないとか言ってたね。やっぱりザファイターさんみたいな拳で戦うのがしつくりくるらしいよ」

「拳士ってヤツか」

「うちのところにはないタイプよね……」

拳で語る神器使いはここにはいないしな。まどかが「そうだ」と呟いて、携帯を取り出す。

「拳で闘うことを得意とした最近知り合ったオジサンにお願いしよう」

「まどか、まさか援交じゃないよな?」

「許せない……まどかを汚したその男を始末するわ……」

重火器を取り出すほむらにまどかは「違うから仕舞って」とお願いした。

ちよつとホツしたりする。そこまで彼女は間違っていないようだ。

「その人は女の人に興味ないよ」

「なら、オレみたいな男なのか? こんな美少年を狙うオッサンなのか!」

「ソラくんはイケメンじゃないし、男が好きなホモじゃないから安心してよ」

「さりげなく傷ついた。ほむら、胸かして。泣きたい」

「どうぞ」

胸に抱きついてさめぎめと泣きます。こやつもノリノリである。

あ、いいにおい。女の子のにおいと柔らかかさに至福のときである。

「あとでソラくん、お話しね♪」

「解せぬ」

「とにかくその人はね——」

まどかがその人についてオレとほむらにヒソヒソ話した。

……うん、その……なあ。

オレ達二人は衛に向けて一言を言った。

「衛、ファイト」

「あなたのこと忘れないわ」

「貴様らいつたい誰を紹介するつもりだ？　そしてほむら殿、それ相手が死ぬ間際の一言だからな!」

ツッコむ衛にオレ達は彼がそのオジサンのようにならないように祈った。

フラグじゃないよなこれ？

とある休日。ほむらとデパートに向かった。

買いたい本が今日発売という理由もあるが、こいつと久しぶりに出かけたかと思ったからだ。

「どういう風の吹き回しかしら。ソラが私のような完璧で最高の美少女を誘うなんて」

「お前って相変わらずだな。ボツチの原因じゃねそれ」

「あら、私をボツチ扱いとは失礼ね。許せないわ。その無礼の報いとして差し出しなさい……指を」

「折るのか？　指を折るつもりなのか!」

オレのリアクションが面白いのか微笑を浮かべる自称美少女。その微笑は、イタズラ成功した子どものようないい笑みだ。そのうえ、文字通り周りを虜にするほどだ。

現にほむらの微笑に周りの男と女も虜になっていた。

「ふふ♪ やっぱりソラのリアクションはいいわ。いじめがいがあるわ」

「歪んでるなお前」

「ええそうよ。私は歪んだ女で面倒な女よ。構ってくれないとイタズラするわよ」

「ハロウインは先月やったからな。はいはい、さっさといくぞ」

「冷たい男ね。昔は熱血だったじゃない」

「……青くさい覚悟はもう捨てたんだ」

頭に？浮かべてほむらはしばらくオレを見る。

やれやれ、話しておくか。そう思つてオレは会話を続けた。

「オレはき。いろんな人と出会つて、いろんな人を助けて、まるでテレビのヒーローのようになったと錯覚していたんだ。誰でも助けることができる正義の味方みたいにな。けど、まどかの概念化という悲劇は阻止できなかつた。そのときの教訓で『救えない人もいる』を学んでいたはずだったんだ」

けどオレはそれを理解せず、戦争では意味のない不殺ばかりしか行わず、『神器使い』達を殺さなかつた。

師匠とはそのことでぶつかつたこともあつた。

『オレは人を殺さず、戦争に勝つ』

そう言つて師匠の耳を貸さず戦い続けた。師匠も半場呆れた形で、オレの意思を尊重してくれたけど。

なのに………

「それが間違いだったんだ。戦争はなんでもありの殺し合うものだ。だからオレはもう戦えないと勘違いして放つておいた神器使い達の報復にあつた。そして——師匠はオレのせいで死んだ」

あのとき師匠はオレを庇つて戦死した。瀕死だったと勘違いして死んだフリをしていた敵がオレに攻撃してきた。

その致命とも言える攻撃から庇つて、胸を貫かれて……。

敵にとつて師匠はかなりの猛者で名声を得たと思つて歓喜の声をあげた。

オレはただ泣き叫んだ。そして聞きたくないものを聞いてしまった。

『こいつはラッキーだ！あの閃光を討ち取れた』

『しかもガキを守つて死ぬなんてバカにもほどがあるぜ！』

………その嘲笑を聞いたとき、オレのナニ力がキレた。

怒り、憎悪の赴くままにオレは敵を殺した。皆殺しにした。

一人残らず、魂を肉体から切り離した。

血を一滴も流さず、残されたのは——魂を失った人形と師を失って泣く一人の子どものみ。

だが、その子どもの中には少年らしさの夢も希望はなく、ただこの悲劇をなくすために敵対者に対する怒りしかなかった。

「だからオレは『救いのヒーロー』と青くさい不殺の信念を捨てて、敵をただ抹殺し、蹂躪する『英雄』になろうと思ったんだ」

ヒーローと英雄はどこか違う。

ヒーローは周りから頼られ、誰もが親しみを持てる存在だ。

しかし英雄は違う。周りから讃えられ、誰もが畏怖を持つ存在だ。

どちらも憧れるものだが何かが違う。

「……………」

ほむらはオレの話聞いて地雷を踏んだと思っっているのか気まずい表情になった。

なので——そんな彼女を乱暴に頭を撫でる。

「そんな辛気くさい顔をやめろよ♪」

「ひゃっ！ い、いきなりなにをするのよ!?!」

「辛気くさい顔をする女に渴をいれた」

「レディの頭を強引に撫でるなんて最低よ」

「はっはっはっ♪」

「笑わないでよ！ もう……………」

膨れっ面になって拗ねたほむらに悪かったと言って頭を下げた。

「神器使い達の戦争は終わった。そして、オレの子ども時代はあの戦争で終わったんだ。だから心配する必要はもうないよ」

「そういえば、心だけでなく身体も変わっていたわねあなた。ほんと一見誰だかわからないくらい…………その、カツコよく…………なってたわね」

「そんなによくなってたか？」

そりゃ、仲間の女の子達によく見られていたし、誘惑もあつたけど、

あんま興味なかったしなあ。

戦争の世界とほむら達のいた世界との時間の流れはかなり違らしく、十年間の時間の流れはほむらの世界ではまだ四ヶ月くらいしか経っていなかったらしい。

そのとき彼女達と再会したとき、オレが誰なのか全くわからなかったらしい。

「再会したときのお前らはあまり変わって………いや変わっていたな。あのとき見たアレは変わったとしか言いようがない………」

「あ、アレはママさんとまどかにのせられて、その………」

指と指をツンツンして恥ずかしがるほむらに萌える今日このごろ。

まどか曰く、これは『ほむほむモード』らしい。

昔の彼女がこういう気弱で恥ずかしがり屋だったそうらしく、たまに失敗したり、凶星を付かれたりしたらなるらしい。

ほむらって冷たい勘違いされがちだけど、実は人付き合いが苦手の不器用なんだよな。

ホントは知り合った友人やまどか達に優しい少女である。

「ほむら、オレは変わったことに後悔してないよ。そりゃ辛いことが今まであったさ。けれど、今は助ける力がある。知り合いを助けることができればそれでいいと思っている」

「見ず知らずの人を助けないの?」

「知らん。その辺りはママさん、まどか、さやかを担当さ。見ず知らずの相手を感謝されたところであんまうれしくない」

「同感とは言わないけど、わかるところがあるわ。でも、もしその人が知り合いの知り合いだったら?」

「………助ける、かも?」

「クス、何それ。ふふふふ………」

「笑うな!」

くそつ、一本とられたし、なんだよこいつの笑う顔。

見れないくらい………かわいいじゃねえか………。

「あーやめやめ。さっさと早くぞー!」

「はいはい♪」

「あーくそ、笑うなよもう……」

照れくさいと思ったらありやしない。オレはほむらの顔を見ることせず、彼女の手を握り、スタコラ目的地に向かった。

——そのとき周りの視線は、『姉と弟と出かけている家族』を守る暖かいものだったと思う。

「あつた。湯煙殺人事件簿」

「それっていつも風呂場から推理を始める前に覗きして、独房で犯人を暴く変人探偵の物語じゃない」

「意外に面白いの。ってお前もなに買ったんだ？」

「世界の拷問のやり方シリーズ第六巻。あなたのお仕置きのバリエーションを増やしたくて」

「命の危機が増えたオレに全国の銀髪少年は泣いた」

第二十九話 物語は遂に動き出す

(??side)

クロノ・ハラオウンは最年少の執務官だ。まだ幼さ残る整った顔立ちだが、彼が歴戦の戦士とは変わらない。

そんな彼が関わる事件は、彼の父親を亡くした原因である『闇の書』——最悪のロストロギアである。

父の仇、と思わなくはないが公務と私的な想いはしっかり分けて考えているつもりである。

今日、『高町なのは』がそのロストロギアの守護騎士達に襲われた。これは由々しき事態だ。民間人が、それもかつてロストロギア解決のために協力してくれた少女が襲われたことに憤りを隠せない。

彼が向かっているのは父の上司であるギル・グレアム。そしてその彼の戦いの師であるリーゼロッテとリーゼアリアがいる部屋だ。

(あのロストロギアを知る人ならば、この人以外はいない)

『闇の書』という危険な代物と関わったことがあるからこそ、クロノは早速グレアムと相談しようと考えていた。

彼が部屋に入ると、そこにはグレアム、リーゼロッテ、リーゼアリアの三人が揃っていた。しかし約一名ほど知らない少女がいる。

少女はかわいいというより凛々しさがあつた。年齢からすれば高町なのはと一つか二つ上かもしれない。

背中にかかるくらいの寒色系のヘアーカラーのロング。

左目は眼帯で隠されている。

そんな美少女と言える彼女にクロノは見られていた。男の子としては嬉しいことなのかもしれないがクロノが感じたのは奇妙な気分だ。

(なんだこの感じ……。まるで神威と最初に会ったような感覚がする……?)

ソラに最初に出会ったとき、このような感じが彼女からした。クロ

ノはわかってないが、『観察』されていたのだ。そう、この眼帯の少女に。

少女はフツと笑みを浮かべるとグレアムがやっとクロノに気づいた。

「おお、クロノ執務官。来ていたのか」

「はい。お久しぶりです。彼女は？」

クロノが聞くとグレアムではなく本人が答えた。

「はじめまして、ってところかな？　ワタシはキアラ。キアラ・グレアム。グレアム提督の義理の娘さ」

彼女の友好的な笑みは、クロノにとってナニカを感じさせた。

——前世の因縁。かつての、ソラの仲間が、そこにいた

(ソラ side)

どんよりと曇った天気。今日は洗濯日和ではないことに残念である。その夜はとても綺麗な星空が覗かせていたが。

「管理局にバレた」

「ええー」

そんな夜中のとある一室にて、灯りをつけずろうそく一本の会議という変な演出をしていた。原因は停電だったりする。

なんかどっかでドンパチして誰かが電柱を壊したとかなんとかと、近所のオバサン達が話していた。

そんな状況でないわーという感じにオレ達がシグナムを半目で見ると、彼女は目を逸らしてやり過ぎそうとする。

オイこら。こっち見ろや。

「仕方ないだろう。ヴィータが高魔力を持つ人物を見つけて、魔が差したのか襲ってな……………」

「またお前かPSO」

「アタシはゲーム機じゃねえ！」

ヴィータが反応する反抗する彼女に半目で睨む。

「なら改名するかなんとかしろ。お前のせいで犯罪が警察官より質が悪い組織にバレたんだから」

「うぎぎぎ……何も言い返せねえのが悔しい」

「なら、悔やむ前に反省しろ青二才」

「うわアアアアアんはやてエエエ!!」

ついには泣いてしまったヴィータがはやてに泣きついた。

「こら、ソラくん。女の子を泣かしたらあかんで」

「泣かすもなにもこいつの自滅だ。悪い子には徹底的に反省させるのがオレのモットーなんぞな」

「ちよつとひどいんちゃうん、それ」

「甘い。まどかとほむらなら、オレを反省させるどころか……青少年未満ではお見せできないことをしでかすからな……」

「ソラくん、なんでメチャメチャ震えてるん!? 何があつたん!?!」
ガタガタブルブル。

思い出せばベッドの上で迫る二人の鬼の恐怖。ホラーゲームをリアルで体験したような感じである。

貞操は守りきれたがあと一歩のところまで全てを失うところだった……。

「泣きたい、叫びたいのにあいつらはギャングボールを用意しだして……」

「わかったから泣かんといて! メチャクチャ不憫やから!」

「はやて、ぎゃんぐぼーるってなんだ?」

「そこだけ食いつかんといてヴィータ!」

実は純粹無垢な少女、ヴィータちゃんだった。

大丈夫、それは杏子も知らない知識だから。だからいつまでも純粹無垢でいてください。

そして、誰か癒しをください……。それがオレの願いです。
ひぐらしは鳴かない頃だけど。

とある次元世界にて、綺麗な青空が広がる天気の下でオレはマイクを握っていた。

「遂にやってきました衛くんのデビュー戦。試合時間は六十分一発KO有り。では選手を紹介しましょう。赤コーナー『我こそ主人公。モブなど雑兵などにすぎん』。好少年のオリ主くん。青コーナー『愛ゆえに我こそ有り。邪魔する者は指先一つでKO』！ 覇王を目指す少年、衛くん。実況担当はわたくしこと自称みんなの弟兼苦勞人の神威ソラと解説は」

「みんなの天使なマスコット、朱美まどかが担当します。よろしくね☆」

「……君たちは何をしているんだ？」

「特別ゲストにクロノ少年ことクロノ・ハラオウンがツツコミを担当します」

「さりげなく混ぜられた！ っでどこから出したそのゴングと解説席！ そしてなぜツツコミ担当!?!」

クロノ少年は敵でありながらもオレ達にツツコむ。そのツツコミはあっぱれなり。

なぜこんな状況になったかと言えば、いつも通りに蒐集活動していたら守護騎士達がクラナガンという都市に誘導されてしまい、待ち伏せしてたアースラ組に足止めされる。

さらにはヴィータ達に襲われた鷹松……あ、間違えた。高町とフェイト達がリベンジしたくてパワーアップして挑んできた。

オリ主くんもパワーアップしていたため苦戦というより大ピンチという展開だったため、衛くん魔改造最終段階を終わらせたオレ達にSOSをシャマル先生が送ってきた。

まさか、ラインでSOSとはさすがのオレも驚いた。次元世界共通だったのかラインって。

スゲーなオイ。

「なんで君達がここにいるんだ？」

「友人の衛くんにお願いされて協力している。今回は自分達の意味だ

から捕まえていいよ」

「なら——っ!? こ、これは……」

杖を取り出してこちらを捕縛しようとするクロノ少年に管理局の汚職と秘密裏に行われた人体実験が記録されたファイルを見せる。

「ただし、今回はこれを提出するから見逃してくれ。リンディ提督と交渉したい」

「そんなことできるはずがない！ 君達は犯罪行為をしていたんだぞ!?!」

「さつき言ったけど捕まえていいよ。でもその代わりオレ達を捕まえたら管理局は神器使い達の管理という名目でオレ達に人体実験を行うかもしれないし、このファイルだって家宅捜査という名目で処分されるかもしれない」

「くっ……」

「悔やむところ悪いけど、これが今の管理局なんだ。だから信用できないんだ。クロノ少年とリンディ提督以外はね」

取り出した杖を仕舞ったクロノ少年。どうやらしぶしぶながら納得してくれたようだ。

「今回は引き下がる。だが、いずれ君達を捕まえてみせる！ 僕が変えた管理局で」

「それは楽しみだ。いつかかかってこい。オレ達『神器使い』をな」

クロノ少年は上に上がって管理局を変える目的ができたそうらしい。まあ、勝手にすればいい。

オレ達はオレ達の道を行くだけだから。

「おや、オリ主さんと天道くんの戦い始まるよ?」

遂にか。さてと、やるか♪

「それではレフリーの千香！ あとは頼んだ！」

「まっかせなさい!!」

テンション高めにバニーガールの格好で登場してきた千香。

セクシーに見えるが、ヤツからすれば今日はこれが萌える服装と思っただけらしい。

男としてはうれしいが残念な思考の美少女である。

「なんて大胆！ くつ、これはあとで私も猫耳ナースの姿にならねば」「ここにもいたか、残念美少女が」

まどかさん、頼むから今日も自重してください。
そんな願いを込めてチョップでツッコむのだった。

ちなみにパワーアップした二人のお相手はシグナム、ヴィータにさやか、杏子とほむら達がしてる。

時間稼ぎのつもりがただいま現在進行形にボコボコだったりされているよ、あの二人。

「ところで君に会わせたい女の子がいるんだけど」

「久しぶりだな、『無血の死神』」

……え？ マジで？

まさかの再会にオレは啞然となるのだった。

(衛サイド)

とあるビルの屋上というステージにて、我の目の前にはかつてにつき敵だと思っていた少年、天宮草太がいた。

バリアジャケットを展開し、剣を持つその姿にかつての我ならば慢心しながらも足がすくんでいただろう。

だが、なぜか怖いという恐怖はなくむしろ、修行の成果が楽しみという感情がある。

「なんで君は神威達に協力する？ 彼は極悪人なんだぞ！」

「我が友を侮辱するな天宮。我こそがこちらから頼んだのだ。むしろ我らが極悪人である。貶すならば我にしろ」

「信じられるか！ どうせはやてをモノにするためにしたに違いない！」

はやてをモノ……………だど？

「ふざけるな貴様。はやてはモノではない！ はやては人だ。我が恩人だ！ 貴様のような何も知らぬ人間が語るな！」

「踏み台の言うことなんか信用できるか！ お前ははやての友達かもしれないが関係ない！ 間違ったことは必ず止めなきやいけない

だ!!」

天宮は中段の構えをとる。

もはや舌戦は無意味か……。ならば我も拳を固めるまで。

「ならば止めてみせよ。我はもはや慢心せぬ。見下さぬ。ただ弱者として、強者たるものに立ち向かうのみ……!」

真のヒーローとは弱者のために拳を振るう。たとえどんな状況だろう、どんな環境だろうと彼らはそれをやめない。

なぜなら『ヒーロー』だから。人を救ってこそ『ヒーロー』だ。

「礼を言うぞ天宮。我は貴様と出会い、我が友と出会い、自身の本来の夢と目標を思い出せた。そして無力な弱者と知り、一から鍛え直した」

杏子殿の槍術、さやか殿の剣術、マミ殿の銃、そしてまどか殿の弓術を教授させてもらったとしても我はその戦い方が合わなかった。

才能がないと自覚していたとしてもここまでとは思わなかった。絶望もした。

しかしまどか殿の紹介で我は生涯の師となる者に出会うことができた。

そして極めることが遂にできた。

「天宮よ。貴様は力の源はどこにあると思う?」

「?」心だろ。そんな簡単なこと」

「そう力の源は心と言える者もいる。しかしそれは人それぞれである。我が友、ソラならば力の源はここと言うであろう」

我は自身の胸を軽く叩く。

天宮が「俺と同じ」とほざいたが否定した。

神威ソラは答えた。

——力の源は魂である、と。

折れない。

屈しない。

たとえ絶対的なモノが立ちはだかることになろうと最期の一瞬まで挑み続ける鋼の魂である。

無論、彼に慕う少女達も同じ考えである。ゆえに彼女達は強いのだ

ろう。

「しかし、我は我が友と貴様の考えとは違う」

「それじゃあお前の力の源はなんなんだよ！」

「よくぞ聞いてくれた！」

我は師から教わって、一つの真理にたどり着いた。

我は未だバリアジャケットを展開していない。否、最初から必要な
い。

バリアジャケットなどただの動きやすい服装に変わる程度の認識
でしかない！

あの謎の剣士タイプから一新したのだ！

「刮目せよ！ 我がたどり着いた一つの境地を！ 今こそ答えよう我
の力の源とは！」

そのとき、我は師と最初に出会ったときのことを思い出した。

走馬灯のように。そう、師は言う――

『見よ、我が輩の芸術的肉体を!!』

——芸術的な『筋肉』こそ真理であると！

「そう私の力の源こそ！ 『筋肉』である!!」

そう叫んだときバリアジャケットは展開され、肉体が普通の小学生から大人になり、一般人とは思えない位に筋肉が盛り上がった。

これは大人モードと言われる変身魔法である。

そしてバリアジャケットも変化した。

上半身は開いた学生服でズボンにはレギンス。我が動きやすいように改良したのだ。

そして両手には、それぞれ手の甲に魔法陣が描かれた掌を開閉できるグローブがはめ込まれていた。

「スピード、パワー、そしてテクニクの全てが必要なのは筋肉である！ それが我がたどり着いた一つ真理なりイイイイ!!」

「いったい何があったんだお前に！ いつもなのは達に付き回っていたお前はどこにいった!?!」

「そんなもの筋肉の前では無意味！ マッスルパワーの前では性欲、食欲、睡眠欲のあらゆる欲は抑制できる!! 見よ、この芸術的肉体を！

ふつつんぬウウウウ!!」

「見たくないし、服着ろー!」

せつかく見せているのに、ツッコまれたのが解せぬ。しかし、この芸術的筋肉を隠すなど笑止千万である。

「うわー、スッゲー筋肉……」

「やっぱりアームストロング少佐を紹介して正解だったね！ ようこそイロモノワールドへ!」

「何があったんだ彼に!?!」

「落ち着けクロノ執務官。……まさかこの世界でも筋肉至上主義と合間見えるとは」

ふふん、それぞれ開いた口が塞がらないようだ。では行くぞ天宮!

愛と筋肉の戦士の我の前にひれ伏せ！

「ゆくぞ、強者！ 筋肉の貯蔵は充分か！」

「そんなもん貯蔵できるわけ——って、はやアアアアアア!?」

こうして我と天宮との戦いは始まった！

第三十話 実はソラのファーストはまだだつたな件

激闘の轟音が鳴り響く中で、あつという間に衛とオリ主くんの戦いは中盤戦に持ち越した。

オリ主くんが剣を降り下ろせば、衛は腕で受け止め。

衛が上段蹴りを放てば、オリ主は動体視力と直感で回避した。

「普通はその腕は斬れるだろ！」

「マッスルパワーの前では無意味！ 鋼の肉体の真髄を見るがいい！」

「こいつ。どうかしてるよ！」

オレもそう思う。

後、なんか目がおかしいのかな？ 衛が五人になった。いやマジで。

「僕の目はどうかしてるかな。天道衛が五人に増えたように見えるのだが」

「アームストロング少佐の秘技の一つの残像拳だよ♪」

「いやあり得ないだろ！ 残像って実体のない分身だよな？ あれ、思いきり実体になってるよな!?!」

クロノ少年の言う通り五人同時でオリ主くんを集団リンチしてる。実体なければあの四人はなんなんだよ……………。

「なんかオレより強くなってね？」

「そうだねー。肉弾戦に持ち込まれたらおしまいだよ、あれ」

まどかの言う通りである。

衛が一旦距離を取り、それを追撃するオリ主くん。衛は一息を入れて、叫ぶ。

「マッスルスパーク!!」

「ぐああああアア！」

「出たアアアアア！ 身体の生態電気を放出させる奥義マッスルスパークだアアアア!!」

まどかのテンション高めに解説する通り、身体から放電され、オリ主くんは感電してしまい、クラクラと空中に浮かんでいた。

「あれって人体でもできるの？ 解説のまどかさんや」

「今の天道くんは千香ちゃんレベルの変態だから当然できるよ」

「ああ、そうなのね……」

やはり変態は最強か……。もうやだ……。

非常識過ぎて精神が摩耗して正気になれないや……。

「もー、疲れた……」

「ソラくん、休みたいなら今日は帰って私とベッドインしようよ！」

「君は公務員面前でなにを言ってるんだ!？」

「ああ、そうだね。もうそれでいいや……」

「神威!? 帰ってこい。頼むから！」

もう何も怖くない。

全て委ねようと思った。すると誰かが優しく顔を抱いてきた。

「ソラくん、もうがんばらなくていいわ。あとはお姉ちゃんが守ってあげる」

「ああ……お姉ちゃんの身体、暖かいやー……」

甘いニオイがするな……。後、最近大きくなった微かな膨らみが心地よい。

「む？ この女。タイミングよく現れて『無血の』をデレさせたな」

「ソラくんの甘えさせるなんて好感度上昇をはかるなんて、ママさん恐ろしい子ー！」

「ふふ、弟を甘えさせるのままお姉ちゃんの特権です♪」

まどかが吠えているがなんにも聞こえないことにした。

あーなんにも聞こえないー。ボクわかんなーい……。

「フオオオ！ たぎって来たぞ天宮アアアア!!」

「こいつ化け物か！ 俺の『ダークインパルス』を生身で受けきっただど!？」

「お返しだ！ ゆけい、芸術的な魔法を！」

轟音と共にオレのSUN値が元に戻った。

はっ、オレは何を!？」

正気に戻ったとき、衛は魔法陣を展開し、ポーズ取ったマツスルの形をした衛の魔力弾が浮き上がり、それをオリ主くんに向けて発射。なんとか避けることができたが顔がかなり引きずって、苦笑をしていた。確かに当たりたくないな。あれ。

「あ、ママさんもういいです……」

「あら、残念」

「正気に戻ったね……あと少しで洗脳しようと考えてたのに」

「何気に恐ろしいことを考えていたまどかに戦慄を覚える」

そんなやり取りしていると、衛は真つ直ぐにオリ主に突っ込み、正拳突きを構えをとる。

「くっ、師匠直伝！ 『マツスルウウインパクトオオオオオ』!!」

「ぐ、アアアアア!?!」

その正拳突きでオリ主くんはビルを貫き、地面に叩きつけられた。ジュツドオオオオオオンとどっかの野菜星人のような音と共に砂煙が舞った。

砂煙が晴れたとき、オリ主くんはピクリとも動かなくなつたが、千香が近づいて生存確認。

あ、なんとか生きているらしい。

「見たかこれこそが芸術的筋肉と芸術的奥義！ エクセレントエレガントなりイイイイ!!」

「無駄に暑苦しいなオイ」

ポーズをとる衛にツッコむ。

するとオレの呟きと同時にオリ主くんの元に新たに二名が叩きつけられた。

フェイトと高町だ。アルフは千香によってビルの屋上で縛られて、ハアハアと興奮した息をあげている。

そういえば、千香が『アルフは縛って目覚めさせる』とか言ってたな……。

あいつ、戦いの最中レフリーだけでなくそんなこともしてたんだな。

「全滅だな」

「全滅だね」

「帰りましようソラくん」

「いやそう簡単には帰せない。同行してもらおう」

キアラとクロノ少年は仕事しようと杖を構える。ぶっちやけ、オレらにはこんな結界意味ないし。

———
———

「衛くんが結界壊そうとしているよ?」

「えっ?」

指さす方向には正拳突きの構えをとる衛。

『『マツスルウウインパクトオオオオ!!』』

ガツシヤアアアアンツ!!

ガラスが割れるような音がし、結界は壊された。アースラ組や守護騎士達も唾然である。

後から聞いたけど、あの結界結構頑丈だったらしい。

それを物理的に破壊したらそりやビビるわな。

その隙に『ドコでもドア』を展開してオレ達神器使いは逃げる。

『『無血の』。待っていたまえ。今度こそ、必ず手中に納めてみせるぞ』

「やってみなキアラ。オレがほしければオレを———むぐっ!」

といきなりまどかに唇を塞がれる。そして彼女の柔らかな唇が離れたとき、言った。

「キアラちゃん。残念だったね……ソラくんのはじめてはあなたでもマミさんでもない。———この朱美まどか様だアアアアア!」

「調子乗るな」

「ぐえ、キブギブ! 絞まってる絞まってる!」

とりあえず、いきなりファーストを奪ったまどかを絞める。男の子のファーストキスは重要じゃない?

男女差別するなよお前ら。読者達

「フハハハハ！ 見てくれはやて！ このエクセレントな筋肉を!!」

「ホンマ誰やあんた!? 私知ってる衛くんやないで!」

帰ってきたら、はやては目を開かせて驚愕していた。

そりやあ、草食系主人公的な少年がいきなり筋肉至上主義者に変わってたらなあ……。

「まどかちゃんいったい誰を紹介したん？ 何があつたんや衛くんに！」

「彼はアームストロング少佐という元軍人でマッスル至上主義者の教えを受けて筋肉を武器にするマッスルファイターになったんだよ♪」

「なんでそんな人を紹介したん!？」

「おもしろい……彼のためだからだよ♪ ティヒヒヒヒヒ♪」

「今、おもしろいっていいかけたよね!？」

相変わらず黒いよまどかさんや。はやて、ホントにごめん……。

「いやソラくんが謝ることないで。ていうか、なんかザフィーラと仲良くなってるし」

「あいつの人間形態ゴツいからなあ」

二人同時に嘆息する。すると、ほむらが爆弾発言を投下した。

「そういえば、あなた。まどかとキスしたわね」

「……………」

「私達が戦っている中で、まどかのファーストを奪い、そしてイチヤイチヤしてわね……?」

「……………弁明させてください」

ヤバい。オレかまどかわからないが、確実に嫉妬してキレてる。おまけにさやかと杏子が「オイ、どういうことだコラ」と言った表情を向けている。

唯一、まともなママさんは「あらあら、モテモテね。ソラくん♪」と笑顔を向けているが、目が笑ってないのは気のせいではない。

ちなみにまどかはイヤンイヤンと外しそうに首を振っている。

さてと……。

「八神、首吊りの縄ある?」

「しつかりしい！ 簡単に死んだらあかんで！」

「大丈夫。元々こんな受難ばかりだったから……もう何も怖くない……!!」

「なんか知らへんけど、それやめて！ マミるって絶対！」

「マミるってマミさんのことかなあ？ もうどうでもいいやー。」

その後、オレは成すがままにボコボコにされ、四人のファーストキスを無理矢理もらわれ、暴走したほむらとまどかと千香が拘束してベッドに持ち込もうとしていた。

それをはやて一人が阻止してくれた。

ありがたやーありがたやー（ぶっ壊れ）

第三十一話 こいつらに関わってはいけない

だんだん寒くなる十一月の末。

その日の夕方、オレと杏子はミカン箱を買いに行っていた。

先月はヴィータとシグナム達によってぐちゃぐちゃにされたため、今回は杏子が付いている。ぶっちゃければ、杏子にとって食べ物粗末にされてたまるかという理由もあつての同行だと思う。

一緒に行くと言い出したときの恥ずかしそうな顔は気のせいだな、きつと。

萌える少女友江杏子——なんか気づかれてぶたれた。痛い。

というわけでコタツの装飾品もとい食品購入というリターンマッチである。

ミッションであるブツは手に入り、あとは帰宅すればミッションコンプリートだ。

しかし、しばらく歩くとなぜか人の気配がなくなる。

「ってなんか魔女結界出てね？」

「あー。もしかしてさ。誰か絶望したじゃねーの？」

「高松かフェイト辺りじゃない？ 一応、魔法少女だし」

「……あえて、スルーしてたけど、これ魔女結界じゃねーからな。あと高松じゃなくて高町な」

「安心しろ。オレもあえてわかっててボケたから」

「だろーな」

はっはっはつと談笑するオレ達の目の前に仮面をつけた男が現れる。なんだこいつ？

『闇の書』に近づくな。さもなければ災いに巻き込まれるぞ」

そして厨二発言。どうしろと？

「災いって……ねえ」

「アタシ達の前世の成れの果てが災いだったし、あんま怖くないし」

「というわけでやり直せ。テイクツー。アクシヨン！」

「いや、なに普通にやり直しさせるのさアンタ達」

仮面の男にツツコミを入れられた。今のでわかったけど、こいつ実は女じゃねえの？

しゃべり方がそうっぽいし。

「ソラ、こいつ女じゃねえの？　しゃべり方がそうっぽいし」

「あ、それ。地の文で言ったからもういいよ」

「メタイよアンタ！　というかあつさり見破られた!？」

「えっ、正解だったの?」

「アタシはてつきり今流行りのオネエという男性かと」

「心も身体も女だよあたしは!」

そう言うものの男声でその口調は、ねえー……。てか、暴露したじゃん。駄目じゃん。

「うわっ、ということはいいつ自分で言っておいて男装してるじゃん」
「この変態!」

「アンタ達そんなにあたしをいじめて楽しいの!？」

オレと杏子のコンビネーションで彼女のメンタルのライフポイントはゼロである。

遠くから「もうやめて!　ロツテのライフはゼロよ!」って聞こえた気がしたが、聞きたいことがあるので聞くことにした。

「んで、なにしに来たんだ変態」

「あんた容赦なく傷ついた女の子の心を抉ること言うわね!」

「あいにく、変態にひどいめにあってるから容赦ないんだわ。あ。あと杏子も容赦なく頼む。あいつらの抑止力が増えたらこちらも助かる」

「アイアイサー♪　答えやがれ、変態男装厨ニヤローが!!」

「ウガアアアアア!　もう許さない!!」

遂にぶちギレた男装少女がオレ達に向けて回し蹴りを放つ。

オレ達はそれをそれぞれ左右に分かれて回避し、さらにオレに追撃してこようとする。

オレはその場に飛び引こうとしたが、魔力の鎖に巻き付かれた。

『『バインド』?　もう一人いるんだな』

オレは咄嗟に杏子とアイコンタクトをとり、追撃の拳を腹部に受け

る。衝撃と痛みが身体にはしる。

「いったいなあー。」

でも杏子はオレの考えを理解して、すぐさまに民家の屋根に飛び乗って移動した。頼んだぞ杏子。

「さーてと、どうしようかねー」

仮面の男装ヤローの追撃は続いていた。

オレはあえて『バインド』を『神器』で解かず、そのままの状態ですべてに身体を動かして回避する。

「あ、オイ。そこミカン箱あるから気をつけ」

「はアアアアア!!」

バチャ、ベチャ!!

ミカンがご臨終します。グチャグチャに踏みつぶれた……。

「……オイ。またか」

手を額で覆い隠したかった。また潰されたよ定価314円。どうしよう、これ杏子のぶちギレフラグだよな？

「オレはもうしーらないっ」と

「なっ!」

召喚した神器全てを開く者を手に取り、バインドを解錠した。

ガキイイインツ!

拳と神器がぶつかり、金属音が鳴る。拮抗しているように見えて押しているのはオレである。

「くっ、なんだよそれ!」

『神器』。魂の武器って説明するのもこれで何度目だよオイ。もう面倒だから時空管理局のクロノ少年に聞いてくれ」

「クロ助を知っているのか!?!」

「えっ、まさかの知り合い? あのヤロー、暗殺者まで用意するとはもう許せん。ミカン箱一年分を賠償金として請求してやる」

「賠償金が地味だなオイ!」

というわけで邪魔な拳を弾き、仮面の男装ヤローに神器を挿し込

み、かかっている魔法を全て解錠する。

ガチャリと音が鳴り、男装から猫耳美少女にシフトチェンジしたことに少し驚いたが、すぐに動きをバインドで封じる。

「な、なんで!? 魔法が解けた!? しかもこの術式はなんなんだよ!」「知らなくて当然だろ。ここにはない世界の魔法で創ったバインドだから」

「ここにはない魔法って……」

「聞きたいことがいろいろあると思うけど、あっちも終わったぞ」

多重昆で巻かれたもう一人の仮面の男装ヤローが杏子に連れて来られた。

「アリア!」

「ごめん……こいつの魔法に翻弄されて……」

「幻想共をナメるなよ。さてとソラ。そういえばミカン——」

そう言った杏子に無言でオレは潰れた無惨なミカン箱に指をさした。ついでに「こいつらが原因」って言っておいた。

すると杏子が悲しそうにしていた表情から、髪の毛を逆立てていた。背後には猫のスタンドを具現化させるくらいの怒りを露にした。

「テメーらあ……食い物を粗末にするなって母ちゃんに言われなかったのか……ああん?」

「ひいー!」

「ソラ、バット出せ。こいつらボコボコにしてやる!」

というわけで家にあったバットを召喚して貸した。一応、バリアジャケット的なものをきているし、衝撃だけで大丈夫かもしれないけど。

「結構打撃性のある武器になるんだよな、あれ」

「ちよつとあんた止めなさいよ! この赤毛、目がマジよ!」

「あ、無理。こいつを食い物に対する怨みは深海より深いし、あと」

「あと……なによ?」

「せっかく並んで買ったオレ達の苦勞……どうしてくれるんだ。あ?」

「こいつもキレてた! ってお願い、女の子が女の子を殴るシチュ

エーションはさすがにえぬ——にやああああああ!!」
ロツテとアリアという猫耳美少女達は杏子が気が住むまでしばか
れた。

え? オレはどうしてたつて?

スマホでラインした後ゲームしていましたが、何か?

漢女^{ガール}フレンズ(笑)は面白い。主に主人公が災難な目に合うラッ
キースケベが。

☆☆☆

縄で縛った猫耳美少女達を八神家に連れていき、八神達に事情を説
明した。

ものすごくかわいそうな目で二人に同情していた。

そんなにひどいことしたかなあ。

「いや、抵抗できへん少女達に容赦なくバツドでシバくなんてさすが
にひどいで」

「神威家の逆鱗に触れた馬鹿共の当然の末路だろ」

「エゲツないで……」

「というか、あたし達も最悪あなつてたこと?」

ヴィータもなつていたかもしれない末路に少し震えていた。

大袈裟だなあ。ズタボロのボロ雑巾になった程度なのに。

「大袈裟や! 大惨事や! ちよつと自重してほしいくらいやで!」

「八神、一番ひどいお仕置きはマミることだ」

「それ聞いたことあるけどどういうことなん?」

「主に芋虫の化け物にこいつらの頭を食い潰させる♪」

「笑顔で悲惨なこと言うなや! あんたもあんたでエゲツないで!」

「悲惨な死に方させることがマミらせることさ」

「あかん。誰かこの人止めて……」

おやおや、猫耳少女達が怯えているねえ。別にするつもりないのに

なー。

チャキ。

だがしかし他は別だが。ほむらはグロックを猫耳姉妹に向ける。

「さて、さっさとあなた達の目的を話さない。答えはイエスかハイよ」

「拒否権ないし、『グロック17』構えないで！ それは質量兵器よ!?!」

「質量兵器ってなにかしら？ これは火薬が入ったエアークンよ。撃てば一撃で天国へ逝ける優れものよ」

「死んでるよねそれ!?!」

ほむらがアリアに脅迫もとい尋問を行っている。彼女はやれやれと嘆息を吐き千香を呼んだ。

あ、ヤベ。あいつら終わった。

「千香、あなたにこの子達に変態の恐ろしさを教えてあげなさい」

「アイアイサー♪ ゲへへへ、さあ姉ちゃん。お着替えしましょうねー?」

「離しなさいよ！ あんたなにするつもりよ!?!」

「ちよつとした着せ替え人形になってもらうだけだから不安ならなくていいよ♪」

「離して！ やめてよー!」

「あ、私も協力するで」

ロツテを連れて八神と千香は台所へ消えて行った。

そして——数分間、

『きやあアアアアアアアア!!』

ロツテの悲鳴が響いた。

「ちよつとロツテになにしたのよ!?!」

「……………」

「目を逸らすほどのことされてるの!?!」

「いや別に肉体的にひどいことはされてないよ…………たぶん」

「自分でお願いしたのもなんなのだけど、ちよつと罪悪感あるわ……ごめんなさい」

「あの人達、ホントにロツテに何してるの!？」

アリアのツツコミが終わると同時に目が虚ろで縄から解放されたロツテがフラフラとアリアの前まで歩いて倒れた。その後にはホクホクと満足した二人が出てきた。

「うう……アリアあ……あたし汚されちゃったよー」

「ギリツ、あんた達なにしたのよ!」

射殺さんとはかりに八神と千香を睨むアリア。二人は笑顔で、

「コスプレ写真会!!」

サムアツプで返した。

ポカーンとアリアが唾然とするのも無理はないと思う。

「いやー素材がよくてバニー、婦警、ブルマ、裸ジーンズ、巫女、花嫁、墮天使エロメイド、裸エプロンなどのエクトセトラをいろいろ着せることができたよー」

「さすが千香ちゃんやで。絶妙なアングルとコスチュームを用意するなんて、もう匠の域やで! 特に墮天使エロメイドは素晴らしい!

猫耳とメイド服は萌え素材やで!」

「そういうはやてこそチョイスとポーズの要求が素晴らしかったよ!

ちなみにボクは裸エプロンがよかったです!!」

鼻息を荒くするほど彼女達は熱が籠った会話をし、ガツと握手した。

変態とエロオヤジの友情である。というか八神ってエロオヤジだったんだな。

「ちなみに管理局と全次元世界にアツプする予定」

「焼き増し可能で十二月九日にアツプ予定。カミングスーン!!」

「いやああああ!! あたしの黒歴史がああああ!」

「ロツテ、しつかりして!!」

そりゃ、全国ネット以上の驚異だなオイ。遂に発狂したぞロツテ。

まあ、なんにせよ……。

「ついでにアリアも撮ってやれば?」

そう言った直後、獲物を見る目でアリアを見る二人。

失言？ わざと？

いいえ、ロツテのためを思つての道連れです。

「……………ナイスアイデア」

「あ、あなた！ なんて恐ろしいことを!?! あっ、ちよつ、やめてエエエエエ！ 離してエエエエエ!!」

アリアが台所へ消えて行つた後、オレとほむらは音楽機器を取り出して悲鳴を聞かないようにした。

あ、『倉リス』つていいな。

ほむらは『ビーンズ』聞いているし。

(??side)

八神家でカオスな展開している中で、闇の世界に一人の男はいた。

その男は金髪のおツドアイ。

神条シンヤその人である。

「クキキキ……そろそろだ。この力に慣れれば、ヤツに……!」

この闇は後々、■■■にとつての悲劇をもたらす……。

第三十二話 この世に絶対はない

どこか曇り空な天気。今日は一雨が降ったり止んだりする天気である。

ロツテ、アリアの目的はどうかやら『闇の書』の封印らしいとわかった。『闇の書』には完成したら全てを破壊し尽くし、さらには転生機能で主が死んだ後に他の主に移る尻軽機能がついていた。

浮気性な本である。というか破壊神なのか？ ハーゴンだったのかこの本は。

そして壊れた彼女達の心に漬け込んで尋問するなんて、ほむらマジ策士。

思わず、戦慄したわ。

まあなんにせよ。

「ややこしくなってきたなあ」

闇の書をはやてごと封印するのと、闇の書を破棄してシグナム達を殺すこと。

どっちが最善なのかねえ……。

そう思いながらぼんやりとまどか達と昼食をとっていると、オリ主くんとたかま………なんだっけ？

「高町なのはなの！」

「おおっ、思い出した。高松なのぼだな。うん記憶した」

「微妙に違うから！ 高町だから！ なのはだから！」

「なのは、早速ペースをとられているぞ……」

それが安定のオレクオリティである。呆れながらオリ主くんは話を続ける。

「今度はなに企んでいる？」

「なーんにも。今どん詰まり状態で悩んでいる最中なのよねー」

「嘘つけ踏み台野郎。どうせ天道を利用して、はやてを手込めにしたいと考えているのだろう？」

「そうなの!? 妻として浮気は許さないよソラくん！」

「いつからまどかはオレの奥さんになった。というか、おあいにくオレは人の大切な人に手を出すほど外道じゃないから」

くだらないと言わんばかりに半目でオリ主くんに返した。オリ主くんは完全にこちらを敵意している。

しよーもない……。

「神威、お前の野望は俺が必ず止めてみせる」

「野望ってなに？ ハーレムウハウハ帝国とか言うなよ。つくったらつくったらでまどほむコンビがデストロイしてくると思うからつくる気なんてさらさらない」

「がーん！」

「なんで千香がショック受けるの？」

「みんながソラのハーレムパーティーなら、その一員としてボクが被写体として撮ってあげるのに」

「R指定になりそうだから却下」

千香の写真は全年齢対象ではないはずである。しかし、最後まで高町は微妙な顔をしていたな。昔あつた敵意はどこいった？

今日、八神が入院した。

急展開すぎるかもしれないが、闇の書の魔力吸収が増加したらしい。ロツテリア姉妹の暴露で空気読んで吸収のレート上げたな。

オレときやかと千香はその御見舞いに病室に向かった。

「はやてー御見舞いにきた……よ？」

八神の病室にいたのは、月村と……えつと……なんでいるんだ。

「オイこら。なんで私の名前が言えないのよ」

「ソラ、確かバーニング竹田だよ」

「違うわよ。確か竹田バーニングよ」

「どつちも違うよ！ 何よその竹田とバーニングを合わせた芸名!？」

バニングスよ。アリサ・バニングス！」

「「アリさんマーク？」」

「引越し業者でもないわー!!」

うなーと手を振り上げ、目をつり上げて怒るバニングス。

うむうむ、いつも通りである。

「バニングスと月田さんはなんでここにいるの？」

「今度のターゲットは私!」

この漫才は永遠に終わらないでござる。

閑話休題

バニングスと月村は八神の知り合いのようだった。

ということはいずれにしても高町達に気づかれる可能性がある。

ロッテリア達は帰したが写真で黙らせることができる。

だが、八神の友人となると記憶を消すかしないと高町達に闇の書の主が誰かバレてしまう。

「厄介なものだ……」

「そだね……」

公園のベンチに座って、オレと千香は憂鬱そうに嘆息を吐く。白い息が空に舞い上がる。

現在、オレ達はさやかに八神の護衛を任せてこれからすることに対しての話し合いをしていた。

「闇の書を消すか、はやての死を待つか……か。どちらも嫌だねー」

「かと言ってオレの『神器』を使えば八神から闇の書の呪縛を切り離せば、闇の書は転生する可能性がある」

「どこが悪いかわかればソラの専売特許が使えるのにね」

オレの解錠は対象がわからないと発動しないし、闇雲使ったとしたら八神に悪影響が及ぼすかもしれない。だから今は迂闊に手は出せないのだ。

「ソラ……」

「わかってる。やられたな」

いつの間にか結界に覆われており、オレ達は孤立していた。空から飛び降りたのはオリ主くん和高町か。

「なんのようだ？ こちらはちと虫の居所が悪いんだが」

「お前をここで止める。原作をこれ以上めちやくちやにされてたまるか」

「原作原作って、ここは物語の世界とは違うって何度言えばわかるんだお前」

もはや呆れたため息しかでない。オレは『神器』を召喚し、戦闘準備に入る。

『神器』を召喚した千香も高町に飛び込んでいき、スタンロッドを降り下ろす。

あれが戦時中の千香の戦い方だ。本来、スタンロッドじゃなくてナイフだけだ。

「はアアアア!!」

遅い。ぬぶい攻撃をオレは避けて、飛び上がる。

「かかったー」

「んー？」

設置された『バインド』に身体を捕らえられたようだ。うーん、別に驚異じゃないし、早く解錠——

ザシユツ。

さてみなさん。このとき、オレならば負けない。勝てると思っていてはずだ。

だが、残念ながらオレも人間だ。油断する。慢心もする。オレは甘く見すぎていた。ヤツは殺人という愚行は犯すことはないと、そんな小心者ができるはずがないと、油断していた。その結果、

「ゴフツ……!?」

ナイフがオレの腹部に突き刺さっていた。オリ主くんが投げたモノで……まさか、あいつ……!!

「お、前殺すつもりで……!!」

「これもはやてのためだ」

何が八神のためだよあのヤロー。

『バインド』を解錠し、ナイフを抜いた。しかし身体が痺れて上手く動けなくなっていた。

……神経毒が塗られたナイフか！

くっ、飛んでいたら落下する。高度を下げようと気をとられていたとき、オリ主くんの剣が降り下ろされた。

キインツ

『神器』全てを開く者でそれを防ぎ、金属音が鳴り、オレは地面に叩きつけられた。た。

オレは肺にあった息を吐き出されてしまった。

「このデバイスは殺傷設定にしている。神威、お前だけは絶対に仕留める」

そうやってオレを見据えるオリ主くん。

本気のような……。

そうくるならこちらも答えたいところだが、毒で身体が上手く立たない。

オリ主くんは四つん這いとなったそんなオレを見下ろし、剣を振り上げた。

「死ね」

断罪の剣はオレの元に下ろされる。

ああくそ、こんなところでオレは……。

そう思い、目を閉じる。走馬灯を思い出していると金属音が鳴り響

く。

「千……香……?」

無表情な千香がオリ主くんの剣をオレを苦しめたナイフで防いだ光景を最後にオレは気を失った。

(千香サイド)

高町なのはとの戦いをどう面白おかしくしよう画策していた中、ソラが刺された。

——そのときボクは目の前の小娘のことなんかどうでもよくなつた。

ソラを殺そうとしてきたあの男に、ボクの全てが冷え込んだ。感情も頭も全て。

オリ主くんの剣を受け止めたとき、ソラの意識がなくなつたのか目を瞑つた。

ボクはオリ主くんの剣を弾き返して、殺意込めた目でみた。

「くっ、天ヶ瀬さん！ そこをどいてくれ！ こいつは殺さないとなてをめちやくちやにする！」

めちやくちやにする？

なにわけの分からないことを言ってるのこの男は？

そんなことでボクのソラを傷つけたの？

「君は……許さない。泣いても、許し請おうとも、ボクは君を潰す……！」

ボクは毒のナイフを構える。

戦時中に愛用したナイフは今も持っていないけど、刃を守護神の盾神器で纏つた毒のナイフなら非殺傷設定にできるし、毒もまわらないはずだ。

ソラならたぶんこんなヤツでも許すだろう。

だけどボクは違う。立てないようにしてやる。

うん、そうしよう。

「だから安心してとっと死ね。クソザコ」

かつてオークに向かって言った言葉をオリ主くんに向けていい放つ。

ボクはオリ主くんの目の前まであつという間に接近した。

ボキイ!!!

彼は剣で応戦する前にボクは彼の腕を掴み、その間接技でへし折る。

「がアアアアア！」

利き腕を破壊された後にボクはそいつの鳩尾に蹴りを放つ。

空気を吐き出され、後方へ飛んだ。

「まだだよ。まだ終わらさない」

また失ってたまるか。ソラを失うなんてもう嫌だ。

思い出すのは暁美ほむらの世界。そこでたどり着いたとき、彼は満足した顔をして倒れていった。

なんで。どうして。彼が死ななければならぬ。

大切な恩人。愛しい人。そんな彼は目を閉じて、身体が冷たくなっていった。

ボクは冷たくなったソラの手を握った。

何も言えなかった。

何もできなかった。

何も返せなかった。

だから……………。

「ボクはソラの敵を排除する。それでソラが生きていけるならボクは人形でもなんでもなつてやる」

起き上がるオリ主くんにまた接近した。オリ主くんは今度は、すぐに剣を降り下ろしたが、ナイフで受け流した。

毒のナイフは脆く砕け散った。安物だねこれは。

けれどどうでもいい。後は打ち込むだけだから。

『守護神の盾神器』で纏った拳をオリ主くんの鳩尾に打ち込む！

「がはっ!？」

浸透剄という中国拳法の奥義を打ち込んだ。その打撃はバリアジャケットという防護服を貫通するし、内部も破壊する。

血を吐いて、オリ主くんは白目を向いて事切れた。

チツ、動けたらもう一回ぶちこんでやるのに。

「草太くん！」

「別に心配する必要はないよ高町なのは。内蔵に攻撃したけど命の別状はないよ」

ボクはそう言ってソラの『神器』を拾う。うん、まだ使えるみたい。彼の『神器』はボク達のような親しい少女達に使えるようになっていく。

さてと。すぐにシヤマルに見せれば大丈夫かな。

ボクはそう思い、ドコでもドアを展開した。

すると、高町なのはに呼び止められて振り返る。

「千香ちゃん、その私……」

「君は悪くないよ。悪いのはそいつだから。あと、そいつに伝えておいてね。次にソラを殺すつもりなら——」

ボクは一息入れて言った。

「——君の大切な者全て殺される覚悟してね」

凍えるような一言を最後にボクは高町なのはを背を向けた。

そのときボクは笑っていた。かつての『魔女』という化け物になった頃と同じように。

——歪み、穢りきった笑みを浮かべて

第三十三話 知らなかった……

目を覚ませば知らない天井だった。……いやネタじゃないよ？

マジで知らないから。真っ白な天井で殺風景な部屋にオレはベッドで寝ていたようだ。

てか、病院か。ここ……？

あれ、確か。オレは……。

「気がついたのね！」

「よかった、よかったよう……」

「ぐへっ！」

まどかとはむらがベッドに寝るオレを押し倒すような形で抱きついてきた。

うん、とりあえず——

「いたたたたた!? ほむらお願いお腹からどけて！ あとまどか、鼻息を荒くしながら抱いてくるな！ 怖いマジで！」

「ソラちゃんと規制事実つくるチャンスだよ。ほむらちゃん！」

「了解！ みんながいない間に畳み掛けるわよ！」

「確信犯!?!」

って服を脱がしにかかるなアアアア!! 誰かヘルプ!!

ガラツ。そんな天の答えを示すかのようにスライド式の扉が開いた。

唐突に病室の部屋が開き、そこにいたのは、シャマルさんと衛だった。

二人はオレ達の現場を見て、衛はウンウン頷き。シャマルは頬を赤らめていた。

このタイミングだからこそ、誤解されてるのか！

「……お邪魔みたいね」

「うむ、さすが我が友。二人の少女を両手に持つとはなかなかの甲斐性がありだな。我はその功績に免じて今日のはやての面会で貴様の

武勇伝を語ってやろう！」

「そうじゃあ、ごゆつくり……」

「シャル先生カムバアアアアアツク!!」

無慈悲に閉められた扉。脱がされる衣服。そして襲い掛かる肉食少女達。

今日ほど貞操の危機を感じたことはなかった………。

その後に来たママさんとさやかに救われた。

千香が当時の状況をこう語っていた。

「カオスだね!!」

お前が言うなとツツコミたかったが精神的に参っていたので叶わなかった。

オリ主くんに刺された後、オレはシャル先生に応急措置されて病院に搬送されたらしい。

搬送された後にほむら、さやか、杏子、ママさんがオリ主くんブツコロ宣言しようとしたがそれをまどかと千香が意外にも止めた。

理由を聞くと、

「ソラなら殺されたとしても許すと思うから」

「うん、ソラくんって根は優しいから」

二人の少女の理由に凶星を付かれたオレは目を逸らさずにはいられなかった。

優しいって………いや、さすがにオレもやるときはやるよ？

ただまあ、生きているから許してやろうかなって思っている程度だし。

その後の二人は「だから今日は熱い夜を過ごそう!!」と同時に言い出した。

いろいろ台無しである。

返せよオレの感動。

まあ、なんにせよ。

「生きていることはすばらしい……………」
なぜかって？ それは目の前に展開されてる光景を見たらわかる
さ。

「あ、こちら杏子！ それはソラのために剥いたリングゴだよ！」

「いいじゃんカテーこと言うなよ、さやか」

こちらの見舞い品を物色する少女達。杏子は本当に遠慮がない。

「はい、ソラくん。アーン♪」

「マミさん、その役目は私のものだよ？」

「ふふ、弟の看病はお姉ちゃんの特権というものよ。残念だけど、譲れないわよまどかさん」

「よろしい。ならばお姉ちゃん戦争だよ。マミさん」

「私もまどかの同盟として参加するわ」

「かかって来なさいな、シスターズ。お姉ちゃんがお相手させてもら
うわ！」

第一次姉妹戦争を始める少女達。『神器』を出さないでマジで。

「さあ、ソラ。こつち向いてー。そしてセクシーなポーズを!!」

カメラを構え、何か要求する少女。千香……男のセクシーってなん
だ？

もう一度言おう……。

「生きていることはすばらしい……………」

「ソラくん、しっかりして！ 現実逃避しないで！」

「ごめんシャマルさん、オレはこのカオスな空間に耐えられないよ
…………。もうゴールしていいよね？」

「ゴールってなに!? 何をゴールするの!?!」

姉妹のようにじゃれあう杏子とさやか。

まどほむ同盟VSお姉ちゃんマミさん。

変な写真を撮ろうとする千香。

全くもって癒しがほしい今日この頃である。見舞いに来ていた

シヤマルさんが唯一のオアシスです。

「しばらく戦線復帰できないなあ」

「毒はもう抜けたって聞いてるけど大丈夫なの？」

「まあね。抗体もできたし、次くらっても平気」

『神器使い』ってこんな規格外人達ばかりかしら？」

顔をひきつらせて苦笑するシヤマルさんに対して千香は「いやソラとうちの師匠だけだから」と首を振るう。

失礼な。オレの師匠は毒よりキツイ病原体を敵にぶちこまれたときに、戦いながらその病原体に順応していたぞ。

「人間じゃなくて人外ね」

「解せぬ。まあそれはさておき、八神の闇の書の件はどうかするか考えている？」

「管制人格を目覚めさせて、対話してどうにかするということにして
いるわ」

「管制人格？」

「闇の書を管理するAIよ。私たちと同じプログラムで感情もある
わ」

ふーん。そんなのがあるのか。というかそれでなんとかなるなら
良いのだけど。

「タイムリミットも近い。だから私達は全力ではやてちゃんのために
蒐集しなくちゃいけないわ」

「なるほど？ で、オレ達の魔力をいただきたいと？」

シヤマルさんは頷く。

「リンカーコアの抽出は激痛らしいわ。それでもお願い。はやてちや
んのために……」

シヤマルさんは頭を下げてオレ達にお願いした。

いや、それよりも聞きたいことがある。

「リンカーコアってなんぞ？」

「リンカーンのコアじゃないの？」

「リンカーンの核ってあったかしら？」

「違うわよ。魔力を作り出す器官よ？ 知らないの？」

ほむらとまどかの発言にシヤマルさんは否定する。
知らないも何も……。

「オレ達リンカーンなコアないもん」
「えっ?」

オレ達の魔力は体力と精神力を混ぜて初めて生み出されるものだ。
だからそういう便利器官あれば、是非ともほしいな。それ。

「……それじゃあ、どうやって蒐集しようかしら?」
「「「「「あ……………」」」」」」

結局、魔力を放出するという形で蒐集しました。

まどかの無尽蔵魔力量にシヤマルさんびっくりらしいです。

さすが、魔法少女の神様である。

第三十四話 報いを受けろ！

シンシンと降る雪は止み、そして真つ暗な夜空となっていた。

本日はクリスマスイブである。

サンタという真つ赤に着た小太りのオジサンが白い袋に入れたプレゼントを持って、良い子に配るといふ行事がある夜であるらしい。

オレも千香とその師匠と一緒にクリスマスパーティーをしたものだったけどあのパーティーではなかったな。

なんだよ。サンタコスで爆弾を敵陣に投げつけるって。どこのテロリストだよ。

八神に教えられて初めてサンタがテロリストではないことに気づいた。

顔をひきつらせていたなあいつ。衛も苦笑していたな。

「とうわけでもどかささんや。どうしてこう外が騒がしいのかね？」

「さあ？　なんか魔女結界みたいなのも張られてるし」

「なんですと？　それはまずい。早く魔法少女杏子たんを呼ばねば」

「のんきに言ってるねえで早く外に出ろ!!　あと杏子たんって言うな！」

お茶を飲んでくつろいでいたら、杏子が扉を開けてシャウトしてきた。

まさにグッドタイミングである。

やれやれ……………なにが起きてるのやら。

そんなこんなでオレはダルい身体を動かす。と言ってもほぼ完治してるけどね。

(??side)

キアラはクロノと共に執務官室に向かっていた。なぜ二人が向かっているのかと言うと、キアラの義父であるグレアム提督が違法な

封印を八神はやてに行おうとしていたからだ。

クロノは自身の力で真実にたどり着いたに対してキアラは妙だった。クロノが真実にたどり着き、グレアム提督の元に行こうとしたら、待つていましたとばかりに彼女はタイムリングよくいた。

果たして彼女はどうかやってグレアムの違法を知ったのだろうか？クロノは疑問に思うが、今はどうでもよかった。

それよりもグレアムだ。

二人は部屋に入ると、グレアムは腰かけていた。彼はまるでここにクロノが来ることを知っていたかのように待っていた。

「……なんの用があつてここにきたのかね？」

「あなたを逮捕しに来ました」

グレアムの罪状を、違法封印に踏み切ろうとしたことをクロノは咎めた。それに対してグレアムは自分の怒り、憎しみ、悲しみを露らにした。

『闇の書』が原因で、多くの悲しみを植え付けさせられたことに対する負の感情が彼を突き動かしていた。

クロノも同じだとグレアムは考えていたが、彼は首を振った。

「そんなことをしても父さんは帰って来ないですよ。父さんだったら、と思うと自分の目指す正義を取ると思います」

「君は悔しくないのか！ 悲しくないのか！」

「悲しいのは当たり前ですよ。なんせ父さんがあのロストロギアで失いましたから」

でも、と続けて言う。

「悲しいからって、憎いからって、復讐みたいなことをして父さんは喜ばない。『誰かを悲しませることが正義なのか！』——って、きつと言うに違いありません」

クロノの目には迷いはなかった。最初から私的なものが一切なかった。

その答えに対してキアラは拍手する。彼女はニヤリと笑っていた。

「素晴らしいよクロノ執務官。キミこそ管理局の鏡だね」

「キアラ……まさか君は、こうなることを予想していたのか？」

「はい。こうなることを考えて、わたしは彼にわかるように種を蒔いたってことですよ」

キアラが口に出したのはとんでもないことだった。クロノが真実にたどり着いたのもキアラの差し金だったのだ。

「ならば君は最初からわかっていたのか？ 自分の身内が違法を犯していたことを！」

「知っていたさ。知っていた上で泳がせていた。なんせ『闇の書』というものに興味があったし、暴走したその姿を見たいと思っていてね。どんな威力で、何に使えるか直に見ておきたかったのさ」

「君は……！」

クロノが言おうとしたとき、キアラは人差し指で彼の口を閉じさせた。

「もう一つの理由がある。わたしが逮捕に踏み切ろうとしたら父上はわたしを軟禁するだろうと考えたからさ。わたしとて、拘束されるのは嫌だ。それがもし一年以上と考えるとやってられないさ」

「……！」

「クロノ執務官。キミの信念は素晴らしい。だからこそ、覚えておきたまえ。」

——キミの信念とは真逆の人間は必ずいることを」

この場合だとキアラは正義より利益だ。正義を求めるクロノに対して真逆の人間となれば、快樂殺人鬼などそういうイカれた部類や悪徳を求める外道になるだろう。

クロノにとってキアラは微妙だ。利益が強いが正義を全く考えているわけでもない。

ゆえに相容れないとも言えないのだ。

「くっ……」

「まあ、そう深く考えるな。既に過ぎたことになるからな」

キアラがそう言ってなんとなく、デバイスのウインドを開く。すると彼女は目を丸くした。

なぜ彼女がキョトンとした顔になっているのかをクロノがチラツ

とウインドを覗くとピシツと文字通り石のように固まった。

「……父上。ど、どうやら。お、面白いことに……ククク」

「どうしたと言うのかね？」

キアラがグレアムのパソコンに開いたページを送信すると、彼は「んな!？」と悲鳴をあげた。

それに対してキアラは遂に爆発したかのように笑い始めた。

「クハハハハハ！ やはり彼に関わると面白い!!」

キアラが見せたページ。それは管理局のホームページだった。

(ソラside)

外に出れば、空はややおかしな色で、空中には高町と衛とオリ主くんが銀髪巨乳なお姉さんと戦っていた。

揺れるお胸に千香が鼻を伸ばしていたのは気のせいだと思うことにしたいが。

「これはどういうことだ？ よし、さやか。三十文字以内で説明してみせよ」

「無理」

「ではマミさん」

「無茶ね」

「むむ、これは仕方ない。それではそこでリボンで縛られたロツテリアども。十文字で説明しろ」

「略すな！ てか、なんであたし達だけハードル上がってるのよ!？」
「いや、テメーらが原因だろ！」

杏子がツツコんだ理由は、このロツテリア姉妹が八神の目の前で守護騎士達が消える光景を見せて絶望させた。

結果、八神が銀髪お姉さんに変身し、全てぶっ壊してやるという願望の元でオリ主くん達に戦いを挑んだらしい。

フェイトもいたらしいけど、なんか吸収されて銀髪お姉さんの中に入ららしい。

うん、とりあえず。

「八神って魔法少女だったの？」

「ツツコむところ違うし、魔女じゃないから、あれ。管制人格ってこの馬鹿猫姉妹が言ってるわ」

「なんでこんなことしたのか聞きたいんだけど、事態が事態だからスルーな。ぶっちゃけ、どうでもいい」

「なんだと!？」

ほむらと会話しているとロツテリア共が騒ぎだす。それは怨敵に会ったかのようにオレを睨んできた。

「どうでもよくない!」

「私達にとってこれはお父様の悲願だった! それをどうでも——」

アリアがそう言う前にオレは『ドコでもドア』を展開。

彼女達の襟首を掴み、引きずってドアまで近づく。

「あのさ、オレにとってあんたらの悲願とかそんなもん関係ないし、ホントどうでもいいんだよ。重要なのはお前らがオレの知り合いをヒデーこととして泣かしたことで充分だ。ギルティ、有罪。さっさとどっか行つてろ、邪魔だから」

冷たい声でそう言うのと完全に沈黙した。化け物クラスに向ける殺気をぶつけたことがかなりの効果的だ。本能で馬鹿猫達を黙らせることができた。

ホントはぶん殴りたい衝動に駆られているのだが、我慢。

それに事態は深刻化している。

オリ主くんや高町はボロボロだし、唯一まともなのは衛くらいだ。だけど、ときたまにしてくるオリ主くんや高町への攻撃を守ろうとしているから体力の消耗が激しい。

そろそろ加勢しないとまずそうだ。ホントに足手まといだな、衛以外のあの二人。

「んじゃ、行ってらっしゃい。アースラにご案内ってね♪」

「二んなっ!？」

「あ。お前らのこと、さつきほむらがラインでリンディ提督に説明したから、今頃お前のお父様も捕まっているんじゃないか?」

「おのれ！」と言わんばかりに睨み付ける猫姉妹。オイオイ、これでもまだ序の口だけ？」

「そんで千香。スタンバイできた？」

「オツケーー！ 猫姉妹の黒歴史は今管理局のホームページにアップロードしたから！」

「二にやあアアアア?!」

当然の報いである。オレはやかましい猫姉妹をドアに放り投げて、閉めた。

よし、うるさいのが消えた消えた♪

「ときどき、アタシはアンタら二人がこえーと思う……」

「甘いな杏子。うちの師匠なら社会的に抹殺したら、今度は経済的に抹殺だぞ」

「あ。うちの師匠なら洗脳だねその場合」

「アンタらの師匠も師匠でこえーよ!!」

杏子はツッコむ。

そうなのかねー？ まあ、なんにせよ。

「んじゃ……行くかみんな」

「うん！」と答えるまどか。

「ええ」と答えるほむら。

「オツケー」と答えるさやか。

「応よ」と答える杏子。

「もちろんよ、ふふ」と答えるマミさん。

「さあ始めようか♪」と答える千香。

神器使いのオールスター達の舞台は幕をあげる。

悲劇的で、喜劇的で、笑劇的なシナリオですぜ、お客さん。

オレは手すりに飛び乗り、『エアロフィールド』という魔法を展開し、足場にしながら衛の元へ向かった。

「あ。今ならオリ主くんもろとも殺れるんだよね。撃つていいかな？」

「手伝うわ、まどか」

「やめんかドS姉妹」

この二人がオリ主くんを陰で抹殺させないようにしようと思ったオレだった。

いくらなんでも必死に戦っているときに暗殺されるのは悲しすぎる。

(?? side)

ギル・グレアムはある意味悲嘆していた。計画は失敗だけではなく、なんと娘とも言える使い魔の二人があられない姿の画像がホームページに載っていたのだ。

「娘が……娘が……」

遠い存在になったと言いたい。幼馴染みの女の子と再会したとき、淫乱なアイドルになって、しかもオッサン達の肉奴隷という現場を見たと言うくらいの遠い存在だった。

要するに悲惨過ぎるのだ……。

「確かに、ヌルヌル触手で攻められてヤバイ顔とは……。む、だがこの

画像は編集されているな。さすが『混沌を継ぐ者』。百年の恋を冷ませるくらいのも、精神攻撃画像を作るとは」

「グレアム提督は大丈夫なのか!？」

「安心したまえ。彼は寝取られた父親の気分で燃え尽きている」

「それはトラウマクラスのものじゃないか!？」

ちなみにこのやり取りで約十分消費した。

第三十五話 幸せは夢にはない

雪が降りそうな夜空にて、三人の少年少女達と銀髪の女性が空中に浮いている。

一人の少年と少女はボロボロでもう一人の少年は疲労で息を荒げている。女性はまだまだ余裕そうである。

ピリピリとした空気がある。

戦いの雰囲気。

生死をかけた争いの雰囲気。

闘争がそこにあつた。もしかするとオレも覚悟しなければならぬいかもなと思つた。

そんな一触即発な状況の中に、足場をつくつてオレ達はそこに割り込む形で女性の前に現れた。

「綺麗な夜空になにしているのかな？ あいにく今日はクリスマスイブだから良い子は帰るのが一番だぜ？」

「我が友!？」

「神威!？」

後ろの二人の驚愕の声を無視し、オレは『神器』をバトンのように回していると女性が聞いてきた。

「お前がソラか……。主がお前のことに驚かされていたみたいだが全くその通りだ。お前の魔法はこちらの技術ではあまり使えない」

「真似事ができる辺りで充分なんだけどな。それで圧倒してたし。……んで、大人しくしてくれないってお願いの返答は？」

「ノーだ。我が主の願いを叶えるため、お前も眠れ」

そう言つて女性はオレに向けて雷の魔法を放つてきた。

オレの得意魔法を使えるのか……!？」

オレはその攻撃を避けず、そのままにしていた。

なぜかつて？ 答えはすぐに起きた。

「君ごときの魔法じゃあ、ボクの盾は貫けないよー？」

千香は障壁でオレに向けられた魔法を防いだ。信頼できる戦友は揃っている。だから負ける気なんて全くない。

と、その前に……。

「衛ー、ちよつとこつちに」

「我が友！ 前だー！」

衛の声が出た直後、そこで前を向くと、銀髪の女性がオレに本を向けて――そしてオレは吸引された。

え、マジで？ どうしよ。

つーか、不意打ちとか卑怯すぎる！ 人のこと言えないけど！

☆☆☆

いつの間にか眠っていた。目を開けると。そこは風が吹く青空が広がる外だった。

どうやら草原でオレは眠っていたようだ。なぜかは知らないが眠っていたようだ。

小さな身体を起こして、目を擦る。眠気が抜けないそんなオレに背後から人の気配がした。影からしてオレより大きな男だ。

だが、オレには警戒心はなく、むしろ喜びを感じさせる。

「こんなところにいたのか」

「師匠ー！」

オレはその男――師匠の腹部に突撃した。それをどこか照れ臭そうながらも受け止める師匠も、うれしそうだ。

それからオレは手を繋ぎながら、オレ達が住む家に向かう。修業に使っていた家だ。

オレは『救いのヒーロー』になるために、強くなろうとここにいるんだ。

「お、ソラじゃねえか」

「あら、こんにちわ」

声をかけてくれたのはアルス兄とリーナ姉だ。二人は幼馴染みで

新婚さんだ。美男美女のカップルみたいでいつも仲むつまじく、周囲の人達が悔しそうにしている。

なんでなのかと聞いてみたら師匠は、「いつかわかる」って答えた。わかるんだろうなあ。いつかは……。

オレが次に会ったのはシスターことルキヤ先生。幼稚園で働いている幼稚園のときにお世話になった女性だ。

よく叱られたこともあるけど、撫でられたことがあったなあ。

「あのライトさん。今度お食事に……」

「悪いな。先客がいる」

「またあの変態に敗けた……」

ルキヤ先生が失礼なことを言っているが事実なので師匠は否定しない。

彼女が言う変態とは、師匠の幼馴染みのノエルさんのことだ。プロのイラストレーターでよくわからないものを描いている。

それをオレに見せてくるときがあるが、なぜか師匠に目隠しされるというの間にか消えている。どこに行ったのか捜しにいったときもあるが、屋根に突き刺さっていたことがある。

面白い人なんだけど、なぜか師匠やルキヤ先生は近づくなつて言うんだけど……なんでだろう？

そうこうしているうちに、家に着いた。オレは扉を開ける。

そこにはいつもの風景があった。木でできたテーブルやイス。壁や床は石を交えたログハウスの家だ。

この家は二階建てで四つの部屋があるのだけど、上は誰の部屋だったわけ？

忘れちゃったなあ。

「とにかく手を洗ってこい。飯にするぞ」

そう言つて頭を撫でられる。とても心地よい。オレが洗面台に立つ——前に、踏み台を用意する。

鏡を見ればまだ幼い顔をした六歳のオレがいた。そういえば、ここに来てまだ半年なんだ。

オレが手を洗うと、そこにはテーブルに料理を置く女性と椅子に

座って新聞を読む男性がいた。

「あら、おかえりソラ」

「修業、よくがんばったな」

「――」
絶句した。オレは目を開いてこの二人を見てみると師匠は、

「この子は才能がありますとお父上」

「そうかあ。いやあ、私も誇らしい。なんせ『閃光の神器使い』に認められているなんて、自慢の息子だ」

「そうねえ。そう思うでしょ?」

「うん!」

オレより幼い少女の声が背後からした。後ろにはニコニコしていたオレと同じ黒髪の少女だ。

「お、お前……は」

「おにいちゃん、ごはんたべよ!」

「どうやらオレの妹のようだ。そうだ。彼女の名前は――」

「――名前? 何を言ってるんだ?」

オレはこの少女の名前なんて……知らないじゃないか。

「なんて悪趣味な世界だよ。ホント……」

ホントに悪趣味だ。なんせ、この世界はオレにとってとても都合が良すぎる。

死んだ師匠が目の前にいて、めつたに見せない笑みを浮かべてオレを撫でてくれる。

目の前にバラバラに別れる前の優しい両親がいる。

その人達は優しい笑みを浮かべてオレを見てくれているし、妹もできている。

確かにこれは幸せだ。ただな——

『普通』の幸せだな……。はあ、改めて自覚するとオレって歪んでるなあ」

「ソラ？ 何を言ってる……」

それ以上、オレの父は口を開かなかつた。なぜかって？

答えは簡単——オレが『召喚』した剣で、顔面に突き刺したのだ。

血が吹き出し、オレの顔を紅く染める。

「お前、何をやっ——ぎゃが!？」

次に斬つたのは師匠だ。本物の師匠ならばオレが父親を殺す前に止めていたはずだ。

だが、こいつはしなかつた。できなかつた。

本物じゃなく、幻想の産物だから。

オレの母親に目を向けると台所で、娘を抱いて震えていた。「なぜ、どうして!」と叫びたいかのようにオレを見つめていたが、気にせず徐々に近づいた。

「六歳の頃のオレの知ってるあんたは優しく母親らしかったよ。けど、再会したあんたがオレに言つた言葉を覚えているか?」

「何を、言つたの……?」

震えた声で聞いてきた。オレはニツコリと笑つて言う。

『消えなさい。消えなさいよ過去の幻想。この化け物が』

一閃。母親を、娘もろとも縦から斬り殺した。噴水のように血を浴びたオレは目につく血を、布巾で拭いた。

それから外に出て、次なるターゲットに向かう。

次に殺したのはシスター・ルキヤ。彼女は前世では確かに子ども達と過ごす生活を教会でしていた。

けれど、敵国の三下によつて人質にとられ、そして裏切つた。オレは彼女を救うことはせず、ただ三下を殺すために子ども達を見捨てた。

結果、彼女は死んでない。しかし心は死んだ。オレが殺したとだと批難してもいいが、裏切つてオレ達の国を窮地に追い込む輩だったか

ら同情はしなかった。

そんな彼女を後ろから串刺しにした。剣を抜いてぐったりした彼女に向けて言う。

「あんたは悪人じゃないよ。単なる裏切り者さ」

オレは足を動かして、次に狙ったのはアルスとリーナだ。

戦友だった。友達だった。そんな彼が生きていけば、オレは女神と契約することはなく、『無血の死神』や『鮮血の断罪者』と呼ばれることなんてなかったのかもしれない。

アルスは幼馴染みリーナに裏切られ、そして裏切りを施した主の仲間によって彼は死んだ。

英雄となるきつかけを与えてくれた彼をリーナごと斬り殺す。

血を噴き出し、倒れる二人に言う言葉は、

「安らかにな、アルス。会えてうれしかった」

それからオレは幻想に生きる住民達を殺した。

殺して、殺して、血の海へと変えた。

笑みが込み上げる。興奮する。そして笑った。

ああ、なんて楽しいんだ！

人を殺すのが楽しい！

楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい
タノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイ
イイイイイイ!!

「って、キャラ違うだろ。楽しいどころか、疲れた……」

これがランナーズハイってヤツかねえ……。はあ、『切り裂き魔』を演じてみたけど、彼女のように狂えない。むしろ、疲れる。

人を殺す度に、こうなんかドツと疲れる。一人殺す度にたまるから、もう殺したくなくなる。

『切り裂き魔』ならば楽しんでるだろう。そして悲しんでいるのだろう。

まあ、彼女がどうなったのかは知らないが、ここにいなかったのは事実だ。

どうやらオレの夢だが、オレだけではない何者かの干渉があったのだろうな。

「オレには狂人としての因子がないのかも。別に狂人になりたいわけでもないが」

すると、さつき斬り殺したはずの、死んだはずの師匠が目の前に立っていた。

「なんで、なんでこんなことをした!!」

師匠らしくない口調だ。あの人はいつもクールだから、落ち着いた口調でオレを批難するはずだ。

さらにヤツは師匠の姿と声をしている。殺した師匠を、再び復活させて、その姿となっている。

よって、ヤツこそがオレの夢に干渉する何者かだろう。

まあ批難する理由もわかる。確かにここには幸せという夢のような世界だった。

亡くなった友達もいた。

亡くなった戦友がいた。

尊敬する師匠がいた。

変態のノエルがいた。

幸せなアルスがいた。

嬉しかったよ。そして――

「黙れ偽物。師匠の声でそれを語るな」

――ムカついた。

とても堪らなく。どうしようもなく。

なぜ、とヤツは聞きたそうだったので答える。

「オレは、さ。さんざん嫌というほどオレは現実を見てきた。だからこそ、幸せなこの世界が憎い。嫉妬するほどムカつく」

もし、幸せの夢のまままで終わらせたかったのなら、幼い頃の両親を出すのではなかった。妹や母親を出すべきではなかった。

母親に拒絶された思い出はトラウマだ。もう思い出したくないのに、たまに夢に出てくる。

好きという気持ちは鬱陶しいに変わっていたよ、ホント。

そうだ。オレは子どもの頃にあった理想と心は既に捨てた。殺された。

『ヒーロー』にはもうならないし、なりたくもない。オレがなったのはそう、オレは英雄。

『無血の死神』。『鮮血の断罪者』——オレは英雄と呼ばれてる殺戮者……神威ソラだ」

師匠の姿をしたヤツを『神器』全てを開く者で斬り殺した。

オレは『ドコでもドア』を展開して夢の世界から出た。

第三十六話 なぜお前は……

「ただいまー」

「あ。おかえりー」

いつも通りにそういうとまどかは返事してくれた。

そんなまどかの返事を聞くと、銀髪の女性が驚いていた。

スルーしてとりあえず、戦況をみた。

オイオイ、帰ってみるとさやかとシグナムが戦っており、他の連中も守護騎士達と戦っていた。

まどかの説明によると、管制人格の女性がオレ達を倒すために召喚したらしい。

どうやら蒐集した魔力から神器使い達の情報を得て、それを判断した上で召喚したようだ。ご苦労なことだ。

「なぜお前がここに……!?!」

「普通にドア開けて帰って来たのだけど?」

「普通じゃない! お前は幸せな夢を望まないのか!?!」

「夢? ああ。あれのことね。ム力つくほど良い夢だったかもね。否定しない。あれは深層心理の願望かもな」

「だけど、とオレは続ける。」

「オレが見たかったのは、一緒に戦ってきたヤツらの夢でよかったんだ。なのに、お前はいらぬモノを出してくれてム力つかせたから目が覚めたんだよ」

「馬鹿な……。あのような悪夢を見たいと思っていたのか!」

彼女が言っているのはおそらく、戦争の頃のとときだ。

多くの仲間と同士が散る世界。オレにとつての一生忘れてはならない後悔と懺悔の前世。

はつきり言っただけ普通は見たくないだろう。しかし、オレはそんな夢を見る。見るべきだ。

こいつのやったことは過去を否定することだった。

過去があるから今のオレがいる。

過去にこんなことがあったから強くなれた。

彼女が言う夢は悪夢ではない。今のオレを肯定するものだ。

「ま、今のオレの夢はこいつらと馬鹿やって、笑って、泣いて、怒って、喜んでいられる今このときを生きることだ。あんな偽物ごときでオレは眠ってたまるかよ」

「私とその夢を見せれば、お前はそこにとどまっていたのか？」
「両親が出てたら、また同じことしてたけど♪」

ニツコリ笑って、そう言うとき女性は悔しそうに歯を食い縛る。
「で、まどかさんや。『プロポーズされちゃった………!』とか言って頬を抑えてブンブン首を振るな。」

プロポーズじゃねえからな。……そうだからな!

「はうう、やっとソラくんのデレが見れて私は幸せだよー……」

「はあ、もういいや。衛ー、ちよつといいかー?」

衛はザフィーラと戦っていた。ザフィーラを蹴り飛ばした彼はこちらに振り向く。

「今、ザフィーラと筋肉で語り合っておる!! あとで——って我が友!?!」

「ちよつと八神起こして来て」

「しかし、そんなことが」

「できるからさっさと起こしてこい。異論は認めん」

オレはそう言って『神器』を衛に投げ渡した。

「お前が行きたい場所を思い浮かべろ。そしたらそれは応えてくれる」

「行きたい……場所」

衛は目を瞑り、神器をなにもない空間に向けた。ザフィーラが妨害しようとするが、杏子が加勢にきて防がれる。

「オラオラア! 人の恋路を邪魔する駄犬はさっさと死にやがれ!」

「あれが最高にハイってヤツだろうなあ」

杏子のオラオラの槍さばきを尻目に、衛の握る『神器』が光始める。

「我は、我が望むのは——はやての夢」

ガチャリと音がして『ドコでもドア』が展開された。

「その扉に飛び込め！ 八神がきつといるはずだから！」

オレの声に答えるかのように、衛はドアに飛び込んだ。

ドアは光の粒子となつて消えて行つた。

「まさか……その力で……！」

「そ。オレは吸収されても、すぐに出られるの。理解した？」

「ならば、お前から消すまで」

物騒なことを言つてたくさんの魔法陣を展開する。

やれやれ、仕方ない………本気でいくか。

「まどか、『コネクト団結せよ』つて魔法を覚えてるか？」

「確か、自身の魔力を他者に供給させる魔法だつて。はつ、まさか。ソラクくんは私に魔力奴隷になれと!? だめだよ！ 奴隷はソラクくんの専売特許なんだよ!？」

「専売特許じゃないし、奴隷になれとか一言も言つてないし、とりあえず自重しろ！」

頭にチョップを入れてから、オレは自分の魔力とまどかの魔力のラインを繋げる。

まあ、魔力タンクつて意味なら間違つてないが。

「今回出すとつておきは、はつきり言つて神器全てを開く者を出しながらだめちやくちや燃費が悪すぎるんだ。本来ならこれは超短期決戦用なんだ。だからお前の無尽蔵魔力が必要だ」

「そうなの？ でも大丈夫なの？ ソラクくんのおきつてちよつと危険な気がする……」

鋭いな。確かにリスクはある。なんせ、アレは筋肉痛を引き起こす神器だから。

「大丈夫。無茶はするけど、死にはしないさ」

そう言つて頭を撫でて安心させる。さてと……。

「待たせたな」

「何、お前のおきがおきが気になつたからな。お前の神器はカギのよくな剣と知っている。確かに概念にすら干渉できるその力は危険だ

が、当たらなければ意味がない」
確かにそうだ。それは師匠にも指摘された。
だからこそそのとっておき。

—— オレのもう一つの神器とっておき

「来い—— 『閃光のマント』」

オレの声と共に、祭礼儀ように使われそうな黄色のマントが纏われる。光を表したようなマントである。

「馬鹿な……神器は一人一つまでのはずだと！」

「後天的に得る人がいるんだよ。まあ、だいたいそれは奪った『神器』か、継承された『神器』さ」

オレの師匠は死ぬ直前にオレに神器を継承した。

『閃光』の名を持つこの神器を。その意思を。

「いくぜ」

オレは神器を構えて、銀髪の女性に突っ込む。

(管制人格サイド)

神威ソラ。主曰く、規格外にして型破りな男である。

彼とその取り巻きのせいで天道衛が変態化し、なぜかシャマルもコ
スプレお姉さんにシフトチェンジしてしまった。

どうしてこうなった……と嘆いていた。

そんな怨敵のような相手と戦うことになった。

私は魔法陣を展開し、突っ込んでくる彼に備えた。

「いくぜ」

—— …… …… え？

突如、彼が私の目の前に現れた。いつのまに!?!
テストアロツサのような速さで移動したのか!?

私は信じられないと思いつつながら魔力刃を展開し防御体勢に入った。

「おらー！」

「くっ!?!」

彼の斬撃をそれで受ける。予想以上のパワーアップしていた。

「チツ、叩き落とせなかったか」

なんとというトップスピードとパワーだ。

私の肉眼では追えなかったとは。相当のスピードの上に子どもとは思えない力になっているに違いない。

それに――

「まさかスピードだけでなくテストロツサと同じ魔力変換資質があるとはな」

「まりよくへんかんししつ？ なんぞそれ。オレは単に電気属性を身体と神器に付与したただけだし」

だとしたら厄介だ。魔力を変換してないとしたらそれは魔力無しで電気属性の攻撃ができるというわけだ。

「この『神器』の真髄はまだまだこれからだぜ？」

そう言った直後、再び見えなくなった。

ヤツの動きを計算し、予測――完了。魔力反応を察知し、彼の居場所と目的がわかった。

北北西からの奇襲か！

「そこだ！」

私が放った魔力弾は移動し終えた彼の元に向かっていって直撃――
しなかった!?

魔力弾がすり抜けただと!?

「どこだ！」

辺りを見回す。発見した。三時の上空に――

「ここです」

「いんや、ハッハッ」

「いやいや、ここだって」

しかし四方八方から声が聞こえた。改めて見回した。

なんと、彼が分身をしているではないか。

「馬鹿な……なんだこれは……!!」

「これが『閃光のマント』の真骨頂――影分身。高速の果てにある移動をした結果に生まれるオレの残像達さ」

くっ、魔力反応を追おうとしても無数に反応が点滅を繰り返すばかりだと!?

こんな隠し球があるなんて!

「いや、待て。ならばお前の魔力供給の人物から狙えば——!？」

私に向かつて魔力弾が飛んできた。

「ふふ、遅くなってごめんなさいソラクくん」

友江マミか! ヴィータが負けたのか!?

「ええ。あの子ったら人の話を聞かずに罠がある方へ、ホイホイと向かってくるものですから。思ったより早く終わったわ♪」

「耳が痛い話だ……」

ほら、と友江マミはリボンと煤巻きにされて目をグルグルさせたヴィータを見せる。

呆れる他はあるまい。

「さてと、弱点はもうないぞー?」

「っ……!」

彼の声がある方向を見る。いつの間にか朱美まどかを友江マミのところ连接到していた。

「早くしないと主ごと葬りそうだぞ衛。ま。お前ならできると信じてるけど」

彼はクククと笑って、朱美まどかと友江マミを含めて彼は私に向かつて言う。

「充分生きてたでしょ?」

「満足して生きてたでしょう?」

「そういうわけだから——」

「二——安心してとっとくたば(れ)(ってね)(りなさい)」「
処刑申告された私の震えはまだ止まらない。

「私は負けない!!」

「オリ主くんシールド!!」

「ぐぎやああアアア!？」

……そして戦闘中に、天宮草太は神威ソラによって、私の砲撃を防ぐ、使い捨て装甲盤されていたことも忘れない。こいつ鬼だ。

(衛サイド)

真っ暗な闇の中を我は進む。

その空間は足場はなく、浮いて前に進むようなところだ。

我は今、はやての夢に向かっている。

一寸先も真っ暗な世界で一人だけで進むのは心寂しいが、友に背中を押された我には怖いものはない。

「どこまであるのだ。この闇は？」

「そだねー。わたしちよっと疲れちゃったー」

「そうか。……………は？」

我の後ろに誰かいたか？

いや、確かここにいるのは我だけのはず……………。

「ここだよん♪」

「っ!？」

我が声が出た方向に振り返ると、「やつほー」と手をヒラヒラしたフェイトが……………いや違う！

フェイト・ハラオウンはまだ夢の中にいるはずだ！

ではこの瓜二つの少女は誰だ!?

「貴様……………何者だ？ この天道衛が気配に気づかずに背後をとるとは」

「あれれー？ 警戒されちゃった？ ごめんねーちよっとイタズラしちゃおうと思つててね♪」

ありえぬ。イタズラのつもりで我が気配を察知できなかっただど？

師に認められた気配察知だぞ？ それを気づかせないコイツはいったい……………。

「天道衛くんで合ってる？」

「そうだ。その名で名乗った通りだ。貴様は何者だ？」

「わたし？ ふふん、わたしはねー」

その少女の名前は知っている名前――

本来は生きてるはずがない少女の名前――

その少女は口に出したのだ。

――アリシア・テストアロッサ、と

第三十七話 偽りのキヤラ

(はやてサイド)

それは、とても幸せな世界やった。

朝、シグナムはいつものように早く起きて、新聞を読んでいた。

その次に起きたシャマルは家事をしていた。料理はしてなかったことにちよつとホツした。

ザフィーラら狼形態で床に伏して、欠伸をしていた。

最後に起きたヴィータは眠そうに顔を洗いに行つて、戻ってきた。

いつものように朝食が始まる。幸せな一日が始まる。

………せやけど、なんやろ？

なんか足りへん。

何かを忘れてるような……。

『主、せめて幸せな夢の中で眠つてください。後は私があなたの願いを叶えます』

眠っているん？ 私……。

ああ、でもそれもええかも……。

辛い現実よりここがええかも……。

せやけど、なんか物足りへんのなんでやろ？ ホンマ気になるんやけど。

こう、小骨が引つ掛かる感覚みたいんやけど、なんか思い出したくもないような……。

『あれは悪い夢です。悪夢です。だから思い出さずに安らかにお眠りください』

声の主がえらい饒舌になりよつた。なんか思い出さない方がええみたいやけど……。

何が足りへんやろ……。

「足りないもの？ それは筋肉だ!!」

――ぶち壊された。というか強引に抜け出された。

目を開けると筋肉を見せびらかす衛くんがおった。不満そうに彼は言う。

「はやてよ！ 足りないぞ 我という筋肉キャラが！ なぜ我が出ない!?!」

「あつたりまえ!! 前の衛くんならまだしもなんや、そのキャラ。なんで変態キャラになってんねん!？」

寝起きを叩き起こされたような感じな私は不機嫌になっていたの
で言い返した。

「変態で結構！ 我が筋肉キャラであれば変態でいい！」

「肯定すんなやアホオオオオオ!!」

返せ！ あの頃の衛くんを！

返せ！ あの幸せな夢を！

ああ、もう。衛くんの背後にまどかちゃんサムアップしてる幻想が見えた。

あの子、それを狙ったんか!?

「あの、主。今一度」

「あんたは黙つときい！ 私はこの変態化した少年に言わなきやあかんことあんねん！」

「よろしい。筋肉論破マッスル・ロンバの始まりだ！」

「そんな学級裁判はいらん！ セヤから、筋肉から抜け出さんかい!!」
「あの……………私は……………」

「黙つてろ（や）」

私達が真顔でそう言うのと隅に行つてシクシク泣き始めた。
なんや、メンタル弱いなこの子。

とにかく私達はお互い譲れないものの言い争いを始めた。
絶対、元に戻したる！

(フェイトサイド)

幸せな世界だった。プレシア母さんがいて、リニスさんがいて、アルフさんがいて、アリシア姉さんがいる。

家族団欒で朝食をとり、外へ出かける。太陽が暖かく照らし、私達を暖かく包む。

本当に優しい世界だ。

私という存在が認められているような世界だ。
だけど……………これでいいのかな？

何か忘れてないかな……………何か……………

私がふと立ち止まるとアリシア姉さんがニコーと笑つて言う。

「せーかいだよフェイト。お姉ちゃんが花丸あげちゃう」

次の瞬間——遊んでいたアリシア姉さんが魔法の槍で母さんを貫く。

目の前で母さんが血を吐きながら、私達に向けて手を伸ばしながら倒れる。

その次にリニス、そしてアルフが……………。

次々と私の大切な人が串刺しにされた。

「なんで、なんでこんなことを!?!」

私はその怨敵を睨むようにアリシア姉さんを見た。

アリシア姉さんは笑みを浮かべて、バリアジャケット B J に変わる。

そして私はここで彼女がこの世界の住人ではないことがわかった。理由は言わずとも B J だ。見たことがない格好なのだ。

私のように動きやすい服装だ。スカートで儀礼に使いそうなマントを身につけたノースリーブの格好である。そしてその背中には槍があつた。

もし私が夢で想像したとしても、アリシア姉さんも私と同じく戦斧だと考えていただろう。

つまり、

「やあやあ、久しぶりになるのかな。愛しの我が妹ちゃん」

今、目の前にいるのは紛れもなく本物。幻想ではなく、本当の姉さんということだ。

「そんな……だつて……」

「あんな幻想共と一緒にしないでよ。わたしが正真正銘のアリシア・テストロツサだよん♪」

お茶目にウインクする彼女はとても恐ろしい何かに見えた私は尻餅をついて動けなかった。

「あります。腰が抜けちゃった? もしかして感動のあまりに?」

「いや感動のあまりに腰が抜けるって初めて聞くのだけど……」

「それじゃあ、トイレが我慢できなくなったとか?」

「なんでも是が是非でも恐ろしい何かを見てこうなったことを認めてくれないかな」

「それがお姉ちゃんクオリティだから!」

「どうよ!?!」と言わんばかりにサムアツプするアリシア姉さん。

いや、一言感想言わせてもらおうと「何それ」なんだけど……。

というか、アリシア姉さんの背後に『割烹着を着た悪魔』が見えたのだけど……。

そんな呆れている私に姉さんは頬を掻きながら口を開いた。

「ま、わたしはフェイトに激励とママの遺言を伝えに着たんだよねー」
「ママのって……もしかして母さんのー！」

「イグザクトリー♪」

ウインクしながらアリシア姉さんが地に降りたって、私の手を引いて立たせる。

「あの人はわたしを生き帰らせようとして、成功したよ。けど、今度は帰り方がわかんないし、おまけにもう死に体だった。『アルハザード』の技術をもつてしてもママの病気は治すことは難しく、しかも身体にとても負担がかかるものだった」

「じゃあ、母さんは………」

「安らかに眠って埋めたよ。アルハザードにある墓場にね」

やっぱり、亡くなったんだ。

私はそれを知って、暗くなる。アリシア姉さんが生きていたら、もしかしたら……と思っていたから。

結局、母さんには愛してくれなかったんだと私は思った。

すると、そんな私に姉さんは手を握ってくれた。

「でもね。最期の最期にあの人は後悔してたよ。フェイト、あなたにひどいことをしたって……」

「えっ?」

『リニスの言う通りにはしていれば良かった。フェイトをしつかり愛してやればよかった。それが唯一の未練だった』って言ってた。ママは後悔し、未練を残して逝ったんだよ。ま、わたしとしてなんで最初からそうしなかったって怒りと悲しみがあったけど」

そう言っって背中を向けて、ケラケラと笑っていた。

けど、それが演技に見えた。

だっって涙声だったから……。ホントは悲しいんだね……。

「だから遺言に『フェイト、今までごめんね。愛していたわ』って残した。あんまり、フェイトにとって実感わかないかもしれないけど、確かにそう言っってたよ」

「ううん、実感したよ。……そっか、私は愛されていたんだ」

それがわかったとき、涙が湧いた。

だけど、力が湧いた。勇気が湧いた。希望が湧いた。もう絶望しない。だから、どこまでもいけそうな気がした。そんな私を見てアリシア姉さんは笑みを浮かべる。

「およ？ 持ち直しちゃった？ んじゃ、激励はいらないかもねー」
「激励って、姉さん何を言うつもりだったの？」

「いんや、絶望してるフェイトに言いたかったんだよ。ある人が残した名言」

姉さんは一息入れて口に出した。

私はそれを聞いて別れのあいさつを済まして姉さんはここから出た。

姉さんは今、お世話になっている科学者のところに戻らないといけないらしかつたから、別れは辛かった。

けど、姉さんの言葉は今でも思い出せる。

『「立って前を歩け。あなたには立派な足があるじゃないか」……か。そうだね……」

進むための足がある。

掴むための手がある。

胸には不屈の心。

心には消えない闘志。

その闘志は永遠に消えない炎が燃えている。

だから私はバルディッシュを構えて、魔法を放つ。ガラスが割れる音と共に穴が空き、私はそのとき言った。

「ありがとう、母さん。そして姉さん……」

私は夢の世界から脱出した。

涙と悲しみを夢に置いて、勇気と闘志をもってなのはが待つ現実へ向かう。

(衛サイド)

真つ暗な世界で女性が一人、少女が一人、そしてマッスルな大人が一人いた。

うん、それ我だ。

大人モードの我が公衆の面前でこういう状況にさらされていたら、まずは警察に通報されるだろう。

そのときは潔く補導されよう。

しかし、警官達に筋肉のすばらしさを演説するつもりである！

それくらいに筋肉に自信はある！

さあ、諸君。筋トレの時間だ。マッスルマッスル！

「もーゴールしてええよな……」

「主!!」 しっかりとしてください、主ー!」

我がはやてに筋肉のすばらしさを演説したら、そのすばらしさにはやても納得してくれたようだ。

……………目が虚ろだが。

いや、決して洗脳なんてしてないぞ。

だが、しかしまどか殿に教わった方法の演説をするとどうしていつもこうなるのだろうか？

この間、シグナムもはやてと同じ状態だったし。

ふむ、解せぬな……。

「やはり原因はあの淫乱ピンクやな!! おのれ、あんのピンクの悪魔め。衛くんをこんなにしたばかりではなく余計なアビリティを追加してくれて!!」

「ピンク? 悪魔と淫乱はシグナムのことか? ヤツは武人としてすばらしい女性だがまさか淫乱で悪魔だったとは……」

「ちやうわアホ！ ピンクⅡシングナムちゆう公式とちやうわ!!」

怒られた。解せぬ。ふむう……。

「はやてよ。早くここから出るべきだ。みんな待ってる」

「嫌や。衛くんは変態になった現実なんて嫌や………………。それに外は辛いことばかりやから出たくない!」

三角座りをしているはやてに説得してみたが。ふむ、現実からの逃避、か。

無理もない。目の前で家族を失ったのだからな……。死んではいけないと思うが、消えゆく家族を目の当たりにして彼女は絶望した。

あれはトラウマものだ。残された服だけがなんといっても、苦痛が生まれるくらいの胸を締め付けてくれた。

そんな現実から逃げたくなるのも仕方あるまい……。

「そうです。だからおねむ——ブム!?!」

「貴様は黙ってろ。眠ることを決めるのは、はやてだ」

我は余計なこと喋ろうとする管制人格の口を顔を掴んで黙らせる。

いちいち、うるさい女だ。男であればぶん殴っているところだが、マッスルは紳士なり。淑女をいたぶる趣味はない。

む？　なんで泣いておるのだコイツ？

まあよい。我ははやてに伝えることを伝えるまで。

「はやて、それが現実というものだ。友達が変態化する、家族を失う……辛いことばかりが支配する世界だ。そしてそれはいつ起きてもおかしくないのだよ」

それでも、と我は続ける。

「生き続ける。辛いことがあれば、笑い飛ばせばいい。失って悲しいことがあれば泣いて、すっきりしたら次のことを考えていけばいい。我はそう思うのだ」

「…………でも私は」

「我ほど強くない、と言いたいつもりらしいがそれは違う。我は確かに変態だ。認めよう。」

———「だけどそれが無ければ我は逃げ出していたんだ」

「えっ……っ？」

三角座りして俯いていたはやてが信じられたいと、我を見た。我の言葉にやつと反応してくれたな。

「変態は最強。だから大丈夫と思っっているから平気と思うことにしたのだ。本当ならば、我は誰とも戦わず逃げ出したいと思っっていた。それもそうだ。痛みや死ぬかもしれない戦いに参加したくない」

我は自嘲しながら皮肉に笑う。

怖いから、逃げたいから、我は言った。

「我はな、臆病なんだ。」

変態じゃないホントの我は臆病で弱いちっぽけなヒーローに憧れるただ一人の子どものものだ」

そう言っつて大人モードを解除する。するとどうだろう、我の足は震えているではないか。

変態でなくなると、怖い、逃げたい気持ちが沸き上がっているのだ。それが身体に表れているのだ。

我は自分を騙して、偽りの仮面をつけていたのだよ……。

「今でなお、この場所は怖い。我が友ならば、やる気になればはやてごと管制人格を殺すだろう」

「そんな……でも！」

「でも、はないんだ。あの男は切り捨てるものは切り捨てる。理想ではなく、リアリティだけを求める男だ。そりゃ、切り捨てたことは悲しむかもしれないが、切り捨てたことに後悔しないだろうよ」

一度、我が友と口論にそのことになったことがある。しかし彼はそれでもねじ曲げなかった。

なぜ、と聞いてみたが我が友には凄惨な前世があった。

そう、彼は救いのヒーローであろうとしたばかりに大切な人を失った。

だからヒーローにはなれないし、なりたくない———と確かに彼はそう言った

彼はヒーローになることに諦めた一人の子ども。それが我が友だったのだ。

「故に我が友は大切な人——愛する者を守るためならなんだって切り捨てるつもりだ。友達も、自身の命も」

「そんなのって……」

「ひどいか？　しかし、それは人間にとって当たり前なのだよはやて。利己的で、醜い。他者を助けるお人好しだって、結局のところ自己満足でしかないのだ」

はやては優しすぎる。

知らない他者に対しても優しすぎる。

その証拠に蒐集活動に人は含まれていなかった。それが自分への寿命を縮めていたとしてもあまり気にしなかった。

それは人間としてやや危ういことだ。自己犠牲で誰かは助かるが、それは誰かを悲しませることなのだから……。

だからこそ、彼女はもう少し利己的であってほしい。わがままをもっと言ってほしいと我は思っている。

そう、子どものように自分勝手に。そして馬鹿やって笑ってほしいのだ。

他者からもらう笑顔ではなく、自分から得られる笑顔をしてほしいのだ。

「はやて、それがこの夢から覚めたときに待っているかもしれない世界の真実だ。苦しいし、辛いことばかりだ。

しかし、それが『生きる』ってことだ」

彼女は既に絶望しきっていた。彼女にまだ伝えるべきことを伝えていない。

「わかつてくれたか？」

「……わからへん。わからへんよお」

泣いてる彼女を我は優しく抱き締めて撫でる。我が子を慈しむ父親の心情が少し理解した気分だ。

彼女には耳が辛いことだろう。

外は恐ろしい。悲しい。辛いことばかり。

だから出たくない……。その気持ちがわかるから、「大丈夫」という無責任な言葉が言えなかった。

「はやて、ここに残りたいと思っただか？」

「うん……せやけど残ったら、殺されるし……」

「そうだな。ふむ……」

——ならば、私もここに残ろう」

えっ、と顔を上げたはやては我を見る。

なんだそのキョトンとした顔は？ 我は最初からそのつもりなのだぞ。

「我ははやてのヒーローになりたいのだ。

『みんな』ではなく『はやて』のヒーローになりたいのだ。

我ははやてが死ねば辛い、泣きたい、最悪また自殺を考えるだろう。当然だ。我にとって恩人であり、大好きな人が死ぬことは辛すぎる」

だから、と続ける。

「私も一緒にいるからここで死にたいと思わないでくれ」

そう言ったとき、はやての顔は下に向いていて見えなかった。

だが、小悪魔的な笑みを浮かべてくる。

「それって告白のつもりかいな？」

「んな!？」

し、しまった！ 思えば恥ずかしいことを何気なく言ってしまった！

なんてことだ！ 我は……我はいったいどうすればいいのだ!? 教えてタイガ先生！

「クスクス……」

「ぷぷ、あはははははは！」

「わ、笑うな！ その管制人格もだ！」

二人の女性に笑われるとは……ちよつと死にたくなつた。

地に『の』の字を描いているとパンパンと過多を叩かれた。

「ごらごら。私だつて衛くんが死んだら辛いんやから。だからそないなこと言わんといてや」

「はやて……」

「うん……勇氣でた。せやから、ここから出よ？ 二人なら大丈夫やから！」

笑みを浮かべて我に手をさしのばした。その笑顔は太陽のようにまぶしいものだった。

そうだ……我はこの笑顔を見たくて、そして守りたいのだ。

さし伸ばされた手を握る。

「よーし！ あんたもこっから出るからついてきい！」

「わ、私もですか!?!」

「あつたり前や！ って名前なんなん自分？」

「今さら!?!」とツツコむべきところだが、今の我らにとってそれは無粋なことだと思つた。

我らが行く道は絶望ではなく、希望の可能性がある未来だから――

「あの、私。名前はないんですが。付けてくれませんか？」

「ならば、我が名前をつけてあげよう！」

「主……お願いします！ 私は筋肉な名前をつけられたくありません……!!」

「ほらほら、大丈夫やから。泣かないの」

なぜか私の命名が拒否された。解せぬ。

プロテインという名のどこが嫌なのだ……？

(??side)

『踏み台転生者』とは大概思い込みが激しい人ばかりだ。

だが理由としては『踏み台転生者』は悲しき運命を辿っているからだ。だと私は考えている。

いや辿っていない者がいるかもしれないが。

だいたい『負け犬』なのだ。社会的地位もしかり、心もしきり、もちろん身体もそうだ。

ゆえに自分はこの世界では主人公だと考える。

だから死なないし、負けない。そういう思い込みがあるから彼らは慢心し、他人を見下してしまうのではないだろうか。

そんな『踏み台転生者』の思い込みがなくなったらどうなるだろうか、『天道衛』という少年である。

衛は前世からの環境で人見知りや激しく臆病な性格だったので、転生してからちよこつと修正されましたが臆病な性格のまままだ。

それゆえ思い込みがなくなったらこうなるんじゃないかなと予想すれば、彼という人物が想像できる。

弱さを受け入れる強さ。

それが『天道衛』というヒーローだ。

ちなみにソラもまたそれを受け入れ、なおかつ合理的に考えていたりする。

なぜ、私がこのようなことを言ったのかお分かりだろうか？

ソラや衛の強いことなど知っている。なら、なぜ『強さ』を語った

のかは――

「クキキキ、クライマックスだぜえ……神威よお!!」

このような『踏み台転生者』がいるからだ。

前世で悲劇とも幸せとも言えることがなかった彼は衛のような弱さを受け入れることなく、強さを勘違いしたまま生きている。

■、……■……ザザ……。■
■

《※ノイズがひどくなつたため終了。次回から『ソラside』です》

第三十八話 そろえ、登場人物達。ワルツの時間だ

辺りに黒い煙が舞い上がる中、オレ達は銀髪女性と対峙している。何度も魔法やら『神器』やらでボコボコにしたが、なかなか倒れない。

「こいつ、もう公式チートじゃね？ 何回叩きつければ諦めるんだよ。キウウベえかこいつは」

「あれはある意味無敵だったけど、これはモノホンだねー」

「まどかさん、大丈夫？」

平気、と答えて、いつもの笑みを浮かべるがしんどそうに見える。

いくら『円環』の魔力が無尽蔵だからって生成に必要なものは精神力と体力を混ぜたエネルギーである。

それを休み無しでオレに供給しているのでさすがに疲れるのは無理ない。

「そろそろ、まどかがダウンするな。あいつらまだかよ……」

「ソラくんの神器って長期決戦では使えないのよね？」

「オレの魔力量は平均の上だから、さやか無限の音楽の神器と同じで全てを開く者神器は燃費が悪いんだよ」

全てを開く者神器を剣として使うなら問題ないが、カギの力を使えば大幅に魔力は消費するんだよな、これが。

「咎人に滅ぼしを——」

「またスタラだよ、スタラ」

「スターライト……略してスタラだね。もうこりこりだよ……」

「いちいち『コネクト団結せよ』解かないとまどかが対抗できないからな。……めんどくさい」

憂鬱そうにオレとまどかは溜め息を吐いて、まどかがそれにいつでも対抗する準備に入る。

ドンとこいという気持ちで『コネクト団結せよ』を解いたとき、突如、銀髪女性が急に呻きだした。

「どうしたのアレ?」

「生理かな?」

「陣痛かしら……?」

「まどか、下ネタ禁止。あとマミさん、それ予想の斜めを行きすぎる」

なんでいつの間にも妊婦になってんだよ。

戦う妊婦なんて新しすぎ——いや待て。ソゲフの人はそんな人と戦ったことがあるって師匠から聞いたことある。

これが時代か……………。

オレ達は納得したかのようにウンウン頷いた。

『いやなに納得してんねん、あんたら。そんな時代はまだや。世界崩壊のときになる時代やから』

『はやて、我が思うにそれはメタいぞ』

はやてと衛のテレパシーが聞こえる。どうやら上手くいったみたいだ。

だけど、オレってテレパシー送るの下手だからなあ。

なので、オレはスマホを取り出してラインに書き込む。

『無事?』

『うん。というかなんでラインフォースの中でラインが繋がってるんや?!』

『それがラインというアプリだから』

『ラインは次元を超えるアプリか……………なんか燃えてきた!』

『あんたのせいで衛くんが、変なスイッチ入って腕立て伏せし始めたで!』

ライト内ではもはやカオスとなっていた。すると、見慣れた少女達が揃った。

「終わったぞ」

「シグナム強かったあー。何回危なかったことか」

「シヤマルを縛って、吊るしてきたよ♪」

上からザフィーラと戦っていた杏子。

シグナムと戦っていたさやか。

そして我らの変態、千香である。どうしてだろう、シヤマルが大変なことになってるビジョンしか思い浮かばない。

とにかく倒された守護騎士達は光の粒子となって消えていっただろうな。現にヴィータもそうだったし。

『というわけで神器使い軍団揃ったけど、どうすればいい?』

『殺さない程度に全力全壊』

『把握。まどかのオーバークイルでテイロってやる』

『手加減してや!? ほんまにな!』

そんなに心配することないさ八神。ちよつと臨死たい——
じゃなかった。黒焦げになる程度だから。

「神威くん」

高町もきたか。口をモゴモゴしていたが、言葉を出した。

「その……この間はごめん……。わ、私が草太くんを止めなかったばかりに……」

「別に気にしてない。止めようが止めまいがお前がどうにかできることじゃないって思ってたから」

「で、でも……」

「くどい。期待してないって言ってるのがわからないのか?」

高町はシヨンボリと落ち込んで黙る。まあ、ちよつと励ますか。

「別にお前のことが嫌いからこんなこと言ってるじゃねえよ。言いたいことが言えないお前があいつの暴走を止めることなんて、はなっから期待してないってことさ」

———言いたいことが言えない

これはオレの予想だが、高町はかつて土郎さんが入院していたから一人ぼっちだった。

家族に迷惑かけたくないばかりに『良い子』を演じようとして、自分を殺していた。

公園にいたのはその殺していた自分が我慢できず爆発した証拠だ。

「ち、違うの! 私……」

「違わない。なら、なぜ一言も喋らず静観していたんだ？ オレが殺されそうになったときに」

「それは……………」

「ほらみろ。お前は何も言えない。失うことを怖れて、躊躇う臆病なガキだ」

キツと睨んできたが、齒を食い縛って悔しそうにしていた。

こいつはまだまだ子どもという証拠だ。

「オレを睨んだところでお前が臆病であることは変わらないし、お前が否定することはできない。そうだろ？」

「なら、神威くんはどうなの……。失う怖さを知らないでしょ!」

自分はどうなんだって言う反論か。オレは鼻で笑って言い返した。

「んなもん知らないさ。オレは既に失ってるからな……。大切な恩師が」

「え……………」

「失う怖さより先にオレは自分の求めた理想のせいで大切な人を失った話だよ」

地雷を踏んだと思ったのだろうか高町は俯く。しばらく、無言になりオレは嘆息を吐いて口に出した。

「高町、失う怖さは確かに恐ろしいさ。だけど、それに怖がって何も言えずになつてしまうといつか後悔することになる」

「後悔することになる」

「それを知ってる女の子を知ってるんだ。だから——変わる勇氣を持って。お前はまだまだやり直せるから」

かつて暁美ほむらが後悔したことを彼女が同じ後悔しないことを祈りながらオレは目をつぶってそう言った。

「変わる勇氣……………」と呟いた高町はしばらく無言になり、目を瞑る。

目を開けたとき、彼女の表情は暗いものから決意ある少女に変わった。

彼女は強くなるだろうな。

まあ、どうでもいいけど。

そう思っていると、まどかの神器が発射準備ができた。

本人曰く、なぜかデストロイアーチャーのときだけ『円環の理』と同じ格好になってしまいうらしく、今まさにまどか神になっている。

「未来永劫に魔法熟女(笑)が生まれれないのなら——私が絶望する必要はない!」

「そこでネタを入れるお前もお前だよ!!」

なんだよ魔法熟女(笑) って!

魔法少女が成長したら魔女って言い回しじゃなかったのかよ。キウウベえが言つてのはさ。

そんなこんなで銀髪女性がオーバーキルに倒され、魔法陣から銀髪女性と八神を含めた守護騎士達。

そしてマツスルポーズでアピールしながら衛も現れた。

「見よ、この素晴らしき筋肉を!!」

「感動シーン台無しにすんなや!」

………そんな登場の仕方をした衛は八神にドロップキックされるのは無理もないと思う。

すると、銀髪女性だった闇の書は何かに変身しようとしていた。身体がこう、バブルでブクブク膨れ上がっていく感じに。

銀髪女性ことリインフォース曰く、彼女を苦しめていた暴走体らしい。

クロノ少年やユーノ少年がやってきた。なんか知らない杖を持つてる辺り、新しい武器らしいな。

そしてキアラも現れる。

「さて、せっかくだ。直にあの防衛プログラムとやらを見てみたい」

「お前って戦えたっけ?」

「忘れたのかい? キミを膝につかせた最初の女性がわたしであることを」

キアラの眼帯が解かれ、目蓋から開かれたのは金色の瞳に紅い眼球の眼。

魂の一部が身体に浮き出た形の神器——『支配する者』。この眼に写るものあらゆるものを自分が『支配』するという概念があ

る神器だ。

「この際の『支配』ってどゆこと？」

「サイコキネシス」

「キアラちゃんってエスパー属性なの!？」

「ポ●モンじゃねえし、何よりエスパーのレベルを超えてるから」

……魔法の軌道を意のままにできるし。

とは言え、役者は揃った。

あとは拍手喝采の喜劇の結末か、涙頂戴な悲劇の結末になるかの二択だけだ。

「あれ？　そういえばオリ主くんは？」

「来る途中、杏子ちゃんがワンパンで沈めたよ」

高町がそう言ったので、杏子を半目でみる。

「だってアイツ、ソラの悪口ばっか言うんだもん」
ブリッ子ぶるな。だが許す。萌えるから。

クロノ少年やユーノ達がやって来たとき、銀髪女性ことリインフオースだったものは身体が変化し、オレ達の知る魔女の姿になった。

ただの魔女ならよかったのにとオレは思う。

相手はどこから得た情報なのか——舞台装置フルブルギスの夜の魔女だ。

しかもバリアらしきものが張られており、パワーアップしているようだ。

『アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!』

「なんの冗談だよ……」

「そだね。私としては久しぶりだけど」

「私もよ」

まどかとはむらの眩きに元魔法少女達はウンウンと頷く。

まさか相手は超弩級の魔女となるとは……。

「ほえー、あれがソラが相手した魔女なの?」

「そういえば千香ってあいつは初めて見るんだっけ?」

「うん。でもボクとしてグラマーなお姉様を期待したのに、現れたのキモい物体だなんて……」

「がっかりするのは別にいいけど、あれ一応魔法少女だったヤツだからな? キモいはさすがにひどいからな?」

「くっ、せつかく用意したカメラが無駄じゃないか! お姉様のアダルトボディを期待したのに!」

「だからカメラ持ってたのか」

ホント相変わらずな千香である。

にしてもこいつが相手か……。

「ふるボッコに持ってこいだな……」

「だね……♪」

「ええ……」

「ふふ……」

「全くよ……」

「そだね……」

上からオレ、まどか、ほむら、マミさん、さやか、杏子である。

敵も味方も「え？」と啞然としていたが、気にしない。

「アレと戦うん？」と八神が聞いてきたので『神器使い』達は「もちろん」と答えた。

「当たり前だ。久々の魔女退治だ。みんなグリーンフシードほしいかアアア!？」

「「「「おー!!」」」」

「魔女の裸体みたいかー!」

「「「それはヤダ」」」

「解せぬ」と千香は自分の発言に賛同してくれなかった『神器使い』のみんなに対して拗ねた。

いや魔女って裸体あんの？

あれがデフォルトじゃないの？

まあそれはさておいて、続き続き。

「魔女をぶちのめしたいかー!!」

「「「「おおー!!」」」」

「よろしい。ならば始めらよう。魔女ふるボツコタイム
じゃアアアアア!!」

「「「「レッツパーティーイイイイ!!」」」」

「もう八つ当たりよ、もオオオオオ!!」

「ノリノリだな『無血の』」

元魔法少女達のキャラ崩壊し、憤慨した千香と呆れるキアラを含めてワルプルギスの夜に向かっていく。

「んで、お前らどうすんの？」

「……………あ」と残りは眩いて気づいて向かって行った。

うむうむ、さてとオレも祭りに参加するか。

「というか、なんなんやこのメンツ。どういう組み合わせやねん」

「鬼畜、百合、変態、ロリ、筋肉、常識、眼帯、なののを組み合わせ
たドリームチーム」

「カオスすぎるわ! 後、なのなのってなんなん!？」

「高松——あ、間違えた。高町やまのの語尾だ」

「なのはなのー！ー！！」と聞こえたが気がした。気のせいだと思うことにした。

オリ主くん？ 放置で。鮫の餌になるなり、なんなりしやがれ。

☆☆☆

その後、リンデイさんの通達があり十分後に暴走するらしい。

その前にこいつを消さないといけないが、再生機能があるため、完全に消さないと危険らしい。

というわけで問答無用にぶっ潰せという話である。

ワルプルギスの夜は使い魔を出してきた。あの魔法少女の形をした影共だ。

久しぶりにみたがやっぱり不気味である。

そんな使い魔をさやかは切り裂き、杏子は串刺し。

まどかは射殺し、ほむらとマミさんは射殺する。

ホント容赦ないなオレ達。

首を飛ばしているオレも人のこと言えないけど。

そんな中、オレは足場を作りながら徐々に魔女に近づく。まどかはオレの背中を追う形で飛んでいた。

「本当に久方ぶりだね！」

「あのときはまどかは戦えなかったな。どうだ今の気持ちは？」

「サイツツコー！ーだよ！！」

いつも無力で傍げなだった彼女が今ではこうして戦っている。

そんな姿にオレは笑みをこぼす。

……………もうそんな面影全くないけど。いろんな意味で。

テンション高めなまどかにオレは言う。

「開けるまどか！」

「了解！」

まどかが女神モードになって、チャージし始める。最大威力の弓矢を生成するためだ。

しかしワルプルギスは海中から大きな岩々を浮かび上がらせ、それをぶつけようとしてきた。

使い魔達だけでなく、厄介な物理攻撃を含めてオレ達に迫る。

魔法少女だった頃のほむらはこの圧倒的な攻撃に苦戦し、敗北してきたよな。

カシヤン。

だからこそ、彼女が止めるべき攻撃だ。

ほむらの時間停止でその攻撃は動きだけを止める。

神器使いとなった彼女はモノクロの世界にしなくても、一つの対象に絞って停めることができるのだ。

止まったままの岩石達にキアラは言う。

「このわたしが『支配』してあげよう」

キアラがパチンと鳴らすと、海面から新たな岩石が浮かび上がり、ワルプルギスに迫る。三発ほど受けた魔女は、せめて使い魔達だけでもとワルプルギスは思ったのか、使い魔が一齐にオレ達二人に向ける。

「あらあら、ここから先は通行禁止よ？」

ママさんの一言と共に使い魔の脳天を撃ち抜かれた。

それだけでなく高町やフェイト、シグナム、ヴィータが使い魔達を退けてくれる。

「オラ、とつと道開けろ!!」

「まどかとソラのお通りよ!」

「新婚さん、いらっしやーい!」

杏子ときやか、千香が背後からきた使い魔を退けてくれた。

ちなみに千香。誰が新婚だコラ。

「これが私とソラくんのバージンロードだね!」

「ほむらはどうするんだよ」

「大丈夫! 既に夫として入籍予約してるから!」

「浮気すんなよ婚約者」

サムアツプするまどかに呆れながら、オレは神器の剣先をワルプルギスに構える。

「いっけー!!」

「デストロイアーチャー!!」

「その呼び方やめて!」

まどかがツツコミながら流星群のごとくの弓矢を放った。

ワルプルギスに張られていたバリアは破られた。

よし、道はできた!

「封印します、つてね!!」

ワルプルギスに『神器』を挿し込み、再生機能を封印した。

マミさんが試しとばかりに巨大砲撃ティロ・ファイナルを放つ。

ワルプルギスの腕が少し欠けていた。封印できた証というわけだ。

その上、簡単に身体が欠損している。

バリアが張られている代わりに身体の耐久力が弱くなってるのか

?

まあ、なんにせよ。これで準備はできた。

「やっちまえ! 主人公共!」

オレの合図と共に、三人娘。

高町、フェイト、八神が最大魔法を撃った。

ドゴオオオオオオンン!!

直撃したわけだが……………うん、なんか原爆並みの爆発音が鳴った気がする。

というか未だに真っ白な光柱がワルプルギスにいたところに立っているし。

「魔女って使徒なの? なんか十字架の光柱が立っている気がするんだけど」

「んじや、あいつらはエヴァか。オイ、初号機。もう一発いけるか?」

「初号機じゃないもん! なのはだもん!」

膨れっ面にプンスカ怒る高町。冗談だつて。

「というか仕舞いに暴走状態や覚醒状態にならないだろうか？と少し期待してたりする。」

　　来る日はこなそうだが。

「若干残ってるな」

「うん、今も苦しそうだね……」

「そりゃあ再生機能を封印したからなあ」

　　「といわけでもどか、と言って彼女の目を見る。彼女は無言で頷いた。」

　　元の魔法少女の衣装に戻った彼女は弓矢を引いて「ごめんね……」と呟いた。

　　「やっぱり変わっていてもこいつは優しい女の子なんだよな……」。

　　「もう充分だろ？　精一杯がんばって生きてだろ？　だからもう安心してとっと——死ね」

　　オレの一言を最期に闇の書の擬似暴ワルプルギス走の夜は完全体にこの世から去った。

　　終わったんだ。この馬鹿みたいな悲劇が。

第三十九話 ■■■の物語

エピソード的な話を話せば、ロットテとアリアに指示を出していたお父様ことグレアムというオッサンが違法のためクロノ少年に捕まった。

捕まったとき、猫姉妹の画像を見てしまい呆然喪失だったみたい。何を見たんだいったい……。

まあ、彼自身も後悔していたらしく、管理局を辞めることにしたらしい。

いや、あなたの辞職程度で八神家は治まると思わないと思うなあ。家主の八神はやてを除いてだが。

それにしてもオリ主くんの殺人未遂も許されるとは思わなかった。普通は少年院行きだが、管理局では魔力量が高くなおかつ優秀な人材という理由のため、無罪放免にしたらしい。

まどか達が憤慨したのは言うまでもない。千香がテロリズムを起こそうとしたことを止めたのはホント大変だった。

なので、ヤツの机にSM本とムチを仕込んでやった。始業式早々、変態として見られてろという嫌がらせである。

高町達もオリ主くんの信念に少し疑問を持ち始めた。今さらだし、ホントどうでもよかったけど。

そして、オレ達に重大な選択が残っていた。

雪景色が広がる世界にて、オレ達『神器使い』とクロノ少年を含めた高町達魔導士組。

そして八神を除いた守護騎士達が、人の気配がない森にいた。

どうやら闇の書の防衛プログラムという八神を苦しめる元凶がリインフォースにまだ生きており、それは取り除くことができないくらい深いところにリンクしているらしい。

結果、リインフォースは闇の書もろとも消えないといけならしい。

守護騎士達もそうなるのかと彼女達自身が聞いてきたが、どうやら闇の書から切り離して独立させたらしい。

「衛はどうしたのだ？」とオレはリインフォースに聞いてみた。さつきから見当たらないが……。

「眠っている主のところに置いてきた。彼には既に言っている。筋肉の演説ができなくて残念だとか言っていたがな……」

「それは聞かなくて正解だと思うぞ」

オレはやれやれと白い嘆息を吐きながら呆れる。

あいつの筋肉至上主義はたぶん永遠に変わらないだろう。

でも意外な話、あいつは変態という仮面を被った普通の少年だったということだ。

変態Ⅱ最強という自己催眠してチキンハートを無くすとはなかなかである。

「お前には感謝している。主を救ってくれてありがとう」

「救ったのは衛さ。あいつがいなきや、ホントにバッドエンドになってたよ」

「だが、きっかけを与えてくれたのはお前だ。……ありがとう」

頭を下げるリインフォースに照れくさくなってオレはそっぽを向いた。

美人に感謝されたんだ。仕方ないだろ。オレだってこんな人に感謝されたら照れくさくなるって。

それに……また感謝されたな。

プレシアさん以来だな。

「そういえば、プレシアさんのお墓ってどこか聞いたのか？」

「……ある次元世界に移したって今日アリシアからラインが届いた」

フェイトは答える。……ライン知ってるのかよプレシアさんの娘

(故人)。死んでから何十年も経ってるのに。

どうでもいいけど。

目を瞑り、今ここにいない姉を想うフェイト。
また会えるということをお願いしているのだろう。

「それにしても、ソラくんが照れるなんてねー♪」

「……うっせえ。ほっとけ」

「あら、そんなこと言うソラにはお仕置きではなく、誉め殺しという罰を与えるわ。光栄に思いなさい」

勘弁してくださいほむら様。もう羞恥心で死にそうです。

オレは土下座してほむらの罰を勘弁するようにお願いした。

……みんなに笑われたことがかなり恥ずかしいです先生。

「お前にそんな顔があるとは意外だな」

「笑うな！ たくっ……。これから自分が逝くっていうのに何のんきに言ってるやがる」

「そうだな。最期におもしろいものも見せてもらった。もう……。悔いはない」

ラインフォースはそう言って高町とフェイトにお願いする。

そろそろか。ラインフォースが消えるときが。

そして――

「ちよつと待ってやー！」

――衛に車イスを押されたはやてが来るときが。

甘いラインフォース。お前の主は厄介なほどの優しいヤツだ。

「あ、主!？」

はやては一刻も早くとばかりに前へ前へ行きすぎて遂に前のりに倒れてしまった。

まだ立てない彼女はそれでもラインフォースに近づこうとする。

リインフォースはそんなはやてに近づき、身体を支える。

「自分が消えるとか言わんといて！ アンタは私の大切な家族なんやで!？」

「主、しかし……」

「なんも言わんといて！ 消えることは許さないで！ ずっといるんや！ これからも、いつまでもや！」

年相応なワガママなお願いだ。

だが、現実が変わらない。リインフォースは消えない限り防衛プログラムは復活はする。そうすればまたはやてを苦しめる。

だからこそ、彼女の意味は堅い。

「主、ワガママを言っただけじゃありません。私はこれ以上あなたに迷惑かけたくありません」

「迷惑やない！ 迷惑なんか……!？」

「わかってください。私も、私も生きてみたいです……?こんな優しい人に出会ったのにお別れしたくありません……!？」

でも、とリインフォースは続ける。

「運命は変えられません。私はいなくならなければなりません」

「リイン……フォース……」

「私は世界で一番幸せな魔導書です……。ありがとうございます……私の優しい主様……」

そう言ってリインフォースはやてを衛に任せてそこから離れた。彼女は覚悟を決めた。高町とフェイトはそれに答えなければならぬ。

「しつつかし、最後の最後で彼女の本音が聞けたなあ」

「うんうん、感動的だね。千香ちゃんちよつと感動しちゃった」

でもな、リインフォース。お前は唯一誤算を犯した。

どんな誤算かって？

「んじや、やりますか」

「がんばってねー。全てを台無しにするのが変態の役目ですから♪」

「オレは変態じゃねえから」

オレは神器を召喚し、高町達が魔法を放つ前に――背後からり

インフォオースを刺した。

『神器使い』達は嘆息を漏らし、それ意外はオレの凶行に驚愕していた。

「その呪縛……解錠してやるよ！」

オレは神器を回すとリインフォオースの身体から何かが開いた音が鳴る。

すると、リインフォオースの身体は光出し、タイト姿から真っ裸になった。

オレは『神器』を抜き、そのまま苦しそうに浮いている闇の書に向けて斬りかかる。

「この女を道連れにすることはオレが許さん。だから安心してとっと死ね、害悪」

オレは闇の書当真つ二つに切り裂いた。そして、とどめとばかりにまどかが弓矢を放って闇の書は欠片を残して消滅した。

ナイス、まどか。残り物を殲滅してくれて助かった。

「な、何が起きたのだ？ 私に……」

「バグに侵された管制人格からお前を『解放』した。プログラムだったから簡単にできたよ」

要するに融合機能を失った魔力があるプログラムである。シグナム達と同じ存在と考えるもいい。

そのことを八神達に説明した。

「それじゃありインフォオースは……」

「死なないよ。ほら、何か一言言つてやれ」

オレの言葉と同時にはやては衛の腕から飛び出して、リインフォオースに飛び込んだ。

感動のあまり涙まで出す始末だ。

「我が友よ、ありがとう……」

「感謝する必要はないだろ？ だってあいつは言ったじゃねえか」

—— 『生きています。別れたくないです』ってね。

それにな、リインフォオース。

運命は変えられないかもしれないけど、その果てにある『結果』は変わるもんだぜ？

オレは不敵に笑いながらそう思うのだった。

「だが、そんな、幸せ。この俺様が破壊してやろう」

和やかな雰囲気、その声により緊迫へと変えた。

リインフォースははやてを突き飛ばす。そして彼女の胸から――

―― 剣が生えていた。ポタポタと血が垂れ落ち雪を真っ赤に染めていく……。

リインフォースの口から血が吐き出され、前から倒れる。はやては彼女の思い身体を支えようとするが踏ん張れず、一緒に倒れた。

「ぐ、無事……ですか。主……」

「リインフォース！ リインフォース!?!」

途切れ途切れで弱々しいリインフォースははやてが無事か聞いていた。はやては無事だ。彼女は血に染まっているが、それはリインフォースの血だった。

剣は消えていき、傷口から血が出ていく。シャマルさんが治療しよ

うと彼女に近づくが、リインフォースは手で静止した。

「いい……もう、私は……ゴフツ」

「なんでなん……。なんでこんなことに……!」

はやては泣いていた。もうリインフォースは助からない。それがわかってるから、悔しくて悔しくてたまらないのだろう。

するとリインフォースは言う。

「主……泣かないで、ください。私は……最期の最後で、呪縛から解放、されました……。私にとって闇の書は……鉄格子だった……から」

「リインフォースう……死なんといえ……」

「私は、死にま、せん……。大丈夫。私はずっと……」

——ずっとあなたの心の中に、生き続けます。だからリインフォースを忘れないでください……」

それを最後にリインフォースは光の粒子となって、十字架のアクセサリーとなった。

はやては雄叫びをあげるように天に向かって泣いていた。

高町も、フェイトも、そして守護騎士や衛も。

唯一泣いていないのはまどか達だ。しかし、その手には既に『神器』が握られており、最初に杏子がリインフォースを殺した男を睨み付ける。

「テメー……自分が何をしたのかわかっているのか？ ああん?」

「ふん、道具ごときに一々泣けるなんてな。くだらない」

リインフォースを刺し殺した男——神条シンヤは侮蔑した眼差しでまどか達を見ていた。

この男——原作キャラとかに執心じゃなかったのか？

「なんで、なんでリインフォースを!!」

「茶番に付き合えないからだ。何よりあの女との契約で、ヤツの言う通りにしなければならなかったのな。まあ、これで俺様も自由に力が使えるというわけだ」

神条は幾何学な模様を描き始める。その模様は空气中に漂っており、それが完成したとき、光始めた。

「リインフォースに会いたいのか？ 会わせてやるよ」

光からリインフォースが現れる。その顔は能面で、瞳は生きてるという感じはしなかった。

「貴様、何をした!!」

「天道か。随分と筋肉達磨となったものだ」

「答えろ！」

「見ての通りだ。——リインフォースというプログラムをサルベージして修復しただけだ」

なるほど。リインフォースは確かに空气中に漂う魔力の粒子となった。それをサルベージして修復したということはわかるが、それができるほどの力と知識が必要とわけだ。

衛はオレと同じように思ったのか神条に聞いた。

「貴様にそんなことが……」

「できる。この俺様の『アンサー・トーカー答えを出す者』があればな！」

そう言うと、神条の瞳が斑模様となる。『アンサー・トーカー答えを出す者』を文字にすれば、おそらく能力は答えを出す力だろう。

『神器』ではなく超能力という部類の力か。なんつーチートを得ているんだよ、あいつは。

「リインフォース！ リインフォース！」

「ム・ダ。既にリインフォースは我が手中にある。そうだな——よし、まずはリインフォース。八神はやてをこちらに連れてこい」

「はい」と答えたリインフォースははやての背後に転移し、そして彼女を抱えて戻ってきた。

「離して！ 離してや！」

「なんとかかわいそうに。はやて、お前は天道に洗脳された。そうに違

いない」

「そんなわけある——」

はやてが神条の目を見た刹那、彼女の目が虚ろになる。

「天道に洗脳されたら？」

「はい。神条様のおかげで目が覚めました」

「はやて!？」

目の前で洗脳されたはやてに衛はショックを受けていた。そして神条はニヤリと笑って言う。

「ほら、お前こそ悪なんだよ天道。まどか達やなのは達も安心しろ。お前達を神威と天宮から救ってやる」

まどか達はゾツと寒気にやられて震える。気持ち悪いから無理もないな。

はあ、はやてが洗脳され、リインフォースが操り人形にされ、もう最悪だな。うん。

神条はオレの姿がないことにやっと気づいてキョロキョロしだした。

「ん？ 神威はどこだ？ まさか逃げたのか？ だとしたら滑稽だな」

「我が友は逃げておらぬ！」

「じゃあどこにいる？ 所詮は腰抜けのモブごときが俺様に敵うはずがないだろ。ふははははははは!!」

高笑いし出した神条。その後ろには——

——修羅のごとく、キレたオレが『神器』を大振りしていた。「ッ!？」

やっと気づいたのか、ヤツはその場から飛んで逃げる。オレはその

まま、はやてを斬り、『正常』にする。そして、はやてを奪ってリインフォースを蹴り飛ばした。

「チツ、不意打ちするなんて！」

「……衛。任せた」

オレははやてを衛に預けると衛はギョツとした顔になる。

そうか……衛は初めて見るんだよな。オレはそれからヤツを見据える。

ヤツはニヤニヤしながら、オレに対して嘲笑する。

「ふん、まぐれ当たりがいい気になるな。この『答えたを出す者』^{アンサー・トーカー}があればお前なんぞ」

「じゃあ、出してみろ——オレを殺せる答えを」

地を蹴り、ヤツに斬りかかる。リインフォースがヤツの盾になるが、オレの最初の狙いは彼女だった。

それを知っていたかのように、彼女を転移させようとした——が、それを経験から推測したオレは足場を作って、足に力を込めて跳ぶ。

目の前に現れたリインフォースを叩き斬り、彼女は今度こそ消えてなくなった。また足場を作って、オレは辺りを見回すと神条はいなかった。

「下だ！ 馬鹿め！」

下からアツパーするように黄金に輝く剣で斬りかかる。しかし、それを回避してオレはヤツの足を掴み、思いきり地へ叩きつける。

地にクレーターができ、血を吐く神条へ『神器』をさしこもうとしたが回避された。

神条は魔力弾を打ち込むが、身体を捻らせ、回って躲しながらオレはヤツの顔面殴り、そしてヤクザキックで飛ばす。足を滑走させ、ヤツはなぜと言った表情をしていた。

「なんで……なんで『答えを出す者』が効かねえんだ!？」

超能力が上手いこと発動してくれないことに苛立ち始める神条にオレは鼻で笑った。

そんなこともわからないのか、こいつは。

「お前の力は強力だ。はつきり言つてオレみたいな強いヤツでも有効だろうよ」

「だけど、とオレは続ける。

「でもそれが許されないのでこのルールだろ。ご都合主義みたいな答えを出して勝てないのがこの世界のルールだろ」

そう。神条の超能力が発動しにくいのは『抑止の存在』によるストッパーだ。

ご都合主義を許さないのがこの世界の理だ。だからヤツはあんな強力な力を持つていても勝てない。

「ならば『王の財宝』で！ なっ!？」

神条が黄金の大きな穴を出したとき、オレは神条の目の前に一步を踏んで、振りかぶつていた。こいつはまだ殺さない。殴つて、蹴つて、折つて、曲げて、ぶち殺すつもりだ。

だから、

『答えを出す者』、封印」

斬!!と一閃し、ヤツの力を封じる。それに対して驚愕している神条に、オレは顔面を蹴る。歯が折れたのか、白いものが飛び出して、身体を滑走させた。

「き、貴様アアアア!!」

「安心しろ。次は殺すつもりで殴る」

オレが一步を踏んだとき、神条の地面から黒い穴が現れる。『抑止の存在』かと思われたが「クスクス」と笑う声を聞いて違うと思った。

『時間切れよ』

「まだだ！ この俺様が！」

『あら、能力を封じられて勝てる相手でも？ まあ、その能力も次期に使えなくなるから、一旦退いた方がいいんじゃないかしら？』

「くそっ……!」

神条が穴に呑み込まれ、声はオレに対して言う。

『またね。ソラ』

「二度と現れるな。出てきたら殺してやる」

オレがそう言うのと穴は無くなり、残されたのは真っ白な雪の世界の

みだった。

そして後ろからははやてがまどかの胸で咽び泣く声のみであった。

第四十話 リーガルな弁護士

リインフォースのお墓はあの場所に立てられた。神条に殺された彼女の冥福を祈りに、オレ達と高町達も来ていた。

オリ主くんはいなかったけど。未だに病院とは笑える。

その後、管理局で裁判が開かれて八神はやての罪を裁こうとしてきた。

だがしかしそこにいたのは弁護士（秘書メガネモードの）朱美ほむらと七三分けにした髪型をしたオレである。

リーガルな弁護士のごとく、口八丁と管理局の汚職を暴露。しかも情報操作とでっち上げの証言でギャラリーを味方につけ、管理局の立場を悪くさせた。

「弁護士！ 発言を慎みなさい！」

「それでは裁判長。この事件を調査していると、あなたのSMクラブへ行った形跡が」

「なんでそんなところも調べてるの!? てか、写真まである!?!」

裁判長が実はDMと暴露されたときに見せた周りの反応は地味に笑えた。

シーンと静まったり、クスクス笑っていたからな。

「裁判長！ 弁護士は裁判を攪乱しようとしています。退席を」

「檢察のあなた。まどかの調査によるとあなたの旦那のお話が出てきたわ」

「なんで私の……ってあのヤロー、何浮気してんじやゴルアアアアア!!」

檢察側は旦那さんの浮気現場を見せてやると女検事は「ちよつと退出します」と行っただけ帰って来なかった。

気になったので衛に頼んで、リアルタイムのSYURABAにギャラリー席のみなさんに見せてやると結構盛り上がった。

そして旦那さんの浮気相手は男であったことにオレは戦慄を覚えたよ。

なぜかギャラリーはお構いなしに「いいぞ、もつとやれ!!」などと盛り上がっていたけど。

ミッドつて性別の壁を余裕で越えてくる都市なのか？
旦那さんの「ぼくは男がいいんだよ!!」という発言が忘れられそうにないや……………。

あと、あの検事は後に『寝取られ検事』というあだ名がついたとか。
広めたソースはもちろん千香である。

ちなみに裁判長の青年期のラブレター朗読会をしようとしたが、彼は涙目で「勘弁して、もうお願い」と懇願してきた。

その場で発表はしなかったが、後で都市にばらまいてやった。

悪魔？ はて、賄賂で八神をはめようしていた外道には良い末路だと思えますが、何か？

そんなこんなで前代未聞の裁判は勝訴という形で八神と衛は無理に働くことは無くなった。

ただ守護騎士はしばらく奉仕活動になってしまったが。

除夜の鐘が鳴り終わり、新年の始まりである。

我が家では羽根つきやらカルタなどのゲーム三昧な正月を過ごした。

ちなみにおみくじを引いてみたが、吉であった。

縁のところに『女難に注意』と書かれていたが今さらだと思う。

そして今現在もほむらと千香と一緒に、コタツでダラダラしていた。

「コタツはすばらしい……………」

「ネコの気持ちかわかるわ……………」

「ネコと言えばあの猫耳姉妹ネットアイドル扱いされてたよ」

千香の言う通り彼女達はネットの中ではじゃん吉姉妹というコスプレ名で次元世界に広まっていた。

記者達の会見で本人達は否定しているが、思いつきり顔を載せているためバレバレである。

そのときの会見でグレアムさんが「娘が遠い存在に……」と呟いて黄昏てた。

ものすごい誤解された光景を見てオレとほむらとまどかが笑った記憶はまだ新しい。

「ケケケ、まだまだネタを残ってるからジャンジャンホームページに送るよー♪」

「どれくらい残ってるの？」

「三年分」

千香の言葉にオレ達二人は猫耳姉妹に同情した。自業自得とは言え、こんな変態に目をつけられた二人に合掌。

「まあなんにせよ。今年の抱負どうするのお前ら」

ちなみにオレは平温か日常である。日常茶飯事にトラブル巻き込まれるのもうやなんだけど。

すると、ほむらはババツと書き初めし、オレに見せた。

「まどかと決めたわ。ソラを奴隷にする」

「その抱負オレとしてはヤなんだけどそれ。オレに人権ないじゃん」

「人権？ ペットに人権はないわ。あるのは所有権のみよ」

「相変わらずのDSなこと……」

オレが呆れていると千香も書き初めし終えた。

「ボクはソラが変態化すること！ カモン同志！」

「千香ハザードにならん。それが死んだ師匠の遺言書にもあったからな」

「おのれ……どこまでもこの変態の邪魔するか『閃光』め!!」

「お前どこのラスボス？」

オレのツツコミを無視して千香は自らのコレクションを整理し始めた。

海や運動会の写真もあるな。主に女子の。

「知らない子もいるな……。ちゃんと許可取ったのか？」

「盗撮ってすばらしい！」

「許可とれよ犯罪者!!」

オレはツツコミという形で千香の脳天に全力チョップを入れた。

——まあなんにせよ。

そんな正月を過ごすのだった。

☆☆☆

そして、春は訪れた。今年でママさんを除いたオレ達は四年生である。

ホント昨年的一年間はいろいろあった。

こいつらと再会して、プレシアさんの願いを叶えたり、闇の書に巻き込まれる形で協力することがあった。

はやては今では歩けるようになって、衛と付き合うことになっていく。今さらだし、何より結婚していると思えるくらい仲もよかつたしな。

なんでも正月に衛が告白したらしい。筋肉さえなければ衛は見た目も中身も美形だしな。

そのとき千香が録画して八神家で上映したエピソードがあったりする。

最後まではやて達はいじられまくりだったなああれは。

それから今でも守護騎士達は罪を償うために無償奉公で管理局に働くことになってるらしい。

ときどきしか帰ってこない守護騎士達にはやては寂しいとぼやいて衛に甘えていたが。末長く爆発してろバカップル。

高町とフェイトとオリ主くんはどうしたって？

本格的に管理局に働くことになったらしい。高町は無茶しがちなのが心配だとフェイトは言っている。

高町とフェイトから敵視されることが無くなったため、バニングスや月村も敵視されることは無くなった。

オリ主くんは未だにオレを敵視してるが。なんか、あいつの思考回路はもはやわからん。なのでスルーしている。

そして、始業式が終わった後。

オレは一人屋上に来ていた。

「さーて、これからどうしようか？」

リリカルなのはという世界の重要な物語が二つ終わったため、オレはこれからのことを考えていた。

まどか達の平行世界に行って魔女を蹂躞する？

それとも全く新しい異世界に行って冒険する？

まあなんにせよ。

「中学卒業してから考えるか」

オレは笑みを浮かべて彼女達と話し合おうと屋上から出ていくのだった。

残されたのは桜が舞う一筋の風。それは心地よい風だった。

——しかし、事件はまだ終わっていないかった。
トリガーである神条シンヤ。ヤツを倒さない限り続くと知らない
まま、時は過ぎた。

閑話 バレンタイン、デス

バレンタイン。セント・ヴァレンタインが拷問された日とかなんとかの日なのだが、お菓子メーカーの策略により、チョコをあげる日になつと言われている。

そんな二月十四日。オレ達もそんな行事をする。オレの目の前にチョコにコーティングされ、ウルウルした上目遣いをする千香がいる。

「ソラ、ボクをたべて？」

これは男のロマンの一つの『プレゼントは私』ということだろうか？

小学生の身体にこれはものすごい背徳感が千香から漂っていた。そんな千香は目を瞑り、唇を差し出し、そして――

「食い物を粗末にしてんじゃねえ!!」

「おぶっ!」

杏子にぶっ飛ばされる。綺麗なドロップキックだったと追記しておく。

☆☆☆

「テメー。何チョコをサンオイルみたいにしてやがる。チョコは美容にいいってアタシの母は言ってるぞ」

「まず気にするところはそこ？」

ほむらが銀のボールをシャカシャカしながら呟く。様になつてるように見えるが、隠し味にワサビが入っていたのは気のせいだと思

う。

そしてまどか。お前はさつき入れた怪しい薬はなんだ？

そう聞くと彼女は。

「そ、ソラくんを素直にするお薬……だよ？」

「キョドってるぞ」

「大丈夫。なら、味見してみてよ！ そうしたらどんな味になって――

――むぐっ!？」

「よし、わかった。お前が責任をもってそれを全部食え」

青筋を立てたオレがまどかのチョコ（液体）を飲ます。すると、彼女はポーッとしてケラケラと笑い出してほむらに襲いかかる。

「ほーむらちゃんッ」

「きやつ。ま、まどか……どこ触って」

「なんかムラムラしてきた。もう、限界だから付き合つてよ……ネエ♪」

「ヒイツ。まどかの目が野獣のモノに!? あ、ちよっ、ソラ！ 助けてえエエエエ!!」

「なら、お前はワサビのチョコを食ったら助けてやる」

「いやよ！ 辛さに苦しむ涙目のソラが見れないじゃない！」

「ギルティ」

オレは親指で首を切る仕草をして、宣告。ほむらは悲鳴をあげながら、野獣の巣穴（寝室）に連れて逝かれた。

たぶん、夕方まで『キマシタワー』をやってそうだな。オレは嘆息を吐きながら、「ぐへへ……」と下品な寝言を言う千香を蹴って、起こす。

「きやんっ。痛いよソラ……」

「なら、お前は夢でオレに何をしていた？」

「それはもちろんソラのバナナにチョコをコーティン――ぎにやあああああ!!」

R18な発言する前にアイアンクローし、そのまま千香を浴室にぶちこむ。扉を閉めて、一息をつくときマミさんが鼻唄を歌いながらできたチョコケーキを見せてきた。

「はい、ソラくん。チョコケーキよ」

「ありがとう。食べていい？」

「ええ、お味はどうかしら？」

一口食べる。口に広がるのはまろやかな甘さ。そしてチョコビツとビターな力カオ。

絶妙にマッチしたチョコレートケーキである。

「美味しい……はっ」

「ふふ、よかった♪」

思わず眩いてしまった一言にオレは顔が熱くなった。すると杏子はオレの足を踏む。

痛い。何するんだよ。

「デレデレしてんじゃねえよ……」

「何怒ってるんだ？」

「うっせえ！ アタシのチョコ食ってみろよ！」

と杏子はハート型のチョコを口に突っ込ませる。普通に作ったありふれたものだが、中にはピーナッツがあり、ポリポリ感のある甘さが広がる。

「美味しいな」

「ふん。当然だよ。このアタシが作ったのだから」

「ああ。ホントに杏子は良い女だよ」

「っ、うっせえ！」

ふんつとそっぽを向かれた。マミさんはそんな杏子に「あらあら」と言っつて微笑む。

ふむ。誉め言葉が逆効果だったようだ……。（※素で勘違い）

そんなとき、さやかもオレにチョコを渡してきた。

「はい！ バレンタインだよ！」

「ありがとう。……なんで柿チョコなんだ？」

「え、杏子がピーナッツならあたしは柿がいいかなって」

「柿ピーかよ」

だが、ありがたくいただく。うまいでござす。

バレンタイン。それは女の子が友達にチョコを渡す行事である。しかし、必ずしもそれは女の子とは限らない。

「はやてよ。バレンタインだ！」

「ありがとう……——ってなんでプロテインやねん！」

「筋肉のための筋肉によるバレンタインだからだ！」

「わけわからへんわ！」

「むっ。そうか？ むう、しかしこの失敗したチョコレートトリュフを渡すのはどうも」

「それを渡せや!!」

はやてと衛が（ある意味）イチャついてるコントを尻目に教室を見る。誰もがチョコを渡したり、同人誌を渡したりしていた。

……驚くことなかれ。この同人誌を渡すという光景は一年前にもあった。三年生の頃にもウクラスの女子が腐海森の住民になったのだ。原因？ ヤツ変態しかいないだろ。

「草太くん、はい。チョコー！」

「草太。チョコだよ」

「ありがとう……って何これ。なのは、なんでひぐらしの形をしたチョコなの？」

「なんとなくなのです。にぱー☆」

「お前、実は梨花ちゃんだろ！ とうかフェイト。なんで君は木葉マークの額宛をした男の子なんだ!?!」

「えっと……私の内なる人が想い人の形にしろって赴くままに作ったらナルトくんが……」

「こつちもか！ こつちも日向の人か！」

そういえば金髪の兄ちゃんの嫁って、巨乳の夜色さんだっけ？

双子を出産予定だとか聞いたが、まあ目出度いことだ。

そして中の人ネタがここにも起きるとは予想外である。オリ主くんにはザマアだが。

虫のチョコなど嫌がらせ以外なんでもないな。オイ。

「見て見てく。あれがNTRだよ」寝取られ

「ふむ……あれが人のモノを奪う背徳か。えげつないな」

「ナチュラルルにいるけど、キアラがなぜここに？」

「キミにチョコを与えにきた以外ないのだが？」

「お前のチョコⅡ代価有りだろ」

「バレたか。ちようどキミにこなしてもらいたいミッションが」

「しないっての」

ちなみにキアラが無償にモノを与えたのは、軍服以外なかったりする。

帰宅。帰り道にオレは見た。

「はあはあ、ライト。このチョコを……」

「えつと、お姉さん？　なんで鼻息荒いの？」

「な、なんでもないによ。これさえ食べてくれれば後はお持ち帰り―

――じゃなかった。いろんなモノが達成できるから！」

シヨタに迫る美女がいた。いや、うちの元担任なんだけど、あの人。

デキ婚でやめたんじゃ？

てか、旦那さんどうしたんだ。オイ。

そんなとき、「待てえ!!」と天から聞こえた。

「何奴!？」

「天が呼ぶ、地が叫ぶ、悪を許さず、正義を届かす聖なる執行者！」

——華蝶仮面参上！」

「お、同じく二号参上お……」

「四号……」

華蝶の仮面をつけた新たな変態が……いや変人がいた。なんだ、あ

の青髪女と金髪ロリと赤髪女。

ただ者じゃないけど、仮面のせいで台無しだ。

「二号はどうしたんだい？」

「主を捜している。どうやらまた迷ったようなのだ」

「北郷一刀は方向音痴なのかい……」

恋する姫の主人公が迷ってるのかい。

「その女。淑女たる貴公が幼き少年にいかがわしいことをするなどもつてのほか、この華蝶仮面が成敗してくれる」

「やれるものやって見てよ！ いでよ。我が僕達！」

「キーツ！」

なんかシヨツカーみたいなのがワラワラ出てきた。つーか、よく見たら買い物袋を持つてるヤツもいる!?

中には救急車から出てくるヤツも——って仕事してこい！
救命看護師だろお前らは！

「フツ。伝説のザコキャラが出てくるとは面白い。この勝負！ 受けて立つ！」

「はわわわ……あんなにたくしやん」

「……お腹すいた」

果たして華蝶仮面はシヨツカーと変態を倒し、少年を救うことができるか？

後半へ続く……!!

オレはもう帰るけど。

やってらんねえから。

帰宅してからオレはお茶をいれて一言呟く。

「ホワイトデー。考えるか」

お返しをどうするか考えるのだった。

第四十一話 天神小学校というホラーハウス

春が終わり、夏休みに入った。四年生になったオレ達は変わらない日常を歩んでいた。

はやてがここの小学校に転入し、相変わらず衛とイチヤイチャしている。

なお、シグナムとヴィータが口から砂糖を吐き出すという芸当を身に付けており、シャマルさんは目を血走り、食い縛りながら二人を見ていたのを目撃したときはびびった。

あの人、一応モテる容姿だが、コスプレに目覚めてからは残念主婦まっしぐらである。

これには関係ない話だが、ザフィーラは公園で青いジャージを着たおじさんに「ヤらないか」と迫られたと言っていた。

一人で散歩することがないように言っておいたが、家の中でははやと衛がイチヤについているわけで、彼には耐えられないようだ。

そのうち、そのおじさんにやられるかもしれない……。どうでもいいけど。

そんなわけで、オレ達の身体は徐々に成長していた。女の子はやや胸を膨らませ、男の子は少しだけがたいがよくなる。

まどか達のスキンシップに少しだけ照れてきたのはオレの秘密だ。クラスもまた、さやかと杏子を加えたメンバーで担任は変わらずの早乙女先生。

またフラれて、合計十五連敗へ到達した。その度に、どうでもいいことを中沢くん聞く。

哀れ。彼がいつか女性とはめんどくさい生き物と決めつけて、衆道に走らなければいいが……。あ、衆道ってのはBLね。

戦国時代とかでは普通だったって聞いている。

ちなみに高町とオリ主くん、フェイトは管理局のミッシェンらしく今日はいない。オリ主くんはどうでもいいが、はやての友人として無事でいてほしい。

オリ主くんはど う だ も い い が。

終業式が終わり、オレ達が下校していると、横断歩道の前に黒い渦があった。

オイ。なんでいかにも怪しいですって言いたげなブラックホールがある。

「あれ。明らかに近づいたら吸い込まれるよね」

「大人しくしてろよ千香。お前がある意味一番危ない。トラブルを起こす意味で」

「やんつ。ソラに心配されちゃった♪」

「確かに心配されてるけど、ちがくね？」

ゴゴゴゴゴツとブラックホールは何かを吸おうとしている。いや、何を吸うのかわからないが、とりあえずいらぬ本を投げてみた。

「ああ！ ボクの衛×ザファイラの本がああ！」

「誰得なんだよそれ」

そんな本はブラックホールに吸い込まれる。ブラックホールから何やら「なんで!?!」「きやあアアアア!?!」「……オイオイ」など小さな声が聞こえる。

誰かがいるのか？

「ボクの数カ月の努力があゝ！」

「ちなみにアレ。どれくらい売れた」

「十万冊刷ったら、二十分で完売した」

……衛。お前の恥態が全国の腐の淑女に愛されてるぞ。

哀れな……。

「ソラ×衛だと意外に百万冊も売れたよ」

「何やってんだお前はあアアアア!!」

なんてことを！ そして精神的にダメージがきたわ！

「だ、大丈夫よソラくん。別に誰もソラくんがモデルなんて……」

「あ。あの子、『オレのアレに乗っていけ』のソラくんこそっくりだよ」
「ホントだあ。世の中って偶然があるものねえ。まさかアマガセさんの作品と似ている人がいるなんて」

「もしかしたら、作品のモデルかも？」
「そうかもねえ〜」

と通りすぎる女子大生。マミさんは顔をひきつらせながら、オレに言う。

「……ごめんなさい」

「そんな慰めいらねえよ!!」

泣きたい！ というかもう外に出たくない！

なんでこのタイミングでモデルがオレだったことが判明した!?
最悪じゃねえか！

「まあまあ、そんなことよりソラくん。あのブラックホール、どうしよか」

「まどか、やーっっておしまい!!」

「あらほらさっさー!」

「本日のドッキリびつくりメカだコロン」

ノリノリなまどかとほむらはブラックホールを消滅させようと『神器』を喚び、魔力をため込む。すると、後ろからはやてと衛がこちらに向かっているのを見た。

どうやら同じく帰り道らしい。まどかとほむらが魔力矢を放とうとしたとき、ブラックホールから触手が八本生えてきた。

「きゃあー!」

「ちよっ」

「んなっ!?!」

さやか、マミさん、杏子を縛り上げ。

「ええー……」

「まさかの拘束プレイ!?!」

ボクを薄い本のようなことするんだね!

オレと千香が拘束され、それぞれ引っ張られる。意外に強い拘束で最低三十秒くらいないと解けない。おまけにこの引っ張る力がスゴくてあつという間にブラックホールに近づく。

これは明らかに巻き込まれだろう。オレは『そげふさん』じゃない

のに……。

まどかとほむらはオレの手を掴もうとしていたが、虚空を掴んだだけで、手を伸ばしている。そんな中、オレは彼女達に言いたいことがある。

「あ。まどか、帰ってきたら宿題写させて」

「誘拐されてるのに言うことはそれなの!？」

「さすがはソラね……」

呆れられた表情を最後にオレ達七人はブラックホールに呑み込まれた。

さて、いったい誰の仕業だろうな……。

(??side)

ソラ達が呑み込まれる前、五木雷斗は学校が終わり、ノエルに連れられていた。彼女は買い物袋を手に持っている辺り、どうやらスーパーに寄っていたようである。

「にゅふふふ、さすがライトくん。ワタシが望んだものを手に入れてくれたねえ♪」

「ありがとうございます。ところでお姉さん。なぜ息を荒くしてるのですか?」

「シヨタに興奮しないお姉さんはいない……!」

「謝れ。全国のお姉さまに謝れ」

世界中のお姉さんをシヨタ大好き人間と宣言したこの女性に雷斗は、普段から敬語なのに、最近はツツコミになると抜けてしまうのだ。(何が起きてるんだ……俺に)

何かに引つ張られているような気がしてならない。そんなとき、雷斗を呼ぶ声がした。

紫のロングの少女である。すずかは雷斗を見つけて話しかける。

「こんにちわ。雷斗くん、元気だった?」

「はい。月村さん、今日は一人ですか」

「うん。アリサちゃんが急な用事で車で帰っちゃって。それにすずかっ呼んでもいいんだよ?」

「いえ、誘拐されて助けてくれた恩人に気安く名前で呼ぶことなど」「もう、頑固なんだから」

彼の生真面目な返事にすずかは微笑む。雷斗は視線を逸らしてしまったが、それは彼女の笑みが眩しかったからだ。

美少女と言えば、納得できるかわいい少女に微笑まされると誰だって気恥ずかしい。

「むむ、ライトくん。照れてるね。お姉さんという身がありながら他のおんにやの子にデレデレする悪い子はこうだー!」
「むふっ」

ノエルのロッキー山脈がライトの顔を埋め尽くす。彼女の魔乳が雷斗を窒息させようとしていた。

「ちよ、こんな公衆の前でそんなことしたら……」

「にゅふふふ、甘いよ。ヴァンパイアガール。恋とは常に戦争。こうやってアピールしないと男の子は他のメスにとられてしまうのさ!」
「逆にトラウマになるのでは……。ってなぜ私が吸血鬼と!？」

「え、なんかヴァンパイアの格好したらセクシーだと思っつけたあだ名なんだけど。不服?」

「あだ名なんだ! ……………びつくりした」

「そんなことより、ライトくん。キスしよう。むちゅー♪」

「だからこんな公衆の面前でしないでください!!」

いつも通りだ。ノエルのフリーダムに巻き込まれるすずかに、雷斗は同情していると前にブラックホールが現れる。そのブラックホールは雷斗を呑み込もうと吸引し始める。

「ちよ、なんですか。あれ!」

「にゅ? まさかご招待つてヤツ? ならば、その挑戦受け取った!!」

このワタシが出向いてミックミクにしてやんよ!」

「ノエルさアアアアアッ!? なんて俺を抱き締めたまま突撃してるのですか!」

「ライトくんはワタシのパートナーデジモンだから当然なのだ!」

「進化しませんよ」

「大丈夫。いざとなったらこの紋章でワープ進化させるから」
「どこで手に入れたの。その紋章!？」

ノエルは雷斗を抱き締めたまま、ブラックホールに突撃。それに慌ててすずかもついていき、遂にこの場には誰もいなくなった。

こうして彼らはホラーハウスへと案内された。

しかしホラーが必ずホラーになるとは限らない……いや、限らないではなく絶対に『なくなつた』。

なぜなら『無血の死神』と『混沌の神器使い』。

この二人が現れると、悲劇は喜劇と笑劇へと変貌するのだ。

—— さあ、馬鹿で、面白い劇場の始まりだ

第四十二話 ホラーがモナー（笑）になった件

オレ達がブラックホールに呑み込まれてから目が覚めると、そこには木造建の小学校だ。もう使われていないのか、ボロボロで何よりガラスが所々割れていた。

「昭和の小学校か……？」

「そうっぽいな……。てか、千香達がいねーな」

確かに。どうやらはぐれてしまったようだ。

「というか、誰だオレ達を吸い込んだヤツ。会ったらとりあえず殴るか。」

『……にいちや……』

「なあ、ソラ。ここってやっぱホラーゲームみたいどころか？」

「かもな。そういうときにシスターたるお前の出番。さあ、聖書で戦え」

「聖書はあるんだけど、どうやって戦うんだこれ？」

『おにいちちゃん』

「いや本の角でぶん殴ればいいよ。あれ、地味に痛いから」

「そんなんでホラーでよく出る化け物とか倒せるのかよ。てか、倒せたらうちの親父も今頃、モンスターハンターだったの」

『おーい。おにいちやーん』

「安心しろ。とある学生が証明済みだ。本の角で人を抹殺できる……となー」

「んなわけあるか！ そいつの名前言ってみろ」

「マカ・アルバーン」

『『ソウル・イーター』じゃねえか！』

『話を聞こうよおー……!!』

「うるせーな!!」

オレと杏子は本の角で、うるさい少年の顔面へスパーク!!（顔にダイレクトアタックをすること）

少年は鼻血を出しながら倒れる。よく見たら透けてるけど、気にし

ない。

とりあえず、オレは胸ぐらを掴む。

「人が会話してるのに、なんだよお前？ ああん？」

「てか、血まみれってどういうことだ？ どっか怪我してるとか言わねーと殺すぞゴルア！」

『ヒイヒイヒイ！』

脅すとそれはそれは涙目になる少年。そして杏子、お前は何気に少年のこと気遣ってないか？

『ご、ごめんなさい』

「よし、反省文の代わりに大根寄せ。今日は大根の煮物が食いたいから」

『わけがわからないよ!?』というか僕は幽霊だよ。死人だよ!? 怖くないの?』

「もっと怖いのは変態の執念だ。覚えとけ」

『はい……』

幽霊少年はシュンツと落ち込む。保護欲をくすぐるこんな姿を千香が見ていたら、この少年が男の娘へと進化するだろうな。

もちろん、そのときにこの幽霊少年も立派な変態になってるが。

『あの、どうしておにいちゃんとおねえちゃんはここに?』

「ダンゾーの製品らしきブラックホールに呑み込まれた。おそらく吸引力を試す実験だろ」

「いや、ちげーだろ。てか、そんな人体実験がダンゾーが行うわけないだろ」

「吸引力がただ一つの掃除機なんだぜ？ 掃除機の果ての製品がブラックホールだ」

「そんな危険な掃除機より、箒とちり取りがあればいいよアタシは」

おや、どうやら自然とボケてしまったようだ。ボケ役不在により杏子がツツコミ役となった。

すると、幽霊少年はビクビクしながら聞いてきた。

『サチコちゃんが招いたのかな……?』

「詳しく教えろ。さもなければ、さらに血まみれしてやる……」

『ビエエエエエッ!! このおにいちゃん怖いよー!!』

「こんな小さな子を脅してるんじゃないよー!」

杏子に本の角で殴られた。地味に痛いや。

篠崎サチコ。この天神小学校を支配している悪霊となった少女だ。

どうも彼女の母親が校長先生に性的な関係を迫られ、転落死し、それを目撃した彼女もまた校長先生に殺される。

そして悪霊となり、ある教師を唆して幽霊少年達を殺して、校長先生を自殺させたらしい。

それで終わればいいのだが、なんらかの要因なのかサチコはここにとどまり、新たな獲物^{犠牲}を求めて、オレ達のように招くらしい。

なんと迷惑な少女だ。よし……、

「そいつシバくから案内しろ」

『ええ!? 無理無理! 僕、消されちゃうよお!』

「シバくのは駄目か? なら、おしりペンペンで勘弁してやる。お前らしくらいの年齢でしかも女の子なら、いい薬だ」

『薬じゃ済まない気がするのはどうしてかな……』

「アタシもだ。千香辺りが『涙目な幼女キタコレ!』とか言いそうだ」

「それが最終的なお仕置きだ。それで後は千香に預けて恥ずかしい写真の刑で悶絶させる」

「お前は血も涙もないのか!」

「え、何それ? 食べるの?」

杏子が頭を抱えて、幽霊少年は首をかしげる。少年よ、知らない方がいいこともあるのだよ。

それから歩いていくと、カールの髪の少女が短髪巨乳の少女に引きずられているところを目撃した。

女子トイレに入ってる辺り、ふむ……。

「百合か」

『ゆりつて?』

「女の子同士がイチヤイチャする。具体的な意味は少女漫画のヒロインが男の子とイチヤイチャするようなことを女の子とするということだ」

『なんかおかしいなあ』

「同性愛も立派な愛だ。認めろとは言わないが受け入れろ。これもまた愛の真理だから」

「いや、一方的な否定はしねーけど。あれ、確実に火曜サスペンスなことが起きる前兆じゃねーのか?」

何? ならばあの短髪巨乳の少女はヤンデレだったのか。

ヤンデレは否定しないが殺人は駄目だ。なので、幽霊少年と共に突撃する。

「神威ソラ、いつきまーす!!」
「!?!」

短髪巨乳の少女はカールの髪の少女を今まさに殺人しようとしていた。個室トイレで首吊りとはなんと恐ろしいことを。

そんな少女の凶行を止めるため、ドロップキックを決めた。巨乳の少女は床に転がり、オレは『神器』を召喚して縄を斬った。

「げほ、げほっ」

「危ないなあ。殺人犯すなんて、何を考えて」

「う、あぁっ!!」

巨乳の少女はオレに飛びかかる。それを避けて観察してみると、何かにとり憑かれている。オレはそれを切り離すために『神器』をさした。

すると糸が切れた人形のように倒れた。憑き物が取り除かれたようだな。

「直美……?」

「何かとり憑いてたものを切り離したから平気さ。てか、大丈夫か。えっと……百合女?」

「うん。直美と再会したのはいいけど、いきなり襲われて」

「百合の部分は否定しないのかい」

杏子は呆れながら、直美という少女をお姫様抱っこする。すると、カールの少女は鼻息を荒くして言い出す。

「直美を、ぜひ！　ぜひ私に……いだあ!？」

危ないので本の角でぶつ叩く。……マジで百合だ。まどかやほむらと同じヤツだ。

「いきなり何するの、君」

「目を血走らせて、鼻息を荒くする女は危険だと学んでいるから」

「私は危険じゃないわ！　無害だから！」

「サムアップして言われても説得力ねーし、何よりこの直美という女の貞操が危ないから渡せねーよ」

変態として見られる少女に、杏子は警戒心を剥き出しにした。

それもそうだ。変態に対して、いつも苦勞してるオレを見ていたら尚更だろう。

「私は篠原世以子。如月学園高等学校の二年生よ」

「神威ソラ。聖伴小学校四年。こいつは同じ学校の友江杏子だ」

「よろしくな。ねーちゃん」

『あ、僕は』

「幽霊少年。以上」

『あんまりじゃない!？』

幽霊少年は幽霊少年だ。それ以上もそれ以下でもない。ぶつちやけ、オレより年下だしモーマンタイである。

篠原の話によれば、文化祭の泊まりで篠崎あゆみという少女が怪談していたら、なんかここにきたらしい。

しかもバラバラになつて、今どこにいるのかもわからないらしい。

「ちなみに神威くんはどうやってここに？」

「ブラックホールみたいな掃除機にやられた」

「だからダンゾーの仕業じゃねーから。てか、ややこしいからお前は黙ってる」

杏子に言われて、オレは口笛を吹きながら前へ進む。オレ達は篠原の話聞きながら、みんなを捜していた。

廃校舎とは言え、小学校。そのうち見つかるだろと思っているとキ

ラリと光る何かが見えた。

「なんだ？　これ」

それはピアノ線だ。張り詰めれば鋭利の刃物と変わらない。おそらく、走っていたらこれで首チョンパされているだろう。

オレは『神器』でそれを切り、前へ進む。何本も何本もあつたため、ムカついてきた。

そんなとき鈍器が頭から落ちてきた。

生身の人間からすれば、重そうなヤツが当たれば即死である。

篠原が悲鳴をあげ、杏子はヤバいという冷や汗をかいていた。

『キヤハハハハ！』

『大成功♪』

『頭からピューって出て……え？』

そりゃ、普通ならば即死だわ。でも『神器使い』はこれくらいの威力の攻撃を頭から受けてるのはしよっちゅうである。

オレは頭から鈍器を落としてきた幽霊少女達に向けて言った。

「……言い残したいことは？」

『あ、ごめんなさい』

「許すかゴルアアアア!!　いつペン死んでこいクソガキイイイイ!!」

『きゃあアアアア!!』

幽霊少女達を魔力の縄で捕獲してから、ハンマー投げのように振り回す。

「えつと……大丈夫なの？」

「まあな。あの程度でアイツは死なねーし、むしろあの女の子達が危ない。ソラがぶちギレたら女、子ども容赦なくやるからなあ」

「同じ子どもなのに……」

「子どもだからって関係ない。敵対したら即時抹殺、排除、殲滅せよつてアイツの師匠が言っていたらしいぞ」

「その人絶対、危険だ」

師匠が危険？　今さらだ。

つーか、グルグル目を回して失神しやがった。どうでもいいけど。

むしろ引きずって連れてこ。起きたらまたリピートしてやるだけだしな。

オレ達が曲がり角に差し掛かったとき、壁にナニカがあった。

それはベチャツと潰れたカエルのように、肉塊が散らばり、グロテスクな死体があった――

――わけでもなく。そうなる前にその少女のクツションとなつて壁にめり込んださやかがいた。

「さ、さやかああああ!?!」

「ひ、ひどい。なんでこんなこと……!」

「ちくしょう! 誰だ。さやかを死なせたヤツは!?!」

「いや死んでないから。血を一滴も流してないし、めり込んだだけだから」

「さやかアアアアア!」

聞いてよ杏子。ちなみに少女は無傷だった。さやかがめり込んだおかげでクツションとなつて助かったようだ。

オレがやれやれと嘆息についてると、さやかをめり込ませた原因っぽい幽霊達がいた。彼らは「なんでそうなるの?」と言いたげな顔していた。

オレは彼らに向けて言った。

「……まあお前らに対して言わせてもらうことは一つ」

魔力の縄を作り出し言った。

「大人しくお縄につけ」

『『『ウボおおおお!』』』』

狂ったように襲いかかる幽霊達を笑顔で捕縛したのは、言うまでもない。

第四十三話 コーラスパーティー（※つまりカオスです）

(?? side)

篠崎あゆみと岸沼良樹は廃校舎の廊下を歩いていった。

あゆみの怪談話が終わったとき、五人と一緒にこの異空間に飛ばされたのだ。あゆみはビクつきながら良樹の背中についている。

(ホント、ここどこだよ……)

良樹はここがどこなのか考えていた。

自分達がなぜ、どうして、なんのためにここにいるのか、考えていた。

元々彼は分析は得意な方ではない。ではなぜ考えているのか？

それは、

「ねえねえ、あゆみちゃん。おしり触っていい？ お胸触っていい？

というかこれを着てよ！」

この変態が原因である。暗いところが苦手なあゆみがビクついてるのは、決してこの校舎の雰囲気からではなく、千香と出会ってからいきなりセクハラされ、イロイロされた。

なので、大人しい彼女は若干千香に苦手意識を感じていた。

「にゅふふふ、まさか異空間に召喚されたら、美少女に出くわすなんてなんとという幸運。この調子なら新たな美少女に出会える可能性にボクの期待もワクテカだよ」

(コイツとつるんでるヤツ、ぜってー苦労してるな)

嘆息吐いていると廊下の向こうからギイギイと誰かが歩いている音がした。良樹とあゆみは警戒心を強くしていると、暗闇から現れたのは鉄パイプを持っている男だ。

彼の目は黒く空洞で、血の涙が流れており、肉体は一般男性とは思えないくらい膨らんでいた。

ゾンビのようだと良樹が思っていると、鉄パイプを振り回してきた。

「に、逃げろー!」

「いや戦うー!」

「なんでだよ!?!」

千香の戦うぜ宣言に良樹がツッコむ。千香は「うおおおおおオオオオ!」と叫びながら突貫するが、鉄パイプは彼女の頭部に直撃した。

彼女は倒れ、良樹は舌打ちする。

「馬鹿なことをしやがってー!」

「き、岸沼くん。彼女を……」

「駄目だ。ここは逃げなきゃ、今度は俺達がやられる!」

千香に夢中である隙に逃げるべきと良樹は考えていたが、千香が起き上がるところを見て、目を丸くした。

「無駄無駄ア! このボクがこの程度——ぶべっ!」

また鉄パイプで殴られる。しかし、千香は倒れない。

「ウアアアアア!!」

「もつとだ! もつと来なよ!!」

「ウア!?!」

鼻息を荒くし、鼻から愛を出す変態少女。決してきつきの鉄パイプで出た鼻血ではないとなんとなく良樹は思った。

どんどん殴るゾンビの男に対して千香は艶のある声を出しながら、言い出す。

「いいよいいよお!! このボクをもつといじめてよ。というかソラみたいに容赦なく殴ってよ!!」

「ウ、ウア……」

「オイ、あのゾンビもドン引きだぞ……」

ドMの中のドM。千香という少女にこの程度の攻撃力ではソラにいつもされてることと変わりないようだ。

ゾンビの男は趣向を変えて、今度はチェンソーを出して切ろうとす

る。さすがの千香もそれには回避し、距離をとった。

「ぶーぶー。打撃にしてよー」

「ウアアアアア!!」

ゾンビの男はチェンソーをあげて「くらえエエエエ！」と言わんばかり、千香に襲いかかる。するとゾンビの男の側面にある壁にヒビが入ったと瞬間あと、そこから筋肉モリモリの青年が千香とゾンビの男を壁ごと殴り飛ばした。

「な、なんだ!?!」

「エヴァ初号機!」

「シンジくん……!?!」

「いや、お前ら二人は何言ってるの!?! てか、誰だよお前!?!」

「シンジくん」と言った彼女は良樹のツツコミと共にいつの間にか消えた。

そして、二人を、壁をぶっ飛ばして登場する行為をした男――

それは千香とある意味同じ属性の男。

「マッスルに不可能はない!! 見よ、そこにいる少年少女達。このすばらしき筋肉!!」

「衛くん、なんかぶっ飛ばしたで」

「知らぬ。そこにいるヤツが悪いのだ」

「反省しろやアホ」

壁から現れたのは、衛とはやて。そして二人の担任である穴戸結衣がいた。

友江マミは持田哲志と持田由香と行動していた。マミは持ち前のお姉さん属性で、由香と仲良くなり、哲志に的確なアドバイスを与えて精神的に楽にさせていた。

そしてパニックになっていた森繁朔太郎を縛って引きずっていた。
「た、頼む。いいからこれを解放」

「だーめっ。また暴れたら大変だから、ね♪」

「ねー♪」

「……なんだろう。彼女の背後に黒髪のロングの子のスタンドが見える」

そのスタンドの名前はアケミと呼ばれてることを哲志は知らないが、まあなんにせよ。

ママ達は無事にはぐれた友達を探していた。そんな中、良樹と同じように前から何かが見れる。

それは服など着ておらず、身体中は傷らだらけ、そして――

「ふおオオオオオ!!」

パンツを仮面にしてTバックをはいていた変態がいた。

「ぎゃあー……ッ!!」

「うわああー……ッ!!」

男達は変態仮面の登場に号泣した。……悲しい意味で!

だって、目の前にTバックをはいてパンツを仮面になっているムキムキのお兄さんがいたら、泣くよそりゃ。

「ママねえちゃん、あの人。なんで何も着てないの?」

「そういう趣味の人だからよ」

と微笑んでマスクを脳天にぶちこんだママに男達は戦慄した。容赦のない一撃だった。

しかし変態仮面は避けた。そして窓から飛び降りて逃げ出した……。

デデーン!

『哲志、朔太郎。アウト』

「はっ。」

二人は謎のアナウンスにキョトンとしていると朔太郎の後ろから全身黒タイツで、プラスチックバットを持つ男二人が、朔太郎を解放してからケツをしばく。

「あがつー!」

「いだつー!」

黒タイツの男達はしばいた後、その場から走り去ったのを見てママは眩く。

「絶対に驚いてはいけない24時かしら?」

「あ、由香も知ってる! テレビでやってる番組でしょ?」

「テレビ番組の撮影現場かしらここ?」

呑気に眩く二人に、そうなのかと男二人は考えるが後に待つドツキリの刺客にしばかれるのは男のみだった。

その頃、とある場所にて。

「ヌフフフ、楽しんでるかなあ。友江ちゃん」

「あ、アンタ何者なのよ……」

「ヌフフフ、それを今さら知ってどうするのお?」

「ヒイツ。あたしにそのぶるぶる震えるキノコみたいの近づけ——
きやあアアアア!!」

一人の少女が変態ノエルによって花を散らしていた……。

(ソラside)

どうもソラです。さつき女の子の悲鳴が聞こえた気がしましたが無視します。

うん、だって。恐怖の悲鳴じゃなくて、なんか変態に襲われた悲鳴っほいから……。

それはさておき、さやかがめり込んでいたところに遭遇したオレ達

は、オレ以外はさやかを助けることに成功した。

オレは何をしていたか？

幽霊少年と幽霊少女を捕獲していたけど？

「さあ、お前らの目的を話せ。さもなければ、お前の鼻の毛を引っこ抜く刑を執行するぞ」

『地味に嫌だ！　ってなんでこのおにいちゃん、あたし達に触れられるの!?!』

「あん？　んなもん、気合いと根性と殺意でなんとかなるだろ」

『どんな理屈なのかわからないし、最後のおかしい！　って痛い痛い痛い！　ホントに抜かないでえ〜!!』

どういうつもりか聞いてみたがあんまり芳しくない答えだった。サチコちゃんに言われたからとか言う理由やなんとなくとか、もう気分とノリでこんなことをしていたようだ。

当然ムカついたので、みんなの前で公開お尻ペンペンしてやった。女子も関係なくしたので、少女達はお互い抱き合って泣いていた。

「ひ、ひどいわこれは……」

「うちの弟がだいぶマシということを改めてわかった……」

「どうかナチュラルに幽霊を殴ったり、叩いているけどどうしてなのかしら……?」

「あー、直美と世子だっけ？　そんなの簡単な理由だ。

——それがソラクオリテイ」

「二納得。つまり化け物ね」

中嶋や篠原もひどいことを自然に言いやがる。それからオレ達は、さやかが目覚めるまで待った。

本来なら、はぐれたみんなを捜しに行かなければならないが、どうもなかなか目覚めない。

やれやれと嘆息を吐いていると、オレの目の前に赤い服の少女がいる。

その少女は俯きながら笑っていた。

『ひひひ、あははははは!!　あはははははははははははははははははははは!!』

耳障りな笑い声。どうやら彼女にとってオレ達は格好の獲物のようだ。そんな彼女にオレは、

「うるせえな!! 黙っとけ!」

『きやぶう!?!』

幽霊達を少女にぶつけてやった。

オレにとって彼女は何か?

ただのぶっ潰す敵ですが何か?

赤い服の少女はオレが物理攻撃ができるや否や逃げ出したことを追記しておく。

第四十四話 マテリアルズ

(??side)

雷斗とすずかは廊下を歩いていた。ノエルとはぐれて、二人ぼっちになった彼と彼女は変態である彼女を捜していた。

「いないねー」

「そ、そうだね。というか、全然怖がってないね雷斗くんは」

「なんとなくだけど、こういう体験したような気がするんだ。それも何度も」

「何度も体験したって……」

彼がそういう体験したのはおそらくかなり昔の前の話なのだが、今は放っておいていいだろう。

それよりも雷斗は内心焦っていた。孤独が理由ではなく、ノエルが他の誰かに毒牙をかけていないかの焦燥である。

(ノエルお姉さん、誰かに迷惑かけてなければいいけど)

実はもうかけていることを知らないのが仏なのか、彼は曲がり角にさしかかると誰かにぶつかって尻餅をついてしまった。

「いたた……ごめんなさい。考え事していたもので」

「いえ、こちらこそ焦っていたので気がつきませんでした」

雷斗がぶつかかったのは見覚えのある茶髪の少女だ。ダークネスカラーの制服のような衣装を着ており、無表情な顔つきをしている。彼女を見たすずかは目を丸くしていた。

「な、なのはちゃん？　なんでここに？」

「わたしは『ナノハ』ではございません。申し遅れました。わたしはナノハの魔力によって造られた理のマテリアル。『シユテル・ザ・デストラクター』です」

「シユトロハイムさんだね」

「それはドイツの軍人さんです」

『ドイツの化学力は世界一イイイイ!!』と豪語する軍人さんと間違えた雷斗に対してややムスツとした顔でツツコむ。

雷斗は言いようがない申し訳なきに頭を下げると彼女は「気にしていません」と答えた。

「それでシユテルさんは何をここにこへ？」

「エクザミアというものを求めてここにやって来ましたが、何やらわからないブラックホールに吸い込まれてここにいます。同じマテリアルの二人とはぐれてしまいましたし……」

「そうなんだ。ねえ、一緒に捜さない？ 私達も知り合いを捜しているから」

「そうですね……。わかりました。共に行動しましょう」

「よろしくな、ミシユラン！」

「シユテルです。三ツ星レストランではございません」

クールな少女シユテルは雷斗の両頬を引っ張るといってお仕置きを無表情で実行する。その光景を見たすずかは安心感があつて緊張がほぐれるのだった。

(ソラside)

「はやて。お前いつから銀髪になった。反抗期ですかコノヤロー」

「違うわ塵芥！」

目が覚めたさやかを連れて、オレ達は再び学校の散策を始めた。まさか、クツシヨンになってくれたお陰で鈴木繭という少女が助かったのは驚きである。

しばらく廊下を歩いていると教室からはやてらしき少女が出てきたのだ。さやかと杏子が気軽に声をかけるが無視したのでオレは銀髪化したはやてに対して先ほどのように言うと、噛みついてきたわけである。

彼女が何者か聞くと、なんとマテリアルという種族らしい。うん、

わからん。

わからないから、とりあえず納得してくれたのかフランスツと嘆息を吐く。

「全く……王である我を放っておくとは」

「まあ、そうカツカするなよジミー」

「ジミーとは我のことか!? 我のことを言ってるのか!」

「おお、さすが変態のマテリアル。ツツコミが鋭い」

「変態ではなく『王』だと言ってるだろう!」

「『乙』? 変な名前だなDHAプロテイン」

「ディアーチェと言ってるだろうがアアアア!!」

シャウトするディアーチェ。はやての複製版らしいが、ツツコミ属性が引き継いでいるようだ。

オレのボケに対して中嶋や篠原は呆れている。いつもこんな調子なのかと言わんばかりに。

安心しろ。これ以上にボケる変態と淫乱乙女がいるから。

「とりあえずお前はエクザイルを探しているわけだな?」

「エクザミアと言っておる! はっ。さては貴様らもそれを狙っているのだな!」 渡さぬぞ!」

「いらねえよ。厨二(笑)」

「素でひどいこと言われた!」

事実だから仕方ない。オレ達の漫才はしばらく続くと思われたが、するといきなり空間の裂け目が現れる。そこから出てきたのは見覚えのある金髪の男だ。

アインスを殺し、バッドエンドに導いた外道。そしてオレが今まさにぶっ殺したい男が現れたのだ。

「久しぶりだなモブ——」

「えい」

「死ね」

「くらえ」

「うぎよオオオオオ!」

オレときやか、杏子は問答無用に『神器』を投擲した。ヤツのいた

場所には剣や槍などがぶつ刺さっていた。

チツ、逃げられたか。

中嶋と篠原はそんなオレ達に言い出す。

「ちよっ、いきなり何してるの!？」

「敵だ。害虫だ。ぶつ殺せ。それ以外何がある？」

「意味わかんないですけど!」

説明している暇はない。とにかく神条という害悪をぶち殺したいオレは手元に『神器』を召喚し、床を蹴る。

その身体に斬り込もうとしたが、回避される。超能力ではなく、今度は斑模様に紅く輝く目だった。

「写輪眼で見えてるぜ!」

「チツ、易々と避けられるのが腹立つな」

「ふん、そもそもモブごときが俺様に当てようなど片腹痛いんだよ!」

そう言っつて印を結び、地面に手をつける。その瞬間あと、オレの足場が崩れて身体が落ちていく。それだけでなく、今度はさやかや鈴木まで落ちていく。

「お前……!」

「分断させてもらうぜ。お前にはまだ地獄を見てもらわなきゃならねえからな」

落ちていく中、高笑いする神条に中指を立てておいた。

次会ったら絶対殺る。

最下層に落下したが、オレとさやかは着地したことにより無事だ。鈴木はさやかによつてお姫様抱っこされているが、女の子同士の王子様ごっこなんて誰得……あ、まどかとほむらか。

あいつら百合だからイチャイチャしそうだよホント。オレとさやかは天へ見上げる。

「地下っほいなあ」

「地下だけに千香がいそうね」

「オイやめろ。この場面で言うオシャレじゃなくてフラグだぞ」

こういうシリアスな場面ほどイロモノが発生しやすい。ソースはノエル自身なのだから間違いない。

だってホントに真剣なときに現れて周りを混乱させたのだから。

「はーはっはっはっはっはっ！」

「な、何かいる!?!」

「……………」

「なんで無言になるの!?!」

「いやなんか千香の声じゃないけど、変な女の子が来る予感が」

「どんな予感なの!?!」

目を覚ました鈴木さんがツツコむ。いやだってこういうときに高笑いする女の子って変なヤツしかいないじゃん。

オレとさやかか鈴木さんの前に立ち、守りを固めていると、バツとそいつは現れた。

髪は水色。さやかと同じヘアカラーだが、髪型はツインテール。

というか、フェイトだった。フェイトが髪の色を変えて現れた。

「ぼく参上! さあ、敵はどこだ!」

「フェイト…………お前遂に壊れたか」

「ぼくはオリジナルじゃないぞ! 力のマテリアル『レヴィ・ザ・スラッシュャー』だ!」

またマテリアルか。どうも変なのがここに混じってるようだなあ。というか、なんでこいつがここにいいのか聞いてみる。

すると、

「壁をぶち抜いたら、床までぶち抜いちゃった!」

「アホだ。アホの子がいる。やはり青髪アホの子説があるのか?」

「青髪の子を全員アホの子にしてんじゃないわよ! 失礼しちゃうわね」

いやお前が言うなよ。そうジト目で見ると首を傾げられた。はあ、とにかくどうやって上へ上がろうか…………。

「幽霊達と離ればなれなったしなあ。せつかく良い手駒が使えると思っただのに」

「あんたのそういう部分がたまに恐ろしいわ」

「誉めるなよ。いじめたくなっちゃうだろ」

「どういうことよ!?!」

最近、いじる楽しみがわかってきた。師匠の気持ちを共有できたのはうれしい限りだ。

そういうことを言うと鈴木さんは「お師匠さん、DS?」って聞かれたので頷いた。

なんとも言えない顔をされたのが解せぬ。

それはさておき、レヴィを連れて上へ上がる階段を探すことになった。

そもそも階段があるのかどうかわからないが、とりあえず合流するために目指すのだった。

(杏子 side)

神条がソラを落とした後、ヤツはアタシに攻撃を仕掛けてきた。ヤツの目にはチャームがあるとソラは言っていたため、とにかく目を合わさず、戦う。

払って、突いて、がら空きになったところを拳で殴る。顔面へとらえたら、左足を軸にして、身体を回すように力一杯飛ばす。

「オルア!!」

「ぐぎっ!」

手応えあり。後方へ飛んだ神条へ槍を投擲する。ヤツは手から盾らしきもので出して、アタシの槍を弾く。

「まさか防がれるなんてな」

「どうだ? 我が嫁にならぬか杏子よ」

「お断りだね。人の知り合いを簡単に殺すヤツとなんかと結婚したくなーよ」

「そうか。まだ神威に洗脳されているのだな? 安心しろ……今救っ

「やる！」

何を勘違いしているのか知らないが、とりあえず接近してきたヤツに足場から槍を生やした。

身体にヒットしなかったが、手足を突き刺すことに成功し、ヤツは苦悶の声をあげる。

「とどめだ！」

アタシは床を蹴り、一本突きを神条の身体に当てようとした。貫くはずの槍は——謎の黒い壁によって弾かれ、アタシを後方へ飛ばす。

『そうはさせないわ。彼にはまだまだ動いてもらうもの』

「っ、テメーは！」

黒い壁が消えた瞬間、神条はいなかった。逃げられたか……。

息を吐いて、一息ついたアタシは後ろに振り返るとそこには中嶋と篠原が抱き合っていた。

「……こんなところでキマシタワーするなよ」

「してないわよ！ 震えてただけだもん！」

「わたしは一向に構わん!!」

「何その男らしいセリフ!? って、どこ触ってるのよ世以子！」

篠原が中嶋にセクハラしているのを呆れながら、アタシはどうやってここからソラと合流しようか考えるのだった。

第四十五話 ●●●に冥土服Ⅱ視界の暴力

(??side)

ゾンビ男と一緒に千香もぶっ飛ばされ、良樹とあゆみははやてと衛、結衣と一緒にになって彼女を捜していた。

壁をぶち抜いてどこに行つたのかは定かではないが、とにかくぶち抜いた壁から行こうとしたら、その壁が謎の再生力をもって復元されてしまった。

こうなればもう地力で捜すしかなかった。

「それにしても壁つてぶち抜かれるものだったかしら……」

「穴戸さん、それは衛くんやからや。普通はぶち抜けへんし、したら最早人間じゃなくなるわ」

「いやそもそも鉄パイプでぶん殴られていても平然としていた天ヶ瀬も天ヶ瀬なんだが……」

良樹の言葉にあゆみも頷く。はやては「変態やから」としか言いようがなく、とにかく思考を千香捜索に切り替える。

あの変態のことだ。どうせ、周りに迷惑をかけているに違いない。そう思って歩いていると、女の悲鳴が廊下に響いた。

「な、なんだあ!?!」

「絹を裂くようなこの悲鳴は……!」

「誰かが襲われているな。ふむ、ならばこのマッスルたるこの我が行こう!! 見よこの脚力を!」

「なんやろ。これ、千香ちゃんが行ってそうや」

否定はできないと誰もが思った。千香という少女はノエルという、見境なしに美少女にセクハラする変態の弟子である。犯人は千香じゃねと思うのは当然である。

女の悲鳴が聞こえた教室まで行き、そこにいたのはおさげの少女とピンクのロングの少女がいた――

——メイド服の格好で

「なんでやねん！　なんでここに堕天使エロメイドの衣装があんねん！」

「つーか、知り合いじゃなかったのがホツとした。これで中嶋だったら、中嶋が自殺しそうだぜ……」

「た、確かにこの格好だと……」

堕天使エロメイドの格好になった二人の姉妹、アミタとキリエが目覚めるまで介抱していると、掃除に使う道具入ってる縦長のロッカーがガタガタ揺れた。

全員は何事……と思ったその数秒後、バーンツとロッカーが開いて現れたのはゾンビ男である。

彼の名前をここで紹介するとヨシカズである。そんなヨシカズの先ほどの服装はどんなだったと言えば、緑の上着と赤いシャツだった。

だが、今は違う。彼の格好ははつきり言って男性がしてはいけない服装だった。

ナイロンの生地で、太い脚が見える。肌が露出しているのは、手足。

そう彼の服装の名前は——

「スクール水着イイイイイ！」（良樹）

「きやあアアアア！　なんで、しかも女の子のスクール水着なのオオオオ！」（結衣）

「おまけに猫耳カチュウシャーって……。変態や！　変態がおったでエエエエ！」（はやて）

「……………」（気分が悪そうなあゆみ）

「ウアア……♪」（照れている）

「『照れるな（や）!!』」

いろんな意味で最強の組み合わせである。オッサンにスク水（旧式）は視界の暴力だった。

良樹達が逃げ出すと、ヨシカズはホラー映画よろしくとばかりに釘バットを用意して追いかけてきた。

「どんなホラーやねん！ こんな絶叫系アトラクションやったら泣くで。ホンマに！」

「てか、誰だよ！ アイツにスク水着せた馬鹿は！ 視界の暴力じゃねえか！」

ツツコミ属性達はヨシカズの服装を指摘する。

「あの、大丈夫ですか。お二人さん……」

「だ、大丈夫じゃないかも……」

「なんなんですかあ。あの白髪の少女……。人間じゃない私達をも越えて、音速で着替えさせるなんてえ……」

（……気にしちや駄目よあゆみ。気にしたら負けだから！）

愚痴る姉妹に、現実逃避するあゆみ。

「ぬ？ なぜ我まで逃げているのだ。こういうときこそ、戦うときだろう」

「て、天道くん！ あなたって人は……！」

「そうと決まればヤツと同じ土俵に立てねばならぬ！ 穴戸教諭。旧式のスク水はあるか！」

「あなたまでそうなっちゃ駄目よ!？」

新たな視界の暴力を阻止する結衣。そんな彼ら彼女達がとある赤い服の少女の横を通りすぎる。それを見た少女——サチコは眩く。

『……なにがあったの?』

「美少女みーつけ!!」

『ゲッ』

「ヌフフフ、逃がさぬぞガール！　今こそお持ち帰りイイイイだ！」
『たすけてお母さんッ！』

サチコはノエルから逃げた。彼女の身体を乗っ取ろうとしても、ポルターガイストで物理的に殺ろうとしても全てが無駄に終わる。

むしろより興奮して変態力を高めてくるため、サチコはもう逃げるしかなかった。

「さあ、君もあのJKのようにお着替えしようぜ！」

『来るな近づくな寄ってくるなアアアア！』

ちなみにノエルがイロイロした女子高生は友人と一緒に帰された
(笑)。

サチコの受難はまだまだ続く。そんなサチコが変態に襲われている一方、

『あら、なかなか美味いわ。この紅茶』

「ふふ、奥様に誉められて光栄だわ」

『フフ、それじゃあ、続きを聞かせて。そのソラという弟のお話を』

「あらあら、それを話すならサチコちゃんのお話も聞きたいわ。お話していただきませんか？」

『そうね。じゃあお話の続きをしましょ♪』

と透けた身体の女性がテーブルにティーカップを置くと、哲志と朔太郎は言い出す。

「なんでナチュラルに幽霊とお茶してるの、この人!？」

「おちや、おいしいねー♪」

ママとお話しているのはサチコの母親である。

なんでこうなったのか。誰もが思う状況である。

物語がソラとノエルによって——いや、『神器使い』達によって混沌へ導かれている一方、クリーム色の少女が十字架に張り付けられてい

た。

神条はニヤリと笑い、悪魔はクスクスと笑っていた。

『そろそろ、終わりを始めましょう……システムUDさん？』

十字架に張り付けられていた少女の瞼が上がる。その瞳は紅くあつたものから、黒く濁った生氣のない目をしていた。

——混沌の物語は、終わりに近づく……

第四十六話 ネコネコにやんにやん団

地下の部屋は頭蓋骨で埋め尽くされた一般人からすれば、絶叫モノだった。まあ、お構い無く踏んで碎いていくオレ達はなんともキチガイであるが。

ちなみに鈴木さんは最初にこれを認識したとき、また失神した。メンタルがなんと弱いことだ。

そんな鈴木さんをさやかが背負って、オレ達三人が歩き回っていると、やっと上へ繋がる階段を見つけた。

フリップボードにご丁寧に『うえへのかいだん』と書かれていた。『いろんな意味でツツコミたいんだけど』

「あたしもよ。これ書いたの絶対『ク●ヨンし●ちゃん』を知ってる子よ」

「いや、なんで『●レヨンし●ちゃん』出てくるんだよ」

「あの原作漫画の一桁代ではこういうネタがあったからよ。『ここが桃源郷』って書かれているネタが」

「……ツツコミでその看板とか破壊してる大人がいそうだな」

確かにこれを見たら破壊しそうになった。拍子抜けにすんじやねえよ！って言う衝動に駆られてしまうな、これ。

そんなオレ達は階段を上がり、上に行くとそこにはオレ達の見覚えのある廊下だった。

「戻ってきたなあ」

「うーん。でも杏子とはぐれたしなあ」

「仕方ねえよ。そこは後々、捜すとして」

「うわああああ!!」

誰かの悲鳴が聞こえた。声からして小さな男の子だろう。その悲鳴に鈴木さんが起きた。

「な、何？」

「間違いない。これはロッカーの中にGがいたな」

「違うわよ。きつとヤンデレストーカーの髪の毛が入っていたのよ」

「さやかちゃんの言ってることは絶対違うと思う！」

ヤンデレというヒロインがこの世界にいたのだろうか……。

いるとすればほむらと千香しか思い当たらない。だってたまに怖いこと言うもんだもの。

「よし、とりあえずスルーするか」

『『とりあえず』で無視するの!?! 助けに行かないの!?!』

「いやだって助けに行つたところで今からだと手遅れだろ。今、行けば確実にグロシーンが待ち受けている」

「なぜか説得力ある……!?!」

ホラーゲームお決まりだろ。と、グチグチ言っているとドタドタとこちらに誰かが向かってきている。

暗闇から現れたのは五木雷斗——とそうなじに噛みつく月村が現れた。

「むちゅ、ぺちや……オイシイ」

「どうしたの月村さん? どうして俺に噛みつくの!」

「雷斗くんが悪いもん。かすり傷からこんな美味しそうな血の匂いを出されたら……ああ、甘美で爽やかなハーモニー……」

「いやああアアアア! チューチューしないでエエエエエ!」

……なんかヤバイ描写だった。特に月村が妖艶で危ない。これが月村家の血筋なのか!?

「いや、どういう血筋なのよ」

「メイドさん曰く、五戦も戦えるほどアッチが強いらしい。だてに『夜』の名前って言われてないな」

「恭也さんの愛の結晶が早い段階でできそうだね」

確かに。もうなんか結婚して早い段階に子どもできそうな気がしてきた。

「てか、カミングアウトしていいのそれ」

「愚痴っていたから話を聞いたただだからセーフのはず。はっ。もし

かするとこれをネタにいじれるのでは？ よし、桃子さんに伝えるとしよう」

「一番伝えちゃいけない人でしょ！ というか息子の夜の事情を母親に知られるだけでどんだけダメージ喰らうと思ってるの！」

「オレの愉悦のためだ。わかってくれ」

「こいつ、最低だ！」

最低だと？ 何を今さら。オレにとって最低という罵倒など誉め言葉にしかない。

雷斗は泣きながら、チューチューと吸われている。月村はなんか恍惚とした顔になってるし……。

「どうかいい加減に落ち着け発情猫」

「あいた！ あ、神威くん」

チョップを入れてやるとやつと落ち着いてくれた。雷斗は涙目でオレの背中に隠れてしまった。

「ご、ごめんね。どうしても抑えきれなくて……」

「うう……変態モードになった姉さんを思い出してしまったよお。顔を舐められたり、お尻を撫でられたり……うう！」

「あ。これある意味トラウマになってるな」

泣くほど絡まれたのか、セクハラされたのかは定かではないがその変態モードのお姉さんは間違いなくノエルと同類じゃないだろうか……？

「そういえばシュテルちゃんはどこに行っただのかな」

「ミシユラン？」

「三ツ星じゃないから。シュテルちゃんって言うのはね」

月村が指をさす。そこにいたのはこの現代ではあまり見かけなくなった昔の学校の産物——人体模型である。

妙にリアルで肉の音がする。

「あれがシュテルだと？ シュテルって人体模型なのか？」

「違うよ!? なのはちゃんに似た女の子だよ！」

「そっだよ！ シュテルんはいざとなったらパンツを脱ぐ子なんだから、あんなに皮まで脱がないよ！」

「ちよつと待って！ それホントなの!？」

まさかのシユテルの『パンツ 履かない』宣言に、月村はツツコむ。オイ、何があつてそうなんだ……。

「なんか、エメラルドの髪の毛をした女性からもらった魔力でそうなつたって……」

「犯人はヤツか!」

魔力でも影響を与えるとはどれだけスゴいんだあの変態。人体模型がこちらに向かつて動き出した。

どうする……。戦うのは良いがここには三人の一般人がいるしなあ。

まあ即効無効ににできるが、はてさてどうするか。

「ウボア……アア……」

「なあ、あの人体模型から声が聞こえたよな?」

「いやどちらかと言えば壁から——」

その刹那、壁からスク水を着たオツサンが突き抜けて、人体模型ごとぶつ飛んでいった。

「エヴァ初号機!？」

「シンジくん!」

「何言ってるの!？」

「いや、ノリで」

オレとさやかかそう言うと、衛とはやてが突き破った壁から現れた。

「ふうふう……手強い敵だった」

「衛くんでも手こずるなんて……」

「やはりスク水パワーはスゴい。はやて、次回から我も」

「やめて。真面目に言ってるのはわかるけど、やめて」

はやては筋肉だけでも辛いのにさらなる変態を加えることが、耐えられないようだ。

まあ、衛もはやてに従っているようだし、問題ないだろう。

「というか、なんだそのメイド姉妹は。新手の変態か?」

「誰が変態だ(ですか)!!」

姉妹にツッコまれたが、オレから見てもただのコスプレ姉妹しか見えないのだけど。

そんなこんなでエクザエル————じゃなかったエクザミアを求めて三千里なギアーズ姉妹を含めて一緒に行動していた。

ぶっちゃけ、エクザミアとか言うわけのわからないモノはいらないし、それでここを滅ぼすことになろうと自分達のいる世界はなんともないからモーマンタイである。

「ドライね。あなたは……」

「いちいち、構っててこちらが大変なことになるからな。まず、自分に余裕があつてから他人を助けようと考えろと師匠に言われてた」

「まあ、確かに……」

「後、助けたヤツの良心を利用して手駒にしろとも言われた」

「絶対あなたの師匠、黒いって言われますよ！」

「え、俺って黒いの？ 月村さん」

「髪の毛は」

なぜか雷斗が反応したのはか予想外。こやつはホントに何者だろうか……。

とまあ、そうこうしているうちに保健室にやってきた。千香がいるとすればここが怪しい……。

「いやどうしてここなの？」

「キリエ。ヤツは変態だ。常にいかかわしい方向へ持つていこうとする」

「なんでそう考えるのよ」

「付き合いの経験から。後、ベッドの下から保険医系のエロ本が見つかった」

「男子中学生か！」

あいつの頭の中身は常にエロと萌えと混沌しかないと思う。オレ

はキリエのツツコミに気にせず、スライド式の扉を開ける。

そこにいたのはママさんと幽霊の女性がお茶しているところと、尻を抑えている男子高校生二人にツンツンするオレより二歳年下の少女がいた。

「何やってるの?」

「あら、ソラくん。紹介するわ。この方はヨシエさん。サチコちゃんのお母様よ」

『こんばんわ』

「こんばんわ——つて幽霊にナチュラルに挨拶されたのは初めてなんだけど」

「安心してソラ。あたしもよ」

「というか、どうして普通にできるの!?!」

「いちいち、驚いてたら疲れるだろ」

驚きの連続が過去にもあったし。それからオレはヨシエさんにサチコを助けてほしいと言われた。

まあ、なんか雰囲気やババい幼女だったし、何より彼女をなんとかしない限りここから出られそうにないみたいだ。

「杏子とも合流しないなあ」

「王様もいるかな?」

「さあ? でも一緒じゃね。とりあえずさやか。お前はここで見張りしておいて。オレとママさんは杏子を捜しに行く」

「ええー。なんであたしが」

「丁度、うまい棒がポケットの中に」

「任せなさい! このさやかちゃんがこの人達を守ってみせる!」

食べ物に吊られるとはチョロいぞ、さやか。

「お、俺も行っていいか? 直美を捜さなきゃ」

「なら、俺も」

「OK。男子のみついてこい。ただし朔太郎、テメーは駄目だ。眼鏡が割れたらお前の九割は死ぬ」

「俺の九割は眼鏡じゃない!」

「後、男子のみチョイスしたのはママるのは野郎だったらモーマンタ

イだから」

「オイ」

ジト目で見られたが気にしない。だって顔からパツクンチョなシーンはサチコの誕生日のときにしてほしい。

「……そういえばサチコって何歳だろ？」

『確か九歳だったわ』

「ということは逆算するとヨシえさんは三十路前後——」

オレの真横に包丁が飛んで行き、壁に突き刺さる。ヨシえさんはニツコリ微笑んでおり。

『何か？』

「イイエ。ヨシえさんは永遠の十七歳」

十七歳をチヨイスしたのは間違いではないことは、彼女がうむうむと頷いたことで証明された。

さてメンバーはオレ、マミさん、レヴィ、シユテル、衛、はやて、持田、岸沼という集団になった。王様とやらを捜しに彼女達とも同行するようになったが、王様とはどうやらディアーチェらしい。

はやてにディアーチェのことを聞かれたが、お前の厨二版と言ったらローキックされた。

ひどい。まあそうこうしているうちに体育館にやってきた。そこに待っていたのは不気味に笑う千香の姿だった。

「にゅふふ……来たね。勇者諸君」

「いや勇者じゃねえし、何ラスボスぶってるんだよお前」

「それはボクがここのボスだからさ！ いでよ。僕たち！」

千香の合図からスタッと降り立つ人影。杏子、ディアーチェ、中嶋、篠原だ。

……ただし、メイド服で。

「なんでメイド!? つーか、ケモミミ着いてる!？」

「にゅふふふ、ヨシカズくんはケモミミスク水を与えたのもボクさ!」
「予想してたけど、あれはないだろあれは!!」

岸沼がツッコむ。こやつ、千香のボケによくついてこれるな。

「というか片隅にヨシカズがいた。三角座りして『予備軍』というプレートを首にかけていた。」

「なんで選抜から外れてるの?」

「『ネコネコにやんにやん団』は萌えるキャラしか優遇されないのだ!」

「どうでもいいし、あんな格好させられたままはかわいすぎる!」

胸を張る変態にオレは先制のドロップキックを決める。直撃した千香は艶やかな声を出して壇上まで飛ばされる。

オレも壇上へ立つと、幕が降りる辺りから結界が張られた。

「さあ、始めようよソラ。ボクとのワルツを」

「……ヤベ、誘い込まれたか。マミさん!」

「わかってるわ! 持田くんと岸沼くんを守るわ」

一般人の守護を任せ、オレは千香と戦う。

『無血』と『混沌』。

かつての最凶達のワルツが始まった。

第四十七話 無血と混沌のワルツ

キインツ、ギインツ！

金属音が響く。火花が散る。

剣と盾。ぶつかり合う攻と防。それはオレと千香が作り出している。

オレの斬り上げた斬撃が、千香の作り出された半透明の球体の結界により防がれる。何度もこんな攻防を繰り返してばかり。

攻撃すれば防御されるというじり貧である。

「にゅふふふ！ 甘い甘い甘い！ まだまだもつとイケるよお！」

「……あれ。お前って黒い斑点あつたっけ？」

こう、ジーマシンなどのアレルギーのようなそういうものが出ている。ぶつちやけ、これが千香がオレを襲う原因ではないかと考えている。

「によほー！」

「ッ、あぶね」

ナイフが髪の毛数本を持っていく。身体を屈めて回避してから、足払いをかける。

千香はそれを軽くジャンプして避けたが、足払いからオレは彼女の身体にエルボーを決める。

肺から息を吐き出し、飛ばされた千香へ追撃の一突き。しかし、それは千香の『神器』——半透明の結界によって防がれた。

「君の『神器』の対象は常に一つだからねえ。ボクを狙おうとした結果さ」

「わかってるって。なら、」

止められた『神器』をそのまま押し込む。すると鍵が開けられた音と共に、千香の『神器』は砕け散る。

対象を千香から『神器』へ変えれば、キャンセルできる。

そしてそれを待っていたのか既に千香はナイフを振りかぶっている。

た。オレはその場を後退することで、その剣線から回避した。

「にゅふふふ……甘いよ。ボクの『神器』は常に絶対防御。つまり、攻撃は通らないよ」

「攻撃手段がカウンターのみくせに生意気な」

「そのカウンターに苦戦している君は何かなあ？」

なんかこのおちよくる千香が腹立つな。まあ、千香に通常攻撃——いわゆるセオリー通りやありきたりなものもは全て防がれる。

それはわかってる。けどな。

「オレがただ攻撃していただけと思ってるのか？」

「？ トランプでも仕掛けたのかい？ でもその仕草はしてないし、何よりここで君が召喚できるのは『神器』のみのはずだよな？」

「まあな。何度も召喚しても喚び出されないわで困った困った。……だけどな。召喚する必要は最初からねえよ」

オレが視線を向けたのは、杏子と戦っているマミさん。そして杏子は今まさにリボンで拘束された。

千香はオレの思惑に気づいたときには発動していた。

——『コネクト団結せよ』。その一言でオレと杏子の魔力が繋がり、ラインができた。

繋がったことによりオレの髪の毛が赤くなり、剣も槍状へとシフトする。変わらないのは青い瞳のみ。

千香が口に出したのは問いただった。

「それは……？」

『シンクロ』って言う魔法。『コネクト団結せよ』することで、繋がった魔力を分析し、再現する——つまり、その人物になりきる魔法さ」

もつともその魔力が尽きたとき解除されるし、肉体に負担がかかる。そのため、子どもの身体でやれば翌日、筋肉痛だろう。

しかしそれは長期的、であつたらならば……だ。

『ロツソ・ファンタズマ』

「ッ、杏子の幻惑魔法!？」

分身で一斉に斬りかかる。絶対防御だから安心というわけではない。なぜならこの全ての分身達が『解錠』が使えるのだ。

つまり、キャンセルできる対象が複数になった。これはもはやチートレベルだ。

千香の余裕の笑みが消え、焦燥した表情になる。遂に防御壁が砕け散り、オレは蹴り込む。そして飛ばされた千香を分身達が上へ突き上げてから連撃。

とどめに地へ叩きつける。

「にゅはは……やっぱり、ソラはつよ、いやあ………」

「当然だ。オレはもう負けないって誓ってるからだ」

背負うものが違う。そう言つてオレは千香に巢食うナニ力を払つて、引きずつてみんなと合流する。

「……扱いひどくない？」

「なら、こいつの顔を見てみるよ。まるで快樂にやられた変態のようだぜ」

「いや、事実変態だろうが」

岸沼がツッコむ。そして持田に縛られた中嶋の様子が………言うまでもない。

既に（千香ハザードに）やられていたようだ。

「サトシい……もつと。もつとー！」

「どうしたの!? 直美らしくないよ!」

「諦める吉井明久。お前は淫乱と巨乳に食われる運命なのだ」

「吉井明久って誰!? 何やら一緒にされたくない名前なだけど!」

「馬鹿の代名詞なモナー」

「謝れ! 全国の吉井明久くんに謝れ!」

やかましい。天の声からほう言えつて言つてたんだよ。

どうでもいいけど、なんかそいつの名前を聞いていたら言い様のない悔しさがあるのだが……。女難関係ではないのは確かだが。

全員を大人しくさせることに成功したオレ達だったが、どこからかヤツの声が聞こえた。

「オイオイ。もう終わったのかよ」

「神条……どこにいやがる」

「焦るな。今案内してやるぜ」

突如、オレとマミさんの足元から転移魔法陣が現れ、それに吸い込まれる。たどり着いたのは、どこかの玉座の間でそこには神条が玉座に腰かけていた。

「ようこそ。俺様の城へ」

「王様のつもりか？ ふざけてるのか？」

「ふざけてなどおらぬ。今の俺様はまさしく英雄王の力を完全に取り込み、手にした王。モブごときが頭ずが高いぞ」

「あいにくオレは王とか帝とか頭こっぺを垂れないのでな」

『神器』を向けて鋭い視線を向ける。いい加減、こいつの茶番には付き合い切れない。

「くくく、ならば我がしもべを呼ぼうではないか。来い、システムU D」

UDと呼ばれていたのはクリーム色のヘアカラーした少女だ。ゆったり系の少女に見えそうだが無表情で、機械的な印象がある。

「俺様が直々に洗脳した道具だ。どうだ？ スゴい魔力だろ」

「最低……」

マミさんが毒づくとき少女の身体から突風が吹く。……どうやら魔力を出していたとき生じた風のようなだ。

永久的に生み出す魔力炉が彼女の中にあるようだ。

「くくく、神威。貴様を殺し、我が嫁であるまどか達の目を覚ましてみせる。この俺様のくちび——」

「マミさん。魔力貸して。ちよつとがんばりたいから」

「はーいっ。チュッ♪」

マミさんが頬に口づけるとオレの中に魔力が流れる。それからオレは地に手を向けていると神条が苛立っていた。

「貴様！ 人の話を聞け！」

「え、やだ。だってお前の話なげーし、ぶつちやけどうでもいい」
なので、と続けて言う。

「とつと終わらせる。夕方六時から始まる『機動戦士ガンダムダブルオー』を見たいから」

「トランザムってかっこいいわねえ♪ こう、掛け声もいいし」

「千香も似たようなものができろぞ。『キャスト☆オフ!!』って」

「それは別の意味で諸刃の強化よ」

とか言いながら召喚陣を次々に出す。神条は激昂して、剣を投擲してきた。

それを召喚したヤツを使って防ぐ。

「にやあアアアア!? 剣が、剣が!」

「オラ、とっと防げ。盾」

「この人でなし!」

高町が張った魔法壁のおかげでそれは弾かれ、クルクル回転してから地に突き刺さった。神条は目を丸くしながら高町を見ていたが、それだけではない。

同じく高町といったフェイト。

体育館にいた衛とはやて。

同じく一緒にいたマテリアルズ（一名メイド服）

まあ残されたメンバーはママさんが保健室に戻るように指示した
ことだし、当分は大丈夫だろう。

「さあ、最後のお祭り騒ぎだ」

「ハロウインの始まりよ♪」

トリック・オア・トリート。

ママさんが言う『さつさと消えないとぶちのめすわよ?』という
意味になりそうだ。

第四十八話 化け物な戦士

地を蹴る。ただ目の前の敵を葬るために。

神条の背後から黄金の穴から剣やら槍が飛んでくる。『神器』で弾きながら前へ進むことに集中するが、どうやら神条はオレに集中放火し出した。

前へ進みにくくなった。すると、マミさんが銃撃で剣を撃ち抜いて、弾く。

「私がサポートするわ。ソラくんは前へ進むことに集中して！」

マミさんの言葉に頷いて答えて、オレはより神条の近くまで進み続ける。神条は舌打ちをして、穴から立派な剣を引き抜き、斬りかかる。

「モブの分際で！」

「モブごときがうるさい」

「なんだと！」

「お前の言葉をそっくりそのまま返したただけだ。何か文句あるのか？」

金属同士のぶつかり合いで、火花が散る。黄金の穴から槍がこちらに向かって生えてきた。

それを滑らせ、線路が走る音が響く。受け流したオレはその力を利用して、遠心力を使った蹴りを神条の身体に与える。

「言われたらムカつくだろう？ 人の心を考えず、自分のことしか考えてない言葉だ。お前がいつも言ってることだ」

地面と平行して飛ぶ神条にそう言いながら、追撃するため地を蹴る。

神条は穴から鎖を飛び出させ、オレを拘束しようとする。

「事実だろうが！ 俺様は主人公だ。思い通りにならないヤツなんていない。消えてしまえばいい！」

「だからアインスを殺した？」

「ヤツは道具だ！ 俺様の言う通りにだけ動けばいい！」

鎖が絡まる腕。好機と見たのか、神条は次に足を縛ろうとする。オレは腕に絡まった鎖をキャンセルして、自由にしてから鎖を回避した。

「この世界はこの俺様が中心なのだ！ ゆえにモブがしやりしやり出て好き勝手に生きるんじゃないやねえ！」

自分中心が動く世界。それはまさに神様のような考えではなからうか？

傲慢で自分勝手。

気に入らなければ無茶苦茶にする。

つまらなければ面白おかしくする。

飽きたら何もかも壊す。

自分中心とはまさにこのことだ。そしてそれを無くすルールがある。

何者かの赴くままに無茶苦茶されることを嫌うゆえに世界は『抑止の存在』を作り出したのではなからうか。

まあそれはさておき、オレはただ神条の言葉を聞いて返した答えは

——「くだらない」。まさにその一言である。

「お前。人生をなんだと思つてやがる！」

神条の顔を殴る。

「たった一つの生涯だから、たった一つの生きざまだから、それを満足にして終わらせようとしているだろうが！」

神条の腕を動けないようにする。

「そもそも『転生』自体が奇跡なんだ。『転生』して記憶を持つこと自体が最高の奇跡なんだ。それをお前は何をしている？ 他人の生涯に干渉して滅茶苦茶にしてるだけじゃねえか!!」

神条の身体に『神器』をさしこむ。

「そんな贅沢に、悪徳まみれたクズヤローが誰かを見下してんじやねえ。まず、その考えを改めてから生きやがれ!!」

『封印』してから蹴り飛ばす。神条はもはや立つことしか出来ない。それも弱々しく。

神条は憎悪を込めた目でオレを睨み付ける。オレは気にせずとど

めをさそうとしたとき、神条の背後にいた男に呆然とした。

「んなっ……!?!」

「なんだ? どうし——」

神条の言葉はそれで途切れる。ヤツは背後にいた男によって頭をザクロのように潰されたのだ。飛び散る赤い液体に、オレは背後にいる男とその隣にいる少女に言い出す。

「なんでお前がここに——サチコ」

『きひ、きひひひひひひひ!』

狂った笑みを浮かべ、ヨシカズをオレに襲わせる。神条と同じ結末を迎えさせようと、ヨシカズのこん棒が振るわれる。もちろん、それを回避し虚空を捉えられたヨシカズに向けて胴体を蹴る。

なんとも無さそうにヨシカズはジツと黒い目でオレを捉えていた。

「なんともないだど?」

おかしい。何かが。普段のオレなら今ので蹴り飛ばせるはずだ。

なのにヨシカズにはノーダメージだ。

おかしい。さつきから聞こえていた衛達の声が聞こえない。衛が戦っているところに目を向けると、そこには倒れた少年少女達。いやそれだけである敵であるシステムUDも倒れていた。

苦しそうに。辛そうに。

「な、何が……!?! つぁ……!?!」

息が詰まる。身体に激痛がはしる。

ようやく理解した。この世界はサチコによって作り出された異空間だ。つまり、この世界の主であるサチコが異物であるオレ達に何かをした。

バイ菌を殺す白血球のように。

(黒い、斑点……。またこれか……。!?!)

おそろく空気感染という形でオレ達に何かをした。そしてオレ達を生きさせないために、斑点が出てきた。

「くそ、……こんな、ところで」

視界が狭くなる。力が抜ける。痛みと息苦しさを最後にオレの意識は消えていった。

(??side)

サチコは狂った子どもだ。悪意と殺意の空間により狂気に支配された哀れな子ども。

サチコは狂喜しながら、これから目の前に倒れた少年をどうするか考えていた。

『ヨシカズ、コイツの皮を剥いで人体模型に——』

と言いかけたとき、ヨシカズの身体が弾けとんだ。どういう理由か普通の人間より頑丈にできてる身体が何者かによって弾け飛ばされた。

犯人はクルクル巻き毛の黄色の少女——マミである。

『おまえ、なんで……』

なんで立てる？

なんで起きてる？

この空間は今、サチコによつて常人では立てないほどの害悪の空気が渦巻いている。

つまり人がまともじゃない空間なのだ。なのに、なぜ友江マミは立っている？

異常だ。ありえない。信じられない。

サチコの生前あつた直感が彼女が普通ではないと感じさせていた。

「ふふ、ふふふふふふふふふふ♪」

『な、なんなんだおまえは！ わたしとおなじなのか!?!』

「失礼ねえ。わたしは『わたし』よ。サチコちゃん♪」

友江マミの背後に何かがある。透明な存在のそれはクスクスと笑いながら、マミの身体でクルクル回り始める。

「嫉妬、絶望、執着、苦渋、葛藤、狂気、嫌悪、憎悪——なかなか味のある世界だね」

少女は笑う。それはとても愉快に。

「卑屈、憤懣、遺憾、衝動、脅威、憂慮、失意、悪意——なかなか味のある過去だね」

少女は笑う。それはとても楽しく。

「疑心、焦燥、邪念、錯乱、妄挙、虚像、強迫観念」

「嗚咽、孤独、悲嘆、悔恨、懺悔、自嘲、選民意識」

「——なかなか面白い現象だねえ。サチコちゃんが起こしているわけでもない……か。元々何かしらのあった力が作用しているだね」少女達は笑う。マミだけでなく、システムUDも立ち、彼女達二人の後ろにはエメラルドヘアの女性が笑っていた。

『わたしとちがう……いやもつと嫌なナニカ……誰？ 誰だ。誰なんだおまえは!!』

サチコ以上の邪悪で狂った存在。

少女二人を操るその女性はサチコと違って、残忍でも冷酷でも最悪でもなかった。

最凶。

もつとも関わってはならない変態。

混沌を導く魔女。

ソラをもつとも心労に導き、千香をイロモノ化させた大馬鹿女。

「ノエルちゃん以外何者でもないのさ！」

『わけがわからないよ!』

全くその通りだ。しかしサチコにとって彼女はもつとも警戒すべき天敵なのだ。

なぜなら彼女は全てを台無しにする。

殺人。自殺。惨殺。

それらを導こうとしてもほんの一瞬で復活してケラケラと笑いながら霊体のサチコにセクハラをしてくるのだ。

何もかも思い通りにならない理不尽——それが子どもにとって最低最悪の悪夢なのだ。

「ヌフフフ、お母様からお主をどんな手を使ってでも止めろと言われているでござる。なのでワッチはこの幼女に子どもにはお見せできないことをするつもりなのよん」

『子どもには見せられないことって……わたしにひどいことするの？

エロ同人みたいに!』

「正解！ 具体的に言えば触手プレイ！」

指を鳴らすと憑依されていた二人の少女の身体が倒れ、透明だったノエルが具現化し、その足元からタコの触手が生えてきた。

「さあ、ヌルヌルのベトベトになってねー♪」

『ヒイ。おかあさん！ おかあさアアアアア！』

「ちなみにキミのママンもこれで籠落させたから」

『おかあさアアアアアん!?!』

その後、サチコがどうなったかと言うと——察してほしい。

それを最後にサチコの作り出した空間は消滅した。天神小学校から吐き出され、無事全員生還した。

生還した彼らの日常は弱冠変わったらしい。

まず直美がドMに目覚め、智志にもうアタック。結果、智志が変態となった直美によって軽い鬱になる。

良樹と言うと、真面目に生きていこうと決意する。怖いことがあったのもあるが、一番の原因が千香の変態性であるため。

彼は大学に進学して教師になるのが将来の夢だが、彼の道はやはり困難の嵐であることを追記しておく……。

具体的に何か？ それは変態やらキチガイやら超能力者に巻き込まれる運命らしい。

そんな彼の最近の癒しは篠崎あゆみに愚痴ることになる。彼女は比較的まともなので、まあ彼の心のオアシスになっていたりする。

……実は彼女の実家が一番まともではないのだが。

残りのメンバーはまあ、普通の生活に戻っている。誰も死なず、誰も失わない。

そんな結末だったのが、この世界だ。彼らに、彼女達に幸あれと願うばかりである。

「お、おかあさん……」

「どうしたの幸子？ とても泣きそうな顔をして」

「たこさんのゆめをみたの……。にゆるにゆるしてくるおんなのひとの……。うわあああああん！」

「……ホント彼女の前世に何があつたのかしら？」

転生した少女にトラウマをもたらしたが……。

第四十九話 エピローグと……

エピローグ的な話をすれば、ギアーズ姉妹と共にマテ子達がついていくことになった。

システムUDも改名して、ユーリと名乗るようになって、彼女達は未来の世界に帰った。

その際に記憶を消されるようだったが、なぜかオレだけ覚えていた。

そのことをギアーズ姉妹に問われたが、秘密と言っておいた。知ったところでどうにかなるものじゃないし、『神器』とか何かされたらたまったものじゃない。

そして季節は夏へと変わり、夏祭りへ参加することになった。

海鳴神社は社までの道のりが長い。そのため行く道には屋台が並木道のように並んでいた。

まだか達も浴衣に着替え、衛はフンドシーつの姿で出ようとしていたりする。はやてが止めたのは当然の話である。

みんなと共に屋台を回り、食べ物を堪能した後、ふと空を見上げる。綺麗な星空が広がる空だ。

(あのとき……サチコが作り出した空間は何者かによって消滅した)それが誰の仕業なのかはわからない。ただ知ったらなんとなく胃が痛くなりそうだ。

なんで胃が痛くなるのかは……わからないけどさ。

「ま、一応。一件落着だよな?」

「ソラくん、花火しよー!」

「わかったー!」

ベンチから降りて、みんなのところへ行くとき、一人の少女とすれ違

う。その少女は誰かとそっくりな笑みを浮かべて、

「気を付けて。まだパパの脅威は去ってないよ」

と、オレに言ったような気がする。振り返れば少女はいなかった。彼女が何者でなぜ『パパ』と呼んだのかはわからない。けれど、オレの胸騒ぎが治まりそうがなかった。

まあとりあえず、みんなとの花火に向かうのだった。その後、写真も撮ったが。

(??side)

このままではまずい。この世界がおかしくなっている。

天宮草太はそう考える。アインスと言いつ、リニスと言いつ、それぞれが原作にはない最期を迎えている。それはつまりなのは達もいずれ死ぬ可能性があるのではないかと考えている。

それは間違いではない。この世界はもう一つの現実だ。ゆえに彼女が命を落とさないとはい限らない。

だが、
(それじゃ駄目だ！　なのはが死ぬなんて、そんなの『リリカルなのは』じゃない！)

草太もまたこの世界が物語のモノだと考えていた。元から考えていた。

しかしたった一人の転生者によってこの物語はおかしくなった。

(俺が主人公なんだ。オリ主なんだ。だから、この物語を守らなければならぬ！)

『その覚悟はすばらしいわ』

彼の脳裏に聞こえたのは少女の声だ。妖しく危なく、そして蠱惑的な少女の声だ。

『私と契約しない？　そうすればあなたの望みは叶うわよ』

「お前は……！」

生田ミカを唆して狂わせた元凶。草太は彼女を殺したソラを許せないが、根元的に起こしたこの悪魔もまた憎む敵だった。

「誰がお前なんかと！」

『あら、復讐したくないの？ 全てを無茶苦茶にして混乱させる神威ソラに復讐したくないの？』

「っ、俺は……」

憎い。神威が憎い。許せない。ヤツのせいで誰かが悲しむ結果を
起こした。

だから――

『どうするのかしら？』

悪魔が手をさしの際は。それを草太は……――

夏祭りが終わっての始業式の夜。公園にて、一人の少年が重体で発見される。

彼の名前は五木雷斗。そしてこれがトリガーとなり、一人の独善者が世界のルールに、『抑止の存在』に、『叛逆』する。

第五十話 孤独になった少年

(??side)

その青年は荒野にて、一人戦っていた。血も汗も流さず、向かい来る敵を切り裂く。

その返り血は噴き出さず、敵は人形のように倒れる。

幾度の時が流れるごとに幾度の人を殺す。その数は増えていき、遂には血を流さない死体だらけとなった。

彼は悲しむ様子を見せてなかった。しかし目から涙を流してはいた。

能面の顔から雫を流していたのだ。

——ああ、また……まただ

彼は全てが終わった後に、一人の動かなくなった男の前に立つ。彼もまた戦友だった。共に戦ってくれた仲間だった。

なのに……。また彼は失った。大切な仲間を死なせてしまった。

彼は失ってばかりだ。

例えば女騎士。彼女は必死に彼の背中を追っていたが敵の策略で強姦された挙げ句、殺された。

例えば修業僧。強さを求め、彼の隣にいたが戦いを求めるあまりに裏切り、彼を殺した。

例えば今死んだ若い戦士。彼は必死に追い付こうとしていた。しかし、結局殺されて、敵の笑いの種にされた、

それに対して彼が怒らないわけがない。悲しまないわけがない。

ゆえに暴れた。泣いた。怒った。

その果てがこの惨状——血が噴き出さない肉体のみが残っている。

今もなお、泣いてる彼はまだ子どもだったからなのか、友達想いだったからか、もうそれはわからない。

ただ、彼は泣いていた。それだけが事実なのだ。

——こうして、彼はまた何かを失い、名を広めていく……

誰も救えない。

誰も救われない。

そんな悲しい少年の物語……。

(ソラside)

オレははやてが通っていた海鳴病院いた。今回は付き添いはなく、オレ一人がこの病院に来ていた。

その病室で包帯に巻かれ、人工呼吸器をつけて眠る少年がいた。

雷斗が昨夜に何者か襲われた。通り魔にやられたのだ。

傷は全身の切り傷で腹部のところには大きな切り傷が出来ていた。

もし発見が遅れていたら、手遅れになっていたかもしれない。

「誰がこんなことを……」

「さあね」

答えたのは看病している女性。オレの元担任教師だ。

「命があつてホツとしているよ。なんせ、ここでこの子が死んだらま

た狂ってたかもしれないから」

「まるでどこかの変態のようだな」

「失礼な。せめて淑女をつけてよ」

「変態は否定しろよ」

そこから先は言葉はなく、最低限のあいさつをしてオレは病院から出た。彼女のことをオレはよく知っている。

だからなのか、言葉がでなかつたかもな。

オレが家について扉を開ける——

——そのとき、オレの胸に激痛がはしり、世界に異変が起きた
苦しくなった心臓が治まり、膝についた身体を立たせる。何があつ
たんだ……。

そう思いながら、扉を開ける。

「ただいまー。雷斗はまあ、無事だったぞ」
……………。

返ってきたのは沈黙だった。

家にはまだか達がいるはずだ。用事があるとしたら書き置きくら
いしているはずだ。

なのに、誰もいない。

「まだかー？ ほむらー？」

二人の寝室に向かう。そこに目をしたのは二人の少女の姿だけで
なく……………その私物ですらなくなっていた。

タンスもベッドも小物の全てが。

「ツー」

おかしすぎる。急に無くなるなんて。

これではまるで誰もいなくなったかのようだ。オレは同じように
同居していたはずの少女達の部屋に向かう。

……………結果はまだか達と同じだった。誰もいなくなっていた。

彼女達がいたという証が。

そしてそれだけでもなかった。ふと目に入ったのはいつもお皿な
ど入れている棚だ。その上にはアルバムから出されたみんなとオレ
が写った夏祭りの集合写真だ。

その夏祭りの集合写真にはオレだけしか写ってなかったのだ。

「何が……………起きている」

この異常な事態にオレは呆然と立っていた。

翌朝、学校に向かった。彼女達がいらない登校は……あ、前にもあった。

前世を思い出す前とかだ。まあ、ああいう孤独な日常が久しぶりに訪れたというわけだ。

それから学校に着くと何やら人だかりができていた。

校門までワラワラと集まるほどの。オレは何事なのか、ひよっこり顔を出すとそこにはオリ主くとまどか達がいた。

「草太。あなたまたあの子達ばかり構って……」

「そうよ。もつとお姉ちゃんにも構いなさい」

「むむ。ボクを除け者にするなんて許さないよ！」

「あははは……なんか修羅場になってるのかも」

「相変わらずだろ」

……え。誰アレ。

まどかが小動物っぽいし、ほむらは普通に嫉妬してるし、ママさんは変わらないし、何より千香が変態じゃない!?

どういふことなのこれ!?

「駄目だ。わけがわかんねえ。なぜかオリ主くんも名前呼びだし、いつの間にか仲良くなってる……し。あれ……?」

何があった? ほんの一日。いや昨日で何があった。

おかしい。あまり仲良くない人間がこんな単純に、あっさりとテンプレにハーレム的なまどまりができるなんてあり得ない。

「とりあえず……聞いてみるか?」

オレは人だかりをかき分け、彼女達に話しかけることにした。すると、彼女達はオレを見るなり穏やかな雰囲気ではなくなった。

「何やってるのお前ら?」

「あなたには関係ないわ」

「あまり近寄らないでって言ったでしょ? さっさと私達の前から消えて」

ひどい言われようだな。オイ。というか、いきなりこれかよ。

「っーか、お前ら。なんでこいつと仲良くなってるの？ あんなに嫌っていたのに」

「はあ？ 何わけわかんねーこと言ってるんだよテメー」

「そうよ。どちらかと言えば、あなたのことを嫌ってるわ」

「どういうことだ」

ホントにどうしちまった。何もかも違和感だらけだ。

周りもオレに対して厳しい視線を向けている。ヘイトの強い視線を向けられている。

「さつきからなんなんだ。オレが何かした？」

「したわ。見ず知らずのあなたが私達のことを嫁だとか言ってる構ってくるし、家まで着いていこうとするわで迷惑しているのよ」

「おまけにパンツを盗んでクンカクンカしていたよ、君は」

「そこまでイタイことしてねえし、最後のはお前がしていそうなことだろ!!」

「失礼な！ それだとボクが変態じゃないか！」

「変態だろうが！」

「ひどい……！」と言って千香はママさんに泣きつく。だからなんなんだ、これは？

千香の変態性がないし、普通の女の子っぽくなってるし。

すると今まで黙っていたオリ主くんが口を開いた。

「さつきからなんなんだ神威。彼女達に迷惑かけた上に、千香を変態扱いするなんて最低だな」

「最低も何も……ああ、もういいや。別の意味で頭が痛い。何が起こっているのか、さっぱりだ」

「そうか。なら、謝れ」

「は？」

「千香に謝れって言ってるんだよ。土下座しろ」

「……こいつ何様？ なんでオレが謝らなきゃならないんだよ。オレは舌打ちして言う。」

「必要ないな。オレが悪いと思ったら謝るが、そうとは感じない。頭を下げるかよ」

「お前はホントに最低だな」

「最低？　はんっ。それは何度も言われてるよ。昔から、あの頃からずっとな」

最低なんて何千何万回も言われている。だからどうしたって話だ。

「そうか」と呟いてオリ主くんがデバイスを起動する。こんな周囲のある目で魔法を使う気なのか？

そう思いながら『神器』を召喚しようとした——が、手には何も握られていない。

どういふことだ……。確かにオレは召喚を。

と気をとられているうちにオリ主くんがデバイスとカギに似た剣でオレをぶっ飛ばした。身体は地を滑走させて、止まったときオレは目を見張る。

「なんで……なんでお前が」

オリ主くんが握っていたのは、そう。『オレの神器』全てを開く者だった。

その後、オレは誰からにも話しかけられることなく、屋上で一人過ごした。

あれからわかったことはまどか達がオリ主くんの家には同居しており、彼女達は彼に惚れ惚れしている。

おまけに『神器』だけでなく異名まで奪われていた。

——そう、ヤツは『無血の死神』と呼ばれている。管理局から全てを血を流さず終わらせるエリート戦士という意味を込められた異名だ。

「……ホント。どうなっている」

オレは踏み台転生者というポジションになっていた。噛ませ犬のテンプレ的なことを起こして、ボコボコにされて何度もオリ主くんに噛みついていてというそんな設定である。

……いや、学習してないよなそれ。めちやくちや頭が悪い設定というところがよくわかる。

衛やはやてまでオレに対して冷たくなっていた。どうやらオレが二人にひどいことをしたとなっていたようだ。

衛に話しかけようとしたら睨まれたし、肩をぶつけられた。態度が悪かったのも、後ではやての机にプロテインを仕込んでやった。

筋肉信者という誤解を招かれるはやて。オレの八つ当たりだコノヤロー。

「にしても、一人だなあ……」

悲しい気持ちはある。

辛いと思う心はある。

けれど出てきたのは涙ではなく、懐かしいと言える言葉だった。

オレはいつも一人……何度もそう考えてきたことがある。前世のオレは帰るべき居場所があったから、孤独と思えなかったが、今は一人ぼっち。

誰も、側にはいないんだ——戦争の頃のように。

(あいつが『無血』とか笑えるな。だつてあれは……)

いや、今は考えることじゃないな。とにかく、オレは全てを失い、居場所を奪われた。

それが明らか事実だ。放課後で一人、悩みながらオレが空を見上げてみると扉が開く。

そこに現れたのはオリ主くん。オレはヤツに呼ばれていたのだ。

「んで、オレに何のよう？ 一人で黄昏でたいんだけど」

「ああ。お前にやってほしいことがあつてな」

オリ主くんは『神器』を向けて言った。

「ここから去れ。俺達の元からいなくなれ」

「わけがわからないよ」

全くだ。なんでオレがここからいなくならなきゃならない。オレ

が呆れているとヤツは言う。

「お前がいるとこの物語がおかしくなる。また変なことが起きる前に消えろ」

「意味わかんないから却下。というか質問いいか？」

「断る。俺の言う通りにしろ。でないか——殺すぞ？」

「おー、こわっ。殺気が出るから一般人のオレはチビっちゃんいますわー。」

「はあ、もういいや。おどけた感じはもうやめて……と。」

「お前、その『神器』は誰から引き継いだ？」

「何を言っている。これは元から俺の」

「答えろ。それは誰のものだった？ あの時死んだ今、お前に特典を与えてくれるヤツはいない」

「オレがそう言うと言つては笑う。余裕のある笑みだ。」

「引き継いだ……か。確かにこの力はお前のモノだったな」

「認めるんだな、あっさり」と

「当たり前だ。それにこの力は俺にだからこそ、ふさわしい。そうだろう」

「そうとは思えないがな。その異名も」

「そうかな？ 俺がとても強いという英雄の証——そうだろう？」

それに対して、オレは嘆息を吐く。ホントに何もかも勘違いしているから呆れた。

「こいつの考える英雄像がなんと言つても間違いだらけだ。」

別に答えるつもりもないけど。

「くだらない話は終わりだ。もう帰る」

「なんだ。まだか達に対してなんとも思わないのかお前は？」

「お前が原因のくせにほざくな。『オレを知らないまどか達』なんて、仲間でもなんでもない」

冷たい話だが、そう割り切るしかない。限りなく近い存在——いわゆる平行世界の友人が友達だと言えないように、オレにとってそいつが知り合いでもなんでもない。

オレが望むの友人は『オレを覚えてくれている人間』しかない。

忘れてしまう人など、関わろうとしたくない。

かつて裏切りと利用ということでおレの心は普通ではなくなっている。ここは絶望するところなのだが、オレは気にしない。

オレはさつきとここから出ていくことにした。

まあ、当面はこの現状がどうやって起こしたのか、それをどうやって解決していくのか、考えていく。

味方のいないのは、おそらく戦争以来かもしれないな。

そう思うと自嘲した笑みが出てきた。

「そうか……なら」

オリ主くんが背後から斬りかかろうとしてきた。オレはただ横に逸らして避ける。そして、その顔に裏拳を与える。

顔を歪めてフェンスに激突したオリ主くんには追撃はせず、屋上から出ようとしたら扉が開いてまどか達が現れる。

「草太くん！」

「テメー、草太に何を——」

「黙れ。うざいんだよお前ら」

ドスの聞いた声で黙らせる。はつきり言っておレのことを覚えていないことは悲しいし、敵意を向けられるのも辛い気持ちはある。

けど、それよりもオレはこの『理不尽』にキレていた。

いくら忘れようが敵意を向けようが、オレを問答無用に『悪い』と決めつけられることが許されない。

オレは校舎へ入ると、後ろから敵意よりも驚愕しているまどか達の視線を受けながら、帰った。

第五十一話 だってあたしって馬鹿だから

帰り道。オレは一人ぼっちで帰っていた。

久しぶりの孤独の下校だ。まあ、何年も一人ぼっちだったから慣れている部分があるかもしれない。

「……はあ」

なぜ『神器』がオリ主くんに奪われたのか。

なぜオレの立ち位置が『踏み台』になったのか。

考えるべきことが多くある。まず女神に連絡しようと通話してみたが、ノイズによつて繋がらなかった。

確か、ある空間では前世でもまどかが携帯を繋げようとしたことがあったが、同じようにノイズによつて繋がらなかった。

よつてオレは推測したのが――

『魔女結界』

魔女のプライベートルームであり、胃袋。おそらくその結界と同じような空間にいるのではないかとオレは思った。

（『抑止の存在』が何も反応を示さないということは許される力を使つたからか？ こんな今まであったことをすり替えるようなことが）

今まであった『真実』がなかったことにされ、そして新しく作り出された『嘘』によつてすり替えられたということになる。

それはほむらの『叛逆』の力以来の概念干渉に違いない。

オレはふと路地裏に目を向ける。さつきから何者かがオレの後ろをつけている。

誰かは知らないが、とにかく誘い込むかと考える。

オレは路地裏に足を運ぶ。人の気配がなくなり、感じるのは三人の気配だ。『神器』が奪われたとは言え、今まで得た経験は奪われなかったようだ。

「……出ていこうよ」

オレの後ろには三人の女性管理局員。おそらくオリ主くんの刺客

だろう。

そいつらはデバイスを構えて、オレに向けていた。

「神威ソラだな」

「そうだけど？」

「隊長の命によりお前を排除する」

まとめ役らしき管理局員が魔力弾を放つ。跳躍したオレは壁に足をつける。魔力を使った忍者と同じ吸着術だ。

「お前らは何言ってるんだ？　こんなところで人殺しをしてなんとも思わないのか？」

「隊長の言葉は絶対だ。お前のような害虫を殺したところで何も思わない」

「ひどい女」

また弾がオレに飛んでくる。

それを回避することに壁を破壊する。破片が飛び交い、オレは三人の管理局員の視線を外さなかった。

武器がない。手にはランドセルしかない。さて、地面に落ちていたらしいのだが、その隙を与えないようにドンドン撃ってくる。

遂にはひとけのない広場まで出た。

三人の局員は勝ったと思わんばかりに笑う。そんなとき、剣が局員の前に突き刺さる。

サーベルだ。サーベルが三人の前に刺さっている。

その一瞬怯んだ隙に、サーベルを引き抜き、三人のうち二人を斬る。肺から息を出して二人は倒れ、まとめ役の局員がこちらにデバイスを向けてきた。

「貴様アアアアア！」

「遅い」

斬撃の嵐を局員に与える。手足を切り裂き、デバイスもバラバラにしてとどめに、「ヒイ」と言うまで目の前まで剣先を突きつける。

局員はブクブクと泡を吹いて倒れるのを確認してから、サーベルを突き刺してくれた少女に声をかける。

「そういえばお前つてまどか達と一緒にいなかったなあ。なんでだ

？」

「そりゃあ、オリ主くんといふあの子達がおかしいからよ」

「じゃあ、なんでお前はオレのことを覚えてる？ みんなが忘れてるのに」

彼女はいつものようにオレに話しかける。そして笑って話しかけてくれた。

「それはあたしが馬鹿だからよ」

答えになってねーよ、なあ—— さやか。

さやかに案内されて訪れたのは、どこかの建物だ。潰れた企業のビルで、そのオフィスには知らない少女と知ってる少女がいた。

「やあ、『無血の』」

「キアラ。お前も覚えて……」

「当たり前さ。あんな三流エリートが英雄など断じて認めない。わたしは貴様以外を『無血の』とは認めないのさ」

「どうやってオレのことを……？」

キアラが答えてくれたのは、彼女とさやかがどのようにしてオレを覚えてくれたのかということだ。

まず、彼女は世界に何かが起きたと感して違和感が感じた。そして仕事中にオリ主くんの資料を見て、違和感が確信へと変わったらしい。

『無血の』と呼ばれているのはオレだけなのに、オリ主くんは一応苗字呼びだったのだ。それによってオレのことを思い出した—— ということらしい。

どうやらこの違和感がオレを思い出させるキーパーソンのようだ。

「ちなみにさやかは？」

「え、普通に覚えてただけけど？ いきなりオリ主くんの家になって

荷物を持って飛び出したよ」

「お前、規格外過ぎないか!？」

「わたしもそう思うよ。世界改変をされても彼を覚えているとは……」

「いやあ、だってあたしってほむらが世界改変したときでも使命を忘れさせられたけど、アイツが敵だってことを覚えていたもん」

さやかは規格外さに全国の主人公もびつくりである。こいつって実はヒロインより主人公に向いてないか？

それよりも、だ。

「この白銀少女は誰だ？　なんかどつかで見たことあるんだけど」

先ほどから立ちながら居眠りしているこの少女のことをいい加減に聞きたかった。

鼻提灯が割れて、目を開けた少女はオレと視線を交わして、ガバツと飛びかかってきた。

いきなりの不意打ちにオレは避けることができず、彼女に押し倒された。

「なんだなんだあ!?!　いきなり何してんだお前!」

「パパだ〜♪」

パパだと!?!　え、パパって誰なの!?!

さやかとキアラの視線が交差すると、そんなオレの疑問に答えるかのように全員にオレに人指し指を向けられた。

「ちよつと待て。オレは前世も今も子作りしてねえぞ!?!」

「安心したまえ。彼女はわたしとキミの未来の娘だ」

「違うわよ。この子は超絶美少女であるさやかちゃんの愛娘よ」

「不毛な喧嘩するなよ!」

バチバチと火花を散らして睨み合う二人にオレは制止を促す。こんなところで争っている場合じゃねえだろ。

それにしてもこの子がまさかオレの未来の娘とは……。

歳はオレと同じくらい。

白銀の髪の毛に、ゆつたりとした目付き。華奢のように見えて実はしつかりと年相応な肉付きがある。

そして瞳がオレと似ている。オレの深海の色に対して、彼女の場合、スカイブルーという色がしっくりくる。

「いったい誰との子だ？」

「にゅふふふ……秘密だよ。ああ、幼き頃のパパの匂いだあ……♪
クンカクンカして、ペロペロして、チュパチュパしていい？」

「判明した。お前、変態だろ。あと、離れる変態」

「変態とは失礼な。ぼくはその後ろに淑女をつけてよ！　もしくはマダムでも可ー！」

「どのみち変態じゃねえか!!」

あいつだ。あいつしかいねえ……。

まどかの場合ならば、(外も中身も) 頭はピンクだし。

ほむらの場合ならば、オドオドした感じがありそうだ。

よってこいつはオレと千香の娘になるだろう。確信ではないが。

「というキアラお母さんもさやかお母さんもケンカしてないで一緒に、パパのパンツをクンカクンカしようよー！」

「匂いフェチではないが……よかろう。娘の頼みであればやってみせよう」

「いや、するなよ！　そして気づけよ。これは『変態の罠』だつてことを！」

「うるさい。今まで決して登場できなかった鬱憤でもなければ、リメイク版ではヒロインですらなれなかった怨みでは決してないぞ。これは娘との交友を深めるための儀式——そう親子愛なのだ!!」

「どこがだよー！」

父親のパンツをクンカクンカする親子愛あつてたまるか！　それとメタい私怨が理由だろ絶対！

というか、さやか！　お前もなんで協力して羽交い締めにする！

「え、だつてアンタを犠牲にすればスムーズに事が運ぶでしょ」

「その代わりにオレがお婿にいけなくなっちゃう！」

「大丈夫！　そういうときはあたしがアンタをお嫁さんにするー！」

「さ、さやかくん……！　……つてなんでお嫁さん!？」

「いつもまどかが嫁、嫁つて言つてるから、もうアンタが嫁でもモーマ

ンタイでしょ」

「問題ないじゃねえよ！ それ、男として終わってるだろ！」

「後、本音を言わせてもらおうとめんどくさいから、もう成りゆき任せの大作戦というあたしの思考パターンが発動したからよ」

「それって単なる思考放棄じゃねえ！ 最低だろ！」

感動していたのに！ 返せ。オレのジーンときた感動を返して！

おのれ、アホのさやかめ。どこまでもお馬鹿属性を貫くのか！

「さて、」

「そろそろ」

「ヤリますか？」

「いやああああアア！ ケダモノオオオオオオ!!」

遂にケダモノ二匹がオレのズボンに手をかけ、そして――

※『見せられないよ！』な展開が起きたため、お待ちください(笑)

「うう……」

「いやあ、良い匂いだったよお♪」

「ふむ、なかなか興味深い趣向だった。クセになりそうだ」

「おお、キアラお母さんが同志になりそう！ あ、でも未来でも変わら
ないか」

「おや、未来のわたしはどんな変態なのかね？」

「運動したパパに抱きついて匂いを堪能している狼ツ娘」

「よろしい。今日からわたしの性癖は匂いフェチにしよう」

「それにしてもパパのぞうさん大きいねー♪」

……何も言うまい。もう、しゃべりたくないでスルーして空気に
なろう。

「うーん。それにしてもなんであたしだけがソラを覚えていたのかなあ」

「まだ悩んでいるのかい？」

「たぶん、パパやママ達はこう言うよ。なぜなら、さやかはアホの子だから」

「失礼な。あたしはアホじゃないわ」

「じゃあ、何かな？　もしかして伝説の勇者でも言いたいのかね？」

「そんな大層なものじゃないわよ。『だって、あたしは馬鹿なのだから』。これで充分なのよ」

「それも大して変わらないのでは……？」

「とりあえず、オレをデイスってるこいつらにはいずれにせよ、裁きを与えたい所存です……。」

第五十二話 良いヤツ化計画（絶対に真似してはいけないヤツ）

神威天気。白銀のツインテールでまとめた髪にオレと同じ瞳の少女。

オレの娘らしいが、千香の血が濃い娘だと思う。出会って数十分でセクハラされて襲われたからな。

そしてキアラが匂いフェチだったということが判明した。いや、判明したというより目覚めさせられた。

未来の千香……お宅の娘さんはとんでもない女やったで。

「……痛い」

「ぐっ……まさか『無血の』に拳骨を落とされるとは」

「うう、幼いパパにキズモノにされるなんて……はっ。でもこれは既成事実として使えるのでは!? キアラ母さん!」

「む? そうなのか。わたしとしてはキズモノとは、女の子の純潔を——はびゅっ!」

「キアラ母さん!? ひどい。わたし達をこんなにキズモノにするなんて、この後ひどいことするのね! エロ同人みたいに!」

「いい加減に黙れ!」

変態二匹を再び拳骨で黙らせて、嘆息を吐く。

「さやか、どうすればいいんだ? さっきのシリアスが嘘のようにカオスに侵されたんだけど」

「知らないわよ。それをなんとかするのがアンタの役目ですよ。あたしの役目はチョコボールを食べることだから」

「いや、手伝えよ。つか、お前いつから食いしん坊キャラになった?

杏子のキャラだろ、それ」

「一応、双子の姉妹という設定だし。ほら、食いしん坊キャラの双子の姉妹って新しいでしょ?」

「食費が大変な姉妹だし、お前の場合。太る——」

チャキツ（サーベルを首元に向けられる）

「何か？」

「さやかさんはスリムだねえー。おっぱいも大きいしって言ったんだ」

脅迫されたので黙る。ちなみにおっぱいに関してのセクハラ発言は細やかな仕返しである。

しばらく話をしてわかったことがある。

まず、オレのことを完全に忘れたわけではなさそうだ。キアラのようにすり替えさせられた違和感が残り、疑心が生まれていく。しかし、オリ主くんはそれを利用してオレに嫌悪感を植え付けさせたようだ。

別に嫌われたところで問題はないが、その嫌悪感を踏み台転生者の悪行を払う正義として、オレに暴力を振るうのはどうかと思う。

そして『神器』。あれもオレの『神器』であり、オレの魂の一部から強制的に召喚されたものらしい。

ホントに盗人のようなことをしていやがる。みんなを元に戻したらぶん殴ろうと思う。

「んで、オレは何をすればいい？」

「キミにはこのシュミレーション通りに行動してもらいたい」

キアラに手渡されたのは数ページのレポート用紙だ。オレはそれを読みながら想像を始める――

（シュミレーションー 『スケベ魂』）

※以下、シュミレーションとソラの想像が混ざった展開です（笑）

ソラはある少女の背後にいた。少女は普段は変態として有名だったのだが、いつの間にか清楚で気品ある女の子となった天ヶ瀬千香という少女だ。

ソラはこっそりと近づくと、バレないようにひっそりと、そして彼は千香が何かを落としたとき、アクションをかけた。

彼は足を走らせ、そして彼女が吐いてるスカートに手をかけて叫ぶ。

『秘技、スカート捲りイイイイ!!』

彼女のスカートは捲り上がり、そしてかわいらしいパンツを見せる。彼女は顔を赤くしてブルブルと震える。

そんな彼女にソラは言う。

「ええ、パンツやで」

「きやあアアアア! 痴漢んツツ!!」

ソラの頬に紅葉マークが出来上がり、そして彼は警察に注意されるのだった……。

(シユミレーション終了)

「これならば天ヶ瀬千香の記憶は甦るはずだ」

「ねえよ! むしろオレが変態になってるぞ、これ!!」

まさかのボケにビックリである。あのいつも合理的に考え、厳しいキアラがこんな悪ふざけな計画を考えるはずがない!

「む? そうなのか? 友江さやか曰く、『これなら、バツチリ千香の記憶が取り戻せるよ』と言っていたが……」

「さやかアアアア!!」

さやかが「あははは」と笑いながら誤魔化す。

「だって変態行為したら、真っ先に変態が目覚めるって知られてるじゃん」

「変態ハザードを起こせるのは千香とノエルだけだったの! つーか、そもそもオレは変態じゃねえから!」

「はっ。しまった。盲点だった!」

「盲点どころか気づけよ! オレが変態扱いされてるってことを」
「ごみん☆」

「テヘペロして誤魔化すなアアアア!」

身体を揺さぶり、怒鳴り続ける。心外な上に、こいつと話し合わなければならぬことができたのだが、キアラに制止をされる。

熱くなりすぎて脱線した。とにかくキアラが次に渡してきたレポート用紙に目を向ける。

(シユミレーション2 『筋肉番付』)

一人の少年が彼女と共に仲むつましく歩いていた。名前は衛とはやてだ。

普段はバカツプルぶりを見せてばかりなカップルだが、不運なことにこれから起きることに同情する。

二人が訪れた公園に一人の少年が、バスタオル姿で佇んでいた。衛ははやての前に立ち、盾になろうする。

すると少年——ソラはバスタオルを脱ぎ捨て、その姿を見せる。

ブーメランスタイルの海パン一丁で、上半身は裸だ。しかし、その上半身は少年とは思えないくらいダイナマイトボテイ。いわゆる、ガチムチマツチョだった。

「見よ、この素晴らしい筋肉をオオオオオ！」

「ぬう、この筋肉……貴様！ ただものではないな！」

「フハハハハハ！ マッスルキング衛よ。貴様の栄光はこれまでだ！」

今日の日を境にマッスルキングはこのオレがもう！

「なるほど、挑戦者か……ならば答えるまで！」

衛も己の肉体を見せるために脱ぎ捨て、筋肉を見せる。

「さあ……」

「マッスルロンパの」

「はじまりだ!!」

「なんでやねん!!」

はやてのツツコミが空に響くのだった……。

(シユミレーション終了)

「うむ。素晴らしいな。さすがは男の友情だ」

「こんな友情育みたくねえよ！」

またさやかか！ さやかが考えたのか!?

「む、なんだと？ このわたしが直々に考えた計画だぞ」

「キアラさアアアアアん!？」

お前、そういうキャラじゃねえだろ！

てか、こんな友情——衛と共に筋肉キャラに目覚めてどうする

んだよ！ 誰が喜ぶんだよ、この展開！

「うーん、さすがキアラ。ライバルというポジションにつかせることで重要なファクトリーに仕立てあげるとは……。少年漫画の常識だね！」

「納得するなよ！ 誰がこんな筋肉で語り合う熱血展開を喜べるんだよ！」

「まどかじゃね？」

「そういえばあいつ筋肉フェチだった……!!」

筋肉フェチな性癖となった彼女。……昔は無害な小動物だったのに、今では発情ピンクに。

……なんで、ああなった！

「まあまあ、最後のこのシミュレーションを見て考えくれたまえ」

「ホントにまともなモノだろうな？」

「安心したまえ。今度のは神威天気と友江さやか、そしてこのわたしが悩みに悩みぬいて思い付いたアイデアだ」

ホントに大丈夫か……？

オレはそのシミュレーションが書かれたレポート用紙のタイトルを見た。

『シミュレーション3 ウホ、良い男……ヤらないか』

「これでキミも今日から^{オトコ}だ」

「やる気ねえだろお前ら!!」

レポート用紙を引き裂き、シャウトするのだった。

シミュレーションの全てを破棄し、大人モードとなってオレは銀行に来ていた。理由としてはお金をおろすためだ。

今まで、まどか達にサイフを握られていたため、オレのお小遣いがフリーダムとなった。

「これで北海道行き巡りができる……ジュルリ」

「それやったら元に戻ったまどか達にチクるから」

「ちくせう」

まあ、おとす金額は今月の食費である。この後、スーパーに行つて買い物するだけだ。

オレの窓口番号が言われたとき、二人の男女が天井に発砲した。それにより周りが騒ぎになる。

「静かにしやがれ！」

「そうだよ。大人しくしないと撃つよー！」

発砲したのは銀行強盗団だ。他にも仲間がいたのか、同じく覆面を来た男女が現れた。

つて、オイ、よく見たら……。

「俺達は『神威強盗団』だ！ 今日、この銀行の有り金をいただく！」

……………オイ。

「ねえ、ソラ。今、アイツら神威つて」

「……………紹介するよ」

——オレの今世の両親だ
そう言つて嘆息が出た。

第五十三話 走れさやか

前世を思い出す前、オレはあの両親に虐待されていた。

サンドバックにしたり、買い物に行かせたり、おまけにお金がなかったら盗みまでさせようとしていた。まあ、それに反抗していたからサンドバックにされていたんだけど。

大人モードになって虐待の罪で通報してから刑務所にぶちこまれたはずだが、どうやらヤツら出所したようだ。二度と会いたくはなかったのだが……はあ。

「さて、どうしようか」

「いつも通りに殺ればよからう」

「ここは前世と違うぞ。現代社会での殺人は犯罪だ」

「なら、あたし達の手でボコボコにしようよ!」

「相手は集団だから、人質とられたらおしまいだ」

数は五人。それぞれマシンガンを手に持ち、携帯銃器を腰につけている。

殺ろうと思えばいつでも殺れるがここで騒ぎを起せば、オリ主くに難癖つけられそうだ。

「今のオレはオリ主くんより弱いから、騒ぎを起せばボコられそうだ」

「ほざけ。『神器』無しのキミが弱いなら、前世ではとつくの昔に我が軍は敗北している」

「え、ソラってそこまで強かったの?」

「ああ。わたしが思うに『神器』で敵を殲滅していた彼の方が良心的……だと思う」

「オイ。そのガキ! 黙れ!」

両親の仲間の一人が銃口を向ける。両親は窓口でお金を受け取っているようだ。

外はサイレンが聞こえ始め、車が止まる音が聞こえた。

『警察だ! ここは包囲されている。大人しくしろ!』

「チツ。もう来やがった!」

……『もう』、だと?」

これは誰かが仕組んだことなのか?

わからないが、とりあえず事態が進んでいく。父親は人質の中に盾に人選を選んでいる。

その中に叶うヤツがいたのか、そいつに近づき、乱暴に立たせる。

「おら、テメーが人質だ!」

立たせたのは男性。チエツクのズボンに、白いTシャツを着た、そんな

——プルプルと今にも死にそうなおじいさん

「待て! なんでそいつをチョイスしたの!」

「あん? んなもん、すぐに使い物にならないヤツを使えばオメーらに迷惑かからないだろ」

「いやこれをしてる時点で迷惑だから! つーか、そのじいさん死にそうなくらいプルプル震えているんだけど!」

「んなもん、問題ねーだろ。このじいさん、張り切って手を上げてアピールしていただぞ」

「なんで人質になろうとアピールしたの!」

ツツコミどころが多すぎる! というか、じいさん。あんた、なんでアピールしたの!」

死ににいくもんだぞそれ!

それに答えるかのようにじいさんは、

「わしは……この八十九年間。人質にとられ続けてきた大ベテランじゃ。若いおわしに任せなさ……ゴホゴホ!」

「じいさん、どんだけ巻き込まれてるの!?! むしろ、嘆いてその不運に! 確か、頼れないくらい死にそうな顔をしているんだけど!?!」

ヤバい。人質になる前にじいさんが死にそうだ。てか、今まさに三途の川を渡りそうな雰囲気だ。

すると母親が小さな女の子を抱えて、銃口を向けていた。さつきトイレに行っていた天気だ。

「アンタ、そんな死にそんな人質を使っても意味ないね。この子を人質にするよ」

「……そだな。ジジイ。命拾いしたな」

「そんなあ……」

大ベテランが乱暴に倒され、口から魂を出して失神した。天気を人質にした。

オレはとにかく自分を抑えることに精一杯だった。

「ソラ、落ち着いて」

「凄まじい殺気を出すのを抑えたまえ」

「……わかってる」

オレはひたすら耐える。母親は天気を人質にしたまま、外に出ていく。警告しに行ったのだろう。すると父親はオレを立てさせて銃口を向ける。

「テメーも人質だ。来い」

オレは言われるがまま母親と同じく外に出た。

外は警官によって包囲されていた。野次馬の中にオリ主くんともどか達がいた。どういふつもりか知らないがとりあえず、気にしないでおう。

オレはさつきと解放してくれないかなあと、ぼんやり考えていると、ふと父親が言葉に出した。

「ケツ。野次馬の中で高みの見物かよ」

「仲間がいるのか？」

「仲間じゃねえよ。あのクソガキに指示されてこんなことをしたんだよ。全く。仮出所から解放してくれるって手筈だったのによお」

「どういうことだ？」

「この銀行で騒ぎを起こせてな。しかも警官が来る時間制限付きでな。ゲームのつもりでやったかは知らねーが俺達はそれに乗ったわけよ」

野次馬の中に黒幕がいるってことか……。なるほど、とりあえずそいつに会ったらぶちのめそうか。

「これが終わったらあのクソ息子を裏に売りさばこうとしていたのに。というか、あのクソガキを殺せばよかったな」

「……………」

クソガキつてのはオレのことだろうな。まあ、確かにヤツらにとつてオレがしたのは『親不孝』だな。自分の親を不幸にしたわけだから。でもな、間違ったことを。罪を犯した人間を正すことの何が悪いのだろうか。

悪は決して栄えない。栄えているが、いつかは滅びる。それはなぜか？

答えは簡単——『間違っている』から。

間違えたら、正す。

罪を犯したなら、それに報いる。

それが『普通』なのだ。しかし、この両親は懲りてない。いや、気づいていないのか。

自分の犯した罪を、罰を、報いに気づくことなく、愚かに今も罪を犯している。呆れて何も言えないな。

そんなとき、天気が騒ぎだした。

「パパは悪くないもん！　パパは、パパはいつだって自分の正しいと思つたことを信じて動いている。おばさん達は間違つていることをパパに押し付けないで！」

「なんだとこのクソガキー！」

母親は天気の良い頬をひっぱたいた。赤く腫れ、涙目になりながら睨みつける天気に、母親は銃口を向ける。

「お前はいらねーよ。死ね」

あつさりと殺すつもりか。

オレの大切な人を。大切なモノを！

オレは父親が拘束する腕に振りほどき、母親に向けて父親を投げつける。天気を抱えてその場から退避するも、銃声が鳴り響いた。

オレの肩に銃弾が掠り、憤慨した両親が銃口を向けていた。

「このクソガキ共があー！」

天気の盾になりながら、オレは銃弾を受ける覚悟をした。すると、まどか達が一斉に二人を抑えつけ、オリ主くんが『神器』でぶっ叩いて失神させた。

事件はこれにて一件落着となった。

「これでわかったかい。お前はここにはいけないんだ」

大人モードを解除し、帰ろうとするとまどか達を連れたオリ主くんが引き止めてきた。今日、起きたことはオレのせいだ。お前がいなくなっておけばみんながこんなことにならなかったと批判してきた。

「出ていけよ」

「そうね。あなたの居場所はここではないわ。さっさと私達の前から消えて」

杏子とほむらの言葉。そして冷たい視線を向けるマミさん。

対してまどかと千香はオロオロしていた。わけがわからないが、とにかくこれでオレがすることも決まってきたかもな。

「……そうだな」

『無血の』！」

「キアラ。悪いが一人にしてくれ」

オレはそう言って一人、自宅へ帰って行った。

(さやか side)

間違ってる。こんなの間違ってるよ！

あたしはソラがいなくなっただ後、一人。まどか達を説得しに向かった。

今のまどか達はソラと接しているようなくらいにオリ主くんのごとに好意を向けている。無理かもしれないと頭の中では考えている。けどこのままにしたら、ソラが取り返しつかないことになりそうなのがしてならない。

「させて……たまるか」

『円環の理』だったまどかから話は聞いた。悲惨で酷い戦争のお話を。

アイツはやつと。やつと孤独と絶望の戦いの果てに今という幸せを得られた。

なのに、その幸せを奪われ、再びアイツは絶望の渦に呑み込まれる。そんな気がしてならない。

あたしは走り続ける。そしてその先に待っていた相手に、あたしは『神器』を召喚した。

「何しにきた」

「アンタには関係ないでしょ」

「連れないこと言うなよ。俺とさやかの仲だろ？」

どのくちを言うのかオリ主^{コイツ}は。あたしは無視して進もうとしたとき、ヤツはソラの『神器』で斬りかかってきた。

「無視するなよ。さやか」

「気安くあたしの名前を口に出すな」

「クク、なるほど。お前は神威のことを覚えていたんだな」

「今更気づいたの？ それでアンタはあたしをどうするつもり？」

「お前を神威から解放する」

はあ？ わけをわからないことを。

「神威がお前を縛ってる。そうだろ？ なら、俺がその呪縛を解放してやるよ」

「精神科言ってきたら？ あたしはソラに縛られていない。アイツが誰かを縛ることより、縛られてる方がお似合いよ」
「クク、すぐに解放してやる」

オリ主はあたしに向かつて斬りかかってきた。

あたしとこの勘違いヤローとの戦いが始まった。

第五十四話 失う仲間

(??side)

友江さやかは戦った。善戦した。されど、彼女は勝てなかった。理由は質ではなく『数』だった。

「アンタ、ホントに……人間なの」

「ニンゲンニキマツテイルダロオ？」

やや濁っていた声が元に戻り、草太は倒れた彼女に近づく。

「全て忘れしまえ。そしたら今度はより良い世界になるはずさ」

笑う草太に、さやかは歯を食い縛り泣くことしかできなかつた。

悔しい。けれど、もう身体が動かない。

「忘れたく……ないよお……」

その言葉を最後にさやかの意識は閉ざされた――

(ソラside)

オレは荷物をまとめていた。ここから出ていくためだ。

未練なんて……あるに決まってる。このままでいいのか、と何度も考えた。

けれど、『神器』なんてないオレがどう足掻いても意味がない。どうすることもできない。

リュックの中には写真は入っていない。みんなを思い出すと未練がましいから。

そんなとき、さやかからラインが届いた。『助けて!』という連絡だ。

なんとなくだが、嫌な予感がした。

オレは家を飛び出し、魔力感知でさやかを捜した。

感知したのは路地裏だ。オレは全速力で向かう。
たどり着いたとき、さやかは――

オリ主くんの唇を重ねていた。

「何やってんだ!」

オレは思わずオリ主くんの顔に拳をぶつけた。オリ主くんはさやかから離れていき、オレは彼女の盾になるかのように前に立った。

「大丈夫か! 何もされてないよなさやか!」

オレの声にさやかは、

「……うるさいわよ。アンタ、草太に何をしているのよ」

そう言つてオレを突き放して、オリ主くんを心配しながら声をかけていた。

今……なんて言つた?

「なん……で」

「なんなのよアンタ。あたしが心地よく口づけしていたのに邪魔をして」

やめろ。

「いつもあたしやまどか達に付きまどつて」

やめてくれ。そんな冷めた目で。

「いい加減に鬱陶しいのよ。さつさと消えてよ」

やめてくれよ……さやか。

冷めた目で睨まれ、オリ主くんが笑みを浮かべたままさやかの肩を引き寄せて言つた。

「ほむらが言つただろ? お前の居場所は――もうない」

その言葉を聞いたとき、オレの中の何かが――コワレティツタ

……。

「……そうか。友江さやかが」

翠屋にて、キアラにさやかがオリ主くん側についたことを説明した。彼女は剣呑な視線を誰かに向けていた。

「……よもやここまでとはな。合理的で冷たいわたしとは言え、これには怒りを覚えない」

「嘘つけ。ホントはオレが手に入れやすい環境になったことを喜んでるだろ」

「冗談ではない。どちらかと言えば、わたしから言えばつまらない状況だ。手に入れにくい恋だからこそ、燃えるものだろ」

「お前らしいよ」

オレが元気のない苦笑に、ふんつとそっぽを向いた。入れられた珈琲を飲んでいると彼女が口を開く。

「おそらく友江さやかはキミの記憶を『封印』されて新たに記憶を植え付けられたと見ていいだろう」

「洗脳という線じゃないのか?」

「彼女は世界改変の影響すら受けられないほどの強固の耐催眠力者だぞ。洗脳やマインドコントロールにかけられたことに気づかないまま、無効化しているはずだ」

「あいつはアホだからなあ」

「ははは」と笑っていると彼女に胸ぐらを乱暴に掴まれた。

「何を呑気なこと言っている! 奪われたのだぞ。キミの大切なモノを、人を、絆を奪われたのだぞ! なのに、なぜキミはヘラヘラして

いられる！」

ヘラヘラしている……か。まあ、オレがヘラヘラしているのはたぶん、もう普通じゃないからだ。

オレはキアラが掴む胸ぐらを優しくほどいて、言う。

「オレは、さ。ずっと思ってたんだ。英雄という殺戮者になってからずっと、」

ずっと、彼女達といていいのか——と。何度も思った。

幸せになっていいのか。

生きていていいのか。

殺戮者をやめていいのか。

ずっとずっとずっと考えていた。

英雄となつて、転生して、幸せを感じて生きていていいのかと何度も何度も考えた。

もしかすると、オレがいない方がまどかやほむらは——みんなは幸せじゃないのかと思つたことも何度も考えた。

「だから、キアラ。オレは消えるよ」

「何を言つて……!」

「オレにはもう『神器』はない。大切なモノも何もかもない。戦う力がないオレに価値なんてないだろ」

「いや、ある! あるに決まつてる!」

「誤魔化すなよ。『神器』のないオレに、何ができるんだよ」

その言葉にキアラは口を閉じてしまった。『神器』ないオレに残されたのは、戦いによって得た経験と人柄のみ。

戦う力がないオレはキアラにとって必要のない存在だ。

珈琲を飲み干して、キアラの代金を合わせたお金を置いた。

「ごちそうさま。もう会うこともないだろうけど——また、な」

オレはそう言つて翠屋から出た。彼女に背を向けたまま。

(??side)

キアラは彼の背中を見つめるしかなかった。彼はもう戦うことも、

立ち上がることもない。

いろんなモノを奪われ、傷ついて悲しみを背負い、傷つきたくないから自分から離れていった。

『また、な』……か。またキミはわたしの前から……』

「いいのかい？ 彼を放っておいて」

翠屋の店主。高町士郎が彼女にそう語りかける。

「……別に問題あるまい。また会おうと言っていたからな」

「そうかな。私から見れば彼はもうここに帰って来なそうな気がしてならない」

士郎はしみじみ語る。かつて彼は見てきたのだ。

仲間だった男が、同期の友人がそう言って帰らぬ人となったのだ。

彼は無惨な死を迎えたらしい。

誰もが悲しみ、誰もが彼が死んだことに寂しく思った。

「彼の背中はまさにかつて戦友だった私の友人に似ている」

「……店主」

「行つてきなさい。このまま後悔したまま、彼を孤独に生かせるか。想いを伝えて共に歩むのか」

「わたしは……」

自分は合理的で冷たい女だ。この地位に上がるために、自分はどれだけ汚れているのか……。

だが、それでも……。

(前世のわたしのようにはなりたくない！)

彼を見送ってしまったから死なせた。誰かが彼と共にいれば死なせることはなかったかもしれない。

いつだって、どこにいたって彼を死なせるきっかけは『孤独』なのかもしれない。

「店主、感謝する……」

士郎は笑顔で答えて、ソラを追いかけた。もう、理由なんていらない。

キアラはただ、自分はソラを求めているのだ。

キアラにとってソラはなんなのだろうか？

使える手駒。

頼りなる男。

最高の人材。

いや、そうではない。キアラにとって、初めてソラに会ったときから彼女は彼が眩しかった。

(幼い頃の彼は、純粹で真っ直ぐな小僧だった……。そして、絶望して希望を見失った彼が愛しいと思えた)

ああ、そうだ。助けたいと思ったこともあった。

自分が彼を助けたいと考えたこともあった。しかし、彼女は自分の家族のために、軍のたけに行動した結果、彼を孤独にした。

(もう、彼を一人にしてはならない。彼は、ソラはわたしのモノにした
い！)

一人の女として、恋に目覚めた女として、彼女は彼を追いかける。
だからなのだろうか――

彼女の背後から迫る魔力弾に気づかなかったのは。

彼女の身体は宙に投げ出され、地面に叩きつけられた。頭から血を流し、襲撃者を睨みつける。

襲撃者は笑いながら、デバイスを向けていた。

「貴様……！」

「こんにちわ、キアラ提督――いや、降格されて執務官かな？」

闇の書の事件以降。親族であるキアラもまた降格処分された。草太は眼帯を取ろうとするキアラの頭を踏みつける。

「おっと。あなたの『神器』は規格外ですからね。封じさせてもらいますよ」

キアラの身体にソラ全てをの『神器』が差し込まれ、彼女の力は『封印』された。

「なんのために……なんのためにこんなことをした！」

憤りが抑えられなかった。彼から何もかも奪い、幸せを奪ったこの男の目的はなんなのか知りたかった。

「簡単な話さ。神威ソラは踏み台だ。その役割に全うしているだけ

だ」

「ふぎけるな……!」

「ふぎけてませんが……ねえ!」

キアラを蹴り飛ばし、転がる彼女に非殺傷を解除されたデバイスを向けた。

ゆつくりと立とうとするキアラに草太は笑みを浮かべた。

「ああ。そうそう。あの銀行強盗を仕組んだのも、神威にラインを送ったのも俺さ。全く、ホントに笑える一家だよ。あんなあつさりと騙されるわ、誘き出されるわ」

「おのれ……貴様というヤツは」

「まあ、最後に聞いてよかったですね……執務官」

デバイスから魔力砲撃が撃たれた。キアラは呑み込まれる前に、ソラのことを頭に思い浮かべながら、そして――

(ソラ side)

なんでここにいる。

なんでお前は追いかけてきた。

ホントに愚かとしか言いようがないよキアラ。オレのために追いかけて、傷ついて、そして死んでいく。

お前らしくないじゃないか。ホント、なんで……。

「なんで引き戻したのかなあ。オレ……」

「ソラ……?」

間一髪。キアラを小脇に抱えて砲撃から逃れたのだ。

引き戻したとき、キアラは『神器』を封じられ、そして殺されそうになっていた。

だからオレは助けた。それ以外はない。

「なんだ。神威め。引き戻したのか」

「まあな。人殺しはよくないぞオリ主くん」

「ふん、そいつが孤独になろうとしたお前の邪魔をしたからだ」
「オレを一人ぼっちにする……？　なんでそんなことする必要がある」

「踏み台とは誰もが迷惑に思い、なおかつ孤独だ。お前はそうなるべきなんだよ」

そんなわけのわからない理由でキアラを殺そうとしたのか、このクソヤローは……。

オレは俯き、拳に力が入る。掌に血が溢れ、ただ怒りを抑えた。怒ったところで、暴れたところで、何かが返るわけでもない。

「まあいい。このままお前もろとも——」

キアラを下ろしてオレは縮地の用法で一瞬で距離を縮めて、オリ主くんの顔を拳で撃ち抜いた。塀を破壊するくらいの威力で殴つてから、オレはキアラの懐からある人と連絡しようとデバイスを起動した。

(?? side)

「かむ、い……めー！」

『あらあら、怒らせちゃったわね』

「ふん、ヤツが怒ったところで何ができる。まあ、これでヤツを排除するきっかけはできたな」

草太は笑うと悪魔もクスクスと笑う。

『それはどうかしらねえ……。あの子を一人にして怒らせたらどうなるかなんて……。それに五木雷斗を試し斬りしたらしいけど、彼が目覚めて、なおかつ彼女も参戦する事態になったら——もうどうなっちゃうかしら?』

そのとき、悪魔の心境を愚者^{草太}は気づかない。

そしてこれは最低最悪の事態へのトリガー。真の恐ろしい事件の幕開けだった。

第五十五話 最凶の死神

(??side)

『無血』の由来はソラの『神器』から出会った。

ゆけに多くの戦いで彼は敵に血を流すことなく、勝利へ導いた。けれど、その『神器』が効かない、または使えなかったとき、彼はどうしたか？

答えは簡単。普通に戦う。

剣で、槍で、弓で、彼は様々なものを使って武器にしてきた。そして身体を『鮮血』に染めながら、勝利へ導いた。

これが『鮮血』の起源。

『無血』がまだ良心的だったとキアラが言っていた理由——それが明らかになる事件が起きた……。

(ソラside)

とある医務室にて、キアラはベッドの上に横になっていた。オレはずっと彼女の看病をしていた。

スライド式の扉が開き、クロノ少年が入ってきた。彼はオレを見るなり、怪訝な顔をした。

「君はいつまで彼女の看病をしているつもりだい」

「……状況が動くまで」

オレの答えにクロノ少年は嘆息を吐いた。そんなとき、天気からラインが届いた。

それと同時にクロノ少年のデバイスから何かのメッセージが届いた。それを見たクロノ少年は目を見開いてオレを見てきた。

やっぱり、か……。

天気メッセージは、『みんな血眼でパパを探している。軍隊みたいなモノもいるよ』だ。

オリ主くんはオレをキアラを襲った犯人として仕立てあげたのだ。信用あるオリ主くんと信用のないオレではどちらが信用されるのかは明白だ。

クロノ少年を除いてだが。オレがそのキアラをここに連れてきて看病をしていたのだ。命を奪おうとしていた人間が、敵の本拠地にわざわざ助けを求めようとするわけない。

「さて、と……行くか」

オレは席を立ち、扉に手をかけようとしたときクロノ少年が待ったをかけた。

「君は、ホントに何者なんだ……？ キアラの友人なのはわかるが……」

「ただの踏み台さ」

「そんな答えではない。君の背中を見て……僕の父親がいなくなるような感じと似て……」

「オレが死ぬとでも？」

「そんなわけあるか！」

オレの言葉にクロノ少年は噛みつく。そんな彼にオレは聞いた。

「クロノ・ハラオウン——人生は尊いと思う？ 友人や家族は大切だと思う？」

「それは、もちろんとも。人生は確かに尊い。僕は思う」

「オレも人生は尊いものだと思う。人って簡単に死ぬし、大切なものも簡単に失う。現にオレは家族を失ったし、大切な人も失ったよ」

かつてまどかに聞いた質問。それがどう意味するかは、オレ自身しか知らない。

「……君は」

オレは彼の手を払って言った。

「もう、誰にも頼らない。信じない。オレは一人で戦い続けるよ——それがたとえ、絶望に続く道だとしても」

自嘲した笑みを浮かべて、クロノ少年に背中を向けて、歩み出す。

行き先は決めてない。

ただオレはヤツと決着をつけるために、あそこに行くだけだった。

オレが向かったのは自宅だ。リュックサックを取りにという建前があるがなんとなく、何かありそうだと思ったからだ。案の定、その通りだ。

オレの家は半壊していた。写真だけ無事でそれ以外は、オリ主くと軍隊らしきものによって破壊されていた。

破壊されてる途中で、オリ主くんはオレに気づき、破壊をやめる。

軍隊は大隊だ。部隊は空中にいるのを合わせて千人くらいだな。

「よくもヌケヌケと来たものだな」

「……………」

「お前の居場所はもうないから、この家を破壊させてもらった。まあ、それで邪魔が入ったが」

……邪魔が？　オリ主くんが指差したのは隊員に羽交い締めされて動かなくなった天気だ。

『『パパの家を壊さない』』ってうるさいから大人しくさせてもらった。どうせ、お前が洗脳した子どもだろ？　そうだろ！」

デバイスから放たれた魔力弾が身体に当たる。まだ非殺傷だから痛い程度だ。オレは後ろによるめきながらも耐えた。

そして次々に部隊の魔力弾がオレに当たる。

「だんまりか。なら、俺が解放してやる。さやかを救ったように、な」
オリ主くんが天気近づく。天気は目を開けて泣き始める。

「嫌！　パパを忘れたくない！」

「大人しくしろ！」

「離して！　パパ、助けて！　助けてよお!!」

彼女の声にオレは答えない。耐える。怒りを抑えたいから。これを解放したら、オレはもう戻れない。

あの優しい世界……。

あの穏やかな世界に……。

耐えたかった。でも……もう、

「安心しろ。お前はあいつに操られているんだ」

「操られてない！ 嫌い。君なんか嫌い!!」

「かわいそうに……。よしよし、今から俺の手で」

『神器』が天気而降り下ろされそうになる。そのとき、オレは天気に言った。

「天気！ 目を閉じてろ」

天気は言う通り、目を閉じてくれた。

そして大人モードとなったオレは跳躍して、オリ主くんを蹴り落とし、空中にいる天気を羽交い締めしている男の片目を潰す。

悲鳴を上げながら天気は解放され、それを抱き止めてその場から逃げ出した。

「パパ！ パパあ！」

「よしよし、怖かったな」

天気を優しく撫でていると後ろが騒がしい。やはり追いかけてきたようだ。

天気を抱えたまま戦えない。どこか安全な場所に、と考えているとオレの目の前にまどかに似た少女が降り立つ。

「よお、親父。天気の子守りごころうさん」

「お前は……」

「鹿目マナミ。って言えばわかるか？」

「マナミ姉ちゃん！」

天気の親族か知り合い……ということとは。

「ま、とにかくこの時代に迷い混んだ天気を無事保護できたからアタ伊の任務は完了かな」

「マナミ姉ちゃん！ パパを！ パパを助けて」

その願いにマナミは首を振る。やっぱ、無理か……。

「どうして……どうしてなの！」

「天気。アタイ達は未来からきたんだ。過去を改変することはできねーんだ」

「そんなあ……」

マナミの言葉に天気は泣きそうだった。オレは彼女を下ろして、その頭を撫でる。気持ち良さそうな彼女に向けて言った。

「天気、オレは絶対死なないよ。お前が産まれて、そして幸せになるまで死んでやらない」

「パパあ……」

「約束する——だから、マナミと一緒に行って」

オレの言葉に天気はマナミに振り返る。彼女は頷くと天気は彼女の手を握る。

「親父……ワリー」

「良いってことよ。これから起きることはガキのお前らには見せられねえもんのだから」

「……過去の親父って孤独なのか？」

「孤独さ。誰もオレを見ていない」

マナミは辛そうに見つめるがオレは笑って答える。

「いつか、いつかきつとお前らに会ってみせるよ。それまで足掻いて足掻いて生きてやるさ」

「約束だよー」

その瞬間あと、天気とマナミは光に呑み込まれ、光の柱を立てて消えた。未来に帰ったのだ。

オレはとにかく走る。そして結界に覆われた都市にたどり着いた。

「逃がさないぞ」

「ええ、あなたはここで私達が……」

「覚悟しなさい！」

「ふふ……」

杏子、ほむら、さやか、マミさんが『神器』を構える。その後ろにはどこか納得していないまどかと千香がいた。

「……お前ら二人は戦わないのか？」

「う、うん……」

「そだね。ボクもなーんかおかしいんだよね。君はボク達にとって敵のはずなのに……なのに」

「……わからない何かが訴えている。そうなのか？」

彼女は頷く。どうやらキアラと同じように違和感を感じているようだ。

「だけど、それは、もう……」

そんなとき、オリ主くんがオレの『神器』を構えて現れる。

「惑わされるな！ 相手はあのキアラを倒した男だ。一齐に攻撃をしかけるぞ」

「ええー！」

「ま、待って！ まだ私は……！」

まどかの声は届かず、一齐射撃がオレに向かってきた。砂煙が舞い、オリ主くんを含めて周りはやったと思っっているのか、気が抜けていた。

——それは、油断していることだぞ？

砂煙が晴れたとき、オレは立っていた。髪はさやかと同じく青色。瞳は変わらずだが、どこか淀んでいる気がする。オレの無事に驚愕する周りに告げる。

「覚悟しろ」

それは、英雄となった少年の話。

「後悔しろ」

それは、絶望した少年の話。

「泣き叫んでも、許しを乞うても、オレは殺す。だから安心して——
——とっと死ね」

誰も救われない物語。それが再び始まる——

第五十六話 神威ソラ

(??side)

キアラは目を覚まし、瞼を開ける。痛む身体に耐えながら、包帯に包まれている自分を見る。

(どうやらソラに助けられたようだ……)

ではその肝心の彼は？と考えているとクロノが入ってきた。慌てている様子だとただ事ではなさそうだ。

「キアラ！ 天宮草太が大隊を率いて、神威を！」

「っ、どこまで愚かなのだあの男は！」

キアラは急いで着替える。目の前にクロノがいることをお構い無しに彼女は着替えを済まし、彼の手を引いて走る。

「き、君は異性の前で……」

「黙ってろ。状況は？」

「コホン、状況は神威を包囲しているらしい。どうも彼が洗脳した子どもを奪われ、それを追いかけているうちにあらかじめ結果が張られた都市に追い込んだらしい。……いろいろ言いたいことがあるが、やり過ぎる」

確かにクロノの言う通りだ。一人の人間相手に大隊を率いて、攻撃を加えるなどやり過ぎる。しかし、対してキアラが恐れていたのはそっちではない。

「天宮が率いていた中に普通の生まれ出の局員はいるのか？」

「いたと思うが……」

「くそつ。早く、ヤツを止めなければ！」

「天宮のことか？」

「ちがう。ソラだ！」

それはいつたいたとクロノは聞いたかったが、すぐに理解して首を振る。大隊を相手に一人で挑むなど愚行以外なんでもない。

しかしキアラは冗談ではなかった。

「キミはソラの恐ろしさを知らない。ヤツがもつとも得意とする場所は障害物のあるステージ。そしてヤツがもつとも得意とする相手は大隊の大人数の乱戦」

「そんな……馬鹿なことが」

「それができるのが英雄なんだ！あの男には『神器』がない。とすれば、起こるのは……」

その途中で、クロノのデバイスに通信が入る。その内容にキアラが言っていたことを理解した。

「そん、な……!?!」

「なんだ。なんの報告だ!?!」

「百人……百人の局員が——」

——無惨に殺された。血の海となった……

クロノの口から吐かれた言葉にキアラはポータルに進む足を早くした。

地獄。その言葉を局員の中で口にしたのは誰だろうか。

ソラがさやかな魔力を使って変身した後、彼はサーベルを地より生やす。その二本のサーベルを抜き取り、二刀流になって足を進める。

部隊は無傷な彼に再び魔力弾を撃つが、彼はそれを全て弾き返し、逆に局員達が痛みを苦しむ。

「くそっ、あのが——」

悪態をつこうとした局員の視界は逆さまになっていた。いったいなぜと地に視界が近づくとそこにあったのは首なしの死体だ。彼はソラによって殺されたのだ。

ソラの殺人はまだまだ終わらない。首や頸動脈斬り裂き、背後から

近づく局員は逆手に持ち変えたサーベルで心臓や急所を貫く。

それから、ソラは斬り続ける。相手が血に染まり、動けなくなるまで斬り続ける。

身体が紅く染まる。血で汚れ、悲鳴と断末魔が響く。

右腕にバインドが巻かれ、動きを止めようとした。しかし、彼はそれを力だけでそれを引きちぎり、バインドを発動した局員を惨殺する。

「な、なんなんだコイツ……」

「化け物めー」

ありえない。ありえない。ありえない。

バインドで縛られた腕を引きちぎったり、顔を腕力で握り潰す。

まさに怪物というものふさわしい。

(……いつまで持つか)

ソラとて実のところ余裕ではない。さやかな魔力で変身してから、彼が行っているのは『身体強化』と『変身』と『魔力感知』である。

感知している理由は、背後をとられないために、制空権を発動している。大人モードになってる理由もまた身体強化を更に向上させるためである。

大人と子ども。リーチと力は段違いなのだ。

肉体強化と大人モードの魔力を消費させているのだ。『神器』を使う頃より燃費が良いが、一方で敵を確実に殺せるという保証がない。ゆえに彼が一番望ましいのは『神器』で敵を殲滅することだった。

その『神器』が使えない今、彼はこのような血なまぐさいやり方しか残されてなかった。

「このー」

「化け物めー」

彼がまた二人、首を斬り飛ばす。ギロリと視線を向けると後ずさる局員がいるが、無理もない。

彼の目は恐ろしいほど、憎しみと怒りに染まり上げてる瞳なのだ。

彼がこうまで戦えるのは、それは前世の経験からだ。多くの敵を滅ぼし、倒してきた彼は集団で攻めてくる敵を相対していないわけがな

い。

集団で攻められたらまず気にすることは体力。多くの相手と戦う場合、長く倒し続けるにはそれは必要だ。

そして、集中力。決して途切れてはならない。途切れたら最後、それは油断となり、最悪死ぬこともある。

何度もそうなりそうになったことがあるから、彼はそう理解していた。

また一人、一人を惨殺し、攻められても弾き返すソラ。

そんなとき、さやかがソラに斬りかかる。ソラはそれをサーベルで受け止め、蹴り飛ばす。

その隙を狙ってか、今度は杏子の突きが迫る。ソラは槍の柄を掴み、力付くで杏子を投げ飛ばす。

杏子の手から槍が手放されると次に来たのはマミとほむらの銃撃。サーベルを地に刺して、ソラはそれを槍をバトンのように回して防ぐ。

そして槍を局員に投擲して突き刺し、二刀を引き抜き、再び斬りかかる。

「よくもみんなをー！」

草太が『神器』で斬りかかる。二刀のサーベルをハサミのようにして受け止め、そしてその身体に蹴り込む。ボキボキ！と身体が折れる感触を感じてから、草太は吹き飛んだ。

——後、何人だ。何人殺せば、この戦いは終わる……

ソラは疲労していた。無理もない。彼の魔力精製の原材料は、精神と身体のエネルギーを混ぜ合わせたもの。

それを使うということはまさにマラソンした後、スポーツしろという無茶苦茶なことなのだ。

「……まあ、みんな殺せばいい話だしな」

敵は全員。味方はなし。これほどわかりやすい布陣はないだろう。彼が足を進めると、魔力らしき波動を感じてその場から後退した。

ソラがいたところに黒い球体が現れた。空間魔法だ。それを行えるのは一人しかない。

「八神……はやて」

そう、はやてだけでなく、なのはやフェイト。そして守護騎士達も空中にいた。

援軍だ。ソラはそう思って内心舌打ちした。

一斉に遠距離から魔法を放たれ、ソラはその場から回避した——
——が、それがミス。

『マツスルインパクト』!!」

「っ、ごほ!」

衛の接近に気づいてはいた。しかし、彼もまた縮地をマスターしており、一瞬で彼はソラの懐に攻め込み、最強の一撃を与えた。ソラは吹き飛び、壁に突き刺さる。

受け身がとれず、もろに直撃したことならば普通、重傷なのだが彼はその痛みを何度も受けているため、『慣れて』いた。

軽傷でも重傷でもないが、ダメージでややよろけていると、今度は局員の魔力弾が迫る。ソラはサーベルでそれを弾き返そうとした——

——が、その途中で剣が消えていった。

タイムリミット
(時間切れ……!・しまっ——)

ガガガガガガガッ!とその身体に魔力弾が当たる。無数の魔力弾によって、ダメージを蓄積し、普通ならば倒れてもおかしくないくらい傷を負った。

火傷と青アザ、そして痛みで顔を歪ませるも、ソラの身体はフラフラしながらも立っていた。

「まだ立ってるのか……?」

草太が呆れる。彼が受けたのはほむらとマミとなのは達を含めて、合計約245発の魔力の弾だ。倒れてもおかしくない。なのに、彼は立っている。

「しっこいぞ。いい加減に倒れろ!」

「我が友の言う通りだ。さっさと去いね!!」

衛と草太が迫る。ソラは俯きながらも両手を前に出し、そしてその

光と共に刀と『神器』のレプリカが現れる。

衛の打撃はレプリカで止め、草太の斬撃は刀で受け止め、身体を回転させて彼らを吹き飛ばした。

「くっ、どこのそんな力が！」

草太の問いにソラは答えない。その目は変わらずとても恐ろしい眼差しだった。

そんなとき、まどかが膝について震えていた。

「やめてよお……もうそんな目をしないでえ!!」

「まどか、どうしたの!?!」

「やい、テメー。まどかに何をしやがった!」

噛みつく杏子達にまどかは「違うの」と答えて、立ち上がる。

「私……あの人の目を知ってる」

「知ってる……って、まどか。彼との接点はないはずでしょ」

「うん……でも、私はあの目を知ってるんだ。ううん、知ってるんじゃない——忘れられないんだ」

悲しい。空しい。寂しい。

まどかは知っていた。ソラがしている目はかつて彼が絶望し、戦争の中で見せた戦うものの目だと。

復讐者。

言い様のない怒りと憎悪。

矛先が定まっていない激情。

そんな目をするソラに、まどかはとても辛かった。誰も彼を救ってくれない、孤独で一人ぼっちに戦い続ける殺戮者——『暁美だった頃』のほむらと同じ目をしていた。

(もう誰にも頼らない。信じない。自分の、望みのために戦い続ける

——私はそれが嫌で、草太くんに……なんで草太くん?)

ここに來てからまどかの違和感が強くなる。おかしい。何もかもがおかしい。

そもそも神威ソラがひどいことをしたのはいつだ。どんなときだ。

疑心を浮かべるも、それを遮るかのように草太は言う。

「惑わされるな! ヤツの洗脳にやられ……ぎやあああああ!!」

「うるさい」

ソラは彼の『ソラの神器』を持つ腕を斬り飛ばした。容赦もなく、情けもなく。

彼がそう行動したとき、草太を含めてまどか達は恐怖を覚えた。

「き、貴様……」

「なんやねん……コイツ、ホンマになんやねん！」

人殺しをあっさり行うソラに衛達は許せないと思っていた。自分達の正義のために戦おうと思えた。

——それを否定するかののように、彼は簡単に殺す。『信念』や『想い』や『正義』をあっさり殺す

正義も悪も彼には関係ない。

守るために、滅ぼすために、相手を殲滅する。それが——『英雄』。

畏怖たる存在が、衛達の前にいる。

「お、お前エー！」

草太は憤慨していた。デバイスを構えて睨み付けるに対してソラはなんとも考えてないのか、淡白に答える。

「お前、『無血の死神』がなんなのかわかるか……？」

「それは……ヒーローの証だろが！」

草太の答えにソラは嘲笑して「不正解」と答える。

草太は怒りを抑えられず、斬りかかる。

ソラはデバイスを蹴飛ばして、彼に拳で飛ばした。

そんなとき、まどかは彼に聞いた。

「どうして……どうしてあなたは、そんなに傷ついてまで立っているの……？」

「どうして……か。どうしてなんだろうな……」

死ぬつもりなのか。それとも暴れたいだけなのか。

わからない。けれど、なぜか立って戦わなければならない。

ああ、そうだ。ソラが戦う理由は、

「負けないため。負けたら全てが終わる……だからオレはここにいる全員を殺す」

そう言つて彼は再び、局員へ斬りかかる。そしてまた紅く染め上げていく……。

キアラとクロノが現場にたどり着いた。早く、早く！と彼女はただひたすら向かう。

そして待っていたのは——
紅い、世界。何もかもが血で汚れ、返り血で染まりあげた男。両手に持つ剣は既にへし折れていた——そんなソラが虚ろな目をしてしながら、残されたまどか達に目を向けていた。

(ソラ side)

また失った……。

アルスを失って以来、多くの人と関わり、そして友として共に戦った。

結局、オレについてくることなく、そいつらは死んでいった。オレの隣には誰もいない。誰も立つことができない。

英雄とは孤独なのだろう……。共に歩める人はごく僅かなのかもしれない。

オレの場合は、とても不運なことに共に歩んでくれるヤツはいなかった。千香はいつも後ろについてくることばかりだしなあ。

幼い頃は隣にはほむらがいた。マミさんが見守ってくれた。杏子

とさやかが共にいた。そしてまどかが手を引つ張る——そんな夢を見てきた。

……もうオレにはそんな夢のようなことができそうもないや。

だって、オレの手は真つ赤だ。『無血』のままにはいられなくなり、『鮮血』に染まる度にオレは誰かを失っていく。

何度も後悔した。

何度も己を怨んだ。

許せなかった……自分も敵も。

無力もまた罪。オレはそう思う。

そして鮮血に染まったオレに、キアラはとても懐かしそうに、そして悲しそうに見ていた。

オレは彼女の視線を気づきながらも今はまどか達を見ていた。

「……次はお前らだ」

彼女達を最後にしたのは情があったからなのだろうか……。それはわからない。

けれど、今は敵だ。

殺すべきで、殲滅するべきで、全てを滅ぼすべき敵だ。

オレには誰も救えないし、救わない……。

できるのは敵を滅ぼし、外敵を葬り去ることなのだから。

「神威……お前は、なぜそうも平然としていられる！ お前はそんなに人を殺して何も思わないのか！」

オリ主くんが喚くがオレは気にせず、前へ進む。それに対する答えは、

「思ってるよ。邪魔だ。さっさとなくなればいいのに」

「んなっ!？」

「お前、何を勘違いしているんだ？ オレにとってお前らは単なる敵なんだ。なのに、お前らはオレが悪い。自分に正義有りと喚く」

くだらない、とオレは嘆息した。

「正義も悪も。信念も想いも、オレには必要ない。理由なんて、敵というものしかいらんないんだ」

オレは肩に壊れた『神器』のレプリカをかついで言った。

「許す許さないも、正義だの悪だのほざく前に力を示してから言えよ。でなければ、単なる負け犬の遠吠えなんだよ」

その言葉にまだか達や衛達は言葉を失った。力が無いから失う。それはいつだってこの世界の常識だ。

よくある物語の主人公が信念だと想いの強さと言うが、それは心の『力』と自分の『力』があるから言える。それ以外のモブと呼ばれる脇役は力も勇気もないから、虐げられる……。

それは現実だって起こりうることだ。

「そ、それでもお前がすることは許されない！ 俺の正義が！」

「お前の独善なんてどうだっていいよ。正義なんて人それぞれだ。押し付けるんじゃないよ」

何が悪で何が正義か……。それは人、一人一人が決めていくことだ。こいつの独り善がりでも何もかも決めつけられてたまるか。

「押し付けてない！ 俺は、そうなるべきだと言ってるからだ！」

「お前は自分が神様だと思ってるのか？ さっきから『そうなるべき』とか『そうであるべき』とか、決めつけているんだよ。お前が自身を主人公だと言うなら、それをオレは否定する」

なぜなら、と続ける。

「主人公はいつだって独り善がりなことはしない。決めつけず、自分の正しいことを信じて、そして悩み苦しんで進んでいく——それがオレが主人公だと思えるヤツだ」

辛いことがあっても。

悲しいことがあっても。

悩み苦しむことがあっても。

前を向き、進み続ける。それをご都合主義だと言う人もいるだろう。

ああ、確かに都合が良すぎる。否定してもいい。

だけど、それがオレの考える主人公なんだ。否定の言葉を聞いた上で、オレは自分の信じる主人公自分になりたい。

「かかってこいよ。お前らがオレというクソヤローをぶち殺せるなら、いいぜ。でも力無いくせに『自分が正しい』ってほざくなら、今

すぐ殺してやるよ。……何万人もぶち殺してきた殺戮者^{英雄}をナメる
じゃねえよ」

その一喝で、誰もが戦意損失に繋がった——オリ主^{クッヤロー}くんを除いて。

あろうことかヤツはオレの『神器』を投げつけたのだ。その矛先は
オレではなく……包帯を巻かれているキアラに——

突き刺さる身体。血は飛び散ることなく、そして身体から何か抜けていく感覚があった。

身体は倒れて、仰向けになった。

「ソ、ラ……キミは」

「……よかった」

間に合ってよかった……。代わりにオレが刺されたんだ……。

また失うところだった。それもオレのことをまだ見てくれる人を……。

「キアラ……、ありがとう、な……オレのためにいろんなことをしてくれて」

「やめろ……」

「これからは、みんなを……オレのために見まもってくれ」

「やめてくれ……!」

「ああ。そうだ……。オレはこんなクソツたれな世界でも——

——幸せ、だっ……たよ……」

まどか、ほむら、さやか、マミさん、杏子、千香——そして、みんな……。

また目が覚めたら、今度はきつと……——

最後に見たのは、綺麗な青空だった……。

☆☆☆

オレが進む道。そこから先は闇ばかりで何も見えなかった。

後ろから誰かの声が聞こえる。けれど、振り向くことなくオレは進み続ける。

殺戮者の末路————所詮、オレの最期なんてこういうものさ……。

身体が沈むことなく、ただ平坦な道を歩む。誰もいない道を歩み続ける。

ゴールも何もない道。そんなとき、思い出したのはあの綺麗な青空だった……。

第五十七話 彼の絆

(??side)

愕然とした。誰もが草太の凶行に驚愕し、愕然とした。まさか、味方であるキアラに手にかけるなんて思いもしなかったからだ。

「天宮！ お前は何をしている！」

「うるさい！ 悪いのは神威だ。何もかも神威が悪い！」

草太は自分の非を認めようとしない中で、千香がフラリフラリとソラに近づく。

「あ、あ……あ……」

彼女はやっと思いついた。彼が倒れ、目を瞑る光景を見てやっと思いついた。女は神威ソラを思い出した。

「ボクは……ボクはあ……あああああ!!」

発狂するくらい彼女は泣き叫んだ。彼女はいつも手遅れだった。彼が戦争で倒れたときも、彼がほむらによつて死んだときも、いつも手遅れだ。

ソラの近くに彼女の膝は折れた。絶望した表情に染まり、全ての景色が灰色になっていく。

「なんで、なのでなのでなのでなのでなので……!!
なのでボクは、こんなにも！ ——— こんなにも鈍感なんだよお……!!」

気づくべきだった。

早く気づいて、ソラを一人にするべきではなかった。

また彼を、愛しい人を、失ってしまった。

孤独にさせて死なせてしまった……。

「天ヶ瀬……そいつから離れる。今度はその死体を、」

「黙れ!!」

千香の『神器』により、全員、半透明の壁によって弾き飛ばされる。

唯一ソラとキアラだけ飛ばされなかったのは、計算してのことだ。

「ボクはホントに……許されなかったことをした。彼を一人にした挙げ句、ひどいことを言った……。ボクは、できるなら今すぐ死んで詫びたいよお………」

しかし千香は死ぬわけにはいかない。ここで死ねば、キアラとソラを誰が守る。

今度は千香が二人を守るときだ。

「どうしたんだ千香！　まさかまた神威に！」

「洗脳なんかされてない！」

いい加減にしてほしい。彼女は何度もそう思った。

「ボクはボクの意味で動いてる！　君みたいな自分勝手に動かされる駒じゃない！」

「……!?!」

「ボクは、ボクだ。天ヶ瀬千香は神威ソラを愛してる。大好きだ！」

この気持ちも、想いも、誰にも渡さない!!」

かつて人形だった少女が、初めて誰かの前に宣言した。千香はもう迷わない。彼女はソラのために戦う覚悟があった。

「……千香が神威に洗脳されたみたいだ。もう助けられない。こうなってしまえば、神威もろとも」

「テメー、正気か?!　さつきからめちやくちやなんだよ！」

「うるさいうるさいうるさい……うるさいウルサイ!!」

ブワツと草太の周りから突風が吹いた。そして彼の切断された腕から黒い腕が生えてきた。

「俺は正しい。正しいんだ！　周りがマチガツテイル！」

「そう、たくさん？」

彼の豹変ぶりになのはとフェイトは困惑する。そんなとき、クスクスと周囲から笑い声が響いた。

『クスクス……自身の過ちを認めない——そんな人間を見ていると滑稽だわ』

「お、お前は！」

全員が驚愕した。草太の背後に、アインスやリニスに死に迫いやつ

た根源がそこにいたのだ。

直に見た悪魔の顔はバイザーで覆われており、服装は黒いドレスだった。

その妖しい雰囲気にも誰かが呑み込まれた。

『感謝するわ。彼のおかげで、ソラの魂を……ほら』

悪魔が見せたのは、青白く輝く球体。その中には一人の少年が眠りについていていた。

「ソラー！」

『あなた達が彼を追い詰めてくれたおかげで、私はこの手に魂を得ることができたわ』

「キミが何もかも元凶だったのか……！」

『然りと云っておくわ』

クスクスと笑う悪魔にキアラと千香はそれぞれ武器を構える。悪魔はそんな彼女達を嘲笑する。

『あら、あなた達に何ができるといえるのかしら？ もはや、そこに眠っているのは脱け殻。切り離された魂は二度と戻らないわ』

「それでも……それでもボク達は！」

二人が悪魔に飛びかかる。千香とキアラのナイフは悪魔に――――届かず、草太によって身体を飛ばされる。

「彼女に危害を与えるな」

「っ、天宮草太。彼女はアインスの怨敵だぞ。なのに、なぜ味方にする――――！」

「正義のためだ。そう、俺は正しい……正しい……タダシイ」

狂気の目を宿しながら呟く草太が突如、背中から翼を吹き出す。黒い漆黒……闇の翼から何人かの人型に別れていった。

『あら、新しい力を使うのね』

「なんだ。それは！」

『知ってるはずよ天ヶ瀬千香。あなたと暁美ほむら……いえ、美樹さやかが手にいれた災厄の力』

「まさか……！」

かつて三人の少女がその力を得た。そして辛く悲しい想いをした。

災厄の力——『魔女』。天宮草太は『魔女』となっていたのだ。
『さしずめ、「ヒーローの魔女」かしら。独善が性質なんて、たちの悪い話よねえ』

悪魔はそう言ってパチンと指を鳴らす。その瞬間あと、まどか達に球体の結界が現れた。

『これで邪魔者はいなくなっただわ。彼女達にはオーディエンスになつてもらわないとね』

「くっ、援軍は……！」

「無理、みたい。見た感じボク達の結界も乗っ取られて牢獄状態だよ」
千香は歯を噛み締める。事態が自分達の不利を物語っていた。

おまけに草太はさらに地面からプレシヤ達が使っていた傀儡兵を喚び出した。

暗闇の穴から出てきた傀儡兵はプレシヤのものより、固そうな盾や鋭い槍を武装しており、パワーアップしていた。

『さあさあ、たった二人でどうするのかしら……クスクス。負けたら、ソラの記憶は今度こそ抹消されて彼が主人公になるのよお？』

圧倒的戦力差。そして物量。傀儡兵をしのいでも幹部らしき未知の『使い魔』がいる。

もはや、勝負どころではない。

遂に彼女達の心はほぼ折れかけ、力無く武器を落とす。そして、無慈悲にも傀儡兵が飛びかかり——

「だから、どうした」

その傀儡兵は何者かによって動けぬ藻屑にさせた。二人の前にいたのは黒髪で金色の瞳を持つ青年とエメラルドヘアの女性だ。

青年の手には小太刀が握られており、それを使って傀儡兵をガラク

夕にしたのだろう。

「ヌフ☆ 死んじゃえ。きやはははははははー！」

一方、女性は両手からチャクラムを召喚し、狂気的な笑い声をあげながら、半径十メートルにいた傀儡兵をスクラップに変えた。

『あなた……確か、』

「はじめましてだなクソ悪魔。そのクソヤローに試し斬りされて寝ていた——」

——五木雷斗さんだよコノヤロー」

英雄が眠りについていた今、目の前にいる二人を見て彼女達は思う

——『最凶コンビの再来』、と。

第五十八話 最高の味方

(??side)

時間はソラが眠りにつく前に遡る。五木雷斗は目を覚まし、すずかに抱き締められていた。

いったいここはどこで、なぜここにいるのかわからない一種の記憶障害が起きていたのだ。

すずかはオロオロする中で、そこに現れたのは救世主——いや、究極の変態ノエルだった。

「キスをすれば記憶なんて蘇る!!」

「どっから出てきたのですか、その暴論!?!」

すずかのツツコミを無視して、彼女は彼の唇を無理矢理奪い、情熱的なキスをした。

「やめてやめて」と何度も雷斗がお願いするもやめず、遂にぶちギレた彼はどこからかバットを喚び出し、ノエルをぶん殴った。

「やめろって言ってるだろうがこの変態!」

「きやん、雷斗ちゃん反抗期!? やだ、乱暴してエッチいことするのね! エロ同人のよう——」

「言わせねえよ!!」

「あはん!?! キタコレエ!!」

なんと自分が『閃光の神器使い』だった頃の前世も蘇ってしまったのだ。豹変した雷斗にすずかは困惑するも、「まあ無理ないか」と納得して彼を落ち着かせた。

それから彼と彼女達は前世の話をしていたわけだが、突如ノエルが「はっ! 事件のにおいがするぜ!」と異変を感じて飛び出した。

雷斗はそれに呆れながらついていき、すずかも彼に背負われる形についていった。

すずか的には彼がもう危ない目に合わないようにと言って監視す

るつもりなのだが、どのみちノエルによって合うわけだけど、と雷斗は内心嘆息を吐いた。

そしてたどり着いたときにはソラが倒れ、そして千香とキアラがピョンチになっっている場面だ。雷斗はすずかをおろして魔法で大人モードとなり、身体能力を駆使して彼女達の前に現れた。

草太はそれを見て呟く。

「生きていたのか……」

「よお、クソヤロー。テメエにやられて大変な目にあっただぞ。ノエルの馬鹿が前世の記憶を無理矢理呼び戻すわ、発情するわ、大変だったんだぜ。責任とって死ねや、てか死ね。むしろ死ね」

「お前が死ね」

草太は傀儡兵を差し向けるが、それはノエルのチャクラムがガラクタに変える。雷斗は倒れたソラの身体に触れながら呟く。

「馬鹿弟子……すまないな。遅くなって」

『そうよ。何もかも遅いわ。ソラは死んだ。そしてその魂は私の手の中に……』

「うるせえよ」

ギロリと睨み付けた雷斗の気当たりで悪魔はやや後退した。殺気がとても濃密だった。

雷斗は彼の中に継承させた『神器』を取り出す。スッポリと抜けた『神器』をつけ、彼は言う。

「コイツはまだ死んじゃねえよ。あのクソヤローの『神器』ははつきり言っただけ粗悪品だ。おかげでまだ魂と肉体は完全に分離してねえ」

「じゃ、じゃあ……!」

ソラはまだ死んでいない。それだけで彼女達の心は奮え立たせることができた。

しかし雷斗の顔はまだ険しい感じだった。

「だが、分離した魂も時間が立てば元には戻らなくなる。それまであのクソ悪魔から魂をぶんどる必要がある」

『あら、それができるかしら?』

悪魔が合図を出したとき、ソラが殺った死体そのまま起き上が

る。なのは達はそれを見て驚愕し、はやては思わず口に出した。

「……どうして、生きて」

「元から人間じゃなかったんじゃねえの？ まあ、知らずに何かを埋め込まれていたのか、はたまたそれとは違う……か」

雷斗の答えに悪魔は笑い声を止められなくなった。

彼らが人間ではないかどうかなんてどうだっていい。そう、今は敵が増えたことにより雷斗達は危機に陥ったのだ。

「五木雷斗。どうするつもりだい」

キアラの問いに雷斗は不敵な笑みを浮かべてから、答えた。

「ヤベ……マジでどうしよ」

「はいイイイイイ!?!」

全員、シャウトした。悪魔は「ええー……」的なガツカリ感を漂わせて、呆れていた。

「カツコつけたのに、何か策はないのかい!?!」

「やかましい。千人無双なら可能だが、これどう見ても万人だろ。物量で確実に死ぬって」

「千人も万人も変わらないじゃないか!」

「いや、変わるから。マジで万人相手してみ。全速力でマラソンした後、腹筋腕立てしてからまたマラソン並みに疲れるから」

「例えがわかりにくい!」

「く、ククク……あはははははひははは!!」

まさかの白旗宣言に草太は笑った。

「まさか神威の師匠が降参かよ。笑わせてくれるなよ！」

「うつせーな。黙ってる」

「これじゃあ、程度が知れるな。俺が英雄にふさわしい！」

「あっそ」

「……………さつきから挑発してるのに、なぜお前は乗ってこない」

「だって、どうだっていいんだよ」

雷斗はバツサリと切り捨てた。

「第一、お前が『英雄』だのなんだの自称したところで『英雄』にはなれないし、その名に意味はない。だって『英雄』は周りによつて勝手に決められる偶像物なんだよ」

『英雄』とは周りがはじめてそう認知したとき、『英雄』と名乗れる。自身を英雄だと言ったところで誰も認めてくれないのは当たり前だ。今度はノエルが口を開いた。

「それに『無血の死神』を希望をもたらす英雄って言っていたね。ああ、ホント笑えるよ。馬鹿馬鹿しくて」

「なんだと!?!」

「だって、それは——」

——『絶望』の果てに生まれた殺戮者の称号なんだよ」

「ッ！」

思わずゾツとした。ノエルの言葉にはなんとも言えない重圧があった。

何度、仲間を失ったか。

何度、敵を殺してきたか。

何度、誰かに裏切れてきたか。

ソラの絶望の果て——それが『無血の死神』という英雄が生まれたのだ。

「だから、キミみたいなクソムシがワタシの息子の武勇を汚すな。虫酸がはしるよ」

「オイ、いつからアイツはテメエの息子になった」

「え、だって。パパは雷斗でしょ？　なら、妻であるワタシがママにふさわしい!!」

「俺がアイツなら泣くわ」

雷斗はやれやれと呟くと草太は激昂して、全軍に命令を下した。

「なら、神威の言った通り示してみろ！　力でな！」

突撃。まるで激流のように敵軍が攻めてきた。雷斗は頭を掻いており、ノエルは地面に落書きをしていたので、さすががツツコんだ。

「なんでそんなに呑気にしてられるの!?!」

「いやだって慌てたってどのみち、相手するだろ。なら、冷静になつて待ってればいいのさ」

「いや、冷静になつてると待つのは集団リンチだから！　てか、ノエルさんは何してるの!?!」

「落書きという名の召喚術！」

「無駄なことをしてないんだ!?!」

ノエルが「できたー！」と嬉々した声をあげ、一斉に召喚されたものが喚ばれる。

ソラの友達と言うべき者達。

ただの気まぐれで承けた者達。

単に草太をぶちのめしたい者達。

彼ら彼女達。少年少女達。

どれもこれも人外と呼ぶべき化け物達が集まったのだ。

『な、なぜ。抑止は……!?!』

「へえ、やっぱ『抑止』のことを知っているんだな。だけど、残念。こいつらはその『抑止』によって許された存在だ」

つまり、と雷斗は続けて言った。

「テメエらはやり過ぎた。おかげで『世界の敵』というランクアップしたんだよ」

「ヌフフフ、ワタシ以上に『抑止ちゃん』を激おこポンポン丸にさせるなんてやるじゃーん♪」

雷斗の身体に紫電が起きる。バチバチと音を鳴らし、身体を鳴らしながら、彼は言った。

「さあ、祭りの始まりだボンクラ共」

「ゲストの皆様も楽しんでってね!!」

彼と彼女の後ろには、最高の味方達。最強の助っ人共。
敵にとつての惨劇が今、始まる——

「あれ？ 例のケモミミ生やして神様っぽい格好した五人兄弟姉妹は？」

「えっと、姉妹の中の妹が結界に閉じ込められたピンクと黒髪の少女に『まどかとほむほむだあああ(*≧▽≦*)』と言って結界ぶち壊してスリスリしているところを止めてるよ」

「……その妹に後で伝えろ。貴様の尻尾をノエルにモフられるか、修斗をノエルの生け贄にするか選べってな」

「誰だい？ そいつ」

「なんとなく頭に出てきた」

第五十九話 コラボつちやいますその二（あれ？ 番外編じゃない？ by ソラ）

喚ばれた少年少女達。それに対抗してか、悪魔側にも動きがあった。草太（使い魔）がさらに増えたということである。

「同じ人間が二桁……気持ち悪！」

「ナルトだって、二桁どころか三桁まで同じ人間を出せるぞ」

「分身だからモーマンタイ」

どこに違いがあるんだよ、と雷斗が悪態をついていると黒い穴が現れ、そこから草太が現れる。

使い魔。雷斗の脳裏に浮かんだその言葉だが、草太は既に黒いジャックナイフの形の魔力刃を雷斗に向けていた。

防御は不可能。回避は間に合わない。ならば、と雷斗が『神器』による体内電流の強化で、伝達される電気信号の速度を早める。

スローになる雷斗の視界。次にどうするかと考えたがある人物が既に行動に移していたため、体内電流の強化を取り消した。

迫ってきた刃は雷斗を貫く———ことはなく、一人の少女が起こした防衛領域によって防がれた。

「シナ……!?!」

「ATフィールド全開！ なのです」

刃が砕け散り、そして次に少女———艦娘のプラズマが起こした行動とは、

「悶えて死ね！」

「ンギャアアアアア!?!」

ケツにATフィールドの槍をブツ刺し、超電磁砲発射してーの、回復させてーの、また撃ちまくる。

ズドオン、ズドオン、ズドオン、ズドオン、バチバチ、ジユドオン!!と至近距離からの砲撃と超電磁砲発射という鬼畜リンチである。

それもケツにATフィールドの槍を突き刺した状態で。

目の前で起きた凄惨な出来事に雷斗は目を閉じ、一言を呟く。

「……砂まみれになったからシャワー浴びたい」

「目の前の出来事を気にしてよ!!」

目の前の出来事をスルーした雷斗に思わず、すずかはツツコむ。いや、確かにプラズマが起こした行動で目の前にいた雷斗が余波によって砂まみれになったのは事実だが、その前に敵を心配してほしかった。

目を向ければ、プラズマが「君が泣くまで殴るのをやめない! なのです!!」と『なのです無双(なのですと言いなながらやりたい放題)』をしていた。

雷斗は目の前にいた物体をスルーしたくなった理由は、彼女と戦う場合になったもああなるという未来を予想してしまったからだ。

良い汗をかいたプラズマは、シーンと静まる全員に向けて言った。

「私は男女関係殴る覚悟があるので」

「アンタこえーよ!!」

雷斗の心のツツコミにプラズマはやり過ぎちゃったテへと舌を出して、照れていた。……能面みたいな顔でテヘペロとはそれはそれで萌えるのだろうか。

ノエルが興奮してクネクネしているから。

ともあれ、プラズマに任せたのはある意味正解だったかもしれない。

敵の士気がドン引きという低下から始まるというわけだから。

「みんな……お願い。ソラを助けて!」

千香が頭を下げた。それに対して彼ら彼女らの答えは、

「」「断る!!」「」

「ええ!? なんで!」

その答えにすずかがツツコむ。千香は「あ、やっぱり?」と乾いた笑みを浮かべていた。

「いや、当たり前だろ。こっちの都合で喚んできたキチガイ共だし」

「そこは空気読んで『いいよ!』と言ってほしかったのだけど……」

「馬鹿だろすずか」

「馬鹿って言われた！ ひどいよ！」

スルーして雷斗は淡々と答える。

「そもそも、コイツらはマーキングして喚んだのはノエルだけど、『抑止』によって喚ばれたもんだよ」

「えっと、つまり？」

「この世界を物語と例えると読者からの代理人。自分の代わりにあのオリ主クソヤローをぶち殺すための刺客」

「なんかメタいのは気のせいかな？」

さすがのツツコミに雷斗は「それから」と続けて言った。

「もう、戦いが始まってから」

「え？」

指をさした方向には既に戦いが始まっていた。「ヒヤッハー！」「汚物は消毒だあ！」と度々聞こえてきているが、さすがは気のせいにした。

「もう止められないの？」

「止められないじゃない——手に負えないんだよ」

「もう無理ポ」

ガクンツと膝についているとノエルの「お持ち帰りイイイイ」という謎の奇声も聞こえた。

何やってるのアイツ。

十六夜弦夜。常に笑顔、戦闘狂、吸血鬼。

前世は、周囲の人間に化け狐といわれ暴力を振るわれていたが、なぜ化け狐といわれているかは本人は知らない。転生後は、クトウルフ神話の神々に会い、SAN値がピンチ。現段階では友人一人、片思いされている女の子が二人、ロリ一人がいる。

そんな彼はさっそくオリ主くとぶち当たっていた。

ゾンビ局員や傀儡兵をぶちのめしていたら、前に現れてきたのだ。「ここで止めてみせる！」

「くだらない」

そのセリフに弦夜は鼻で笑った。なんせ、敵は自分の力量をわかっている。いない。

弦夜は『干将莫耶』を構え、言う。

「こんなにも世界が混沌に満ちているから——死という闇に溺れなさい」

ズダツと地を蹴り、斬り込む。草太はそれを防ぐが、しのいだのは一刃目。二刃目となると、デバイスが弾かれ、がら空きになった身体に干将を叩き込む。

そんなとき、草太の地から闇の触手が槍となって襲いかかる。弦夜は後退して回避したが、頬に血を流れていた。

(『抑止』の影響……か。不死性がなくなってる)

この世界に渡るとき、どうやら吸血鬼やら宝具の特典、そして魔眼とも呼べる力が弱体化している。そのため、彼のあつさり済む戦いはやや長いモノになってくるのだ。

次々と触手が伸びていき、弦夜は次々と回避していく。

「逃げてばかりじゃ俺は倒せないぞ！」

「なら、やめるや」

弦夜の目が紅くなり、瞳には巴の様子が浮かび上がる。『写輪眼』という魔眼の一種で忍術だけではなく、魔法、魔術など術式を解析し、コピーできる優れものだ。

追記しておく、この目は格闘技などと呼ばれる体術までも解析してしまうが、今はどうでもいいことだ。

彼は草太の動きを瞬時に解析し、見切った。そして触手の動きも予測し、紙一重に躲けていき、最低限の動きで懐に飛び込んだのだ。

草太は目を見張るが、もう遅い。彼の両腕を切断され、苦痛に叫び上がる。

そして彼はそのまま宝具を使用する。『天の鎖』と呼ばれる英雄王が使っていた宝物庫の鎖だ。

神性が高ければ高いほど、この鎖の拘束度が上がる。皮肉な話だ。天宮草太は悪魔によつて『神に似た邪悪な力』を得た。その使い魔である存在を神で言う天使と考えてもよい。

よつて、彼は完全に身動きがとれなくなった。

「くそが！」

「テメーは、後悔しながら惨たらしく死ね」

「ヒィ……」

地獄の始まりだった。

再生した両腕も、両足を含めて『天の鎖』で縛つたあと、刀剣類で、全身を隈無く刺した。

あと、それらを抜いて傷口を再生したら、槍で刺したあと槍を抜くという繰返し。

「やめろやめろやめろオオオオオ!!」

「ギャハハハハハハハクハハハハハハハハハ!!」

それが終われば、剣術でバラバラに切り裂き、再生したら、体のすべての骨を粉碎してもとに戻して、忍術の火遁で、丸焼きにする。

「アハハヒハハハハクヒヤヒヤヒヤヒヤキヒヒヒヒヒヒ!!」

まだ終わらない。再生したら、水遁で、溺死させかけ、風遁で、再度バラバラにし、再生したら、土遁で、相手の体に穴を開けて、再生したら、雷遁で、相手を感電死させる。

「ギャハハハハハハハハハ!!」

もう終わつてあげてと言いたいところだが、まだ続きがある。天照である程度燃やしたら火具土で天照を吸収し、月詠で精神を殺して、精神をズタズタにしかけ、神威で、上半身と下半身をおさらばさせ、神経に今まで行ったことを信号で流した。

全て狂喜しながら実行した。

狂喜に支配された笑みで実行した。

最期に草太———という名前の使い魔は動かなくなり、黒い塵になつて空気に溶けていった。

これが人間のすることか、と言いたいが彼は人間じゃないから仕方

ない。うん、まあ仕方ないのだ。

雷斗はそれを見ながらそう思っ、とにかく彼の戦いを見届けた。そして終わったら、彼は膝につく。どうやら、『抑止』の影響で本当に弱体化しているようだ。

(まあ、もうコイツには戦えるほどのスタミナは残されてなさそうだ。制限されてる力を使いまくったのだから)

雷斗が印を組むと弦夜の足元に魔法陣が浮かび上がる。彼のスタミナを回復させる魔法だ。スタミナを回復した彼は再びザコキャラハントを開始するが、やはり完全回復といかない。

彼がもう一体の使い魔^草を殺せるのは難しいことなる。

(あの使い魔は『不死身』の特性があったんだな。つまり、他にも使い魔には特性があるのか?)

雷斗はそう思いながら、弦夜と同じくザコキャラ狩りを開始するのだった。

兵藤一誠はまごうことなく美少女だ。基本は真面目でしっかり者だが融通が利かないわけでもなくそれなりに柔軟な考えをすることもある。時折過激な行動や発言をすることもある少女だ。

そして、彼女の相方であるのがヴァーリ・ルシファーという少女だ。美少女二人の華やかなコンビ。まさに絵になる主従コンビだ。そんな二人の戦いと言えば、

「はははは！ 無駄無駄無駄無駄ア！」

「えっと、ヴァーリ。なんでそんなテンション高めなの？」

「いや、なぜか頭にそう叫べって天の声が聞こえてなんとなく……」

ヴァーリは知るよしもないがここは変態を生み出す世界。ゆえに彼女は知らない誰かの声に支配されそうになったが、自力で耐えきったようだ。

「さすがヴァーリ！ そこに痺れるう、憧れるう!!」

「うるさいなあ。誰？ 今の変なこと言ったの」

「ヌフフフ、よくぞ聞いてくれました！ さすがおっぱい魔神のイツセーくん！」

「私、おっぱい魔神なんかじゃ……」

「そんなけしからん二つの丘をもつて言うセリフかあああああ！」

我らの変態、ノエルが一誠に飛びかかる。そこをヴァーリが、ツツコミ代わりに魔力砲撃を撃つ。ザコをいっそうする一撃を含めて、
「アツウウウウウウ！」

「これは俺のモノだ。誰にも渡さん」

「もう……ヴァーリったら」

燃やされるノエル。照れる一誠。

悪は燃やされた。文字通り、焼却された。黒焦げとなったノエルをツツツツつつきながら一誠は言う。

「やり過ぎじゃないかな？」

「問題ない。なんやかんやあっても生きてそうだし」

「くっ……ワタシが死んでも、第二第三の変態が………ガクツ」

「あ、死んだ。どうしょ」

「ほっとけ。なんか、コイツ見てたらなんか頭が痛くなる……」

それは苦労人の証——つまり普通の感性という証である。おめでとうヴァーリ。彼女は変態化される運命から脱却したのだ。

かなりどうでもいいことだが。

「さて、ここのザコ処理は——つと」

ヴァーリが謎の結界により、一誠と分断された。残された一誠の前に草太と同じ形をした使い魔が現れる。

「クキキキ。あの女はあの結界の中に閉じ込めた。あの中では、たくさんさんのゾンビと傀儡に」

「あ、もういいから言っていいい？」

一誠にとつてどうでもいいことだった。なぜなら、ヴァーリは自身と苦楽を共にし、結ばれた恋人だ。ゆえに心配する必要は微塵もなかった。

「とりあえず、召喚された立場だから、まあ依頼者の言う通りにしな

きや、ね……」

左に『赤龍帝の籠手』、右に『エンドレス・ギア終焉龍の籠手』。

倍加と終末をもたらず神セイクリッド・ギア器達だ。彼女は目の前にいる敵に対して言う。

「よくもヴァーリと離ればなれさせてくれたわね……龍の逆鱗に触れた者がどうなるか知ってる？」

龍達の籠手を持つ少女の蹂躪劇が始まろうとしていた。

第六十話 コラボっちやいますその三（やりたい放題なコラボキヤラ）

『終焉龍の籠手』^{エンドレス・ギア}。このセイクリッド・ギアは『Endless』の音声で任意の対象を強制的に『終わらせる』能力だ。

『終わり』とは様々な意味がある。

目標を達成にした『ゴール』。

大切な人との別れの『別離』。

生物の最終的な終点の『死』。

そう、『終わり』とはそれぞれ意味がある。『終わり』のあつての『始まり』があるのだが、このセイクリッド・ギアには『終わらせる』ことしかできない。

「光よー！」

弦夜と戦ったような闇の触手とは別に真っ白な光線が地を蹂躪する。一誠は戦いの経験による回避で、全てを躲しきっていた。

「悪魔は光が弱点だろお!? だったら『狂光』に当てれば狂う前に、死んじまうなあ!!」

『狂光』——ダメージを与え、理性を無くす凶悪な光魔法。

この草太の特性は『狂気』と見ていい。狂っている証拠にめっちゃくちゃ乱れ撃つ。

「ほらほら、逃げてばっかじゃ意味ないぜえ！」

「やかましいなあ」

一誠はただ避けているのではない。彼が大きな隙を作るのを待っていた。『狂気』の草太が『狂光』を放ち、そのインターバルを狙って、『Endless』と右の籠手が唸る。草太は再び、『狂光』が出せなくなつた。

「……………は？」

「本気でいくわよ」

禁手化した一誠は、赤と黒が混ざつたスリムな鎧を身に纏つた。

「まあね。さてと……」

ヴァーリが一誠に抱きついた。ビクツと一誠は反応するも、それを受け入れた。

「も、もうヴァーリ。こんなところで……あん」

「ふふん。口では言っておいて身体は正直だぞ？」

ヴァーリは草太という害虫に散々なことを言われて、癒しを求めている。その結果がセクハラに繋がるのは、不明なのだが。

「こんな人の目がある前でえ……」

「だから燃え上がるじゃないか」

ヴァーリと一誠の唇が近づき、そして――

『キマシタワー』!!」

「ツ!」

一人の女性の叫び声で高ぶっていたモノが萎えた。

「いけませんわ! そんな往來の場でエツチいことして、なおかつ女の子同士なんて背德的ですわあ! ワタシには激しすぎますわ!」

「……いつから復活してたの?」

「え、最初から。まーさーかー、こんな往來の場でエツチいことするなんて、もしかしてイツセーちゃんって結構ムツツ――」

「消し飛べ!!」

「みぎやあああああ!! ありがとうございますウウウウ!!」

悪は滅びた。いや、ぶっ飛ばされた。一誠の魔力砲撃で。

まあ、ノエルにとつてそれはご褒美なのだったりするが、一誠はすぐに周りを見る。

やはり、ゾンビや傀儡が溢れかえっている。

彼女は嘆息を吐きながら、気を取り直す。

「後で埋め合わせしてもいい?」

「いいぞ」

「それじゃ——今こそ裁きの時『妖精の法律』!!」

とある異世界では最強とも呼ばれる魔法がゾンビと傀儡兵に襲いかかる。彼女達の戦いはまだまだ続く——

一方、雷斗は傀儡とゾンビを殺りながら、空に飛んで気持ち良さそうに顔をしているノエルを見ていた。

「何やってんだアイツ?」

どうせあの巨乳の茶髪少女に変なこと言っつてぶっ飛ばされたんだろーなあ、と呟きながら彼は目の前のゾンビと傀儡兵、そして使い魔を睨み付ける。

「うげえ……悪魔のヤローが後ろに下がったせいになんか余計にややかしいことになってきたなあ」

ゾンビと傀儡兵。確かに駆逐しているが倒せば倒すほど、増えているような気がする。おそらく『増殖』の特性がある使い魔がどこかに潜んでいるはずだ。

(木を隠すならば森の中って言ったところか。さて、ここをどうする……)

そんなときだ。黒髪と瞳、黒ジーパンと白いパーカーを着る。そして、十字架のネックレスを付けている男——岩谷正輝が、雷斗の前に立つ。

信用できる人以外にはほとんど無口と無表情な彼だが、雷斗に初めて声をかけた。

「……いけ。ここは任せろ」

「……………」

「心配する必要はない。お前が成すべきことをすればいいだけだ。——

——いけよ。お前の大切なモノだろ?」

「……感謝する」

雷斗が金色に光だした刹那、ゾンビと傀儡兵を抜け、彼らの後ろにいた。

そんな軍団は雷斗を阻止しようとした刹那、大量の武器によって串刺しにされた。

「自分と家族と仲間は大事にしくちやな。だから助けてやるよ」

使い魔は無言のまま、目を瞑り、目を開いた瞬間あと、正輝は右へ飛んだ。嫌な予感がして飛んだのだ。

その直感が正しかったのはすぐに理解した。なんと正輝がいた場所が爆破されていたのだ。

『爆裂』の特性を持つ使い魔。どうやら正輝の相手は爆破を使うようだ。トリガーは普段閉じられた目が開いたときのようだ。

閉じられていた目が再び、開いた。正輝はまた回避したが、ゾンビと傀儡兵が襲いかかる。彼は舌打ちして『王の財宝』から取り出した聖剣で対応するも、使い魔の視線の先には正輝は立っていた。

「ッ……い」

使い魔はゾンビ達もろとも正輝を爆殺するつもりのようなようだ。そして、目が開かれ、正輝は爆破によって姿が見えなくなる。

使い魔の能面の顔は喜色あるように見えるのは気のせいではない。

「甘い」

使い魔の頭に『！』マークがついたとき、正輝は動いていた。彼のもう一つの手——Dーダグスが発動していた。

Dーダグスというのは周りにある怒りと悲しみなどの負の感情を吸収し、エネルギーに変え、力に変えるモノだ。

Dーダグスの姿はNARUTOのイザナギのような状態であり、ドラゴンの姿をしている。

その力を解放した状態で、彼は姉によって変えられた設定で防御の特典を発動して防いだのだ。ちなみに、なぜ姉の特典とも言える『全設定変更』が使えるというのは、『抑止さん』の計らいである。

「もう躊躇なく殺るとするか」

その宣言通り、シャドー・という技を使って影分身を作り出し、姉

の全設定変更を使って草太（使い魔）の設定をlevel1状態まで弱体化させた。『是 射殺す百頭』でぶちのめし、『王の財宝（姉の特典で正輝の特典の武器を非殺傷設定にさせるがダメージは相当なもの）』を死なない程度に滅多刺しと滅多斬りを開始。

草太（使い魔）はやつと能面の顔から苦痛であがく醜いものへと変貌した。

そして最終的に、Dーダグスで敵を動けなくさせ、ゼロ距離から改悪化『約束された勝利の剣』に『天地乖離す開闢の星』の発射準備をさせたシャドー達に号令をかける。

放たれたオーバーキルにより、最後に草太（使い魔）は「なぜ、負けた……」と呟いて黒い塵となっていた。

『無血の死神』という英雄の称号を奪った草太（使い魔）に、消えていった彼に向けて、正輝は言った。

「俺は所詮英雄殺し。それ以上もそれ以下もない」

皮肉にも『英雄』と自分で語った罰を裁かれるかのように、彼はそう呟いて、背中を向けてゾンビと傀儡兵を蹂躪し始めた。

「ちよ、なんでこっちに砲撃くるのー!?!」

ノエルにガンガンと砲撃が飛んでくる。【S2機関】と呼ばれる『つおいビーム』なのだが、なぜか彼女に向かって飛んでくるのだ。

プラズマは意図してやっていないが、遠距離からの『なのです無双』にヒヤッハーしていたのである。

善意悪意お構いなしのトリガーハッピーをしていたのだ。

そしてなぜかのがノエルになっている。目立つエメラルドヘアーが原因だったりする。

「敵も倒しているのがたちが悪い！ つとー！」

草太の形をした使い魔が斬りかかる。ノエルはその場を後退し、彼の剣をじつと見ていた。

(……『概念殺し』が込められている剣。『殺害』の特性のある使い魔かな)

雷斗の電波による通信で事前に情報は渡っていた。人それぞれにある耳から脳に伝わる伝達電気と波長を合わせることで通信ができる。

当然、それは遥かに難しいことだ。なにせ、言語を解釈させるための演算能力だけでなく、効果範囲を従順承知していなければならぬ。

まあ、なんにせよ。ノエルの目の前に相手は天敵と言ってもいい。(ワタシってある意味概念に近いものだからねえ。あれに斬られたらしばらく動けなくなりそうだし)

ノエルはキョロキョロと戦ってくれないかなあ、美女のために殺り合ってくれないかなあという人を探す。そして見つけた生助け贖人は、

「田中光輝くん！ 君に決めた！」

「有里零だ！」

軌跡シリーズのロイドと仮面らいたのフィリップを足して2で割った感じの少年をどこから、借りた猫のように使い魔の前に出す。

使い魔は無言のまま斬りかかるが、そこを日本刀で受け止める。

「おお！ アドリブなのに合わせるなんてスゴイスゴイ！」

「……絶対、後でシバく」

「それは楽しみ？ んじゃ、アディオス！ ノエルちゃんは華麗に去るぜ!!」

「によほほほほほほっ!!」と笑いながら逃走したノエル——
に、プラズマのレーザー砲撃によって吹き飛び、『スタープラチナ』によってとどめをさされていた。

どれも艶のある声で殺られていた辺り、ヨカッタのだろう。

零はそんなノエルに対して深く考えないようにした。

鏝くわぜりに合っていた日本刀で草太(使い魔)を飛ばし、剣道の『引き面』の用法で斬りかかる。しかし、それは常人離れの回避能力によ

り、躲され、草太（使い魔）が斬りかかる。

この使い魔の一太刀一太刀は必殺の概念が込められている。よつて、零が持っている日本刀を対象に入れば、その日本刀は『殺される』。零は日本刀で受け止めるつもりはないのか、構えず、ただ彼の剣が迫るのを待っていた。

確かにこの一太刀を日本刀で受け止められなければ、まず『殺される』ことはない。しかし、剣は剣。斬られれば無傷とはいかない。

零に迫る剣。それは彼の背後にいた『ナニカ』が代わりに受け止めた。

物理攻撃と雷を主に使う『ペルソナ』——名は『イザナギ』。そのペルソナを発動させた零は、草太（使い魔）をペルソナで殴り飛ばした。

「さあ終わりの時だ。蹂躪される覚悟はできたか？」

その言葉と共に、零はカードを取り出す。『クラスカード』と呼ばれるそれを使うことで『英霊』の力が得られる魔術霊装だ。

『クラスカード、インストール』——『アーサー王』!!」

インストールされたカードの力により、アーサー王の力を得た零は迫る草太（使い魔）に向けて黄金の剣を降り下ろした。

「勝利する剣!!」

「ぎぎやあああああ!」

草太（使い魔）は黄金の光に飲み込まれていき、そして黒い塵となって消えていった。

残された彼は、

「目には目を。歯には歯を。悪には虚無の終わりを」

そう言っただけで消えていった使い魔に背を向けるのだった。

第六十一話 コラボっちゃいますその四（byあれ？

こんなヤツいたっけ？）

茶髪で目はウルトラマリンド、服装はジーンズにライダーズジャケット少年——彼。

不知火匠は理解できなかった。ここはどこで、なぜ自分はいるのか。

彼は、こことは違う女神のうっかりで電車にひかれそうになった子供を助け、代わりに少年が死んでしまった為、女神が贖罪の為にその少年の希望を聞き、『ペルソナ4』の世界に転生し、育ったのが不知火らしい。

『ペルソナ4』の主人公と供にあらゆる難関に立ち向かったが、足立の銃弾に倒れ、死んでしまいが太っ腹な女神に助けられ、ソラ達の世界に転生された。

『抑止さん』的言えば、にはイレギュラーである。本来、あり得ないことだ。

『抑止の存在』がなぜ彼を消そうとしなかったのかは謎なのだが、今はどうでもいいことだ。

とにかく、彼はここに召喚された。理由は『戦え』。それしかないのだが、彼はソラとの接点などない町から訪れた異邦人である。

よって、最初は不測の事態にやや混乱していたが自分と共にいた明智巴あけちともえという少女とはぐれてしまい、おまけに周りは傀儡兵とゾンビの集団。彼女の身も心配のため、匠は足を動かさせていた。

（というか、私の『ペルソナ全書』の力の一部が封じられている……）
使えるのはペルソナの精霊魔法、『真実の目』、『全ての悪意』のみ。
『抑止の存在』は『全てのスタンド』やら『全てのペルソナ』、または『全てのライダーに変身』というチートは許さない。

……ぶっちゃければ、途方もないからだったたりするわけだが。

「ミツケタア!!」

ドオオンと目の前に何かが落下する。砂煙が舞い、匠の前にいたのは草太の使い魔。

その使い魔もまた草太の形をしており、しかも筋骨隆々という明らかな肉体派のようだ。

「……変態？」

「ヘンタイではナイ！　コノスバラシキきんにくガワカラヌカあ!!」
「私から見れば、君の資格好は世間一般で言う変態なのだが……」

使い魔の服装はブーメラン型の海パンのみ。どこの海パンデカだと彼は内心思う。

「クソウ、アノともえというオンナみたいナことライイヤガツテ」

「巴に会ったのか？」

「ワガにくたいでコロソウとおもったガにげられ——がはっ！」

匠は使い魔の言葉を最後まで聞かずに、『ザンダイン』という衝撃魔法をぶつける。草太（使い魔）は地面と平行に飛び、地面とぶつかる身体を滑走させる。

「とりあえず、わかったことがある——お前は『俺』の敵だ糞が」
好きな女を殺そうとするこの最低なヤツを許せない。普段の性格は優しいが、キレると口調も変わり荒っぽくなる——それが不知火匠という少年である。

彼は地を蹴り、次に与えるのは至近距離からの雷系魔法だ。しかし、この草太（使い魔）は俊敏に動き始めた。

「グハハハハ！　ワレハは『強化』のトクセイをモツつかいま！　ニクダンセンでワレにはカテヌー！」

「なら、動けなくすればいいだろが」

『タルンダ（攻撃力低下）』、『ラクンダ（防御力低下）』、『スクンダ（命中率低下）』を相手の動きに合わせて発動する。それにより、草太（使い魔）の動きは目で終えるくらいになり、力もそれなりにしかなかった。

『タルカジャ（攻撃力上昇）』、『ラクカジャ（防御力上昇）』、『スクカジャ（命中率上昇）』を自身にかけ、彼は草太（使い魔）の懐に改心の一撃を与えた。

吹き飛んでいく草太（使い魔）は激昂しながら、拳を振り上げる。

「クソがアアアア!!」

迫る草太（使い魔）。そんな状況の中で、彼は使える『ペルソナ』を召喚し、『ミックスレイド』を発動する。

『ハルマゲドン』

その一言で、草太（使い魔）の体力ゲージはマイナスカンストしたと思われる。一撃で、身体は消滅し、黒い塵となる現象を起こさせることなく、草太（使い魔）は滅んだ。

「アンタが正しいか正しくないか知ったことじゃない。アンタが邪魔だ。だから潰す」

彼はそう言っただけ大切な少女の元へはしる。途中、変態淑女たるノエルと遭遇したが同じようにブツパして撃退した。

中性的だがしっかり男よりの青年——空崎無翔が霧の潜水艦イー401に重巡タカオ、大戦艦ハルナ、キリシマにヒユウガ（変態）を連れ、砲撃で蹂躪していた。

その中にこの世界ではないさやかやほむらがいるが、彼女達もまた戦士である。

そんな砲撃の中に、草太（使い魔）がいた。この使い魔こそ『増殖』の特性を持つ使い魔だ。

いち早く見つけた無翔はそいつに向けてミサイル無双で圧倒的火力で滅ぼしにかかっていた。

「こ、こんなことって……——」

「静かに……眠れ」

『増殖』できないまでに、無翔は撃ち続ける。彼は元軍人。かつて自身が死ぬそのときまで戦い続けた戦士。そして、遂に草太（使い魔）はデリートされた。

敵が滅ぶまで彼は戦い続ける——

「つていい感じにかっこいいこと言ってるけど、俺が巻き込まれてますよお!？」

砲撃の嵐の中で、雷斗は叫ぶ。彼もまた『増殖』の使い魔を見つけ、殺ろうとした矢先に無翔達の攻撃に巻き込まれた。

そんな彼がいることもつゆ知らず、無翔はやめない。止まらない。彼が涙を流しながら、その砲撃が終わるまで逃げ続けるのだった……。

黒髪で目は蒼少しいケメン——如月紅夜は少し前、変態に遭遇した。

ゾンビと傀儡兵を殲滅していると、なぜか、飛んできた彼女とぶつかり尻を触られたりしてセクハラしてきたので、彼は蹴り飛ばして撃退した。

「なんなんだあいつは……？　なんか、関わってはいけない何かにあつた気分だ」

それがノエルである。そんなときだ、彼の目の前に草太(使い魔)が現れる。

姿形は今までと変わらない。しかし、どうも肉体派に不向きな身体つきをしていた。

「……貴様をここで排除する」

「上等だ。やってみろよ」

彼は魔法のことを忘れていた身だったが、この世界に来たとき全てを思い出した。

かつて破壊神であり、創造神であったこと。かつて管理局と敵対していたこと。

とは言え、もし彼が元の世界に戻るときまた忘れるようになっていく。

彼には帰るべき居場所があるからこそその『抑止の存在』の計らいである。

草太（使い魔）が手に魔力をためる。氷が徐々に起き始め、そこから針が生えるように地面から現れる。

『マヒヤド』!!』

氷系の呪文。ドラクエという作品より使われる『まほう』だ。

紅夜はデバイスを起動させ、刀を握る。白い剣道着のような格好だ。

『マヒヤド』を回避した紅夜は手より、高ランクの魔力を込めて、呪文を口に紡ぐ。

『メガライア!!』

ドラクエ9以降の最強の炎魔法だ。超巨大な球体——いや、もはや隕石落下とも言えるその炎の『まほう』で、草太（使い魔）は燃やし尽くされるはずだった。

「……無傷か」

「俺は『拒絶』の特性を備えた使い魔。『まほう』であっても俺は殺せない。『ギガデイン』!!」

雷系の最強の呪文が紅夜に襲いかかる。天から降り注ぐその雷を回避しながら、紅夜はやむ得ないと考えた。

周りに被害がかかると思い、あまり使う気にはなれないが今はそうも言ってもらえない。

『ファイナライズ』!!』

創造と破壊の力の発動キーが口に出されたとき、『ギガデイン』が紅夜に直撃する。

草太（使い魔）は「とった」と笑みを浮かべるが、空へ手を向けて無傷な紅夜を見て目を丸くする。

髪が金色に変化しており、赤いアーマーで覆われ、目の部分は青い

バイザーで覆われていた。

「覚悟はいいか、答えは聞かないけど」

「ッ！」

草太（使い魔）は問答無用に次なる『まほう』を放つ。雷系の呪文はおそらく効かないと判断したからだ。

それは正しい。しかし、半分間違いであることに気づいたのは、『バギクロス』が紅夜の手によって凧ぎ払われたときだ。

「ば、馬鹿な……!?!? 生身で『まほう』を打ち消した!?!」

「正しくは『破壊』した、ただだけど」

紅夜は地を蹴り、草太（使い魔）は近づけさせまいと『拒絶の結界』を三重に張る。

しかし、彼の力の前では無意味であり無駄。全て『破壊』され、ガラスのように割れて消滅する。

「く、くるなアアアア!!」

草太（使い魔）の最後の悪足掻きは、空へ逃げることだった。しかし、紅夜は金色の翼を生やし、それを使って同じように飛んだ。

浮遊する草太（使い魔）に、飛行する紅夜。勝負はもう着いた。

「全力で叩きのめす!」

『破壊』で『拒絶』の特性を消滅させ、身体を一部ずつ破壊する。悲鳴と断末魔をあげながら、落下する草太（使い魔）に今度は、黒いアーマーに目の部分が赤いバイザーで覆われる『創造』モードに移行。

彼の身体を復活させる。

理由は——言うまでもない。徹底的に心をへし折るため。

それを二、三回やったところで草太（使い魔）の心は折れる。

ズタボロになりながらも紅夜から逃げようとする草太（使い魔）に、彼は黒い球体を『創造』し、閉じ込める。

「塵も残さず消え失せろ!!」

「ま、待て! 取り引きしないか? 俺の仲間になれば管理局だって

……」

「お前と組むほど、俺は弱くない!!」

「ヒィ……!」

ギロリとバイザー越しから睨まれた草太（使い魔）が見たのは、刀のデバイスを納めて、武器を『創造』する紅夜だった。

彼が『創造』するのは、この世界ではほぼ不可能。ましてや、やってはならない禁則行為——『神器』の創造だ。

それは神には与えられた特典であつても、禁止されている。理由は『抑止の存在』がそうしないようにしているためだ。当然の話だ。

『神器』はその人物個人の『命を使った武器』であり、『魂の一部』なのだ。『創造』する即ち、それは『魂』を生み出す行為に等しい。

しかし、今回は可能だった。紅夜の行いを許したからなのか、はたまた大量に召喚して弱っていたからなのかは定かではないが『抑止の存在』は彼の『創造』に関与することはなかった。

そして『創造』したのは——

「す、『全てを開く者』!? なぜ貴様がヤツの『神器』を!」

答えるまでもないと紅夜は内心思う。なぜなら、草太（使い魔）を殺すつもりだからだ。

彼のその『神器』全てを開く者に、雷が避雷針に直撃するように落雷する。

草太（使い魔）の攻撃ではなく、自らの攻撃の前段階。

ドラクエの『とくぎ』と呼ばれる雷系の超強力な攻撃奥義。

「『ギガ、スラッシュ』!!」

球体に閉じ込められた草太（使い魔）は、それごと切り裂かれる。

『神器』によって『封印』により全ての存在は活動停止に追い込まれる。その上、『ギガスラッシュ』は全体攻撃のため周りにいたゾンビや傀儡兵を巻き込み、彼の周りにほぼ敵がいなくなった。

草太（使い魔）断末魔をあげてその中で黒い塵となって消滅した。

「ぐっ」

用済みとばかりに『神器』は碎け散った。それに伴い、『神器』があつた腕が血を噴き出す。

ルールを破ったものに対しての『抑止の存在』の細やかな罰だろう。「全てを壊し、創り変える。それが俺だ」

紅夜は次なる獲物を求めて、足を進める。今の彼は、かつて管理局

と敵対した最強の戦士の一人だ。

「かつこよく終わると思った？ 残念。ノエルちゃんですよ！」

「……………」

お尻をまた撫でられ、紅夜はプルプル身体を震わせる。そして、爆発した。

「台無しじゃねえかアアアアア!!」

「キタコレエエエエ!!」

ノエルを空まで蹴飛ばしてシャウトした。…………いい忘れていたが、彼は『ツツコミ属性』である。

…………つまるどころ、ソラと雷斗と同じ『苦労人』になれる素質もあるということだ。

第六十二話 コラボっちゃいます（嘘つきと化け物とサッカーしようぜ!! by ソラ）

腰まで延びた長い髪、肌の色は白く、血のように染まった赤い瞳の少年——和泉流夜は、一人の青年と対峙していた。

その少年の傍らには身長は流夜よりも少し低く、腰まで延びた長い薄い茶色の髪をポニーテールにしていた少女——幾月望がいた。

二人は学生服を着ている。彼と彼女がここに来たのは、偶然の重なりあつてのことらしい。そんな二人に対して青年は嫉妬オーラーを向けていた。

「おのれ、なぜだ。なぜ世界はこんなまともな女の子を他人に送らせる。なぜ俺だけ変態変人ばかり絡む。妬ましい妬ましい妬ましいイイイイイ!!」

「えつと……」

「この人、なんで嫉妬オーラをこちらに向けているのよ、流夜」

「知らないって。なんか、手を繋いでるところ見られて、嫉妬オーラが出してるのはわかるのだけど……」

知らないかもしれないが、雷斗がこれまで関わってきた女性はだいたい変態変人という特殊な個性がお持ちのおかしいヤツらである。

幼馴染みが変態になってから、彼が普通の女性と関わる事が一切なくなった。

……ゆえに流夜と望のリア充っぽいコンビに嫉妬しているわけだ。

「もう、我慢できない！ 全力全開でお前のオリ主（笑）を狩るのを邪魔してやる！ 世界中のまともなカップルなんて変態になってしまえ！」

「めちやくちやだコイツ！ そしてかなり迷惑！」

「そんなことしていたらお前のお弟子さんが手遅れになるわよ」

「大丈夫！ あの程度で死ぬように鍛えたわけ——」

突如、雷斗は吹き飛んだ。草太（使い魔）による不意討ちの魔法だ。

いきなりの襲撃で雷斗は上空へと舞い上がり星となった……。

「星になったわね流夜」

「……なんでだろ。あの人なら、落ちても平気そうな気がしてきた」

流夜はそう呟き、呆れてから、雷斗に不意打ちしてきた草太（使い魔）と対峙する。

流夜は自らの魂を剣にして戦う。そして、剣の名は『魔剣 ガルナダイト』。

闇と風。この二つが彼が持つ属性だ。

望もまた流夜と同じく方法で、異能で作る剣『炎剣ラグナロク』。炎を剣に纏わせて戦う。

この草太（使い魔）は魔法特化型のように見えるが、宙に二本の槍が浮き上がっている。

魔法と肉体。幻想と物理の二つを持つ草太（使い魔）だ。

「ナゼ、ナゼ……カムイヲタスケル？」

「誰かを助けるのに理由なんかいらぬ」

流夜は地を蹴り、斬り込む。宙に浮いていた槍が、その斬撃を防ぐと今度は後ろをとった望が斬り込む。

二本の槍が二人の斬撃を防ぐと、今度は草太（使い魔）の周りから突風が噴き出し、二人を吹き飛ばす。

何事もなく着地した二人は、この草太（使い魔）はやや強いと思う。

「鬱陶しいな」

「けど、敵じゃない———そうでしょ？」

望の言葉に、流夜は笑みを浮かべて答える。いたずらっ子のような笑みを浮かべた彼は、『魔剣ガルダナイト』を振りかざし、放つ。

「吹き荒べ！ 全てを破壊する黒き風！」
「ダークエンド・テンペスト」！！

闇の風が吹く。目隠しと攻撃を兼ね備えた奥義。草太（使い魔）は砂煙とカマイタチによって、防いだものの、見えなくなった。

砂煙の影から最初に現れたのは、望だった。

炎を纏わせた剣で斬りかかる。二本の槍によって防がれる。キーン！と金属音と突風を起こす。

草太（使い魔）が望の首を掴み上げ、締め上げようとする。その刹那、草太（使い魔）の望を掴み上げていた右腕が切断された。流夜が怒りの形相で斬ったのだ。

「俺は、望を守る!!」

腕を切断しても浮き上がっている槍は落ちない。草太（使い魔）は二本の槍を流夜に向ける。

迫る槍。流夜は目を逸らさず、ずっと見続ける。

そんなとき、槍に落雷が落ちる。雷によって槍は焼却する。

焼却された槍を驚愕した目で見ていた草太（使い魔）だったが、流夜はそれを逃さず、剣を振りかぶる。

そして、その剣線が草太（使い魔）の首を切り裂いた。草太（使い魔）は黒い塵となって消えていった。

「俺の友人を傷つける奴は許さない。誰であってもな」

武器を消して納めてから、ふと流夜は疑問に感じた。

あの落雷は誰によって起こされたのか……？

「いったい……誰が」

「……………」

望は一言呟いて笑みを浮かべた——「嘘つき」と。

一方、上空から落下している雷斗は、

「……演技って疲れる」

あの草太（使い魔）を誘きだすためにかった役目だが、なんとも馬鹿っぽいのが疲れる。

地に着地してから、囲まれた自分がどう打破するか考えるのだった。

月村すずか呆然としていた。雷斗とノエルが去った後、自分にも傀儡兵とゾンビが襲いかかってきたが白髪の腰まで伸びるストリートロング、赤目の女性によって助けられた。

二十歳を超えるか超えないかの年齢層で、190cmの身長のため、子どもよりも大人と言われた方がしっくりくる。

なぜ自分が助けたのか聞くと、

「幼い少女を助けて愛でるのが生きがいだから」

「どんな生きがいですか!？」

そうこの女性——アリスは同性愛者でロリコンだった。ノエルより遥かにマシなのだが、やはり少し警戒してしまうのが普通である。

とまあ、あらかたのゾンビと傀儡兵をバスターソードで駆逐した後。彼女の前に草太（使い魔）が現れる。

「一緒に来いすずか。お前は五木に騙されている」

「……草太くん。私はあなたのことがもう信じられないよ。だから一緒にには行けない」

草太（使い魔）は鼻で笑って言った。

「所詮、化け物は化け物か」

「ッ……!」

すずかは化け物だ。事実であるが、それを面と向かって言われるのは傷つく。自身の秘密を草太を含めたのは達伝えた。友人だからこそと思って勇気を出してなのは達に打ち明けた。

けれど、友人だと思っていた人には『化け物』と言われなくなかった。

すずかの目元が熱くなり、目から雫がこぼれ落ちる。そんなすずかにアリスは頭を撫でて言う。

「あんたは化け物じゃない。私がそれを教えてやる」

アリスは二メートルの大大刀をアイテムボックスから取りだし、草太（使い魔）に向ける。

「なんだ？ 化け物同士の慰め合いか？」

「そうだよ。慰め合いさ。だから言い訳はしない——私の自己満

足の為に死ね」

地を蹴るアリスの脚力は、小さなクレーターができるほどだった。アリスの最初の一太刀は、草太（使い魔）の大きくなつた右腕により防がれた。

『巨大』の特性——それが俺の力だ」

「頑丈な皮膚だな」

「当たり前だ。なんせ、魔女の身体によって作られたから、な!!」

ブンツと腕を振るい、アリスを後方へ吹き飛ばす。そして彼女にその大きな右腕をぶつける。

アリスは大太刀を盾にしてその打撃を防いだが、その衝撃を受けてしまう。本来なら、アリスはこの衝撃で飛ばされるはずなのだが、アリスは足を踏ん張らせて耐えきつたのだ。

「なっ!?!」

草太（使い魔）は呆気にとられた隙に、アイテムボックスから改造した弾倉20発のセミオート連射可能な『対戦車ライフル』を取り出して、ぶっぱなす。

腕に小さな陥没ができた程度だが、草太（使い魔）を後方へ吹き飛ばすこと成功した。

「あの質量に耐えきると!? どんな身体をしているんだ!」

「拳でクレーターができる身体」

（いや、ホントどんな身体ですかアリスさん!!）

すずかは内心ツッコむが、『対戦車ライフル』のツツコミを忘れていた。なんせ、重量からして普通は人間が持ちながら使うことができる。しかも肩が外れる衝撃があるのにも関わらず、アリスはものともしない、それを使いこなしていた。

アリスは二、三発撃ち続けるが、アイテムボックスから次の武器を取り出す。

「はあっ!?!」

「ぶっ飛ば」

大きさは対戦車ライフルの1.5倍の『対艦ライフル』を放つたのだ。ズドオオン!と衝撃でゾンビや傀儡兵を巻き添えで草太（使い

魔)の姿が見えなくなった。

消し飛んだと思われるとき、アリスの付近に円上の影ができる。さすがが嫌な予感がしたとき、アリスに大きな足が落とされた。

草太(使い魔)が七メートルの巨人になったのだ。

『ナメるなよ女アアアアア!』

アリスは潰された。踏まれた一撃でアリスの身体はペシヤンコだった。大きくなった草太(使い魔)の質量に、さすが耐えきれなかった。

「あ、アリスアアアアアん!!」

アリスの死にすずかは泣き叫ぶ。そんなすずかに対して笑いながら、草太(使い魔)の次なる獲物を決めた。

もう彼には正気という文字はなかった。草太(使い魔)がすずかをアリスのようにならした刹那、彼がバランスを崩したのか膝に付いた。

何事かと思い、バランスを崩した原因を探りだすとなんと一人の女性が立っていた。

それは確かに肉塊に変えたはずの女性——アリスだった。

『なぜ貴様が!』

「私って、頭を吹っ飛ばしても心臓が残ってれば復活するし、心臓を破壊した程度では口から血を吐きながらでも戦える身体なんだよ。『ガストレア』をナメるなよ」

アリスはほんの数秒の間、再生して復活したのだ。再生してから、彼女は大太刀で彼の足首を切り飛ばし、バランスを崩させたのだ。

草太(使い魔)が彼女に左拳を降り下ろそうとしたとき、アリスも対抗して本気の拳をぶつけた。その瞬間あと、草太(使い魔)の拳が火花のように砕け散った。

『ギヤアアアアア!?!』

「いくぜー。怒濤のドリームコンボ!」

右足の健を切り裂き、右腕を切り裂き、とどめに顔面を縦から切り裂く。

痛みのあまり草太(使い魔)は巨人化を解除してしまい、宙にいた

彼にアリスは顔面、腹部、肩など拳をいれていった。

地面に叩きつけられ、彼は瀕死の身体だったが、生きていた。

「き、き貴様アアアア!!」

「食らって、喰らって、貪ってやるよー!」

宙にいたアリスが真の姿を現した。彼女は『ガストレア』という化け物だ。

普段は人型なのだが、その真の姿は九本の尻尾を生やし、翼を羽ばたかせるドラゴン。

彼女はドラゴンとなって彼をつまみ上げて、宙へ投げ出し、そしてその大きな口を開いた。

「やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろオオオオオ!!」

草太（使い魔）は恐怖のあまり、泣き叫ぶがアリスの口は無情にも閉じられ、ブチュリ!と嫌な音を立てて喰われた。

アリスはしかめ面をしながら、咀嚼してから呟く。

『マズウ……』

嫌そうな顔をしているが、まあ何はともあれ彼女は草太（使い魔）をマミらせた。

勝利したのだ。すずかはその姿を見て、

「……あれが本当の」

——化け物。そう呟くが、そのドラゴンのあり方にすずかにはとても美しいと思えた……………。

「あ、ノエルさんが……」

『え?』

ドラゴン化したアリスによって、着陸で潰されたゾンビや傀儡兵だけでなく、ノエルも巻き込まれていた。

……アリスと違って五体不満足な状態で失神していたが。

友江さやかは結界を破ることができた。他のみんなも閉じ込められた結界から抜け出したが、どこか上の空だ。

自分が信じていた——いや、信じられていたものが決壊し、彼女は迷いながら歩いていった。

そんな彼女にゾンビや傀儡兵もなぜか襲ってこない。彼女を敵として認識されていないがゆえである。

(あたしは草太が好き。好きなのに……なんで、アイツはあんなことを)

キアラを殺そうとしたことがいまだに信じられない。魔女化しうになった自分を助けてくれたのに、どうして彼女を……と考えたとき、また違和感が出てきた。

(救われた……？ ホントにあたしは魔女化しなかったの？ などで、あたしはそんな大切なことを疑っているの?)

草太を信じたい。疑いたくない。けれど、いまだに違和感が拭いきれない。

自分を助けようとしていた少年は、本当に天宮草太だったのだろうか。

そんなとき、彼女の前に草太(使い魔)が現れる。

「草太……」

「気にする。これも全て神威の策略だ。だから、一緒に戦ってくれ」

さやかへ手を伸ばされる。

さやかはいまだに納得していない。けれど、彼の言葉を聞いてそんな迷いが薄れていき、そして——

「ふざけるな……!!」

草太(使い魔)はぶん殴られた。何度もバウンドしていき、その果

てに岩石に激突する。彼を殴ったのは、腰まで伸びた赤い髪の少年。背丈に合わない着物をという特徴的な少年——音無シチカだ。

その傍らには、金髪の少年——タツミと同じく髪が金色の獣っぽいお姉さん——レオーネがいた。

いきなりなんだ!?!とさやかは警戒心を露にしていき、『神器』を召喚しようとする中で、召喚するその手を何者がが止める。

キアラだ。

「落ち着きたまえ友江さやか。彼らは悪いものではない」

「でも！ 草太が……！」

「目を覚ませ……と言いたいが、とにかくこの戦いを見ておけ。彼らとヤツの違いを、な」

草太（使い魔）の手には、槍が握られていた。魔槍『デスピア』。必殺の一撃のある槍だ。この槍は必ず相手を殺せるという概念が込められている。

「俺の『創造』の力。お前なんかには負けないぞ」

「やってみろよ。……タツミ、レオーネ。手を出すなよ」

シチカは剣呑な目で魔槍を向けて、迫る草太に立ち向かう。槍の打突は回避され、シチカは槍柄を掴み奪い取った。

そして槍を破壊する。

「脆いな」

「まだまだあ!!」

今度は槍だけでなく、剣も創造される。それが宙に浮いて一斉にシチカに向かう。

それらが一斉に射出されていき、シチカはやむ得ず回避に移る。

最初は避けていくことができたが物量によりドストドスとしチカに槍と剣が突き刺さっていく。身体がハリセンボンのようになっていくシチカを見て草太（使い魔）は鼻で笑う。

「この程度か。笑わせてくれる」

「……めんどくさい」

「なっ——」

普通ならば死んでもおかしくないところなのだが、シチカはなんと

もなさそうに突き刺さっていた武器を抜いていった。

これが彼の帝具『エンジェルビーツ』。そう、彼はこの帝具が有るがゆえに死なない『人外』なのだ。

「化け物か!!」

「うるせえな。お前が言うなよ」

ズダンツ!とシチカは消えた刹那、草太(使い魔)の背中に衝撃がはしる。背後からの奇襲をもろに受けて、草太(使い魔)は一瞬怯んだもののすぐに同じように武器を創造して射出した。

シチカは今度は避けず破壊していく。何千何万の武器が破壊されていく。

「なぜ最初は避けなかったんだろ?」

「めんどくさかったからじゃないの?」

さやかのかの呟きにレオーネが答える。事実である。彼は基本めんどくさがりなのだから。

自慢の武器が破壊されていく中で、草太(使い魔)は今度は魔力弾を散発弾のようにして放つ。しかし、全て回避され、草太(使い魔)は上空へ蹴り飛ばされてしまう。

「サツカーしようぜオリ主(笑)〜」

「なんだ——ゲバツ」

「ボールはお前だけど!」

パースツと言わんばかりに、草太(使い魔)はレオーネに向かって飛んできた。すると、レオーネの目が暗くひかり、タツミがいるところまで思いきり、草太(使い魔)を蹴った。

ここでタツミも同じく蹴る。まさしく三人で行うドリブル。ボコボコになったところで、シチカは踵落として草太(使い魔)を叩きつける。

「お、が……アアアアあ!!」

草太(使い魔)は弄んだ三人に対して怒りの雄叫びをあげる。しかし、上空にいたシチカを見て恐怖に染めた顔になった。

そう、身体を捻り拳を相手に突き出す技。筋肉や防具など、間に挟んだ物には損傷を与えず、好きな位置だけに衝撃を伝えることができ

てこい。キミにはその義務が残されている」

「……う、ん」

さやかは泣いた。後悔して、反省して、泣いた。

全てを思い出した彼女は、彼に対して、もう謝罪しかすることがな
かった――

「……MVPの俺を差し置いてしんみりしているなあ」

「店長、それよりゾンビと傀儡兵をぶっ飛ばしましょうよ！」

「ヒヤッハー!!」

「……あれ、レオーネって『ヒヤッハー』言うキャラだっけ?」

レオーネが謎の電波を受信してしばらくおかしくなったらしい。

(※その後、元の世界に戻ると元に戻ったそうなの)

とある第六十三話 コラボつちやいます（友達——
—だといいなあ!! ……自信ねえよ。友達じゃな
いって言われそうで by ソラ）

白に薄く桃色がかった髪色。桜をあしらった浴衣を着ており髪
毛は肩にかかる程度の長さで、翠色の目をしている少女——
桜舞は草太（使い魔）と戦っていた。

草太（使い魔）がいきなり自分に襲いかかってきたので対応するこ
とになったが、彼女は乗り気ではない。

それもそのはず、彼女がここに来た理由はたった一つ。

（ご飯、食べたい）

「ご飯、そう食事である。大食いである彼女がここに訪れたのは美味
しいご飯があるのでは、という希望である。」

雷斗に召喚される前、彼女はこの世界に訪れており、『翠屋』で満足
な食事をしていた。

そんな美味しいご飯を食べてる途中、召喚されてここにきたのだ。
前金は払っていたので、無銭飲食にはならないがさっさと戻って、楽
しい食事をしたい。

「なんで、なんで俺の『異能』が効かない!?!」

『異能』の特性を持つ草太（使い魔）だが、どうやら舞の能力で無効
化されていた。

彼女の能力は言霊——『言霊・散らし』と言い、散らしに関し
ての言葉を現実化させる能力である。

このとき使われている『散らし』は『散』。文字通り、集まった力が
散らされ、具現化できなくなっていた。

「その手品を諦めたら？ 火とか雷とかありきたりだし」

「手品じゃなくて超能力!! というか、どこをどう見たら手品に見え
る!」

「え、最近の手品って何もないところから火や雷を出せるでしょ?」

「どんな手品!？」

事実。彼女がふと商店街の電気屋のテレビで見た手品番組では何もないところから火や雷を起こしていた。それが最近の手品だと勘違いするという『天然』である。

「くそつ。こうなつたらー!」

草太（使い魔）は念動力を使つて、ビルの瓦礫達を浮かせる。その瓦礫達が迫る中、舞は嘆息を吐いて呆れていた。

『散らばれ瓦礫達』

パアンツと風船が割れる音と共に瓦礫は破裂した。彼女の能力は世界に働かせる言霊。ゆえにどんな攻撃も『散らされてしまう』。

「くそつ、くそくそくそくそオオオオオ!」

「もういいよ。あんたと関わっていたらご飯が冷めるから——

『散れ、ビルの柱』

言霊が紡ぎだされ、ビルを支えていたとある柱が散り、ビルが倒れた。草太（使い魔）は離脱するも、目を暗く光らせた舞が彼の頭上に足をあげていた。

「んな、はあ!？」

「桜の如き散り逝かん」

踵落としが決まり、頭から地面へ突っ込んだ草太（使い魔）。彼が犬神家のスケキヨさんになったのは言うまでもない。

舞は仕事をしたあ、と言わんばかりに身体を伸ばして、適当に歩く。そのとき、ゾンビや傀儡兵が襲ってきたが全て犬神家にしたのは言うまでもない。

深い黒色の髪に病人のような白い肌と金色に輝く瞳をもつ黒いレインコートを着た少年——明不夜はゾンビと傀儡兵を惨殺終えた。

傍らにいる明星満月と共に戦い、そして殲滅したのだ。

元々彼はこのような軍団と戦うことがあった。

三歳から異世界に飛ばされそこで育つが五歳の頃に村が神に襲われそこで神葬者に覚醒、史上最年少の神殺しとなった。その後人間と魔族の軍に拾われ兵士として育っており、多くの戦いを経て神をあつさり殺す強者へとなった。

……その代償として悲劇をいくつか体験して、お世辞とは言えないくらい優しくない。ソラという少年を助ける気なんてサラサラないと言った方がいい。彼の場合は『天宮草太』が邪魔だから殺す——
—それ以外ないのだ。

そんな彼が次なる標的として選んだのはゾンビでも傀儡兵でもない。彼にとつて宿敵に似た者であり、鬱陶しいくらいテンションで絡む者——その名は、

「きゃー!!? なぜにこのノエルちゃんを攻撃するのにやあー!!」
「ムカつくから」

ノエルである。天敵にどこか似た雰囲気を持つその女性になぜか殺意を持っていた。

最初に断っておくが、決して天敵は変態ではない。彼女の狂気とノエルの混沌が似ている部分があるから、夜は殺意を芽生えさせたのだ。

【明けない夜】という形状が黒い刀を投擲したり、振り回したりするが、全く当たらない。ヒョイヒョイと避けられるのだ。

「ヌフ、しかーし。このノエルちゃんを捕らえることはできぬ!」

「ムカつくなあ。とつと死んでよ」

「いやよーん? ワタシを殺りたいなら、捕まえてごらーん♪」
「……絶対殺る」

本気でノエルを殺りにかかっているが、なぜか当たらない。無駄にすばしっこい変態だからなのか、経験によつて推測されたものなのか、わからないがとりあえず、彼女に夜の刃は届かなかつた。

「夜、そんなヤツに構ってないで次にいこうよ」

「満月は先に行つて。僕はこの害虫を駆除してからいくから」
「害虫扱い!? こんな美人なお姉さまを害虫なんてひどくね?」

「どうでもいい」

夜の言葉にノエルは若干落ち込み気味である。自分を害虫と呼んだのはこれで通算二回である。

(ライトを失ってからソラにそっくりだよこの子お……。何もかも信じられないというか、頼らないというか、とにかく敵や知らない人には厳しいところが……)

眠りについた少年のことを考えていると、満月の背後に草太(使い魔)が現れる。

満月はすぐに気づいていたため、背後へ振り返って斬撃を放つ。しかし、それを躲され、距離をとられた。

草太(使い魔)はフツと笑う。そのしたり顔がノエルにはやや腹が立った。

「……余裕だね。君ごときがワタシ達をどうにかできるとでも?」
「できるさ。……これを使えばな!」

草太(使い魔)の特性がここで明かされた。草太(使い魔)の前に幾何学的な模様の陣が現れ、そこに現れたのは髪の毛が鮮やかな緑色でウェーブの掛かったセミロング、目は青色で服はあまり体のラインが出ないようなゆったりしたものを着ている少女だ。

『複写』の特性を備えた草太(使い魔)が再現したのは、夜の初恋の人だった。

「……カンナか」
「……………」

少女に続いて現れたのは、前世の姿のライトだ。ノエルはそれを見て、不機嫌になる。

「……また彼を喚び出したの?」
「まさか。こいつらはただの人形——偽物さ。まあ、その姿容姿

だけでなく、能力も備えているが」

草太(使い魔)の狙いは大切な人と戦わせて、心を折らせるという算段だ。誰もが自分にとって、大切な人と戦うことに抵抗感があるはずだ。

ゆえにこの外道は、このような行動を起こした。

ニヤリと笑い、何もできない——そう思つて、エメラルドグリーンの両籠手の【神葬器】を構えたカンナは夜に飛びかかる。カンナの拳が夜に迫る——が、彼女の身体が拳に当たる前に唐突に止まる。

理由は明白。夜が【明けない夜】で突き刺したのだ。しかし、カンナがそれでも夜に一撃を与えようと動き出し、後退した。

カンナの神葬器、【癒しの双星】は回復、もしくは過回復ができる。回復は例え腹を抉られようと瞬時に回復が可能、他人にも使う事が出来る。

それによつてカンナの身体は回復していった。

「そうだ。今度は腐らせる！」

カンナの過回復——それは、敵に触れなければ発動は出来ないが一瞬でも当たれば当たった部分をグズグズに腐らせる。

迂闊に近づけば過回復で夜の身体は腐敗するのだ。

カンナが接近していく中で、夜は冷めた目で、

「もう、いい……。失せろ」

ザツと踏み込んだ刹那、カンナの首を【明けない夜】がとらえ、飛ばした。

ノエルもまたチャクラムでライトの偽物をバラバラにした。

それを見た草太（使い魔）はありえないと言った目で、夜とノエルを見る。

「お前ら……正気なのか？ 大切な人を殺したんだぞ?！」

「大切な人つて言つてもねえ……。だって、」

「偽物。価値のない副産物だろ」

夜は草太（使い魔）の首を掴み、もう一つの神葬器を展開する。黒い霧状の神葬器でこれに触れるだけで正気ではなくなるような悪夢を見せられるという最凶——【惨劇の悪夢】。

草太（使い魔）には皮肉にも感情があった。人並みにあった。それ即ち、彼はその神葬器で悪夢を見て発狂し始めた。

「やめろやめろやめろやめろ！ やめて、くれエエエエ!!」

「——悪夢は終わらないよ……お前の魂が碎けるまで」
それでもやめない、止まらない。夜の見せる悪夢で精神を、心を、魂を碎き、何もかもを破壊していく。

そんな中で、彼は「明けない夜」を使って腕を、足を、斬り飛ばし、頭蓋骨を碎き、背骨を碎き、そしてそして……………。

遂には廃人となった草太（使い魔）をゴミのように捨てると、ノエルがその草太（使い魔）をバラバラに八つ裂きにした。

「……………つまんない」

夜はそう言っつて、消え失せた草太（使い魔）に対して興味を失った。

陰陽師の服装で髪色は白の九尾の狐少女——北星瑠璃はまどかに抱きついていていた。

まどかはゾンビと傀儡兵の襲撃でほむらとはぐれたようだ。

そんな中、見つけられたのは瑠璃である。まさかの襲撃に対応できず、どうすればいいのかオロオロしていた。

「ちよっ、誰!? あなたさっきの人だよね!？」

「まどかだー!!（*≧▽≦*）」

「会話に顔文字出るくらいのハイテンション!？」

「っーか、離れろ!」

全体的に黒の服装の狼の尻尾と耳を生やした青年が瑠璃を剥がしにかかる。

あえなく御用となった瑠璃だが、満足そうにホッコリしていた。

「うう、草太くん。なんでこんなことを」

「田村ちゃーん!!」

「なのはだよ!？」

中の人発言をいいながらなのはに特攻して抱きつく。そしていつものように修斗に止められる。そんな中、瑠璃の双子の姉である羽衣もない天女の服装の少女——梨華は嘆息を吐いた。

「全く、たった一人で何をしていたと思いきや人捜しとはね。危険な

ことを承知でしていたのかしら」

「ご、ごめんなさい」

「許さない。大人しく拷問を受けなさい」

「なんでですか!？」

「私の趣味とストレス発散のためよ」

「この人、ほむらちゃんと同類だ!!」

ふと、なぜほむらが梨華と同じ人間と感じたのかわからないが、ツツコミったから仕方ない。

(というか、ほむらちゃんがそんなひどいこと……——あれ？
草太くんじゃないけど、神威くんにしそうなのは気のせいじゃない？
むしろ、しつくりくる?)

違和感が増幅する中で、黒い穴から草太(使い魔)が出てきた。
彼の姿を見たまどかは、後ろに下がる。

「まどか、一緒に来てくれ。こいつらは神威のげばあ!!」

「うるさいわね。口説いてんじやないわよ」
梨華がどこから出したのかわからない金だらいを顔面へスパーク
ング(ぶち当てること)。

彼女のフリーダムさにさすがのまどかも苦笑する。鼻血を出しな
がら草太(使い魔)は睨み付ける。

「き、貴様あ……!!」

「修斗兄さん、あの人。怒ってる?」

「いや、怒るだろ。いきなり金だらいをスパークしたんだから」
紺色の男用着物で髪色は常に白の男の娘——雪男が兄である
修斗にそう聞くと、草太(使い魔)は特性を使い始める。

この使い魔の『特性』は『具現化』。想像力で作られたハルバートを
構え、槍や剣などの武器を浮遊させながら、言った。

「俺の理想のため、死ぬ!! 来い、俺の軍隊!」

さらにゾンビと傀儡兵という物量で押す軍団が現れ、まどかは絶望
した。

信じていた彼が自分ごと抹殺しようという人だったとは思ってもし

なかった。

そんなまどかに梨華は、

「いい加減に目を覚ましなさい。あれはあなたの好きな男じゃないわ」

「そんなわけ……」

「貴女が信じた彼はそういうことする男だったの？」

まどかは梨華の言葉により、彼女の中にあつた違和感が更に増幅した。梨華は苦悩するまどかに嘆息を吐いて、

「まあ思い出すのは時間の問題、ね。高町の方も疑念を持つてるようだし」

それと、と彼女は続けて言う。

「貴方が『理想』を語るのなら、私は『現実』を教えてあげる。理不尽なこの世界を目の当たりにさせてあげる。『理想』がどれだけ掲げても手に届かないことをね!!」

『光を操る程度の能力』で造り出した光の鞭で襲いかかってきたゾンビと傀儡兵を払う。

瑠璃もまた抱きついてスリスリしていたのはから離れて、突起を出させる。

『自然を操る程度の能力』で生み出した大地の力だ。

「私の敵なら全力全開容赦無用、てね♪」

可愛らしく言っているがやっつてゐることはえげつない。彼女は風を操って、竜巻を起こしてゾンビと傀儡兵を巻き込む。

一方、雪男は『感覚を操る程度の能力』と『運を操る程度の能力』で、無双する梨華を密かに補助していた。

彼もまた戦えるには戦えるが、今回はぶちギレた姉のサポーターである。

「僕は補助しか出来ないけど……兄さん達の敵なら僕の敵。前世は兎も角、転生した時は血生臭い戦いをしてきた僕達だからこそ、お情けが一切なしである事を分かってね」

冷たく言つて、感覚をずらされ、バランスを崩したゾンビが梨華の鞭の餌食となつて頭が弾けとんだ。

草太（使い魔）は梨華と雪男を無視して、一個撃破という形で瑠璃に狙いをしばめた。彼のハルバートが瑠璃に当たる——前に、『影を操る程度の能力』で造り出した大鎌を持つ修斗に阻まれる。

「き、貴様！」

「俺の兄妹に手を出すなら容赦しない。——守る為に全力で殺つてやる」

ハルバートと大鎌。勝負は数秒でついた。

大鎌で草太（使い魔）を容赦なく切り刻み、崩れて落ちた彼を蹴り飛ばした。

「おのれ、おのれエエエエ!!」

ギロリと血涙を流しながら怨恨を込めた声をあげる中で、まどかは前に出た。

「まどか、頼む。力を貸してくれ!! 俺のために、いつものように!!」

まどかは魔法少女服の姿になり、弓を出す。北星兄弟姉妹は武器を納めて彼女を見ていた。

彼女は背中を向けていたが、修斗達にはもうわかっていた。

「まどか……」

「気安く名前で呼ばないで天宮くん。あなたに力なんて貸してあげない」

まどかはそう言って天へ弓矢を放つ。そして落ちてきたのは桜色に輝く弓矢の雨。草太（使い魔）は断末魔をあげながら、その最後に黒い塵となって消えた。

「……わかつてるじゃない」

「ありがとうございます。みなさんのおかげで思い出せました」

自分がしたことは許されることじゃない。もしかすると、彼に批難されるかもしれない。

けれど、彼女は逃げない。だってそれが彼女の『罰』だから。

「朱美さん……私」

「行こうよ。高町さん。私は天宮くんと決着をつけたいから」

魔女となった彼を殺る。それが彼女、朱美まどかのできた目的だから。

「……あれ、修斗兄さんは？」

「あ、さっきの雨に巻き込まれてたよ？ 私達は結界でなんとかしたけど」

「修斗兄さアアアアん!!」

北星修斗。決めるときは決めるが、それ以外の扱いは酷い……。まあ、すぐに回復して立ち上がったが。

第六十四話 コラボっちゃいますその五（友情がタイトルです……（遠い目） by ソラ）

黒髪で白い袴の青年。

黒髪の青い目の青年。

黒髪でブーメランパンツを履いただけの青年。

鳳上恭介、とうか、井ノ原正人はゾンビと傀儡兵を一掃し終えた。

冗談抜きでやりたい放題だったのは言うまでもない。そして、正人の服装には誰もがツツコミたいと思っても無理もない。

現に、助けられたほむらがまさにそうだった。

「なぜ彼はボディビルダーよろしくな格好をしているかしら……？」

「え、趣味だけど」

「どんな趣味!? 衛でも服は着ているわよー！」

「うるさいなあ。感想欄でも俺達は『お前ら kill you 宣言』してるから後でお前らも殺るから」

「この人味方!? 味方だよね!?!」

「いや、ボクに聞かれても……」

珍しくツツコミを入れるほむらに千香は苦笑で答える。なんせ、人外、魔王、変態というスリーマンセルである。

まずどこから言えばいいのかわからないのである。

「あ、そういえばソラの小さい頃に『ヒーローのお兄さん』に出会ったとかなんとかかって言ってるよな」

「神威の憧れの人の?」

「ううん、殺害対象」

「なんで!?!」

「あ、間違えた。越えるべき壁だったよな……?」

「どこをどう間違ったら殺害対象になるのよー！」

「仕方ないじゃん。だって前世の話だし、何より『いつかぶつ殺してや

るぜ、ヤアツハアーツ!!』って叫んでいたし——ライトが」

「神威じゃ、ないじゃん！ お師匠さんが殺る気満々じゃない！」

「あと、このお話はあちらの物語のリメイク前のお話だから、ここにいう『鳳上恭介』さんとなんのご関係がありません」

「全部嘘なの!?!」

「ううん、三割ホント」

「もう何がなんだかわけがわからない……!!」

トウカとほむらの漫才を繰り広げる中で、草太（使い魔）が背後から千香に迫ってきた。そして、刀を振ろうとしたところで、正人の拳が彼の頭蓋骨を砕いた。

「フオオオオオオ!! 高鳴るぞ我が筋肉！」

「ま、衛と同類が異世界にも……?」

「ちなみにあと一人いるよ。やったね！ 『筋肉戦隊☆マッススライズ』の結成だね！」

「あんな巨体と筋肉を見たら子どもが泣くわよ!!」

すると、正人によって倒された草太（使い魔）は消えていき、少量の爆破を起こして消えた。そして、本物の草太（使い魔）が手裏剣の形にした魔法と思われる術を展開していた。それがほむらがいるにも関わらず、正人と共にいたという理由で投げつけた。

シヨックだった。まさか彼が自分を見捨てるなんて。今まで一緒に戦ってきて、そしてまどかを救って——……救っ、て?」

（まどかは……救われたの? 彼女は本当に救われたの……?）

言い様のない引つ掛かりを感じる。違和感が増幅する中で、手裏剣の魔法はトウカによって防がれた。

素手で払うという馬鹿げたと思われるほどの規格外な方法で。

「なんだ『主人公』。そんなものか?」

嘲笑した笑みを浮かべて、挑発する。それに反応してか、今度は手に視認できるくらいの電撃を出してトウカを貫こうとしたとき、彼の代わりに白髪のロングになり、背中に白い巨大な翼が出現した恭介が代わりに出ていき、そしてその立ち位置が入れ代わった。

『忍術』の特性の草太（使い魔）はありえないという表情を最期に、

身体が右斜めにズレていき、分断された。

「あつけないねー」

「そんな……草太が」

「というか、まだ生きてるよ？ 別のが」

「え？」

千香が指さす方向——天には無数のゾンビと傀儡兵達の中に、確かに草太（使い魔）はいた。それも現在進行形で落下していた。

「なんなのよ、あれ!？」

『「転移」の特性かも。まあでも、魔王様には何か考えがありそうだよ？」

トウカは「ハアアアアア!!」と某野菜星人のような声をあげて、そして見開き、ナニカを掴んだ。

そう、その名前は……！

『「ライト」セイバー』

「ソラのお師匠さんじゃない!!」

そうボロ雑巾となつて剣の扱いをされていた雷斗くんである。確かに電撃を走らせていけば、電撃の剣にはなるが、まさか人間を剣の扱いをするとは誰も思わない。

「いいなあ、ライト。あんな扱いされて……」

「あ、師匠。いたんだ」

「うん、なんかトウカくんだったっけ？ ライトを貸して言われて、貸してあげたら剣してくれたよ」

「わけがわからないわよ!!」

「ちなみにボロ雑巾にしたのはワタシの策略……。ボロボロになった彼を懐柔するという作戦なのだ！ さすがワタシマジ策士!!」

「ボロ雑巾の理由はこの変態の仕業か!!」

トウカは雷斗を使った剣技で、ゾンビと傀儡兵をやりたい放題にしていた。そして、草太（使い魔）の頭は雷斗の顔面によって潰され、絶命した……。

「どんなもんだ!!」

「テメ、後で……絶対」

「いけ、ライト！ 君に決めた！」

雷斗をそのままゾンビ達に向けて投げ捨てた。

もはや人として扱われていない。ちなみにライトという人間爆弾は文字通り爆発した。

死んではいないが、黒こげでアフロになっていた。

「いいなあいいなあいいなあいいなあ!! あんな扱いをライトにされたらワタシ……ワタシおかしくなっちゃうよきつと!!」

「同感です!!」

「あんた達おかしいわよ!!」

本来、ほむらもボケ役なのだが悲しいかな。今の彼女の個性では、彼ら彼女達にたちうちできない……。

なお、この後ほむらの記憶が戻ったそうな……。

朱野椎は佳奈と共にいた。

黒髪黒目、黒いシャツに濃い青のGパン、その上にシザーズ（黒いコートに赤い布で継ぎ接ぎ）、そして彼の特徴たる小さな身体は仲間の少女と共にゾンビと傀儡兵を蹂躪していた。

そんな中、彼と合流した衛は唸り声をあげながら苦悩していた。

「ぬうう、なぜだ……。なぜ我が友がこんなことを……」

「本当は友達じゃないの？」

「そんなわけ……。あるかもしれん。なぜか知らんが神威の方が我が友と呼ぶ方がしっくりくる」

これはある意味、天宮草太の世界改変が崩れていることを意味していた。改変された世界は『抑止の存在』が修正にかかっていたのだ。

そんなとき、はやての悲鳴が聞こえた。

衛ははやての元へ駆け出すと彼女は虚ろな目をしながら、草太（使い魔）と共に立っていた。

「衛か。なぜそこのちっこいの味方にする。ヤツは神威の味方だぞ」

「味方も何も我は元から神威と敵対する気はなかった。そもそもヤツ

に攻撃した理由は管理局員達を殺しにかかっていたゆえにだ。彼らは貴様の都合で召還されたもの達。罪は一切なかった。しかし……！」

衛は歯を食い縛る。

「貴様によつて彼らはもはや人ですらなくなっていた……！ ゆえに貴様の行いはもはや許せるものですらない！ 神威の味方と言うべきならば我はそうしよう。我は貴様のような外道を友とは呼びたくない！」

「そうか。ならば——はやてによつて殺される」

はやてはデバイスを衛に向ける。そして、その魔力砲撃を衛と椎、佳奈を呑み込む。

「っ、無事か！」

「盾になる必要はなかっただろうに」

「アンタ、一応お礼は言っておきなさいよ」

「いや、でもソラを傷つけてるし」

「謝罪は神威が目覚めてからに頼む……。我らのこの過ちは、一生背負うつもりだ」

椎達の盾になった衛の腕と身体は火傷を負っていた。しかしこの程度は神威もまた受けていたものだ。

罪悪感を感じているならば、いちいち気にすることではない。

「はやてはいったいどうしたというのだ……」

「見た感じ洗脳に見えるわね。職業柄で言わせてもらうけど、かなり強固みたいよ」

「どんな職業柄なのだというのだ。しかし洗脳か……」

使い魔としての特性。それは厄介なことこの上ない。

しかし、草太（使い魔）は佳奈の答えを否定するかのようには、薄く笑う。

「『洗脳』？ そんなものじゃないさ。俺^{使い魔}の特性は——『改変』」

刹那、衛の大人モードは解除され、元に戻った彼は吐血した。衛が困惑する中で、草太（使い魔）は答える。

「今のお前は『病弱な天道衛』さ。つまり、リンカーコアが汚染されて

魔法を使えば身体が耐えきれなくなる自分になったのさ」

「くっ、貴様あ……」

「そして八神はやては、そうだな……。俺の妹というのは面白いな」
「こいつやな……。そうた兄をいじめるヤツは!!」

はやてが敵意を向けてデバイスを向ける。衛は悔し泣きしながら、草太（使い魔）を最後まで睨んでいた。

「じゃあな、天道」

はやての魔力砲撃が放たれる――

――そんなときだ。彼女のデバイスが銃弾によって弾かれたのは。

「あのさ。勝手に無視して事を進めないでくれない？」

佳奈がマグナム銃を向けながらそう言った。そして、衛はふと身体が軽くなるのを感じた。

これは、と椎に視線を向けると彼は草太（使い魔）に対してどこまでも冷めた目で見ていた。

まるで害虫を見つけたかのように。

「どういうことだ。なぜ天道に対しての『改変』が……!」

「そんなもん、『境界』をいじって無効化したに決まってるでしょ」

「なんだと……!?!」

「ほら、その証拠に」

椎は虚空に縦を描くと、はやての虚ろな目が消えて、元の輝きのある少女の目となる。彼女は戸惑いながらも、草太（使い魔）の近くにいたことに気づいてその場から退避した。

「そんな馬鹿な……!。俺の『改変』が……」

「そもそもこの『改変』って正直言って不完全だよ」

「なぜそう言える!」

「だって本当に『改変』が使えるなら、既に自分や佳奈。そしてこの場にいる全員が対象になっっているはずさ」

『改変』は不完全だった。本当に改変が使えるならば、『ソラは存在しない』やら『召喚者は全員ソラの敵』と改変できるはずだ。

「よってお前の改変はむしろ世界に対する『催眠術』さ。例えば、学校の先生の言っていることは全て正しいと誰かが言うようにね。もつとも、『その程度』なら境界をいじくればどうにかなる」

「それがどうしたと言うんだ！ この俺にはまだゾンビと傀儡兵が――」

「うらアアアア!!」

ズドオン!!とすさまじい音と共に傀儡兵は砕け、ゾンビは宙を舞った。

「立て！ 同志天道衛。同じ筋肉を鍛えし者がこんなところで膝につくんじやない!!」

「け、剣児……。ぬ、おオオオオオオ!!」

衛がビキビキと肉体を唸らせ、大人モードとなる。剣児は満足そうに頷き、言った。

「勇気百倍。筋肉千倍！」

「行くぞ！ マッスルパワー全開!!」

謎のエネルギーを溜め始める二人に、ゾンビ達が襲いかかる。二人は拳を揃えて、技を出した。

「『国王会心撃イイイイ!!』」

その拳は地にぶつけると地は盛り上がり、まるで大爆発を起こしたかのように、吹き飛んだ。

草太（使い魔）だけでなく椎も佳奈も慌てて回避する。

「ちよ、剣児のヤツ。いつの間にあんなものを覚えていたの!? てか、なんでアイツもいるのよ!?!」

「あ、なんか『次元の壁から同志の気配が!』とか言っついてきたんだっけ?」

「なんで言わなかったのよ!」

「だって、元から抑止さんに呼ばれてないし、何より自力で次元の壁を乗り越えてきた人だし」

「あれえ。アタシが知ってる剣児じゃなくなってるじゃない?」

「……実際はノエルの手引きがあったのだが、佳奈はそれを知ることにはたぶんない。」

草太（使い魔）は忌々しそうに舌打ちして、ナイフを取り出す。

「ならばちっこいの。お前だけでもぎばげ!」

「お生憎。剣児より強いつもりだから。それと、」

——人の知り合いに手を出しといてただで済むと思わないでくれよ?」

『修羅』モードになった椎がそう言うと、草太（使い魔）の襟首をつかんで片手のラツシユを与える。

それはまさに『オラオララツシユ』とも言えるくらいの早さと精密度で、的確に顔をボコボコにしていた。ナイフは既に椎の拳によって破壊されており、最後の拳が放たれたとき、草太（使い魔）は地面にめり込んだ。

「ちよ、やり過ぎじゃない」

「いいのいいの。あんなのにはこれが充分だから」

「だからって、あんたねえ」

「貴様らあ!! この俺によくもオオオオオオ!」

草太（使い魔）は激昂しながら、叫ぶ。すると椎が、

「ちなみにオムライスに何かける?」

「んなもんケチャツぶう!」

「マヨネーズでしょうがー!!」

今度は、草太（使い魔）は佳奈によってマウントをとられて殴り始められる。マヨラー戦士佳奈にとってケチャツプとは永遠のライバルである。

「え、マジで?」

「たぶん……。てか、お姉さん誰?」

「通りすがりの変態淑女よん。というかわいいシヨタだ。マジモンのシヨタだあ……。ハアハア」

「えつと、息が荒いけど風邪？」

「大丈夫。ワタシはいつだって健康さー！」

「そっか。よかった」

にぱー☆と愛くるしい笑顔をノエルに向けたとき、ノエルは吐血して倒れた。

「お、おのれ……この変態の中の変態に、そんな無邪気で愛くるしい笑顔を向けるとは……」

「え、大丈夫？」

「みぎやあアアアア！ 浄化される浄化されるう！」

こつち見ないで、汚れたワタシを見ないでエエエエ!!」

ノエルに大ダメージを与える笑顔に、椎は困惑気味だ。ちなみに隙間からこつそり見ていたばば——失礼、我らのお姉さまは別の意味で吐血していたりする。

……ライトがもし彼女を見ていたら、『いつからこんなふうになったんだろ……』とメタ発言するのは確実である。

さて、マウントをとられていた草太（使い魔）は距離をとってから、遂に最強を出してきた。なのはの『スタラ』に並ぶ彼の必殺技。

名前は『ダークインパルス』。砲撃が佳奈を巻き込み、衛や剣児に当てようとしていた。

しかしそうがさせないのは、かつて幻想卿で活躍した彼だ。『修羅』モードとなった彼が、『ダークインパルス』を隙間から取り出した刀剣で切り裂くと消滅した。

「ば、馬鹿なアアアアア！」

彼はその刀剣で草太（使い魔）を八分斬りにし、バラバラにし、黒い塵になるところを確認してから眩く。

「境界線の暗殺者、朱野椎。覚えて一生噛み締めろ」

彼は刀剣を隙間に仕舞うと、ほむらと千香が息を荒くしながらやってきた。

「ノエル！ ソラが、ソラの身体が！」

それは驚くべき状況へと繋がる……。

杏子とマミはソラの身体を守っていた。どういふことか、彼女達はここから離れていけないような気がしたからだ。

それから戦いが始まって数時間後、ソラの身体に変化が起きる。

黒い彰気とも言える靄が彼の身体を包み込み、ソラの身体が起き始めた。

「なんだよこれ……!」

「わからないわ。けれど、お姉ちゃん的にはただ事じゃないわね」

マミの言ってることは当たりだった。ソラが二人を襲いかかる。手に剣を召喚し、斬りかかってきたのだ。

二人は『神器』でそれを防ぐが、途端に身体から力が抜ける。

(こ、これは……)

『どうだ。俺の憑依の特性は!』

頭の中に草太(使い魔)の声が響く。どうやらソラの身体が動き出したのも全てヤツの仕業だったようだ。

「なんでこんなことをしやがる! アタシ達は仲間じゃねーのかよ!」

『仲間? ふん、最初から仲間じゃない。ただのヒロインだよお前達は』

駒。つまり草太(使い魔)はもはや彼女達を単なる登場人物としか思えなくなっていた。元の彼ならば考えないことだが、遂には堕ちるところまで堕ちたようだ。

『このままお前らの身体をいただいて、まどか達の前に突き出せば、彼女達はどうするかな?』

「て、テンメエー!!」

「最っ低」

『なんとも言え。お前達はここでリタイアだ!』

『憑依』により徐々に力を奪われ始める。そして意識が遠くなっていくと、ふと声が響いた。

「諦めるな!!」

ドンツとソラの身体に誰かが体当たりする。そしてソラの身体に何者かが入っていくと、杏子とマミにとり憑く草太（使い魔）が感じられなくなった。

「これは……？」

「わけわかんねーよ。けど、誰かに助けられたようだ」

一方、杏子とマミが安堵している頃、オレンジをベースにしたパーカーを着ていて、腕や足の関節部分に緑の線が描かれてる少年――

――『天道陸途』てんどうりくとは草太（使い魔）と対峙していた。

「まさかこの身体に入ってくるとは……」

「……………」

「だけど、渡さない」

「……………」

「この身体は俺のものだ！」

「……………」

「神威なんかより、この肉体を上手く――」

「もう、黙れ……」

陸途は限界だった。ソラを追い詰め、居場所、仲間、そしてその肉体を奪っていった我が物顔にするこの男に対して限界だった。

「あんなだけは許さない。どんなことがあっても――」

あんなだけは……殺す！

「できるのかお前に！」

草太（使い魔）は魔力弾を撃つ。陸途も同じようにして対応する。

陸途は 自分の記憶の中の武器を魔力で作り出して戦うことができる。そして、その奥の手である『クリエイトモード』と呼ばれる力で草太（使い魔）の魔法を再現したのだ。

弾幕同士の撃ち合いになると、草太（使い魔）は不服そうに叫ぶ。

「真似事しかできないのか！」

「まあな。それからあんなの真似は飽きた！」

陸途はそう言うのと術式を展開した。それは草太がよく知る術式。なのはの術式だ。

「デイバインバスターだと!？」

「そういう名前なんだな」

デイバインバスターは草太（使い魔）の肩を掠め、回避し、今度は『ダークインパルス』を放つ草太（使い魔）。

しかしそれは『トライデントスマッシュャー』——フェイトの魔法により相殺された。

「そんな……!」

「弱い。あなたは本当に弱いよ」

「俺が、弱いだと……!」

草太（使い魔）は刀剣を構え、斬りかかる。陸途は同じく刀剣で打ち合う。

「あなたはソラをただの人としか見てなかった。目が節穴って思えるくらいに愚かだったことがよくわかる」

「事実だろうが!」

「違うさ」

草太（使い魔）の刀剣は弾かれ、刀剣を持つ腕を斬り飛ばされる。

「あいつがこの程度で腕をとられるはずがない!」

「っ、『全てを開く者』!!」

草太（使い魔）が取り出したのは、ソラの『神器』。彼はそれを出したことで優位に立てたと実感していた。

「遂に本気にしてくれたな! これでお前も」

「——クリエイトモード、『全てを開く者』!」

ここで陸途の奥の手が現れる。陸途が創造したのはソラの『神器』だ。

互いに見せた偽りの『神器』に対して唯一驚いていたのはやはり草太（使い魔）のみだった。

「な、なぜお前が神威の『神器』を!」

「俺の力さ。来いよ、本物の紛い物を見せてやるよ」

「小癩なアアアアア!」

『神器』と『神器』がぶつかり合う。一合、二合、三合とドンドン打ち合う。

そして限界に来ていたのは、
ピシッ!

「なぜだ……なぜ俺の『神器』が!？」

「お前にソラの『神器』を使う資格はねえよ!!」

そして『神器』がぶつかると最後に互いの『神器』がひび割れ砕け散った。

草太（使い魔）は新たな武器を用意しようとしていたが、既に陸途は武器を握っていた。

（なぜ、『全てを開く者』が既に……!?!）

そして『神器』は草太（使い魔）の身体をとらえ、斬り裂いた。草太（使い魔）はマリオネットのように崩れ落ちていく。

「お、のれえ……またしても——」

それを最後に草太（使い魔）は黒い塵となって消えた。

陸途は周囲の光に呑み込まれると同時に、ソラの心の中から出てきた。それから口から吐血して苦しそうに息を吐く。

「さすが、『神器』の創造は厳しいな……」

たった一回の創造でここまでのダメージを受けるのは想定外である。しばらく彼は動きそうにもなかった。

（最後のあれは……あの『神器』は……）

最後に目の前に『全てを開く者』が現れて、手にとった。いったい誰がなんのために自分を味方にくれたのかは、既にわかった。た。

「……ありがとうな」

聞こえていないかもしれないが、とにかく彼はそう言って目を閉じる。マミが治療に向かい、杏子が声をかけるが彼はしばらく疲れを癒すために眠るのだった。

第六十五話 とりあえずテメエはぶちのめす

(ソラside)

消えていく……。

消えていく……。

自分の思い出が、大切な何かを見失っていく……。

闇の道を進む度に何か損失していくのを感じる。誰かの声が聞こえてきていたが、『彼女』はいつたい……。

オレはこのままいなくなる……。

オレはこのまま消えていく……。

……それでも闇の道を進むのはやめられない——

(??side)

戦況は逆転した。召喚者達の活躍により悪魔と魔女側が不利となった。

「なぜだ……なぜこの俺の使い魔が!!」

『一人一人があなたに匹敵にするのに。クスクス……ああも、あつさりと殺られているなんてねえ』

「黙れ! こんな何かの間違いだ! いや間違いに決まっている!」

草太(魔女)は苛立ちを隠せていない。一方で、悪魔は不利にも関わらず愉快そうだ。

(そろそろ潮時かしらね。私の『目的』は既に果たしたし)

見つめるのは手にあるソラの魂だ。この魂は『目的』の中には含まれていないがどうせならいたただいても問題はないだろう。

欲を出せばその肉体もいたただく気だったが、草太(魔女)が使い魔に勝手なことをしてくれたおかげでそれができそうにもない。

(さて、そろそろ行こうかしら。どうも天宮草太は怒りで周りは見え

てなさそうだし、何より負けそう——」

と思った刹那、彼女はそこから後退した。彼女がいたところに落雷が落ちてきたのだ。

ホツとするのも束の間、悪魔は背後にバチバチ!!という電撃のはしる音を聞き取り、右へ逃げた。手にあつた魂はその電撃を使つていた者によつて強奪された。

『レディーにいきなり攻撃するなんてひどい人』

「うるせーよクソ悪魔。その薄汚い手でいつまでも人の息子に触れるじゃねーよ」

雷斗の背後には謎の隙間があつた。そこから出てきたということ、誰かがここへ手引きしたということだ。

『なるほど、あの小さい男の子かしら?』

「さあ? ソラの知り合いみたいだけど、ついでに知らない女もいたが」

『そう。でも安心するのは早計よ』

雷斗が視線を写すとそこには、大きな腕が迫ってきた。生体電気で肉体の信号受信速度を上げ、凄まじい早さで回避に移る。伝達速度を上げたことで、神経の伝達速度を高めたからだ。

「背中から腕? しかも宙に浮いてる五本の槍もあるし」

「その魂を渡せ」

「やだね。テメエの言うことなんか誰が聞くかよ」

「そうか、ならば——コロス!」

地を蹴り、迫る斬撃。雷斗はジャックナイフを取りだし、高圧電流を流し、ぶつける。

剣とナイフの勝敗はおそらく剣の方が分があるはずだ。しかし雷斗のナイフはただの金属ではなく、よく電撃が流せる金属でできた特注品である。

電撃による高熱には融解することはなく、また頑丈である。

よつて草太の持つ剣は融けた。ただの剣では雷斗のナイフを越えることはできない。

「オノレー!」

「くらえ」

雷斗は高圧電流を草太に流し込む。バチチチチ!!と音を立て、目や口から電撃を吐き出すその姿は埴輪に火を入れたかのようだ。

雷斗はその場から後退し、様子を見てみると草太は大したダメージを受けてなさそうさだ。

「この程度で俺は死なない!」

「完っっ全に人間じゃねーなあ。よっし」

雷斗はナイフに電撃を更に流し込む。それをナイフの中に循環させるようにして留めていき、そして圧縮させる。

すると、バチチチチと大きく音を立てて、荒々しく流れていた電撃が、静かにそして穏やかな流れていた。

おまけに刀身も刀くらいに伸びており、それは電撃の刀と言っても差異はなかった。

「なんちゃって千鳥刀の完成」

「そんな刀で!」

草太の背中から伸ばされた腕が雷斗に迫る。雷斗は下から上へ振り上げると、その腕が真つ二つになった。腕は消えてなくなり、黒い塵となった。

「馬鹿な! そんな刀で俺の魔力アームが!」

「マジックアームでいいだろ。ネーミングセンスねーな!!」

シュバツと草太の側面へ移動した雷斗は今度は横一閃を描く。すると刀が五メートルくらいまで伸びていき、雷斗を捉えようとしてきた。

彼はその場を屈んで『マジックアーム』を斬られるだけで済ませた。

「デタラメな……!」

「じゃなきや、あのバカの師匠をしてねーよ」

草太は槍を雷斗に数本を射出させるが、彼はそれを一本だけ焼き斬り、草太に斬撃を与える。

草太は槍をクロスさせて防御するが、槍ごと身体を斬られた。

「ぐあアアアアあ!」

「いてーだろオイ。けどなあ、」

雷斗は草太の首を掴み、顔面へ拳を何度も何度もぶつけていく。

「ソラはこれ以上の痛みに耐えていたんだぞ!!」

雷斗は最後に顔をぶん殴った後、次に狙ったのは草太の足だ。電撃の刀を左太ももに射し込み、えぐるようにして回す。グルグルと回しているの、それは皮膚に高熱の鋭利な刃物をグリグリしていることに等しい。

「いぎ、ぎイイイイ!!」

「オラオラ！ まだまだいくぞボンクラ！」

えぐるようにして回した刀が遂に足を切断し、今度は右腕の腕の関節を全て外してから、背負い投げ。倒れた彼の左手を砕けるほどの力で踏み抜いた。

「いぎやアアアア!!」

「ここから拷問劇だ」

「待ってくれ！ まだつづ——」

最後まで言う前に、雷斗は切断された足を除いて、雷の極太い針を突き刺した。

身動きがとれなくなった彼に、雷斗は召喚術から岩石を落下させて草太を潰す。

「ぎがアアアア!! いだいいだああああいイイイイ!!」

肉を潰され、骨を砕かれることを始まりに雷斗は電撃を何度何度撃ち抜く。

黒こげになっても、失神しようとも、彼は止めなかった。

「き、キサマああああ!!」

身体はボロボロとなり、怒り狂う草太は壊れたデバイスから魔力砲撃を打ち出す。

雷斗は雷の刀でそれを切り裂くと、

「見せてやるよ。神様だつて殺せる秘技を」

雷斗は目にも止まらぬ速度で草太の前に移動し、彼は横構えから振り抜いた。

『忘却』しやがれ！ 『概念殺し』！

雷斗は草太の『ナニカ』を切り裂いた。

草太には斬られた感触はなく、反撃に移ろうとした草太だが自分が何をすべきか『忘れてしまった』。

「え、あ……あれ？」

次に彼が『忘れた』のは『立つ』ことだ。足から力が抜けていき、立てなくなった。

「な、んだ、これは……。忘れてい、くう……う？」

草太の記憶から知識と経験が『忘却』されていく。戸惑う彼に、雷の刀を解いた雷斗は答える。

『概念殺し』。これは『名』に『概念』をぶちこむことで『殺す』という習得方法が未だ不明な殺害奥義だ。『名前』を殺されたら、そのつば形を維持できなくなり、消滅していく——つて俺の知り合いの『切り裂き魔』の談だ」

この奥義の条件は『概念』を見えるということ。そして、自身ももっとも適する『概念』を知っていることだ。

「お前の『天宮草太』という『名』に『忘却』をぶちこんだ。つまり、お前の『名前』は『忘却』していくことになる。あ、『名』が『忘却』していくことは『名前』を忘れていくわけじゃないぞ？」

草太は雷斗の言葉を聞いたとき、今度は息が苦しくなった。

『呼吸すること』を『忘れた』。

『名』が『切り裂かれた』ら、そいつの存在は切り裂かれて消滅する。

『忘却』されたら——お前の持つ『記憶と経験』は忘れていく

草太には雷斗の言葉がわからなくなった。

『言葉』を忘れた。

『記憶』を忘れた。

『思い出』を忘れた。

『前世』を忘れた。

『呼吸』を忘れた。

『動くこと』を忘れた。

そして遂には彼の生命活動も——

「■、■★■い……あ——」

草太は『生きてる』ことを忘れた。『存在している』ことも忘れた——

草太は消えてなくなった。文字通り『忘却』の彼方へと消えていったのだ。

「遂に生きたいことも忘れたのか。『名前を忘れた男』」

雷斗は興味をなくしたかのように、悪魔の元へ向かった。

第六十六話 終わり？ いいえ、これは始まりよ

天宮草太という存在が完全に消えると、ゾンビと傀儡兵が全滅し、消滅した。

召喚された者達はあるものは彼ソラによりしく頼むと言うものも言え
ば、まどほむがアアアアア！と嘆くものもいた。

後者は果たして誰のことだろうかー（棒読み）

それはさておき、無事全員が生還したことに少年少女達は安堵の息
を吐いていた。

「まさかアタシ達がアイツあんなことを言っていた……」

「お姉ちゃん失格だわ……」

「だ、大丈夫ですよ！ ほら、ソラくんって知り合いじゃない人には冷
たいけど、そうである人には優しいから！」

「……でも怨んでいるわよきつと」

「……否定できないや」

まどかは気まずそうに目を逸らすと、同調して四人は嘆息を吐い
た。

「まー、まー。あいつはそんな心狭い男じゃないって」

「呑気だな、さやかは。つーか、なんでお前だけ覚えていたんだ？」

「ふっ、あたしの想いの前では屑宮の力など無駄無駄なのだー!!」

「単に頭が空っぽだったから助かったのじゃないのかしら？」

「その喧嘩に買ったよほむら。かかってこいや」

「上等。私達がいけない間、イチャついていたあなたに真のヒロインが
誰か教えてあげる」

ここに第三次ほむさや大戦が開幕。魔法は使わない戦いが始まる
と、互いの顔を引つ張り合う。……子どもの喧嘩である。

「いつも通りだね」

「これがかい、千香」

「うん。ほむらとさやかはなんかこんな感じで喧嘩したりするんだ
よ。たまにさやかと杏子がうまい棒争奪戦をしているけど」

「わたしが思うに友江さやかだけが喧嘩に参加しているようだが？」
「考えてみて。マミやまどかは大人しい系。杏子は姉御肌だからあんまり喧嘩を売らない。ほむらは頭が空っぽなさやかと違って、よく考える」

「……ああ、なるほど。必然的にさやかだけが対戦相手になるな」

「あひやまはらっぽっふえ、いふなアアアア!!」

頬を引つ張られているさやかが反論する。なんとも説得力が皆無な姿である。

「そんなことより、雷斗を捜さないで。彼つて一人でラスボス挑んじゃうソロファイターだからね」

「師匠の友人ですしね」

「否定はしない。まあ、彼なら倒してくれそうな気がしないもないけど」

ケラケラと笑うと裏腹に、ノエルは思考を止めていなかった。

(……それにしても悪魔はなんで逃げなかったのだろ。目的のものが手に入ったのなら、さつさと退散すればいいのに)

考えてみればおかしなことだらけだ。目的の『ソラの魂』が手に入ったのなら、さつさとこの世界から逃げ出せばいい。後は天宮草太に自分達を始末させればよかった。

しかし悪魔は最後まで居残っていた。

戦況が悪くなっても。

不利になっても。

追い詰められていても。

彼女は逃げず残った。

(将としての心がけ? いや、あんな小娘みたいな子がそんな立派なものを持っていそうもないし……)

しばらく思考の渦に呑み込まれたが、ノエルはその考えを一時中断する。

彼女はまどか達に向かって聞く。

「キミ達はこれからどうするつもり?」

「もちろん」

「お礼参りに決まってるだろ！」

マスケットを構えて微笑むママミに、手を鳴らす杏子。

充分やる気満々と見た。

「それじゃあ行きましようか。最終決戦ってヤツを観戦しに、ね♪」
ウインクしたノエルは、指を鳴らすと彼女達は消えた。

『転移』の魔法の法則を『ねじ曲げて』、瞬間移動に発展させた魔法である。

転移中に、まどかは思う。

(胸騒ぎが……する)

今から起きることにまどかは気が気でいられなかった。

それはかつてさやかか魔女化した——そんな嫌な予感が……。

雷斗は悪魔と相對していた。彼女はクスクスと微笑しながら雷斗に言う。

『あら、勝ったのね。まあ、でも期待してなかったなりにがんばっていたようだし、褒めてあげましょう』

「褒めてもヤツは天国にも地獄にもいねーよ。俺が魂ごとぶち殺したから」

悪魔は雷斗の腕に視線を向ける。雷斗の腕は黒く炭化しており、ピクリとも動きそうもない。

『その腕。もう動けないんじゃないかしら?』

「普通はな。でもコイツをなんとかしちゃう女がいるんだよなーこれが」

雷斗がそう言う指をパチンと鳴らす音がした。炭化した腕が徐々に肌色を取り戻し、動かなかった腕が今では元気に振り回せるようになっていた。

ノエルはそんな雷斗の腕に豊かな双丘を当ててきた。

「ノエルⅡアーデルハルトは理をねじ曲げるほどの『神器』の持ち主だ。死者蘇生はもちろん、無から有や『不可能』を『可能』にねじ曲げてしまう。まあ、要するにこの女に『不可能』はないってことさ」
『まるで神様ね』

「それでもない。どちらかと言えば邪神だろ。変態的な意味で」

「いやー、それほどでもおっ♪」

「褒めてねーよ」

もともと雷斗の『概念殺し』の前では意味はない。彼女は死なないが『雷斗の知る人格』が死ぬ——つまり、ノエルⅡアーデルハルトを殺せることでもある。

最終的、彼女が周りを苦しめ、絶望だらけの世界にしようとするならば彼は心を殺してでも実行する。

悲劇だけの世界など、胸くそ悪いだけである。

『……なるほど。でも概念殺しとやらあなたしか使えないってことかしら？』

「まさか。ぶっちゃけ、召喚されたヤツらも『概念』を視認し、理解していたら容易く使えるはずだぞ。まあここで抑止の世界で使えば、代償的に何かを失うことになるがな。身体的か、はたまた精神的には」

そんなチートがバンバン使えるなど、あつてたまるか。

雷斗はそう思いながらナイフを悪魔に向ける。

『あら、今度は私かしら』

「当然だろーが。テメエのせいでヒデー目にあつたんだ。慰謝料としてテメエの命を超越せ」

地を蹴り、バチチチチチチと紫電を鳴らしたナイフを構えた雷斗は悪魔の心臓へ神速の速さで突く。

しかし、それは届かず雷斗は悪魔の背後にいた。彼女の身体がすり抜けたからだ。

幽霊のようにすり抜けたことに雷斗は忌々しそうに悪魔を見る。

『残念。私は概念みたいな存在だから、物理攻撃は効かないわよ』

「なら『概念殺し』で」

『できるの？ 大人モードだけでなく「神器」の連続使用、加えて概念

殺しという技法——その概念殺しというモノはかなりのエネルギーを消費するじゃないかしら?』

雷斗は舌打ちする。悪魔の言っていることは正しかった。

この『概念殺し』のもう一つのデメリットは燃費がかなり悪いのだ。一つを使うことで七割の魔力を消費する言わば、一撃必殺の秘技。

『絶対』に殺せる代わりに、何度も使えないのだ。

『それにもうあなた達と戦う理由はないわ』

「魂は俺の手の中だぞ」

『クスクス……。そうね。でも私の目的は達成した——それで、もういいのよ』

なんだ。何を手にいれた?

雷斗は訝しげな表情で悪魔から目を離さなかった。悪魔は満足したのか、空中に空いた黒い穴の中へ後ろから沈み込んだ。

『それじゃあ、また会いましょう。彼の魂と肉体はいつかもらい受けるつもりだから』

悪魔の静かで妖しい笑いが空気に溶け込みながら、その姿と共に消えていった。

全てが終わり、治療が必要な者達を優先的に入院させられた。

クロノの計らいで、管理局の所縁のある病院だが、雷斗達にとってありがたい申し出だ。重体であるソラの治療が早く済みそうだからである。

「ソラ……」

軽傷で済んだ面々は手術室と書かれた部屋の前で彼の心配をしていた。

「湿気た面するな朱美。テメエの行い全てをあの馬鹿は責めるつもり
ないはずだ」

「でも……」

「責めたら俺が拳でなんとかするから安心しろ」

「何そのバイオレンスな説得」

「O☆H A☆N A☆S H Iすればなんとかなる。これは高宮の世界で
は常識」

「そんな常識ないよ!? それと私の名前は高町なの!」

なのはは思わず声に出すと手術中と書かれた照明が消えた。出て
きた担当医は峠は越えたと伝えると全員がホッと息を吐いた。

「これで、やっとな……」

「終わったのよ……全て」

杏子とママの言葉の通りほぼ全員がそう考えていた。しかし、その
中でまどかとほむらは、

(これで終わり……なの?)

(まだ、終わってない……そんな気が)

その考えが現実化したのは翌日、ソラの見舞いに来たときとは誰も
気づいていなかった。

第六十七話 エピローグ的な、救われなかった少年の話

それから数週間後、悪魔の策略で改変された記憶は全て元通りになった。天宮草太が『忘却』^{消滅}されたことで、全てが何事がなかったかのように戻ったのだ。

リンディは事の話をクリックノから聞き出した。雷斗が倒したことも聞き出したが表向きは行方不明になり、一般人に刃を向け、管理局員を肉體改造した名前すら忘れ去られた草太に全ての罪を背負わせることにした。

もつとも、ヤツが原因のため心が痛むことはなかったが、名前を忘れ去られたとは言え、知ってる人間が犯罪者になるということには良い顔はできない。

近所の子どもが犯罪を起こして逮捕されたと聞かれたおばさんみたいな心境である。

なのはやフェイトも未だに彼が起こした事件に納得できていない。なぜ、あんないい人が……という起きたことを受け入れられないと言った心境だ。

とは言え、彼女達も受け入れられるときはいつか来るのは確実だ。なんせ、ヤツはソラという一般人に刃を向け、殺そうとした人間なのだから。

さて、話を変えるが管理局所縁ある病室にて、ソラは入院していた。今日、雷斗とノエル、そしてまどか達は彼が眠っている部屋に向かっていた。

「つーか、あんな重傷だったのに数日でほぼ完治ってどーゆーだった」「ヌフフフ、雷斗にそっくりだね。キミも腕が切り取られても、縫合してくっつけたじゃない」

「いやー、あれはマジで焦った。もう動けないと思ったぞ」

「どんな武勇伝よ……」

ほむらは雷斗の規格外ぶりに嘆息を吐いた。ソラの入院中、ノエルはソラの家に住候しており、必然的にまどか達と接触していた。セクハラはもちろん、食事が混沌とさせられたのはびっくりである。

カレライスがマカデミアンナツツの味になっていたり、制服が魔法少女服にさせられたり、まどかの魔法少女服がどこぞのSM女王が着そうなボンテージの衣装にさせられたり……などなど。

要するに彼女のおもしろおかしいイタズラで大変なことになっていた。その度に一緒に泊まっていた雷斗がドロップキックで制裁していた。

中には首以外庭に埋めるという制裁があったため、軽くドン引きである。

(ソラの師匠だけあるわね……。だから前世のソラの『当たり前』はおかしかったのよ、きつと……)

ちなみに雷斗の今世の両親は既にないらしく、後見人がノエルになつていたりする。

それはさておき
閑話休題。雷斗達が病室にたどり着いたとき、部屋から騒がしい声

がした。
ソラの部屋は個別だ。たまに担当医が見に来るといいう習慣があるが、おそらく病室にはソラの担当医がいるはずだ。

『!?!?』
「なんだ？ 騒がしいな」

スライドドアを開けると、ソラが点滴をぶら下げていたもので扉を開けた雷斗に降り下ろす。咄嗟に彼は後退して回避し、当たらずに済んだがその一瞬の隙でソラは部屋から飛び出した。

「か、かれをつかまえてくれ……!?!?」

担当医はボゴボゴされており、何があつたのかわからないまま雷斗とノエル、そしてまどか達は追いかけた。階段へ逃げ込み上がっている、やがてたどり着いたのは屋上だ。

追い詰められたソラはひたすら敵意を込めた視線を雷斗達に向けていた。

「おい。どーゆことだ？ テメエは何してんだよ」

「そういうお前こそ何者だ。ここはどこで、お前らはなんなんだ」

ソラの言葉に雷斗は眉間に皺を寄せる。ソラの言っていることに頭が追いつかないのは大半だ。

ノエルはそんな彼らの前に立つ。

「キミは何を言ってるの？ もしかして忘れちゃったのかにやく？」

「知らん。てか、お前の知り合いかノエル」

ノエルは「にやははは」と笑っていた顔を引き締め、彼に聞いた。

「……質問していい？ キミがこの中で顔を知っている子を言ってくれない？」

「……ノエル。と……千香、キアラに似た女。それ以外は知らない」

「キミの役職と名前は？」

『『斬り込み特攻部隊 隊長兼少佐』のソラだ。苗字は捨てた』

「何者だお前は」と再度問うソラに目を見開く。驚愕する。

まどか達には信じられないことだった。

彼は何を言っている。これではまるで、とほむらは悪魔の言葉を思いつく。

『クスクス……。そうね。でも私の目的は達成した————それで、もういいのよ』

目的とはなんだ。悪魔かのじよは何を求めていた？

魂でも、肉体でもない。何を求めていた？

その答えは今のソラにある。

そう、彼は奪うばわれたのだ。

「ま、まさか……記憶をとられたの？」

「かもな……。あの悪魔、馬鹿弟子の記憶を取りやがって逃げたんだ。方法はわかんねーがとりあえず、今ここにいるコイツは『戦時中』のソラだ」

雷斗の言葉に「厄介な置き土産を」とノエルは内心舌打ちする。ノエルとまどか、そして千香は戦時中のソラを知っている。

彼女達に対してまだまだ柔らかいが、敵対した者には容赦しない。そして彼女達や戦友を除いた人物はあまり信用も信頼しない。

つまり、忘れられたまどか達は敵かどうかかわからないので、警戒しているということだ。

一歩間違えればソラと敵対し、永遠に解り合えないというバッドエンドの地雷が含まれていた。

(とにかく落ち着かせないとねえ……)

まどか達が戸惑う中で、ノエルは一人彼に近づき話しかけるのだった。

(?? side)

少年が全てを忘れている頃、管理外世界『プラネッツ』では戦いが起きていた。

ボデイが青という人の形をした機械兵がマシンガン系のエネルギー銃を一人の少年に構えていた。

数体に囲まれていた少年——青いヘアカラーで碧眼の彼は、召喚術で『神器』を喚び込んだ。

その剣は、かつて『英雄』と呼ばれた男と同じ『神器』。

その剣は、かつて『無血の死神』が振るった剣。

そう、白い『全てを開く者』を召喚し、彼は機械兵を斬り裂き、バラバラにする。

全てを終わらすと彼は呟く。

「急がないと……」

少年は仲間の待つ基地へと向かう。

——『救世主』と呼ばれた前世を持つ少年は、救うべき人達が待つところへ向かう。

第六十八話 新たな世界へ旅道中

(ソラside)

オレこと神威ソラは記憶喪失である。ある日を境にして、失ったらしい。

いや、自覚はないがノエルやその他が言ってるからそうなんだろう程度の認識でしかない。

まあでも、思い出そうが思い出さないだろうが関係はないが、オレに絡んでくるヤツらが思い出してほしそうだ。

オレは戦争で戦っていたところからしか記憶はなく、今は戦争が既に終わっており、いつの間にか死んで転生していたということに戸惑っていた。

おかげで最初に目覚めたときにオレの担当医を敵と認識してポコポコにしてしまった。一応、謝つといたから問題ないはず。

あれから何百年のときが経ったのかはたまた何千年が経ったのかはわからないが、とにかく戦争が終わり、オレはどうすればいいのかわからなかった。

帰る場所も居場所もない。

そんなとき、ノエルとオレと同年代くらいの男の子が『一緒に暮らさないか』と提案してきた。

ノエルは変態だが、信用できる女なので承諾すると、何やら言いたそうなカラフルな女達がいた。

まあ、別にどうだっていいので、それ以来。ノエルとその男の子の家に居候している。

小学校もまた通うこととなり、残りの年を過ごしていくうちに卒業して、中学生になった。

入学してから一月。オレはいつものように一人で帰ろうとすると、一人の女がオレに声をかけてきた。

「一緒に帰ろうよー」

「断る。オレは一人で帰る」

「まあまあそう言わずにー」

「……勝手にしろ」

そう、朱美まどかだ。小学校の頃もオレのことをまどわりついてくる。

姉である朱美ほむらも同じように黙ってついてくる。

この姉妹だけでなく、友江三姉妹もオレに対して親しそうに話しかけてくる。

当初、邪険していたのだがあまりのしつこさにオレは折れて、勝手にすることを許した。

こいつらはなんの目的があってオレに近づいたのだろうか。オレは未だにそんな警戒心をもっていた。

「つーか、よくもまあオレみたいな最低最悪なヤツについてくるよな」
「周りのことね」

オレの邪険な態度に同学年の男女は影で悪く言ってることは知っている。何度もオレに近づけさせないようにしていたが、朱美達は勝手に近づく。

正面切って言うヤツがいるが、論破して返り討ちしたり、暴力にはしろうとしたら徹底的にぶちのめした。

それが起きたのは入学式から一月後である。

「大丈夫。あなたのことは周りに言つといたから」

「待て。朱美姉。お前は何を広めたんだ」

「厨二病にかかった男の子」

「何を広めてるじゃアアアア!!」

誰が厨二だ。そんなイタイヤツじゃねえよ!

「ソウルネームも考えているわ。ねえ、『漆黒のダークギル』さん」

「そんなDQNも広めてるのかお前! つーか、やめろ。いろんな意味でイタイから!」

「安心しなさい。もう既に冷たい批判的な視線は暖かいかわいそうな人を見る目になってるから」

「うぎやあアアアア!?!」

手遅れ!? 手遅れなの!?

もう明日から学校に行きたくねえよ!!

「大丈夫だよ! ソラくんがどんな目で見られても私がお嫁にするから」

「婿じゃねえの!?!」

「あら、なら私はソラをペットにしてあげるわ。さあ、飼い主を崇めなさい」

「こっちはもつとひどい!!」

……なんで、こうもとち狂った女の子とつるんでいたのだろうか、前のオレよ。

男子更衣室で朱美妹と天ヶ瀬千香がオレの下着を見てハアハアしていたのを見たとき、マジで焦った。

……一応、美少女なんだから、せめて幻想のままにしてほしいと本気でお願ひしたよ。

「唯一まともなのは友江杏子だけかよ……」

嘆息まじりの眩きと同時に、朱美妹の鞆から着信音が鳴る。最近、流行りの漢娘かんむすの曲である。

朱美妹曰く、萌えるアニメらしいが、男からしたら目にダメージを受けるアニメである。

セクシーだ。うん、ダイナマイトボディだ。

だがなぜ男だ!!

漢娘という名の筋肉ムキムキの乙女心を持つ男だらけのアニメなのだ。いろんな意味で見たくないアニメなのに、一部の女性には人気らしい。

それはさておき
閑話休題。

朱美妹にかかってきたのは高町からだ。どうも高町の仕事先に、オレの記憶に関する事件がありそうだったため、こうして手伝いにしていろいろらしい。

さすがにオレのせいで危ない目に合うなんて、後味が悪いから、「こんなオレのためにやらなくていいだろ」と何度も言っているが聞いてくれない。

朱美妹がうんうんと頷いていると、スマホを直して言った。

「明日のゴールデンウィークになのはちゃんと一緒に仕事しようだつて！」

「あつそ。んじゃ、オレはのんびりしとくからがんばってねー」

嫌な予感がしたのでさっさと帰ろうとしたら、首に何かが巻き付き、倒された。

「あら、あなたも来るのよ？ 勝手に休むなんていけない子ね」

「いけないも何もオレは関係ねえだろ！ つーか、外せこの首輪！」

「ダメよ、ダメダメ。私はこれからあなたとお散歩したいのよ」

「この格好でか!? この姿でか！」

こんな犬みたいにされてるところをご近所に見られたらお婿にいけない！

「駄目だよほむらちゃん！ ソラくんをこの姿のままでお散歩に出かけたら駄目だよ！」

「あ、朱美妹……!! お前……!!」

「このワンちゃんコスチュームシリーズで、ちゃんとワンちゃんにしなければ♪」

「ブルータスお前もかアアアア!!」

こいつも敵だった！ 変態でしたよコノヤロー!!

「さあ、」

「お散歩」

「し ま し よ ? ？」

「いやアアアア!!」

こうしてオレは道行く人がいないことを祈りながら、強制お散歩タイムを体験するのだった……。

五木に見られて笑われたことを一生忘れられない……!!

次元艦にて、オレはグルグル巻きにされて放置されていた。目が覚めてたらこうなっていた。

いやなんでこうなっている……。

「あ、起きた」

「どういうことだ朱美妹。なんでオレはこんな姿なんだ」

「いやー、ノエルさんに『ソラくん貸してー！』ってお願いしたらグルグル巻きにして渡してくれたよ」

「あのヤローの仕業か！ つーか、昨日五木に頼んだこと無駄じゃねえか！」

五木には朱美姉妹から匿うようにケーキを使って取引したのだが、どうやらノエルに負けたようだ。その後、五木はどうしているのか朱美妹に聞いてみたが『ハッスルしてるよ♪』と意味深なことを言い出した。

……五木よ。安らかに眠れ。

「どうかお師匠さん呼び捨てしていいの？」

「オレの師匠は死んでるんだよ。勝手に師匠って名乗られても困るっこの」

「ふーん。まあいいか。今から私達ガールズトークするからごゆっくりねー」

「オイコラ！ まずはこの縄をほどけエエエエ!!」

本当にオレはこいつの味方だろうか。そう思う今日この頃である。まあ、なんにせよ。何事もなければオレとしてはうれしい限りだ。

……なぜだか知らないが行く先々に、トラブルに巻き込まれていると思えるし。

ウウー!! ウウー!!

「な、なにっ！」

「大変よ。まどか、キアラの艦に侵入者よ」

ほらねー……やっぱり何かに巻き込まれたよコンチクショウ。

というか、誰だよ。こんな戦艦(?)に乗り込むヤツらは。

「とにかく撃退しに行くわよ。……ソラはそのままだけど」

「放置か。放置するのか！ こんな危険な状況で!!」

「むしろ、ソラくと危険な夜のやり取りをしたいよ私は!!」

「誰だこの女をノエルのような変態にしたヤツは!」

発言が既にこの小説終了のお知らせをするほどの危険度である。朱美姉妹は、最後にサムアップしてオレをそのままにして迎撃に向かった。

ホントに行きやがったよあのヤロー……。

まあそれはさておき、オレは口で縄をほどき、身体の骨を鳴らす。さて、どうしようかねえー。

「なら、この俺様と遊べ」

「うっわー……。なんか、狼男みたいなヤツがいるう……」

毛皮はなく、鋼鉄の身体を持つ狼男。そんな敵が前にいた。

「機械兵みたいなもんか？ なかなかの知能の持ち主っぽいけど」

「ふん、あんな木偶と一緒にしてもらっては困る。俺様の名は、『ウルフルズ』。貴様を我が主の元へ連れていくもの名だ」

「その主って人はオレがなんなのか知ってるの？」

『無血の死神』。とある世界の千年前の英雄。我が主は貴様の力を欲している」

……OK。よくわかった。要するにオレの昔のファンみたいなもんか。

しかも、『敵』という立場の。

「意見など最初から聞かねえ。貴様を力付くで捕らえさせてもらおう!」

「なら、来いよワン公。こちとら本物の狼男と殴り合ってるんだよ」

狼男の指から15cmくらいの爪が伸び、斬りかかると同時にオレは『神器』を召喚するのだった。

第六十九話 あ、ヤバツ!!

(??side)

ソラとウルフルズが戦っている頃、まどかとほむらはなのはと協力して敵襲を撃退していた。

敵は紫のシルエットで人の形をした機械兵だ。手にはエネルギー弾を発砲するマシンガンや電磁棒が握られていた。

多くの機械兵は物量で、この艦を制圧しようと攻めてくるがそんなことをさせまいと、二人の少女が奮闘する。

まどかとほむらだ。

格闘技を含めた戦法で、敵兵を破壊していた。

「というかほむらちゃん。ゴルフクラブで攻撃するの猟奇的じゃない?」

「そういうまどかこそ、バッドを振り回しているじゃない」

「どっちも猟奇的なの」

返り血もといオイルまみれの姿の二人の少女に、なのはは顔をひきつらせていた。

フェイトはそんな三人に気にせず、得意な電撃で行動不能にしていた。

「おおー、さすがフェイトそん。マジ便利だよ」

「さすが人造電気マツサージ機」

「喧嘩売ってるの!?!」

冷やかしに対して青筋を立てるフェイトに、なのはは苦笑する。そんなとき、遠いところから何かが爆発する音が響いた。

その音の根源は、ソラがいる場所だ。

「大変! 神威くんが!」

「っ、わかってるわ。でも……」

「なんか急に連携が強まったね」

まるでソラの場所へ向かわせないように、行き先を阻む。そんな機

械兵達にまどかほむらは冷えた視線を向けて、

「邪魔よ」

「どかないと壊すよ?」

問答無用に破壊していくのだった。

(ソラside)

戦いは資材の倉庫へ移っていた。

狼男の特徴は、月を見ることで狼と同じ特性を得ること。そして、その身体能力の強化だ。

ウルフルズは機械の狼男のため、月による恩恵はない。しかし、機械には機械なりの特性がある。

「チツ、またか!!」

口から冷気を吐いてくる。内蔵に冷気を製産する部位があるのだろう。右へ飛んで回避すると、オレがいたところは氷付けにされた。

「くらえ、電気の爪!」

「せめて名前くらいつける! なんか、拍子抜けなる!」

帯電した爪で斬りかかってくる度に、オレは身体を捻らせたりして回避していた。『神器』で対応したいが、ヤツが使っているのは魔法ではなくその機械が持つギミックである。

つまりキャンセルや『封印』はできない。

とは言っても、機械なので強制的に『止めて』やればこの狼男は止まるのは必然なのだが、さすが狼男の機械兵。身体能力だけで斬撃が回避される。

「ふはは! どうだ。手足は出ないだろう! このまま大人しく捕まってる」

「黙れ。っーか、規則正しい攻撃ばかり」

オレは『神器』で帯電した爪を受け止め、

「してるんじゃない!!」

そのまま腹部を蹴り込む。ウルフルズは衝撃で後退したものの、怯んだ様子はない。むしろオレの腕が痺れて使い物にならなくなった。「ふははははは！ オイオイ。無駄なことしたもんだなオイ！ 腕が使えなくなっただろう——」

その刹那、オレは縮地を使って既に斬撃をとる体勢に入っていた。相手はそれを読んでいたかのように回避しようとするが、オレは最初から斬撃を使うつもりはない。

抜刀をやめて『封印』の概念を込めた『神器』を投擲して突き刺した。

「ば、馬鹿な……。こんな行動、でーた、には……。ない、はず……。……」

ウルフルズの目から光が消えていき、そのまま動かなくなった。そんなウルフルズに『神器』をひっこ抜いて言う。

「データで埋められるほどオレの手数は甘くねえよ」

経験から学んだもの。そしてこれらの戦いで昇華したもの。成長していかなければ、オレは英雄なんて呼ばれずに死んでいたさ。

「つーか、派手にやってくれたなあ。というか、壁に亀裂が入っているような……」

ピシッとその亀裂がはしり、そして瓦解した。それによって風圧でオレは艦から外へ投げ出された。

「あ、ヤバッ。これマジで死ぬ……。？」

高さは約100メートル以上。そこからダイブしたから確実にミンチだ。落下していく中で、オレの名前を呼ぶ声が聞こえたが、意識が遠くなっただけ……。……。

(??side)

とある廃墟にて、青い髪の一人の少年が休息をとっていた。彼はいつものように敵兵を破壊し、なんとか撒いたものの、疲労で息を荒くしていた。

(まさかこんなところにパルテノンがいるなんて……)

青い機械兵——パルテノンはこの国、『ネオアルカディア』の警備兵だ。自分達が行っていることを考えれば、捕まえにくるのはおかしくない。

(急がないとシエルさんが……っ!?)

突如、屋根を突き破って何かが落下してきた。少年は『神器』を構えて、相手を警戒するものの砂煙から一行に現れない。

砂煙が晴れたとき、そこにいたのは、息を荒くしている黒髪の少女と目を回している銀髪の少年だった。

「ほんっつと、世話が焼けるわねソラは……」

彼女がソラを無事着地させたのは、パラシュートを使ったからだ。ほむらはソラが落下するとき、手短にあったパラシュートを手に取り、一緒に降下した。

彼をなんとか捕まえたものの、落下速度はやや収まらず、重傷覚悟で廃墟の工場へ落下したのだ。

「ああもう。まどかとはぐれたわ……。どうしましょう」

「君達は……いったい」

少年は彼女に声をかける。彼女は警戒心を表しながらも、答えたのは。

「通りすがりの魔法少女と犬よ」

「いや、意味わかんないし、犬って誰のこと?」

ドS発言に口をヒクヒクさせるのだった。

それが、彼にとって運命の邂逅になるとはこのとき誰も知るよしもなかった。

第七十話 革命軍と現状把握

(??side)

『ネオアルカディア』。それは機械と人を融合させた首都と言ってもいい。この町に住む人全てが改造人間で、改造していない人間はない。

また全身機械のアドロイド『レプリロイド』と呼ばれる機械人間がおり、軍事はもちろん娯楽に引つ張りだこ。

この世界に機械化していない人間はあまりいないと言ってもいい。
それはさておき
閑話休題。

やや薄い雲が張られた天気。とある建物にて、まどかを加えたなのは達はこの都市を治める者と顔合わせするために、廊下を歩いていた。

(ソラくん無事かなあ)

『ネオアルカディア』に落ちたソラとそれを追って降下したほむらの搜索は行われたが一行に発見されない。

まどかは二人がいったいどこで何をしているのか気が気でなかった。

(はっ！ いけない。もうソラちゃんとベッドシーンにいける年齢。つまり、ほむらちゃんとソラくんのダブル嫁が私がない間、ナニかをしている可能性が!!)

アツチの方向に考えてしまう辺り、実は冷静なまどかである。それはさておき、彼女達がたどり着いた部屋——王座の間と言ってもいくらかの広さのある部屋で、丸テーブルのその席には五人の男女が在席しており、一人が立っていた。

ある者は荒々しい炎を連想させるような女性。

ある者は静かな嵐を体現したかのような男性。

ある者は妖しい雰囲気を纏う女性。

ある者は存在が消え失せそうなくらいの雰囲気をもつ男性。

そして四人の中央には老人が一人座っていた。胡散臭い雰囲気があるが、小綺麗な老人だ。

「ようこそ管理局の諸君。わしがこの都市を治める長、ヴァイルだ」
ヴァイルは一人一人を紹介していく。

炎を連想させる女性はフレイア。

風を連想させる男性はウイン。

水を連想させる女性はアクア。

影を連想させる男性はシャドー。

この四人が『ネオアルカディア』の治安と内政、軍事を担う四天王だ。まどかは自己紹介を終えてから思うことは、

(……あの白いレインコートの人は何者?)

そうヴァイルには紹介されなかった男だ。レインコートにより顔は暗くて見えず、見た感じ、自分と年代だ。

相手が何者かどうか判断できない中、会話は進んでいた。

「この地にロストロギアと見られるものが、通達されました。それがどこにあるかわかりますか？」

「さて、このわしには預り知らぬことさ」

「それはおかしいことだ。この都市を治める長たる貴方が知らないとなるといったい誰が我々に報告が届いた」

「ふむ、いたずらではないのかね？」

キアラの言葉にのらりくらりとはぐらかされる。核心にはつけない様子に、なのはとフェイトは苛立ちが隠せないでいた。

するとヴァイルは何かを思い出したかのように、手を叩いた。

「そういえば、この地にはわしらに敵対する組織があつてな、そやつらは何らかの目的があつて、管理局に情報を与えたのだろう」

「敵対組織？」

『『レジスタンス』と呼ばれる革命軍だ。わしらの都市に何度もテロ行為を行っている」

デバイスに送られた映像には、爆破で破壊された町や倒れた人が見かけられた。なのはとフェイトは憤りを隠せず、「ひどい……!」と口

に出していた。

まどかもまたテロの非道さに憤りを感じてるが、キアラは疑念が晴れていなかった。

(……テロリストが警察のような組織に通報？ わけがわからないな)

現状がわからない。とにかく情報がなければどうにもならない。

キアラはそう思い、局員に現状把握の操作を指示するのだった。

(ソラside)

目を開けると知らない部屋のベッドに寝ていた。その部屋はやや煤のある壁に覆われており、綺麗とは言い難い。

どうならあの後、意識がなくなり誰かに助けられたようだ。

ベッドから起き上がると腕が重いことを感じて、見てみると朱美姉が眠っていた——産まれたままの姿で。

「待て待て待てエエエエ!!」

どゆこと!?! ナニが起きたの!?!

いろいろツツコミたいことがあるが、とにかくこの姿を誰かに見られたら誤解は免れない。

オレは朱美姉を起こすために揺さぶると、寝惚けた感じで起き上がる。

「おはよう……ふぁ」

「おはよう……じゃねえよ! なんでお前は隣で裸で寝てるんだよ!」

「あら、昨日はあれだけ激しくしたくせに……ポツ」

「激しくって何を!?! ねえ、オレ。なんかしたの!?!」

「してないわ。安心して。ソラの息子には何もしてないし、ただ裸で寝ていただけだから」

オレのアレに関してツツコまないが、とにかく既成事実がないことに安心だ。オレがホツと息を吐いていると、

「あ、でもあなたの口の中に舌を入れたわ」

「何やってるのお前!？」

後から聞いた話だが、呼吸が止まったオレのために人工呼吸してくれたようだった。

「あ、目が覚めたんだね」

席についた青髪の少年が気さくな笑みを浮かべて、紅茶を口に含んでいた。

朱美姉の話によるとオレ達をここに泊めてくれたのがこの少年らしい。

信用できるかどうかはさておいて、オレはこいつに聞きたいことがあった。

「お前は何者だ」

「いきなりだね」

「当たり前だろ。なんせ、どこの誰かもわからない人間を招き入れるなんてどうかしている」

「空から落ちてきた人の方がどうかしているけど?」

「違う。第一空から落ちてくる人間なんて、いても困るだけだ。

「僕はアオ。古宮アオ。君は?」

「……神威ソラ。ただの人間だ」

「異議あり。ソラが普通の人間だったら、周りは人外かしてるわよ」

「失礼な。こんなオレでも普通なんだぞ。ノーマルだと思っているぞ」

「私の名前は朱美ほむら。ソラのご主人様よ」

「スルーするな。てか、オレをお前の下僕にするな!」

勝手に人を犬のように扱う朱美姉。ほら見ろ。古宮も苦笑しているじゃねえか。

「はは、仲がいいね」

「これが仲がいいのに見えるのか? まあいいや。つーか、ここはど

「こだ？」

「『レジスタンス』のアジトさ」

「レジスタンス？」

「まあ、テロリストって言えばわかるかな」

瞬間あと、朱美姉は銃口を向け、古宮は『神器』を向けていた。朱美姉はその『神器』を見て動揺していた。

なにせ、その剣は――

「『全てを開く者』……？」

「知ってるのかい？　これを」

オレと同じ『神器』。それがこの男の武器のようだ。だが、どうも自身の魂から呼び出したものではなさそうだ。

オレは見ていた。首飾りから神器が飛び出したのを。

警戒心を解かない朱美姉に対して、オレは彼女の銃口を下げさせた。

「どうして。彼は私達の敵かもしれないのよ」

「それを決めるのはオレだ。お前の敵＝オレの敵とは言えないだろ」

苦虫をかんだ顔をして彼女はしぶしぶ銃口を下げた。それと同時に古宮の『神器』も消えた。

「話を聞いてくれるかい？」

「おいしいご飯が食えるならな」

全てはこいつの話聞いてからだな。

「あ、じゃあ私はケーキでソラはビーフジャーキーで」

「ごめん。ペディグリージャムしかないんだ。それで勘弁して」

「そう、許すわ」

「お前ら人のご飯を犬の餌にするなよ!!」
油断も隙もないことがよくわかったわ!!」

第七十一話 救世主

(??side)

次元艦にて、キアラは局員達が集めた情報をまとめていた。

手元には『レジスタンス』に関わる報告書が多数あった。その一部に、キアラは注目する項目を見つけた。

(ソラと同じ『神器』……か)

テロリストの中にカギが剣のようになった武器を使う『神器使い』がいる。『神器』は同名同属がなく、個人が持つ魂そのものだ。

絶対同じとは限らない。

同じ『神器』ということだろうとキアラは考える。

しかし、『全てを開く者』が二つあるという話は聞いたことがない。前例のないことなのだ。

「仮に敵となれば厄介な相手になりそうだ」

ソラが『開ける』ならば古宮アオという少年もまた『開ける』の名を持つ神器を使う。

基本は開閉するものだが、相手の魂を切り離す『解錠』を主にするソラと同じくアオも可能だ。

その推測通り、彼の手にかかった『ネオアルカディア』の幹部が永遠に目覚めることがなくなり、永眠という形でスクラップになっていた。

「ねえねえキアラちゃん。この本、なあに？」

さすがに集中力が切れたのか、まどかが人の机の中にある本をキアラの前に出したのだ。

日記ではなく、おとぎ話が書かれた本だ。一緒にいたなのはやフェイトも興味深々だ。

キアラは「やれやれ」と呆れながら答える。

「ああ。それは『ネオアルカディア』に書店にあった本さ。速読で一通

り読んで見たがなかなかだったな」

「ふーん、どんな内容？」

「ふむ。どうもわたしの前世の国に似たところが舞台で、そこで内乱が起きたそうだ。反乱軍と王国軍の戦いになるのだが、王国軍が不利な状況となる。そんなときに現れたのはカギを剣にしたような武器をもつ少年だ」

「まるでソラくんみたいだね」

まどかの言葉にキアラは苦笑する。確かにソラのように国を救う物語なのだが、この少年は封殺して無力化することで倒していく。

敵味方を救う物語なのだ。

人を問答無用に抹殺してきた彼と全てを助けた少年では全く違う。

(所詮は物語の中の絵空事。現実ではほぼ不可能……——ん?)

何かが引つ掛かった。『レジスタンス』においても永眠させられたのは、幹部なのだが彼は汚職と犯罪まみれのクズだった。

誰かに殺されてもおかしくないのはわかっているが、殺害するにしても生ぬるいと感じた。そして、カギの『神器』とその使い手。この物語になんらかの関連性をキアラは感じた。

(……まさかな)

自身達とソラのような存在がいるとはキアラは微塵にも思わなかった。

(??side)

『レジスタンス』のアジトは地下へ繋がる廃墟の建物だ。倉庫だらけの施設なのでおそらく資材や資料を収めていた建物なのだろう。

オレ達はエレベーターから降りて廊下を歩いていた。通り際、小さな女の子やまだ若い男にジロジロと見られた。

「物珍しいのか？」

「まあね。ここにはレプリロイド達しかいないから」

「レプリロイド？」

「人間にもっとも近いアンドロイドさ。見た目だけだと絶対にわかり

にくいよ」

確かに見た感じちよつと機械をつけてコスプレした人にも見えなくもない。なるほど機械人間というものがいる世界か。

つまりこの世界がそれが当たり前前ってことか。

「改造とかしてるのか？」

「戦闘用ならしてると思うけど、ここにいるのは事務と医療や開発に関わるレプリロイドしかないよ」

「なんだよ。ドリルとかミサイルとか装備してないのかよ」

「なぜドリル？ まあ、つけられないこともないけど、オーバヒートで一回しか使えないと思うけど……」

「なら、おっぱいミサイルとかもできるのか。男のロマン溢れる装備だろ」

「いや、それ女性のレプリロイドの前で言わないでね。セクハラだからー！」

古宮は赤く染めてツツコむ。

いいじゃん。誰だつてロボット×人だったら考えるだろ。

「何を言ってるのよソラ。そんな皮下脂肪ミサイルとか下品なこと言わないでちょうだい」

「生々しいよそれ……。でもほむらさんの言う通りだよ」

「そうよ。だから猫耳メイドモードのレプリロイドを捜すわよ」

「どうしてそうなるの!？」

まさかの予想を斜め上をいく。

「あら、猫耳メイドをナメないでちょうだい。ロリでも猫耳ならば必ず萌える少女となれるのよ」

「ナメてるつもりはないよー！」

「なら、視姦ね。やだ。古宮アオってケダモノなのね」

「僕は無実だ!!」

……前から思ってたけど、記憶を無くす前のオレってよくこんなヤツと仲良くできたな。

そうこうしているうちに食堂へとたどり着く。講堂で、レプリロイド達は皿に乗せた水晶体を食べていた。

どうやら彼らのエネルギーはあの水晶体からなのだろう。

そんな中、一人の少年がうどんをズルズルすすっている。黒髪でや
や耳が尖っているところが特徴の黒いコートを着た少年だ。

少年はオレ達に気づいたのか視線を向けてきた。

「紹介するよ彼はインプのキリトⅡキリガヤ。僕と共に戦っている仲
間だよ」

「キリトだ。よろしく」

「朱美ほむらよ。そして隣にいるのは私のペットの神威ソラよ」

「いい加減人権くれよ」

「だが断る」

解せぬ。つか、苦笑いするなコラ。

オレ達と古宮達はそれぞれ情報をまとめて交換した。

古宮はオレの話聞いて、心当たりがあるのか食いついてきた。

「……おそらく『ネオアルカディア』の総帥ヴァイルの仕業だね」

「もばいる?」

「携帯みたいな名前ね」

「ヴァイルだって。俺達二人が戦っている相手の黒幕だよ」

キリトの言葉に古宮は頷く。なんの目的があつてオレに襲いか
かってきたのかわからないが、とにかくネオアルカディアの連中は信
用できないということになるだろう。

「ネオアルカディアは今エネルギー問題がおきていてね。その問題を
解決するために、いろいろなレプリロイド達を処分しようとしているん
だ」

「エネルギーってあの水晶体のこと?」

「そう、あのエンジェル水晶体がレプリロイドの動力源さ。エンジェル水
晶体は鉱石でね。昔は鉱石とかでよく採れたんだ。だけど……」

「不足している……と」

朱美姉の答えに古宮は頷いた。……まるでオレ達の済む地球と同
じだ。今まで当たり前だった資源が不足し、いずれ使えなくなる。

石油などが良い例だ。車が使えなくなることにより、新たな燃料と
なるエネルギーを探している。

つまり、エンゲル水晶体の代わるエネルギーをネオアルカディアが求めているということになる。

「世間一般なら僕達は悪だけど、実際は処分されそうになるレプリロイドを助けているのさ」

「でもそんなことしたら、ここにあるエンゲル水晶体は……」

「尽きるだろうね。でもレジスタンスのリーダーさんがその問題を解決するために、新たなエネルギーとなるものを開発しているんだ。だから、後もうしばらくお世話になると思うよ」

エンゲル水晶体に代わるエネルギー……か。どんなものだと聞くと、今度はキリトが答える。

「レプリロイドの動力源に新たなパーツを組み込む。そのパーツは空気中にある魔力を吸収するシステムで、それをエネルギーにするのさ」

「リンカーコアみたいなもんだな」

「まあな。それがモデルだからな」

疑似リンカーコアを開発するということは、つまりそれは即席魔導士を生み出せるということになる。これはある意味、スゲーもんに巻き込まれそうだな。

「そのおかげでヴァイルに目をつけられて、リーダーさんは追われているんだ」

「マジでか。やっぱり黒幕はマリオか」

「だからヴァイルだって。というか、君。覚える気ないだろ」

「まあな」

古宮とキリトは嘆息を吐いた。いや、だってオレ。人の名前覚えるの苦手だから。

朱美姉は司令官ポーズでキリトに聞いた。

「……なぜソラを襲ったのかしら」

「さあな？ 理由がわからないが心当たりはないのか？」

心当たりは……あるな。思いつきりあるな。

手に『神器』を召喚すると、キリトは目が飛び出そうなくらい驚愕し、古宮はポカーンと口を開く。

しばらく固まったままだったが、咳払いしてキリトは言う。

「……コイツは驚いた。コイツの『神器』はこの世界ではあるおとぎ話に似ている」

「おとぎ話……？」

「おとぎ話って言っても、ある異世界の伝説がモデルになってるお話さ」

そのお話は異世界からきた人間が伝えた伝記らしい。

昔、ある世界のある国の少年がいた。その少年が住む国は、内乱によつて国が危機的状況に追い込まれた。

だが、少年はかつて人類の敵から国を救った男の持つ『神器』を発現し、そしてその国を救った。

混迷めいた世に導きをもたらした者——その少年は『救世主』と呼ばれたそうだ。

「この話で驚きなのが悪人の死ぬことがほとんどなかったってことだね」

「ホントにおとぎ話ね」

「ああ。俺もそう思う。内乱みたいなので死人がほとんどないなんてあり得ない」

「と、言っても所詮はおとぎ話だ」とキリトは肩を竦める。確かにそうだ。そんな優しい話がないのが、世界なんだよな。

「要するにソラの『神器』がその『救世主』のものだから、手に入れたいと？　こんなおとぎ話を信じているの？」

「事実そうなるだろう。救世主の話が実際にあった、ということだな。その力を得たいって考え付く野心だろ」

何はともあれ、オレの『神器』を知って狙っている……そう考えていいだろう。

どこの誰がオレのことを教えたのかは知らないが、とにかくオレは敵対するものを倒していけばいい。

——今まで、そうしてきたことだから

(??side)

とある廃墟のビル。テロリストによる破壊工作で使えなくなった建物にて、ヴァイルと白いレインコートの男はいた。

その男はレインコートのフードをとり、顔を見せる。黒髪で左目辺りが機械化している。

ヴァイルはその顔を見て鼻で笑う。

「相変わらずのしけた顔だな。その顔はどうにかならないのか？」

「……オレは人形だ。記憶という記録しか持たない。ゆえに感情を表せとは無茶な話だ」

「所詮はレプリロイドということか」

ヴァイルは踵を返しながら、コートをなびかせる。

男はレインコートのフードを再び被る。

「まあよい。貴様を完成させ、この地より他の世界へ侵攻する計画は変わらない。期待しているぞ、『無血の死神』のコピー」

ヴァイルの言葉に、男——ソラのコピーの胸にあるコアが光って反応するのだった。

第七十二話 巻き込まれるのはヤダ

(??side)

なのはとフェイトはキアラとまどかに連れられ、次元艦から出てネオアルカディアの町を歩いていった。

車はタイヤがなく無重力で浮いており、カフェにあるテレビは全て立体化した映像を写している。そしてその町に住む住人の三割は機械化したパーツをつけている人間だった。

「サイボーグ化しているなあ。ねえ、なのはちゃんも腕にサイコガンつけてみない？ そしたら士郎さんが泣いてくれるよ！」

「悲しみのあまりでね！ お父さんを悲しませたくないから！」

「……ちよつと見たいかも」

「フェイトちゃん!?!」

フェイトの最近のマイブームは戦隊ヒーローと変身ヒーローだったりする。成長して大人っぽい雰囲気なのだが、趣向は子どもっぽい。

「もう！ そんなんじや神威くんが見つからないよ。ほら、真面目にしてー！」

「とか言いつつ高町。キミの熱い視線がなぜか家電製品に向いているのだが？」

「……気のせいなの。解体したいとかそういうのではないの」

(……忍さんの影響かな)

この世界のなのはの趣味は家電製品鑑賞だったりする。ノエルの影響か、忍の影響かはさておき、彼女の趣味が変わりつつあるのは事実だ。

ふと、なのはが自分より小さな男女の子ども二人を見て足を止める。その顔には憂いのあるものへと変わったのを見たフェイトはなのはに聞いた。

「……まだ『名前を忘れた彼』のことを根にもってるの？」

「……うん。だって元々は良い男の子だったんだよ。なのに、あんなことをするなんて、まだ信じられなくて」

なのはは天宮草太の存在を忘れていた。忘れそうになったが、皮肉にも絆の強さでなんとなく覚えていた。

その彼が一般人を巻き込み、苦しめ、破滅したことが信じられなかった。

きっと理由がある。原因がある。そんな考えがなのはを苦しめている。

フェイトはもう過去のことを振りきって前を見ているが、なのはにとつて幼馴染みである少年が非道の果てに死んだということを受け止められなかった。

（やれやれ……。ヤツがまさかここまで苦しめるとはどこまでも迷惑な男だ）

とは言え、『もしも』の話をするならば。

彼が、ソラを理解して悪ではないと判断していたら。

彼が、ソラを嫉妬しても心を歪んでいなければ。

彼が、悪魔に耳を貸さなかったら。

もしかすると、ソラの『友』になり得たかもしれない。

「……まあ、そんな『もしも』はもう二度とないが」

天宮草太は死んだ。しかし彼は死んでも影響を残していたのが、キアラにとつて憂なことだった。

「うーん、それにしても良い二オイが……あー！」

まどかの視線がある人物達を捉えた。その視線の先には――

（ソラ side）

食堂で食べ物をいただいてからオレとほむらはキリトに連れられ、町の散策に出掛けていた。レジスタンスのリーダーさんとやらはどうも外に偵察に出掛けていた。

まあレジスタンスの基地は処分認定されたレプリロイドばかりだ

から顔割れはしてるしな。

人間のリーダーさんが変装とかしていれば問題なさそうだ。

オレ達がいるのは一つのカフェテリアである。カジュアルでオシャレなところで、コーヒーを口に含みながら前の席に座っている少女に目を向ける。

金髪のポニーで、自分より一つ上くらいの歳の少女だ。キャップをかぶって顔は見えないようにしているがいぎ、面と向かうと青い瞳と整った顔立ちが見えた。

「は、はじめまして。レジスタンスのリーダーをしてるシエル……です」

「神威ソラだ」

「朱美ほむらよ。……ホントにこの小動物がリーダーなの？」

ジロリと見られたシエルが「うっ」と尻込みした。まあ、朱美姉の凜とした雰囲気だからやや引つ込み思案になるのも無理ないな。

「というか、偵察だからって変装したくらいで大丈夫なのかよ。バレルじゃねえの？」

「あ、大丈夫です。この防止は認識阻害させるキャップですから」

「万全……というわけか。じゃあここにはいない古宮も？」

「はい。あの人には私が作った帽子で認識阻害しています」

なるほど、機械の認識を欺けるアイテムか。なら、レプリロイドとかも思えたがそうはいかないらしい。

レプリロイドは工場やらどこかの施設で造られたりする。

そのときに存命されているか確認するためのマーキングが施されている。そして基地はそのマーキングから逃れるための認識阻害が施されている。

つまり一歩出れば自身だけでなく、基地も危ないということになる。偵察は彼女と古宮の二人が行わなければならないのだ。

「というかキリトって仲間なのに変装しなくていいのか？」

「俺もお前らと同じ異世界から迷いきたんだ。だからまだ顔割れはしてないんだよ」

「へえ。お前もか……」

「オレは彼女に聞きたいことを思い付く。」

「シエルは最終的に何が目的でこのレジスタンスを創設したんだ？」
彼女も追われる身なのだが、レジスタンスを隠れ蓑というわけでもなさそうだ。一人一人が『仲間』として繋がっているし、時おりシエルのことを呼び捨てにしていたりしていた。

つまりしつかりとした組織であり、対等な仲間である。

「……私はレジスタンスのようなレプリロイドがもう現れるようなことがないように、レプリロイドと人が共存できる未来を作りたいです」

「共存していないのか？」

シエルは頷いた。話によれば昔は共存していたがヴァイルが支配者になって以降、レプリロイドはほぼ奴隷として扱われている。

「損傷したレプリロイドは処分されるらしい。たった一回の損傷で、死刑宣告されるに等しいのだ。」

「……シエルはレプリロイドを人と対等に見ているがゆえに、レジスタンスを創設したんだな。」

「もし、願うならばきょうりよ」

「え、ヤダよ」

「普通に断りやがった!!」

キリトうつさい。当たり前だろ。巻き込まれるのはヤダだし。

「というかその世界の問題はその住人が解決すべきことなんだ。余所者であるオレ達が関わるまでねえだろ」

「それは……そうだけど」

「納得しようがしまいが、オレ達にはなんのメリットがない。むしろデメリットだ。オレ達は管理局の仲間として、ここに来たんだからな」

もしレジスタンスと行動すればキアラが苦い顔をするのは必然だ。だから余計なことはいらない方がいい。

オレの言葉に堪えたのかキリトは口を閉ざして膝に拳を握っていた。

「その代わり別にあんたらのはネオアルカディアの連中には報告しない。信用できるお前らを信用できない連中に明け渡すつもりはさらさらないしな」

「そうですか……。それなら、安心です」

「……やけにあつさりとしていな」

「はい。私はひどいことをすることを望んでいませんので……。それに誰かが傷つくのが嫌ですし」

まるでかつてのどこかの誰かの言葉だな。そうそう、あんな感じに外も中身ピンクの……。ピンク？

「ソラくんみーっけ!!」

「げぼぼ!!」

朱美妹にガツチリホールドされた!

「あーん。やっと見つけたよ。私の嫁! さあ、このまま宿で休もう。大丈夫。天井のシミを数えているうちに終わるから!」

「落ち着けこの変態!!」

スリスリしてくる朱美妹を引き剥がそうとするがコアラのごとく、ガツチリホールドしてやがる。

おかげで引き剥がしができない。キリトとシエルが目を点にしなから、呆然としていた。

いきなりこんなのが現れたらびつくりするに決まってる。すると、朱美妹が……、

「はっ! ソラくん。この子があなたの浮気相手なの!?!」

「浮気してねえよ!」

「嘘だよ! エロ本みたいに浮気してたに決まってるよ! 千香ちゃんの人誌の参考書はそんな感じだから!」

「どうでもいいわ! てか、あいつそんなもん持ってたの!?!」

「ひどいよ……。私達夫婦は仮初めだったの? うう……。——二ヤリ」

「夫婦じゃねえだろ。てか、お前の嘘泣きわざとか! おかげで周囲に誤解されてるじゃねえか!!」

まるでオレが妻をほったらかしにしている浮気している男じや

ねえか！

最悪だ……。このピンクの行動全てはなんのためにあるんだろうか。

「はあ、とにかくお前だけか？ キアラは。高町やフェイトは？」

「あ、向こうにいるよ。おーい」

ブンブンとハイテンションに手を振る朱美妹。やれやれと内心嘆息を吐いていると、その刹那。キアラ達と遮るかのように何かが振ってきた。

ズドンとそれは地に突き刺さる。繭のような形をしたカプセルだ。そこから出てきたのはオレを襲ってきた紫のボディの機械兵達だ。

「こいつら……！」

「ソラ。お前のお客さんだな」

「いや、キリト。お前もだろ」

「まあな。でもまさかこんな白昼堂々と襲いかかってくるなんてな。どうかしてるぜ」

全くだ。とにかくシエルを逃がして、迎え討たない———と思つた瞬間のあと。

オレの足元がひび割れ、穴ができた。そこから掴まれた腕により、引きずり込まれた。

「ソラくん！」と朱美妹の声が遠くなっていく中で、オレは足を掴んでいる腕を蹴る。

機械的なアームだったので全く堪えない。

落ちていく先に待っていたのは地下鉄の線路だ。リニアモーター的な電車の線路のため、レールがない。

オレの足を掴んでいたのは全長十センチの機械兵だった。そしてその隣には炎を連想させるような女性がいた。

「よお。待ってたぜ救世主のモノマネヤロー」

「やめろそれ。偽物扱いすんなよ。てか、お前は誰……？？」

「おれはフレイア。ネオアルカディア四天王の一人さ」

……幹部か。

「その四天王の様がこんな一般人になんのようにだ？」

「んー、まあ。テメエが大人しく上の元へ来てくれたらいいんだが、別にそうするつもりはねえんだろ？」

「ああ」

「ならさ、」

フレイアの腕が発火し、炎が纏われる。獲物を狙う獰猛の獣の目。さらに三日月に口が歪め、地を蹴り肉薄する。

「殺り合おうぜえー！」

「戦闘狂かこの女」

ガアンと『神器』と拳がぶつかる。盾にした『神器』は鉄ではないので融ける心配はないが、手元が熱い。

たぶん、火傷は避けられないなあ。

オレは身体をやや下がらせ、勢いによって前の子になったフレイアをそのまま蹴り飛ばす。あまり、飛ぶことないし、ダメージがなさそうだ。

「レプリロイドか……」

「四天王は全員レプリロイドさ」

「ヴァイルのおもちやってことか？ ご苦労なことだ」

「あのジジイのおもちや扱いするなよゴルア！」

大きく息を吸い込み、フレイアの口から火炎放射が吹き出した。大きな火の波が襲いかかる。

「ヤバッ」

「さあ、どうするー！」

この火炎放射は魔法ではなく、パーツによって精製された火炎だ。つまり、『魔法』など構成された幻想の産物ではなく、自然に作られたものだ。よってキャンセルはできない。

おまけにここからだど一方通行の火炎放射だ。逃げ場はない。迫る火炎。

ふと頭に浮かんだのは風の魔法。術式を組み込み、風の障壁を発動して防いだ。

それを終始見ていたフレイアは不敵の笑みを浮かべていた。

「やるねえ……燃えてきたぜ」

「勘弁しろ」

こんな密封に近い空間で、熱は勘弁だ。現に汗が出ているし。

第七十三話 ……それでも

(??side)

古宮アオはヒト気のない建物が並ぶ路地にて、駆け巡っていた。接敵した相手は、四天王のうちの一人であるシャドーという男だ。

忍者という言葉が似合う服装をしており、暗闇に紛れ相手を討つ。まさに暗殺者だ。

この地は身を隠れるのに適しており、アオからすれば不利な地理だ。

(いきなり転移されたと思ったらこれか)

トラップ式の転移魔法だった。誰が設置したのかはわからないが、とにかく相手の罠にかかったことを理解していた。

アオがすることはいかにして身を潜めた敵を見つけることだ。

(……遠距離から攻めるべきだけど、今の僕にそんな手段はない)

アオは諸事情で魔法が使えない。

もつとも彼は魔法が苦手な部類だ。

魔法のセオリーは、魔力を練り込み、術式を組み込み、放出する。なのはが使う魔法もプログラムを術式にして放出していることと同じだ。

しかし彼には魔力を練り込みはできても術式はお世辞とも言えないくらい粗雑な組み込みで、何より放出が苦手だ。

唯一使えるのは自然に学んだ『召喚術』だ。モノを喚び出す魔法しか彼が使えるカードはない。

黒いクナイがアオの足元に突きささる。どうやら見つかったようだ。

「さて、どうしようか……」

どのようにして勝つか。それは彼が前世から考えているいつも通りの勝利への道筋である。

(ソラside)

魔法の障壁。それは高町が使う防御魔法に近いものだ。

空気中にあるものを魔力で凝固させることによって、その障壁は発動する。そこにオレは風の特性を組み込み、属性を付与させた。

しかし、それなりに魔力を使うのではつきり言っただけが悪いのはこちらだ。

どうやってあの炎を塞ごうか考えていると、フレイアは固い防御に我慢できなくなつたのか接近戦へ持ち込んできた。

「我慢強くねえなお前」

「うっせー！ とつと灰になりやがれー！」

「断る。お前に灰にされたら、末代までの恥だ」

「ムカつく野郎だ！」

そりゃ、挑発してるからな。オレは迫る拳を避け、回避できないものは受け流していく。

大振りになつたところで斬撃を入れ込む。黒い一閃は、フレイアの身体に火花を散らすだけで終わってしまった。

フレイアの炎の腕がオレの身体を貫く。咄嗟に『神器』を身体の前に召喚して盾にする。おかげで身体へ貫通することはなかったが、衝撃で身体に激痛がはしる。

口から血を吹き出しながら水平へ飛んでいき、滑走させられた身体を起き上がる。

不敵に笑うフレイアは勝ち誇っていた。

「はん。おれの身体は鋼鉄だ。しかもお前の知らない金属だ」

……チツ。オレの知らない新種の金属。封印はオレが知ってるものでなければ発動できない。封印対策か。

「……面倒だな」

「どうするよ。え？ モノマネヤローさんよお!!」

腕から放出される炎の津波。魔法で遮るも、オレは空気が薄くなるのを感じた。

熱による室温も上昇している。人の身体は熱に強いわけではない。

脱水症状を起こし、それが治まれば身体中の水分がなくなり、熱中症で倒れる。

長居していたら、おそらく人間のオレの肉体もいずれ限界がきて、倒れてしまう。

「ホント、面倒だなあ……」

時間制限もあり、特技の一つが抑えられた。

解錠も、どこが心臓と言える部分があるのかわからない。あの狼のレプリロイドはご丁寧に胸にカラータイマーがあったからな。

「ホント……」

フレイアの猛攻は続く。彼女の優勢は変わらない。「勝った」という勝ち誇った笑みを浮かべていた。

そんなムカつく笑みを見ていたら、

「殺したくなる」

「ッ、!？」

マシンガンのような猛攻を受け流して接近。そこからフレイアの腕を掴む。

「つかまーえーたつと」

「離しやがれ！ チッ。なんで燃えてる腕が掴めるんだよ!? 火傷しねえのか!？」

火傷してるぞ。現に真っ赤に皮膚が腫れ上がってる。痛いよそりゃあ。

でもな……。

「こんくらい。胸やら腹やら目が抉られるくらいより、マシンだ!!」

「！ て、てめ……!。 がっ、ぎゃっ!？」

黒い剣閃を何度も描く。火花が飛び散り、一見ダメージないけれど、ボロボロになっていく。

離せと叫ぶ女を離さない。絶対に仕留めるために、そしてフレイアの人間らしい顔にヒビが入る。

「て、てめ……ええ」

「安心して」

鬼の形相でこちらを睨むフレイアへ『神器』を大きく振りかぶり、そして。

「とっと死ね!!」

その首をへし折るくらいの一撃を直撃させた。

フレイアをそのまま地上まで貫き、オレは後を追う形でところどころある足場を跳躍しながら、地上に出た。

日の光で一瞬眩しく思うと、古宮が無数のクナイに対応しているところが視界に入る。

対応しきれてないところを刺さり、歯を食いしばって耐えていた。

「ぐ、ぎぎぎ……」

雑音混じりの声が聞こえたところを振り向くと、そこにいたのはフレイアだ。

オレの斬撃で、腕はそのまま勢いで引きちぎられ、首はもげそうになっていた。

コンセントのようなもので辛うじて繋がっている。これを見ているとやはり人間ではないと実感する。

「ぎぎまあー！ よく、も……よく、もお!!」

「おー、こわっ。でもお前に構ってる暇はねえんだ。古宮のヤツが苦戦してるから援軍に行かないと」

「ふ、は……誰がさせる、か……よ!!」

フレイアの身体が紅蓮に輝く。おいおい。まさか、

「ネオアルカディアにい、栄光あれエエエエ!!」

「ッー」

自爆。その爆風がオレを巻き込み、辺りを光と火炎に包み込んだ――

(??side)

爆破音が聞こえた。ある程度数が減ったと判断したなのははその場から離れると全員に伝えて、爆破が聞こえた位置へ向かう。

そこに待っていたのは廃墟だったと思われるビルの破片だらけだった。

いったいここで何が起きた。神威ソラは無事だろうか。

そう思い空から辺りを観察すると、カギのような剣で戦う少年がいた。少年はソラではない。

けれど、関係がないと思えなかった。少年が膝につくと忍びのような服装をした男――シャドーがとどめとばかりにクナイを突き刺そうとしてきた。

「待つて！　そこまで！」

さすがにただ事ではない。少年が殺されるような事態があつてはならない。

なのははシャドーに問う。

「どうして彼を殺そうとしたのですか！　彼はいったい何者ですか！」

「ソノモノ。テロリスト。マツサツタイシヨウ」

機械的、いや事務的と言ったところか。シャドーはテロリストだからという理由で彼を殺そうとしていた。

確かに犯罪を犯すテロリストは許せないものだ。ヴァイルに見せられた映像ではつい手に力を込めてしまった。

だけど、だからこそ、彼女は言う。

「だからって殺す必要はあるの？　罪人だから殺して許されると思ってるの？」

「グモン。ザインンダカラコソ、ハイジヨスベキ」

「……そんなの間違ってる」

なのはには正義はわからない。

何が正しかったのか、何が間違っていたのか、今はもう断言できる自信はない。

けれど、それでも彼女はもう人が死ぬというのを見たくない。それがたとえ化け物に成り果てていたとしても、彼女は救いたいという考えは捨てられない。

確かに甘い考えだ。馬鹿馬鹿しい理想論だ。

けれど、それが間違いだったと言えない。

(鼻で笑われてもいい。軽蔑してもいい。——私は私が信じる正しいことをするまで!!)

今の彼女に迷いはない。覚悟と不屈の心をもって、彼女は四天王にレイジングハートを構える。

第七十四話 負けない魂

(??side)

高町なのははまだ子どもだ。身長は子どもだが、魔法を知ったときの頃より伸びている。女の象徴である胸部も成長はしている。

しっかりと成長していると彼女も自覚している。

しかし、それでも彼女はまだ子どもだ。ソラと違い前世の記憶はない。『神器』という不思議な力もない、魔法という力のみ。

それを武器にして如何に戦うか、まだまだ未熟だ。

もちろん、なのははそれを自覚していた。

(戦闘経験はあちらが上。ありきたりな攻撃だと、あつという間にやられる)

奇策と奇襲。如何に強者と言えど、予想外な行動には対応しきれないはずだ。

シャドーはなのはを敵と判断したのか、地を蹴り、クナイを向けて突貫してきた。

なのはは、シャドーを見失つてはいけない気がした。視界から外れたら最後、逆に奇襲でやられると思った。

スフィアを浮かび上がる。『アクセルシューター』という追尾型の魔力弾だ。

その数は三十個。全力全開で彼女は対処するつもりだ。

クナイを投げつけてきたシャドーは投擲後、影に潜り込んだ。なのはの内心は驚愕と焦燥感が浮かぶが、並行思考でその感情を落ち着かせ、相手の動きをどう出るか予想した。

武芸を得意とする父と兄の動きをいつも見ていたからこそ、相手はどう出るか考えた。

(弱い私が相手なら——背後！)

なのははスフィアを後ろへ動かす。前方のクナイを杖で弾くと、今度はやはり背後からクナイが飛んできた。

爆風が起き、クナイが消滅したのを見たシャドーはやや驚愕に染まるが、すぐさま影に潜り込んだ。

影の中にいるシャドーは海に潜ったダイバーと同じだ。動きは鈍くなるが、それでも一般的から見れば早い。ゆえに彼はすぐになのの背後から現れる地点へたどり着いた。

なのは気づいてない。そう判断したシャドーは、指と指に挟んだ二本のクナイを投げつける。

このまま気づかないまま串刺しになる。そう思っていた矢先、スフィアがクナイを爆破した。

またしても、とシャドーが思った刹那、なのはがこちらに振り向いていた。

そして槍のような杖の先端からエネルギーが収束されていた。

『『ダイバインバスタ』アアアア!!』

なのはの十八番。極太砲撃がシャドーに向かってきた。

影へダイビングした彼はなぜ、なぜと内心では理解できていなかった。

レプリロイドは人ではない。感情はない。されど、今のシャドーは皮肉にも人間らしいところを見せた。

「アリエナイ。なぜ、ワカル……？」

気配はないはず。なのにクナイを防げたことが理解できなかった。

なのはがなぜシャドーの行動を予測できたのか。

なのははいつも士郎から聞いていた。彼の戦いの軌跡——

様々な暗殺者、刺客、はたまた武芸者との話をいつも聞いていた。

その話でよく聞いていたのが暗殺者の話だ。

『暗殺者のもっともな武器は気づかれないことだ。如何にして相手に察知されず、確実に抹殺する』

気づかれず、相手を殺す。それは最高の奇襲であり、必殺技だ。どんな最強の敵と言えど油断し、隙を見れば致命傷は免れない。

如何にして相手に気づかれなまま、仕事を終わらせるかで暗殺者の力量が計れるということだ。

なのはは士郎の話から様々なことを学んだ。しかし、経験が足りな

いため、シャドーが見つけれられないという中途半端な形で渡り合っている。

勝敗が分かるとすれば、シャドーを発見するかしないかで決まる。

なのはは警戒心を緩めず、耳を澄ませる。士郎は続けてこう言っていた。

『そして、確実に抹殺する奥義があることを忘れてはならない。もし気づかれない奇襲が失敗すれば次に来るのは』

(必殺の奥義!!)

予想通りシャドーが正面から巨大な手裏剣を形をしたエネルギー弾を投げてきた。

ヘリのプロペラのごとく回転したそれがソラや雷斗の身体であっても直撃すれば真つ二つだ。

華奢なのはが直撃すれば間違いなく即死だ。エネルギー弾の速度は早いため、なのはの反射神経であつても避けられない。

身体の一部を犠牲にしなければ回避はできそうにもない。

防御など論外だ。必殺技の一撃をわざわざ正面から挑もうとするとなれば、天道衛のようなタフガイでなければ無事では済まない。

ゆえになのはがとる行動は一つのみ。エネルギー弾に向けてレイジングハートを構える。

「カートリッジ！」

三つの薬莢が飛び出し、魔力のドーピングを発動。そしてレアスキルの集束を利用し、周囲にある魔力と自身の魔力を込める。

「デインバスターを超える砲撃魔法が、今完成した。」

『「デインバスター・フルパワー」!!』

大きな魔法陣から放たれた魔法はエネルギー弾と激突した。

一見、手裏剣の回転が衰える気配は見せない。しかし、そのエネルギー弾は『斬る』ことが目的ではなく『斬った上での爆破』する手裏剣だ。なのははレイジングハートを握りしめ、叫んだ。

「壊れるオオオオオ!!」

手裏剣が徐々にひび割れていき、そして爆破した。

シャドーはまさか自身の必殺技が破られるとは思いませんでした。のか、驚愕に染まっていた。なのははその隙を逃さなかった。

バインドで相手の身体を拘束し、スフィアで相手に一斉放射した。砂煙が舞い、それが晴れたとき倒れたシャドーの姿を確認した。

「勝ったの……？」

なのははその姿を視界に入れてから安心してしまった。

『Master!! Look back!!』

そのためレイジングハートの警告の声を聞き遅れてしまった。背後に振り返るとそこにいたのは機械的な部分を顔に見せたシャドーがクナイを向けて迫っていた。

レイジングハートの判断で自動的なシールドが張られたが、レプリロイドの腕力は普通を逸脱していた。シールドは破られ、腹部にクナイが突き刺さる。

激痛と驚愕で顔を歪ませながらなのはは落下していった。

(どうして……！ 私には確かに……！)

なのははシャドーを倒したはずだった。しかし倒したシャドーはのつぺら坊のツルツルな人形になっていた。

「ワガ、カワリミニ、ヒツカカツタノハ、キサマガ、ハジメテデハナイ」
(変わり身……？)

そう、砂煙で見えなくなつたところでシャドーは変わり身を使っていた。当たったのは最初のスフィアのみだ。

負傷は少なくし、なのはが油断したそのときを狙っていたのだ。

なのはは己の失念に悔いた。土郎にも聞かされたことだ。

『倒した———そう思ったときが一番危険なんだ』

「ごめんなさい……おと、うさん……」

地に落ち、膝についた彼女は痛みと後悔で涙を流す。シャドーは彼女をとどめを刺すべく、近づいていた。

「やめろ！ 僕が狙いなんだろう？ なら、僕からやれ！」

「キョヒ。コノモノハ、ワガシユノ、ヤボウノ、ケンインシト、ハンダン。マツサツ、マツサツ」

野望とはなんだと聞きたいところだが、なのはに残された手段は雷

斗から教わったことだ。それを実行するしかなかった。

彼女は『名前を忘れ去られた彼』を止められなかったことと、神威ソラを傷つけたということに後悔した。

自分に力があればと何度も考えた。そして彼女は士郎の元に通う雷斗に目をつけて、『召喚術』について学んだ。

倫理に反するものは当然のごとくあったが、受け入れられるものを受け入れて、身に付けた。

なのは目を瞑り、集中する。『リンカーコアの魔力』と『ソラ達の魔力』は形質が似ていた。ゆえに魔力さえあれば『召喚術』が使える。

そんななのはが喚ぶのは『神器』ではない。『神器』は文字通り、才能と感覚でしか喚べないものだ。不平等だが、魂の一部を武器にするということは努力でどうにかなるものではないのだ。

ではなのはが喚び出すのは何か？

彼女にはフェイトのような使い魔はいない。また使い魔を呼んだところで、シャドーはどうかできるものではない。

「クタバレ」

「やめろオオオオオ!!」

アオが叫ぶ中でもなのはは集中する。

思い描くのは、強き女性。

何者にも立ち向かってきた不屈の心の女性。

運命にも挫けず、最後まで戦い続けた女性。

そんな人に私はなりたい。

クナイはなのはの胸元まで近づいたところで止まった。理由はなのはが止めたのだ。

そして彼女は獰猛な笑みを浮かべる。

「クス……よくもやってくれたわね」

声はやや違う。瞳もアメジストから紅くなっている。

そして何よりも子どもの身体にも関わらず、妖艶さが滲み出ていた。

「キサマ、ナニモノ」

「さあ？ そんなことを自分で考えてちょうだい」

なのは腕をへし折った。信じられない腕力にシャドーは困惑したことを期に、レイジングハートで突き飛ばした。

彼女は妖しく笑いながら、レイジングハートをかつぎ上げ、言葉にした。

「おいで……遊んであげるわ」

アオはそのとき、ひぐらしの鳴く声が聞こえた気がした。

第七十五話 変身（笑）。高町なのはは危険です

(??side)

——もしその人物になれるとしたら

そんな願望は幼い頃、誰しも想像した。

野球選手然り、アイドル然り、小説家然り、芸能人然り、そして尊敬する偉人達などなど。

その人物になりきれるとしたら、誰もが一度は体験したいことだ。そしてそれが可能にしたのが、なのはが使った『召喚術』だ。

『憑依召喚』。

英雄の魂などを自身の身体に喚び出す召喚術だ。

シャーマンやネクロマンサーという存在が得意としている降霊術に似ているが、実際に憑依するのではなく、正しくはその魂の人物に『身体』がなりきることだ。

魂の持ち主をモノマネしたと言ってもいい。

もちろん、この召喚術は誰しもできるものではない。身体が魂に適応していること、また自身がその人物のことを知っていること。

簡単なようで難しく、そして『神器』と同じく生まれによつて決まる召喚術なのだ。

よつてなのはだからこそできた、と言っても過言ではない。彼女は雷斗から教わった『召喚術』の中で、なぜかこの召喚だけができそうな気がして実行した。

……結果、散々だった。一緒にいた士郎もへたれ込むくらい大変だった。

一緒にいた士郎も巻き込まれたり、道場が半壊したり、なのはの身体で泣かれたということが多い。

雷斗がこの召喚術について言うならば、「二度と関わりたくない」と

言うほど濃いキャラがなのはの身体に召喚された。彼女の持つ魂の繋がりほとんどない少女を喚び出したのだ。

そして、今なのはの身体にはとある少女が召喚された。

その少女はなのはがごくたまに電波的に受信している女の子で、性格は度重なる惨劇で歪んじやつてる。

その少女の名前はあえて明記しないが、まあ敵対した者にはご愁傷様と言っておこう……。

それはさておき
閑話休題。

シャドーは豹変したなのはに戸惑うことなく、冷静になおかつ合理的に動き出した。

クナイを投擲し、手に手裏剣のエネルギー弾を再び作り出そうと力を込める。

なのはは回避しなかった。回避しなかった彼女に疑問を感じるシャドーが次に見たのは、指でクナイを全て掴みとったなのはの姿だった。

「バカナ……!?!」

「今度はこちらからね」

なのはがレイジングハートを掲げるとスファイアが展開される。しかしそのスファイアの形は球体ではなく、なぜか包丁の形で、しかも数が多い。

百を超えるアクセルシューターが生み出された。

「いつてきなさい」

レイジングハートをシャドーに向けた刹那、彼にアクセルシューターが向かってきた。

シャドーは手裏剣を作り出すことを中断し、その場から障害物があるところへ飛び移る。

ガガガガガガ!!と無数のスファイアが障害物を破壊し、破片と砂煙を飛び散らせる。シャドーは足を止めることなく逃避するも、腕や足にスファイアを掠り始めていた。

彼は術者であるのはを討てば、と思いクナイを構える。アクセルシューターの集中砲火を変わり身に受けさせ、背後から接近した。

今なら殺れる。誰もがそう思ったとき、なのはは振り返らずレイジングハートをシャドーに向けていた。

驚愕しているのも束の間、砲撃がシャドーの腕が呑み込まれた。

腕は焼失し、焦燥した表情となったシャドーはなのはに対して「ナゼッ」と問いかけた。

なのはは気にせず、獰猛な笑みを浮かべ、シャドーの顔を鷲掴みにする。そして魔力で強化された手で、シャドーの腹部を突っ込み、内蔵をえぐりだすように、引きちぎった。

「ギ、ガガガガガ!」

「うるさいわね。雑音を出しているんじゃないわよ」

パチンツと指を鳴らす。それと同時に時は止まり、灰色の世界へシャドーとなのはは誘われる。

シャドーは空中にいるにも関わらず、落下せず、身動きが取れず、ただ動けないでいる。

なのはが実行したのは『マホウ』。ただし、魔導士が使うプログラムではなく、『奇跡』を表した魔法だ。

その『奇跡』をなのはが起こした。『時が止まる奇跡』という『彼女のマホウ』だ。

なのははレイジングハートを振りかぶり、頭や身体を打撃や突き始める。

打撃や打突をされたにも関わらず、変化はない。しかしその世界が色を取り戻した直後——

シャドーの身体が無惨に壊れ始める。

部品である目が飛び出し。

血液みたいな液体が飛び出し。

皮膚も剥がれ落ちていき。

そして、腕や足が弾け飛び、五体不満足な状態で彼は地へ倒れた。

「ナ、ゼ……」

「そんなものわかるに決まってるわよ。だって、」

レイジングハートを向けて彼女は言った。

「僕は伊達に千年も生きてない『奇跡の魔女』なのですよ、にぱー☆」
無邪気に無害そうな笑みを浮かべて、極太砲撃によってシャドーは
この世から消滅した。

アオはなのはの豹変に戸惑っていた。いったい彼女に何が起きた
のかわからない。

あの危機的な状況で彼女が急に強くなった理由を探すも答えは見
つからない。

シャドーは消滅した。そして次に狙われるのは自分では……と恐
怖が生まれる。

(この場から逃げないと……。じゃないと、レジスタンスが……。)
痛む身体を起こして、立とうとすると自身を覆う影が生まれる。な
のはがアオを見下ろしていた。

ニコニコと微笑んでいるが、その笑みは「O☆H A☆N A☆S H I
しようか。嫌だと言わないよね、よね？」と言ってるように見えた。
「あ、えっと……」

「おやおやく？ 僕に助けられて逃げるの？」

「す、すみません……」

「……まあいいわ。とにかく話を聞かせなさい。あなたが何者か、そ
してあなたの組織の居場所を」

「そ、それはー！」

ジユドンツ!! (砲撃でビルの半分消滅)

「嫌なのかな？ にぱー☆」

「言います。言わせてください」

「シエルさんごめんない」と内心謝るアオは土下座をしたまま、話し

始める。

魔王には勝てなかった。なのはに勝てなかったのだ……。それはさておき、話終えたアオになのはは顎に手を乗せて考え込む。

大人に近い思考力が、的確な判断ができるようにしていた。

そんなとき、ソラが障害物からヒョッコリ顔を出して事の結末を見ていた。

(……あの子、あんなに凶暴に見えたっけ)

ほむらに似た何かを感じたソラは今のなのはに近づきたくなかった。一方、なのははアオに聞いた。

「君のアジトに案内してくれない？ 上の人とお話したいからさ」

「管理局……にですか？ しかし……」

「大丈夫。キアラちゃんは融通聞く子だから、別にネオアルカディアには報告しないよ」

「しかし……」

「まあどのみち拒否権ないから。……拒否したら、内蔵をえぐり出して剥製にするから」

「ひどい!? そして猟奇的じゃん!」

レイジングハートをグリグリ頬に押し付けるなのはを見て、ソラは「あ、こいつ朱美姉みたいになってる」と思った。

ここにいては間違いなく標的にされる。そう思い、離れようとする と極太砲撃が障害物を消滅させながらソラに迫ってきた。

飛び込んで回避し、冷や汗をかいた。そんなソラになのははいつの間にかレイジングハートを向けていた。

「みー、神威も一緒だよ♪」

「お前、なんか魔王化して——」

「さて、お仕置きの時間なのですよ」

「え、ちよ、レイハさんをそんな至近距離で構えないで——」

「死にさせなのです。にぱー☆」

「ぎにやアアアア!!」

そして、『なのです☆無双』の再来が訪れた。具体的に言えば、至近

距離からのショートバスター。失神しようが、お構い無く、なのはは撃った……。

砲撃の嵐を受け終わると、ソラは「もうやだ。オウチ帰る」と泣き叫ぶくらい壊れていた。

その頃、ネオアルカディア。暗い講堂にて、ソラのコピーは眠っていた。

彼が見ていたのはソラという記憶。『一ノ瀬ソラ』という少年が絶望するまでの軌跡だ。

ふと、目を開けると彼は嗤笑していた。

「……愚かな子ども。純粋がゆえに、『無血の死神』へと繋がるか」
だからこそ、オモシロイ。

彼の絶望まで至るその道のりはオモシロイ。

実際にその目で見てみたい。

「ならば、狙うのは関わりある人間か……」

彼の視線の先に待つのは朱美ほむらなどこの地へ訪れた人間を写した画像だった。

第七十六話 動き出すもの

「……もうやだ。なんでオレがこんな目に合うの？ 神様はどんだけオレに試練を与えるの」

「……ねえ。ソラが壊れてるんだけど、いいの？」

「私は一向に構わん」

「なのは、ホントに変わったね……」

フンスツと鼻で息を吐く高町にフェイトは嘆息を吐いた。

豹変した彼女のファーストコンタクトに「なのはが不良に!？」と大変狼狽したが、なんやかんやで受け入れた。

……いや諦めたのだろうか。高町なのはは元からこういう人なんだって受け入れたんだろうな。

それはさておき、オレは縛られた状態でキアラ達はレジスタンスのベースコンテナに招待された。

アオの背中に「にぱー☆」とニコニコした高町がいたので、冷や汗と強ばった顔が生じていた。

……高町桃子の娘だけあるわ、この子。

案内し終わると、高町は元の高町に戻った。それにホツとしているとフェイトと騒ぎだした。

「スゴいよなのは！ まるで地球防衛軍の基地みたいだよ！」

「確かに格好がそれっぽいよなあ……。てか、フェイト。お前、ウルトラマン見ているの？」

「ティガの映画は泣けた」

あー……。誰にでも光になれるアレね。逆に言えば誰にでも闇に染まれるってことになるけど。

雑談しているうちにシエルさんの工房までたどり着いた。扉が開くとそこにはコアらしき球体が数々あった。

そしてその中心には紫に輝くコアがシリンドラーの中に浮いていた。

「あ。アオくん、おかえり」

「ただいま帰りました。……すみません。管理局の皆様を招待しちゃって」

「仕方ないよ。見つかるのも時間の問題だったし、それにアオくんが信頼できる人だから大丈夫だよ」

うわ……とてもいい人だ。

ホントこの人見ていると心が癒されるのはなぜだろうか……。

「くっ、ほむらちゃん。新たなライバルだよ！ ヒロインだよ！」

「落ち着きなさいまどか。彼女はあのアオという少年のヒロインよ。ソラのヒロインにはならないわ」

「そっか！ じゃあ、今夜計画していた『ソラくん貞操奪取プロジェクト』に支障はないんだね!!」

「そうよ。あと厳密には『ソラペット化計画』よ。貞操はついでよ、ついで」

「なんつーことプロジェクトしてるんだお前ら」

油断も隙もない。今夜のトラップは外せないなこれ。

てか、シエルに癒される理由って、ヒロインが性的にDS的に歪んでるだからではないだろうか……。

そう思う今日この頃である。

それからキアラはシエルに今後どうするか聞くと、彼女は現状をどうにかしたいと、ネオアルカディアの事情を説明した。まあ、今のネオアルカディアはエネルギー問題に直面しているし、その問題を解決しようとしたら上層部に狙われたわけだしな。

……かく言うオレもまだ管理局を信頼してないが。

「……つまりネオアルカディアの上層部をどうにかしたい。そういうことなのかね？」

「はい」

「ふむ。ではわたし達が得られるメリットとは？ なければわたしとしては協力したくない」

キアラの言葉に高町とフェイトはムツした表情になる。一方で、古宮は冷静に思案していた。『名前を忘れた男』と比べて現実を見た上

で、理想を目指そうとしている。

『ありがとう』と言われるだけの感謝の言葉だけでは骨折り損になる。当然、キアラの部下達の間にも不満が生まれる。

それは古宮としても良きとしない。この男は相手にも利益があるようにしたいと考える。

「……シエルさん」

「わかっている。私が提供するとすれば、疑似リンカーコアしかない」
キアラはニツと笑みを浮かべる。狙いはそれか。

まあ、確かに人工的にリンカーコアがあれば簡単に魔法が使える衛兵の完成だ。兵力増強と考えれば、彼女のメリットは大きい。

「では協力しよう。まあ、管理外世界とは言え、あの老人を逮捕したいがね。わたしのソラに手を出したからな」

「いつからお前のものになった」

「そうだよ！ ソラくんは私達の嫁だよ！」

「そっちも違う」

朱美妹のスタンダードさに嘆息が止まらない。

フェイトが何やらキョロキョロし始める。「何か」聞こえると呟いている。

何事かと高町が聞こうしていると地鳴りが起きた。

全員、膝につくほどの揺れだ。

「な、何?！」

『大変です！ ネオアルカディアの軍勢がこちらに——ぎやっ！』

通信越しから銃声と破壊音が聞こえる。戦闘が起きてるのか……！

地鳴りが治まるとオレと古宮が先行して廊下を走り回る。

すると青い機械兵が基地にいたレプリロイド達を破壊していた。阿鼻叫喚の絵図だ。

悲鳴と断末魔のメロディーに、シエルは膝についた。

「やめて、やめてよオオオオオ!!」

耳を塞いで彼女は涙を流す。それに応えたのは古宮とキリトだっ

た。

その顔は修羅のごとく目を開いていた。古宮でさえ、優しさを感じさせないくらいの怒りを見せていた。

機械兵の一人を蹴りで首をもぎ取り、『神器』で真つ二つにする。

「てめえら……!」

「よくも……!」

「二人の仲間に手を出したなアアアア!!」

ぶちギレた二人の剣戟。まさに台風のごとく、機械兵をバラバラに引き裂き、部品や液体を飛び散らした。

「なぜ、ここにネオアルカディアが……」

「ツ……高町なのは。じつとしていろ!」

高町がキアラの言葉に従うと、彼女のリボンから何か飛び去ろうとしたところをキアラの『支配』で動きが止められた。

これは、発信器……?」

「やられた。まさか、シャドーという輩は死の間際にこれをつけたのか……!」

「そんな、じゃあ……私……が」

「なのはのせいじゃないよ! 悪いのは襲撃している敵だから!」

「あ、じゃあ気にしなくていいんだね。よかった。これなら遠慮なくぶつ飛ばせるね!」

「あつるえー!」

……スゲー。オレ以上に切り替え早っ。つーか、この子元からこうだったのだろうか。(※だいたい雷斗のせい)

そんなとき、オレ達の天井から瓦礫が降り注ぐ。

キアラは『支配』で動けないシエルと高町を引き寄せ、瓦礫から回避。天井から現れたのは、風を連想させるような男と水を連想させるような女性だ。

髪も服装も緑な男が、シエルを視線に向ける。

「……見つけました。エネルギー開発最高責任者シエル様」

「あなたにはお戻りしてほしいと上からお達しよ」

強ばった顔でシエルは後ずさる。オレと朱美姉は、前に出て遮ると

緑の男はフンツと笑う。

「救世主がここに身を潜めていたとはな」

「救世主は古宮のことか？ あいつはその話をしたらやたらと反応していたし」

「そうだ。古宮アオは冷凍眠機械コールドスリープで眠っていた古代のベルカの救世主だ」

現地人かよ……！ つーか、ベルカってあのベルカだよな？

ヴォルケリッター達が使う魔法だったよな……。

「かつて世界各地に起きた戦争の中で、内乱で混沌に陥った国があった。そしてその国を太平し、平和に導いた者がこの男だ」

「へえ。で、なんでこいつが眠らされていたのか知らねえんだけど」

「知らんな。……それよりも貴様の存在が気がかりだ。なぜ救世主と似た『神器』を持つ？」

んなもん知るか。

オレの態度に髪も服装も青い女は言う。

「わかってないようね」

「どのみちこの男もシエル様同様、捕縛対象だ。連れていくぞ」

まるでオレが罪を犯したかのような言い方に反応したキアラは口を開いた。

「待て。ソラが何をした。彼がなんの罪を犯したというのだ」

「フレイアの殺害およびテロリストの協力関係という容疑だ」

「なんの証拠がある」

「廃墟の都市にて彼が半壊したフレイアを殺害した現場を写した映像がある。見るか？」

デバイスのウインド画面には確かにオレとフレイアが撮された場面だ。しかし、この映像はフレイアが自爆する前のとときだ。

「……オレは殺ってない。つーか、襲ってきたのはフレイアだろ」

「事情なら別室で聞こう。上からはそうお達しだ」

……つまり、連れてこいってか？

その答えにオレとキアラは口を歪める。

「何がおかしい？」

「いんや。あからさまにオレに罪を擦り付けてくる輩がいようとは思わなくてな」

『名前を忘れた男』以来だな。ここまで愚かな者がいるとは」

「貴様らあ……ふざけて、」

刹那、キアラは空気を『支配』して押し出した。それにより起きたソニックブームで、緑の男は後方へ飛ばされた。

青い女はそれを見て肩をすくめる。

「ひどい人達。そつちから手荒真似するなんて」

「あいにく、堂々と攻められたら徹底的にぶち壊せというのがうちの軍のモットーだ」

「経済、社会、精神、肉体的に徹底的にぶち壊せというスタンスなのさ」

「おつそろしい思想ね……」

女はそう言つて槍を構える。両先端に十字の形の矛先を持つ変わった武器だ。

オレは『神器』を構えるとキアラは眼帯を外して、『神器』の姿を見せた。

「さあ、『救世主』の力。いただくわよ」

「堂々と寝取るぜ宣言したぞこの女」

「ぶつ壊す」

朱美姉と朱美妹がうがくと攻めていく。銃弾と弓矢によつて青い女は冷や汗を流しながら回避していた。

「おいおい。キミのせいでもどか、ほむらが殺る気マックスになつたじゃないか」

「別に問題ないだろ。それよりも、早いところつから抜け出さないとまずいだろ」

青い機械兵達がワラワラと天井から降りてくる。おそろく物量的に攻められたら、防衛戦に持ち込まれて確実にこちらが敗北する。

「無事なレプリロイドを連れていく。キアラ、サポート頼む」

「埋め合わせを頼むよソラ」

「合点承知」

青い機械兵達の群れへとオレは飛び込み、蹂躪していった。

第七十七話 女の戦いと風の守護者VS黒の剣士

(まどかside)

青い女——アクアさんだっけ？ その女性に向けて私は矢を撃つ。

槍で防がれたり、回避させられたりされ、今度はこちらに接近するところでほむらちゃんが、銃弾を撃ち込む。

お互い攻防により牽制し合い、停滞した戦いになっていた。

「……なかなかやるわねお嬢ちゃん達」

「当たり前よ。こちらはソラをいじって遊ぶために何度も彼を攻めているのよ。これくらいできて当然よ」

「いや、それ違うでしょ。絶対。そんな方法で鍛えられるとしたら、彼が不憫なの فقط」

「ソラくんは私達の嫁だからモーマンタイ!!」

「自信満々にサムアップされても……」

困ったと言った表情になったアクアさんに、ほむらちゃんが撃ち込む。

しかし、身体を仰け反らせ、逃げられる。ほむらちゃんは悔しそうに剣呑な視線を向ける。

特に胸にある実った果実を殺りたいと思ってるようだ。

「その黒髪の娘が私の胸に殺気の視線を向けてるのだけど!」

「当たり前よ。全国の『アケミホムラ』は巨乳の敵よ。これはどの世界でも常識よ」

「どんな常識?!」

ほむらちゃんは胸のことをコンプレックスに思っている。前世もそうだけど、ママさんのあの豊かな山に視線を向けていたなあ。

さっきまでシリアスだったのに、今となってはおっぱい談義になっている。

「くっ、別に気にすることじゃないわよ！ ほら、お嬢ちゃんの胸のこ

とを気にしない男の子だっているはずよ！」

「そんな男はソラ以外ないわ。巨乳なんかに渡してたまるものですか」

「じゃ、じゃあー！」

「だが、しかしこれは私個人の私怨よ。八つ当たりよ。よって今すぐその肉を剥ぐ」

「このお嬢ちゃんさつきから怖いんだけど!?!」

ハイライトが消えた瞳で、ゴルフクラブを振るうほむらちゃんを見て、猟奇的だと思った。

青い機械兵さんことパルテノンさん達は「おい、お前いけよ」「やだよ……怖いし」というふうにドン引きしていた。

表情はないのに、行動がなんとも人間くさい。

そんなほむらちゃんに私は魔法の言葉を与えようと思います。この言葉を聞けばほむらちゃんはハイライトが消えた目に光が宿ると思うし、元気になると思う。

私は、スウと息を吸って、叫んだ！

「ほむらちゃん!! 貧乳はステータスだよー！」

.....

空気がピシッと凍りついた。ほむらちゃんはゴゴゴゴ!!と怒りに震えて、私に視線を向けていた。

えっと、間違えた……? おかしいなあ。ノエルさんが『貧乳の娘にとつての誉め言葉』って言ったのに。

仕方ないやと思って私は、続けて言った。

「って、アクアさんが言っていましたー!!」

「言っていないわよ!?!」

「やはりお前かアアアア!!」

「話、聞いてた!?!」

聞いてないからキレたんだよねー。と、アクアさんが逃げ回ると、なんと古宮アオくんの手を掴むと、その姿がアオくんと一緒に消えた。

転移したみたい……。ほむらちゃんは悔しそうに膝についた。

「逃げられた……」

「仕方ないよ。ほむらちゃんの猛攻に逃げるのが精一杯に見えたし」

「あの皮下脂肪を剥ぎ取れたのに……!」

「サバイバルナイフを地面に何度も刺さないで。なんか怖いから」

猟奇的な行動がそのうち板に付きそうな気がしてならない。私がそんなことを考えているときに、だ。

私達の前に以前見た白いレインコートを着た男が現れた。その男はパーカーの脱ぐと、顔を表した。

その顔はどこかの誰かに似ていたような気がするが、今はそんなことを考えるべきじゃない。

「……何しにきたのかな?」

「そんな目で見えるな。別にお前のような幼児体型には用はない」

「別にいいもん。おっぱいを大きくしたらロリ巨乳になれるもん」

「……それ、女性が堂々と言うもんじゃないからな? まあいい。オレが用があるのは、」

コートの男がほむらちゃんに指を向け、

「朱美ほむら。一緒に来てもらおう」

ピカツと指が光ると、私の視界が白く塗りつぶされ、目が見えるようになつたとき、

「ほむら……ちゃん? ほむらちゃんー!!」

ほむらちゃんはいなくなっていた。

(キリトside)

アオが四天王の女に誘拐され、俺は外に出て、外部から攻めてきた

パルテノン達を殲滅していた。相手は雑魚ばかりなので、集まらなければ大したことはない。

それに地理的にはビルが並び障害物が多いので、待ち伏せとかしないこの連中には安心して殲滅できる。

俺の——『闇に染まる剣』は強化系の神器だ。

時間が立つにつれて、身体能力を強化していくという条件なのだが、時間がかからないと強くなれないのが欠点だ。

パルテノン達は敵ではないが、もし四天王と戦うことになれば悪戦苦闘は免れなさそうだ。

……なぜ、四天王について語ったかと言うと、目の前の空にその四天王がいるのだ。

四天王ウイン。四天王のまとめ役であり、風の守護者という異名を持つ男だ。

相手のエキスパートは空だ。よって得意の空中戦に持ち込まれればまず勝ち目はない。

(飛べないことはないが、俺ってどちらかと言えば陸戦が得意なんだよな……)

陸戦に持ち込ませるといふ考えはあるが、具体的にはどうするかは作戦は立てていない。

空中戦にいる相手を地上へ落とすとすると、まず、飛行できる機能たる部分を、遠距離での攻撃か自身が飛んで攻めるかだ。

……どちらも、ハードでとても危ういことに変わりない。

「何者かは知らないが、ここで果ててもらおう。あの男をズタズタに引き裂かなければ溜飲が下げられない」

「あっそ。じゃあ、俺なんか放っていけばいいのにご苦労なことだ」
ウインは紫に光るビームサーベルから、斬撃が飛んできた。空気の塊を刃物したかのような斬撃を、身体ごと飛んで回避する。

十字を刻まれた地面を見て、その鋭利さを痛感した。

「まだまだいくぞ」

ウインが放つ斬撃を回避しながら、ビルの壁へ跳躍。そして壁を足場にして駆け巡る。

ここで説明すると、普通の人間にはそんなことができない。魔力を壁に流して吸盤のように吸着させ、魔法で身体にかかる重力をやや転換させているのだ。

そうすることにより、忍者のようなことができる。……まあ、はっきり言って燃費が良くないことが欠点だが。

俺が忍者のように駆け巡るとウインは舌打ちして次なる一手を出す。

何かを回すような動作をした刹那、竜巻が起きた。大きなものではなく小さなものだが、巻き込まれた物体が切り刻まれていた。

「えげつねー!!」

「バラバラになれー!」

そんな猟奇的な結末になってたまるかと、竜巻から逃げる俺。そんな俺に追い討ちとばかりに斬撃を飛ばしてきた。

アイツ、ホントふざけやがって。

「無理ゲーすぎる! こんな状況で攻撃しろとか、俺には無理だろ!」
有利なことを理解しているのか、ウインは笑みを浮かべていた。嗤うこの男に、何も言えないのが悔しいがどうすればいいのか……。

一度、地についた方がいいと判断した俺だが、ウインの目が光っていたことに気づかなかった。

「そらー!」

「んな!」

すさまじい早さでウインが接近し、斬りかかってきた。

しまった。こいつ、接近戦クロスレンジができたんだ。

遠距離ばつかだったから油断した!

空中から押された俺は後方へ飛ばされ、少しだけ滞空する。ウインは竜巻を起こし、それを俺に向けてきた。

今度の竜巻は渦潮をそのまま起こしたかのような形だ。回避に移ることができず、直撃した。

「が、あアアアアア!!」

身体が切り刻まれる。傷口を開かれ、血が吹き出すのが止まらない。

そのまま俺は竜巻から弾き出され、背中を強打した。痛みで身体が震え、意識もやや混濁する。

「フンッ。この程度か」

ウインは見下ろしながら、鼻で嗤笑する。傷口から血を流す俺はもはやまな板の鯉なのだろう。

「今すぐ楽にしてやる虫けらー!」

ウインのビームサーベルを構え、空中からこちらへ飛び出す。俺は立ち上がったときには、もうビームサーベルの間合いだ。

振るえば、俺の身体を切り裂くだろう。さて、そんな俺は嘆息を吐いて――

「もう、いいや」

――諦めの言葉を吐き出す。ただし、それは……、

「んな?」

自分に対してではなく、相手に対する言葉。

ウインのビームサーベルを後ろへステップして回避。並大抵のステップでは、ビームサーベルは直撃していた。

しかし俺の一步は約三メートルくらいもあった。それに対してウインは驚愕に染まっていた。

「馬鹿な。私の計算ではお前はもうそれほどの力は……!?!」

「んー、ま。計算が合わないのはお前が『神器』を軽視していたからだろ」

「というか、俺にとってやっとエンジンがかかったって感じた。」

「普通の人間はレプリロイドには勝てない。『神器使い』とは言え、身体はちよつと頑丈な人間でしかない。」

「超能力も、魔法も、武器もない人間が、兵器と肩を並べることができない。」

「お前のノーコンさと遊んでくれたおかげで助かった。やっと反撃に移れる」

「何を言っている!」

「ウインは斬撃を飛ばす。俺はその斬撃に神器をぶつけると反射したかのようにウインへ跳ね返る。」

「慌てて回避するウインは俺の姿を見失ったのかキョロキョロ首を動かす。」

「どこだ!」

「後ろ」

「ズバツと背後から俺はウインの飛行機能の部分を切り裂く。翼のようにジェット噴射していたのかコイツ。」

「まあどのみちぶつ壊したことで、ウインは地面へ落下していく。」

「俺は神器を足場にして跳躍して、ウインに迫る。手に再び召喚した神器を構える。」

「こんなことが……!」

「あ、そうだ。自己紹介が遅れたな」

「今さらだが名乗っていなかったの、一応しておこう。」

『『斬り込み特攻部隊 隊長兼少佐』———キリトⅡキリガヤ。『無血の死神』の次に強いんじゃないかねって言われてる』

「ウインを縦一閃。真つ二つにする。ヂヂヂと紫電を鳴らし、爆発してから俺は神器を戻す。」

「アンタじゃあ、死神と比べるまでもねーよ。死神と渡り合った魔王と伊達に師匠にしてないからな」

「ここにはいない師匠兼義理の父に向けて俺は退屈そうに呟くの

だ
っ
た。
。

第七十八話 水中戦って人間ができるものじゃない

(??side)

アクアによって拉致されたアオがいたのはどこかの水族館だ。

透明なガラス張りは頑丈に設計されてるため、本来は人では破壊でき
ない。

——レプリロイドなどの人外を除いて。

ガラス張りが破壊され、一齐に浸水してきた。それは激流に等しい
力強い勢いには、アオの足は耐えられなかった。

流され、身体を打ち付け、息を吐いてしまった。アオは急いでこの
場から離れなければと思い、神器を召喚するも突如、氷柱がアオに向
かってきた。

ダーツのように突き刺さり、アオは氷柱を撃ってきた女に対して視
線を向ける。

一緒に転移したアクアその人だ。ここから出さないと云った視線
を彼に向けていた。

(ヤバい……ここは彼女の独壇場。息は長く続かないし、何よりここ
だと身体が思うような早さで動けない)

水中にかかる抵抗力によってアオの動きは制限されていた。おま
けにそれはアクアに対して無意味だ。なぜなら彼女は、水中戦に特化
したレプリロイドだ。

早くここから出なければこちらが窒息死する。アオは泳ぎ始める
が、アクアの動きは異常だった。

地上にいるときでも変わらないスピードで、アオに接近し、突いて
きた。神器を使って受け流すも、脇腹を少し傷つけられる。

苦痛で顔を歪ませるとアクアは嗜虐的な笑みを浮かべる。残忍と
いう噂は本当だったと、アオは再確認した。

「クスツ。このまま藻屑にしてあげるわ」

槍の先端が凍りつく。アクアの機能の一部が発動したのだろう。

凍りついた槍の先端は禍々しいほどの突起しており、一度深く突かれてしまえば、抜けにくい仕組みとなっていた。つまり、より相手を苦しませるために作られた槍ということだ。

一度受け流したアオと言えど、二度目は難しい。なにせ、動きが思うような早さではないからだ。

先ほど受け流せたのも、ある程度予測したからだ。

「さあ、救世主さん。あなたにこれがかできる？」

氷の槍の連続突きがアオに襲いかかる。マシンガンのようにバラバラに突かれたことで、アオの身体に次々と傷つける。血が水の中で溶けるように流れ、アオの顔が徐々に青くなり始める。

(息、が……もた、ない……!?)

アオは最後の手段として、神器の『ドコでもドア』を使おうとした。そうはさせまいとアクアは遂に、アオの身体を深々と射し込み、嗤う。しかしアオの集中力は余裕がないゆえに、途切れることがなかった。『ドコでもドア』を使い、開いた彼は背中から入る。

容器に穴を開けるといふ仕組みと同じく激流が起きるが、好都合なことにアクアの魔の手から離れることができた。アオが指定したのはレジスタンスのベースのトレーニングルームだ。

蒸せて、深呼吸を繰り返すとアクアが出てきた。

まだ彼女は終わっていない。そう気づいたときには既に遅かった。

「足が……!?!」

凍りついている。足がコンクリートでできた地面に張り付いていた。

アクアの槍が地に突き刺さっていた。そしてその先端には水であつた氷が、固まっていた。

『ドコでもドア』から出てきた水族館の海水を凍らせたのだ。

(こんな短時間で凍らせるなんて……!?)

もちろん、塩による凝固させる速度が上がっていることもあるが、全力で、なおかつ相手に察知させず凍らせる芸当はたとえどんな達人

であつても難しい。

見誤つた。四天王は倒せる。そう勘違いしていたゆえの、油断が今の結果をもたらした。

足が張り付いている限り回避も、受け流すこともできない。防御したところで、いずれにせよ、彼女の攻撃には免れられない。

アクアは妖美な面持ちで笑みを浮かべ、

「これで、おしまいい」

アオの身体に氷の槍を貫いた。身体から血が溢れ、口からも赤い液体が溢れる。

貫いた槍を引き抜こうとしたアクアの顔はとても快氣的だった。

槍が抜かれそうとなるとアオの苦痛による叫びが止まらないからだ。拷問のような行いを受けたアオは槍が引き抜かれたとき、氷は砕けて、アオは膝について前のりに倒れる。

これで終わりか。つまらない。アクアはもう少し楽しめるかと思っていたが、すぐに対象を変えることを決める。

次はあの子——銀髪の少年だ。あの子はどんな断末魔の宴をしてくれるのだろうか。

楽しみで、楽しみで仕方がない。アクアはアオに背を向けて歩み始めると、後ろからピチャピチャと水温が聞こえた。

振り返るとアオが俯き、顔を見せないまま立ち上がろうとしていた。

アクアは呆れたと言わんばかり、嘲笑にする。

「なぜそんなにもがんばろうとするの？ いい加減楽になればいいのに」

それに、と続けて自身が感じた疑問をぶつける。

「レジスタンスのベースにいたレプリロイド達。彼らは法律上、処分は決定されていた。もちろん、犯罪行為をしていたからの処分と言うわけでもないわ。けれど、ルールに乗っ取つての処分されなければあなた達、人間が生きていけなくなるのよ?」

彼らに同情はする。

彼らは悪くない。

けれどそうしなければ、ネオアルカディアに住む人々がいつか死ぬことになる。それだけは四天王として阻止しなければならぬ。

「無駄な命を減らすことを、人類の未来のために、なぜ反抗するの？」

「無駄、じゃない……!!」

掠れ掠れの声が響いた。ドコでもドアから出ている海水の飛び出す音よりも大きな声だ。

アオの顔は憤怒に染まっていた。彼女の言葉の中に許せないものがあった。

「人類の未来？ ネオアルカディアのため？ ふざけるなよ。『無駄な命』なんて一つもない……!!」

大義のためだとか、大衆のためだからという理由でアオは戦わない。

彼が戦う理由、それはいつだって――

☆☆☆

古代ベルカ。ミルゴドーラ国にて古宮アオ――いや、アオは産まれた。彼は貴族でもなければ一般市民というわけではなかった。

『奴隷』。古代だからこそある身分の底辺の存在として彼は生きていた。主である男やその息子に虐げられ、暴力を受ける毎日。

身体中が痣だらけで、そして身体的特徴で嘲笑されてばかりの毎日を受けていた。

そんなアオに訪れた転機。それが『ミルゴドーラの内乱』である。古代ベルカの群雄割拠時代において当たり前な内乱のため、ミッドでは概要が説明される子となく、名前しか知られていない。

それはさておき
閑話休題。

奴隷だったアオはその戦乱により、逃げ出すことができたもの、お金はもちろん食べ物がない彼が餓死になりかけるのも遅くはなかった。

もう自分は死ぬ――寂れた教会で、虚ろな瞳が瞼を下ろそうと

したとき誰がここへ入ってきた。

それは彼の助けというわけでもなく、むしろ更なる危機へ陥れることだった。身なりの悪い集団が貴族の少女を誘拐し、ここへ逃げてきたのだ。

このときのアオにはどうでもいいことだった。せつかく、楽になれるのに、余計な騒ぎを……とやさぐれていたとき、貴族の少女は男達に乱暴されていた。

自分と歳が変わらない少女がこれから犯され、蹂躪される。

正義心が動かされたわけでも、彼女に一目惚れしたわけでもない。

——ただ、嫌だな

そんな一時の感情で彼は細い身体で男達に立ち向かった。当然、敵うはずもなく、骨折し、痛みで倒れた。

自身の無力さにどれだけ嘆いたのか。

自身の無力さにどれだけ絶望したのか。

下卑た笑い声が響くなかで、彼は涙を流し、目を閉じて気を失った。

もし、ご都合主義と言うべきならばこういうときだろうか。アオの元に奇跡が舞い降りたのだ。

彼が目を開けたとき、手には白いカギがそのまま剣となったような武器があった。

——『神器』。『誰かの神器』が彼の手に、授けたのだ。

アオはそれを使って男達を、倒した。怒りと憎しみがあつての殺害だが、彼が少女を助けることができたのは変わりない。

こうして、それを気に少女の騎士となり内乱を治めた。

これが『救世主』の物語だ。

——しかし、物語は。アオの人生はここで終わりではない。

見聞を広めるために、国を出て彼は聖王、霸王、冥王、黒のエリミア——様々な強い人と出会い、成長していく。

その中で彼は聖王、霸王、黒のエリミアと仲を深めるが、皮肉なことに群雄割拠時代はそれを許してくれなかった。

再び戦乱が彼を引き裂く。彼は無実の罪で、捕まり、そして聖王の計らいで処刑は免れたが、冷凍永眠装置で眠りについた。

古墳のような遺跡に閉じ込められ、何千年の時を経て、彼は目覚めた。

遺跡は次元の渦による影響で異世界に旅立っていたのだ。その影響か、彼はやや若返っていた。

こうして九歳の肉体となり、彼はしばらく旅をしてからで出会ったのは、シエルという少女である。

この過去の話で言いたいこと、それは彼は『大衆』や『大義』のために戦わないことだ。

聖王と別れる前、彼女は彼に言っていたことがある。

『……もし、もしもまた会えるとしたら、また友達でいてくれますか？』

もちろん、彼は笑って頷いた。……その約束は果たされることはなかったが。

ゆりかごで永眠した彼女を知り、彼は人知れず泣いた。

もう聖王には会えない。もちろん霸王やエリミアにも会えない

……。彼は一人ぼっちになった。

一人ぼっちになった彼は、そんな彼だからこそ決めたことがある。

——友達のために戦おう、と。

そして彼が目の前にいるのは、友達を傷つける存在。彼はそんな存在を許すはずがない。

「僕は守る。青臭い理想論だろうが、くだらない夢物語だろうが言つてやる……！」 友達の悲しまないそんな世界なんてさせてたまるか

……!!」

アクアはそれを聞いて、嘆息を吐く。

「だったら守って見せなさい。救世主さん！」

流れ出ている海水を使って氷のタワーを立ててきた。アオは身体を前のり倒すように、走り出した。

そして、神器を投げ捨て手に印を組み込む。

(なんのつもり……? なぜ武器を……)

捨てる理由がわからない。しかしその理由がすぐにわかった。

アオの足元に三角模様と円が浮かび上がった。ベルカの術式だ。

アクアも見ることがある『肉体強化』と『身体変化』の解除の術式だ。

なぜ『身体変化』も……と疑問に感じた。『肉体強化』ならばまだわかる。

自身の身体能力に追い付くために、強化するのならまだ理由として納得できる。

しかし、『身体変化』という術式が納得できない。なんせ、文字通り身体の一部を変化させる魔法だ。それを解除させるとなると元は違う身体をしていたということになる。

何を変化させるつもりか……と考え込むとアオの身体に変化が起きる。

——青い髪が金色へと変わり、左の瞳も青から紅へと変わる。

オッドアイ。踏み台などがしそうな瞳をしていた。

これが本来のアオの姿だった。

そして左の目は特殊な目だった。

氷のタワーは乱立するように、立っている。そんなタワーをまるで最初からわかっていたかのように回避したのだ。

アクアはその動きに驚愕に染まらずにはいられなかった。そしてその一瞬が仇となり、手に召喚された神器で左腕を切られた。

(くっ、どうして避けられたのかは知らないけど、これならば!)

海水と周囲の水蒸気を使った四方八方の氷柱を射出。それはソラでさえ全てを防げることは難しい。

なのに、

「……ば、かな」

躲した。避けた。回避した。

全てを予測していた。まさにそう言わんばかりに、アオは避けきつた。

「なんで、なんでなの……!?!」

否定したい。今のアオという存在を否定したいが、そんな彼女に待っていたのは神器による断罪だった。

アオアというレプリロイドは、四肢をバラバラにされるといいう形で幕を閉じる――

アオは疲れた面持ちで応急処置をしていた。やはり自身の生まれながら持つ力を使うとなると疲労はする。

リーディンググアイ
(流水の眼……本気になったときしか使うつもりはなかったけど、まさかこんな早くに)

この目は相手の動き、または流れを読むことができる達人にさせる目だ。

筋肉、血液はもちろんのこと、魔力の流れでさえ見えてしまう。

ミルゴドーラ国では紅い瞳は不吉の象徴として見られていたため、よくアオは馬鹿にされていたが、彼が友達を助けることができるようになったこの目には感謝している。

「……無駄な命、か」

そんなものはない。必ずそれは意味ある命なのだ。アオは良い意味でも悪い意味でも知っている。

聖王は悪い意味だ。無駄な命を散らせたくないがために、自身の命

を散らせた。

そして周りを悲しませた。霸王である彼を例として、彼女がしたこととは間違いだと彼は考えている。

アオは内乱で死を見てきた。おとぎ話では亡くなった人間は少ないとされているが実際は、アオの知人だけで、その他は多く亡くなっている。

関わりがなかった。友達でもなんでもない。

なのに、胸が苦しくなった。知り合いが亡くなったときはなおさら苦しかった。

彼は優しい少年であるがゆえに、苦悩してきた。

「でも、それでも前を見ていくしかない」

自分のために失った命を。

自分のために奪った命を。

彼は今日も忘れないで生きてく。後悔し、反省しながら彼は前を見ていく。

アオはしばらく壁にもたれながら歩いていると目の前には取り押さえられたシエル。そしてソラと似た男がほむらを小脇に抱えている姿。

彼は運の悪いことに遭遇してしまった。

「……救世主もさすがに四天王では苦戦したか」

「さあね。とりあえず彼女達を離してくれないか」

「断ると言ったら？」

彼は神器を向けて言う。

「わからせる」

無謀な戦いに勝利したのは、それを知るのはその場にいた者達のみだった。

第七十九話 わからない……けどやらなくちやいけない気がしたんだよ

一通りパルテノン（キアラ曰く）を破壊してから、オレは朱美姉妹、キリト達と合流しようと思いきや基地内を歩いていた。

レジスタンスのベースはレプリロイドの部品と疑似血液と呼ばれるオイルくさい液体で散乱していた。

……機械でよかった。もし、実際に人間だったらと思うとどこぞの漫画のようなグロ劇場になっていた。この小説は健全な少年少女が読むものですから。

「既に朱美姉妹や千香のおかげで健全からかけ離れているのではないかい？」

「安心しろ。まだ性描写がない。まだ大人のスポーツが行われていない限り健全なんだよ」

「記憶を失う前のキミは何度もそのスポーツをさせられそうになったと言っていたが」

「なんてこったい」

友江姉妹を含めて、次回から一緒に寝るのをやめよ。なんか黄色の長女さんの見る目が雌豹のものになってそうな気がするし。

お姉ちゃんが最近怖い今日この頃だな、これは。

なお、フェイトはさつきから落ち込んでいる高町を励ましている。……もうこれに懲りたら油断するなってことってことだ。

雑談を歩きながらしていると、朱美妹が走りながらこちらに向かっていった。目から雫をこぼし、オレの胸に抱きついてきた。

「ソラくん、ほむらちゃんが……ほむらちゃんが！」

「落ち着けまどか。いったい何があったのか説明してくれ」

泣き始める朱美妹をなだめると、ポツリポツリと最初から説明し始める。なんでもオレに似た男が朱美姉を誘拐したらしい。

その男の狙いはオレなのか、誘いのエサに朱美姉を誘拐したようだ。

「ふーん。で、オレはどうしろと」

「リアクションが薄い！ ちよつと、少しは心配とかしてよ！」

「だって、まだ死んでないだろ。なら、これから何をすればいいのかわかるのが先決だろ」

ぶつちやけ、朱美姉とオレとの関係は他人でしかない。家族でもなければ友達でもない人間でオロオロしろというのは少し無茶だろ。

そんなオレの冷たい対応に朱美姉は不満に感じたのか拗ねてしまった。

……オイオイ。人の問題をオレを巻き込むなよ。

「ソラ、わたしからも頼む。彼女を助けてやってくれ」

「それに対する報酬は？ メリットがなければオレは動かないぞ」

「……翠屋のシュークリームと埋め合わせのチャラ。これでいいだろ」

……なぜシュークリームなのかはさておいて、埋め合わせのチャラというのはありがたい。キアラの埋め合わせはとても厄介な案件が舞い込むからなあ。

そんなことを考えているとつゆ知らずキアラも朱美姉と同じように険しい顔をしていた。

「ソラ、シエルが浚われた！ 助けてくれ」

「え、やだ」

「即答!？」

当たり前だろ。つーか、シエルと共にいたレプリロイドの近衛兵もやられたのか？

結局、物量差でやられちゃったってわけか。

「お前、なんで……」

「なんでってメリットないから。損得勘定で考えて、シエルを助けたところでオレは何を得る？ 笑顔、お礼の言葉。どれも骨折り損な報酬ばかりじゃないか」

オレの言葉にキリトは拳を握り、殴りかかろうとした。

しかし、それが起きる前に、パチンツとオレの頬に鳴り響く。殴られる前に朱美妹によって平手打ちされた。

彼女は涙目で叫ぶ。

「いつからあなたはそんな人でなしになったの……！ ソラくんがそんなひどいことを口に出してほしくなかった！」

朱美妹はキツと睨みながら、怒鳴ってきた。

……言っただけじゃなかった、だと。オレの中の何かがこのとき弾けた。それを朱美妹にぶつける。

「……お前の人物像を押し付けてるじゃねえよ」

「押し付けるわけじゃ……」

「押し付けてるじゃねえか!!」

肩を掴み逃がさないようにする。

『以前のソラならこうする、ああする』。ああ。そうさ、以前のオレならそうするかもしれない。けどな、今のオレはそんなことしたくない!!」

「どうして! どうして、そんな……!」

「人が信用できないからさ」

オレの言葉に誰もが黙り込んだ。ああ、そうだ。オレはもう人を信用も信頼しない。いや、したくない。

なぜなら人は裏切るからだ。

人はいつか裏切る。オレは何度もそうあったことがある。

幼い頃のオレ。朱美姉妹達と過ごした記憶はないが、その他は覚えている。

多くの友達ができたように、敵もできた。そしてその友達が手のひら返して裏切られたこともある。

それでも幼い頃のオレは人を信じようとしていた。まだ希望はある、いつかそれが正しい。

救いのヒーローが人を信じないと、誰も救えないから。

そうやって馬鹿正直に生きて、その果てに待っていたのは裏切りに

よって失う家族の死——オレの師はそうやって死んだ。

理想を信じ、人を信じた果てに待っていたのは裏切りだった。報われない。救われない。なんと愚かで哀れな結末だろう。

以降のオレは敵だけでなく味方も信じたくなかった。

信用も信頼も全て無意味だと感じるから。

「お前にわかるのか！ 信じた理想が現実に裏切られ、信じていた人も裏切られ、師匠を殺されたオレの気持ちがいかにわかるのかよ！」

いつの間にか零れ落ちる涙。泣いていた。

悲しかった。辛かった。苦しかった……。

信じた人が敵だと認めたくなかった……。何度、そう考えたことか……。

「何が英雄だ。何が『無血の死神』だ。オレはそんなに強くはないのに、なのに……なんでオレは裏切るかもしれない『他人』を助けなきゃならないんだ!!」

助けた人に恐怖される。

助けた人に罵倒される。

助けた人に殺されそうになる。

『英雄』だから強いんじゃない。『英雄』だって本質は心がある化け物なんだ……。

それをわかってくれず、他人の理想を押し付けられ、オレはいつしか人に『絶望』したんだ……。

だから、オレは……。

「キミは合理的にならざる得なかった……か」

キアラの言葉にオレの膝は地についた。高町とフェイトはなんとも言えない表情に、キリトは何も言わず黙り込んだ。

顔は俯き、涙で顔はぐしゃぐしゃになった。朱美妹を掴んでいた手を力なく、垂らす。

朱美妹はそんなオレの顔をガッチリ固定して、そして。

「フンツ!!」

「ぶっー!」

鼻に向かって頭突きされた！ 痛い！

「何しやがる！」

「ソラくん！ 私達をあなたは見くびり過ぎるよ！」

「ビシッと指をさされる。もう片方の手は自分の頭を撫でていたが。」

「私達は裏切る？ ふざけないで。私は、私達はそんな人達と一緒にしないで！ 私達は絶対に裏切られないよ！」

「なんでそう言える！ オレが知ってるヤツらは……！」

「そうだね。ソラくんを裏切った。けど、その人達には理由があつて君を裏切ったよね。お金、人質、地位をエサにされて、君を裏切った」
けど、と朱美妹は続けて言う。

「私達は裏切らない。あなたを手のひら返して、見捨てないよ!!」

「なんで、なんでお前は……」

どうしてそこまで言える。

どうしてそこまで自信がある。

最後まで言えなかったのにも関わらず、朱美妹はまるで最初からわかってましたと言うかのように、答える。

「だって、私はソラくんのことを信じてるから」

その言葉に耳を疑った。オレの心情に気にせず彼女は続ける。

「私はあなたを知っている。あなたは私を知らないかもしれないけど、私が知ってる限りあなたのことを信用できる」

「……………」

「その証拠に、」

——ほら、こうしてあなたに『助けて』ってお願いしている。そうでしょ？」

理解、できない……。彼女の言葉は本当にわけがわからない……。自分の知ってる人間だから信用できる。

自分が理解している人間だから信頼できる。

彼女はそう言ったのだ。一歩間違えれば、他人に押し付けられた理想像だ。

とてもひどい女だ。ひどいよ、ホント。

ひどいから、オレは泣きたくなかった。安心してしまった。

この女の子は、どうあつてもオレを信じていてくれる。オレを信頼してしまっている……。

ああ。オレは知ってしまった。いや、思い出してしまった……。

心からこの人は大丈夫だつて、信用できる人がいるんだつて、安心できる穏やかな感情を……。

冷たく尖っていた心に、暖かいものが流れってくるような気持ちになつた。

朱美妹はオレの顔に自分の胸を当てるようにして抱き締めた。頭を、子どもをあやすように撫でられる。

彼女に甘えていると自覚して、恥ずかしいという気持ちとは裏腹に、オレは幼い頃を知る母親の暖かさを思い出した。

「……青春だねえー」

「とかいいのとお前は。あそこに混ざらなくて」

「安心しろ。あと五秒でこのハートフルは終わる」

「はっ。これはソラくんを籠落させて、洗脳できるチャンス……!? ソラくん、さあ。もっと甘えていいよ！ 犬のように盛って、野獣のごとく攻めてもいいから!!」

「台無しじゃねえか!! てか、離せ！ チュツチュツするなアアアア!!」

「ほらね」

「あー……うん。変態のシリアスが長く続かないのがわかった」

「ちなみにキミからソラと同じ感じがするよ」

「マジでか。ヤベー、変態いない——あ、いたわ。幼馴染みで、性癖がヤバイヤツ」

キリトにもいるんだそんな人が。

(?? side)

朱美ほむらは目を開けた。視界に映ったのは、白いレインコートの男だった。彼女は誘拐されてから連れて来られたのは薄暗い一室。どこなのかはわからない。

ほむらは両手を鎖で縛られ、身動きがとれなかった。

「……悪趣味。この美少女である私を縛ってどうするつもり？ まさか、イヤらしいことをするのかしら。エロ同人みたいに！」

「しねえよ。つか、貧乳がいきがるな」

「……久しぶりにキレちまったよ」

まだ成長の余地が！とほむらは内心言い訳していると、男はパチンツと指を鳴らす。

すると照明で部屋は明るくなり、そこにいたのは虚ろな目で玉座に座るアオの姿だった。

「彼に何をしたの？」

『なに、少し洗脳してやっただけさ』

虚ろな目をしながらアオは立ち上がり、神器を出して虚空に剣を振り回す。調子が良さそうに見えるが想いのない斬撃、とほむらは内心嘲笑した。

「……それでヴァイル。あなたは救世主の力を手に入れて何がしたいの？」

『次元世界に侵攻。わし達はそれが狙いだ』

『全てを開く者』を使えば、次元艦という移動手段なくとも奇襲の形で渡れる。これは侵攻される国や世界にとって、なんの準備もなく攻められるに等しい。

よってすぐにその国や世界がヴァイルの手に落ちるのは容易に想像できる。

ほむらもそう考えたのだが、嗤笑する。

「あなた達、それが本当に成功すると思っっているの？」

『……………どういふことだ』

「彼がいる。この世界には救世主なんかより、ヒーローなんかよりも頼もしい英雄がいるのよ」

ソラならなんとかしてくれる。それは思い込みに近いが、いつだって彼はなんとかしてくれる。

そう信じているから、彼女は自信をもって言える。

「神威ソラがいる限り、あなた達に勝利を渡さないわ」

『……………ふ、ふふふ。クヒヤヒヤヒヤヒヤ！ そうだった。彼女が言っていた英雄がいたのだったな！』

『彼女』。それが何者なのか、すぐに理解した。

悪魔が背後にいる。そう考えたほむらだが、身体中に、電撃を受ける。

軽い電撃だが激痛で意識をもっていかれそうになった。

「……………か、う」

「ここで大人しく見てろ。ちようど対戦相手が来たところだ」

男が映したのは、仲間を連れて前に立つソラの姿。彼を見たほむらは安心したのか意識を失った。

「さあ、見せてもらおうか……………お前の絶望の物語を！」

ソラとアオ。英雄と救世主。

そして本物と偽物の戦いが始まろうとしていた。

第八十話 想定外

殴り込み。その一言で済ませる惨状が目の前に起きていた。落ち込む高町を朱美妹洗脳（弱）し、元気にさせた。

……なんか、思考を誘導させる洗脳とか普通にしていたあいつに戦慄を隠せないや。

んで、とりあえずヴァイルの本拠地を正面から突入した。

「あは☆ 私を楽しませてよ。もっともっともっとさアアアア!!」

「なのはが遠い存在に。これは私がしっかりしなきゃ!」

「いやその格好で言われても」

フエイトそのんB Jが痴女気味な今日この頃。スク水にスカートという

……背後にシャッター音が聞こえた気がするが気にしないことにした。

「クンクン……アオくんのニオイがあつちからするよ!」

「まどかー、あいつってニオイフェチだっけ?」

「あれは確実にノエルさんのが感染してるね」

ノエルよ……お前どんだけ変態ハザードさせるつもりだ。

なお、朱美妹のことをまどかと呼んでいる。

勘違いしないでほしい。別に気を許したわけじゃないだからな!

「おっふ。ソラくんのデレにムラツときた。押し倒していい?」

「どこの肉食系だお前」

「ママ譲りだからね!」

「お前の母親たくまし過ぎるだろ」

と雑談しながら迫り来る敵を蹴散らす、蹴散らす。

キアラは『支配』で瓦礫を操作して打撃で撃破。

キリトは剣戟で、バラバラに。

フエイトは電撃でショットさせる。

曲がり角に差し掛かり、その先には大きな扉とレプリロイドがいた。象みたいな敵だ。

豪快に笑ながら腕を組んでいる。

「ぶははははは！ よくぞ来た。このガネーシヤ様が直々に」

「いけ、高町管理局の魔王なのは。はかいこうせんだ！」

「魔王じやなアアアアアい!!」

高町の滅びのバーストストリームが発射。ガネーシヤは「え、ちよ、」と狼狽え、そのまま呑み込まれて消滅した。高町のバーストストリームは扉をも破壊して、オレ達はそのまま中に侵入した。

「さすが魔王。ゾーマに匹敵する強さぞ。白い悪魔も伊達じやない」

「なのは、魔王じやないもん！ モビルスーツと一緒にしないで！」

「ちなみにフェイトはピカチュウと呼ばれている」

「不公平だよー！」

電撃使いだからそうなるのは仕方ないじゃん。それはさておき、大きな扉の先には朱美姉とオレのそっくりさんがいた。

そいつはオレを視界に入れるとニヤリと嗤う。

「ようこそ英雄殿、歓迎——」

「ピカチュウフェイト、十万ボルト!!」

「ええ!! 私?！」

……ピカチュウは命令を無視した。やはり、なつき度が足りないからか？

「いや、いきなり十万ボルト出させて言われたらできないから」

「え、お前でんきタイプだろ。ならできて当然だろ。なみのりピカチュウじやあるまいし」

「そもそもピカチュウじやないからね?！」

フェイトがツツコミをあげると、まどかは爆笑する。何がツボにハマったんだ？

「いやー、久しぶりのチビソラのやり取りを見た気がするよ」

「チビソラってなんだよ。てうか、オレってこんな感じなの?」

「そうそう。みんなをアツと驚かせて困難に立ち向かう子どもだったんだよ」

「なら、今のオレは違う。危ないことは、他人にやらせて逃げるから」「自信満々で最低なこと言ったよこの人」

最低？ そんなの今さらだろ。そんなやり取りを今まで見ていた男は嘆息を吐いて呟く。

「……なんだこのシリアス無き決戦前は」

やれやれと言いたげなようだが、はつきり言わせてもらう。そんなのオレ達の前では無意味だったの。

男は細い剣を引き抜き、構える。フェンシングの構えだ。

斬ることよりも突きに特化した剣技。素早さを重点においた剣戟を予想した。

「とにもかくにもようこそ。『無血の死神』。お前を待っていた」

「朱美姉を返せ」

「断る。あれはまだ利用価値があるからな。まあ、そんなことよりも話を」

「朱美姉を返せ」

「……話を続けるつもりは」

言い終える前に地を蹴り、神器を降り下ろす。金属音が鳴り響き、レイピアで受け止められた。

「朱美姉を返せ。お前の戯れ言に付き合ってる暇はねえんだ」

「鬼の形相だなオイ」

オレの憤怒の表情に満足したのか、距離をとるとデバイスのウィンドを開き、何かを入力する。

すると講堂が揺れ、上昇し始める。この部屋事態がエレベーターなのか……!?

「無駄に税金かけてるな」

「気にするところ、そこ!？」

高町のツツコミが耳に響くなかで、講堂事態が外に出る。外は夜空で、建物の明かりで美しい景色を描いていた。

「さて、そろそろやるか」

男が指をならすと転移されてきた少年が現れる。青い髪は金色に変わっており、左目が紅いオッドアイ。

能面な面した少年が、こちらに斬りかかる。

「古宮、アオ……!」

「くくく、さらにだ」

朱美姉とシエルが映されたモニターが現れる。二人は砂時計に閉じ込められており、朱美姉は気を失っているなかで、砂が落ちている。シエルは砂時計のガラス張りをバンバン叩いて、彼女に声をかけていた。

「早く彼女達を助けないと死んじやうぞー？」

「よし殺す」

地を蹴り、オレのそっくりさんに向けて斬りかかる。古宮はオレの斬撃を受け止め、懐を蹴る。

地を滑走させ、痛みを耐えながらオレは相手の視線を逸らさなかった。

「神威！ 今助けに」

「お前らは邪魔だ！」

ブワツと突風が起き、オレ以外の全員が吹き飛ばされる。そのまま落ちていこうとする全員に、オレは地を蹴って、誰か一人でもと思い手を伸ばす。

しかし、結界か何かによって遮られ、身体が弾き飛ばされる。全員が屋上から落下するのを見ることしかできなかった。

苦虫を噛む思いをし、キツとコピーと古宮を睨み付ける。

「死にはしないさ。あの高さとは言え、飛べる人間がいるだろう？」

「うるせえ。お前は何がなんでもぶち殺す」

神器を構える。一対二の戦い。オレは地を蹴ると二人もまた向かってきた。

(??side)

一方、落ちていくまどか達はすぐに飛行にシフトした。まどかは『アルティメットモード(女神のまどか)』になり、キアラは『支配』で空中に浮いていた。

なのはやフェイトは飛行魔法で落下速度を落とすことができた。

「つて俺はアアアアア!？」

「あ、忘れてた」

まどかは落下していくキリトに、ガシツと襟首を掴み、フヨフヨ浮き始める。その際に落下速度もあつてか、急に首を絞められ、キリトは「グエ」と断末魔をあげて白目を向いていた。

「あ、ごめん」

「あー、落下速度が意外にあつたからなあ。まあ、急に大きな締め付けが起きるのも無理ないか」

「だよな。飛べない豚くんはただの豚くんだよね」

「さりげなくひどいの」

なのははひきつった顔をしていると、まどかはポイツとキアラにキリトをパスし、ビルに向けて弓矢を放つ。

ピンクの一矢が大きな穴を開けると、彼女達はそこへ飛び込んだ。やっと足に地がついた彼女達を待ち受けていたのは、機械兵達だ。

パルテノン軍だけでなく、蜘蛛のような形をした機械兵もいた。

「とりあえず、ここはわたしに任せたまえ」

「そうだね。あ、そうだ。キアラちゃん、キリトくんを貸して」

キアラはフヨフヨ浮いてるキリトをなのはの頭上に運び、なのはは合唱しながら、足場に魔法陣を浮かべる。

「憑依召喚——発動」

紅い目になり、今度は髪が夜色になりかけていた。より魂を結び付かせることで、身体がその人物へとなりかけるのである。

「とりあえず、おつきろー♪」

なのは(魔女モード)はフヨフヨ浮いてるキリトにレイジングハートを向けて、「にぱー☆」と効果音を出しながら——撃つ。

スターライトよりも強力で、ノータイムで集束砲撃クラスのパスターを壁ごとキリトへ撃ち抜いた。

「ぎびやアアアア!!」

人が出す断末魔ではない悲鳴をあげながらキリトは砲撃が止まるまで撃ち抜かれた。

そして彼が止まったのは、何十階辺りの天井だった。

「チツ。あの辺りから魔力をキャンセルさせる素材が使われてるのね」

「な、なのは……？ ひどいじゃないかなこれ？」

「あら、起こすついでに上への近道をつくってもらえたのよ。それにこれでも手加減している方よ。本当なら、肉壁にしながら上へ進もうと考えてたけど、肉壁がもたないし、時間もかかるから却下したわ」
(……この人ホントにひどい)

「なのはであってなのはではない彼女に、憤りよりも恐怖が勝っていた。」

間違っているよ！と言ったところで「文句があるならかかってこいのです。にぱー☆」と迎撃してきそう怖い。

まあ、なんにせよ。犠牲になったキリトは天井に身体を突き刺さったままなので、フェイトは救出に向かう。

「じゃあ、私はここでザコを狩ってくるから」

「え、助けに行かないのですか」

「ええ。……ぶつちやけ、どちらかと言えば臓物紛いが飛び交う光景が見れるし」

「ウフフ……」と黒い笑みを浮かべるのはに、ゾツとする。人に似たものが無惨に壊れていく様を見て悦ぶこの少女（または魔女）に、「なんでこうなった」と内心呟く。

とは言え、フェイトはキリトを救出に、穴から一直線に上昇する。そして、突き刺さっているキリトを引っこ抜いて、彼を下ろした。

「大丈夫ですか？」

「……ちよつと平行世界にリンクスタートしかけた」

キリトは頭を振りながら、混濁する意識を取り戻した。本気で死にかけてた彼が無事なのを確認した彼女はホッと安心する。

フェイトは彼を連れて下へ降りて行こうかと考えるが、キアラから『念話』で「ほむらとシエルを救出しろ」と指令が出された。

下は自分たちでなんとかするから彼女達が二人を助けに向かわなければならぬ。なんせ、今回は時間制限がある命がけの救出だ。

二人の少女を助けるために、フェイトはキリトを連れて彼女達がい

る講堂まで捜しに向かう。

「場所はわかるのか？」

「砂時計の檻を見ていて気づいたの。実験器具やらカプセルらしきものがあつたから。たぶん、二人は広々とした実験室にいるはずだよ」

映像から見て推測したフェイトの推理は間違っていない。問題はその実験室がいったいどれくらいあつて、どの実験室にいるのかである。

フェイトは『バルディッシュ』にこのビルの設計図を出すようお願いした。

見たところ、この階には実験室が三つある。下の階にも実験室はあるが、この三つより小さい部屋らしい。キリトもその設計図を見て、「この三つの実験室にいるのでは」と呟いたが、フェイトはそれを否定した。

「どうしてだ」

「見て。ここだけ空白になってるよね。設計図では『未定』って描かれてるけど、もしかしたら……」

「本当なのか？ 何を根拠に……」

「確かめてみる」とフェイトは言つて、魔力感知をし始める。彼女もまた雷斗に鍛えられた少女だ。

これくらいできて造作もない。

フェイトが感知したのは、二人の魔力だ。一人は弱々しく、もう一人は強い。

おそらく、ほむらとシエルだろう。フェイトはそう判断し、その場所へ向かう。

たどり着いた部屋の先にいたのは、砂時計で閉じ込められていたほむらとシエルだ。顔が埋まりかけているところだ。

ビンゴ。フェイトは『バルディッシュ』を構え、魔法弾で砂時計を破壊した。

まず解放されたのは、シエルだ。意識を失っている彼女をキリトが受け止め、下ろす。

次にほむらを解放しようと『バルディッシュ』を構える。直後、地

響きが始まった。

「何!？」

「ッ、オイ。アレを見ろ!」

キリトが指差す方向には、機械の腕を生やし、浮いている老人がいた。その老人はフェイト達がつい最近出会った男。

「クヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ! 逃がさぬよ。サンプル共!」

「ヴァイル!」

背中にアームを生やしたヴァイルが狂った笑みを浮かべて、言い出す。

「さあ、実験の時間だ!」

(ソラside)

白と黒の剣戟が飛び交う。

火花が散り、金属音が飛び散る。

オレと古宮が斬り合ってから、何合か打ち合っている。いったん防御に移ろうとしたら、こちらが苦しくなったので、攻撃側に移ろうとした。

しかし、それはオレのコピーがエネルギー弾を射ってくるため、妨害されてばかり。

オレは窮地に陥っていた。

「はっ。どうした? 苦しくて声が出ないのか!」

コピーが挑発する。オレは無視してただ剣を振るって回避してばかりだ。

『無血の死神』。ちんたらしていると、朱美ほむらが死ぬぞお?」

「あっそ」

一言。沈黙が広がる。

「……冷たすぎないかお前」

「冷たいも何もオレはあいつのことを一切心配してない。むしろ、心配する必要のかけらもない」

「なぜそんなことが言える? ……まさか、見捨てるつもりか?」

「お前、オレのコピーのくせにバカだろ」

「なんだと！」

コピーが激昂する。そういうところがオレらしくないんだよ。

「オレはまどかがきつとどうにかしてくれると信じている」

「どこにそんな根拠がある。どこにそんな自信がある。この映像を見てもか！」

映されたのは、砂が完全に埋まりかけた朱美姉の光景だった。……これは確かにヤバい。直ぐにでも行かなければならないと誰もが思う。

しかしオレはそうと思えない。しばらく黙っていると、何を勘違いしたのか鼻で笑ってきた。

「言葉が出ないようだな。……さあ、そろそろお前の大切なものが死ぬところだ。絶望しろ！ 後悔しろ！ クヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

お前、絶対ヴァイルのコピーだろ。

オレは嘆息を吐く。本当にどうでもいい。

オレが絶対しようが、後悔しようが、なんにでもならないだろうに。まあそれはさておき、ヤツに言っておかなきゃならないことがある。

「バカコピー。あれを見ろ」

「はんつ。何をいつて」

刹那、映像にピンクの矢が砂時計に刺さり爆発した。ガラリ張りが碎け散り、出てきた朱美姉に何者かが受け止め、そのまま唇を貪るような人工呼吸し始める。

ケホケホと目を開ける朱美姉を見てから、彼女はスウと息を吐いて、言う。

『私の嫁に何してんだアアアア!!』

朱美まどかはぶちギレていた。そのまま怒り狂う彼女は天へ弓を向けて、射出。映像から見たところ屋上に向かって射ったのだろう。

その矢はピンクの柱へ変貌し、オレ達のステージに出現した。

「んな、なんだとオオオオオ!?」

「チャンス」

オレはコピーに向けて、黒い一閃を決める。ヤツの身体は真つ二つになり、信じられないと言った目で見ていた。

上半身だけとなったこの男に近づき、頭を踏みつける。

「馬鹿な……この、オレ、ガ……」

「よし。逝ってこい」

そのまま頭を砕いた。コピーは断末魔をあげることなく、壊れた。やれやれ、これで古宮も元に戻る——そう思っていたが、古宮はオレに向かつて斬りかかってきた。

「どういうことだ……? まだ洗脳が解けてないのか?」

「そうよ。私がまだ解いてないもの」

振り替えると、暗くなった空で見えないがシルエットで女だとわかった。

黒いドレスに長い髪。クスクスと笑う女性の声。

間違いない。こいつは……!」

女のシルエットは月明かりによって、その正体を現した!

「悪魔だと思った? 残念。ノエルちゃんでしたー!!」

「違うんかいイイイイ!!」

まさかの変態^{ヤッ}でした。

第八十一話 救世主と魔導師

ノエル「アーデルハルト。究極の生命体という名の変態である。悪魔が黒幕と思いきや、お邪魔虫の登場にオレは愕然とする。

「いんや。ソラの考えは間違いじゃないよ。ワタシが黒幕だよん」
「オイ。一から説明しろ」

「いいよーん」と陽気に答えて、ノエルは紙芝居を取り出す。子ども
の手作り感のある絵がある紙だ……。

「んーと、まずはワタシがキミの記憶を取り戻した話をするねー」
「初っぱなからとんでもないなオイ！」

そこから!? 最初っからクライマックスじゃねえか！

「まあまあ。落ち着いて落ち着いてー。まあ、悪魔ちゃんと殺り合っ
て、記憶をとったどー！と喜んだんだけど、どうもワタシはつまらな
いと思いました」

「そりや……記憶を取り戻したらオレの問題が解決するしな」

「そーそー。なので、ワタシは考えました。どうすればこの展開がお
もしろおかしくなるのかをー」

キュピーンと目を光らせる。嫌な予感がするんだけど……。

「そう。この世界にいる悪のリーダーであるヴァイルちゃんに、異世
界のこととソラのお話をしてあげました！ んで、異世界侵略しよ
うぜって提案したのだあー！」

「……んで、侵略しようとしていたのか？」

「ううん。五秒で飽きたから丸投げした」

「飽きるの早っ！ てか、大望を丸投げするなよー！」

「だって、ヴァイルちゃんノリノリでさー。なんというか飲み屋の軽
いノリでやったのに、大マジで困って困って……。だから、冷め
ちやっただよ。テヘッ」

「飲み屋のノリで侵略宣言するなよ……」

「つーか、こいつの行動パターンが読めなさ過ぎる……。マジなのか
ジョークなのか、わけがわからない……」。

「というか、飽きたのなら関わる必要ないんじゃない？」

「ソラが関わってきたら話は別！　だってキミの巻き込まれ体質は面白いから！」

「うわっ。最低だこいつ」

「最低なんて生ぬるいぜボーイ。ワタシは最低よりも、災厄な変態なんだぜー？」

そういえばそうだった。こいつが起こした事件は数知れず、キアラも頭を痛くさせていた……。

「なら、もうこんな茶番は終わりにしろよ」

「ところがどっこい。そうはいかないにやー」

「どういう……」

刹那、ノエルはオレの懐に飛び込み、コピーの内部にあつた欠片を胸に埋め込んできた。

肺から空気を吐き出し、吐き気と頭痛が生じて、膝についた。

「ノエ、る。おま……え、何を……！」

「チミの記憶を元に戻しただけさ。まあ、しばらくは頭痛と吐き気で動けなくなるけど」

ノエルはクルクル回って言い出す。

「さてさて、『無血の死神』が動けない今！　残りのメンバーは生き残れるのだろうか！　あ、まどかちゃんとはむらちゃん、キアラちゃんは生かしてあげるよん」

……こいつ。まさか！

「たか、まちと……フェイトに、何を……！」

「何って遊ぶんだよ？　あのおもちやを如何におもしろおかしくなるのかを確認しに！」

忘れていた。こいつは師匠ストップパーがいなければ災厄だ。

他人はおもちや。

世界は遊び場。

この世に生きとし生けるものを使っておもしろおかしくさせて遊ぶ『最凶』の変態だ……!!

「……お、て」

「おんや。これは意外。まさか、あのソラがなのはんとフェイトそんな気にかけるなんて」

「前の、オレは……そうかもしれないが……今はあいつらは仲間で戦友……！ 殺されてたまるか……！」

もう戦友が死ぬのは見たくない。

もう戦友がいなくなるのは見たくない。

だからオレは強くなろうとした。ノエルはそんなオレを見て、慈愛の笑みを浮かべていた。

「……そっか。キミはもう誰かを信じる気持ちを取り戻したんだね」

ノエルはニコリと笑って、そして——そんなオレにボディブローを与えた。

口から血と胃液を吐き出し、今度こそオレは倒れた。

「ノエ、る……」

「ここで寝ていてちよ。結果は彼女達次第だし、まあ、キミの言う信頼してあげてよ」

ノエルはそう言っ、背中を向ける。オレはそのまま意識を失っていき——……………。

(??side)

一方、フェイトとキリトはヴァイルの猛攻——いや、拙い攻撃に欠伸をしていた。

いや、猛攻と言えば猛攻なのだが、アームの動きはあまり早くないし、何よりフェイトとキリトにはこれまで培ってきた経験で簡単に回避できるものだった。

「な、なぜだ……！ このワシのアームがなぜ届かない!？」

「遅いし、雷斗さんに比べたらマジでザコいよ」

「お前、はつきり言い過ぎだろ……」

「そうかな？」と呟きながら、ヒョイツと避けるフェイトにヴァイルは顔を赤くして憤慨する。

遂には胸から大砲らしきものを出して、二人に標準を定める。

自身を改造し、そして強化してきた自分が負けるはずがない。その叡知の決勝であるこの魔力砲撃『アルカシャ』で証明してみせる。

そう意気こんだヴァイルの次に映った光景は、キリトが大砲を真っ二つにしているところだった。

「キリタニイイイイ！」

『バルデイツシュ ザンバーフォーム』——行きます！」

太剣モードにしたフェイトは、ヴァイルとすれ違う形で彼を切り裂いた。彼の身体は半分機械のため、非魔法設定でも破壊されるが、ヴァイルはまだ死んでいなかった。

「おのれ、おのれエー！ こうなったらこのビルごと爆破を——」

「ごみん。それだけは勘弁してちょ♪」

ヴァイルの頭を鷲掴みにする女性が現れた。その女性は突如、現れた。

気配を消して現れたわけでもなく、転移してきたわけでもなく、まるで既にここにいたという現れ方をしてきた。

「き、貴様！ 何を！」

「いやー、ヴァイルちゃんノリノリなのはいいけど、ビル倒壊で自爆はダメだよん。悪人は悪人らしく、惨たらしく散っていくのが本懐だからねーん♪」

「ま、待て！ ワシを殺すつもりか？」

「え、そだよ。だってキミはもう用済みだし」

ヴァイルは上半身だけでも身体を動かそうとするが、ノエルは首を切断して頭だけにした。それでもヴァイルは生きているところ、頭以外は機械に改造していたということだろう。

「ワシの仲間ではないのか！ 同志ではないのか!？」

「確かにワタシと同じく狂気を持つ人だったねー。だ け ど ♪」

グチャリ!!

「ワタシに比べたらケツの青い子どもさ」

ノエルはリンゴを潰すようにして頭を砕いた。肉の破片はなく、まるで頭がそのまま赤い液体になったという形で、ノエルはヴァイルの頭を破壊した。

フェイトやなのはは思わず嘔吐しかけ、シエルは口を手で隠してシヨックを隠せないでいた。

「ノエル、貴様はいったい何をしていた」

「何って、後始末。ぶっちゃけ、これ。ワタシが始めたことだしねー」
♪

ノエルは他人事のように自身が起こした事件を語る。楽しそうに、愉快に嗤って語るその女性に、シエルは震えが止まらない。

そして、彼女に食いついたのはフェイトだった。

「あなた、人の命をなんだと思ってるのですか！ そんな自分勝手なことが許せると思ってるのですか！」

「ええー。なーに正義の味方感出してるのー？」

ノエルは嗤う。彼女のその笑みで、誰もがゾツとすることを言いかける。

「ワタシにとって他人の命なんて玩具。世界は遊び場。」

——人の命だとか、そんな倫理観あるわけないじゃん♪」

言った。この女は他人の命よりも、自身の愉悦を優先する、と。

言った。この女は世界は自身を楽しませる娯楽施設である、と。

ノエルⅡアーデルハルトは狂っている。この女は人を人として認めない狂人だ。

絶句した。フェイトだけでなく、キリトやシエルもだ。

対してまどかとほむらは呆れて嘆息を吐いていた。キアラは頭を痛そうにしていた。

この二つに明らかな温度差を感じたキリトは、まどか達へ疑念を向ける。

「相変わらず、自分勝手な人ね」

「でも……らしいと言えづらいかもね」

「まあ、こういう女だから仕方あるまい」

「お前らはなんでそう呑気なことが言えるんだよ!!」

キリトほ彼女達に剣呑な視線を向ける。なぜ、そう呑気にしていら
れる。

目の前に黒幕とも言える女がいるのにも関わらず、警戒しないの
だ。

キアラは「やれやれ」と呟いて、キリトを落ち着かせる。

「落ち着けキリト!!キリタニ。この女は他人の命なんか本当にどうで
もいい最低最悪な快樂主義者だ。ゆえに、何を言っても改心しない」
「だったら、コイツを捕まえろよ! 管理局は次元犯罪者を捕まえる
組織だろ!」

「捕まえるだけ無駄さ。彼女は簡単に脱獄できるし、刑務所を破壊で
きる。そして何より厄介なことに、刑務所から被害が広がる可能性が
ある」

仮に刑務所に入れたとしよう。その刑務所が翌日どうなると思
うか。

——ある者は筋肉主義者に目覚めたり

——ある者はSMに目覚めたり

——ある者はロリシヨタに目覚めたり

——ある者は露出狂に目覚めたり

被害がある意味ひどい方向で広がっていくのだ。

キリトの言い分はわかる。なんせ、自分の仲間を亡き者にし、傷つ
けた女に対して怒り狂うのは無理もない。むしろ、彼が怒るのは正し
いことなのだ。

「そんなことが……!」

「あり得る。わたしもかつて彼女の勝手な行動に対して拘留所に入れ
たことがある。その翌日どうなったかわかるか? 拘留所にいた人
間全てがオカマバーのママになったんだぞ」

「何、その変態ハザード!?!」

「要するに彼女を反省させることや改心することも諦める。彼女に
とって『台無し』にすることは、『呼吸』することに等しい」

『呼吸』することは罪か。

『食べる』ことは罪か。

ノエルという女と一般人の違いはそこにある。

『快樂殺人犯』と同じように、ノエルの行動は自身を満たすためでもある。

「しかし、このままで済ませるのは癪だ……。というわけだ、ノエルⅡアーデルハルト。貴様を管理局法の違反のため、拘束することにする」

「およ。拘束してひどいことしちゃうの？ エロ同人みたいに！」
「するか。化け物め！」

キアラの左目が光り、『支配』が発動する。『支配』でノエルの動きを止めようとした。これを受ければ、ノエルとは言え、動けない。そう誰もが思った。

しかし、彼女は無意味と言わんばかりに『支配』を全く受け付けず、クルクル回って踊っていた。

「無駄無駄ー。このワタシに『支配』や『操作』や『洗脳』などなどの相手に干渉するものは聞かないによー？」

「なら、私の出番ー！」

ほむらとまどかの射撃にはさすがのノエルも当たるのを嫌がるのか、回避に移った。

チャンス。キリトはそう思い、ノエルの腕に『闇に染まる剣』を突き刺し、押し倒した。

さすがの、キリトの凶行にフェイトは批難する。

「キリトくん！ やり過ぎ——」

「おー、さすが何代目か知らない『斬り込み特攻部隊 隊長兼少佐』さん。遠慮ないなあ」

ゾツとキリトの背筋に悪寒がはしる。ノエルの腕を貫いた。なのに、身体から一滴も血が流れてこない。

彼はその場から飛び退いた。神器はそのままノエルの腕に刺さったままで、彼女はそれを引き抜いて捨てる。

「うーん。まさか、ワタシがラスボス扱いされるとは意外意外。……」

なんでだろ?」

「あなたが余計なことをしたからよ」

ほむらの言う通り、普通にソラの記憶を返せばよかったのにこの女は何もかもおもしろおかしくしてしまう。

おもしろおかしく世界を混沌に陥れ、『台無し』にしてしまう。

それが彼女の一番恐ろしいところだ。

「うにゃー。これは人数が多いよねー。よっし。二手に別れましょ」

ノエルがパチンツと指を鳴らす。その瞬間あと、フェイトとなのはを除いたキアラ達がパツと消えた。

「みんなをどこに!」

「ちよつとソラのところ。キミ達の相手はこの子♪」

彼女の背後から現れたのは、古宮アオの姿だ。しかし、違っているのは瞳に光がないところだ。

洗脳は解けていないようだ。

「さてと、お二人さんは古宮アオ——『救世主』さんに勝てるかなあー?」

ノエルも消えた直後、アオは『全てを開く者』を構える。

戦うしかない。フェイトとなのはは覚悟を決め、デバイスを構え始める。

第八十二話 フェイト覚醒！（ただし、まともとは限らない）

(??side)

神威ソラは暗闇のなかにいた。意識を失い、気持ち悪い気分だった身体だが、今度はノイズによる雑音がひどい。

目を開けたときは最悪な気分だ。ここがどこなのかわからないし、なぜここにいるのかもわからない。

ただ、暗闇のなかにいた。それだけしかわからない。

(ノエルのヤツ……何しやがった?)

忌々しいほど周りに迷惑をかけるあの変態だが、自分のような知り合いには何か意味があるようなことをする。

例えば、とある城に攻め入ろうとすればノエルは前触れもなく、侵軍を妨害した。裏切りと考えられたが、後になってわかったことだが、その城には大量虐殺が可能なトラップがしかけられていた。

まさか城そのものがトラップにされてるとは誰も思わなかった。なぜノエルがそのことを知っていたかと言うと彼女は、「ひみっ？」と腹立たしいくらいの笑顔で答えてくれた。

このようにノエルは何かを予知して行動していたのじゃないかとソラは考えている。

「……(ノエル)はどこだよ」

「お前さんの夢の中さ」

女性の声が聞こえ、闇の世界が真っ白な空間へ変貌する。声がある方向へ振り返ると、そこには神々しさを感じさせる女性がいた。

ソラが契約した女神——神木ユグドラシルが目の前にいた。

「夢の中?」

「夢さ。(ノエル)はお前さんが失ったことで暗闇になっていた。ようやく明るくなって有難い有難い」

やれやれと言いたげなユグドラシルに、ソラは今までの記憶を整理する。

鹿目まどか達と出会い。

戦争で絶望を知って、魔王を倒した。

それから暁美ほむらが狂い、それを止めるために戦い死んだ。

——これが前世の記憶

辛く悲しいものばかりだったが、まどかやほむら、みんなと出会って、優しさに触れて帰る場所だって思えた。

それから下級神によって転生させられ、前世の記憶を忘れ、まどか達と再会して思い出した。

プレシアの事件。

闇の書の事件。

天神小学校の事件。

それから——

「あれ?」

ソラは思い出せなかった。どうして自分は眠っていたのか、いつ頃に記憶を奪われたのか。

ネオアルカディアに来るまで自分は不貞腐れていたのは覚えていたが、やはり自分が記憶を無くした軌跡を覚えていなかった。

「……強く絶望した記憶をとられたままだね」

「どういうことだ」

「やっこさんの狙いは端からお前さんの絶望した記憶さ」

なぜそんなものを、とソラは考える。

自分が欲しければ、魂や身体を求めればいい。

しかし悪魔は『記憶』のみを求めた。それがわからない。そして『絶望の記憶』だけは手離さなかったのが気になった。

「ノエルの馬鹿のおかげとは言え、鹿目達を思い出せた。それでいいんじゃないのかい?」

「確かにそうだが、釈然としない」

「考えるだけ無駄さ。まあ、それよりも悪いニユースだ」

悪いニユース。何か問題があったのだろうかとソラは耳を傾けると驚くことを言われた。

「あんたの寿命……後、六年だよ」

「……………は？」

☆☆☆

フェイトとなのはは、斬りかかるアオの剣を回避する。アオは近距離戦^{クロスレンジ}を得意とする。よって、距離さえあければ驚異ではないが、悪いことにフェイト達が戦っているのは広々とした実験室だ。

別に問題ない。そう言い切れると誰もが思うが、考えてほしい。

フェイトとなのはは、空戦を得意とし、遠距離戦^{ロングレンジ}もまた空から行っている。

つまり、部屋という空間にいるため空には飛べない上に距離もなかなか開くことができない。

陸戦には問題はないが、フェイト達はまだ経験が浅い。その上、相手は空より陸を得意とする剣士だ。

ステージからして二人が不利な状況なのだ。

それでも彼女達が躲すことができたのは、シグナムや士郎、そして雷斗との模擬戦のおかげだ。

（雷斗くんやなのはのお父さんに比べると、斬撃はまだ遅い。けど、シグナムよりやや早い……………！）

（これが、『救世主』と呼ばれた男の子……………！）

数々の争いを治め、数々の人を救ってきた理想のために戦ってきた戦士。

味方だつたらどれだけ安心できたことだろうか。フェイト達には逆に不安と畏怖しか感じられない。

なのはがスファイアの魔弾を射出。アオは全て最低限に回避し、なのはの懐に飛び込んだ。

「ヤバッ！」

彼の間合いだ。直撃は避けられない。

なのはに斬撃が放とうしたとき、アオの『神器』に黄色に輝く鎖が絡み付き、彼の斬撃を妨害した。

「なのはあ!!」

「よしきた！　くらえエエエエ！」

『神器』を鎖のバインドでいつまでも止めることはできないが、一瞬……いや、約五秒は止めることはできる。

そのインターバルがなのはの砲撃チャージタイムだ。完了した砲撃魔法がアオを至近距離から呑み込んだ。

呑み込まれたアオは天井を突き破る——ことはなく、砲撃の射線から逃げ延びて、地面を数回バウンドする。なのははそれに対して苦虫をかんだ思いになった。

「……非殺傷設定のせいであまりダメージ受けてないよね」

「確かに。まさか人の命を守る設定が、邪魔になるときが来るなんて……」

非殺傷設定。魔導師が人を殺さないようにするという設定なのは誰もがご存じなことだろう。

その設定があるおかげで、魔法は今日も不殺を貫いている。

しかし、『神器使い』——雷斗やソラのような化け物染みた精神力と耐久力の持ち主の前には無意味だ。

『死ぬほど痛い』魔法を受けても、すぐに立ち上がってくる。おまけに何度もやっても黒い生物の生命力クラスの精神力なので、向かってくる。

よって、彼らを倒せるのは『殺傷設定』した魔法なのだ。それならば簡単に消し炭にできるのだが、フェイトやなのは達はそう易々と殺人犯になりたくはない。

甘い考えかもしれないが、彼女達はまだまだ子どもで、命の重さを知っている女の子なのだ。ゆえに、問答無用に『さっさと殺す』とい

う考えは容認できない。

「何回殺れば倒れるのかな」

「……なのは。ちよつと言葉が」

「あ、ごめん。『憑依召喚』の代償かな？ あれ、使うとその人に染まりやすいからなあ」

憑依召喚の代償で、人格が抜けきれないこともある。フェイトにとってそれは初耳だが、今はその『憑依召喚』できるか聞きたい。

「……もう一度できる？」

「難しいね。魔力や体力を大量に消費するし、何より『ベルンさん』を喚ぶと、アオくんが剥製になるよ。……まあ、見てみたいけどねえ。クケケケケ」

「なのは、なのは。染まってる染まってる！」

邪悪な笑みを浮かべる親友が遙か遠いところに行きそうなところを身体を揺すって正気に戻す。

どちらにせよ。なのはの強化は頼れない。

フェイトは心の中である決意をする。

(仕方ないよね……。こうなったら、私も覚悟を決めなきゃ！)

あの雷斗も膝につかせた切り札をフェイトを使う覚悟を決める。この覚悟を決めればもう自分は普通に戻れないかもしれない。それほどの変化を彼女を見せるつもりなのだ。

『バルディッシュ』、モード—— 『ボルテニック』

紡ぎだされたキーワードにより『バルディッシュ』は是と答えて、彼女の服装が変わる。

際どい水着のようなモードから、白い祭儀礼のマントと普段のバリアジャケットと言った衣装だ。バルディッシュは戦斧の状態になっている。

太剣のスタイルに比べれば、健全である。

『ボルテニックモード』って、あんまり普段と変わらないんじゃないか——

「あ、なのはー。触れちゃダメー」

なのはがフェイトに触れるとバチツと静電気が起きて、落下して思わず悶絶していた。フェイトは「やつちやった」と言った感じで、説

明する。

「このスタイルは全身に電流が流れているんだよ。だから不用意に触れたら危ないよ」

「……こ、これがリアル『アタイに触れたら火傷するぜ』なの」

「火傷じゃなくて感電死するから」

「もつと危ないよ!?!」

「冗談だよ」と舌を出して、悪戯っ子な笑みを浮かべる。『非殺傷設定』のため、死ぬことはないが『死ぬほど痛い』に『死ぬほど痺れる』というオプションがついてる。

フェイトとなのはがそんなやり取りをしていると、アオの堪えが切れたのか斬り込みにかかってきた。

フェイトはマントを盾のようにして、斬撃とぶつかりとアオの斬撃が弾かれた。

「!?!」

「このマントは磁力の斥力がかかっているバリアジャケットの一部だよ!」

「加えて」と続けて言って、フェイトは手からボールサイズの電気の弾を撃ち込む。直撃したアオは光始め、そのまま実験機材に突っ込んだ。

『引力の力』は私には使える」

磁力の力。金属という物質が近いければいるほど、この力は真に発揮する。

なのはは勝利を予感し、ガッツポーズをとって視線をフェイトに向ける。しかしフェイトは首を振って、否定した。

ガチャリとアオが『神器』を自身に射し込み、身体にあつた磁力の力を消した。

「……『全てを開く者』の前では、状態異常は無意味だよ」

「ええー。せつかく無力化したのにい!」

「大丈夫。まだ私には手札があるから!」

今度は視認できるほど身体に紫電を帯びるフェイト。アオは問答無用に斬りかかり、フェイトはその白い剣線を回避する。

次にきた拳に、彼女は受け止め、電撃を流すとアオは飛び退いた。いくら『救世主』とは言え、人間だ。

電撃をくらえばひとたまりもない。

「いくよー、『バルディツシュ』！」

『Yes sir』

バルディツシュをバトンのように回してから大振りに構えて、フェイトの身体が電撃により金色に輝く。そして、その電撃がバルディツシュへ収束され、大きな大きなマサカリへ変貌した。

「くらえ。五木雷斗、直伝——『デビルキラー』!!」

遠心力を利用した大きな斬撃を飛ばしてアオにぶつけてくる。

その斬撃が、アオの『神器』とぶつかる。アオの『全てを開く者』以前では、『構成された物質』を使った大魔法や必殺奥義は『無効』にできる。

フェイトの必殺奥義も、当然無効化される。しかし、『全てを開く者』のデメリツトは『燃費の悪さ』——つまり、どんな大きな魔法や小さな魔法であつても『平等』に大量の魔力を消費する。

今のアオはフェイトとなのはの魔法によって魔力が限界に近づいていた。よってフェイトの奥義で、彼の身体がフラフラと揺れていた。

ここで疑問に感じるのは、なぜフェイトはわざわざ大きな奥義を使ってきたのだろうか。答えは簡単。

——大きな電撃であればあるほど、その閃光は眩い

「目眩まし、成功！」

フェイトはアオの背後をとり、拳を構えていた。あとはぶつけるだけ、フェイトの拳はアオをとらえる。

電撃を込めた強烈な一撃だ。これで終わり———と思いきや、アオはフェイトにカウンターをぶつける。

肺から空気を出され、壁に叩きつけられる。フェイトの身体がここで限界にきていた。

(あ……そつか。『ボルテニック』は魔力を消費しやすかったんだ……)

早さを追求することで装甲板の面積を薄くするように、フェイトのこのスタイルは常時魔力が『全身』へ流れている。常時の電撃の肉体強化のおかげでソニックモードと同じような動きができた。

しかしその代償にフェイトの身体はしばらく筋力を失う。電撃で強化したことにより、自身の身体もマヒするのだ。

(どうしよう……このままじゃ。私……)

スカートがめくり上がっていることに気にせず、ただ俯いたままのアオが近づく姿をじつとらえていた。

ごめん、みんなと目を閉じて覚悟を決める。

アオはフェイトを斬ろう——としなかった。

いや斬れなかったと、なのはは見た。そして彼はどちらかと言えば、フルフル震えて何かに耐えていた。

そして、俯いていた彼は——ツツコむ。

「なんで履いてないの!？」

……。沈黙が流れる。

フェイトはスカートの中身のことを言われて、カアツと紅くする。

そう、フェイトは『履いていなかった』『履いていないのだ』。

……何を、と聞かれてもこれはどうしても察してほしい。

アオはフェイトの変態さにさらにツツコむ。

「なんでノーパンなの!？」 スカートだから一番ヤバイじゃないか！」

「え、だってこうした方がスースーして気持ちいいし、プレシア母さん

も寝るときも裸で寝ていたよ」

「寝るのはいいよ!? でも路上で下着を着けないのはどうよ!? 新手的露出狂か君は!」

「う、うーん。なんでそう言われるのかわからないなあ。 とうか、千香がこうした方がより早く動けるって言ってたよ?」

「気づいてほしかった! その子も変態だつてことを!」

……なお、『ボルテニック』に至ってから彼女は早さが少し遅くなったことに対して落ち込んでいたときに、千香のアドバイスで解決した。

『脱げば早くなるぜガール!』とサムアップされ、雷斗の稽古で実践してみた。スゴく早くなった。

そして雷斗に膝をつかせた。

フェイトの図式に『脱げば脱ぐほど早くなる』。『下着をつけなければより早くなる』という謎の公式ができた。

科学的根拠はないが、これは心理的な面に関わっていたりする。別に脱いだところで早くはならないが、彼女の心理的な作用によってより早く感じたのだろう。

そして雷斗が膝についたのは圧倒したのではなく、「どうしてこうなった」という哀愁である。……ここに変態化が感染したことに愕然としていた。

「だから私は宣言するよ——『パンツ はかない』!!」

「履けよ。着けろよ!」

「ちなみに異性に見られたとき、ちよつとスツとして気持ちよかつた……。この気持ちなんだろう……。?」

「露出狂の気持ちだろオオオオ!!」

脱ぎ魔が露出狂に進化した。立会人となつてしまったアオは愕然として膝についた。

これにより、フェイトは勝負に負けて、何かに勝った。いや、ホント何に勝つたのだろうか……。

「まあまあ、アオくん。そんなことよりこつち向いてよ」

「ん? ……………え?」

振り向いたアオに待っていたのはレイジングハートを構えたのはだ。彼女は青筋を立てて微笑んでいた。

「今までやってくれた分のお返しだよ」

「ちよ、まっ、」

「にぱー☆」

至近距離から砲撃を浴びて、アオの断末魔が部屋に響く。

フェイトはそんなアオを見ながら、

「……うん。とりあえず、私のアレを見た責任をとらせよう。やった

ね。義母さん、お婿さんえものゲットできそう！」

………という恐ろしいことを言ってた。

第八十三話 最凶にして最狂

目を開けるとオレは仰向けになっていた。

女神から聞かされた話を聞いて、気分が最悪だが、オレは切り替えて、冷静に分析する。

『六年後、神威ソラは死ぬ』

彼女の予知は夢から得たものらしい。よって根拠がないので信憑性が薄いと見てもいい。

「寿命……か」

人はいつかは死ぬ。そしていつかは今じゃない……。

誰かが言っていた言葉だ。

考えても仕方がない。病で死なないと知ってよかったということでもいいじゃないか。

それに猶予は六年ある。それまでに死因を探るか、楽しく生きていけばいい。

「そうだよねー。タイムリミットを気にするより、おもしろおかしく生きていけばいいよねえ〜♪」

「……ノエル。お前、女神の予知を知っていたのか？」

「うん。そして、彼女の予知は当たっているよ。夢から予知なんて、何億の確率であっても当たるのは難しい。普段の彼女からする夢から得た予知も、絶対に外れる———そういう認識なんだけどねえ〜」
「そうか。その未来は確定しているんだな。そして、わかったことがある。」

「ノエル、お前———」と続けて言う。

「———これから起きることを知っている。そうだな？」

「……………」

「根拠はお前の行動はいつも先回りしている感がある。しかも予測を大きく越える範疇で、だ。相手からすれば、お前の行動はいつも予想外だが、お前自身にとって予想通りということだろ」

うって創作物。ワタシがしているのはそういうことさ。

——どこに介入すれば悲劇は喜劇に変わるのか。

——どこに介入すれば喜劇が悲劇に変わるのか。

要は干渉することでのこの世界を楽しませている——そういうことさー♪」

前提からして何もかもめちやくちやだ。『正史』——つまり、本来そうなるはずだった歴史を知っている。

仮に、彼女が聖人君子ならば、悲劇を喜劇にしてくれる。逆に言えば、悲劇にして不幸を楽しませるということでもある。

この女は面白いと思う結末へ導く。

正しい歴史を『台無し』にしていく。

『抑止の存在』も黙っていないけど、ワタシがその理も『ねじ曲げて』ある程度許してくれるようになったよん♪」

『抑止』と……」

「あ、でも抑止さんってある程度感情あるみたいだよ。『もうやだこの変態』って涙を流していたし」

「そんな抑止初めてなんだけど!？」

スゲー。この女はある意味化け物じゃん。そう思っていると、もう一人のノエルと、ほむらとまどか、キアラ達がフツと現れる。

彼女達はノエルに武器を向けていた。

「ちよ、どうしたんだよ」

「どうもこうもないわ。もういい加減にしてちょうだい。あんな空間に閉じ込められて堪忍袋がプツツンよ」

「どんな空間に閉じ込められたんだよ」

「ギャル語しかない世界」

「それは腹立つわ」

別にギャルに対して非難はしないが、あの言葉はよくわかんない。というか、なんでわざわざ肌を茶色にするんだよ。

「ヌフフフ、いいねいいね。このワタシに挑むつもり？ それは楽し

みだよ。ホント——

「ボクをタノシマセテネ？」

ゾツと背筋が凍る感じがした。その刹那、キアラは上に手を向けると、ビルがこちらに落下していた。オレはすぐにシエルをドコでもドアで突き飛ばし、どこかへ避難させ、『支配』でそれを受け止めようとしていた。

キアラの足場がビルの重さでクレーターを作り出した。彼女の腕に亀裂が起き、から血が流れ始めていた。

「ぐ、う……！」

「キアラ、投げ捨てろ！」

「簡単に、言う、なあ！ ビルの重さ……そのままなん、だぞ！」

キアラの言う通りだ。これを投げ捨てろというのは、不可能。なら、粉々するまで！

「まどか！ 破壊できるか？」

「今やろうとしてる！」

まどかが地面から魔法陣を浮かばせながら弓を引いていた。そしてピンクの光が最大に高まった直後、発射された。

ビルを一閃するような射線を描き、大きな物体を破壊した。粉々と言っても大きな瓦礫となつて今度は降り注ぐ。オレ達は手を繋ぎ、ほむらの時間停止で今すぐ安全地帯へ向かう。

「逃げちゃダメ？」

「がはっ」

キリトが蹴り飛ばされ、時間停止の世界に取り込まれた！

オレはキアラの手をほむらに繋がせ、ノエルに向かって斬り込む。振り抜かれた一閃で呆気なくノエルは真つ二つに——いや、なんと真つ二つになる!?

『全てを開く者』は概念攻撃だぞ。人を傷つけるような真つ二つにできないはずだ！

その違和感の答えを出すかのように、ノエルだったものがペラペラになる。紙だ。オレが斬ったのはノエルを写した変顔ポスターだ！

オレが『ノエル』と認識していたことを錯覚していた！

「そりまー」

「うっ！」

「くっ！」

「きゃあー！」

気の抜けそうな掛け声で、ノエルは三人の少女をコマのように回した蹴りで、飛ばして、ほむらの時間停止が解除される。再び瓦礫の雨が動き始めたのだ。

「全員その場で対応！ 背後は警戒！」

キアラの言葉に従ってそれぞれ、降り注ぐ瓦礫を破壊しながら合流しようと足を進める。

オレは内心、舌打ちした。ノエルは考えてないようでしたっぴかり策を働かせている。

瓦礫の雨のせいで死角ができやすくなっている。おまけにこの瓦礫の雨が必ずしも正しい視界とは言えない。さっきのように『錯覚』で、遠近が間違えてることもありえる。

そうしたら、瓦礫によって下敷きだ。そうならないためにも、遠距離から破壊していくしかない。

オレとキリトは近距離の武器しかないとため、魔法で瓦礫を破壊していた。そうしていくうちに、目の前にノエルが現れる。

—— いや、全員の目の前にノエルが現れた！

ありえない。こんなことが！

さっきの錯覚？ いや幻術？

ノエルが複数いることがオレ達は信じられず、驚愕で足を止めてし

まった。

「ヌフフフ……」

「信じられない?」

「まあそれが『普通』さ」

「健全な反応さ」

四人のノエルは「ヌフフフ」と嗤っていた。

とても不気味に、妖しく、艶やかに。

「……忘れていた」

そうだ。ノエルは常識が通用しない。

『究極生命体』。『変態の中の変態』。そして――

『『最凶にして最狂』――あらゆる理をぶち壊す女だったよお前は

!」

ノエルが複数になったのは『分身』――ではなく、既にノエルが複数いたと、ねじ曲げられた理になったということだ。

オレ達が戦おうとしていたのは、型破りにして掟やぶり。

全てのルールを自分勝手に違反してくる『抑止の存在』の天敵だった。

「「「さあ、遊ぼうよ! ボク／ワタシと楽しい愉しい遊戯ころしあいをさあ!!」」」

第八十四話 強い弱いの話じゃない。相手に勝てるか負けるかの話

(??side)

ノエル⇨アーデルハルト。彼女の生涯は悲劇という言葉で括られる。

彼女が育った村はのどかで平和な自然あふれるところだった。幼馴染みや友人はチラホラいるが、彼女のお気に入りはいつもライトという少年だった。

彼は忌み子として避けられていた。理由は『神器』という当時は、わけのわからない力を恐れてのことだ。

村人から恐れられ、避けられている少年に、ノエルは関わろうとした。最初はただの好奇心からだ。

どんな男の子だろうか。

どんな力があるのだろうか。

ノエルという少女は好奇心の塊で構成されたお転婆娘だ。そんな彼女は一年、二年と関わっていくうちに、ライトという少年が心を開き、次第に村人達に忌み子として扱われなくなった。

彼女の言葉と行動で全てが解決した———そう思った矢先のことだった。

彼女村に盗賊達が襲撃してきたのだ。十六歳になった彼女は葉草を取りに出かけており、村に戻ると断末魔と悲鳴、そして鳴き声のBGMが流れる火の海に沈んだ村の姿だった。

そして、彼女に下賤の視線を向けられ、とらえられた。

彼女の身体はとも肉惑で、美しい女性になりかけていた。ゆえに盗賊達は肉欲に支配されるのも無理がなかった。

そこから先はありきたりな話になる。

衣服を破かれ。

盗賊達の欲望を胎内に出され。

懇願と願いに叫ぶ彼女を弄ぶかのように、何度も何度も犯す。

ライトというヒーローは運が悪いことに出かけていたため助けに来なかったのだ……。

……疲労で衰弱した彼女を盗賊達は殺さず、そのまま奴隷として売り、彼女は貴族に買われた後も、欲望の捌け口にされた。

孕ませれなかったのは運がよかったと、彼女は思っている。

心も身体も汚され、摩耗していき、遂にはゴミのように捨てられた。彼女は病に犯され、敢えなくお役目ごめんになったのだ。

雨が降り注ぐスラム街でノエルはこれまでの人生を想い、死にかけていた。彼女の心残りと言えば、自分の知らない世界を見れなかったこと、そしてもう一度彼と出会い、色々話したかったし、一緒にいたかった。

ああ。そうだ。ワタシは彼が気になっていた。これが『恋』だったのだ。

もう既に、何もかもが遅すぎた……が。

そう思い目を閉じようとしたとき、彼女の目の前に奇跡あくいが訪れる。

彼女の深い絶望と悲しみ、憎しみが『神器』という形で現れたのだ。

『神器』は世界に退屈していた。

『神器』は世界に面白味を求めている。

『神器』は純粹にして、邪悪。無邪気にして残酷。

『神器』はある意味世界の『神器』だ。

何もかも汚された少女の目の前に現れたのは気まぐれだ。その気まぐれで彼女は、命が救われた。

今考えれば、蜘蛛の糸を掴んだ地獄の罪人かもしれない。

『神器』は気まぐれで助けたもの、飽きたら捨てるつもりだ。そうやっていつも、人の人生を狂わせて楽しむ快樂主義者だ。

——ゆえに油断した。彼女はこれまで憑いていた人間と違って、とてつもなく規格外な存在だったことに

彼女が人生を狂わせた人間達を殺したことで変化が起きた。

嗤って、笑って、ワラツテ。

泣いて、哭いて、ナイテ。

ノエルは壊れた。心も身体も壊れていき、『神器』は潮時と考え、離れようとした。

しかし、それができなかつた。長く彼女に憑いていたことで、離れなくなつたのかもしれない。

『神器』は最初で最後の恐怖を感じたときには遅かつた。『神器』は彼女の魂なまに溶け込み、彼女の『神器』ちからとなつた。

『神器』は気づくべきだつた。

絶望よりも深く、希望よりも熱いもの——『愛』に餓えた少女の想いに。

全てを取り込みかくして『混沌の神器使い』は生まれた。

その名の通りに彼女は、世界に不幸と幸福を。絶望と希望を。

悲しみと憎しみを煽り、ときには幸せと喜びを与えるありがた迷惑な存在へとなつた。

——まあ、そんな彼女が『愛』を与えてくれる『彼』と出会うのはまた別の話だが

(??side)

四人に分かれたノエルがチャクラムを取り出す。オレと相対しているノエルは、チャクラムを投擲してきた。それを弾いて前へ突つ込むと、オレの足元から拳の形をした突起が生えてきた。

身体に突き刺さり、息と血が吹き出す。

「!?!?!」

「ヌフ、甘いねー。このワタシがただで接近させると思ってる?」

やはり、オレの『神器』は確かに脅威ということを自覚している。ノエルは『概念』でもあるため、『概念殺し』のような概念に直接干渉する攻撃を受ければ、掠り傷でも致命傷になる。しかし、逆に言えばそれ以外は無効化され、逆に遊ばれる。

現にまだかやほむらがもう一人のノエルに撃っている魔力矢や銃弾が、チョコ棒やチョコボールにされていた。

根拠も何もないにも関わらず、魔力や金属をお菓子にしようことができる。ノエルの『神器』は非合理性の塊であると言える。

そして今オレの身体に受けた突起物は、錬金術で再構成されてできた物体でも、異能で創造されたものでもない。

唐突に『出した』——いや、そこに『あった』という事象を引き起こした。

つまり、自分達が考える常識、ルール、理の事象をねじ曲げることで、突起物を引き起こしたのだ。

それはさておき
閑話休題。

ノエルの事象を引き起こす力は、唐突で突発的だ。予想外すぎて対応できない。

オレは転んだ身体を起こして、『神器』を構える。ノエルは既にチャクラムを向けて、振り回す。

チャクラムとは知つての通り、真ん中に穴のあいた金属製の円盤の外側に刃が付けられている武器であり、日本では戦輪と呼ばれる忍具として使われている。

投擲する武器なのだが、珍しく斬ることもできる。

ノエルが使うチャクラムは約三十センチのギザギザな刃を伸ばした代物であり、回転すれば抉るような斬り込みがはいる。

ノエルの斬撃を『全てを開く者』で防ぐと火花を散り、振動で足がやや後ろへ滑走する。

パワーが桁違いに強いのはもちろんのこと、何よりチャクラムの斬撃速度が目でなんとか終えるスピードなのだ。

肉体強化しているんじゃないかと思えるくらい、力と早さがある！「ヌフフ、驚いてる驚いてる。でもこれが素のスピードなんだよ

ねー」

「……『神器』！」

ノエルの素の力は『神器』によって『普通の女性の筋力』の概念をねじ曲げたことで、異常なパワーとスピードにさせているに違いない。

それが正しいのかノエルは、ニパツと笑って、

「正解！ はい、ご褒美？」

ノエルがチャクラムの円を向けると、そこから魔力砲撃が発射される。『全てを開く者』を盾にして、『解錠』の概念をぶつけながら、それを受け流すようにして身体を動かすことで射線から逸らした。

その衝撃で尻餅をついてしまい、苦悶の表情をするとノエルの目がキュピーンと光ると、ものすごい勢いでお尻に何かが突き刺さる。

「いぎよオオオオオオ！」

ものすごくイテー!? 何? なんなの!?

お尻に刺さる物体を抜くと、オレの手には丸いシルエットで手をカ
ンチョウに構えている生物がいた。……死んでるけど。

「どうよ! カンチョウくんの『G o t o H e l l !!』は!」

「マジで殺したくなる一撃だったわ……!!」

カンチョウくんを粉々に踏み潰し、頭に血を登らせて答える。

こいつ、本当にふざけてやがる。まどかとほむらに視線を向けると、彼女達の魔法がお菓子や謎の生物に変えられているし、キリトは普通に追いかけている。

キアラはなぜかゴスロリのコスチュームになっており、顔を真っ赤にして涙目で逃げ回るノエルを殺そうと石礫を動かしていた。

「これが『最凶の変態』の実力さ。真面目に戦わない。シリアスなんて許さない。ただ第三者をおもしろおかしく楽しませるといって遊んで戦う——それがワタシのバトルスタイルだよん？」

……もし彼女が本気になったら、あつという間に殺されているのはこちらだ。

なんせ、ノエルは『遊んでいる』と言っているのだ。本気で遊んでいるが、『殺す気』で来ていないことが不幸中の幸いだ。

師匠はノエルと戦いたくないと言っていた。

理由は疲れるということもあるし、何より彼女の实力はデタラメ過ぎるからと言っていた。規格外過ぎて、計れないと言っていた。

彼女に勝つには予想外な奇策で挑まなければ、すぐに対応されてしまう。彼女の前では常識は無意味なのだ。

……そもそも、オレ達がノエルに挑むこと事態が間違いなのだ。

彼女と戦う時点で、この勝負は敗北が確定している。

「ノエルちゃんにいどもーなんざ百年早いぜボーイ。まあ、青くさいことは良いことだけどねーん♪ ヌフ☆」

パチクリとお茶目にウインクしてくるノエルに、オレは神器を構える。ノエルの目はやや失望に似た雰囲気を感じた。

「それでも挑むつもりなの？ 圧倒的にも関わらず、かなわないと理解しても？」

「当たり前だ。ここで諦めたらお前はこの世界をムチャクチャにするつもりだろ」

「そだねー。まあ、元から機械しかない面白味がない世界だし、散り際はやはり自爆かにやー？」

「だから気に入らないんだ……」

別にこの世界がどうなるかが知ったことではない。だが、オレはノエルの言っていることが気に入らない。

何様だ。まるで自分が神様と言っているかのように好き勝手にしやがる……！

絶望的なことだろうが、無意味で無駄なことだろうが関係ない!!

「だから絶対負けたくねえ！ お前のイタズラに負けてたまるかよ！」

「じゃあ勝ってみてよ!!」

ノエルの姿が消える。あまりのスピードに見失ったのだ。オレは目を閉じ、五感を研ぎ澄ませる。

ただ相手の音をとらえろ。

ただ相手の匂いをとらえろ。

そして、ただ相手の動きに合わせろ。

目を開けると、ノエルはチャクラムを振りかざそうとしている。しかし、ノエルの斬撃が当たる前にはもう居合いの構えに入っていた。よって、斬撃をノエルより早く繰り出せる。

「おう……まつさかー」

「うるアアアアア！」

ノエルの身体を神器で捉える。しかし、手応えがなくオレと戦っていたノエルは霧のように拡散していった。

どこだ！とオレは内心焦りだし、周りを見渡す。

まどかとはむらはノエルを撃ち抜き、しとめると彼女もまたオレが倒したように消えていった。キリトも同じようだ。

全てのノエルが偽物だと思えた。

「んー、さすがはソラだねえ。このワタシをあと一歩で倒せるとは……」

「ツ！」

咄嗟に身体を前に倒すと、頭上をチャクラムが通過した。あれがもし当たれば首とお別れしていたかもしれない。

「やっぱり偽物だったのか……？」

「本物だよ。ただし、ワタシの力の十分の一しか満たない本物だけども、倒してくれたおかげでワタシの力は元通りになったのよん」

おちやらかした拍子でノエルは言う。

遊ばれていることに対してプライドが傷つく——という話では済まないレベルだった。あの分身(?)でもなんとか勝てたくらいだ。

まどかとはむらは悔しそうに噛み締めることしかできない。

「ここからが本番だよーん!!」

ノエルの姿が消える。オレの身体が警鐘を鳴らしているが、気づいたときには切り刻まれていた。

「ぐ、が……」

「ソラ(くん)!!」

身体から血を流し、口からも嘔き出す。まどかとはむらがオレの名前を叫ぶが、彼女達はノエルの脚力によって吹き飛ばされる。

唯一残ったキリトが掛け声を出しながら斬り込むが、ノエルはキリトの神器を弾き飛ばし、連続斬りを実行した。

あらゆる角度から行われた軽い斬撃が終わると、キリトもまどか達と同じように蹴り飛ばされ、口から血を吐き出した。

全滅。圧倒的な敗北だった。

元から勝てるはずがないのはわかっていたが、まさかこれほどだなんて……！

「英雄だから勝てると思った？ 残念。英雄だろうがなんだろうが『最強』は『最凶』に勝てないよ♪」

無邪気な笑みを浮かべるノエルに、舌打ちする。こうも余裕ですよと行動されたら、悔しいに決まってる。

ほむらも同じように、オレの隣に立つ。オレ達はふらつきながらも、痛みを耐えながら立ち上がる。

「おやーん？ まだまだいくつもりーん？」

「当たり前だ（よー！）」
『シンクロ』発動。髪は前世と同じく黒に染まり、ほむらの髪が銀髪に染まる。

「ほっほー。これが『シンクロ』だね。なるほど……確かに見たことも聞いたこともない魔法だね。『^コネット団結せよ』を進化させた魔法とはこのことだね」

ノエルはクルクルとチャクラムをバトンのようにまわして眩く。

「でもソラがその力を取り入れるって聞いてたけど、お二人さんは見た感じ互いの力が使えるって見えるけど」

『シンクロ』の本来の形はこうやって互いの力が使えるようになることだ」

オレは時間操作の力が使えるようになり、ほむらはオレの『神器』の特性を身に付いている。

オレがノエルへ斬り込むと、チャクラムで受け止めらる。何合か打ち合っていると、ほむらは背後から銃口をオレに向けていた。

ノエルはオレに銃弾を当てるつもりなのかと怪訝な顔をしていたが、すぐにそれは崩れた。発砲された銃弾はオレの後頭部に当たる前

に、身体を屈むことで回避し、『封印』の銃弾がノエルに当たりそうになかった。

土壇場でノエルはオレ達の動きに感づき、反射的に反応したのだ。「なるほど」。『シンクロ』は互いの力が使えるだけではないのねん」「ッ！」

バレた！『シンクロ』は繋がっている相手の視界、思考を共有させる。つまり、もう一人の自分と考えてもいい。

感づかれることはないと思っていたが、たった一つの行動で見破られたのは痛い。ノエルは戦いにおいて馬鹿ではないため、次回からはオレ達の共有化を考慮して行動してくるだろう。

「ヌフフフ。さあ次を見せてよ!!」

ノエルがチャクラムを降り下ろす。その前に、チャクラムの動きを『停止』させる。ノエルの身体を『停止』させることはできないが、『ノエルの武器』は停止できる。

ノエルの武器は柱のように固定され、動きを止めることができ、彼女はしかめ面で己の武器を見ていた。

「むむ……！これはやられたよ！」

「隙ありだ変態！」

がら空きになった懐へ『神器』を叩き込もうとするも、彼女の右足がオレの手を打ち上げるように蹴り、『神器』を手放してしまう。

ノエルの細くしなやかな足はまさに見とれるほど美しい。しかし、その足はオレにとってまさに凶器と変わらない。

ノエルの右足が踵落としていき、オレの頭部を狙ってきた。その場を後退することで回避したが、追撃してくる彼女の足がオレの脛ら脛をとらえた。

「づ、ぎ……!!」

歯を食い縛り痛みには耐える。ノエルの足技はまさにムチのごとく鋭く叩きつけてくる。

そのため、一度受ければひとたまりもない。ほむらの援護射撃で、ノエルはその場を後退していくが、『停止』で固定された武器は彼女が触れると解除されてしまった。

「ソラ、平気？」

「全然……！ 足がやられた」

ひびが入ってるかもしれない。強烈な一撃がもし頭部に当たっていたら砕けていたかもしれない。

「もう一度武器を固定して」

「駄目だ。ノエルは一度成功した奇策をすぐに対応してくる。おおかたあの武器に『停止が聞かない』というねじ曲げたルールを作ってるだろうよ」

強い弱い話ではない。

勝てる負けるの話でもない。

オレ達は神様と挑んでいたと言ってもいい。全知全能的なボスがいたら、絶対ノエルって言えるくらい、彼女の強さは異常過ぎる。

「さてさて、どうする？ もう少しやる？ もう少し遊ぶ？」

ノエルのキラキラする目でオレ達に聞いてきた。

まどかと『シンクロ』しても結果は変わらないな、これ……。

キリトやキアラも、ノエルの遊びでだいぶスタミナが削られているし、傷ついている。これ以上は無理そうだ。

戦えるのはオレとほむらのみ。まだ体力は大丈夫そうだし、ほむらもやる気満々だ。

なので、言っちゃった。

「降参、お前がナンバーワンだよ」

「……………え？」

「は……………」

「……………ふう」

オレ、サレンダーします。

だって、もういろいろ疲れたんだもん……。

第八十五話　これにて閉幕

「え、マジで!? やったー! ソラに勝っちゃったぜー!!」

大人げなく、子どものように笑うノエルにオレは呆れた視線を向ける。キアラも何やら疲れた嘆息を吐いていた。

いや、確かに疲れるのはよくわかるけどさ。

オレの降伏に全員が目丸くする中で、高町とフェイトがシエルと古宮をつれて屋上にやってきた。

「なんで降伏するんだよ! このままだとこの世界が……!」

「オリ主(笑)くんみたいなのを言うなよ。つーか、こいつが言っていることは全て正しいとは限らないし」

そう言うとなエルが「ありや、バレた!」と言い出す。世界をめちゃくちゃにするって言ってもこいつはあくまで遊びであり、本気で『台無し』にするつもりはない。

「ということはあれか。この人の世界を『台無し』にすることは単なるガセなのか?」

「いや、刑務所の件も含めてこの女が異世界の大半を変態化させてめちゃくちゃにしているのは本当だ」

「それはマジなのかよ!!」

キリトよ。こんなのまだ序の口だ。オレがまだ出会ってない頃のノエルは『遊び』と評して、多くの国を破壊したこともあるらしい。

変態ハザードではなく、ガチで気まぐれで虐殺したらしいわ……。

『『害悪』かよこの女……』

「それは褒め言葉だぜキリトちゃん♪」

「ちゃん付けするな!　なんか幼い頃のトラウマが誘発するから!」

……過去に何かあったのだろうか。キリトの身体を抱き締めて震えていた。

きつと幼い頃に変態と遭遇したに違いない。

「にしてもこのワタシ自身が相手にすることになろうとは、ソラも成長したねー♪」

「……前世のオレだと役者不足ってことか？」

「まあね。あの頃のソラはお気に入りだったけど、ワタシと戦えば瞬殺されてたよ？」

「違う。たった一人でなんでもかんでもできる化け物に挑むなんて無謀過ぎる。『シンクロ』で戦えば善戦できると思っていたが、それでも勝てない……か。」

本当に異常過ぎるよこの変態は。

「うんうん！ この戦いあそび楽しかったからこの世界を『台無し』にすることはやめてあげるよ。ソラと最後に遊べて満足したし」

「あっそ。だったらもう——」

—— 待て

『最後に』 って……どういうことだ？

オレが死ぬのは六年後。それは確定していると彼女は言っていた。なら、なぜ最後なんだ。

その答えがすぐに目の前で起きた。

ザシユツ!!

ノエルの胸から腕が生えた。その腕は細く今にも折れそうなのに、彼女を貫いた。

「き、きやアアアア!!」

女性達の悲鳴と驚愕に染まるオレ達。口から血を垂れ流しながら、グツタリとするノエルをそいつは乱暴に投げ捨てた。

「よくも私からソラの記憶をとつてくれたわねこのクズ女……」

「悪魔……!」

警戒心と剣呑な視線を向けると、悪魔はクスリと嗤う。

「……久しぶりね。ソラ」

「久しぶりじゃねえよ。よくもオレの記憶を……!」

「いいわ……その怒り、憎しみ！ ゾクゾクする！」

悦ぶ悪魔にオレは神器を投擲する。ブルーメランのように飛んでいく『全てを開く者』に、ダークピーチ色の魔力矢が直撃し、弾かれる。

「まどか、邪魔するなよ！」

「違う……私じゃないよ！」

は？ なら、なんでピンクの魔力矢が……。

悪魔はクスクスと嗤いながら、「紹介するわ」と言い出す。

「ソラの絶望の記憶から生み出した私の使い魔カチメマドカよ」

黒い霧が集合し、人の姿形を現した。褐色肌で髪はやはりピンク。しかし、暗いピンクという感じだ。そして彼女の瞳は紅いが、左目は眼球が紅く、瞳が黒という人間がする眼をしていた。

「さあ、マドカ。挨拶なさい」

マドカと呼ばれる使い魔はコクリと頷き、そして――

「……………やつぱり、無理だよー!!」

悪魔に泣きついた。え、何それ。

「……あなた、散々練習したでしょ？ なら、平気じゃない」

「平気じゃないもん！ 緊張して言えないもん！ 後、あそこにいる銀髪の男の子が睨み付けて怖くて言えない！」

「ソラ！ 睨み付けるのをやめなさい！ マドカは小動物精神な女の子なのよ。肉食獣みたいな視線を向けられたら怯えちゃうじゃない！」

「知らんがな」

悪魔に叱れた。

敵を睨み付けて何が悪い。え、オレが悪いことになるの？ この場合。

「そうよ。あのマドカがかわいいそうじゃないソラ」

「敵だぞ。睨んで何が悪い」

「ソラ、ある人は言ったわ。——かわいいは正義と」

「わけわかんねえよ！」

おのれ、ほむらでも虜にさせるほどのかわいらしさとは。……いや、確かに守ってあげたいかわいらしさだけどき。

「ソラくん、ほむらちゃん！」

「惑わされないで。あれは私の偽物だよ！」

「まどか……」

プンスカ怒るまどかによって目が覚めた。

そうだ。彼女は偽物だ。オレの記憶から作り出された使い魔だ。

「さすが、まどかだな。目が覚めた」

「うん、ありがとう」

「ちなみに、ぶっちゃけ言うところ？」

「私の姿で美少女をすることを許せない!! 私はセクシーでガツガツいく肉食系美少女だよ！」

「台無しじゃねえか！」

やはりまどかはまどかだった。使い魔のマドカも、本物の言葉に頬を染めて、首を振っていた。

……何を想像した。

「……マドカ」

「ち、ちちち違うよ!? え、えええエツチなことなんて想像してないよ!?!」

「とか言って、想像したんでしょ? ほらほら、正直に言いなよマドカ!?!」

「ううー! 違うもん。本物とは違ってエツチじゃないもん!!」

まどかにいびられ、涙目になるマドカ。……何あの萌える娘。めちやくちや、かわいいんだけど。

「まどか×マドカのキマシタワー……!!」

「落ち着けほむら! 興奮して鼻血を垂れ流すな」

「くっ、からかって見てて私よりかわいい! 偽物なのに、なんていう

ヒロイン力！ こうなったらソラくんを押し倒してヒロイン力を！」

「増加しねえよ！ てか、ここで発情するな！」

「え、私は常にムラムラしてるよ？」

「この場でぶっちやけるな！」

もはやここには変態しかいないのか。てか、さつきまでノエルが殺られてシリアスだったのに、マドカの登場である意味台無しだ。

偽物が萌えるなんて、これ如何に。

「あの……もういいですか？」

「あ、はい。これはご丁寧に」

「えっと、ちよつと待って。台本台本……」

「台本!？」

マドカさんが台本を取り出すと読み始める。

「う、わはははー(棒読み)。どうだ。お前の大切な人が死んだぞー(棒読み)。さあ、次はお前の番だー(棒読み)」

「シユール過ぎるわ！ やり直し！」

「ええ!? セっかく悪魔ちゃんと一緒に考えたのにい！ 一ヶ月かかった力作なのにい！」

「知るか！ 台本つくる前に演技の練習しやがれ！ 萎えるわ！」

「うう……ボロクソだよお」

マドカが悪魔に頭を撫でられて、慰められている中で女性達から冷たい視線を向けられる。……お前ら、あいつが敵だと自覚してないのか？

「まあ、ちょうどソラも見つけたことだし。このままあなたを貰っていきましよう」

悪魔の言葉にオレとほむらは『神器』を構える。彼女はクスクスと嗤って指をさす。

「かなり消耗しているのに、勝てるのかしら」

「知るか。お前に散々やられた怨みを晴らさなきゃならないんだ。いくら疲れていようが、お前と戦う以上。やるつもりだ……い！」

ノエルとの戦いで、かなり消耗した。『シンクロ』も解かれたし、『神器』が使える回数も残り少ない。

それでも戦わなければ、ほむら達がどうなるかわからないんだ。戦って勝つしか生き残れる保証はない。

「あらそう……。なら、私直々が相手してあげるわ」

悪魔は手から『スウ』と一本のサーベルを取り出した。『召喚術』か。本来は光と共に喚ばれるものだが、あれは特異な召喚術かもしれない。

前世で魔力の特性が『紫電』とされてる相手と戦ったことがある。そのとき、そいつが使っていた魔法が『紫電』によって紫の雷に変化していた。

つまり『属性』を持つ魔力は、魔法や召喚術にも影響するということだ。

悪魔の魔力色は『透明』なのだろう。

「見えない魔力色かよ……」

「珍しいでしょ？ それに、」

悪魔の姿がスウと消えて、次の瞬間。オレの目の前にいた。

「透明化できるのよ！」

「チッ！」

なんとか防げたが、悪魔の肘で顔面を殴られ、ほむらが援護に回ろうとすると、彼女の足元にダークピーチの矢が突き刺さる。先ほどと変わらずオドオドしていたカナメマドカだ。

口内にある血を吐き出すと悪魔はクスクスと笑って、今度は不可視となったサーベルを向けてきた。

「さて、私のサーベルはどれくらいでしょうか？」

おどけたふうに聞いてきた悪魔に剣呑な視線を向けていたが、構えず『神器』を下ろす。悪魔は怪訝になって、オレの行動に対して聞いてきた。

「どういうつもり？」

「オレが戦う必要はもうないと思ってな」

「何を言ってる……!?」

彼女の背後にソロリソロリと近づくと、ガバツと悪魔を羽交い締めにした。そう、心臓辺りを貫かれて絶命したと思われていた女――

——ノエルだ。

「まだ生きていたの!？」

「このワタシを殺せるのは雷斗とソラみたいな概念攻撃できる人のみだよん！」

ノエルが暴れる悪魔を押さえ付け、オレは『神器』を悪魔に向けようとするが彼女は首を振っていた。

「やる必要はないよ。この子はワタシがやるから」

「オレじゃあ、役不足か？」

「うん。この子の力は本当に強いよ。ソラの記憶を奪ったり、相手に力を与えたりなんてできちゃう。……ワタシみたいに何かで狂ってる女の子だよ」

「それでお前はこれからどうする」

「うーん。わかんないや。とにかく殺り合って、駄目だったら封じることくらいしかできないや」

「……………」

「なんで、悲しそうな顔をしているの。ほら、スマイルスマイル！」

ふざけているように見えるが、オレはなんとも言えなかった。

なぜならノエルの胸に空いた傷は未だに塞がっていない。

彼女の傷口が治っていないのだ。

あんな傷口程度、彼女はすぐに塞いで完治するのに。本調子の彼女なら、あっさり治してしまうはずなのに。

なのに、塞がっていない上に、彼女は辛そうに脂汗をかいて無理に笑っていた。

おそらく、今のノエルは弱体化している。悪魔にナニカされて、力が弱くなつて、彼女は死に体だ。こんなノエルを見たことがない。

ノエルがこれからどうなるか想像できなかつた。

「ノエル……………」

「なあに？」

「お前は、いいのか？ このままだとお前は……………」

「うーん。ま、『最後』だし。これくらいやらなきゃなーって思ってたね」
ノエルはふとした感じで真剣な面持ちになった。

「ソラ、キミの人生が短い。短いからできることがある。キミはそれを見つけていかなきゃならない」

「オレが、できること……」

「それがわかるまで全力に生きて。それがワタシが母親として言えることだから」

『母親』って言葉にオレはフツと笑みを浮かべ、ノエルも笑う。

「お前が母親かよ」

「えー？ 駄目？」

「駄目だったの。役者不足だ」

「あは、確かにそうだねー♪」

ノエルは笑って、それから言った。

「じゃあね。雷斗には浮気していいよって伝えてね♪」

それを最後にノエルはフツと消えた。カナメマドカも、その場から消えた。

「……じゃあな、母^{ノエル}さん」

……その後、彼女がここや海鳴へ帰ってくることはなかった――

第八十六話 彼女が残したもの

春がまた訪れた。中学二年となったオレ達は桜並木の道を歩き、これまでのことを思い出していた。

エピソード的な話をすれば、ネオアルカディアは新たなエネルギー革命で、救われた。それにより、処分されるレプリロイドは救われ、レジスタンスの罪状はなかったことにされて、シエルは平和に過ごせるようになった。

別れの際に、キアラに疑似リンカーコアの設計図と研究データのコピーを渡されており、帰還後、キアラはこの技術を使って不足している人材をある程度補充させるつもりらしい。

まあ、おそらくしばらくは会えないみたいだが。

記憶を取り戻したオレは、みんなに泣かれるわ抱きつかれるわけで、とにかくムチャクチャにされた。どさくさに紛れて千香が衣服に手にかけてようとしていたが、吊るすことになった。

……それから師匠に、ノエルの事件と遺言を伝えた。

「目の前で死んだのか」と聞かれて、首を振ると、師匠は笑って言った。

「アイツは死んでねーよ。アイツが死ぬはずがない。」

「……なんでそう言えるんだ」

「アイツはいつだって俺より前にいるからさ。しぶとく、惨めに、おもしろおかしく生きて、それで最後には笑っていなくなる。そんな女なんだよ」

……師匠はそう言って、翠屋から出ていった。悲しそうに見えたのは、気のせいじゃないかもしれない。

古宮ことアオはなんと高町家に居候することになった。当初、土郎さんや恭也さんに警戒されたり、模擬戦を申し込まれたりしていたなあ。

それでも彼が受け入れられたのは、彼の人柄によるものに違いない。

ちなみに、驚いたことに年齢はオレ達より二歳上だったことが判明した。歳下に見えてしまうのは、童顔のせいだと落ち込んでいた。

まあ、高町が管理局に入隊すれば、彼はついていくつもりと言っていた。理由を聞けば「……ナノハサマノミココロノママニ」と死んだ目で言っていたから、きつと魔女モードのなののは何かしたに違いない。

……何をしたんだお前は。

とまあ、エピソード的な話はこれで以上だ。

とにかく、オレの記憶喪失の物語は大団円なハッピーエンドでは終わらなかったが、いつもの日常に戻ったことには変わりない。

……ノエルはいなくなつて、オレは記憶を取り戻した。

ほんのりビターな結末になつたけど、オレはいつかきつとノエルにまた会えると思つている。あの変態は師匠の言う通り、しぶとく生きて他人に迷惑かけていくオレの変態ははわやなんだ。

だから、心配する必要はない。いつかまた会えると信じているから。

話は変わるが寿命の話はまだまどか達には話していない。信憑性がまだないと言えるし、何より『期限までに全力で楽しむ心』というノエルの言葉を貫きたいから。

あと何年かしたら症状は出るかもしれない。

それでもオレは、全力で、楽しんで生きていくよ……ノエル。

そう思いながら、オレは手を振るまどか達の元へ向かうのだった。

(??side)

ネオアルカディアの事件から一ヶ月後の話――

悪魔は疲労で、椅子に腰かけた。弱体化したノエルと言つても、自分を追い詰めたことが予想外だった。

やはり彼女は規格外だったということだろう。

「あの変態……！……最後の最後でこの私の力を！」

「だ、大丈夫？」

「ええ。まさか、悪魔の力を弱体化させるなんて意外だったわ」

もつとも空間転移や魔女を生み出す力は失っていない。『叛逆』の力が使えなくなったのは痛い、邪魔で厄介な相手がなくなったことで彼女の溜飲はある程度下がっていた。

(……これであの変態はいなくなった。けど……)

最後の彼女は笑って串刺しになって消えた。死体が残るはずなのだが、彼女はそれを残さず消えた。人間ではなかったのかと疑問に感じる悪魔だが、すぐに思考を切り替える。

「まあいいわ。とにかく、当面は私自身がソラと接触しないわ」

「え、どうしてですか？」

『叛逆』の力で彼を無力化させていただくつもりだったのが、あの状態でおじゃんよ。それに記憶喪失になった彼と接触しようとしたら、あの変態と遭遇して……

悪魔が顔を俯かせて、怒気を孕ませる。マドカはオロオロして主人である悪魔をどう宥めようと考えてるが思い付かないようだ。

涙目になったところで、悪魔に声をかける少女達が現れる。

「オイオイ。随分、苛立っているようだなオイ」

「相変わらずよねアンタは」

ソラの記憶によって作られた使い魔の二人だ。

ダークブルーとスカーレットのヘアカラーで、一人は短髪。もう一人はポニーで髪を結んでいる。

年齢は中学二年くらいだろう。肌の色が青白く、人間らしくない皮膚をしている。

「ふふ、悪魔ちゃんがこんなになるなんてさすがにびっくりね」

「豆腐メンタルは黙って死になさい」

「ひどいー」

がーんとショックを受けて崩れ落ちる暗い黄色のヘアカラーの少女。そんな彼女に終始無言な黒髪褐色の眼鏡の少女が肩を叩く。

そう、悪魔を含めたこの五人は、誰かに似ていた。

肌の色が褐色だったり、真っ白だったり、青白かったりするが、彼女達はソラの記憶によって作られた使い魔だ。

『カナメマドカ』。

『ミキサヤカ』。

『サクラキョウコ』。

『トモエマミ』。

『アケミホムラ』。

それぞれ名は悪魔によって名付けられた使い魔^{クビ}だった。

「そういえばお前って名前あったっけ？」

『サクラキョウコ』はふと、疑問に思ったことを口に出すと、クスリと彼女は笑った。

「当たり前よ。悪魔なんてただの種族名よ。そうね。名乗るとしたら、」

—— 『一ノ瀬シイ』、と彼女は答える。

『一ノ瀬』。それはソラの前世の苗字。

『前世』の因縁が、彼と巡り会うの遠い話ではなかった……。

第八十七話 聖書談義（腹を割って話す雑談）

聖書。

それは古来より伝わる神の教えが書かれた本。

いにしえより人間は神という偶像の産物を崇め、そして畏怖してきた。まあ、それは誰もが知っていることであり、今回話すことではどうでもいい話だ。

とにかく聖書とは崇高にして、すばらしい教えが書かれた本である。ゆえに我々はこの本を読むときは、敬意を評して読むべきなのだ！！

「聖書エロ本に敬意もクソもねーだろ」

「師匠。台無しにしないでください。読者を納得させる口実だから」

「我が友よ。貴様もぶつちやけてるから台無しだぞ」

オレ達男——師匠、衛、士郎さん、恭也さん、アオ、ユーノというメンツにて道場で、聖書エロ本の共有をしていた。

なぜ、このようなことをしているとえば、高校一年——青少年——になってから、まどか達の監視の目が鋭くなった。

特にこの間買ったエロゲーのセーブデータが消され、千香に没収された。……しかも、改造されて純愛が背徳全開のハードプレイのエロゲーになっていた……。

幼馴染みと育む物語が、千香によって変態物語になったのだ。

「というか、士郎さんや恭也さんもよく持ってますね。既婚者なのに」「ははは、男がエロ本を持つのは当たり前じゃないか。桃子の身体を味わっているが、それでもコレは別さ」

「父さん。発言が生々しい。まあ、俺も忍に内緒で買ってるよ」

「男はいつだってケダモノですからね」

「二違いない」

アオの発言にサムアップで同意するこの親子。やはり血だろうか。

というか、衛が参加するのが予想外だ。なんでお前も参加しているの？

そう聞くと、

「我だけ仲間はずれは許さんぞ！」

「いや、だってここエロ本談義と共有する場所だぞ。筋肉を求めるお前の居場所じゃないだろ」

「たわけ！ この我也性欲はあるぞ！」

なん……だと!?

あの筋肉ばかり言っている衛がエロを求めているだと!?

これは何かの異変の予兆なのか!?

「驚愕するのは無理ないがソラくん。彼もまた男なのだよ。ゆえに、エロを求める心は変わらない」

「なぜだ。士郎さんが言うとかっこいいこと言ってるように聞こえる」

「それが士郎さんだからだよ」

こ、これが大人の男……ゴクリ。

ある意味、我々青少年の理想だ。やはり士郎さんは色気も桁違いか。

「そんなことよりも女王様のエロ本は？」

「なんでさっそくSM？」

「それは僕がマゾだからさ！」

「どうしてユーノはこうなった……！」

つーか、千香によって変態化したこの男の子と付き合える女の子はいないだろうか。

想像できないくらいマゾに覚醒しているし。例えば、この間。ミツドのビル——高町が担当する次元世界——で火災が起きて、真っ先に飛び込んだのがこのユーノくんである。

火の海に飛び込んだにも関わらず、嬌声あげながら救助したという武勇伝が今でも無限書庫でも語り継がれている。

……こんなのが司書とは世も末だ。

「しかし高町が墜落してから三年。まさかこうも返り咲くとは」

「聞いてるぞ。……あのなのはが犯人を人質ごと撃ったという話が。

なんで、なんで俺達のなのがあんな鬼畜に……!!」

「うん。確かに見事な鬼畜だわ」

高町が謎の機械に墜落し、病院生活を余儀なくされた。原因は、管理局の任務による疲労からで、当然士郎さんもぶちギレて大変だった。

「子どもにこんな無茶させて恥ずかしくないのか!!」とリンディさんに怒鳴っていたのは今でも耳に残っている。

まあ、等の本人は一日で復活して、悔しさをバネに度重なるリハビリとトレーニングで復活。

以降、士郎さんの制止を振り切り、問答無用に殺るぜというスタイルで事件を解決することになった。

……高町が活躍する度に、恭也さんがお腹を抑えている姿が見られるようになったけど。

「まあ、高町の鬼畜化はこの際置いて。今は我々の聖書の話しよう」

オレ達の聖書にはそれぞれジャンルがある。

例えばオレの場合は『幼馴染み』『同級生』『近所のお姉さん』といった感じのジャンルだ。

至って普通にしてありきたりなジャンルだ。それに対して、他のメンツはどうなのだろうか。

「では、まずは我から」

衛がススと円陣の前にエロ本をだし——……って！

「見よ！ この幼いボディと裏腹に実る果实を!! ロリ巨乳こそ我にとって思考なり！」

「犯罪臭がする！」

特に衛のようなモリモリマッチョが言うとかヤバイジャンルだ！

「何を言う。はやても小さいなりにたわわになってきているぞ。うむ、我にとってエロ本とはやてが段々同格になってきていることが喜ばしい！」

「どうでもいいわ！ てか、それをなぜお前が知ってるの!？」

「む？ はやてと一緒に入ってるに決まってるだろう。どうも小学五年頃に付き合いが悪くなったが、なぜだ？」

「当たり前だろ！」

未だに、思春期の女子と入っているかよ!?

しれっと言った衛に戦慄を覚えていると、士郎さんがうんうんと頷いていた。

「ふむ、恋人同士の混浴か。なつかしいな。私もよく桃子とやったものだよ」

「父さん。それ危ない内容だからそこまでにしてくれ」

「何を言う。当初、恥ずかしがる桃子を（性的に）襲ったら、（性的に）返り討ちにあつたという話を中断するとは勿体ないじゃないか」

「ノロケじゃなくて猥談になつてるから!」

「ちなみに桃子曰く、その種からなのはができたとか」

「どうでもいいわ!!」

さすが士郎さん。下ネタ全開だ。しかし、士郎さんが言うときくハラよりも大人の経験談に聞こえるのはなぜだろうか……。

イケメンパワーだからだろうか。

「ではアオくん。君のコレクションを見せてくれないかな」と士郎さんが言うと、アオが中心に差し出したのは大人の女性の写真集だ。

一見、塾女好きかと思えばタイトルを見たら、『未亡人特集！ 淫らな私の姿』と書かれている。

「未亡人……リンディさん狙いか?」

「違うから! あの人とは上司との関係だからね!」

「パラレルワールドの桃子は渡さないぞ!」

「士郎さん、メタいですよ!」

……平行世界の桃子さんが未亡人であることをなぜ士郎さんが知っているの?

というか、士郎さんのキャラ崩壊激しい。

「ふむ。母性溢れるオナゴに惚れ込むのは男として無理もないこと。我々、男とて最初に好意を持つのは母なり。つまりこと、アオ殿の好みは不健全ではあるまい」

衛は真面目に分析して答える。いや未亡人が不健全とは言わないけど……。

「ちなみに俺はこれだな」

「何々……『エツチなお姉さんが癒してあげる☆』？ お姉さんモノか」

「忍殿もどちらかと言えば姉ではないか？」

「どストライクさ。だから、これを見て毎回、忍で妄想してる」

普通だ。さすが我らの普通組の恭也さん。スタンダードな男子の考えだ。

「では私はこれを見せよう」

遂に士郎さんだ。ハツチャケキャラとなり、ダンディな大人の男を魅せてきた士郎さん。果たして彼の好みのジャンルはなんだろうか。予想できないな。

士郎さんが前に出したのは、

「人妻のNTRだ」

「一番駄目なヤツじゃん!!」

背徳全開の代物でした。

「何を言う恭也。この損失感と虚無感が、こうゾクゾクするじゃないか。普段見せない妻の姿が他の男に見せる姿がいいじゃないか」

「待て待て！ 共感どころか反感だぞそれ！ つーか、母さんトラれて良しとするのか!? あんなに愛してる人を他の男にトラれていいのか!?!」

「いいわけないさ。むしろトラれたら取り返す。そして見せつけて相手を絶望させる！」

それを妄想したらタギツてくるじゃないか!!」

「ものスッゲームチャクチャだこの人!!」

しかし男らしい！ この人の思考回路はもう予測不能だ。

つーか、アオ！ お前もマジマジ見てるじゃねえよ！

衛なんかもう素で見てるし！

ユーノなんかヨダレ垂らして興奮してる!?!

「さすが士郎さん。オレ達とは違いすぎる……」

「照れるじゃないか」

「誉めてないぞ父さん……。にしても意外過ぎてびっくりだ」

「ちなみにこれを桃子に見られて搾り取られた過去がある。その上燃やされてしまったレアのエロ本だ。嚴重に保管して、長年付き合ってきたアイボウだ」

「どうでもいいわ!!」

恭也さんが息を荒くしながらツツコむ。……もう、士郎さん専門のツツコミキャラだこの人。

「じゃあ俺はこれだな」

師匠が出してきたのは、

『触手』

「マニアックだ!!」

たった一言で師匠の性癖がわかってしまった!

「いや魔法少女やモンスター娘とか、そういう人外系がいけるんだよな俺って」

「師匠の性癖がマニアックでびっくりなんだが」

「すずかと付き合っている時点で、マニアックも何もないのだが……」

そういえばそうだ。

師匠は月村と付き合っている。ノエルの遺言で「じゃあ浮気するか」とケラケラ笑いながら、言っていたが翌日。月村に腕を組まれていた。

そのとき見た師匠はなんでこうなった……と言った顔で呆然としていたが、何があったのだろうか。

そう思い、恭也さんに聞いてみると、どうやら酔った勢いでやられたらしい。

……ジュースとお酒を間違えるというベタな展開だったらしいが、月村の黒い笑みがところどころみる限り、あれは本当に間違えたかどうか怪しい。

まあ、何はともあれ師匠の嫁が決定してしまったということであ

る。

「そういえばソラくんは彼女達と寝たのかな」

「唐突に猥談を持ち込まないでください。まだですよ」

「へえ。けっこう積極的に迫られているからもう済んでいるかと思っ
ていたが」

「いやあんなに積極的に迫られたら、ドン引きですから」

お風呂に突撃されたり、寝室に潜り込んだり、パンツをクンカクン
カされたり……。

……………あれ？ オレの周りにまともな女の子っていないのかな
？

キアラも二オイフェチで千香と一緒にクンカクンカしていたし。

「……………もうオレの嫁は杏子しかない」

「唯一まともな女の子だしな……。まあ、その……がんばれ」

「はい……………」

恭也さんの優しさに心が暖まります……………。

「土郎さん、土郎さん。僕の相談も聞いてくれませんか」

「いいとも。というか、君に悩みが無さそうな気が」

「お宅の娘さんです……………」

「聞こうじゃないか」

何があつたんだ。アオは独白し始める。

「最近、なのはの写真が知らないうちに机の中や本の中にあるんです
よ。おまけに壁には日に日に、写真が貼られてて、文句を言おうと部
屋に入ると僕の写真が壁が埋まるくらいにびっしりと……。そした
ら、後ろになのはが口角をあげて、『このことは秘密なのです。にぱー
☆』と言うんですよ。どうすればいいですか。どうしたらなのはのヤ
ンデレは治るのですか！」

「話が意外に重たい！」

恭也さんが驚愕し、土郎さんはうんうんと頷いていた。いや、なん
でお父さんが納得しているんだよ。

「それもまた愛だよアオくん。いやー、なのはに好きな人ができてよ
かったよ。これで我が家も安泰だよ」

「どこが!? てか、いいのかよ父さんは! なのはがなんか昔と違う方向に進化しちゃってるんだけど!」

「何を言う恭也。なのはの初恋を応援してやるのが家族としての役割じゃないか。昔のなのはなら、『私と戦って勝て!』という無茶ぶりをしていたが、今のなのはなら安心だ。自分をしっかり持つてるし、判断できる。」

——だから決して今のなのはに意見したら怖いから、何も言わないわけじゃないぞ!!」

「拳が震えてるぞ父さん! てか、俺も怖いけどね!」

ヒエラルキーが覆されたようだ。ちなみに不動の頂点は桃子さんである。あの人でも高町は逆らえないみたいだ。

アオ曰く、「反抗期だからついアイアンクローしちゃった☆」とお茶目に笑って言っていたらしい。

………あの人、ホント何者だよ。ただの一流ホテルのパティシエだよ。

「ふむ。愛とは奥が深いな。時に恭也殿。娘さんは元気か?」

「元気さ。この前なんかもう御剣流を使い始めていたんだぞ」

「ふむ……人外の親をもてば、娘も人外か」

「さりげなくひどいなオイ」

事実そうでしょ。もうだいぶ前の話だが、六年前。恭也さんと忍さんとの間に生まれた娘さんが最初に言った言葉は「だとう、とときまー」だぞ。

……お前は転生者かって疑った時期がなつかしい。

「ちなみに二人目生産予定は?」

「いや二人目って……」

「甘いぞ恭也。若いうちはハッスルしておかないと、次第に性欲が薄れていくと三丁目の田中さんが言っていたぞ。あ、私はいつでも桃子でムラムラしているがね」

「人前でカミングアウトするなよ!」

「ちなみに四人目生産予定も考えてる!」

「サムアツプするなよ！」

恭也さんのツツコミがキレツキレツである。というか、士郎さんのダンディな大人が崩れて、お茶目な青年に見えてしまう。なんでこの人は中年の肌をしていないだろうか。桃子さんもそうだけど。

「ユーノはSMで、ソラは幅広いジャンルだが幼馴染みが多いな……。つか、士郎がマニアック意外すぎてびっくりだ」

「ネコネコニヤンニヤンプレイもマニアックではないのか？」

「……なぜ恭也がそのことを知っている」

「さすががやってたから自分もって忍に」

「ちくしよう！ バレてた！」

師匠もそんなことを……。なんか尊敬する師匠が薄れていく内容だわこれ……。

まあ、それはさておき。ここでお開きにして……。

「へえー、もう終わりにするだあ……」

「もう少し続けていいのよ？」

……背後に異様な気配を感じる。吸血鬼の嫁二体とヒエラルキー頂点の女性の……。

オレと士郎さんは領き合い、宣言。

「散開!!」

バツと逃走を図ろうとするも、ガシツと師匠と恭也さんが捕縛された。

「恭也く？ 私という嫁がいながら他の女の裸を見ているの〜？」

「いだだだだ！ ごめん。マジでごめんだから許して！」

「雷斗くん、悲しいよ……。私というお嫁さんじゃ満足できないの？」

「満足だけど、やる度に吸血されるのはもう勘弁だ！」

「一種の求愛行動を否定するなんて、悪い子だねえ〜。……………よし、

私の身体をフルに使って満足してあげる？」

ゾツとするほどの死刑宣告がここに下された。師匠が助けて！とオレ達に視線を向ける。

答えは既に決まっている。

「「「来世で会おうぜ!!」」」

「裏切られた!!」

「さあ……逝こうか♪」

「いやアアアア!!」とホラー映画よろしくとばかりに師匠は暗闇に引きずり込まれていった。

「この調子ならばジジ様と呼ばれる第二の孫ができそうだね」

「ブレないなあ士郎さん」

「逃がさないわあなた♪」

士郎さんが速度をあげると桃子さんも同じくスピードをあげた!?

ホントに何者だよあんた!

「私じゃ、満足してないの!」

「違う。これは桃子の愛を再確認するための儀式だ! ゆえにこれは正当性のあることなのさ!」

「なら、押し入れにあるあの本もいらないわね?」

「バニーガールはまだ駄目だ! あれはいずれ恭也に託して同志に布教する予定なのだ!」

「男はそうやって言い訳するのはわかってるわ♪ 大人しく捕まっ
てO☆H A☆N A☆S H Iしましょ?」

桃子さんがペースアップすると士郎さんが更にあげてきた。……

あれが熟練夫婦ってことだな。

「というか、オレ達逃げる必要ないんじや」

「先ほど桃子殿から『まどか殿達となのは達』に連絡したと言っていたぞ」

「よし! 衛。作戦名は『アオサクリファイス』だ! 実行するぞ」

「それ確実に僕が犠牲になる作戦だよね!」

ギャーツギャーツ喚きながら、オレ達は逃げる。彼女達に捕まれば貞操は危ないだろうなあ。とそんなことを考えながら笑みを浮かべる。

ここにはいない彼女へ。

オレは今日も騒がしく幸せです。

(??side)

とある世界。ある男は森林へ素材を集めていたとき、光が目映く起き、それが収まると一人の女性が現れた。

その女性は黒髪で妙齢だが、とても若々しい肌をしている。二十代後半に見えなくもないほど、若々しく見えた。

その彼女は瞳を開ける。瞳は誰かに似て青いものだ。

男はそんな彼女を起こし上げると、彼女の眩きが聞こえた。

「ソラ……。シイ……」

ソラの残された時間は——あと、三年。

第八十八話 異世界へ遊びにいけます

オレこと神威ソラは高校生である。海鳴高校一年である。

まあエスカレーター式の学校だったから、そのまま試験を受けてあがったわけであるが。

ちなみに高町達魔導師は中学卒という形で学歴を終えた。それでいいのかと聞くと、彼女達はこれから正式に管理局員となり忙しくなるようだ。

高町だけは「もつと殺りたいから♪」という猟奇的な理由があるようだ。……なんであんなったんだろマジで。

それはさておき。夏休みだ。蝉が鳴き、ジリジリと太陽が光を照らしている。

オレはリビングで、ある紙とにらめっこしながら訝しげな顔をしていた。

紙は体力測定だ。

しばらくそうしていると、ママさんが麦茶を持ってきて差し出してきた。お礼言って飲み干すと、彼女は「何を見ているの？」と興味本意で覗き込む。

それが嫌で逃げると、逃がさないとばかりにホールドしてきた。

おお……豊かな双丘がオレの腕に……!! これはなんとも至福な

!

「もらったわー！」

「しまったー！」

「何々……。『第十六回 目指せポケットベルマスター』? ってこれ違う紙じゃない! ソラくん。本当の用紙を渡しなさい! ポケットに隠してるのはお見通しよー！」

「ゲツ。なんでわかったの!?!」

「お姉ちゃんセンサーはなんでもお見通しよ!!」

「何それ怖いー！」

ギャーッギャーッと騒いでいると「うるさいなあ」と目を擦りながら千香が二階から降りてきた。

確かコミ●の新刊だっけ。……オレ×アオじゃねえだろな。

「ううん。衛×マツスルグレネード巴さん」

「誰だよそいつ!!」

「知らないの？ 巷で有名な魔法漢女だよ。正義の味方なんだよねー。ちなみにマミさんが永遠のライバルみたい」

「どんな正義の味方だよ！」

てか、マミさんをライバル認定!? 自称じゃないのそれ!」

「私のライバルね……お姉ちゃん。燃えてきたわ!!」

「なんかこつちも対抗心燃やしてるんだけど!」

カオスになってきた……。つーか、千香の持つてる手紙。誰からのだろう。

普段は脅迫状やら、土郎さんなど知り合いからの手紙が来るが、見たこともない模様で書かれた手紙だ。

気になって千香からもらって、開けるとキリトからの手紙だった。

何々……?」

………オイ。これホントか。

「マミさん。まどか達は……いないよな」

「そうね。まどかさんとほむらさんは二人で旅行で、さやかさんと杏子さんは武者修業（遊び）に出かけているわね」

「キアラも行ける余裕もない……か」

三人でいける？ ちよつと不安だ。マミさんはまだしも、千香がたまに暴走する機雷があるし……。

そう思っていると、ベルが鳴り、マミさんが玄関へ向かう。

オレはこれをどうしようか。と考えると尋ねてきたのは衛とはやてだ。

「遊びに来たでー。というか、どっか遊べる場所知らへん?」

「はやてよ。我が友がそのような場所を知ってるはずが」

「あるぜ」

「ホンマ!」

調度いいタイミングだ。いい具合に人材が揃った。

ヴォルケルも混ざれば、後はどうとでもなる。

「どこなん!? 教えてや!」

「落ち着けはやてよ! ここは穩便に我が筋肉を見て落ち着くのだ!」

「わけわからんわ! というか脱ぐなや!ここで!!」

……まあ、いつものことだし。気にしないけど。

やれやれ。まだ不安だが、これで人材は揃った。キリトの依頼がなんとかなりそうだ。

「して。遊びに行ける地は?」

衛の質問に不敵な笑みを浮かべて答えてやった。

『管理局外第129世界 アルブフレイム』だ

アルブフレイム。そこは管理局の管轄外の世界だが、魔法がある。魔導師のようなプログラマを使った魔法ではなく、詠唱によって引き起こす魔法だ。

言霊によって引き起こす事象と捉えてもいい。

そんな世界に行く理由はキリトから依頼されたのだ。

なんとキリトの奥さん（幼馴染み）が隣国に拉致され、王様の妃にされそうになっているのだ。

……強引過ぎじゃね。と思っているが、どうも奥さんの経歴がどっかの国の王女様らしい。

亡国の王女かよ。そりや、血かもしくはその関係者しか使えないマジックアイテムの可能性が出てきたな。

とまあ、そんな理由でオレ達はギルド本部にいるわけだ。

「それと僕の関連性は?」

「いや暇だろお前」

「暇じゃないよ!? 家事が僕を待つてるよー!」

高町とフェイトに家に居候しているアオを引きずって連れてきた。最近のこいつ、なんか主夫になりつつある。

救世主がご近所に名高い主夫のカリスマって、絵本のファンはきつと泣けるだろうな……。

それに、

「……保険だし」(ボソツ)

「え、何か言った?」

「いんや。とにかく、高町達には『おさわり店 一週間の旅』ってメール送つといたから」

「それ、僕が一週間もエッチな店に通い続ける変態になってるよね!?

思いきり誤解を招く内容じゃないか!!」

「え、オカマバーがよかった?」

「もつとひどい! というかソラさんゲスイ!!」

残念ながらそういう男なのさ。まあ、それはさておきギルドという場所に関して説明しよう。

管理局のような治安維持部隊がない代わりに、どんな依頼もこなす何でも屋という仕事がこのギルドである。

つまり警備、採取、討伐などなどの依頼を受けてそれをこなしていく。

治安維持部隊はまあ、国々の騎士団やら軍が行っているらしい。

オレ達が訪れているギルドは、古ぼけた木々で造られた酒場のような場所だ。ここにキリトがいるはずだが……。

「おうおう、兄ちゃん。ここはガキが来るとこ——げぼ!」

ん? 何かいた?

まあいいや。キリトを探そう。と足を進めると、なんか囲まれている。身なりが悪い男達にだ。

「テメエ! よくも兄貴を!」

「生意気なガキめ……。痛い目に合いたいようだな」

……いや、兄貴って誰? あ、さつき反射的に殴ちやっただおっさん

のこと？

悪いことしたなあ。謝って済む問題じゃなさそうだし……。

「ここは任せてソラくん。お姉ちゃんがO☆H A☆N A☆S H Iして説得してみせるわ」

「あれ？ お話ってそんな発音だっけ。まあいいや。お願いしていい？」

ママさんはニコリと微笑み頷く。彼女が前に出ると男達はニヤニヤと下品な笑みを浮かべる。

「おうおう、お姉ちゃん。そんな兄ちゃんの子守りよりも俺達とイイコトしないかあ？」

「あら、私と遊びたいのね。ふふ、いいわよ」

「いいねえ！ んじゃ、さっそくやど——ぶおっ!!」

ママさんがマスキット銃でまず一人撃ち抜く。死んではないが死ぬほど痛い魔弾だろう。激昂する他の男達が一斉に、襲いかかる。

ママさんは襲いかかる男達の剣や斧、拳を避けて、いなして、そしてマスキット銃で撃ち抜く。眉間、胸部、腹部などを撃ち抜き、だんだんと数が減ってきた。

「このアマ！ なめやが——おふう!!」

「あら、いけないわ。男の子のご子息を撃ち抜いちゃったわ……」

「でも」と続けて言う。

「別にもう使う必要がないでしょ？ こんな美人なお姉ちゃんが遊んであげてるのだから？」

(((恐ろしい……!!)))

うん。怖い。蠱惑的な微笑みだが、ゾツとする恐怖が強いや。遂に残されたのは逃げ出そうとする一人の男のみ。

ママさんは彼をリボンで縛りあげ、尻に銃口を突き刺す。

「ま、待って！そこはオイラの初めてでガンス！ 勘弁して……」
「ダーメ♪」

バキュンツ!!と男の断末魔と銃声が響く。おめでとう名も無きガンスくん。お前の初めてはお姉ちゃんがもらってくれたぞ……。

「いいなあ。ねーねーソラ！ よかったら」

「尻をどうにかすることを言うなよ」

「ううん。開発して」

「するか!!」

やはり千香はいつも通りである。そんな騒ぎに駆けつけてかキリトが人ごみから出てきた。

「何やってんだよ」

「ヤンキー狩り」

「なんだそりや。まあ、確かにここに転がってるヤツら評判は悪いけどさあ」

「なら、後で生ゴミ袋くれ。汚物は消毒だヒヤツハー（棒読み）」

「ここまでやる気のない荒くれ者はお前だけだよ」

とか言いつつゴミ袋を渡してくるキリトも、またひどい。そんなに邪魔だったのかい。どうでもいいけど。

キリトの隣に立っている男が苦笑していた。年齢的には二十代頃で、髪は赤みかかった黒髪だ。

その男とキリトの関係を考える。

「……キリト。お前まさかそっちも二刀流だったとは」

「何を想像して二刀流と判断したんだお前は！ てか、なんで俺が二刀流を使えることを知っていやがる!?!」

「なんとなく」

「直感で見抜いたのかよ。つーか、俺は幼馴染み一筋だって。コイツは俺のギルドメンバーだ」

ギルドメンバー……ということとは仲間か。

「はじめまして、六道寺幸太だ。長年、キリトと組んでる」

握手を差し向けてきたので、答えると関節技を決めようときやがった。オレはすぐに対応しようとして動こうとするも、地面に叩きつけられ、身動きが取れなくなった。

六道寺は嘆息を吐いて、オレを解放するとキリトに呆れた視線を向ける。

「オイ、キリト。ホントにコイツは役に立つのか？ 試してみたけど、

あく………ぶべら!」

「はい、油断大敵ー」

いい終える前に顔面へドロップキック。ゴロゴロ転がるヤツに、とどめとばかりにマミさんがマスケット銃を浮かばせて、発砲した。

煙が晴れたとき、そこにいたのはボロ雑巾となった六道寺だった。

「と、言うふうにごくみたら噛みつかれるから気を付けろよ」

「先にいいやがれ！ てか、お前もひどいなオイ！」

「うるさい。勝手に人を試した罰だ。死なないだけマシと思え」

「んだと！ ナメたまね——ぎやばっ!？」

「キャンキャンうるさいわね。いい加減にしないとお姉ちゃんがお仕置きしちゃうぞ♪」

いや、もうお仕置き実行してるから。追い撃ちもかけてるし。

何はともあれ、これから先が前途多難なような気がするオレだった……。

ため息が止まらないな……。

第八十九話 変態クエスト

六道寺を縛って引きずって、オレ達は冒険に出かける。森の中を歩き、邪魔な枝を切りながら目的地まで歩いていく。

「痛い痛い！　なんで俺は引きずられているの!?!」

「荷物だから」

「納得できねー!!」

うるさい荷物だ。猿轡してやろうか考えていると、ガサガサと葉っぱから何かが出てきた。

「気を付けろ。ここにはモンスターがいるから、油断するなよ!」

モンスター……か。なるほど、この世界には魔物と言うべき獣がいるのか。

面白い。どんな相手か楽しみだ。

現れたモンスターを観察しようと見てみると、

「ウホ」

海パン履いただけの変態青年だった。

「ってなんやねんこれ!!」

「モンスターだ」

「いやこれ、どっからどう見ても海パン履いた男だやね!?　モンスターの要素が一切ないんだやけど!?!」

「侮るな!　海パン男はある意味モンスターだ」

はやてがツツコむ。いや、オレも同感だ。どんなモンスターだよこ

いつ……。

海パン男はじつと腕を組んで待っていた。

……これホントにモンスターか？

「疑問に思うかもしれないが聞いて驚いてくれ。この海パン男はな」

キリトの説明に耳を傾ける。

「男を性的にホイホイくつちまうモンスターなんだ！」

「どんなモンスターやねん!？」

「女はオーク。男は海パン！それがモンスター界では当たり前だ
！」

「知らんがな！　というか、あの海パン。さつきから熱い視線を衛くん達に向けてるってこと!？」

「そういうことだな。ちなみに手にいれられる素材はレアアイテムの『脱ぎたての海パン』だ」

「いらへんわ!!　てか、誰が欲しがるねん!？」

「男に飢えた変態淑女達に決まってるだろ！　それくらい当たり前じゃないか！」

「だから知らんわ、そんな常識！」

キレツキレツなツツコミをするはやてに、海パン男は我慢ができなくなつたのか「ヤラナイカ！」と叫んで、衛に襲いかかる。このままでは腐の道を極めし乙女が望む展開になることは間違いない。

……と言っても衛がそんな展開に持ち込めるはずがない。

なぜなら、

「ウホ、ヤラナイカ？」

「死ぬがよい!!　ヌツハアアアア!!」

この男はむしろ筋肉でどうにかしてしまおうから。衛の拳が海パン男に直撃する。

「アベサアアアアン!!」

衛は海パン男の顔面を貫き、水平へ飛ばす。海パン男は謎の断末魔をあげながら、木々を破壊していき、そして道を作ってくれた。

最近の衛の話すれば、この男は筋肉を極めていき、遂には師匠公

認のバグキャラへと進化した。つまるところ、ノエルのような化け物クラスの超人である。

……たぶん、真つ正面から挑めばさっきの海パンのようにぶっ飛ばされるに違いない。

「……スゲーパンチ」

「ちなみに私の超質量魔法で作った流水をあんなふうに破壊したで」「どんなパンチだよ」

はやては最早諦めたと感じた感じに、衛にそんな視線を向けている。強くなるのはいいが、だんだん人間をやめていった恋人の姿に何度呆れたことか。

まあ、それはさておき海パン男を地平線の彼方へぶっ飛ばした衛は何かを見つけたのか、はやてに見せつける。

「はやてよ！ 見よ。レアアイテムだぞ！」

「きゃアアア！ こっちにそんなバッチイもん向けやんといて！」

「何を言う。これははやてのような淑女が持つべきものだろう！」

「私、変態ちやうで!？」

「又？ そうなのか。ならば私のパンティをここで」

「せやから、いらんと言うとるやろが！ 夜中に渡してや!!」

「待ってはやてさん。なんでもらう予定なの!？」

……最近のはやてが千香に染まりつつと感じる初戦闘だった。

最初の町にたどり着いた頃には夕方だった。普通に進んでいただけ、なんか疲れた。

海パン男の後に出てきたモンスターが原因だ。

『バニーボーイ』やら『シャイニングわんちゃん』やらとヘンテコなモンスターが出てきたのだ。

つか、『シャイニングわんちゃん』ってホントに何？ ネーミングセ

ンスのない名前の割りには光の早さで移動して、肉球パンチしてきたんだけど……。

痛くないのに、全く反撃ができないまま逃げられた。とても歯がゆい。ナメられた気分だ。

『バニーボーイ』は衛がまた瞬殺してレアアイテムをゲットしたらしいが。ウサ耳をマミさんに渡していたが、あの人はどうするつもりなんだろうな。

「というか、六道寺を生け贄にして逃げればよかつたんじゃね」

「さりげなく恐ろしいこと言うなよお前！」

「あ、その手があったか」

「キリトオオオオオ！」

冗談に乗るキリト。六道寺イジメはホントに面白いとわかった。

オレ達は疲れを癒すために、宿にたどり着いた。お金はあらかじめ換金して手に入れている。

ちなみに商人に『脱ぎたての海パン』を売ると、予想以上な高額な値段で売買できた。……ホントにレアアイテムなんだな。改めて理解に苦しむな。

部屋割りはまあ、女性達と男性達に別れるはずだったのだが、マミさんが「弟を一人で寝かせるの？寝かせるつもりなのかしら？」と笑顔の威圧でキリトを説得してしまい、なぜかマミさん、千香と同室になってしまった。

……最近の彼女達がオレを見る目が獲物を狩る雌豹に見えてしまうのはなぜだろうか。

怖いつたらありやしない。

そんなふうにして、それぞれが休息をとる中でオレは一人、部屋でリンゴを握っていた。

力強く握る。しかし、砕けることはなくそのまま。オレは諦めて、ベッドに寝転がる。

「……どうしよかホント」

これだけならまだいいが。またあのと看みたいに、何もできなくなるのではないかと不安にかられる。

首を振り、そんな不安を打ち消す。とにかくこのクエストをきつさと終わらせよう。と思っていると、浴場からマミさんと千香が帰ってきた。

艶やかな肌に湿気た髪がマッチしており、色っぽい。劣情にかられる男は何人もいそうだな。とそんなことを考える。

「またマミさんナンパされてたよ。んで、おっぱいをガン見してた」「身も蓋もないわねえ……」

「だって事実じゃんかー!! とうか、なんだよそのおっぱい! 触ってみただけど張り、艶、弾力がパーフェクトとか反則じゃんかー!!」「きゃっ! コラ。触らないのっ」

きゃっきゃっつとじゃれ合う二人。まどかがいたら、「これは私達も負けていられないね!!」とか言っつてほむらとイチヤつきそうだな。

そんなことを考えていると、マミさんと千香がこちらをじつと見ていた。

「ソラくん……それ」

「……………あ」

どうやらオレの愚息が元気になったようだ。マミさんはピタツとくつつき、押し倒してきた。

「ふふ……、お姉ちゃんが鎮めてあげる」

「いや、これはその……ちよっ、まっ——あふん」

その後、イイコトされました。

第九十話 お兄ちゃんだけど愛さえあれば関係ない
よね!!

「唐突だが、義妹という属性を知ってるだろうか。血の繋がりが無い。別に結ばれても医学的に問題がないが、家族との間に生まれる禁断の愛のため、背徳感を感じさせてくれる。そう、ボクが言いたいことはこうだ。

——もうヤツちまえよyou」

「するかアアアアア!!」

翌日、お姉ちゃんにイイコトをされて、朝早く目覚めると金髪巨乳ポニテ美少女がキリトに迫って、顔を押しえて抵抗している光景が目に入った。

なんか、オレがまどかや千香にキスされることを阻止するかのようなことをキリトもしていた。

スタイルはキュツとしてポインとした美少女なのに、ひよつとこ顔にしてキリトに迫ってるその姿で、台無しである。

何事か聞くと、どうやら彼女はキリトの義妹らしい。名前はリーファ⇨キリタニ。

キリトと同じ剣士であり、刀を使っている。

そんなリーファさんがここにいる理由は大好きなお兄ちゃんの手伝い——という建前（本人暴露）のお嫁さんから寝取るぜ!と言った肉食系全開の欲望である。

この子はいったい何があっただろうか。そう聞くと幼い頃のリーファは母親の知り合いのお姉さんに賜った英才教育で別の意味で進化しちゃったとか。

……なんでだろう。そのお姉さんを知ってる気がする……!!

「別に結ばれてもいいじゃない! 血縁的にモーマンタイだし!」

「いや俺、妻帯者! 明らかに浮気じゃなかこれ!」

「大丈夫! それそれでなんか燃えてくる!」

「お前はそんなキャラじゃないだろ!? てか、いい加減に諦めろよ!」
「諦めたら、そこで試合終了ですよ……?」

「いやもう試合終了してるから! 俺はゴールインしてるからね!」
静かなキリト氏がこのままですっこそミキャラになるとは。という
か、千香よ。なぜ写真を撮っている。

「キリト氏のお嫁さんにこれを渡して修羅場に持ち込む」

「鬼かお前は」

「じゃあ、私は噂を広めておかなくちゃ♪」

「マミさんも乗らないの」

事態が治まったのは、衛が騒がしい朝のあいさつをしたときである。なぜあいつはあいさつをする度に、いつもポーズをするのだろうか。

町を出て再び森の中。しばらく歩き続けると草原へ出ることに成功した。

オレ達の旅は変わらず続く。まあ、さっさとキリトの奥さんのいる領地までいけば良い話だが、『全てを開く者』は知っている場所でなければランダムに訪れてしまう。

空中やら水中だったりするパターンは当然ある。というか高確率でそういう場所と繋いでしまうわけで。

『全てを開く者』のデメリットは命がけであることに変わりないのだ。

「というか、さつきからジロジロとなんだこの変態義妹は」

「へー。この人が父さんが言っていた死神さん? 普通だね」

「お前の父さんが何者か知らないんだけど」

「魔王。そして母さんのしもべ」

「お前の母さんが何者か知りたいたいんだけど!」

魔王をしもべにする母上とはなんぞや。というか、キリト氏もガタ

ガタ震えて何やら思い出している模様。

「あの笑顔でのアイアンクローは……！」と呟いてる辺り、キリトの母上の必殺技はアイアンクローだと思えた。

「んで、妹さんもついていくわけなの。危なっかしいこのクエストに」「当然！ お兄ちゃんの貞操をこの手にとるまで私は戦い続ける！」

「諦めて帰ってくれ。というか別の意味で俺が危なっかしい旅になるよね……」

疲れた顔で身体を沈み込むキリトに、はやてが肩を叩いて「どんまい」と慰めている。どうやらシンパシーを感じているようだ。

「みんな、あれを見て!!」

マミさんが指をさした方向に、驚きの存在がいた。そう、そのモンスターは首がなく、焼き色に染まったボディ。そして香ばしいおいおいを辺りに散らしている――

「焼き鳥が飛んでる!!」

「いや、なんで焼き鳥が生きとるねん!」

全くその通りだ。というか、羽毛はないのによく飛べてるよな。どんな仕組みだよオイ。

「あれは『数々の争いの末に焼き色となった七面鳥 バード太郎』というモンスターだ!」

「え、それが名前なん!? てか、ネーミングセンス無すぎやん!!」

「そもそもなんで焼き鳥が飛んでるだよ!」

「名前を聞いている通り、数々の争いの末に戦いそして人間の食料に成り果てる前に、怨念でモンスターとなった焼き鳥だ。食うか食われるかの世界に反逆して生まれたモンスターさ」

「いろんな意味でよーわからん!!」

全くその通りですはやてさん。

「そういえばあれってレジエンドクラスって言われてるモンスターだよね」

「ああ。たった一匹しかいない代わりに鬼強いモンスターだ。どうしようかりーファ」

「え、あれ強いのか?」

信じられないと言った目で『バード太郎』を見てみると、首跡からどす黒い炎を吐き出してきた。それから全員退避することになった。『にぎやアアアアア! 焼き鳥の分際で黒炎吐きよったアアアア!?!』

「おおー。やっぱスゲーモンスターなんだあ」

「てか、神威くん。なんでそんなにのんびりなん!? 焼き鳥やで。焼き鳥が炎を首から吐いたんやで!?!」

「そんなもん受け入れられることができるだろ。オレの師匠曰く、『全てを受容しろ。……出ないとノエルである意味死ぬぞ。はあ……』ってありがたーいお言葉を頂いてるから」

「師匠、めっちゃ疲れてるやん! てか、知り合いにもつと非常識がおった!」

「ヌハハハ、はやてよ! 我が友が非常識なのは当たり前だ!」

「って言ってる側から、なんで炎を素手で受け止めれるんねん!?!」

衛が炎を右手で止めていた。見えない壁が彼の腕に生じているのか、炎がこちらに来ない。

「見よ! これぞ、なのはの『プロテクション』を学び、そして創造せし、魔法——『マッスルシールド』なり!!」

「どんなシールドなん?」

「筋肉が多ければ多いほど防御力と範囲がスゴい」

「どんな仕組みやねん!!」

全くである。筋肉で防げるシールドって……。

そのうち魔法（物理）少女が登場したらどうしよう。

『グワ!? グワグワ!』

「え、何言ってるのか?」

「ぬ? 『くっ!? 愚かなで生意気な人間共よ。焼き鳥なればいいも

のの!!』と言っておるな」

「なんで言葉わかんねん!」

「というか、元から焼き鳥のヤツが焼き鳥言うなよ」

と反論するとまた炎を吐き出した。しかし衛の鉄壁（意味深）の魔法により無傷。

マミさんがニコツと微笑むと、焼き鳥に向けてマスケット銃を発砲。焼き鳥の（香ばしい）翼を貫く。

「あ、落ちた」

「ならば我の全力全開の一撃をくらって、愚かな人間かどうか見極めるがよい!!」

衛が地を駆けていき、そして拳をつくって、踏み込む。

『マツスルウウインパクトオオオオ!!』

衛の拳が焼き鳥の身体を打ち抜く。

……結論から言えば、かつて結界をぶち壊した強烈な一撃がまた進化していた。

たった一撃で焼き鳥の身体が鳥のミンチへと変わり、受け止めきれなかった拳の衝撃が、約十メートルくらいの範囲まで及び、草原を吹き飛ばした。

「ヌウウウハアアア……。我が筋肉に敵無し……。!」

「最近、衛くんがノエルさん並みに手に負えなくなってるやけど……。!」
「……。もう僕達には敵わないかも」

……はやて。アオ。

そんなのもう当たり前だからな……。?」

ちなみに焼き鳥の落としたアイテムは軟骨の唐揚げだった。

……。おいしかったけど、なんで軟骨で唐揚げなの?」

さて、草原を抜けてオレ達がたどり着いたのは、集落である。猫耳族の集落と呼ばれるところで、まあなんというか猫耳の人間がいるのだ。

……密かな夢である猫耳モフることが実現できるのかな。

「にしてもレジェンドクラスのモンスターをワンパンなんてスゴいね、お兄ちゃん」

「そういえば管理局には『鬼畜な悪魔』と『痴女の死神』と『筋肉拳王』がいたとか」

「どんな異名だよオイ」

「つーか、フエイト。お前の異名が一番ひどい。」

「さて、今日はここで宿をとろうか」

「賛成。つーか、なんか騒がしいんだけど。誰が」

「サンマは醤油だろ!? なんでわかんねーんだよ!」

「ポン酢に決まってるじゃない! あのをさっぱり感がいいじゃない!!」

「あの、もう塩でいいじゃ」

「シリカは黙ってて(ろ)」

「ぐすん……いいもん。シノンちゃんと一緒に塩をかけてるもん」

「あ、ごめん。もう食べ終わってるから」

「がーん!!」

……なんか知ってる声が聞こえた。キリトも同じく「シリカにシノン……なんでお前がここに」と言っていた。知り合いのようだ。

シリカは茶髪の猫耳。シノン是水色の猫耳だ。

……猫耳族なのか？

「やんのか!？」

「上等！ さやかちゃんのを見せてやる！」

……杏子、さやか。ここでキャットファイトしないでくれ。後で合流するときに恥ずかしい……。

「猫だけに」

「お前は黙ってろ」

千香を小突いて、二人をとりあえず落ち着かせるために行動するのだった。

第九十一話 冒険は続くどこまでも

杏子とさやかがなぜここにいるのか聞けば、なんと修業をしていたら次元の穴が空いて飛び込んだらしい。なぜ、そんな無謀なことをしたのか聞くと、さやかが「あたしを呼んでる声がする!!」と言って飛び込んで、杏子はそれを追ってきたらしい。

結論から言えば、

「お前やっぱリアホだろ。そうだろ」

「失礼な。あたしはアホじゃないわ。純粋なお馬鹿よ!!」

「いやそれおんなじだろーが」

杏子が呆れて呟くと、さやかは首を傾げる。わかってないんかい……。

「とうか、なぜソラ達もここに来たんだ？」

「クエスト」

「いやわかんねーよ。なんだその単語。千香、説明してくれ」

「変態クエスト」

「だからわかんねーから！ もういい。マミ、お前が言ってくれ！」

「天道くんが迫り来るモンスターをワンパンで倒していつて手に入れたレアアイテム全てが変態が喜ぶものばかりだったクエスト」

「もつとわけわかんねーよ!! てか、ワンパンでモンスター蹴散らしたのかアイツ!?!」

杏子さんは苦戦していたようだ。何気に生命力溢れるモンスターだったし……。

「まあいいや。アンタ達が何かの依頼を受けて、それを遂行してるってことでいいんだな？」

「まあな。んで、お前はどするの？」

「決まってるだろ。おもしれーから参加だろ」

杏子はりんごをかじって、不敵に笑う。さやかもうんうんと頷いていた。

心強いな。この二人がいたら、オレの出番がなくなりそうだ。

好都合だ。もし、このまま何事もなくこのクエストが終わってくれば。そう思っていると、シノンが話しかけてきた。

「アンタがキリトの言っていた男ね。はじめまして。シノンよ」

「ソラだ。キリトをペットにしている」

「オイ。いつから俺はお前のペットになった」

「残念。キリトはあたしのペットだから」

「お前もかよ」

冗談を言っただつもりがとんでもないことが判明。まさか、ほむらと同族か。

そう考えていたら「嘘よ」と舌を出して言った。

悪戯猫とはこのことだな。

「わたしはキリトさんの愛人を目指してます!!」

「あ、この子の言葉は無視していいわよ。全然意味がわかってないから」

「シノンさん!? 愛人って言葉は愛する人って意味くらいわかってますよ」

いや百八十度全く違う意味だから。……なんで間違った解釈をしてるのだろうか。

「俺の妻が教えたのが原因」

「黒幕がまさかの身内。もうお前の奥さん、おかしいだろ」

「大丈夫。元からおかしいから」

サムアップして答えるも、目が死んでいた。キリトはオレと同属であることが判明した日だった。

オレ達が集落から旅立とうとしたら、シノンとシリカも付いてくることになった。

彼女達の目的地も、どうやら王都らしい。まあ、目的地は同じなら問題ないが。

「あ、そうだ。ソラに聞きたいことがあるが……」

キリトに声をかけられ、振り返る。なんだろう。と思っていると意味不明なことを聞いてきた。

「お前の瞳って親の誰かの遺伝なのか？」

「遺伝に決まってるけど……。何を聞いてるんだよ」

「いやなんか王都で、ソラにそっくりな瞳をしている女性がいるみたいだな」

オレと似た瞳？ ……オレの母は、まあ犯罪犯してんで刑務所から脱獄して死んじゃったらしいが……。

まあ別にもうどうでもいいが。最低最悪の人間だったし。

「オレの実母は亡くなっているし」

「んー、そっか。なんだ。勘違いか」

勘違い……か。だと良いが。

胸騒ぎが止まらない。嫌な予感がしてきた。

と、まあそんな感じで王都『カルデラ』までたどり着いた。『カルデラ王国』は様々な種族が行き交う国で、軍事的に強い。

その上、物流が豊かで住民達の暮らしも良いという、人気な国だ。その首都であるここ『カルデラ』はその上をいっていた。

通りは商品が並び、騒々しい店舗達。町行く人は流れのように通りすぎていく。

海鳴の商店街よりも、かなり大きなストリートが多い。

おまけに住民達の服装がお洒落で、何気に美女美男が多い……。

「ここに……アスナが」

「キリト殿の奥方か？」

「ああ。アイツがここにいるはずだ」

「ということとは、彼女の奪還のクエストになるね。だけど、大義名分がないと僕達も危ないよね」

アオの言う通り。王族を拐うとなるとそれなりの大義名分が必要だ。アスナという女性を救うには、この国の王が明確な悪であるという名分が必要になる。

「……一応、あるにはあるが。どうも胡散臭い話なんだ」

「どんな？」

「どうにも他国の魔力が強い人を拉致しているとか」

なんのため。いや、それがわからないから胡散臭い話だ。

とにかく、ここですることは情報収集だ。オレ達はさっそく酒場へ向かうことになった。噂などが集まりやすい場所だからな。

酒場は西部のカウボーイが来そうな木造建築で、扉はない。しかし、一番の賑わいがあり、人がたくさんいる。

スゲー。と呟いていると店員の女性が営業スマイルで近づいてきた。

黒髪で妙齢だが、とても若々しい肌をしている。二十代後半に見えなくもないほど、若々しく見える。

フリルのついたウエイトレス服で、清楚な雰囲気がある茶髪の女性だ。何よりも青い瞳で垂れ目が印象深い。

「いらつしやいませ。何名さ、ま……ですか。………」

絶句。店員さんがオレの顔をじつと見て呆然としていた。

「……ソラ。どうもお前のブサイクな顔に呆れてますよ」

「なんですと？ マミさん、オレってブサイク？」

「ブサイクよ。ブサイクだからお姉ちゃんしか結婚しかできないわ」

「嘘を教えるなよマミ」

杏子にピシヤと叩かれて、踞るマミさん。地味に効いたらしい。あと、キリトも何気なくひどいこと言うな。

そんなとき、だった。

「カイトさん!!」

店員さんが抱きついてきた。意外に大きなお胸様がオレの胸板によって潰れる。

おお、役得？ というか何!?

「ソラくん！ 浮気なんてひどいよ！」

「……この私というご主人様がいながら、他の女に尻尾を振るなんて……お仕置きが必要ね」

「なんでお前らがいるんだよ!?!」

まさか、まどかとほむらもいるとは予想外だ。てか、なんでこの店

員さんは泣いてるの？

誰かと勘違いしているのか？

「カイトさん。カイトさんですよね？」

「いや、全然違うし……。というか、あんた誰だよ」

普通に名前を聞く——そして、後悔した。

だって彼女は——

「わたしです！ 一ノ瀬リツカです！」

——前世の母親トラウマとの再会なんて。誰が予想できるかよ。

第九十二話 進撃の母上（笑）

一ノ瀬リツカ。オレの前世の母親で、オレの全てを否定した女。そいつが目の前に現れたことにより、動悸が激しくなり、オレの意識が遠くなつて倒れたらしい。

……いきなり、トラウマを作つてくれた女と再会したら当然だと思ふ。それほどオレはまだこのことを振りきれないからなあ。

その後、まどかとほむらが宿屋に運び、ベッドに寝かせて介抱してくれたそうだが、今はまどかのみだ。どうも一ノ瀬リツカとの話を聞いているらしい。

「……なんているんだよ。こういうときに限つて」

「ソラくん……」

「まどか。なんであの人はいるんだ。だって見滝原の次元は確かに時間の流れは異なっているが、なんで以前と変わらないんだよ……」

オレと再会したときと同じくらい歳のだった。それは彼女はある意味異常だ。だってオレが死んでから、何年か経っているはずだ。

なのに、今と変わらない歳なんてありえないはず……。

「アオくんと同じみたい。次元の穴じゃなくて時元の穴を越えたみたい」

「時元つて、もしかしてタイムスリップつてところか？」

「そうだね。原因はわからないけど」

……まあいいか。オレがどうこうしても、あの女が何を言おうがオレにはもう関係ないことだ。

だって、もうオレは彼女の息子でもなんでもないから。

「それよりもソラくん」

まどかがギョツと手を握つて目を合わせてきた。大胆、と言うには当たり前だがいつになく真剣な顔で見ていた。

「私達に何か隠し事してない？ 言いたくないこととかあるよね？」

「あ、浮気のこと？ 安心しろ。オレはモテない男子だから」

「違うよ。まあ、それは私達のチームプレイで阻止してるから」

「え、まさかお前らの策略なの？ たまに届いたラブレターが切り裂かれてるのも、そうなの？」

「それよりもー」

……誤魔化したな。

「隠し事。してるでしょ？」

じつと見つめられ、オレは視線を逸らす機会を失った。ここで答えないと、彼女の機嫌を損ねそうな気がするのだ。オレが誤魔化そうと、口を開こうとしたとき、ノックする音が聞こえた。

「入っていいかしら？」

訪問者はほむらだ。オレは「どうぞ」と答えると、ほむらが中に入ってきた。

「ソラの母親（仮）の話はつけてきたわ。まあ、彼女自身。ソラじゃないくて別れた前の旦那と勘違いしていたみたいだけど」

「んで、何か言っていた？」

「ソラに謝りたいだって」

「おととい来やがれ」

「私もそう答えたわ。泣いていたけど、無視してやったわ」

「うわあ……言葉からしたらほむらちゃんって結構最低な部類だよ
ね」

「最低なのはあっちよ。だって、一度拒絶した女がシャリシャリと私のペットに手をつけようとしているのよ。断じて許さないわ」

「……ペットじゃねえし」

まあでも。ほむらの言葉はオレの本心でもある。一度拒絶しておいて、何を……と憤りを感じて止まない。

やっぱりオレはまだあの女が許せないんだ……。前には進めていないんだ……。

「で、これからどうするの？ あなた達。面白いことに巻き込まれてるじゃない」

「混ざりたいなら萌える言葉で頼め」

「おにいちゃあん……ほむら。いっしょおに、あそびたいにゃん」

「……ある意味スゴいの来たな」

「妹のモノマネは得意よ」

お前の中の人っていたっけ……。まどかがさつき萌える言葉で鼻血を出して倒れてるけど。

「まあ、冗談はさておいて。元から混ぜるつもりさ。明日から情報を集めるから、そのつもりでいてくれ」

「わかったわ。おにいちゃん」

「……真顔でそれやめて。なんか怖いから」

「私で遊んだ罰よ。精々、夢でうなされなさい」

そう言っただけは引きずって退室した。残されたオレは、一人寝転がり、どこを散策しようか考えながら目を閉じるのだった。

「ほむらちゃん……」

「……………わかってるわよ」

ドア越しで彼女達の声が聞こえた気がした。

数日後。回復したオレとマミさんは、情報収集のために散策していた。酒場で聞いた内容によれば、この国の王。オベイロンが魔力の多い人を集めてるとか。

特に奴隷など集めてるとかがよく聞かれるし、他国の少年少女達も拉致してるといふ噂も多い……。

なんのためにそんなことをしているのか。それを知るために、裏通リやスラムなど裏の人間が集まりやすいところにオレ達はいた。

「……………さすが裏の世界。ホンツツト、ろくでなしが多いな」

「まさか、あからさまに狙ってくるなんてねえ」

いきなり襲いかかってきたチンピラを踏みつける。「ぐぶつ」と呻くが気にしない。

「くっ、オイラ達は『ワンニヤン組』だぞ……。こんなことをして許されると思ってるのでヤンスか……」

「かわいらしい組だなオイ」

「というか猫耳犬耳の組だからそうなのか？」

「ふっふっふっ……今に見てる。オイラ達の組は団結力が取り柄でヤンス」

ヤンス君の言う通りなのか。「うおオオオオオ!!」やら「メガネ!

今助けにいくぞオオオオオ!」と声がする。その方向へ振り向くと、約三十人くらいのヤンス君と同じバンダナをしている男達がこちらへ向かっていた。

「オイラ達の仲間でヤンス! さあ、かくご——」

『『ティロ・ファイナーレ』!!』

「ボスうううう!!」

ヤンス君の勝ち誇った顔が、一撃で真っ青に変わる。そりゃ、ママさんが必殺技の超砲撃魔法でヤンス君の仲間をぶっ飛ばしたからなあ。

「てか、ママさん。なんで必殺技使ったの」

「だってムサイ男達の犬耳猫耳なんて、気持ち悪いでしょ? だから弟の視界を汚すゴミをお姉ちゃんが掃除してあげたの♪」

「さりげなく、人をゴミとか言っちゃったよこの人」

「怖い女の子ねえ〜」

「そうだな……——って!!」

のんびりした口調でいつの間にか隣には前世の母親がいた! なんだ!?

「え、だって気になったから。お母さんはソラの行動が気になって気になって」

「だからって着いてきたのか!? つーか、オレの母親面するな。消えろ」

「え、つまり女として見てるの?」

「見てねえし! てか、どう解釈したらそうなる!」

「やだあく。お母さん、息子に女として見られてるなんて♪」

「人の話聞いてた!」

悪態ついてるのにめげないな!!

トラウマと再会して、てつきり不穏な空気になると思い気や、なん
でコメディになる!

シリアスはどこにいった。

「……一ノ瀬リツカさん。あなたにソラくんのお母さんと名乗る資格
はありません。早々とソラくんの前から、」

「ちようどソラのアルバムがあるけど見る? お姉ちゃん」

「お母様と呼んでいいですか!」

オイいいいいい! 何釣られてるんだよママミシアアアアア!!

「つーか、なんでアルバムを持つてるの!? 常時持つてるの!」

「女は思い出を持つてるから、美しく輝くのよ」

「知るか! オレのことを忘れていたくせに!」

「ええ、忘れていたわ。うん。それは否定しないわ。過去の幻想と決
めつけて、あなたを拒絶したことを否定しないわ」

「……あっさり認めるんだな」

「見苦しいのが嫌だからよ。当時のわたしはそうだったから」

最低な女だな。潔いけど。

「あなたを否定したことを謝りたかったわ。ずっとずっと後悔した
わ。……あのとき、見たあなたは紛れもなく本物だったのに」

「あつそ。今さら謝っても遅いから。オレはお前のことを絶対に認め
ないから」

今さらどうこう言っても、単なる戯れ言でしかない。

絶対に許してやらない。

絶対に赦しを認めない。

この女がしたことはオレにとって絶対に許せないことだ。

幼いオレはずっと泣いていた。嘆いていた。

どうしてオレを認めてくれない。
どうしてオレを否定する。

悲しくて、辛くて、苦しくて、オレはいつしか家族に対して悪い印象を持ってしまった。

いずれ拒絶する、裏切る。だから作りたくない……。そんなトラウマができたんだ。

それゆえにオレはこの女を認めない……。

「それでいいわ。わたしがしたことは永遠に許されないことだから」「ふんっ」

なのに、この女は笑っている。微笑んでいた。

なぜ笑っていられる。なぜ邪険にされても笑っていられる……。

——なんで、今さらになって、オレに気づいてくれたんだよ

……

オレは誤魔化すように、視線を青空に向けるのだった。

「お母様！ この写真。ソラくんがオネショして泣いてるお写真をい
ただいてよろしいかしら!!」

「いいわよ。まどかちゃんと千香ちゃんも焼き増し予約済みだから」
「ってまだやってたのかマミさん！ つーか、そのアルバムをよこ

せエエエエ!!」

はい、シリアスがシルアルに……。というか、そんな写真あったの初耳なんだけど……!?

☆☆☆

アルバム奪取は……失敗した。なんとこの女——一ノ瀬リツカは強くなっていた。

ここに迷い混んでからたった数カ月。彼女はある人に師事されて戦いを学んだらしく、ある程度戦えるらしい。

そして彼女が特化していたのは『回避』だ。なんとオレの動きを瞬時に予測できるくらい、直感と師の教えで『回避』だけならば達人クラスになっていた。

「……ぜえぜえ。一般人じゃねえのかよ!」

「あら。この世界に来てからわたしって結構、素行の悪いお人にモテモテなのよ? 狙われやすかったから、酒場のママに、特別なトレーニングループで護身術を短期間レッスンさせてもらった」

「どんなトレーニングループだよ……」

「えっと、『精神と時の——』」

「それ以上言うなあ!」

某龍の球関連の人か!? なんてことしやがる。おかげでマジで疲れた……。

「お母さんの強さ。認めてくれる?」

「認めねえよ。てか、お母さんじゃねえよお前は」

「やっぱり、女として見ているのね! エロ同人みたいに、エロ同人みたいに!!」

「どこで学んだその単語!!」

「別れた今の夫よ。あの人ったら、よくチツパイの作品を集めていたわ〜」

「お前の夫の性癖なんて知るか! え、てか別れたの!?!」

「ええ。あの人もこの世界に迷い混んでいたみたいなのよ〜」

……一ノ瀬家はトラブルに愛されてるのか？

いや、そんなことあるはずない。あつてたまるか。

「……ちなみに別れた理由は？」

「チツパイロリの恋人ができたからよ。『お前は貧乳じゃない！ 別れて！』って言われたのよ。巨乳のどこが悪いのかしら？」

「チツパイで別れたのか、そのロリコン旦那と！」

「お母さん、シヨックだったわ。あ、これがNTRって言うのよね。お母さん、勉強したわ」

グツと握りこぶしを作って自信満々に言った彼女に、オレは頭を抱える。なんでそうなるだよ……と頭痛の種ができそうだ。

「よくもまあ、自分のことを他人事で済ませられるな……」

「ぶつちやけ、シイ。あ、ソラの種違いの妹ができて以来、疎遠だったからね。まあ、間違いなく浮気してたし。ほら、証拠の写真もこのアルバムに」

「人のアルバムに浮気現場の写真を挟むなよ!!」

なんだこの人……！ やつてることを全然悪いと考えてない。天然なのか？ 馬鹿なのか？

どつちにしろ、かなり嫌なことがあったのになぜか前向き過ぎない!?

「母親と再会して、シリアス突入だと思ってたのに……!」

「シリアスさん？ ソラも知り合いなの。あの人なら、さつき『コミケいくぜー』って旅立ったわよ」

「ツツコミどころが多すぎるわ！ てか、シリアスなんて実在してねえだろ！」

「あら、ソラもシリアスⅡナラボウゼという人と知り合いじゃ、ないのかしら？」

「人物名かよ！ というかいい加減にお前黙ってて！ これ以上、台無しにしないでくれよ！」

「こら！ ソラくん。お義母様^{かあ}になんて言いぐさなの！」

「いや母親じゃねえし。てか、ニユアンスがちがくね!？」

「やっぱり、わたしって息子に女として見られてる……? エロ同人

みたいに！」

「いい加減エロ同人から離れろオオオオ!!」

この母親はエロ同人に影響されてるなオイ！ 今の夫ことパピーをいつかぶちのめしてやる。

元々、こんな人じゃなかったのに……！

世界はいつだってこんなことばかりじゃなかったはずだ……!!

「ソラだったらなぜ四つん這いになってるのかしら？」

「気にしないでくださいませお母様。それよりも一刻も早くここから離れないと。ここは危ないところですから」

「そう。なら、行きましょ♪」

「はい♪」

……なんで仲良くできちゃうの？ そこは軋轢しちゃうって、シリアスになるはずだろうに。

唯一の頼みの綱は他のメンバーだ。うん、オレのことを同情して批判してくれてるはずだ、きつと！

「そうそう。はい、ソラとマミちゃんにお弁当よろ♪ ほむらちゃんと杏子ちゃんがんばって作ってくれていたわ♪」

「あら、お母様だったらいつの間にも仲良くなったのですか？」

「ええ。昔のことを言われて悲しかったけど、自分の償い方をはつきり言ってあげたら、許してくれたわ♪」

オイオイオイ！ あっさりし過ぎじゃないですか皆さんんんツツツ!!

「まどかちゃんと千香ちゃんに写真をあげたけど、杏子ちゃんがお菓子を作ったあげたらなついちゃって、ほむらちゃんには『最初の夫を落とした方法』を話題にしたら食いついて仲良くなったわ♪」

杏子さアアアアん！ 餌付けされちゃったの!?

てか、ほむらの絶対に怪しい！ なんでこの人に父さんを落とした方法を聞いちゃったの!?

嫌な予感がひしひしするんですけど!!

「くっ、これはぜひ教えを乞わなければ……お母様!!」

「ええ。マミちゃんにはとっておきの方法を教えちゃうわ。おっぱい

星人だったソラあのひとの父親と同じ方法で攻めればいちころよ!!」
「本人の前で父さんの性癖を暴露しないで!!」

思い出がぶち殺されそうです。誰かこの人を止めてくれ。
進撃の母上だ……………。

第九十三話 奥様は〇〇少女

(??side)

ソラが進撃の母上の被害に遭ってる頃。

キリトとアオはお城に侵入していた。潜入調査で、どこにアスナがいるのか確認するためだ。

「……ねえ。なんでこの格好なの?」

アオは不服と言った感じでキリトを責め立てる。無理もないなせ、彼ら二人の格好は男性がするものではない――

「なんでメイド服なの!」

真っ白なフリルと黒の服をマッチングさせたミニスカメイド服、そしてロングヘアーにまともあげたサラサラヘアーのカツラである。

二人は女顔に近い中性的な姿なので、確認しない限りはどこからどう見てもスレンダーな女子にしか見えなかった。

「仕方ないだろ。リツカさんのマスターさんのご厚意だぞ」

「ご厚意だからってなんでメイド服なの!? 普通は執事でしょ!」

「オベイロンは騎士団以外に男性はいないらしい。まあ、真性の女たらしだから当然だし」

「だからって着て潜入するの!? 僕の何か失った気がしてならないんだけど!」

「大丈夫。俺なんか幼い頃に、アスナとリーファによつて女装させられて慣れて、失ってるから。慣れてしまえば大丈夫」

「慣れちゃ駄目だろ!! とうか、その二人。なんてことしちゃってるの!」

幼い頃、キリトは二人の少女によつて着せ替え人形にさせられてい

た。おまけに彼の義母も参戦して、過激にセクシーなものも着せられたこともある。

なので、この程度のもので彼は動揺しないのだ。なお、義父ことデウスは義母に着せられた衣装のキリトを見て、苦笑を止めらなかつたそう。

「そんなことよりも、さっさとアスナを捜すぞ。突っ立てると、怪しまれるからな」

「ぐっ……」番おかしいのに言ってることが正しい」

ガツクリ項垂れながら、アオはキリトの後をついていく。とにかくアスナの居場所と、脱出経路を考案する。

それが二人の目的だ。

「目星はついてるのか?」とキリトに聞くと、「まあな」と短く答え、口を閉ざすように指示をした。

何か聞こえるらしい。

キリトとアオが立っている目の前の扉。ここに何やら声やら布が擦りきれる音がする。

『ん、あ……もつと』

「(き、キリト! これって!)」

「(落ち着け。これはあれだ。トマトを料理にしているではない)」

「(なんで料理しているのに、艶やかな声を出してるの!?)」

そんなエロい女料理人がいるだろうか。アオ個人的にはいてほしいと思うのは、男の性である。対してキリトはなぜか死んだ目をしてた。

彼には心当たりがある声と音を聞いたからだ。というか、あの人しかいないと彼は確信している。

「(とにかく突入しよう! こんなところで、えっと、その……)」

「はいはい。お邪魔しまーす」

「ナチュラルに入っちゃうの!?!」

堂々と扉を開けて部屋に入るキリト。そんなキリトの背後からアオはドキドキと胸を高らせていた。いったい中で何が起きているのだろうか。

まあ、男の子だから当然の反応である。
そんな二人の前に現れたのは、

「あん、やっぱり自分で縛るの……いいかも」

………亀甲縛りで興奮する漢女がいた。アオは愕然となり四つん這いになる。

「わかつていた……！ 現実残酷だと!!」

相手が男だとわかれば、彼の絶望は半端ない。しかし唯一キリトだけが、彼女(?)に近づいて思いきり、スリッパでひっぱたく。

「きゃんー」とかわいらしい——いや、女性の声で悲鳴をあげきた。

「ん？」とここでアオも違和感を感じた。なぜ女性の声なんだ？と疑問に思っているとキリトがこめかみを押さえて言い出す。

「……アスナ。その姿で緊縛プレイはやめろ。やる気なくすから」

「いいじゃない。別にー。面白いし、気持ちいいんだもん♪」

今度こそ確信した。この漢女は変身魔法がかかっている。

彼女は光始め、漢女の姿から茶髪の美少女へと変貌する。スレンダーなスタイルだが、童顔で凛とした雰囲気がある。

絹のように流れるロングヘアで華奢な身体だが、見た感じでも女の子としての柔らかさがしつかりとわかる。

そんな少女が緊縛プレイされた状態で現れた。

アオが目丸くして驚愕している中で、キリトは嘆息を吐いた。

「アスナ……なんでお前がここにいるんだ。もつと、こうラスボス的な部屋で囚われの姫なところに閉じ込められてるはずだろ」

「それは平行世界の私の役目だよ。この世界の私の役目は、変態属性だから!!」

「どんな属性だよ！ つーか、メタ発言やめろ！」

キリトの胃が痛み始める。なんでいつもいつもこの幼馴染みは緊縛プレイで登場するのだろうか。

……昔は普通にかわいい女の子だったのに。

「えっと、この人が？」

「はじめまして、キリトくんの妻のアスナⅡユウキです。趣味は緊縛プレイです。縛るのも縛られるのも好きです！」

「そんなの聞いてない……です」

アオも頭を抱え始める。なんで自分はおかしい人とエンカウントしてしまうのだろうか……と現実にはやや絶望気味である。

すると、やっと暗い心から復活したキリトがアスナに質問する。

「アスナってオベイロンに拐われたよな……。なんでこんな普通に暮らしてるんだよ」

「え、これが普通なの？」

「だいたいこの子。こんなふうなんだよ」

「ホントなの!？」

「やだ。照れちゃう」と呟くアスナにキリトは、「褒めてないって」と呆れて呟く。

「まあ、キリトくんの答えを端的に言うと、私って王族じゃない。それを理由に連れて来られたんだけど、オベイロンが私の性癖知って、絶望して軟禁したわけなのよ」

「気の毒に……」

そりゃ、とびつきりの美少女の性癖がこんな緊縛プレイ大好きっ娘と知れば絶望せずにはいられない。

キリトはアスナの縄を切って、彼女の手を引つ張って部屋から出る。

「もう出るぞ。こんなところにいたら健康に悪いし」

「そうね。私もちょうどキリトくんが恋しくて………ジュルリ」

「アオ、俺な……この戦いが終わったらアスナに襲われるんだぜ……?」

(不憫途しか言いようがない……!)

アオもまた何度もなのはに絡まれる哀れな少年である。本来セク

ハラは男性がするものなのに、女性が実行してるのはこれ如何に。それはさておき、アスナが部屋から出ていくと、サイレンが鳴り響く。

「どうやら警備システムが反応したようだ。」

「セコ○か？ セコ○なのか？」

「いや、それよりも早く逃げないと……って！ もう来てますよ!!」

キリトとアオは囲まれ、槍を向けられていた。このままでは確実に捕縛される。

キリトとアオは『神器』を召喚すると、彼らはアスナを見るや否やそれを躊躇し出した。

「？ どうしたんだコイツら」

「なんか顔が真っ青だし、震えてる……？」

兵士達がジリジリと後退していき、アスナはニツコリと微笑みながら、一歩一歩踏みしめる。小動物に迫る野獣のごとく、静かに一歩ずつと。

アスナがガバツと両手をあげると、兵士達が逃げ出した！

「きゃあアアアア！」

「逃げるオオオオオ！ アスナが解放されたぞオオオオオ！」

「変な性癖に目覚めるぞオオオオオ！」

どこぞの妖怪に逃げ惑う人々のように、兵士（女性）達は逃げ出した。キリトはジトリとアスナを見て、

「……何したの？」

「ちよつと趣味で兵士達を襲っちゃったら、目覚めた娘がいて

………テハ☆

「テハ☆じゃねーよ!! 何しちゃってるのお前は！」

なぜか恐怖の魔王的な立場になっていたアスナに、キリトは叱りつける。彼女には反省の色も後悔もないので、意味がないが。

「キリトさん！ なんか来てますよ！」

「あ。あれは対アスナちゃん対策の機械兵だ。キリトくん、頼める？」

「わかってる……わかってますよコンチクショー!!」

キリトは八つ当たり気味に、人の形をした機械兵の群れへ突撃して

いった。

一方、黒幕ことオベイロンは。

「何があった!」

「はい。アスナ姫が逃走しました!」

「また!? またか! 機械兵で押さえつけろ!」

「それがとびつきりの美少女二人が機械兵をスパッスパッ斬って蹴散らしています! おそらく手引きした者かと」

「くっ、こうなったら! こうなったら………。もういいかな?」

「諦めるのですか!?!」

「うん。何か利用価値と美貌に惹かれてたけど、彼女の性癖のせいでもう引いてきた。逃がしていいんじゃないかって思えてきた」

「そうですか……。ならば陛下! 一つお願いがあります!」

「なんだ?」

「機械兵を蹴散らしている美少女達の写真を撮ってきていいですか!!」

ポロリのモノがほしいので!」

「どうでもいいわ!!」

というやり取りがあったとかなかったとか……。

(ソラside)

……いきなり結論から言わせてもらおう。

「はぐれた……」

なんか二人の女性が裏通りから表のストリートへ出ていき、それについていったがいつの間にかはぐれてしまった。というか情報収集はどうしたんだよ……。

「おまけに人の気配がないところだし。さて……どうしたものか

……。

——そう思わないだろ？ え、ストーカーさんよ」

背後から姿を現したのは一人の女性だ。金の髪を結っており、鎧は胸当てと籠手やらで軽装だが、腰に帯刀している剣に威圧感を感じる。

……ずっと着けてきたのがこいつか。

「……あなたが神威ソラですね」

「だとしたらどうする？」

女性が鞘から剣を引き抜く。その剣は透明で姿形を現さない特殊な剣だ。

「手合わせを願いたい……命がけの」

「勘弁しろ」

正直戦いたくない。今のオレが勝てるかどうか……。

まあ逃げられないみたいだし、時間稼ぎのつもりで。

「やるしかない!!」

『神器』を召喚して、金髪の女性の剣とオレの剣がぶつかりあった。

第九十四話 ピンチと秘密

(??side)

衛と幸太は打ち込みをしていた。幸太の武器は長槍だ。先端は十字の形をしており、突くだけでなく、払うことで斬撃を引き起こさせることが可能な得物だ。

それをバトンのように駆使して、相手を接近させず、自身の間合いで倒す。それが幸太のバトルスタイルだ。

衛のバトルスタイルは言うまでもなく拳だ。魔法と拳を使って戦うどこぞのZ戦士と同じバトルスタイルだ。ゆえに、幸太との戦いははっきり言えば不利だ。一般的に言えば、拳で槍に挑むことの勝率は低い。

一般人同士が戦えば軍配は、槍に上がるのは自明の理だ。

「せいっ!!」

それをわかっている幸太は、衛との挑戦を引き受けた。確かに衛はレジェンドクラスを倒した化け物だ。

しかし、拳と言えば限界はある。自分にはスピードと手数があるからパワーファイターである衛と良い勝負ができるはず……と考えていた。

——しかし、彼の考えは甘い

なぜならこの男は常識を、もはや超越した変態ばけものなのだから。

「又ツハアアアア!!」

「ええ!!」

まただ。幸太の五度目の鋭い突きが、両腕の盾によって彼ごと吹き飛ばされた。着地をしたとき、衛は既に踏み込んでおり、拳を放つ準備に入っていた。

幸太は棒高跳の用法で、彼の拳を回避した。幸太は衛から離れた後方へ着地し、『召喚術』で捨てた槍を手にとる。

(ふ、普通……：槍で突かれたら貫通するだろ。なんで弾かれるんだよ……！)

幸太の冷や汗は止まらない。何度も身体に当てているのに、貫くことなく全て肉体で弾かれているのだ。

おまけに反撃に移るスピードも早く、距離をとらないと逆に危ないことが多かった。

「ヌウウウウハアアア……。なかなかやるではないか。その曲芸師のごとく軽やかな動き。我も学ばなければならぬ」

「いやいやいや！ これアンタもできたらマジで不気味だから！」

巨体が軽やかな動きすればそれはもう不気味である。「フシユウウウウ……。」と息を吐き捨てる衛の姿に、幸太はこの超人生物だと内心ツツコんだ。

こんなが敵同士だったとしたら、間違いなく明日はない。

「まだまだゆるげるな？ 逝くぞ!!」

「いや、もう無理ッス！ 逃げたいッス!!」

幸太の目からタパーツと涙が流れていくが、お構い無く衛は駆け出す。そんなとき、はやての「ごはんやでー」と呑気な声が聞こえると、ピタリと彼は制止した。

「ヌウ……まさかここまでか。仕方あるまい。今日はここまでにしよう」

(ホッ……)

「だが、明日も頼むぞ！」

(ぎやアアアア!?)

世の中理不尽だと幸太は今日この頃思う。目をつけられたが最後、模擬戦ごと『衛のドキドキ筋肉対戦』は避けられないようだ。それほど、幸太は強くなると衛自身が思うゆえに、鍛えていたりするのだが。ありがた迷惑な話なのは、本人の知らぬことである。

(うう……なんでこうなるんだ。リツカさんの微笑みがほしい……)

最低なことをした女性だが、彼女の本质はとても良い。過ちを犯し

た罪を償おうと必死になつてその姿に、幸太は心打たれていた。(……でも、なんか怪しい写真を朱美姉妹に渡していたような。どうか赤髪の娘なんて、餌付けされていたし)

ちなみにさやかの場合は「ま、いいんじゃない？ それよりもなんかソラの面白い話ない？」と呑気に話しかけていたりする。……ソラ自身、まさか黒歴史が既に変態達に知られているとはつゆに思うまい。「というか、なんか遅いな……。神威と友江長女は昼には帰るとか言ってたよな」

「ぬ？ 確かに……。そういえばリツカ殿もないし。ヌウ……」

「捜して来ようか？」

「頼むぞ。成功したらぐら褒美に我が筋肉を触れる許可をやるうー！」

「いらねーよ……」

誰が男の筋肉を触れて喜ぶのだろうか。そんなことを思いながら幸太はソラ達を捜しに向かった。

裏通りは既にはいないと考えて、もしかするとリツカと合流して、觀光していたりするのではないか？ と幸太は考える。

友江マミはおっとりしているし、天然のリツカも同じくどこか抜けている。

唯一のまともなソラだが、そんな天然おっとりコンビの勝手な行動力に振り回されるか、またははぐれるのか二択だ。

幸太はまずマミとリツカを見つけようと、足を進めていくと何やら騒がしい。

騒ぎがする方向へ向かうと、これまた綺麗なメイド少女二人とお姫様が走っていた。黒髪のメイドはお姫様を抱き上げており、金髪のメイドは涙目で彼女をついていた。

なんだあれは。と考えていると、彼女達が何から逃げていたのか判明した。

『キラー●シン』みたいなモンスターがストリートお構い無しに、彼女達を追いかけていたのだ。

「ぎゃあアアアア！ なんでキラーがいるの？ 作品違うよね!？」

「知るか！ オベイロンのヤツが購入したんだろ。とにかく逃げろ。」

捕まったら、まず殺されるぞ！」

「大丈夫よキリトくん。あのキラーマシ●は『ジャパニヤット』で通販で購入したものよ。非殺傷タイプだから死にはしないわ!!」

「どのみち危険だろが!!」

……どうやら知り合いじゃないようだ。うん、他人のふりしところ。そう考えた幸太だが、彼が三人を見つけた時点で運命は決まっていた。

キリト達がこちらに向かっていたのだ。

「つてなんでこつちイイイイ!?」

「ぎげんな! 逃げようたつてそうはいかない!」

「道連れだコノヤロー!!」

「テメエら後で覚えてろ!!」

四人はキラールから逃げる。しかし、このままでは体力が先に尽きる。戦わなければ、止まることなさそうだが、如何せんここは人が多い。

ドンパチし始めれば、巻き込まない保障はできない。

「くそっ! なんとかしねーと!」

「どうするんだよ!」

「キリトくん。私に考えがあるわ!」

唯一のまともそうな美少女。アスナが拳手する。全員が彼女に注目する。

彼女が袋から取り出したのは、

「これで相手の動きを」

「無理だろ! どうやっても縄で縛って止まらないだろ!」

平常運転なアスナにキリトはツッコむ。

「大丈夫！ 私の緊縛スキルはレジェンドクラス。縄を持たせれば確実に縛れるわ！」

「縛ったところで引きちぎられるオチしかないんだけど！」

「ついでに快感も与えられて一石二鳥よ！ イエイ☆」

「そんなオプシヨンいらねーよ！ てか、あれモンスターだけど機械！ 快感ないだろが!!」

ここで夫婦漫才するなよ。と幸太は内心呆れていた。そんなとき、前には捜していたマミとリツカがいた。

マミはいつものように微笑みながら、大きな砲撃でキラーに標準を向けていた。

「え、ちよ、まつ」と四人が呟いたときには既に遅し。『テイロ・フィナーレ』がキラーに向けて発射され、爆発した。

吹き飛ばされた四人はちょうどリツカの前へ滑走していき、彼女の前で止まった。

「あら、どうしたの？ 花火でテンション上がっちゃったの？」

「上がってねーよ!!」

キリトのみ意識があり、残りは髪型がアフロになっていた。爆撃で、どこぞのギャグ漫画よろしくの髪型になったのだ。

一方、我らの主人公はと言うと――

「この程度ですか？」

傷だらけになって壁にもたれいた。頭から血を流し、片目は瞑っている。

彼の手には『神器』はなく、彼女の背後に突き刺さっていた。

ソラは痛む身体に耐えながら、立ち上がり、『召喚術』を使って『全てを開く者』を手に取ろうとした。

しかし、光は起きたが『神器』はその手にはなかった。

(やっぱり……かよ)

彼は落胆する。彼の身体は今年になって異変が起きていた。

変化の兆しを感じたのは、なのはが墜落したときだ。あのときはまだピリッと痺れることしかなかったが、今では『召喚術』が五分五分の確率で成功するようになった。

異常な話だ。『神器使い』は、ソラはいつも、息をするように『召喚術』を使うのに、もう確率的な話になっていた。

ソラの落胆には、彼女も失望していた。まさか話に聞いていたよりも、弱くなっているとは思いつかなかった。

「……彼女の話は偽りではないようでした。あなたに何があったのですか？」

「知るか。襲撃者が敵に同情してるんじゃないやねえ」

今度こそソラの『召喚術』を成功させ、『神器』を握る。立ち上がり、駆け出したソラは彼女に斬りかかる。

彼女の剣とソラの剣がぶつかる——が、なんと彼の手から『神器』が離れていく。

弾き飛ばされたのだ。なぜ、彼の握力が弱いのか彼女は疑問に感じるも、すぐに切り替え。ソラの肩から腰までに斬撃を与える。

咄嗟に身を引いたため、浅い切り傷で済んだが、フラフラしていた。もう限界が近いようだ。

ソラの限界に気づいた彼女は、剣を納めて、瀕死の彼に落胆していた。

「……トモエマミの話にはがっかりです。買いかぶり過ぎのようでした」

「トモエマミ……。お前、あのヤローと」

「不本意ながら彼女とは協力関係です。まあ、今回は力試しのつもりであなたに挑戦しましたが……。まさかここまで弱いとは思いません

んでした」

彼女は何に期待していたのかわからないが、彼女自身と同等、またはそれ以上の使い手と戦いたかったのかもしれない。ソラは期待に応えられないとわかれば、もはや用はない。

失礼な話だが、彼女もまた武人。弱い相手と戦うつもりは毛頭ない。

「それでは失礼します。できれば戦場に会いたく、」

刹那、女性の元に弓矢が突き刺さる。一步遅れていれば針ネズミになっただけ。

「……不意打ちとは卑怯ですね」

「うちの旦那を襲つといて卑怯も馬鹿もないよ」

ザツとソラの目の前にまどかが着地する。どうやら彼女が撃った矢のようだ。

まどかはチラリとソラを見て、胸を押さえる。そして弓を握る力を強くしていた。

「……ソラくんが弱い。そう言ったね、あなたは」

いつも優しい目をしている彼女の目が変わる。金色へと変わり、ギリとした視線を向けていた。

「ふざけないで。あなたが彼を弱いと決めつけないで！」

まどかは弓を引き、無数の魔力の矢を飛ばす。彼女は回避し、去る際にソラとまどかに言う。

「わたしはアルト。アルトリアルです。また会いましょう、弓兵の少女」

「二度と来るな」とまどかは人差し指を上げ、ソラは眠るように意識を失った。まどかは急いで、治療を行うのだった。

第九十五話 弱体化

(??side)

神威ソラが倒れた。駆けつけたまどかに背負われ、すぐに治療へ移る。あらかじめ、まどかの応急処置によってある程度傷はふさがっていたが、ソラの衰弱っぷりが異常だった。

ソラの使う魔力は精神と身体のエネルギーを混ぜ合わせた力だ。精製すると、体力と精神力が疲弊する。

ようは運動と勉強を同時に行うと言ってもいい。

ゆえに、ソラが衰弱している理由は魔力を精製し過ぎた、ということである。

「……ソラくん！」

治療が終わると、まどかとほむらは真っ先に部屋に入った。

目を閉じ、ベッドの横になる彼を見て二人は蒼白する。治療していたママは腕を組んで言い出す。

「……もう大丈夫よ。私の力で治療は傷がふさがったわ」

ただ、とママは続けて言う。

「ソラくんの身体……おかしいわ」

ママは治療していたときに感じた。

そう、ソラの傷の治りが遅い。

ママの力は『結んで繋ぐ』。傷の治りは自然回復ではないが、この力を使えば、すぐに傷は治まる。しかし、ソラに行使してみた結果、彼女は驚かせずにはいられない。

普通の人よりも、傷の治療速度が減速していたのだ。

普段のソラは、ママの治療を受ければ、すぐにピンピンするはずだ。これは明らかに彼に異変が起きているに違いない。

ママの疑問に、答えるかのようにほむらは俯きながら、ここにいる（アオとキリトはある人と接触のためいない）全員へある紙を見せる。それはソラが見ていた体力測定用の紙だ。

「これって学校の……？」

「ええ。旅行から帰ってきたとき、テーブルの上にあったわ。仕舞うのを忘れていたのね、きつと」

「これがどうかし——え？」

マミの目がグッと記録用紙に注目する。ソラの握力、シャトルラン、腕立て背筋などなどの彼の力の具合の欄を確認した。

平均よりかなり下。その一言で済む。

中学の彼はこの平均よりも遥かに上回っていた。なのに、高校になつてからここまで低くなるのだろうか。

「こんな……あつさり低くなるものなの？」

「ならないから『異常』よ。最近、鍛練をしていないにしろ、彼はこれまで多くの相手と戦ってきた。だから、そう簡単に力が大暴落するかしら？」

そんなはずはない。長年、戦いから離れてきたのなら話は変わるが、彼が戦いに身においていたのは数年くらい前。ゆえに握力が平均より上か同等になるのが必然である。

「……私たちはこの異変を雷斗さんに相談してみたの。そしたら、雷斗さんは……」

『決められた寿命かも、な』と言って、まどかは雷斗から聞いた話を説明した。

ソラは本来は『踏み台キャラ』という役割だった。身体は丈夫でしつこい仕組みになっている。

しかし、ソラを転生させた下級神は、彼を長生きさせるつもりは毛頭なかった。

名前を忘れた彼
オリ主（笑）に殺される

逆鱗を買い、無惨に死ぬ運命にするつもりだった。彼の力が弱まっているのは、その時期に死なせるつもりだったということだ。

しかし、もうオリ主（笑）はこの世にいないし、何より彼は誰かに

殺されるということはほぼ不可能だ。それを見越して、あの下級神は彼の寿命を短く設定し、弱体化するような身体にしたのだ。

身体の細胞が劣化し、そして衰弱していく。緩やかな死を迎えさせるために、そして全ては自身の愉悦のために。

「雷斗さんはいち早くソラクんの異変に気づいていたよ……。それで女神さんに相談したら、そんな答えが返ってきた……。と言っていたよ」

まどかの目からポタポタと涙が零れ落ちていく。

「……どうして。どうしてなの？ これからがソラクくんは幸せになるはずだったのに！ もう戦うことも、悲しむことも、苦しむこともないはずだったのに！ どうして、最後は絶望が待っているの……!!」
ほむらも悔しそうに、握る拳の力をいれていた。医療でどうにかできる問題ではない。

細胞が劣化し、最後には衰弱死していく。病気ではない。老衰に近い緩やかな死だ。

「隠していたのは、それだったのね……」

マミも千香もなんとなくだが、感じていたかもしれない。自身に対するツツコミがなかったのは、やる気がないのでなく、活力がそれほどなかったということだろう。

衛と鍛錬もとい模擬戦をしなかったのは、負けるのが怖いのでなくて、もう自分がどうやっても勝てないし、何より戦えることが困難だったのだろう。

そして極めつけにアオを呼んだ理由と六道寺に呆気なく倒された理由も、同じだ。

——もう、オレに戦える力はないかもしれない……

——『神器』も使えないかもしれない……

らしくない。と全員が思った。しかし、彼の内心は不甲斐なさや悔しさがあつたはずだ。

誰かに任せる無力さ。そんな非力な自分に嫌悪していたまどかは

彼の気持ちを嫌ほどわかる。

(何もできないって悔しいよね……)

何もできず、ただ見守ることしかできなかった自分。その果てに待っていたのはただの自己満足。彼女の歩んできた前世は、まさにそんなところだ。

(ソラくんは、私のようにならないよね……?)

危惧していたことは、いつか彼が自己を犠牲にして何かを救う。そして誰にも届かないところへ行ってしまうことだ。

彼の前世がほむらと似ているならば、死ぬ運命にある今がまどかと似ている。

(行かせないよ……。そんな自己満足を、自己犠牲を。私が絶対に許さない!)

だからこそ、今度は自分が守る。前世がそうだったように、そのときまで彼を守ることを誓うまどかだった。

一方、キリトとアオはメイド服から着替えて身軽な格好で目的地へ向かっていた。

「どこにいくつもりだ」

「ちよつと、テロリストとな」

「テロリスト!?!」

なぜそんな相手と会いに!?! とアオが驚愕している間に、その目的地にたどり着いた。

場所は人の気配がない小さな喫茶店のようだ。中に入ると日がそろそろ落ちそうな時間帯だからこそ、客足が少ない。

そんな客の中に一人の青年が、カウンター席に座っていた。赤髪で髭を生やしている男で、顔立ちはやや整っている。野武士という格好で、腰に刀を帯刀していた。

その男——クラインはキリトを見ると、笑みを浮かべて、子どものように手を振っていた。

「おおー、キリの字！よく、きたな！」

「久しぶりだなクライン諜報員」

「やめてくれよ。オレなんか諜報員つて柄じゃねえよ」

「確かに。そこそこの情報収集だしな」

「フオローしないのかい」

ビシッとツツコむクラインが、アオに視線を向ける。アオは彼を観察しながら、どういう人物か推測していた。

「気さくでお人好し……。リーダーとしての判断力はまだわからないが、全員に気を配れる周りを見る目がある。」

「クラインという男は、どうも親しみやすい青年のようだ。」

「で、どうだった」

「……予想通りだ。オベイロンのヤロー、こんなこととしてやがった」

クラインが簡易デバイスからウィンドを表示する。画像と文字がかかれた映像をキリトとアオは席に座りながら見ていた。映像に写っていたのは、黒い鎧をした人型の化け物やのっぺらぼうのマリオネットが檻の中にいる。

その檻の中には、黒い大きな化け物が僅かに写っていた。

「なんですかこれ？」

「噂でオベイロンが他国から拉致している少女の話をしていただけ？」

「その噂が本当だったことを証明するものさ」

「まさか……この化け物達は」

アオが絶句し、キリトは頷いた。拉致された少女達の末路は——
「化け物にされていたことだ。魔力がある少女達をオベイロンは化け物にしていたのだ。」

「この化け物がなんなのかわかんねえ。オレのツテの情報屋も、こんな不気味なヤツを隅々まで調べたくないとか言ってる手を引いたぞ」
「確かに無理ないか……。こんな化け物を見ていると俺も、気分が悪い」

キリトは水を飲んでそう呟いた。アオはゴクリツと唾を飲み込ん

だ。

これを見ていると不気味というか、恐怖と深い闇を彼は感じ取った。

哀しい、苦しい、辛い、憎い、羨ましい、恐ろしい。そんな負の感情の集合体を見ている気分だった。

「化け物の名前は？」

「モンスターじゃねえし、何よりこんなもの初めて知るんだ。……けど、一括りされた名称はあったな」

「種族名ってヤツか……。その名前は？」

『『魔女』』

ピクツとアオは反応した。その名称は一人の、いや彼と彼女達の宿敵が関わりを示していた。クラインは続けて言い出す。

「まだ第二発達を終えてない段階の女——まあ、十四、五六歳の女の子達を拉致して、魔女化させている。オレが集められた情報はそこまでだ」

「そんな化け物を集めてどうするつもりなんだ？」

「そんなもん決まっとるやろ。侵略や、侵略！」

一人の男がアオの疑問に答える。その男はイガイガ頭で、つり目な軽装の格好をしていた。胸には妖精の紋章がある辺り、おそらくこの国の騎士だとキリトは身構える。

「思った通りや。こんなところに害虫がおったわ」

「クライン〜？」

「……すまん。オレ、諜報員向いてないわ」

エハツと視線を逸らしながら、舌を出す彼にキリトのエルボーが決まった。ズドンツと決まったエルボーに悶絶するクラインを無視する形で、イガイガ頭の男はキリト達に指をさす。

「覚悟しいや！ この暁部隊副隊長キバオウが、アンタらをお縄にかけるー！」

「松ぼつくり？」

「キバオウや!!」

「覚えたぜウニ頭。俺達は絶対に捕まってやらねーよ。わかつたかうニ山トロ太郎!!」

「キバオウゆーとるやろ!? なんでウニになつてるねん！ わざとやろ！」

「え、わかるの？」

「当たり前やアアアア！ ナメとるじゃないでゴルアアアアア！」

青筋立ててぶちギレるキバオウの後ろから「ホワチャアアアアア！」とダイナミックエントリーするリーファが現れる。「げばぶ!?」と後頭部を蹴られ、踏まれた彼が床に倒れると、彼女は真つ先にキリトに抱きつこうとしてきた。

「おにいちゃん！ どう。スゴいでしょ！」

「リーファ。なんでお前がここに？」

「なんか、そのウニ山トロ太郎に刃物を向けられて、人質にされてたところを天道くんが助けてくれたよ」

「俺の知らないところで事件発生してたのか」

結果的に無事でよかつたので、ホツとするキリトに、キバオウが「うぐぐぐ」と呻きながら立ち上がる。

「き、貴様らあく。ワイらの隊長をどないしたんや！」

「後ろのようになつてます」

リーファが指さすその先には、隊長であるディアベルが衛に担がれている姿だった。

「でい、ディアベルはん！」

「ふん。か弱き少女に刃物を向けるなど、言語道断。この我、直々に成敗してやったわ」

「だから、反対だったんだ……こんな、卑劣な作戦。絶対にやられるつて……………ガクツ」

ボロ雑巾になつたディアベルはブツブツと呟いて、力尽きた。そん

なディアベルを見かねて逃走を図ろうとするキバオウに、リーファの剣線が描かれた。

片手剣で、行われた連続斬りによりキバオウの衣服がズタボロになり、全裸となって倒れた。

「……なんで全裸にしたの？」

「この後、マスターに渡すから」

「マスターって……あの？」

アオが知るマスター。リツカの酒場のマスターのことだ。彼女―

――いや、彼は漢女であり思いつきり男色家である。つまり、ホイ食つちまうような男である。

……もはやアオの心境としては合掌しかない。

「これで生け贄ができてマスターも楽しめるね！」

「心底ゾツとしたよ」

リーファを改めて魔王の娘だと思えた。

「みんなと合流するか」とキリトの言葉に同意して、キバオウ達を引きずりながら、喫茶店から出るのだった。

「てか、リーファ。なんで捕まってたの？」

「お兄ちゃんが助けに来てくれてそのままベッドインしてくれるかと」

「段階いろいろすつ飛ばし過ぎる!!」

リーファがあえて捕まっていた理由が判明したそうなの。

第九十六話 始動

アーツ!! アーツ!!

変な叫び声が隣の部屋から聞こえる悪夢を見ていたオレは、目を覚ました。

なんで男の……その、嫌な声なんだ？ わけがわからないよ。

瞼を開ければ、知らない天井だった。ここはオレが泊まっている宿じゃない。

あれからどれくらい時間がたったのかはわからないが、外は暗闇だ。おそらく夜まで寝ていたのだろう。

「……オレは」

『神器』が使いにくくなっている。魔力の精製も難しくなっている。筋力も体力もだいたい落ちた。もう戦える身体じゃない……だろうな。

「んで、扉の向こうにいるヤツ。いい加減に入ってこい」

魔力的に感じれば、まどかみたいだ。こう、包まれるような暖かさのある魔力の持ち主は彼女しかない。

……淫乱腹黒だけど。

扉から一人の人が入ってきた。

ツインテールで、フリフリのスカートと衣装を着たそんな――

――漢女。筋肉モリモリで体長が二メートルあるそんな金髪おさげの漢女が

「あらあん。目が覚めたのねえん♪」

「……………」

若干吐き気がした。だって、女の子がするような衣装を、某ラオウのような男がクネクネしながら現れたんだぜ？

元気があつたらツツコんでいたわ……。

「だあるえが、見るに耐えない怪物くんですつてエエエエ!? しどい。しどすぎるわあ!!」

「そんなこと言つてない」

というか声だけで突風起こしちゃったよ。危うく飛ばされるところだった。

そもそもこいつ。誰だろ……。

「『乙女の花園』のマスター。みんなのお母さんであり、その裏の顔は麗しきテロリストの総帥——ジャンヌ三世よん!!」

「いろんな意味で聖女とテロリストのイメージがブレイクされたわ」

「ちなみにミランダちゃんとは乞いのライバルだったのよん！」

「……頭が痛くなる話だ」

……前世のオレと関わった聖女——ミランダキリタニ。彼女の祖先は異世界召喚された日本人で、癒しと浄化の力があつたそう
な。

人々から『聖勇教』の聖女として崇拜され、そして魔王デウスと共にどこかへ旅去った。

まあ、キアラから聞いた話だし、どこかで歳をとって生きているの
だろうな……と言った感じで考えていたわけだが、まさかこの目の前
の漢女と関わりがあるとは思わなかった。

「デウスちゃんとよく取り合つたわあん。一緒にクエストしたり、お
風呂入ったり、キスは……ミランダちゃんに阻止されたけど、あの頃
は楽しかったわ」

「まあ、あの聖女が恋人を取ろうとする化け物のキスは許せないだろ
う」

「化け物なんてひどいわ。泣いちゃうわ」

「キモいからやめろ」

「デウスちゃんの言う通り、毒を吐くわねえん……」

苦笑するジャンヌ。毒を吐くのは、師匠譲りというわけだ。

それはさておき、今どういうことが起きてるのか聞くことにした。ジャンヌ曰く、オベイロンの目的は他国の侵略らしい。おまけに『魔女』を量産しているらしく、それを使って生物兵器にして戦うということだ。

「……『魔女』か」

「悪魔ちゃんと同わりがあるってまどかちゃん達が言っていたわ。それでみんなは下で作戦会議をしているわ」

「……なら、オレも参加しなきゃ」

起き上がろうとすると、ジャンヌに首を振られた。

「あなたの身体を『鑑定』で見させてもらったわ」

「レアスキル……?」

「ええ。この力はあらゆる物質の『質』を見極めるスキルよん。簡単に言えば、ステータスや魔法の効果がわかるってことかしらね」

戦いにはもってこいのスキルだ。相手の技や能力値がわかるし、何より状態異常もわかる。

医療の診断には重宝されそうなスキルというわけだ。

「あなたのステータスは総合Sランクの数値を出したわ。けど、『弱体化』という状態異常でステータスがEランクまで下がってるのよ」

ジャンヌは真剣な目で言う。どうやら本当に弱くなったみたいだ。『弱体化』という状態異常に関して聞くと、ステータスの大幅にダウンし、『召喚術』の成功率もダウン。おまけに他の状態異常になりやすいという虚弱体質にするものらしい。

「そもそも『弱体化』という状態異常も初めてみる」とジャンヌは語っていた。

「厳しいこと言うけど、戦える身体じゃないあなたがいても足手まといでしかないわ。前線はおろか、戦場に立つべきじゃないのよ」ジャンヌはそう言って部屋から出る。残されたオレは布団を力一杯叩く。

布団は破れることなく、ポフンとクッションとなるだけで、オレは目から涙を流すしかなかった。

(??side)

ジャンヌが下に降りると、そこにはテーブルに座って作戦会議を行っていた。これからどうするのか話し合っていた。

「とりあえず、ディアベルの話が正しければ今夜辺りで魔女軍団は完成すると見ていい」

「ホンマなんそれ？ そのディアベルっちゆう人が嘘ついてるとかあるんちやうん？」

「大丈夫。ジャンヌの性技で堕ちない男はいない」

「うん。待ってや。とんでもないこと言つとるよねキリトくん」

「俺は体験したことないが、ひがい——体験者は『スゲエ、よかつた……』とか『いや……なのに感じちやう！ ビクビク！』とか『俺は男をやめるぞジョー!!』という感想をいただいています。そして大半が漢女の道を進んでるぜ？」

「被害者が加害者になつとる!?! てか、なんやその感想。どこのエロ同人とイロモノ漫画のセリフや！」

「あらあん。ワタシの寝技(意味深)でそんな感想をいただうちやうななんてうれしいいわ。今夜、ワタシのお部屋に来たらサービスするわよキリトちゃん」

「だが、断る。衛に譲るわ」

「私の旦那(仮)を生け贄に差し出すな!!」

はやてがシャウトしているに対して、衛は「ふむ……ジャンヌ殿はなかなかの強者のようだ。ぜひ、拳で語りたいものだ」と戦闘狂よろしくの発言していた。

会議の内容は、脱線したりまとまったりとカオスな展開となっていた。

キリトのジャンヌ武勇伝(ただし、男との艶話)という話になったり、まどかと千香が話を挟んで『全員で魔法少女となって突撃しようぜ作戦』を持ち込んだり、ほむらが『オベイロン拷問奴隷計画』にしたり、何より衛の『カルデラ国筋肉思想プロジェクト』という話を持

ち込まれてはやては何度もツッコんだ。

彼女が何度、ツッコミ、まとめあげたことか。彼女の苦労はまだまだ終わらないようだ。

「ぜえぜえ……ツッコミで疲れるとは思わなかったわ」

「お疲れ様ですはやてさん。いや、ホントマジでお疲れ様です……」

「うう……アオくんの言葉に苦労が報われるわ。この会議、だんだんと混沌としとるわ」

「ふむ。けしからんヤツだ」

「おのれのことや!!」

遂にはリインフォースツヴァイを『召喚』し、ユニゾンしてから、衛を冷凍させる。氷のオブジェと化した衛だが、すぐにひび割れしてから冷凍状態から解放される。

『なんでこの人は氷状態を自力で破っちゃうのですかあ……』

「人間やめとるねん衛くんは」

「失礼な。この我とて人間であるぞ。宇宙空間で水泳できる人間だぞ」

「『人間のすることじゃないわ(ですう)!!』」

リインとはやてのユニゾンツッコミ。衛の頭にハリセンが叩かれる。効果はいまひとつのようだが、衛は眉間にシワを寄せて「我のどこが悪かったのだ?」と本気で悩んでいた。

……本当にこの人外はいろんな意味で鈍感である。

「とにかく、今夜辺りに侵入して……」

「大変だ!」

幸太が扉を破って全員に言い出す。

「外に、『魔女』が!」

それを聞いた全員の行動は早かった。外から出れば、『召喚術』で神器を喚び、デバイスでセットアップする。

外は悲鳴と断末魔のBGM。幸太が差し入れから帰っているとき、『魔女』がここを襲い始めていたのだ。

キリト達がもし、外で会議を行っていたら未然には防げていたかもしれない。けれど、既に手遅れだ。『魔女』が人々を、民家を、襲い始

めているのだ。

「オベイロンのヤツ……何が目的なんだ！」

「いや、これは……」

「そう、これは彼が望んだことじゃないわ」

キリトの呟きに答えたのは、マミと同じ声の持ち主——『トモエマミ』が街灯に立っていた。

「え、マミさん!？」

「違うわ。あの娘、まどかさんと同じ」

「ええ。使い魔よ♪」

ニコリと微笑む彼女に、全員が警戒心を強めていた。なぜ彼女がここにいるのか、どうして表に出てきたのか、疑問が出てくる。

「クスツ。疑問に思うでしょ。私達の目的は『魔女』の量産化の実験——という建て前でここに絶望を与えにきたのよ」

「なんのため!？」

「悪魔ちゃんが存在し続けるためには負の感情を集めなきゃならないのよ。彼女は概念みたいな存在だからねえ」

パチンツとトモエマミが指を鳴らすと、ゴゴゴゴ!と地鳴りが起きる。

全員、揺れが治まるまで耐えていると、目の前に大きな物体が地下から現れる。

人型の黒いシルエットで、まさしくその姿は黒い巨人。そんな黒い巨人の顔を全員が目丸くした。

驚愕するのも無理もない。ギラギラと光る目をした巨人がつけている仮面が原因だ。なぜなら、その仮面は——

——ブーメランパンツ

「なんでやねん!!」

はやてが吠える。全員が「なぜブーメランパンツを顔に?」と内心ではツツコミたくて仕方がなかった。

トモエマミはこめかみを押さえながら、

「……ごめんなさい。この『魔女』、どうもおかしいのよ」

「これ魔女なの!? こんな変態巨人が!」

変態巨人が『魔女』と受け入れたくなかった。トモエマミもどうしてこんな『魔女』が誕生したのか聞きたいくらいだ。

元の素材が変態だったのは確実だ。性根がおかしかったのは、彼女も知っている。

「やっぱり、BL好きの女の子を『魔女』にしたのは間違いかしら」

「そんな女子を『魔女』にしたのあなた……」

「ええ……自分でもおかしいくらい。頭の中で、『BL好きの女の子を魔女にしたらつおいぜー』と変な声が聞こえて……」

なぜか変態巨人の後ろにあの変態が笑顔でサムアツプしている姿が見えた気がしたアオだ。「やっちゃったぜ☆」と言いそうだなと彼は内心呆れていた。

そんなとき、扉を開けてリツカが酒場から出てきた。マスターに明日の物資に関して聞くために、ノコノコ出てきたのだ。

「マスター、お酒の数はこれでいいのかしら?」

キララとトモエマミが目を見つめて、黒いリボンでリツカを拘束して引き上げた。

人質にされたときリトは内心舌打ちする。これでは迂闊に動けない。

「ほほほ! どう? もうこれであな達は動けな——きや!」

「スゴイ。あなたっていくつ? 若いのに大きいわねー♪」

「ちよっ、いつリボンから……。ってどこ触っているの!」

「パイオツよ。マシユマロみたいでフワフワ♪」

「きやっ、ちよっ、待って! そんなところ摘まわないでエエエエエ

!!

どこを掴まんでいるのかはあえて説明しないが衛以外がやや前屈みになる。キリトはアスナに脛を蹴られて悶絶し、まどかとほむら、シリカは戦胸力の差に愕然としていた。ある意味、彼女を絶望させたというわけだ。

一ノ瀬リツカのフリーダムさに、呆然とする全員。そんな中で窓からソラが吠える。

「何やってんだお前はアアアアア！」

「何って、おっぱいモミモミよ。どう？ ソラも揉んでみる？」

「揉むか！ 敵の胸をナチュラルに揉むなよ！」

「ええー？ こんなかわいい娘をいじらなくていついじるのよ〜」

「いじるなら下にいるヤツらで我慢しろ！」

「オイこらテメー!! 何、アタシ達を生け贄にしてんだよゴルア!!」

杏子がサクリファイブしてきたソラにぶちギレる。リツカはうーんと悩みながら、「仕方ないわね〜」と言ってトモエマミの胸を解放した。

荒い息を吐きながらトモエマミは街灯から着地すると、リツカは彼女から離れた。

「なんなの……私、使い魔よね？ 人間じゃないよね？ なのに、人間である一ノ瀬リツカに拘束を簡単に解かれるわ、力負けするなんてえ……」

プライドを傷つけられ、自尊心が折れていた。どうやら、このトモエマミ。メンタルが豆腐のようだ。

ソラはトモエマミを見下ろしながら、

「ぎっさりと立てよ豆腐マミ」

「豆腐マミ!?! なんなのそのアダ名!?!」

「メンタルが豆腐だから、そう名付けた。てか、お前。マミさんよりメンタル弱いってどんだけ脆いの？ 豆腐なの？ 馬鹿なの？」

「うう……す、好きで豆腐じゃ……うええええん!!」

遂にはガチ泣きする豆腐マミに、同情的な視線を向ける全員。自棄

地面へぶつける震動が魔女に生じて、彼女は力尽きた。

「マッスルに不可能は……んわあい!!」

「暑苦しいわ……」

はやての静なツツコミと共に、アオの『神器』で魔女は元の少女に戻る。気のせいだろうか、白眼を剥いて口から魂が出ているような気がした。

こうして『魔女』とソラ達の防衛戦が始まった。

「キバオウ……ヤらないか？」

「正気に、正気に戻ってディアベルはんんんんツ!!」

「イクぞ!!」

「あ、ちよ、やめ——……」

アーーーーーッ!!

瓦礫でそんなヤバイ展開があつたことを、ソラ達は永遠に知ることはなかった……。

第九十七話 バイバイ

(??side)

「あの女あ……この僕の計画を！」

オベイロンは忌々しそうに、トモエマミがしたこと増悪していた。彼女は『魔女の量産化』の製作方法を伝え、そして彼に魔女を量産させた。

そこから他国へ侵略する手筈だった。しかし、トモエマミは『魔女』達を解放し、城下町を襲撃させた。別に住民がどうなるうが、どうでもいいことだが、もはやここが住めない。自分の住居を破壊されるのはとても腹立たしいことだ。

結果、王城は使い魔だらけで兵士も侍女も殺されてしまった。盾にした彼女達は自分の役に立った。名誉なことだという、最低なこと考えて。

「まあいい。ここから逃げ出し、いつか報復してやる。そしてポロ雑巾にして犯し尽くしてやる……！」

下品に口角をあげて、彼はこっそり隠し扉まで手を伸ばす。すると扉からヌツと太い腕が伸びて掴む。

そのまま扉へ吸い込まれた彼が見たのは、

「あらあん。みーつけた♪」

ジャンヌ三世である。彼女(?)は最初からこの扉のことを把握していた。

「き、貴様は！」

「ちよつとヤンチャしてもらっているテロリストよん♪ まさか王様があるうお方がワタシ達を見捨てようなんてしてたなんて、ジャンヌちゃん。シヨック」

「は、離せ化け物！ ほ、僕を誰だと思っている！」

「亡国の王様でしょおん？ まあ、別にいいわ。あなたを逃がしてあげるん」

ほ、ホントか！とオベイロンは内心ガッツポーズしていた。今すぐこの地獄から逃げ出したい彼は、ジャンヌの提案に乗った。

彼はジャンヌの跡についていき、そして一つの輝く扉までやってきた。見たことがない黄金の扉だ。

「その扉の向こうにはハーレムよん」

「ホントか！ ハーレムなのか!?!」

「ええん。衣食住、悩むことなく永遠のパラダイス。この世の極楽が待っているわん！」

それはいいことだ。そのパラダイスとやら体験し、飽きたら復讐のために動けばいい。アスナ姫の変態性には呆れたが、彼女の夫の前で辱しめを与えてやるのも一興だろう。

オベイロンはその扉の向こうへ飛び込む。そして彼に待っていたのはパラダイスだ――

――おとめ漢女の。筋肉モリモリのオカマ達の世界『ニューカマーワールド』という地獄パラダイスだ。

「な、なんだこれは!?!」

オベイロンは慌てて踵を返すが、ガシツと肩や腕を捕まれる。

「あらあん……いいオノコ」

「どう？ お姉様達とやらない?」

「まあ拒否権はないけどお♪」

「ヒイ！」と扉の向こうにいるジャンヌに助けを求める。しかしジャンヌはクスツと笑って、

「何いつてるのお？ そこは天国よ。あなたが望んだことじゃなあい♪」

「こんなの天国じゃない！ 化け物の園なんて望んでない！」
「ホント、何いつてるかしら。だってあなた……」

——あーんなばけもの魔女達を国に招いといて自分だけ幸せなんて許せるかしら？」

ジャンヌの冷ややかな視線に、やっとオベイロンは理解した。この漢女。元から自分を抹消するためにここへ招いたのだと。

「殺さないだけマシだと思いなさいな。そこは文字通りパラダイスだからかわいがってもらえるわよおん♪」

「ふ、ふぎけるなアアアア！ 僕はノーマルだ！ さっさとたすけ、ふぐつ」

ブチユリツと漢女にキスされ、言葉は遮られた。そしてそのままオベイロンは奥へ奥へと連れて行かれるうちに扉が閉まろうとしていた。

「い、嫌だ！ 僕は逝きたくない！ 僕は王様だ。王様がこんなオカマの世界でエエエエ!!」

そんな断末魔に似た声をあげながら、彼は扉の向こうへ消えた。そしてその扉も光と共に消えていくと、ジャンヌの前に黒いローブを着た男と女が現れる。

「あれでよかったのん？」

「ええ。私の義理とは言え、娘を誘拐した罪にはちようどいいわ。これで息子とゆつくり子作りしてくれるわ」

「元聖女とは思えないくらい残酷な結末だな。確かにあの世界にいた連中は最初はノーマルだったんだろ？」

「そうよん。そしていつしか漢女として目覚めて、漢女道を歩むのよん！」

「ゾツとするな……」

まさしく男として終わる世界だ。ローブの男は嘆息を吐きながら、混沌とする町を見る。

「さてと、参加するか。久方ぶりに我輩の戦友と再会だ」

「援護するわ、あなた」

「キイー！ 見せつけちゃって！ でも、町だけじゃないみたいよん？」

男と女は訝しげにジャンヌの指さす先を見る。そこには驚くべき光景が広がっていた。

「……これは早いとこ終わらせた方がいいな。いくぞ、ミランダ」

「はいー！」

参戦するのは元魔王と元聖女。彼らの戦いはこうして幕があがる。

(ソラside)

追いかける。ただひたすら誘拐犯を追いかける。

トモエマミを追いかけて、たどり着いたのは中央の広場だった。そこへ足を踏み入れると四角の透明の結界が生じて閉じ込められた。

どうやら最初からここでオレ達と戦うつもりらしい。

「さあ、ゲームを始めましょう！」

一ノ瀬リツカを放り投げ、トモエマミのマスケット銃の標準が彼女に向けられる。オレは即座に飛び出し、一ノ瀬リツカの盾になるような形で受け止める。

マスケットの魔弾がオレの肩を貫き、苦痛で顔を歪めると一ノ瀬リツカは心配そうな顔で絶句する。

「平気だ！ とにかくそのまま置いてろ！」

着地したとき、再びマスケットの魔弾が迫る。今度はマミさんの魔弾によって弾かれる。

オレが一ノ瀬リツカを安全なところへ置き、撃ち合うマミさんの援護に向かおうとすると、『魔女』の使い魔達が行く手を阻む。『神器』で切り裂きながら、オレは舌打ちをする。

「邪魔を、するな!!」

『神器』を使った相手をなぎ払うような斬撃で近づかせないようにする。しかし、それでもこの物量の前ではやはり振り払えず、前からどンドン出てくる。はつきり言えばじり貧だ。

一方、マミさんは自分という相手にしながら冷静に、相手の出方を観察していた。

一見撃ち合っているように見えるが、戦いはより高度な銃撃戦になっていた。

トモエマミの魔弾をビリヤードのように自分の魔弾で弾き、その跳弾した魔弾を使って反撃に使う。相手も同じようにしてマミさんの魔弾を弾いていた。

一発間違えれば、必ず致命傷を負う。銃弾という必殺の一撃は掠り傷で済ませるのはほぼ不可能だ。高速の一撃を回避するとなると、直感か高速を見極められる目がない直撃は免れられない。

「これならどうー」

トモエマミの魔弾がマミさんの前に現れる。しかし先程の魔弾に比べればかなりゆっくりだ。

マミさんは瞬時にその構造を理解したのか、その場から距離を出した。

刹那、魔弾が爆発する。やや大きな爆発だ。もし、近くにいたら爆風で身体が吹き飛んでいたかもしれない。

マミさんは険しい目でトモエマミを見ていた。

「……人に使う弾じゃないわ」

「そう？ でも、あと少しでハンバーグにしてあげたのに」

「ミンチになってたまるものですか」

マミさんのマスケット銃が空中に現れる。同じように、トモエマミのマスケット銃も空中に現れる。お互い合図がなるまで、その銃は動くことがなかった。

合図となったのは、オレの『神器』が使い魔の武器とぶつかり合っ
て起きた金属音だった。

ガガガガガガ!!と魔弾同士がぶつかり合い、跳弾していく。ビリヤードのようにぶつかり合い、跳弾していく魔弾を二人は予測し、相手に当たるように魔弾を使って誘導する。

マミさんとトモエマミの魔弾は互いに直撃することなく、マスケット銃が向けられる形で引き分ける。

しかし、ママさんのマスキット銃に黒いリボンが絡まる。地面から生えたものだ。

「トラップ!？」

「あらかじめ、設置しといてよかったわー!」

やはりトラップがあった。ママさんもわかっていたかもしれないが、撃ち合いを引き分けて、油断していたのだろう。

ママさんに魔弾が放たれるとき、トモエママのマスキット銃が『全てを開くもの』によって弾かれた。オレが投擲したのだ。

好機とみたママさんはマスキットの引き金を引き、トモエママの肩を貫いた。

「ぐっー!」

肩を抑えながら、後ろへさがるトモエママ。形勢は逆転。トモエママの勝利はない。

オレはそう確信していた。

「終わりよ……使い魔さん」

「ええ……そうね。終わりよ——あなたが」

ズボツ!!と地面からまた黒いリボンが生える。ママさんを拘束するものではなく、トモエママの姿を覆い隠すような形で。

ママさんはトリガーを引き、黒いリボンもろともトモエママの額も魔弾が貫く。目がいいとつくづく思うが、オレはまだ終わってないと思えた。

オレの思った通り、トモエママの身体が黒いリボンで分解された。分身だ。かつてママさんが自分の身代わりとしてリボンの分身でほむらを欺いたように。

どこだ! どこにいる!?

辺りを見回せば、すぐに見つかった。マスキット銃を誰かに標準にしているトモエママの姿が。

ヤツはママさんやオレを狙っていない。標的は——リツカ。一ノ瀬リツカだ。

足に力が籠る。地を蹴り、駆け出す。

別に一ノ瀬リツカがどうなろうとどうでもいい。あの女が死のうが、いなくなろうがオレは気にしない。

そう思っていた。なのに――

なんで駆け出している？

なんで手を伸ばしている？

なんで「母さん！」って叫んでいる？

わからない。わからないけど、オレはかつて師匠とノエルの死に際を一ノ瀬リツカを重ねていた。

アルス達のような戦友達の死ぬ光景が、一ノ瀬リツカの姿と重なる。

死の瞬間を頭にちらつかせていた。

そして魔弾が発砲される。

肉が貫かれ、血が噴き出す音が響く。そう、それは――

――リツカ、ではなく……

――神威ソラオレ、ではなく……

――一ノ瀬リツカの盾となって庇ったマミさんの身体が生じていた。

「え……」

オレとリツカは絶句する。なんで、どうして、彼女が……。見ず知らずの……。そして、オレのトラウマを植え付けた女性の盾になっっている。

頭が真っ白になる。倒れていくマミさんに使い魔が襲いかかる。彼女を傷つけないように、オレはそいつを一撃で蹴散らして、彼女の身体を支える。

マミさんの身体には大きな穴が空いていた。心臓付近だ。動脈を断ち切られるように貫かれたのだ。

「マミ、さん……。なんで……。なんで!!」

なんで前世の母親を助けた。あなたには関係ないのに、どうして!! それはリツカも同じようだ。「どうして……。どうしてなの!!」と叫んで死にかけの彼女の手を握っていた。

冷たくなっていく彼女は、オレの頬に手を添えて、

「だって……。ソラくんのたった一人の家族、じゃない……」

「家族だなんて、そんな。わたしにはそんな資格が……!」

「私は、資格……。云々よりも、あなたの想いを考えたのよ……」

彼女は言う。

もし、仮に自分がそういうことをしたのなら、許せない。永遠に許せず、後悔して、苦しむ。

生きていくのが辛い人生になるのかもしれない。

死んだ方がマシだと考えるかもしれない。

マミさんはそんな想像をしたと言った。

「それに……。私は、家族を失う気持ちを知っているから……」

そうだ。そうだったじゃないか。

マミさんはかつて両親がいる普通で平凡な女の子だった。

そんなある日、交通事故で家族を失い、惨めにも自分だけ助かって、孤独に生きることになった。

マミさんは孤独に生きることで、辛く苦しい生き方でまぎらわせるしかなかった。

正義の魔法少女は、自分の惨めな姿を覆い隠す仮面でしかなかった。

……彼女は一ノ瀬リツカの悲しみを一番わかっていたのかもしれない。

「……私は、孤独で惨めに生きていくしかなかった。でも、それを否定してくれたのは、ソラくんだったのよ……」

「オレ……?」

「ええ。泣いてもいい、喚いてもいい……辛かったり苦しかったりしたら、吐き出してしまえばいい……。あなたを見ていたらそう思えてきたの……」

その子どもつぼさが……かつてのオレに救われていたのか。

あんなガキのような、絵空事のような理想を掲げていたオレに……。

「ソラくん……家族を怖いってもう思わないで。いつか、あなたにも家族ができる……だから、臆病に……ゴホゴホ!」

「ツ、喋るな! もう……喋らないでくれ」

「ううん……喋るわ。ソラくんが、リツカさんに対して答えを出さない限り……」

答えを求めるママさんにオレは、

「……一ノ瀬リツカは許せない」

「うん……」

「会いたくなかった」

「うん……」

「大嫌いだ……! 大嫌いなのに……! なんで……オレは助けようとしたんだ……」

どうして身体が動いたのだろうか。動いてしまったのだ。

頭が混乱する。胸が苦しい。ママさんはできの悪い弟に教えるかのように、答える。

「それは、まだソラくんが彼女を愛しているからよ……」

「愛って……」

「うん……。陳腐な言葉かもしれない。綺麗事かもしれない……。けど、子どもは親に愛情をもたないことがないの……。産まれたときに抱かれたときに、抱き締めて微笑んでくれる親の愛に、子どもはつい

つい答えちゃうものよ……」

親が子どもを愛するように、子どもも親を愛する。

今世の両親は最初は愛情をもって育てていたかもしれない。

途中から、オレを蔑ろにしながら育てることになったが、かつての愛情がほしくて離れなかったのかもしれない。

その結果、サンドバックにされたが。

……前世の親はそんなことをせずただ愛してくれた。それにオレは答えているのだ。とママさんはそう言っているのだ。

「ふふ……ねえ、ソラくん。私、あなたのお姉ちゃんになれていたかしら……」

ママさんが微笑みながらそう問いかける。オレは声が出せず、頷くしかなかった。

「そう……よかった。私……ソラくんの、神威ソラのお姉ちゃんになって……」

——幸せ……よ、……

ママさんの手が力なく落ちる。リツカは悲鳴をあげて、泣き叫ぶ。友江ママが、息を引き取った……。

「くだらないわ」

トモエママが嘲笑する——友江ママの教えを。

「愛なんて、ホントに陳腐な言葉で済ませるなんてくだらない」

トモエママは侮辱する——友江ママの生きざまを。

「そんな綺麗事はこの世にはないわ。神威ソラは一ノ瀬リツカを憎んでいる。そうでしょ？」

キュツと口を噛み締めて、リツカはトモエママを睨む。

「ホントに馬鹿な女。守る価値もない無力の女なんて見捨てればよ

かったのに——無駄死にね」

友江マミは無駄死にした。一ノ瀬リツカなど守る価値などない。殺しておくべきだ。とトモエマミは言ったのだ。

……ホントに、救いようが……ねえよ。

「……トモエマミ」

「あら、どうしたの？ そんな怖い顔をして。殺すのだったら一ノ瀬リツカにして頂戴。全て彼女が招いたことでしょう？」

「……………」

「なんなら私が手を下してあげようかしら？ お姉ちゃんがあなたの敵をころ」

直後、オレは彼女の顔を思いきり殴り飛ばした。我慢ならなかった。

これ以上、彼女の死を侮辱するこの使い魔が許せなかった！

「改めてわかったよ。『トモエマミ』は『巴マミ』じゃない。『巴マミ』は『友江マミ』——オレの知るマミさんだ。だから、お前のようなクズがお姉ちゃんを語るんじゃない」

苦悶に満ちた顔で立ち上がるトモエマミ。オレはマミさんから、話の最中にいただいた魔力を使って『シンクロ』を使う。

髪は黄色となり、『神器』はマスケット型の銃剣へと変化する。

「後悔しろ。絶望しろ。苦しめ、泣き叫べ——そして、安心してとっと死ね!!」

かつて師匠を失った怒りが、オレの心に満ちていた。

第九十八話 嘆きの英雄

いつだってそうだ。

世の中はこんなことじゃなかっただらけだ。

誰かを見失い、誰かを奪われ、誰かを亡くす。

この世は悲劇と絶望だらけだ。

でも、そんな世界でも幸せがあるんだって……楽しい嬉しいものがあるんだって、彼女達が教えてくれた。

……それでも、この世に悲劇がなくならないように。絶望が目の前にあるかのように、またオレは誰かを奪われ、亡くす。

もう失わないために強くなったのに。

もう奪われないために強くなったのに。

結局、その想いは届かぬまま……。

(??side)

その瞬間、一ノ瀬リツカの視界に髪の色と『神器』を変化させたソラが動き出したのを見た。

怒り狂っている。そんな印象を与えるかのような雄叫びをあげて突撃していく。

トモエマミは我を見失っているソラに嘲笑し、マスケット銃の標準を定める。冷静じゃないソラなど容易いと考えての、侮蔑していた。

マスケットの魔弾がソラに迫る。その魔弾はソラの額に当たる前に、彼は頭を屈めて回避。しかしトモエマミの第二射がすぐさま迫っていた。

それにはさすがの彼も距離をとらずには得られなかった。

バクテンなどの躲す行動を移りながら、ソラは『神器』の標準をトモエマミに定める。発砲された魔弾はトモエマミに当たる――

ことはなく、むしろ距離が伸びず、減速の果てに落下した。

ソラの弱体化はやはり思った以上にひどい。『シンクロ』状態の彼の力が格段と落ちていたようだ。

トモエマミはそれを見て、勝ち誇った笑みを浮かべる。

「やっぱりね。あなた、ホントに弱くなったのね!!」

勝利は完全に我が手にある。それがわかってしまえば、彼女は何も恐れることはない。

いろいろ弱くなっている情報をなぜトモエマミが知っているのか、ソラは疑問に感じ、聞き出す。

すると彼女は、

「あなたを襲撃した女騎士がいたでしょ？ 彼女は悪魔ちゃんの間

——いえ、しもべね。主の意向であなたの監視を命じていたのよ」

魔弾を避ける。ソラの力無き反撃の魔弾がトモエマミが逸れる。

「しかし、彼女。我慢できずにあなたを襲撃しちゃったのよ。まあ、有意義な情報が知れて結果オーライってことになったけど」

トモエマミの魔弾の応酬に、ソラはただ黙々と回避しては全く見当違いなところへ撃っていた。大暴投しているこの少年に笑いが込み上げてくる。

「ほら、捕まえたー!」

トラップである黒いリボンが、ソラの右腕に絡まる。トモエマミは多数のマスケット銃を彼に向けて、

「終わりよ」

とそのままトリガーを引こうとする。そのとき、彼女の額に石が当たる。キツと投擲された向きに睨み付けると一ノ瀬リツカが投げた石だ。

「生意気。さっさと逝けー!」

ソラから標準を外して、リツカに魔弾を浴びせようとした。

そんなとき、ニヤリと笑みを浮かべてソラはただ一言呟く。

「オレから視線を逸らしたな?」

ボツと黄色のリボンがトモエマミの背後から生え、彼女の両腕を縛り上げる。気づいたときには彼女の手は自由が効かないようになって

ていた。

しかし、空中に浮いている多数のマスケツト銃の標準はリツカに定まれたままだ。せめての一矢を、と考えたトモエマミがトリガーを引こうとした刹那、またしてもマスケツトの前方からリボンが伸び、マスケツト銃を束にして無力化させた。

束になったマスケツト銃をそのまま踏み砕いたソラは、トモエマミに背中を見せながらリツカの近くまで歩む。

「くっ、いつなの!?! いつ私と同じことを!」

「ノーコンプレイから」

「……まさか!」

ソラの最初の魔弾。それは力足りずではなく、最初からトラップを埋め込む布石だった。あれも作戦の一部のだ。

神威ソラは弱くなっている。

情報通り、ソラは弱体化していた。しかし、弱体化したと言ってもいつもとは限らない。ムラがある弱体化なのだ。

アルトリアとの戦いはタイミング悪く弱体化したが、今のソラはさぶる調子がいい。いや、友江マミを失った悲しみと怒りがあつたからこそ、調子を取り戻したのだ。

「全てお前を確実にしとめるための演技……。皮肉なもんだな。お前もマミさんと同じように詰めが甘い女だよ」

もつともオレと出会う彼女だが、と付け加えるソラ。

悔しそうに足掻くトモエマミにそう言って、ソラはリツカを立たせる。

「ソラ……わたし」

「あんたのせいじゃねえよ。オレとマミさんの油断の原因だ」

ソラは彼女に背中を見せて言う。

「……マミさんは最期に、オレに教えてくれたんだ。家族つてヤツを。……全く、気づいたときにはいつも手遅れなんだよなオレ」

「ソラ……」

「あんたを許したわけじゃない。絶対に許しはしない。けど、死ぬことも許さない。罪悪感に苦しんで生きていく——それが、あんた

の罪滅ぼしなんだよ」

キユツと唇を噛み締めるリツカに、ソラは少し振り返り、

「……まあ、でも。いつか、オレがいなくなったらもう背負うな」
「え……」

「いなくなった人間に対していつまで想う必要はないんだ。お前の罪は、オレが死ぬことで許されていいんだ」

いつか死ぬ。リツカにとってそれは初耳だ。説明してほしいと口に出そうとしたが、トモエマミが忌々しそうに叫ぶ。

「どうして！ あなたは一ノ瀬が憎いんじゃないの！」
「憎くねえよ。何勘違いしてやがる」

「許せないんじゃないでしょ！ なら、殺したいでしょっ」
「一緒にすんな大ボケ。オレは一ノ瀬リツカを許してはいないけど、

『殺したい』とか『憎い』とか一言も言っても、思っていない」
許しはしない。けど、憎悪や殺意を一ノ瀬リツカに対して想っては

いない。
彼にとつて『一ノ瀬』は悲しい思い出であり、憎むべき対象ではな

かったのだ。
そして彼が死んだとき、その『罪』は許される。リツカには、もう

背負う必要はないと彼は言ったのだ。
呆れるくらい彼は甘い。身内には甘いのだ。とは言え、リツカがソ

ラの心情を理解するのは先の話だが。
「それにオレが今、殺したいほど憎いのは、」

彼はトモエマミに標準を定め、冷めた目付きで、

「お前だけだ、使化魔け物」
砲口から光が生じ、トモエマミは焦燥する。彼が発射するのは、『巴

マミ』の必殺技。絶対に魔女を滅ぼす最高の魔弾。
「そ、そんな……！ 私、ここで……!?!」

トモエマミは遂に抵抗をやめて、自身の運命に悲嘆する。滅びの一
撃が、今まさに、発射されようとしていた。

「ゴフツ……」

「！ チャンス！」

吐血するソラ。それによりリボンの拘束が緩み、トモエマミはリボンを引きちぎって逃走を計かった。

彼女は逃げれることに喜びで、勝ち誇った笑みを、ソラに向けた。

シユバツ!!

「……え？」

リボンがトモエマミを再び拘束した。ソラが放った魔弾は合計四発。つまり四肢を縛るだけの数しか、トモエマミを拘束するリボンはなかったはずだ。

なのに、なぜ五本目のリボンがトモエマミの左足に絡まっているのだろうか？

「……マミさんの放った魔弾。あれ、オレの魔力に共有化シンクしたものだぞ？」

それは友江マミの魔弾の効果を、神威ソラが継続させていたということになる。

気づいたとき、理解したとき、トモエマミの運命は決まった。

『『テイロ・ファイナーレ』!!』

ソラの視界には、超大型魔弾がトモエマミの上半身と重なり、そして彼女の身体が文字通り消えた。

消し飛んだ。上半身が消えて『悲惨な死』を迎えたトモエマミの死骸はそのまま黒い砂となって風に流れた。

「……オレのお姉ちゃんの仇だ。クソが」

『シンクロ』を解除したソラはそのまま崩れ落ちる。その身体をリツカが受け止める。

「しっかりして。ソラ！」

「大丈夫だ……ちよつと安心したから」

「無茶しすぎよ……。あなた、具合が……」

限界だ。リツカから見た彼の身体は危うい気がした。

ソラは昔からムチャを平然としちゃう男の子だ。自身が傷つこうがお構いなしに動こうとする。

昔と変わらないそんな彼に懐かしさと、傷つく彼にリツカは悲しくなった。

そんなとき、

『市民の皆様。市民の皆様。すぐにこの町から避難してください。この町に大量の謎のモンスターが近づいていることです。至急、この町から避難してください！ 繰り返します、』

避難勧告にソラは身体を起き上がらせる。リツカはそれを阻止しようとしたが、手を払い除けられた。

「無茶よ……！」

「無茶もクソもあるか。オレは戦わなきゃならないんだ」
なぜ、どうして。

彼は戦おうとする。身体が傷ついても、精神が摩耗してでも動こうとする。

リツカにはわからない。わかりたくない。どうして無茶をしようとするのか、を。

そんなリツカに、ソラは。

「オレは『無血の死神』って言われた英雄だ。人々に勝利を与えなきゃならないんだ」

立った彼はダルそうな身体とはうって変わって、走り出す。残されたりツカはソラの後ろ姿を見ているしかできなかった。

町にいる使い魔と魔女を全てを討伐したのも束の間、元魔王デウスと元聖女ミランダがキリト達と合流したことで、外から来る驚異に冷や汗を流す。まさか、ここだけでなく外にも……と圧倒的な物量の驚異に彼は戦慄する。

「そんな……外にも」

「もう、駄目だ……おしまいだ」

他の冒険者ことキリトの同僚が絶望し、負け戦の雰囲気となる。デウスもなんとさえいばいいのかわからず、口を閉ざしていた。

(クソツ。士気が最悪だ！)

ここで逃げ出せば、ここにいる人達が難民となる可能性が高い。それは盗賊を増やす要因にもなるし、何より大量の使い魔が他の町へ侵攻しないとは限らない。

戦わなければ、洪水のように彼らの故郷も呑み込まれる。

(誰か！ 誰かいないのか！ この雰囲気を変えてくれる人は！)

キリトの願い。それは徐々に近づく彼の足音によって叶えられる。その男は黒いマントを着て、ラフな服装をしていた。銀髪の青い目がじつと先を見据えていた。

神威ソラ。英雄と呼ばれる男が目の前に現れた。

「ソラ……」

「なんだこの葬式の空気は。葬式の準備でもするつもりかこの連中は」

ギロリと周りの全員がソラを睨み付ける。しかし、彼は大した脅威と見ず、

「腑抜けかここにいるヤツらは。相手にびびって逃げ出す腰抜けしかないのかここには」

「なんだと！」

幸太がソラの胸ぐらを掴みあげる。ここまで言われて彼は、黙ってはいられなかった。

「テメエにわかるのか！ 相手は圧倒的なんだぞ！ あんな数、勝てるわけねえじゃないか!!」

幸太の掴みあげる腕を、ソラは握りしめる。苦痛で呻く幸太にソラは、

「それがどうした？ 大量の使い魔で逃げ腰になるのかお前は」
幸太の腕を払い、彼を地に叩きつける。倒れた幸太にソラは気にせず、続けて言い出す。

「いいか。ここで逃げたらこの世界が終わりだと思え。チャンスがあるとか、反撃の機会があるとか、あまっちよろい考えを持つな。」

——ここは、死ぬか生きるかの戦場。ルール無用の殺し合いの会場だ」

もはやここは戦地だ。誰が死んでもおかしくない。ソラはそう言った。

デウスとその他一部を除いた戦士達が、ソラの言葉にゴクリと唾を飲み込む。

そんなソラにまどかが近づくと。

「ソラくん……マミ、さんは？」

まどかの質問に、ソラは目を瞑って首を振る。絶句して崩れた彼女にほむらが支える。

「……マミさんは一ノ瀬リツカという。二人を頼む」

ソラはそう言っただけで彼女とすれ違い、町から出る。

そして、相對する。目の前には今なお近づく使い魔の軍勢。

誰もが恐怖する黒い波だ。

「一人でやるつもりか？」

「付いてくるなら付いてこい。そう考えていたよ」

「なるほどな。確かに付いてきたな——数人」

キリト、アスナ、リーファ、デウス、クライン。

さやか、杏子、千香。

衛、はやて、に召喚されたヴォルケンリッター達。

「あの、主はやて……。これはいったい？」

「バトルや」

「ホントですか!?! 殺っちゃっていいのですか!?!」

「好きにせいや……はあ」

ワンコのごとく興奮するシグナムに呆れながら、はやては肩を落とす。そんな彼女に「仕方ねーよ……あれはもう病気だ」と一回り小さいヴィータに慰められていた。

「ザツフィーよ。勝負だ！ より相手を筋肉でぶち殺した方が勝ちだ!!」

「いや、俺は筋肉キャラじゃ……」

などと絡まれるザフィーラ。

「相変わらずの二人だな……」

「美少女戦士さやかちゃんの出番だよ！」

「微笑少女（笑）」

「よし、千香。後で校舎裏に來い」

といつもの三人。

「よもや『無血の』と共闘とはな」

「あれ？ ていうか、これある意味世紀のコラボじゃね？」

「性器のコラボだなんて……。キリトくん」

「お父さんとソラさんを掛け合わせるなんて！」

「かけてねーよ変態共！」

「大丈夫かこれ……」

と、変態に振り回されるキリトに呆れるクライン。

そんな彼らと彼女達の前に立つソラ。

「……さあ、始めるか——最後の戦いを！」

全員が頷くと同時に使い魔達が一齐に飛びかかる。戦士達はそれぞれに別れて、対応していく。

——舞台は草原

——泣いても笑っても、カルデラの命運が定まる最後の戦いが始まる

第九十九話 再現された伝説

(??side)

一ノ瀬リツカは友江マミの亡骸を背負い、まどかとほむらと合流した。

まどかはワンワン泣き始め、ほむらは悔しそうに静かに泣いた。

リツカはそんな彼女達を見て、ふとカルデラの外まで続く空を見つめる。星空は曇天で囲まれ、月が薄く輝く空。

戦っている元我が子に、彼女は勝利を祈る——

様々な形をした使い魔が攻め込むカルデラ城下町外。基本シルエツトはヌイグルミだが、元来のかわいらしさを残したまま凶悪な牙や爪、翼を生やして攻め込んできていた。

六道寺幸太は戦うことを拒んだ。それにより後援へまわって、いつでも逃げれるように町の入り口にいた。

他の冒険者も同じだ。彼らもあの物量の脅威には、さすがに『死』を感じた。

ソラ達が挑もうとしていることは無謀だ。蛮勇だ。勝てるはずのない戦いに挑む愚か者だと内心、嘲笑した。

加えて、初対面からしてソラは大したことない男と幸太は思っていた。あの程度で組しかれる男が、物量の波に呑み込まれて死ぬのも一興だと考えていた。

しかし、まさか同僚であるキリトやクラインまで参加するとは思わなかった。さすがの彼らでもこれは勝てない。逃げてくると予想していた——

——しかし、そんな予想は『甘い』

——ヌルイ考えだと思いき知らされること起きた

キリトとクライン。二人だけでなく、その他の戦士達も奮闘していた。まだ誰一人傷ついていない無傷。

それを際立たせている存在が、使い魔軍団の塊へと斬り込む。

一振りで、周りの使い魔を吹き飛ばす。

二振りで周りの使い魔を空へ飛ばす。

飛ばされた使い魔達は光る斬り傷を残し、消滅していく。キリトとクラインの場合だと、身体に流れる液体を飛び散らせるがソラは一切傷という傷を残さない。

綺麗な殺戮だ。そして使い魔は殺されているが、誰も傷つかずに敵を蹴散らしている。

『無双』。まさにソラの独壇場がここにあった。

ふと幸太は、キリトの言葉を思い出す。

『アイツは親父が認めるほどの英雄なんだよ。返り血を全く浴びないって親父は言っていた』

キリトの義父は魔王だ。そんな男に認められるなど胡散臭い話はずだった。しかし、証明するかのようにそれが目の前で起きていた。

キリトやクライン、さやかや杏子。それぞれが返り血で汚れていく中で、ソラは返り血を全く浴びてない。

自分の身体が傷つくことも、敵の身体が傷けることもなく、血を一滴も危ない英雄——そんな話を昔聞いたことがある。

それに答えたのは、避難に尽力してやっと合流したアオだった。

『無血の、死神』……なのか？ 僕達のかなり前の世代に存在した英

雄だったのか……彼は」

アオにとつて『無血の死神』は畏怖する対象であり、強さの理想だった。彼の『神器』のように多くの敵を倒すそんな強さを求めていた。彼のような力がある人であれば、どれだけ救えただろうかと無力な自分に悔やむ日々があつた。

呆然とする冒険者達の上空に鳥の使い魔が攻めてきた。上空からの特攻。刺々しいクチバシで彼らを串刺しにするのが、目的だ。

幸太は覚悟を決めて、武器を構える。

「『ロツソ・ファンタズマ』!!」

アオも構え始めたそのとき、鳥の使い魔の頭上に影が生まれる。

驚くことにその正体はソラだ。しかし、一人ではない。複数の彼が上空から鳥の使い魔を串刺しにしていたのだ。

「な、なんでアイツが!? てか、さつきまであそこで蹴散らしていただろ!」

「今現在も蹴散らしているんだけど……」

「ハアツ!」

あり得ないことだらけだ。ソラの髪の色はいつの間にか銀髪から赤髪に変わっており、『神器』の形も剣から矛に様変わりしていた。

ソラだけでなく杏子も、彼と髪の色を交換したかのように銀髪へと変わっていた。

いったい何が起きている。と幸太の頭が混乱しているとき、凜とした声が冒険者達の背後から聞こえた。

「説明しよう。『シンクロ』って言うソラくんの魔法さ。『コ団結せよ』で繋がつたラインから魔力を供給し、その魔力と同調する。まあ、彼し
かできない裏技さ」

「キアラさんー!」

キアラだけでなく、なのはとフェイトを含めた管理局の軍隊もいる。バリアアンジャケツト B Jの姿で、上空にいる使い魔達を砲撃で蹴散らしていた。

「たれ込みでこの次元世界に使い魔がいると聞き付けてやって来たが……。まさか、こいつも表だって攻めてくるとはな」

「じゃあ、今まで裏でも」

「ああ。被害は少ないもののちよこまかとミッドに現れていたのだよ」

キアラの話によると使い魔が現れ始めたのは、ソラが中学生一年。記憶を取り戻し、寿命が短いと知ったときの頃からだ。

その被害は少ないと言っても犠牲者が出ており必ず命を奪われていた。とある執務官を目指す青年とそれに追われていた犯罪者もまた使い魔に殺される事件が始まりだった。

いずれにせよ。使い魔がこのように表に出て攻めてくることはなかった。しかし、本日をもってその均衡は破られた。

なんのためなのかキアラ達にはわからないが、なんにせよ。彼女達はカルデラ城下町を守るためにここへ訪れたのだ。

「質問いいですか」

「何かね。古宮囑託管理局員」

「彼……神威ソラは『無血の死神』——過去に魔族との戦場に勝利をもたらした英雄なのですか」

アオの問いに、キアラは頷いて答える。

神威ソラはやはり英雄だった。彼の求めるの強さだった。

尊敬の眼差しを向ける冒険者一同に、

「……キミ達が何に憧れているかは知らないが。仮にあれが人だったとしたら？ 人であっても彼はあのように殺戮する死神なのだよ。はっきり言えば、何もかも救う『正義の味方』じゃない。敵を滅ぼす^{殺戮者}英雄なのだよ」

とキアラは否定するかのようない方をする。しかし、そうであっても彼らは神威ソラの戦う光景を目に入れてしまう。

彼の行いはひどい。

彼の殺戮はひどい。

そして、使い魔が蹂躪されるその光景は美しいのだろうか。見惚れてしまうだろうか。

かつて自分達が憧れる悪を滅ぼしていくその姿を、彼らの目に焼き

付いていく。

キアラは冒険者一同に対して呆れながらも、「やれやれ……まあ仕方あるまい。何せ過去の再現と言ってもいいのだからな」

とキアラは呟いてソラの動きを観察する。一見、支障がないに見えるがところどころにムラがある。

現役時代だけでなく、闇の書事件から比べると動きがやや鈍いように見える。

(……たれ込み者の言う通りか。ソラの動きが些か不安定だ)

なぜたれ込み者がソラのことを知っていたのか疑問に残るが、今は彼の負担を少なくさせるのが先決。キアラは手を叩いて冒険者達を注目させる。

「さて、キミ達にミッションを与える。今の彼はどうも前の仕事の影響か些か疲労で鈍くなっている。よってこのままでは彼が倒れるのも時間の問題だ」

キアラの言葉に誰もが耳に入れる。聞き逃す者はなく、誰もが彼女の言葉に耳を傾ける。

「そこでこのミッションだ。」

——— どうだ？ 過去の英雄と共に戦ってみたいかね？」

このとき冒険者達が『逃げ』から『攻め』へと変わった。

さやかな魔力を取り入れたソラは二本のサーベルを駆使して、使い魔達を切り裂く。二本ともサーベル化した『全てを開く者』であり、切り裂かれた使い魔から血は出てこなかった。

「はあはあ……くそっ」

終わらない物量。溢れんばかりに出てくる敵。

数より質と言うが圧倒的な数の前では質も関係ない。特に防衛戦において、物量攻めは溢れ出る水道管の大量の穴を全て防げと言うことだ。

無理だ。元々、ソラは防衛より侵攻が得意の方だ。何かを守る戦いは不向きなのだ。

今もこうしているのは、敵の目を引き付ける囮役だ。

彼のいつもの防衛セオリーなのだ。

(体力的にもキツイ……ッ。やっぱり、弱くなってるなあ……)

前世の自分ならば、この程度は苦もなく動けたが今の彼は弱体化している。魔力も体力も以前と比べれば、確実に衰えているのだ。

「ソラー・上ッ」

ハッと見上げられると、そこには鳥の使い魔がこちらに向かって降下していた。

『ロツソ・ファンタズマ』の分身で串刺しにしたヤツと同じ使い魔だ。

ソラを貫こうと、急降下して向かっていた。

彼は舌打ちしながら、来る矛に構える。そんなとき、掛け声を出しながら金髪のオッドアイの少年が使い魔を切り裂いた。

古宮アオ。囑託管理局員であり、ソラと同種の神器使いだ。

「アオか……。いや、それだけじゃねえな」

ソラの呟き通り、彼の後ろから雄叫びに近い掛け声で使い魔達に突貫していく冒険者達が現れる。空からも、魔導師の集団がなのはやフェイト、はやてを筆頭に使い魔を滅ぼしていた。

「どうだい？ 随分な数の助太刀だろ？」

キアラが操作した岩を使い魔に落としていきながら、彼の隣に立つ。フツとソラは笑みを込み上げていた。

なつかしい。こんなふうに、仲間と共に戦う光景がなんともなつかしい。

前世の戦争。嫌なことだらけで救いようのないものだったが、それでも戦友と共に笑い、泣いて、そして戦った。

それは彼にとって良いにしろ、悪いにしろ、忘れられない思い出だ。

「ソラ。感傷に浸っている場合ではなさそうだぞ」

キアラが指さすのは上空から降下していく生物だ。先程の鳥ではない。かなり大きなサイズだ。

鱗を持ち、大きな翼を広げて、獣のような牙を生やすおとぎ話や伝説上にしかいないと呼ばれていた生き物。

『魔女』がドラゴンかよ!!」

種の最上位クラスの生物がこの地へ降り立った。ドラゴンをよく見ると目はなく、口しかない白銀の鎧をそのまま身に纏った姿だ。

銀竜であるが、爪は同じ白銀ではなく黒い煙を出し、口から黒い泥を常時垂れ流す『魔女』。邪悪で醜い存在だ。

「ここまで汚されたドラゴンは見たことないね……」

千香がそう言いながらソラの右隣へ現れる。キアラもまた同じことを考えているのか、やや冷たい視線を向けていた。

「ドラゴン退治? なら、我を混ぜろ!」

ズドオンツと空から降り立つ衛。

「やれやれ……まさか久しぶりの龍退治か」

「あれ!? 俺もツスか!」

と疲れた顔をしたキリトと、なぜか巻き込まれた幸太。

六人の戦士と『魔女』。にらみ合う（一人を除く）両者の戦いが今、

まさに始まる――

第百話 中途半端どけどエピローグ的な続き

(??side)

魔女退治は三十分の死闘の末。討伐された。

この魔女はどうやら使い魔から進化したらしい。とキアラは語る。このようなことは滅多に起こることはないのだが、運悪く起きてしまったらしい。

なんにせよ。無事討伐され、カルデラに平和が訪れた。

キリト達はそれぞれの故郷に帰り、ジャンヌ三世は謎の世界である悪党に裁きを与えるために旅立った。どんな世界か聞いてみると『おとめ漢女の秘密』と称してウインクされた。

その際に飛ばされそうになったソラ達で、そして聞いちゃいけないような気がした。

六道寺幸太はソラに対してひどいことをしたのを謝り、どこかへ旅立った。なお、彼がその後、謎の秘宝で『再現される身体』という不死身になったり、龍神族と呼ばれる者達が住む世界を訪れて、嫁さんゲットだぜをしたのは、ソラ達は知らない(笑)。

失った者を弔う——友江マミの葬式が海鳴で行われた。

友人身内達による葬儀が行われ、友江マミの亡骸はソラ達の前で火葬され、遺骨となった彼女を海鳴に埋めるらしい。

二ヶ月後に墓標は立てられ、そして週に一回。ソラは友江マミの墓を訪れている。

彼女は寂しがり屋だ。孤独に弱いソラにとって姉と呼べる人だ。だから、そうして彼と一緒にいてあげようとしているのだろう。

「……………」

無言のまま彼は右にある杖を見る。

ソラの身体はボロボロだった。無茶な行動したその報いが返ってきたと言葉からすれば単純だが、もう普通の握力もだんだんと怪しくなってきた。

このように杖を使って墓を訪れるように、徐々に歩くことも難しくなっていた。このまま続いていけば、いつか車イスで移動することになるだろう。

「マミさん……オレ。高校卒業したらミッドに行くよ。そこではやてが二年後に構成される部隊の雇われ参謀官として働くことになったんだ。……建て前だけど」

作戦を考える役目は初めてじゃない。部隊長として斬り込んだことがあるからこそ、はやてのスカウトを受けた。

「この世界がおかしくなってきたているんだ。だんだんと。緩やかにおかしくなってきたんだ」

例えば生田ミカ。

例えば闇の書。

例えば『名前を忘れた男』。

それに全て関わっていたのが悪魔——叛逆の力を持つ少女の仕業だ。

『魔女』は本来ならソラ達がいた世界の災厄だ。この世界に現れるのはおかしい。

これまで通り『魔女』となった者は、元が普通の少女らしい。普通に討伐できるが、それでは彼女達は助からない。

そこで出番となったのがソラとアオの『神器』だ。この二つの『神器』は魔女化を解錠できる。

ソラは戦えないかもしれないが、彼の『シンクロ』を使えば、まだ達はソラと同じ力が使えるようになるのだ。

「だから、ここにあまり帰ってこれないかもしれない……そのことを最初に謝っておくよ。でも、いつかこれが終わったら……」

そのときは、一緒にそっちに逝くよ。とソラはそう言っただけを返して帰った。残された墓標に風が吹き、飾られた花が揺れていた。

「あら？ 私……」

「♪」

「ッ!? あなたは……!」

「。」

「……なんのために。私を？」

「。」

「……つまり好きにしろ、と？」

「!」

「……相変わらずわからない人よね。でも、まあ。しばらく裏方にしようかしら。うん。裏に生きるダンディなお姉ちゃんつてカツコイイものね♪」

——時は進み。二年後、機動六課が設立された。

ソラの最後のお話を……始めようか。

閑話 実はこんなことがありました（笑）

（ソラ 中学一年の頃）

ミッドチルダ。全ての次元世界を監視する組織の総本山——
管理局本部がある。そんな世界に、執務官という夢を志す青年がいた。

その青年の名前はデューダ。デューダ・ランスターである。普通で平凡の成績だが、銃撃戦において彼は平均より上回っていた。

そんな彼は今現在、ある犯罪者を追っていた。その犯罪者——
グレゴリオ・エスパードは強盗、恐喝、および殺人を犯した重犯罪人である。彼を捕まえるためにデューダは袋小路まで追い込み、拳銃型のデバイスを突きつけていた。

「ここまでだ！」

「ケツ。しつけない!!」

デューダのデバイス『タスラム』は彼に標準を定めている。もはや、彼に逃げ道はない。

捕まる一歩手前。デューダが足を踏み込んだとき、粘液を踏んだような感触を感じた。

黒いドロドロしたモノが靴に引っ付いていた。その上

、壁から地面から現れる。

「な、なんだこりゃ!？」

犯罪人の男にドロドロしたモノがまとわりつき、そして彼の身体を呑み込んだ。

その物体からプツと吐き出された。デューダはそれを見て目を見張る。

——白骨化した腕だ。あの黒いスライムが呑み込んだのだ

察知したデューダは靴を脱ぎ捨て、黒い物体に背を向ける。黒い物体はデューダのことを諦めていないのか、ゆっくりと追いかけてい

る。

(移動速度が亀みたいだな。でも、これなら逃げ切れる)

人の気配がない路地裏の袋小路から逃げ出したデューダ。そしてその出口と言える通りが見えた。光が射し込むその光景は楽園の扉と言ったものだ。

しかし、予想外のことが起きた。ドロドロした黒い物体が壁のように現れたのだ。先回りされていたのだ。

デューダはブレーキをかけて、踵を返して逃走する。

「くそっ。なんだってんだよこれ!!」

わけのわからないものに追われ、心身ともに疲労がたまる一方。彼は秘密の広場らしきものに足を踏み込む。

息を吐き出し、落ち着こうとした中、グレゴリゴらしき男が黒い物から出てきた。右腕は切断されたかのように消失しており、白骨化した部分が見えている。

何より、彼の口元は人とは思えないくらい割れており、牙が無数に生えていた。

「ば、化け物かよー」

デューダはスフィアを展開して四方八方から撃ち抜く泥人形のように崩れていくグレゴリゴを見届け、彼は『タスラム』を下ろす。これで終わり。そう思った刹那、腹部に何かが通り抜ける感覚を感じた。

「がふ……」

黒い物体の触手が槍のように、デューダの身体を貫いたのだ。触手が抜き取られ、そこから血が溢れ出す。失血のあまり彼は意識が朦朧としていきながら倒れ込む。

(俺、死ぬのかな……)

デューダ・ランスター。彼は黒い物体に取り込まれ、タスラムが握られた利き腕を残してこの世から消えた。

デューダ・ランスターの葬儀が行われ、墓標の前にティアナ・ランスターは立っていた。

兄さんは犯罪人を逃し、殉死したと現場調査ではそう下された。その犯罪者がどこで何をしているかはわからない。

それよりも彼女は深く傷ついていた。兄であるデューダの失態を、彼の上司は心にもないことを言ったのだ。

『犯罪者を逃すなど管理局の風上におけん。無駄な死で余計な手間を増やしてくれた』

肉親を失い傷心した彼女がいるにも関わらずそう言った。ティアナが食って掛かろうとしたとき、筋肉モリモリな男の子がその上司をぶん殴ってくれたことで溜飲は下がるが、それでも彼女の兄。彼の誇りを傷つけられたことには変わりはない。

「兄さん……わたし。なるよ。平凡なわたしでも、きつと執務官に……!!」

「うむ！ その意気やよし!!」

後ろから野太い声が聞こえ、振り返ると彼女はギョツとした。上司を殴り飛ばした男の子だ。

歳は自分より三歳上で金髪の少年だ。

「貴様の兄を侮辱した愚か者は不当な発言により時機に、辞職になるそう。そのことを伝えにきたが、よもや兄に宣言していようとはな。なんとも美しい兄弟愛よ」

「あの……わたし、弟じゃ」

「ぬ？ では姉妹か。デューダは女の心を持つ男だったのか？」

「どう解釈したらそうなるのよ！ わたしの兄は心も身体も男よ！」

現に修道女がイロイロされてる絵本がベッドのしたから発掘されているわけであり、そんなことはないはず……とティアナは内心呟く。

……哀れデューダ。妹にトップシークレットを発掘されていた。これを知られるようなものなら、おそらく立ち直れないと思う。

「まあよい。このような下らないやり取りよりも、貴様に一つ聞きたい」

衛の言葉に、ティアナは騒がしかった周囲が静まった気がした。彼が今から言うことは聞き逃していけない気がしたのだ。

「ティアナ・ランスターよ……」

「は、はい……!」

重く、そして真剣な顔で彼は彼女に聞いた――

「貴様は筋肉をどう考えている?」

「なんで筋肉!?!」

どうでもいいことを聞かれ、先程の雰囲気がぶち壊された。さすがシリアスブレイカーである。

真面目な空気をコメディに変えてしまった。

「何、貴様がディーダ・ランスターの死の真相を知りたければ我が部隊にきてもらおうと考えての言葉だ」

「それを言おうよ!?! 筋肉だけじゃ、ただ筋肉を求める変態じゃない!」

「たわけ! 強くなるためには、筋力は必須。何事において筋力は我らの力の源である。ゆえに筋肉を求めるのは当たり前前の真理なり!!」

「正論っぽいけど、納得できない!」

認めたくないことだつてある。衛の筋肉信仰もとい、マッスルパワーが強さの源というのは納得したくない。

納得したら、その時点で自分の将来がボディビルダーになつてしまふ気がするのだ。

「ぬうう……なぜオナゴ達はわかつてくれないのだ。このままでは我の部隊は将来的に男だらけの筋肉部隊になつてしまふ!」

「さすがにそこに勧誘されても行く気は起きませんよ? というか女の子は筋肉を気にする方ですから。身体つきを意識する生き物だから」

「そうなのか? ふつくらとした女性とて、我は気にせぬが……。は

やてが太つていても我は大好きだと言つてやったのに、やっと怒られた理由がわかつたぞ！」

（あ、だから頬に紅葉があるんだ）

平手打ちされた理由を理解したティアナと衛。彼女はそんな彼の鈍さというかデリカシーのなさに呆れて嘆息を吐いた。

「なんかちよつと肩から力が抜けましたよ」

「む？　そうか。ならばそれは良いことだ」

「……どうしてですか？」

「簡単な話だ。貴様はどうも気を張りすぎる機雷がある。それは真面目で正しいあり方だが、そんなこと続けていけばいずれパンクし、壊れていく」

自転車とていつまでも使えない。空気を入れたり、タイヤを修理しなければいずればガラクタの仲間入りになる。

どこかで彼女は気を抜いて、リラックスするような時が必要だと衛は言ったのだ。

「貴様がもし兄の仇討ちをしたければ止めはせぬ。されど殺すな。それをすれば貴様は仇と同じ殺人鬼となり、畜生へと成り下がる」

「……」

「殺しはしないと考えてるか。しかし人とは先がわからぬ生き物だ。いつ、どこで、貴様の憎悪が爆発し、周りを巻き込むという可能性は必ずしもないとは限らない。人が感情を持つ限り、それは避けられぬことなのだ」

衛はそう言つて踵を返して背中を向ける。

「もし、貴様が心身共に力を、強さを、求めるならば我。いや、八神はやてが六年後創設する組織に來い。そこに貴様が求める答えと目標があるはずだ」

歩き去る衛の背中をティアナはずつと見ていた。その背中では先程よりも大きく広く見えた。

「……天道衛、か」

墓標に向き直り、ティアナは目を瞑り、未来を想像する。

——彼を含む隊長達と共に歩む部隊。その背中達を追いかける自分とその同僚達。

——遙か遠く。されどいつかたどり着ける目標。

そんな未来を想像するのだった。

「まーもーるーくーん？」

「ぬ。どうしたはやてよ。そのような不機嫌な面持ちで」

「さっきの子と何を話とったん？」

「勧誘」

「女の子を誘ったら、あかんって言うてるやろ！ アンタが誘った女の子全員が筋肉フェチのボディビルダーに転職しとるからな！」

小部隊の隊長。天道衛が勧誘した八割が筋肉信者になっているそうだ。

《おまけ（笑） その一》

スバル・ナカジマ。彼女は空港の火災に巻き込まれていた。

まだ小さな彼女は臆病で、自分に自信がない大人しい少女だ。誰か助けに来てくれると思っただけか、火の海に囲まれたところにとどまっていた。

「ひつく……ぐすん。おとーさん……おねーちゃん」

とそのとき。天井が瓦解し、火に包まれた瓦礫が落下してきた。このままでは自分は下敷きになる。そんな運命を想像し、悲鳴をあげる。

そんな彼女に希望の光が射し込む。ピンクの一筋の光が瓦礫を滅ぼし、光を出した主がスバルを小脇に抱える。

「スバルちゃんだね。うん、そうだね。そうに違いないよね」

「えっと、そう……です」

「よし言質とった！ さっさとここから抜け出そう。なんか熱いし、汗がベタつくし!!」

(ええー……)

自分よりもなんか熱いのが嫌という理由に、スバルは額に三本の縦線が浮かぶ。

しかし彼女の言うとおりには変わりない。スバルを抱えた少女は、そのまま杖からピンクの光線を撃ち出す。

火が飛行している彼女達を遮ろうとすると、少女はスバルを庇うように抱き込み突っ込む。

そのまま突き抜けたなのは高笑いしながら、言い出す。

「オラオラオラなの！ この程度の火なんて雷斗くんの電撃比べたら痛くも痒くもない！」

なのはが普通ではないとスバルはそう思った。火の中に突っ込んでも火傷を負わずに髪の毛がちよこつと焼けた程度で済ませるこの人はもう人外だ。

(最初はかっこよかったのになあ……)

原作の彼女の将来がやや揺れる出来事だった。

閑話 雷斗くんの前世 前半

(??side)

「そういえば雷斗くんの前世ってあんまり聞いてなかったよね」

唐突に呟く今年十七歳の少女、高町なのはは雷斗試作品のクツキーを含みながら呟く。

ここにいるメンバーはアリサ、すずか、フェイト、はやて、まどか、さやか、ほむらのメンバーである。

杏子とソラは海へフィッシングしに行ってる上に他のメンバーもそれぞれ用事のためいない。そのため、実質女子会のような構成になったのだ。

「雷斗くんの前世かあ……。神威くんの師匠ってだけでノエルさんに関して全く知らないよね」

「せやね。まあ、元からあんまり自分のことを話したがるうしない人やし」

秘密の多い男にすずかは嘆息を吐く。彼女と雷斗は（既成事実の）婚約関係である。後、一年すれば結婚する予定らしい。

そして士郎さんから店の名前を引き継いでどこかに『翠屋二号店』を建築するらしい。

ちなみに候補にミッドタウンも含まれているため、次元世界を越えることも辞さないらしい。

「でも気にすることじゃないかしら。彼、後ろめたいこととかしてなさそうだし」

「ノーなのアリサちゃん！ 秘密の多い男ほど、女の影が多いの！もしかしたら元カノがいるかもしれないじゃん！ 前にお父さんが知らない女の人と出会っていたもん！」

『しーろーさん？』

『ご、誤解だ！ 私は桃子ひとすじ——にぎやアアアアア！』

「……ねえ、厨房から土郎さんの悲鳴が聞こえたのだけど？」

「良いBGMだよ。最近、男の人のスクリーンが楽しいんだ♪」

「まさに外道じゃない……」

手で顔を覆い、呆れるアリサ。彼女の被害によく遭うアオに哀れとしか言いようがない。

「元カノいるのかな……」

「そらおるやろ。あんなイケメンやし。仮に前世がイケメンやなくても一人や二人くらいおつてもおかしくないで」

「うー……気になるー」

「なんなら聞かせてやろーか？」

注文したケーキを持ってきた雷斗が女子会メンバーに言った。

「休憩なの？」

「まーな。今、客足ねー時間帯だし。何よりこれから桃子さんが旦那を袋叩きするらしいから休憩していいだよ」

「うん。とりあえず土郎さん御愁傷様」

袋叩きされる土郎さんに南無。と合掌するメンバーに雷斗は「やれやれ」と呟いて席につく。

一緒にトレイに載せていたコーヒーをそれぞれに置いてから座る。

「んじや、何から話そうか」

「えっと、じゃあ。ノエルさんの馴れ初め……かな」

「それを聞くのかフェイト。まあいい。お前らも絶対に驚くことは確実だし」

？と頭にマークを載せる女子メンバーに気にせず続けて雷斗は、かって前世の自分を話し始める。

少年は忌み子だった。

その地域には『神器』という力があまり知られていない田舎の村だった。

得体の知れない少年の力に誰もが恐怖し、近づこうとしなかった。少年には親はいない。幼い頃にいたという記憶はあるが、ある日を境に捨てられたらしい。

少年の生活はサバイバルだった。野うさぎ、野イノシシなどや木の実を食べて暮らす。服は汚いのはもちろん肌がとても汚れていた。

それもあつてか、子どもは少年を汚物と馬鹿にしてくる。まあ、少年にとってはどうでもいい存在だったから気にはしなかった。

少年の世界は色がないものだった。

自分はなんのために生きているのか。

どうしてここにいるのか。

自分にとって『自分』はなんなのか。

わからないことだらけで、少年の視界はいつしか世界から色素が抜けたものになっていた。

少年はいつしか考えることもやめようとした———そんなある日だ。

一人の少女が話しかけてきた。「ねえ、キミ。何をしているの?」と。少年は「何も……」と答えると、少女は「ふーん」と言つて隣に座つてきた。

わけのわからない少女だ。自分になぜ近づいてきたのか。

大人と子どもの中には、少年に憂き晴らしとして暴力が振るわれようとしたことがあつた。少年は抵抗として自身の力を見せつけてやると、股を濡らして逃げていった。

その影響があつて余計に誰も近づかなくなったようだが、この少女はなぜか自分に近づいてきた。

自分のことを聞いていない子どもなのだろうか。もしかすると余所者かもしれない。

「……俺に近づくな」

「どうして?」

「俺が忌み子だから」

「どうして忌み子なの?」

「……こんな力があるからさ」

手に電気を流す。バチチチと帯電したそれを見た少女はギョツとして目を丸くした。これを見た子どもは誰も近づくことがなくなった。

だからこの少女も……と少年は思っている。

「ふおおお! スゴい。スゴーい!!」

「……………」

目を輝かせて肩を揺すってくる。……このとき彼は失敗した。彼女の好奇心——新しいものに向ける探求心——は恐怖など意味をなさないことを。

とまあ、これがライトとノエルの出会い。始まりは一人の少女の好奇心からだった——

少年ライトは成長し、大人に近づいた年齢になった。背は高くなり、顔立ちは整って、見るからに女受けしやすい容姿をしていた。

そんな彼の変化は身体だけではなかった。周囲の様子だ。前は彼の力に怯え、忌避していたがある少女が原因で気軽に話しかけてくるようになった。

彼女——ノエル——が彼と遊ぶようになり、連れ回していくうちに彼に対する恐れがなくなったのだ。ノエルの態度はまあ、年下の弟を可愛がるお姉ちゃんぶりたいお子様なわけで、ライトの生意気な態度をいつも優しく叱っていた。

……そんなライトの今の日常は嘆息の毎日である。それもあ

女が原因で止まらない。

その少女はライトがイノシシを背負って、村へ帰ってきたときやってきた。

「ライトツツ」

「見えた！」

スカツ。ドシャー！

ノエルがヘッドスライディングして目を潤ませながらライトを睨む。

「なんで避けるの!?! お姉ちゃん系美少女の抱擁は受け止めるものでしょー！」

「服が汚れるだろーが。汚れて洗濯するのはいつも俺だろーが」

「……エヘ♪」

「おいコラ。そのテヘペロして誤魔化すなゴルア」

下着を洗わされることもあったし、ノエルは家事をあまり手伝わない。畑仕事で忙しいのはもちろんなのだが、何より無頓着なのだ。

(……っーか、コイツ。年々胸が大きくなってるねーか?)

「ライトからイヤらしい視線! これは……お乳? きゃー、パイパイ星人よ。パイパイ星人がいるよー!」

「誤解を招くこと言うな! つーか、女の子が下品なこと言うな!」

「ならおっぱいでどうよー!!」

「ストレート過ぎるわ!」

美少女となったノエルなのだが、中身は活発でなんか残念だ。しかし、その元気で周りの大人や子ども達を活気にさせていたりする。

彼と彼女のやり取りは相変わらずで、もはや夫婦漫才と言ってもよかった。

そんな、なんとも微笑ましい光景はいつまでも続くと思っていた。

ある日のことだ。

「旅に出ようと思うんだ」

「え、なんで?」

お昼頃にサンドイッチを方張っていたノエルの手が止まる。

「なんかここにきた旅人がいたじゃん。その人の話を聞く限り俺みた

いなヤツらがチラホラいるみたいなんだ」

「ライトみたいなのが？」

「まあな。んで、そいつらに会ってみたいって思ったんだ。この力がなんなのか、なんのためにあるのか」

チラツとノエルの顔を窺うと少し暗い。ライトがいなくなる。いつも一緒にいて、姉と弟のようで、悪友のような彼がいなくなる。

そう思うと胸がチクチクして切なくなるノエルだが、すぐに切り換えて。

「そつか。なら、祝福しなきゃ。ライトが目指すべき、ううん。キミが望むモノが見えてきたことを、ね♪」

ノエルは元気に笑って言った。

ライトもまた彼女の泣きそうな笑顔が少し心苦しかった。彼女に引き止めてほしい気持ちがあつたが、ライトにとってこの力を知りたいという気持ちが勝っていた。

そしてライトが村を出るとき、ノエルは彼を見送ろうと村の出入口に待っていた。

「またここに来てよね！ 必ず帰ってきてよね！」

「はいはい。だから落ち着けて……」

「むう……お姉ちゃんに対する態度がひどーい」

「お前は姉というより妹だろ」

「なんだとー！ 生意気な弟にはこうだー！」

「うわっ。離せ！」

顔を抱き締めて髪をめちやくちやにするノエル。ライトは嫌そうな行動をしながらもどこか嬉しそうな表情をしていた。

「ノエル……もしさ。また会えたら」

「んー？ どしたの？ ボソボソと」

「いや……なんでもねーよ。これやるから」

彼は花柄のヘアピンを渡した。御守りだと言って彼女に「じゃあな」と手を振る。

この想いはまたいつか会えたら。ライトは胸に閉じ込めて、ノエルから離れる。

ノエルに手を大きく振られながら見送られ、彼は前へ進む。

(……じゃあな初恋。もし、再会しても独り身だったらそのときは……)

フツと笑って彼はノエルと歩む未来を夢想する。そんな普通の未来もいいなと思いつながら、森の中を歩む。

——そう、彼はノエルを普通の幸せにさせるならば連れていくべきだった

——彼女の残酷な未来を知ることなく、彼は別れてしまった

物語はこうして悲劇で災厄へと変化する——

「という感じで後半に続く」

「後半!？」

と言いつながらポットのコーヒーを入れ換えに彼は立ち上がるのだった。

閑話 雷斗くんの前世 後半

「とまあ、そんな前半だ」

「というか、そんな幼少期を送っていたのねアンタ」

「ま、別に親がいようがいまいが、ある程度成長したら生きてはいけるってことさ。こちとら、生きるのに必死だったしな」

「あれ？ ノエルさんがあんな感じになったのはどうしてなのかな。聞いた感じじゃ、再会してゴールインか。幼馴染みが他の男と結ばれていましたって感じのパターンだけど」

「後者はあり得た未来かもしれないが、感じのアイツは鈍感系主人公の女性バージョンみたいなものだよ。好意を向けられてもそれは友情しかわかんねーみたいだったし」

「そうなんだ」

雷斗はコーヒーを入れ直して再び座る。すると今度は桃子がカウスターから出てきた。

「ふー、スッキリしたわー♪」

「桃子さん。頬に赤いのが」

「あらやだ。ケチャップがこんなところに」

(ケチャップってあんなに液体化してたっけ?)

人はそれを返り血という。ナチュラルにスルーするメンバーはもはや異常なのだが、なのはがこうなって以降、バイオレンスなことがバッチコイになってしまった。

そんな桃子がなのは達が恋ばなをしていると勘違いしたのか座り込む。

「ねーねー。誰の話かしら？ 誰の恋ばなのかしら？」

「雷斗くんのラブストーリー」

「ちげーよ。俺の前世の話だったの」

「あらあら。雷斗くんの恋ばなのねー♪」

「ちげーって言ってるだろ」

「それよりもノエルさんがあんなった理由はなんでなのかまだわから

ないんだけど」

「すずかの問いにうつかり忘れていた雷斗は改めて考え込む。腕を組んで唸っていると、何かを思い出したのか手をポンツと叩く。

「奴隷として売られたからかな？」

「予想外に重い内容!？」

「いやそれしかねーもん。アイツ、お前らが思った以上に女性の尊厳踏みにじられて世界を憎むくらいに歪みきってるから」

「そう聞くとノエルさんがそのせいで狂ったようにしか思えないね」

「狂ってるよアイツは。まあ、今のように変態行為を積極的にやるよくなヤツじゃなかったけど」

雷斗はしみじみに思い出しながら続きを話し始める。

ノエルの村が盗賊によって滅ぼされたのを聞いたのは彼が、『神器』の力をマスターした後だった。

帰郷した故郷は廃村となっており、焼けた家々が被害がどれほどだったのか嫌でも理解できた。

肝心のノエルはどうなったのか不明。死んだのかはたまたまた奴隷として売られたかの二択しかない。

雷斗は彼女の遺体——または彼女の行方を捜しに旅を出た。長き旅、様々な人と出会いと別れ、時には『変人』と呼ばれる錬金術師と出会ってコンビを組んだこともあった。

まあ、その人物とは『新しい未知』に心引かれたため別れ、また一人で旅することとなる。

そんなときだ。ある噂が酒場で流れていた。

『混沌をもたらす女』が現れた」

「今度の被害者はどこかの貴族だ」

「色欲まみれの貴族だったが、あんな無惨に殺されるなんて」

「この間の大盗賊団も無惨に殺されていたな」

「いや、その前の遠い貴族領地がゾンビだらけの地になっていたぞ」

「ここに現れるのかねー。くわばらくわばら」

と呟く声に耳を傾ける雷斗は、その女の特徴を聞いて目を丸くする。

女はエメラルドヘアの髪をまとめたロング。

花柄のヘアピンをしている。

間違いないノエルだ。彼女は生きていた。……凶悪犯罪者として。

彼女をそうさせてしまったのはなんなのかはだいたい予想できる。

ノエルは奴隷として売られて、ひどい目にあっていた。

その末に彼女は狂ったのだろう。

雷斗はそう考え、カップにあるコーヒーを飲み干した。そしてカウンターから出てきた女性に話しかける。

『混沌の女』の情報を売ってくれ」

「はい♪」

茶髪の女性は情報屋だ。そう、名前は『モモコタカマーチ』という——

「ちよい待ちい！　なんか聞いたことある名前やで！」

「んだよ。今から鮮烈なものが始まるときに。っーか、桃子さんじゃねーぞ。『モモコタカマーチ』だ。既婚者だ」

「ぐ、偶然だよね？　お母さんとおんなじ名前なのは偶然だよね」

「当たり前だろ高町なのは。ちなみに夫の名前は『シローウタカマーチ』だ」

「絶対高町夫妻やん！　名前からしても、容姿からしても高町夫妻やんか！」

「知るか。いいから続けるぞ」

「ね、ねえ。お母さんじゃないよね？」

「あらあら。当たり前じゃない。昔の雷斗くんの言ってる『モモコ』」

さんは私じゃないわー♪」

「そ、そうだよね！　そうだよきつとー！」

「ええ。それにしても金髪の子が雷斗くんだったのねー♪」

「……俺が金髪だったのなぜ知ってるんだアンタ」

「乙女の秘密？」

朗らかに微笑む桃子に雷斗は気にしないことにした。秘密のある女は綺麗になるものだと思いで誤魔化すことにした。

さて、話を続けよう。情報屋から買った情報を元に、ノエルが現れる場所へ彼は向かった。

ノエルに会うことだけがライトの願いだ。もう一度会って、彼女とやり直したい。

あの頃のような関係に戻りたい。そんな小さく儂い願いで、彼はノエルと再会を果たした。

そう、再会した——現在進行形で、首だけの貴族らしき男の頭を掴みあげた姿で。

「やあ、ライト♪　久しぶりかな」

ライトに血に染まった笑顔を向ける。それはなんとも歪で不快感を与える笑みだ。

常人がこの場にいたら間違いなく吐いていた現場がほこにはあった。

魚のように目玉が飛び出し、腕や足は原型がないほど歪んでいる。近衛兵らしい男達もまた肋骨をそのままえぐりだされたかのように、身体に大きな穴を開けていたり、骨が剥き出しのまま驚愕したまま亡くなった者もいた。

「スゴいでしょ？　これはみーんなみーんなワタシがしたんだよ？」

キャハハハと笑うノエルに、ライトは絶句とはいかないものの呆然としていた。

彼女は狂った。ライトの予想通り狂っていた。

しかし、こうも猟奇的になるほど歪んでいたとは思わなかった。彼

女にとって殺された貴族は、彼女を奴隷とした男ではなかったはずだ。

その男は既にノエルの手で殺されていた。にも関わらず、ノエルの快樂殺人は止まっていなかった。

より一層ひどくなっている。

常軌を逸している彼女にライトは絶句するしかなかった。

「なぜそいつらを殺った？」

「なんか正義のためーだとか言っていきなり襲いかかってきたんだよ。馬鹿だよねー。今の今まで人を殺してきても捕まらなかった人間を、捕まえるとかほざくなんてー♪」

ノエルは首を捨てるとそれは空間の渦によって潰された。ライトはノエルから離れ、距離をとってからジャックナイフを構えた。

「あれれ？ どうしたのー？ そんな険しい顔をして」

「……お前。復讐を果たしてなお、人を殺していたのか？」

「まあねー。復讐はちゃんと果たした。報いを受けさせた」

「けれど、」と続けるノエル。

「ワタシは何も満たされていない。むしろ渴いて渴いて、より一層何かを求めている自分がある」

それを満たすために彼女は殺人鬼になった。そうすれば何かわかるかもしれない。

復讐することを得た殺人の愉しさが自分を満たすものではないかと考えたのだ。

「でもやっぱりどんなに殺しても、ワタシは満たされなかった」

「だろうな……。お前の殺しには目的や理由がねーから」

「目的？ 理由？ そんなもの必要なの？」

「当たり前だろ。殺人なんて、常人からしたら猟奇だが、同属からしたら息をするようなものだ」

生き甲斐を得たい。

生きてる意味を実感したい。

そんな理由で殺人鬼になる人間達と戦ってきたことがある。ゆえにライトは、ノエルの快樂殺人は不完全な成り立ちになっていると理

解していた。

「お前は不完全以前の快樂殺人鬼だよ。快樂のために人を殺すんじゃない、答えを知りたいから人を殺すんだ。渴いたものを満たすために、何が必要か知りたいから、近くにあった手段をとったに過ぎない」
ライトの言葉にノエルはジツと彼を見据えて、黙り込む。一理あると思つたのだろう。彼女の渴いたものを満たすために、殺人という手段をとったに過ぎない。

別にこの世全ての人間に対して、復讐したいわけでない。幸せそうに生きている人間に腹立たしかつたことがあつたが、それでも殺したいという気持ちはなかつた。

無差別に人を殺していたのは、自身が何を求めていたのか知りたいからだ。それさえ解ればそんな手段はもう必要ない。

「ノエル。お前はいつたい何を求めている。それが解れば俺は協力してやる」

「……おかしなことを言うね。ワタシはもう、身体も心もドロドロに汚れている女だよ。そんな危ない女と一緒にいようと考えるなんて」
「関係ねーよ。こちとらそんな女とコンビを組んでいた時期あつたつての」

ああ、そうか。ノエルはこのとき理解した。

自身が求めていたものは何か……。

ライトだ。ライトのことをいつも考えていた。

盗賊達に弄ばれ、奴隷として売られ、そして欲望の捌け口にされ続けてなおも生きようと考えていたのは彼を想っていたから。

擦りきれた心と壊れた身体であつても、彼のことを考えていたから生きようと思えたのだ。

ノエルは初めて自分が求めていたものを理解した。そしてその渴きを満たすためには。

「あは……あははははははははははは!!」

「……………」

狂った笑い声をあげれば、ライトはノエルを警戒する。先ほどは静かで落ち着いていた雰囲気だったが、今は再会したときと同じような

目をしていた。暗く濁った瞳をライトを写したノエルは、チャクラムを取りだす。

「そうだ。そうじゃないか！　ワタシはライトを求めていた。キミを求めていた！　だから欲しい。その身体も、心も、命の何もかも!!」
ノエルの狂喜に、ライトの冷や汗は止まらない。周囲が歪み始め、そしてグニャグニャしていた。ノエルが何をしたのかライトはわからないが、おそらくこの空間は遮断されたと考えた。

「さあ、愛こゝろしてあげるよお……ライトお!!」

狂気に染まった狂喜。

狂喜に満ちた凶器。

凶器を向ける狂気。

化け物ノエルと少年ライトの悲劇が始まる――

「という感じで終了」

「ええ!?　ここで!?!」

びっくり仰天。すずかはどこぞの打ち切りエンドのような終わり方に納得できずにいた。それはすずかだけでなく、他の女子も同じ心境だ。

「続きは！　続きは!?!」

「ねーよ。少年ライトの物語はこれでしめーだ。つーか、今から忙しくなる時間帯だからここここまでだったの」

「そんなあ!」

「横暴だ!」

「このロリコ「死ね高町なのは」いだだだだだだ!　調子のとってすみませんでしたあ!!」

なのはにアイアンクローをしている雷斗を見ながら、「でも、」とすずかは思う。

（『少年ライト』のお話は終わったってことは、『何かのライト』がそこから始まったってこと?）

すずかの推測は、答えのないまま時間は過ぎていく。

一方、アイアンクローしながら雷斗はあのを思い出していた。

ライトとノエルの戦いはワンサイドゲームだった。

唐突の巨大な岩の落石。

偽ノエル達集団リンチ。

そして仕舞いには、生きながら心臓を引き抜かれることとなった。心臓をえぐりだされてなおも生きていられたのは、『神器』による活性化とコンビを組んでいた少女の霊薬で身体が修復されたからだ。

それでもなお、死にたいだったライトは遂に膝についた。

「へえ、まだ生きているんだ。すごいよ、ライト。やっぱりライトはスゴい！」

「……うっせー。この怪物。ノータイムで質量攻撃してくるとか反則だろ」

「あつは☆ それがワタシだからさ！」

ノエルが再び接近。ライトはノエルのチャクラムを避ける余力はもはやなかった。なので、

ズシャ!!

身体で受け止める。深く突き刺さったチャクラムを逃がさないようにしっかりと掴む。ノエルはハツと気づいたときにはライトは既に行動していた。

「……そんな殺したいなら、殺られてやる。ただし」

バチチチチチチ!!と身体から溢れんばかりの電撃を出しながら、

「テメエも死ぬ。一緒に死んでやるから終われ!!」

自爆覚悟の大放電。身体が焼け、ビリビリと痙攣するレベルの電流が両者に流れた。

放電が終わるとライトの身体は一部炭化していた。崩れ落ちて、朦朧とする意識の中でノエルを見ていた。

彼女は立っていた。しかし、ライトのように炭化はなく、衣服が焼けて白い肌が露になっただけだった。

「スゴくビリビリしたー……。自爆覚悟でやるとは思わなかったなー」

どう足掻いても届かなかった。ノエルには勝てるはずがなかった。

ライトは悔しそうに力なく歯を噛み締め、そして残念そうに視線を向けて目を閉じる。

(……やっぱり、ノエルにはかなわないなあ)

ライトの意識はそこで途切れた。そしてノエルはそんな彼の身体を揺すっていた。

「ライト。立ってよ」

「……………」

「いつものように立ってよ。そしたらまた殺り合おうよ」

「……………」

「ライト。このままだと死ぬよ。いいの？ 死んじやうだよ？」

「……………」

ライトは答えない。答えないライトにノエルの眼から雫が零れ落ちる。

「あれ……なん、で？」

涙などもう出ないはずだ。もう自分にはそんな人間らしく泣けるはずがなかったはずだ。

なのに、どうして、こんなにも——クルシイノダ？

「あ、そっか……」

やっと思い出した。ノエルがライトに何を求めていたのか。

殺し合いじゃない。

そんな物騒なやり取り取りなんて最初から求めていなかった。

ただ、ずっと側にいてほしかっただけだった。

「ワタシって……ホント馬鹿」

思い出したときには、ライトは傷つき事切れようとしていた。もう、自分が彼の側にいる資格なんてないじゃないか。

「ライト。ごめんね……せめて。せめてその身体をもとに戻してあげ

るから。だから……」

—— さよなら

そう呟いたときノエルの姿はなく、そしてライトの身体は彼女と再会したときと変わらぬ姿となっていた。

目を開けたライトはなぜかノエルの最後の言葉だけ耳に聞こえていた。

彼女はこれからどうしていくのか。そしてどうなっていくつもりなのか、わからない。

彼は起き上がり、呟いた。

「……逃がすかよ。テメエみたいな傍迷惑な女を野放しにできるかよ」

ライトの旅は続く。その果てに彼女と再び出会えたのかどうかは既にわかりきっていることだが、そのとき彼が彼女をどうやって説得したのかは彼と彼女の秘密である。

—— 少年ライトの話は終わり、『閃光のライト』の話が始まった

小話 やりたい放題シリーズ

(エリオとの出会い)

彼、エリオは人間不信のクローンである。とある資産家の息子の代わりとして生かされたと知り、その後施設に入れられたためか、来るもの全てを追い返していた。

そんなエリオに困り果てた管理局を見かねて『ある意味最終兵器』と『危ない人』を彼と会わせた。

……いやもはや嫌がらせじゃねーかと思えるくらいの人選である。いくらその二人が問題解決率80%と言えど、その後起きるのは二次災害という名の『変態ハザード』である。

『筋肉こそ至高!!』やら『パンツ はかない』などと犯罪者に宣言されるという災害である。刑務所で仕事をする看守の皆さんは胃薬常備しなければならなくなるほど、刑務所は混沌としていた。

変態化した犯罪者達が仮に脱獄したときは、死傷はおそらくない。しかし、頭が痛くなるような事態が周囲に起きるのは現実である。

とある女性曰く、『大体変態あいつらが悪い』と愚痴っていたとか何とか。まあ、それはさておきエリオくんの話を戻そう。

エリオはやはりこれから来る管理局員に対して警戒心を露にしていた。

来るなら来い。電撃をお見舞いしてやる。

エリオは目の前の扉が開かれたとき、

「ヌウウウウハアアアア!!」

後ろから壁を破壊して男が現れる。筋骨隆々の中学生——なのだ

ろうか？ 身長は175センチを越えている。彼は壁による砂埃を払い落とし、首を鳴らしていた。

そんな男から受ける眼光に、エリオは尻餅をついてしまった。

「貴様がエリオ・モンディアルだな？ 我が名は天道衛！ 次元管理局地上本部なり！」

「ヌウハアアアア……」と二酸化炭素を吐き出す衛にエリオは戦意を損失した。

ガタガタブルブルと震え、涙を流しながら首を振る。

自分でも壊すことができなかった壁を拳で破壊された。それはつまり、衛の拳は直撃したら壁のようになると考えたからだ。

「ぬ？ 何をそんなに怯えているのだ」

「一分前のダイナミックエントリーを思い出して」

扉から現れたのは将来美女になること間違いなしの金髪美少女、フェイトである。もし、彼女とエリオが最初に出会っていれば、人間不信のエリオを宥めて始まるハートフル展開が始まっていただろうが、残念ながらそんなドラマはもう始まらない。

始まったのはマッスル男による脅迫的O☆H A☆N A☆S H Iである。

「エリオ・モンディアルくんだね。はじめまして。私はフェイト・T・テスタロッサです。君とお話がしたくてここに来たんだよ」

「あ、あああの。あの人はなんなんですか!?! 壁をぶつ壊しましたよ!?!」

「大丈夫。いつものことだから」

「いつもですか!?!」

大規模なテロが起きそうなときにはそれはもう、問答無用に壁から突撃。施設の破壊。そして備品を投擲兵器にして、修繕費がかかるわ、かかるわ。

壁など施設による修繕費が衛の給料から引かれているが、それを差し引いても莫大な資金が懐に入っている。賄賂はない。むしろしてきたら、彼によるO☆H A☆N A☆S H Iが始まる。

それほど犯罪者を取っ捕まえているのだ。

「エリオくん。君はどうしたい？　ここから出たい？　それともいたい？」

「えっと……」

「答えるがよい。貴様の望みを我が叶えてやろう！」

「ひう……！」

「衛。黙ってて。というか、外に出て」

「解せぬ」と言って衛は部屋から出ないものの、口を閉ざした。フェイトは怯えるエリオを抱き締めて、再び聞いた。

「ここから出たいよね」

「えっと、出たい……です」

「うん。わかるよ。こんな鳥籠みたいなところいたくないよね」

「でも僕は……その」

「知ってる。偽物だった……ってことだよ。私もその偽物だよ」

エリオはフェイトに対して驚愕した。まさか目の前に自分と同じ境遇の人がいるとは思わなかったのだ。

「私がかつて偽物だったんだよ。それでお母さんに拒絶されて絶望したことがあったんだ。お母さんはフェイトにせものじゃなくて、死んじやった本物の娘を求めていたんだ」

「そんな……」

「でもね。私は悲しくないよ。たとえば、心も身体も偽物だとしても、『私』フェイトを本物と認めてくれる人達がいる」

目を伏せば、浮かぶのは友と家族。彼女達が認めてくれるから自分は『本物』であると認めることができる。

身も心も偽物であれど、この『魂』は本物だ。もし、違う出会いをしていれば今なお、苦しんでいる彼が言いそうな気がする。

「たとえば、周りが認めなくとも、私があるを『エリオ・モンディアル』と認めてあげる。だから、」

——ここから出ようよ

フェイトの言葉に、エリオは涙ぐみながら頷く。自身が偽物だと

知ったとき絶望した。絶望して不貞腐った。

「だけど、もしかすると。彼女と一緒にいれば何かが変わるかもしれない。」

自分を認めてくれたかのように、彼女といたら。

そう思っていたとき、大きな影が二人を包み込む。

「うむ……なかなかのハートフル展開だったぞ。我は感動した！」

嫌な予感がした。二人は腕を広げた衛から距離をとろうとしたが、衛の抱擁から逃れられなかった。

「うおおお！ これから二人仲良く暮らせよオオオオオ！ 我は貴様

らの幸せを願うウウウウウ！」

「ぎにやアアアアア!!」

涙を流しながらエリオを抱擁した衛にフェイトは「うわあ……」と引いていた。

衛の『マッスルホールド』という技だ。彼自身、攻撃するつもりはないが、堅い筋肉による抱擁で締め付けられる奥義である。

「ふえ、フェイトさあん……助けて。なんか段々と心地よくなつて……」

「え、なんで!? 心地よくなるの!?!」

「それが『マッスルホールド』なり！ 相手を落ち着かせる母なる温もりを兼ね揃えた優しさなり！」

「そんなお母さん嫌だよ!!」

エリオ・モンディアル。彼はフェイトの保護観察を受けることとなるが、筋肉男にあまり近づけなくなるというトラウマを残した……。

「ぬう……わからぬ。なぜキャロまで避ける!」

「エリオと同じようなことをしたからだよ」

ちなみにキャロの場合、『マッスルホールド』は避けられたそう。

筋肉男に迫られるという恐怖があったが。

(ジエイル・スカリエッツィの憂鬱)

ジエイル・スカリエッツィ。狂気のマッドサイエンティスト。

科学者である彼は日本特有の屋敷の茶の間にて、休憩していた。外国人のような容姿であるが、シャツとホットパンツ、そして腹巻きという某天才なんちゃのような格好をして古座座りしていた。

麦茶の入ったコップを掴み、喉を潤す。「うむ」と頷いて、障子の先を見つめながら彼は呟く。

「これでいいのだ」

「何がですか……」

相席に座る別嬪戦闘機人さんことウーノは「お前何言ってるんだ？」という視線を向けていた。

スカリエッツィはそれに気にせず、ウーノに視線を向ける。

「いやほら、なんか平和だなーと思って」

「元悪の科学者が何を言っちゃってますか。平和なんて言葉はドクターには似合いません」

「そうだね。私はどちらかと言えば『混沌』と『狂宴』の方がお似合いなのだが」

ガクツとスカリエッツィは項垂れる。

「……自分より『混沌』としていた女性がいたら折れるよ」

「確かに……」

スカリエッツィが落ち込んでいる理由は三年前。ソラがまだ十二歳の頃に出会ったある変態のせいだ。

彼女というあり方に興味を示した彼は接触したものの、彼女によって『ナンバーズ』の一人か二人の人生がおかしくなった。

三番目の娘こと『トール』は婚活し始め、一児の母になっていた。どうもノエルに焚き付けられて、『結婚できない独身女プップス(笑)』となんか女性の意地を馬鹿にされたことで婚活したらしい。

ドゥーエもそうだ。スパイ活動中に『コスプレと声優業に填まった

から、退職します（笑）」とメールに届いた。

そのときウーノの顔は鬼になっていた。そして、彼女達を変えたのがノエルだと知ると、マジ殺し兵器で攻めたのもいい思い出だ。

その兵器ことガジェットにフアンシーな落書きされた上に、『きゅーきゅー』と謎の鳴き声を泣く機械へと変貌した。

なんだパンティ剥ぎ取りマシンは。あれは確実にウーノのような常識ある女性をターゲットにしている。

「……いつか独房に入れてみせる」

「ウーノ。君はいつから治安維持を志すようになったのかね。君も人のこと言えないではないか」

「ドクターもそうではないですか。古宮アオでしたっけ？ 管理局と関わりある人間と親しくしてやるじゃないですか」

「私はこうやって管理局の情報を集めているのさ!!」

「で、『プリティマジカル』という魔法少女アニメと『合体戦隊ガオガイダー』という特撮の話題ばかりですが、どこに管理局の情報があるのですか」

それを言われてしまえばスカリエッティは視線を逸らして、口を閉ざすしかなかった。仕方ないのだ。アニメと特撮がこうも面白いとは思わなかったのだ。

研究ばかりで娯楽に飢えていたスカリエッティにとって特撮とアニメは効果抜群だった。

その結果、アオとアニメ談義しているのである。

「いや、ほら。アニメと特撮のおかげで発明進んでいるし……」

「確かにガジェットを合体する機能は面白かったです……」

「いつか必殺マシーンを作ろうと考えているのさ。名前は『ネオアームドストロングアームド砲』だよ」

「完成度たけーなオイとか言いませんよ？ とうか、その兵器だけは作るのはやめてください。女性代表としてセクハラで訴えますから」

悲しき（いろいろ危ない）兵器を作ろうとするスカリエッティにストップをかけるウーノ。スカリエッティは「仕方ないなあ」と呟きな

がらコップに麦茶を注ぐ。

「ところでウーノ。クワットロはどうしているのかね？」

「ドクターを裏切ったまたは離反したものの達ですね。相変わらずです。ファンシーな格好をして暴れています」

スカリエッティを裏切った——わけではないが、デイエチヤトーレを除く『ナンバーズ』はスカリエッティから離反した。理由はノエルがいなくなってから彼の研究所から現れた五人の少女達の仕業だ。

彼女達の襲撃で洗脳され、そして『魔法少女』にされてしまい、スカリエッティと敵対している。

まさか自分の娘達が奪われるとは思いませんでした。

「そのうえ、ルーテシアとゼストがあちらにつくとはねえ……。いやはや、世の中はままならないものだ」

「第三期のラスボスが交代しちゃいましたしね。これからどうしましょうか私達」

「どうもこうも、こうして気ままに時を過ごすしかない。私達にできることはもうないのだから」

「そういうものですか」

「そういうものさ」

時計の音しか聞こえなくなり、いつしか言葉がなくなってしまう。ウーノは目を伏せて、スカリエッティはボーと天井を見ていた。「ドクター。もし、もしもあの悪魔達に仕返しできたとしたらどうしますか」

「そうだね。仮にできたとしたら……全力で仕返しさせてもらおう。私の計画を台無しにしたことと、娘をおかしくさせた少女達にね」

「わかりました。では、私は少し用ができましたのでしばらく席を離れます」

ウーノが席に立って茶の間に出た後、残されたスカリエッティは呟く。

「彼女は何を考えているのだろうかねえ。昔は軽く考えられたのだが、やはりぬるま湯のおかげで少し思考が回らなくなつたのかねえ

……？」

しかし悪くない。昔の彼ならばただ単に研究を楽しみにしていたが、こうした安心できるぬるま湯のおかげで落ち着いている。

ノエルの良い影響なのかもしれないと思いつながら、スカリエツティはアオに電話をかけるのだった。

「はい。あのお話をお受けします。まさかあなた方——と組むことになろうとは」

——物語はそろそろ始まる……

第一百一話 機動六課（ただし『変態』がいる）

(??side)

本局遺失物管理部「機動六課」。四年かかけて立ち上げた組織である。その目的とは、ロストログアの回収および使い魔と戦うことにある。

聖王教会のトップ、カリム・グレシアが来るべき破壊の運命を予知し、それ避けるためだけに設立されたのだ。

『古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。』

死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、

それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる』

これが二年前から出た予言。しかし、その予言は変わり、新たな項目ができていた。

『古い結晶と叛逆の魔が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。』

異形なる者達が蹂躪し、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、そしてその果てに終焉を迎える英雄が幕を降ろす』

スカリエツティが敵対していないためか、ところどころに変化が見られており、全くもって理解不能だった。

『終焉を迎える英雄』とは誰か。そして『異形なる者達』とは何か。現在進行形に調べている。この予言は正しいかどうかはわからないが、現にジェイル・スカリエツティではなく、悪魔が騒ぎを起こしている。

ソラ達の周囲を巻き込み、災厄をもたらした悪魔を倒すために、はやてはこの組織を立ち上げた。

ここに集まるスタッフははやての知人はもちろんのこと優秀だ。エリートというわけではないが、とても役に立つ人材だ。

しかし、この組織には欠点がある。まず地上本部と折り合いが悪い仲だ。

使い魔がよくミッドに現れるため、治安維持の仕事を奪われている上に使い魔という未知の存在に対抗できているため、嫉妬の視線を向けられてもおかしくはなかったのだ。

そして、はやて自身が特に問題としているのは教導官だ。

教導官のメンバーは優秀だ。しかし、やはり変態ばかりだ。

例えばなのは。残虐性を持ち、論理的な反論なければ力付くで黙らせる上にとりあえず心が折れるまで砲撃でいじめる。……かつての彼女はどこにいったのだろうかと遠い目をしていた頃がなつかしくなる。

そんなことがあるため、未来ある若者達に変な方向に進まないか不安なのである。

元に最初の犠牲者はなんとキャロだったりする。彼女は筋肉フェチになっていたのだ。

キャロと衛に出会わせ、そして彼の模擬戦を見せたのが間違いだった。彼女に憧れを持たせる対象を間違えたのだ。

そのため今のキャロは非力な召喚術師ではなく、肉体言語で語る魔導士となった。

召喚獣と共に戦う術者など、どこの聖杯戦争のマスターなのだ。

「不安や……まごうことなき不安や」

こうして史上最強の問題児教官を抱える部隊が出来上がった。もつとまともか部隊がほしいで……ミゼットおばあちゃん。とはやては内心愚痴り出す。

三提督の一人であるミゼットは行方不明になっていた。そして最高評議会のメンバーも謎の死を遂げていた。なんと、彼らが脳だけとなっていたことが驚きだったが三人のうち一人がいなかったため、おそらく何者かが持ち去ったのだろう。

今の現在、動いているのは残りの提督達だ。互いにカバーしあい、悪魔側だけでなく次元世界の犯罪者達を牽制していた。

はやてはそんな現状に嘆きながらも、そろそろ始まる開設会の会場

であるアリーナへ足を重く進めた。

スタッフと隊員が綺麗に並んだ開設会ではやては台上に上がった。マイクを口元へ合わせ、マイクテストを行ってから彼女の挨拶の言葉が始まった。

「はじめまして、機動六課課長ならびに総部隊長の八神はやてです。新人でまだまだ可能性に満ちたフォアード陣。豊富な専門知識を持ったメカニック、バックヤードスタッフ。そして、実績と実力とともに申し分のない指揮官陣。私はこの部隊と一緒に仕事ができることをうれしく思います。がんばっていきましようという最後の言葉で私の演説は終わります」

スラスラと囁むことなく言えたことに密かにほつとし、はやては次に出てくる隊長に視線を向ける。

そして、やや絶望した顔になる。なんとなのはの挨拶なのだ。

彼女は一、二年から教導を行っており、まだまだ浅い先生なのだが、隊員達には彼女の武勇伝は知れ渡っていた。

曰く、強固な魔力無効化バリケードをぶち壊す破壊神。

曰く、機動戦士並の精密さと問答無用さ。

曰く、危ない女性ナンバーワン。

この三つが隊員達に知れ渡っていた。一部、彼女と接点がない者達はあるのだが彼女の教導を受けた隊員達の顔色は青白い。中には立ったまま失神している者もいた。

「スターズ分隊長の高町なのはです。フォアード陣のまたをみんなには頑張って指導しているこうと思います」

……あれ。思ってたのと比べて普通？ とはやてが考えてたときに彼女は言った。

「ちなみに逆らう人はドンと来てください。理由がはっきりなければ

スタラ。はつきりしてもスタラするつもりなので、ドンドン刃向かって来てくださいね。私としてはスタラを撃てる快感が得られるのでハッピーなのです、にぱー☆」

(やっぱり言いおったアアアアア！)

内心でシャウトするはやて。やはり彼女は危ない女性ナンバーワンだ。

これから彼女の部隊に配属になる者達の不幸さに同情せざる得ないはやてである。

次に出てきたのは、フェイトだ。

彼女は普通に挨拶をし、そして普通に終わらせた。

彼女に向けられる羨望と尊敬の視線が集まる中で、ヒラリと彼女のスカートが揺れる。

そして生尻がやや見えた。周囲の空気が凍りついた。

フェイトは何か思い出したのか振り返り、言った。

「あ、私はパンツを履かないことに関しては追求しないでください。そういうスタンスなので」

(どういうスタンスやねん!!)

内心全員がそう思っているに違いないとはやては思う。今さらながら「ちよつと恥ずかしかった」と照れるフェイトだが、なぜか萌えない。

「……変態宣言したからだろうな」となのはと並ぶアオは呟いていた。

それから次々と挨拶が行われた。その中にはアオはもちろんのと民間協力として、まどか達や縛られて芋虫になっている雷斗もいた。

……なぜ雷斗が芋虫になっているのかは割愛させてほしい。白い悪魔の仕業なのだ。

そして最後に、台へ上がるのはある意味取りをとる青年だ。

輪郭の整った爽やかそうで、金髪のおツドアイ。それが不気味とは言えず、カッコいいとも言わせるほどの顔立ちだ。服から見れば始めは弱そうだったなあとはやては思い出す。

今は、ホントにとてもすごい。脱いでもスゴいと言えるくらい筋肉がムキムキのダイナマイトボディ。

そんな彼が演説する。最初に言っておく。

彼は普通に演説をするつもり———はない。

「はじめまして諸君。我こそ、マッスル部隊隊長。八神衛である！

さあ、さっそくだが筋肉について語ろうではないか！」

「マッスルマッスルうううう!!」

掛け声が響き渡る。ビリビリとアリーナを揺らぐほどの士気である。

衛の信者———ではなく共に筋肉を鍛えぬく野郎と少女の軍団である。中にキヤロがいるのは当然であった。

(……これいつ終わるんやろ)

それからはやての旦那様の演説が軽く三十分過ぎたところではちちゃんがイイ笑顔で砲撃を撃った。

ナイスと心の中で呟いたはやてだが、なのはが乱心したと勘違いした衛が無傷のまま彼女を『マッスルホールド』で宥めようとした。当然、それはアオという犠牲で開設会の幕を降ろしたが……。

隊員達の自己紹介も終わり、なのははやフェイトが直々に教鞭を振るうチームも結成された。その力を知るために、なのはと模擬戦をすることになった。

ティアナ・ランスターもまたその一人である。彼女は自他共に認める凡人である。

その凡人なりにも天才達へ届かせようと足掻き、努力した果てにここにいる。

ティアナは作戦を伝える前に、メンバーの顔を確認した。

同僚のスバル。後輩とも言えるエリオとキヤロ。

そして———

「いや、ホントなんで魔導師でもないガキんちよもいるのよ」

「ガキんちよじゃない。ソラだよ！」

プンスカ怒るエリオよりもやや小さい少年。名前は神威ソラなのだが、どうもここにいない参謀の名前と容姿がパンフレットの写真とそっくりだ。違いがあるとすれば年齢と身長である。

まあそれはさておき、なぜソラがここにいるのか疑問に思った人がいるので回想に移ろう。

(回想 一年前)

遂にソラは車イス生活することになった。下半身が動かなくなり不便だと愚痴りながら、玄関に向かう。

彼の『弱体化』の進行がもしかすると止まるかもしれないという、はやての情報を知り、無駄でも試してみようと、リツカとまどか、千香を連れてある科学者の元の住居に向かう。

その住居のインターホンを鳴らすとこれまた知的美人な女性が応対する。はやての知人とその証明となるデバイスのウインドをかざすと女性——ウーノ——はスカリエツティという科学者を紹介した。

彼が何をしていたかと言うと研究ではない。かと言ってアニメを見ているわけではない。

真剣にあるものを作っていた。

「ウーノ、少し待ってくれ！ 今、まさに機動戦士のプラモが完成しそうなのだ。だから客人に待って」

「そんなプラモにまどかちゃんダイブ！」

べきよ！ プラモはまどかダイブで粉々になった。

「ぎにやアアアアア！ 私の夢とロマンがアアアアア！」

「うごお……ヤバい。プラモにダイブするんじゃないかった。結構刺さって痛い……」

「いや普通大ケガするからな？ 痛いだけで済まないからな？」

「君達は何者だ！ は。さては組織のものだな。ならば私のバトルモードを見せてあげよう！ スカウター装備!!」

「戦闘力わかるもの装備して何になるの？」

「聞いて驚きたまえ。このスカウターは『スリーサイズ』がわかるスカウターなのだよ！ これぞ男のロマンなのだよ少年！」

「確かにそうだけど後ろの美人さんが修羅になってますよ」

「ドクター、これ没収です」と言つてウーノは取り上げた挙げ句、握力で粉々に砕いた。スカさんまたもや膝について絶望する。

悶えるまどかを看病するリツカ。

スカさんを説教するウーノ。

一人残されたソラは眩く。

「なんだこのカオスは」

「見て見てソラ！ ボクのおっぱいDを越えてるらしいよ！」

「まだあったのかスカウター！」

ちなみにまどかはD。リツカは測定不能という数値が出た。

……なぜ測定不能なのだろうかと謎が残された。

「ふむ。それで弱つていく身体をどうにかするために私を尋ねてきたのだね。任せなさい！ 私はこう見えて生物学も詳しいのだよ！」

「私を含めた『ナンバーズ』の生みの親ですしね」

「『ナンバーズ』？」

ソラの疑問にウーノが代わりに答える。機械を人体に融合させた生物兵器で、だいたい拒絶反応で早死にする運命らしい。非人道的と思う一方、なんでそんな生物兵器がここで穏やかに暮らしているんだと言いつ返した。

「その『ナンバーズ』のメンバーが悪魔側についてちゃいまして、魔法少女になりました」

「それはまた……。正気に戻つたら確実に黒歴史だな」

「ええ。そのために様々な画像を撮って記録しています。帰ってきた

ときには楽しみですよホント……」

「黒い……黒いよこの人」

暗い表面に目がギラギラ光らせるウーノに冷や汗を流すソラ。そんなときスカさんが一錠の薬を手渡す。

「これは細胞を若返らせる薬さ」

「細胞を？」

「劣化する細胞を真新しくするための薬さ。まあ、若返らせるのは間違いないがあくまで若返らせるのは細胞さ。これを投与し続ければなんとか五年くらいは持てるかもしれない」

「え、完治じゃないのか？」

「細胞の劣化という病気は似たモノがあるが、どうもまだまだ完治法が見つからないのだよ。この薬はあくまでも引き伸ばすためのモノなのさ」

それもそうだ。細胞を若返らせることはできても、ソラの細胞は謎の劣化現象をし続ける。完治するとなると、それは新しい肉体に魂を移動させるといふ奇跡の技くらいしかない。

「とりあえず飲んで見るけど副作用は？」

「ハツハツハツ。…………」

「オイ。目線逸らすなよ」

「いや、ね。まだ試作段階で人体の治験はまだなのだよ。動物実験で九割は成功しているのだが」

「残り一割は？」

「ムキムキのマツチヨな猫になった」

「なんで!？」

なぜムキムキになる。そこは普通に考えて死ぬとかそういう危なっかしいリスクだろうに。

「まさか二足歩行してマツスルポーズをとつてくるとは私は驚きを隠せなかったよ。顔がキュートな猫なのに」

「気持ち悪いわ！ てか、なんだその超人生物！」

「その猫は謎のオカマ達に導かれていったなあ……。確か名前は『オベイロン』と『ジャンヌ』だっけ？」

「知ってる名前が出てきた!？」

久しぶりに出てきた敵と味方(?)の名前に驚愕するソラ。遂にオベイロンは堕ちてしまったというやるせなさがある。

「さあ、選びたまえ。延命するか! マツチヨになるか!」

「シリアスのねえ二択だなオイ! もう、飲むって!」

ガーツと水無しで飲み込むソラ。やや不味そうなのか舌を出して苦そうにしている。

するとウーノが。

「ドクター。それ、違いますよ」

「ん? そうなのかい」

「はい。若返らせる効力は合ってますがそちらの薬はその十倍の効力ですよ」

「つまり本物はそっちなのかい?」

「はい。本物はこっちです」

しーんと静まる空気。スカさんは後ろ頭を搔いて。

「すまない。間違えたぜ!」

「オイイイイイ! サムアップしてんじやねえ……ってなんか身体が熱いイイイイ!」

薬の効力が表れたのか、徐々にソラの視界は低くなりそして思考も低下していき、そして――

「うにゃ? ツインテの姉ちゃんは何でジロジロ見ているの?」

「なんでもないわよ(不安だらけだわ)」

現在に至る。『神威ソラ』は退化して『一ノ瀬ソラ』になってしまった。

いわゆるチビソラである。

そんなチビソラが首を傾げる中で、ティアナは簡単な作戦を伝える。ティアナとスバルがなのはを牽制し、残りのメンバーは隙を見てなのはに攻撃するという作戦だ。

「よし、行くわよー！」

「はい！」

ティアナの声に答えて、作戦通りになのはの模擬戦が始まった。

第二百二話 チビソラは弱い。けど天才なんだよ

(??side)

この模擬戦のルールはシンプルだ。なのはに一回でもダメージを与える。そしてその際になのはからの攻撃を受けた場合、プラス一回なのはに攻撃を与えなければならぬ。

そしてフィールドは市街地という、一般人がいそうなフィールドに設定されている。これは使い魔の対策なのである。

モニター室にて、隊長達は彼らの訓練を見ていた。はやてはこの模擬戦を立案した雷斗に聞いた。

「なんでこんな模擬戦にしたん？」

「実戦というものを実感できるからだ。はつきり言えば高町なのはからしたら、ティアナ達はザコだ。本気でやり合えば確実に負ける。そんな格上と相手するプレッシャーと実力をまず身をもつて体験してもらおうことで、ティアナ達自身がどれだけ弱いのか理解させる」

「プライドズタズタにするつもりなん？」

「ティアナ達のプライドなんてゴミさ。格下のプライドなんてあらゆる勝負において、クソくらえだ。重要なのは弱者でもどんな格上に勝てるど根性だ」

そのど根性を試す。それが雷斗の目的だ。

その一方、空中戦となったティアナ達は即席の連携で攻めるも、やはり避けられ、逆に飛ばされてしまった。そしてなのはの砲撃による牽制でフォアード組は離脱する。一度でも攻撃を受ければ、より苦しくなるからだ。

(攻めきれない……このルール厄介だわ)

『一度でも攻撃を受ければプラス一回なのはにダメージを与えければならない』

それはティアナを含め、全員がやりにくいと感じる。単純な話、攻めていけばいいが高町なのはは教導官——つまり生半可なものでは

ダメージなんて与えられないのだ。

(どうすれば……)

より精密な作戦を考えようにも時間が足りないし、何より連携がまだまだ浅いティアナ達。結果、攻めあぐねることになり、なのはの『アクセルシューター』を撃たせることとなった。

「追尾型！」

「うわっ、とっ！ ホントにどうしますかティアナさん！」

「き、筋肉だけではどうにかありませんよお！」

「いや筋肉でどうにかならなくね?！」

キャロの的はずれな発言に食いつくスバルをスルーし、ティアナは冷静に考える。すると一人の少年を見失っていた。

その少年——チビソラはあつという間になのはの懐に入り込み、斬撃を描く。黒い線なのはの『レイジングハート』で受け止められ、そして反撃の形で蹴り込まれる。咄嗟に『神器』を盾にして、防ぐも背後からくる全てのシューターに気づき、頭上に足場を作って下へ逃げる。

彼はああやってなのはに近づいたのだとティアナは理解した。空を飛ぶことは確かに便利だが、移動速度は速くても急な動き、つまり直角など融通の効く移動は不可能だ。

チビソラのしていることは空を『飛ぶ』のではなく空を『駆け回る』。足場をつくってそれを踏み台にして移動することは、機動力を比較すると飛ぶことより上なのだ。

現にチビソラは追尾してくる丸いシューターを回避していた。機動力の融通が効くため、急に直角へ移動すればビルに直撃するシューターがいくつか出てきた。

それでも逃げ切れないものは、急に反転してシューターを『神器』で切り裂く。小さな爆破を起こしてシューターは全滅して消えた。

一息つくソラにティアナは勝手な行動したことを指摘する。

「なんであんなことをしたの。一歩間違えたらアンタに直撃していたのよ！」

確かに無茶なことだ。しかしソラはティアナの言葉を聞いていな

いのか、じつとなのはを見ていた。ティアナはチビソラの態度にイラついたのか怒鳴る。

「聞いているのっ?」

「聞いているよ。でもさ、いつまでも攻めていかないのもどうかと思う」
ソラの言葉にティアナ達は苦虫を噛んだ表情になる。

「臆病風に吹かれていたら、オレ達はいつまでもあの人には勝てないよ。オレは勝って師匠を越えたい」

今のチビソラにとって雷斗は目標だった。幼い彼は師匠と肩を並べて戦いたいと思つてずっとがんばってきた。

「ここでいつまでも待つていたら勝てないよ。そりゃ、ペナルティで余計に苦しむことになるよ。でも、いつまでもここで待つているのは嫌だ」

チビソラの闘志に、ティアナは己の消極的な考えを恥じた。そうだ。自分は兄が目指した夢のためにここにいる。

ここで立ち止まっていたら始まらない。ティアナは「ごめん」とチビソラに謝り、みんなに新たな作戦を伝える。

「作戦は前と一緒。私達が牽制している間にみんなで攻める。だけど、一人だけ待つてちようだい。もし攻めきれず、離脱するということになったらなのはさんはたぶん、今度こそ自分達に砲撃を当てようとするはずよ。その隙を狙つてちようだい」

全員領き、一斉に行動し始める。なのははそんなフォアード勢に満足そうに頷く。

(うんうん……いいねいいね。その不屈の心意気が私が望んでいたものだよ)

諦めない。めげない。挫けない。

僅かな可能性に、貪欲に食いつく心意気。ああ、とても。

「壊しがいがある!」

『壊したらあかんぞ!』

やはりこのなのは様はおかしい。ボロツボロにするつもりらしい。

なのはの砲撃が線を描く。一直線にティアナに向かう砲撃は、直撃するのとなくすり抜ける。

(幻覚！ 最初の散開でティアナは使っていたのね！)

背後からエリオの突きが迫る。回避に移ろうとするも、手足をキャロのバインドで動けなくなる。なのははエリオの突きを防御魔法で遮る。

エリオが飛ばされ、あらかじめセットしておいたシューターでバインドを破壊したとき、チビソラがなのはに斬りかかる。

なのはは『神器』を弾き、がら空きになった懐へ砲撃をぶちこもうとする。

そんなときチビソラは不敵に笑う。詰ませた！と言った笑みに訝しげになると、ハツと後ろを振り返る。スバルが拳を振り上げてなのはに迫っていた。

「甘いー」

チビソラに放つ予定だった砲撃をスバルへ叩き込み、再び攻勢に移ろうとしたチビソラをバインドで身動きを止める。

なのははこのとき、一安心した。ヒヤヒヤしたからこそ、安心してしまった。

ゆえにスバルは倒れたと勘違いしてしまった。

下からスバルがアツパーを決め込もうとしていた。

(さっきのスバルも幻覚！ そして今のスバルが本物——)

回避しようとしたら今度はティアナとキャロのバインドで完全に身動きを止められた。油断した一瞬でなのははその拳を受けてしまい、肺から息を出す。

「ッ、う………容赦ないね」

「当たり前です。『エース・オブ・エース』に勝つにはこれくらいじゃないと倒れません！」

「いいね……その闘志。私もついつい本気になっちゃいそう♪」

轟ツとなのはから魔力ではない得たいの知れない何かか吹き出す。それは恭也達武人が使う殺気というものだ。

渇く空気に、冷える雰囲気。

スバルはより一層身構え、なのはがバトンのように杖を回して言い出す。

「さあ、こつからだよ!!」

『しゅうりりよー。はい、お疲れさまー』

「……………」

……そういえばなのはにダメージ与えたら終わりだったことを忘れていた二人である。

一方、モニター室にて雷斗はこめかみを押さえていた。

「やっぱり厳しい?」

「まーな。子どもだから経験が元通りになっているから動きが未熟になっている。もし、アイツが元の姿だったら、バインドなんか捕まるはずがねーんだ」

アオの質問に辛辣な答えを返す雷斗。「ただ、」と呟いて、

「アイツは天才だよ。それだけは言える。一度得た学びを忘れず、昇華させていく」

それがソラの恐ろしいところだ。と雷斗は呟いた。

成長段階において彼がピカイチ。元が英雄と呼ばれるくらいの強さだからこそ、もつともと言える。

そして、キーポイトは如何にチビソラが『神威ソラ』に近づくかで戦力が変わると言ってもよかった。

(だから俺が呼ばれたのかねー……。組手のために)

ミッドで開く『翠屋二号店』で彼の妻を待たせている。早く終わって手伝いに行かなきゃと思いつながらモニター室から出ていくのだった。

第百三話 電車に乗り込むのは駅からで

(??side)

模擬戦後。スバルのデバイスがオーバーヒートして寿命を迎え、新しいデバイスに新調された。

シャーリーとスカさんの共同作と言ったデバイスで、基本骨子はシャーリーが。応用部分はスカさんである。

「てか、なんでスカエリツティがいるの。この人、次元犯罪者で有名でしょ」

「はやてちゃんが『従わぬならば、ウヌを滅ぼす!』って言って脅してたの」

「ちゃうわ。協力しようやって犯罪履歴を白紙にしたんや」

「どちらにせよ。危ない組織ですよ、ここ」

「んなもんメンバーがこうなつたときからそうや。ちなみに次元の『平和』とぬかしてスカエリツティ使つて、『人類補完計画』しようとしてたのが最高評議会や」

「どこのエヴァ!?!」

全て、スカさんの自供と証拠で証明された事実だ。

ゼーレはかの三人だったのだ。なお、一人生き残っているそうだが、未だに不明である。

「ハツハツハツ! まあ、安心したまえ。私は合体ロボと魔法少女にしか興味がないから!」

「後者がキャラに該当してない?」

「彼女は筋肉信者もとい筋肉フェチなのだから、これを魔法少女と言えば、ねえ……」

「筋肉大好き魔法少女ってある意味新しいジャンルだね」

「ならば真の魔法少女は私達だね! はやてちゃん」

「え、私も!?!」

「19歳越えてる女は少女とは言わん」

「ああん?」

ティアナとスカさんとメンチきるなのはとはやて。

やはり凶暴化してないだろうか。とアオは遠い目をしていた。

エリオは新しいデバイスに興味があるのか、どんな機能があるかシャリーに聞いていた。

「ちなみにスカエリツティのおかげで魔女結界のマップ機能がつきました。道を通れば記録され、帰り道や魔女の居場所がわかりますよ」

「なんかRPGのダンジョンマップみたいだな」

「宝箱の探索機能もあるぞ！」

「いらぬです。てか、魔女結界に宝箱つてあるのですか？」

なんでそんな機能をつけたのかと言えば趣味が9割だったりする。

呆れた視線をスカさんに向けていると、警報音が鳴り響く。

アナウンスから、六課の出動要請が伝わる。

フォアード勢と隊長達は出動するためにへりに乗り込み、詳細を聞いた。リニアが暴走し、使い魔達が占領しているらしい。

乗客はいないが荷物を運ぶ貨物車で、使い魔の狙いはおそらくロストロギアだ。

六課はロストロギアの回収と使い魔の討伐だ。へりにて隊長から作戦が伝えられた。

「とりあえず殲滅なの」

「悪 即 斬だね」

「先手必勝だな」

「とんでもねーな。うちの隊長達」

今回、参加する杏子が苦笑しながら呟いた。

まどか達は市街地の警戒のため待機らしい。まあ、杏子が今回選ばれた理由は面倒見がよく、彼女達が気軽に話せるからである。

「あん姉ちゃんも戦うの？」

「まあな。てか、アンコじゃねーから。キョウコだから」

「アンコたんペロペロ」

「千香。後で校舎裏な」

高校卒業したので校舎も何もないわけだが、まあなんにせよ。作戦

は殲滅である。

フォワード勢が集団で使い魔を蹴散らし、隊長達はそのサポートだ。まだ実戦の日が浅いため、経験を積みませながら任務を遂行させるつもりだ。

「よし、行くよみんな！ 飛び降りて!!」

「先生！ オレ、この高さから飛べません！」

「ちなみにボクも！」

「アタシもソーだけど」

「んじや、敢えてのソラクン達から！」

ガツと蹴り落とされる。一瞬の滞空。そして、落下。

「うぎやアアアア!!」

「高町テメええええ!!」

風圧で髪がすごいことになっていた。高度五十メートルからのスカイダイビングで、ソラは涙目だ。千香は言うど、そんなソラを激写。後で、まだか達と共有予定。

吠えていた杏子だったが、そんなやり取りに呆れて頭を抱える。

「マジで大丈夫か……？」

杏子の不安は……まあ、今回は的中しないのは言えることだった。

リニアに降りたなのは達は使い魔達を殲滅していた。使い魔は子どもの落書きがそのまま三次元化したような姿で、初めて戦うフォワード勢にとって不気味に相手である。

「ま、衛兄ちゃんが助けてくれなきやヤバかった」

「又ハハハハ！ 良い経験したものだぞチビソラよ！」

「飛び降り自殺の臨死体験だけだな」

なお、千香がどうなったかと言うとリニアの天井を突き破って内部に入ったことを追記しておく。

「ウヨウヨいるなあ」

「とりあえず殲滅がメインだ。リニアにいる使い魔を殺れ。我ら隊長は空中にいる鳥の落書きを殺る」

衛の指示のもと二人一組となって散会する六課。杏子とソラは次々と来る使い魔を狩り、ティアナ達もまた負けじと使い魔を倒していく。

しばらく使い魔を殲滅していく頃、千香から通信が届く。

『千香ちゃんだよ！ レトリックゲットだぜ！』

「おお、そうか。ならばそこから帰投せよ。我らもまた使い魔を倒していく」

『オツケー。とりあえず、そこへ……』

ブツンツと通信が途絶えた。いきなり通信が切れるとはおかしい。

衛は嫌な予感がした。そしてその予感は的中した。

スドオンツ!!

千香がリニアの天井を突き破る形で飛び出したのだ。口から血を吹き出し、意識がない彼女をキャロはフリードを元の大きさにし、受け止め、彼女を保護する。

「何事だ！ はやてよ。何が起きた！」

『わ、わからへん……。なんや知らへん男性が現れて。そんで誰かに不意を突かれたような』

モニター越しから千香の様子を捉えていた。はやての言う通り、何者かに不意をつかれて重傷を負った。

千香の手にはレトリックはない。誰かに奪われたのは確かだ。

千香が空けた穴から人が飛び出す。黒い鎧とカーテンドレスを着た金髪の女性と血染めのような燕尾服を着た男性。そして短い赤髪のスバルにどこか似た女性が現れた。

『の、ノーヴェ……』

『スカさんの娘さん？』

『そうだ。彼女はそこにいるスバル嬢と同じバトルスタイルを持つ戦闘機人だ』

しかしジェイル・スカリエツティが知るノーヴェの姿ではない。まづ服装だ。ピチピチなタイツではなく、杏子のような服装で、ズボン

とノースリーブスの衣装だ。

そして武装は彼が知る通りの簡素な籠手『ガンナツクル』で、スバルの新たなデバイスである『マツハキヤリバー』を模して作られたナツクルスピナーを備えるローラーブーツ『ジェットエッジ』だ。

ノーヴェのバトルスタイルはスバルと変わらないとスカさんは言った。

事実、彼女のISはスバルの魔法『ウイングロード』がそのまま黄色化した『エアロード』という能力だ。

目の前にいるスバルとティアナは新たな敵に身構えていた。衛はそんな彼女達の前に立ち、戦わせることをやめさせる。

「隊長、やらせてください。千香さんをやった仇をとりたいです！」

「その心意気は買う。しかし、ここは我にやらせる。相手はあの千香殿を飛ばしたヤツなのだから」

天ヶ瀬千香は頑丈でタフだ。いくら油断したとは言え、大ダメージを負うことは滅多にない。しかし、今の千香は一撃で戦闘不能になってキャラの治療を受けている。

それは、普通はありえないことを示している。

「やれ、ノーヴェ」

金髪の女性が指さすとノーヴェが衛の前へ突っ込む。そして彼女の拳に合わせて、衛も拳をぶつけた。

ゴウウウウウン!!

拳同士のぶつかりで、ティアナ達は少し飛ばされる。その威力はリニアまで受けたのか、足場もやや亀裂が走っていた。

「ぬう!?! 互角だと!」

『んなアホな!?! いくらなんでも衛くんの素の拳で互角やなんて!?!』

衛との拳がはじめて拮抗した。ノーヴェはそのまま畳み掛けるかのように、衛と打ち合う。

ノーヴェと衛の攻防は、腕で受け止め、時には流し、隙ができれば蹴りこむ。それを回避したら、反撃移り、打ち込む。

格闘漫画のごとく、互いの拳による技術もまた互角だった。

『嘘や。普段の衛くんの拳なら、ビル一つ吹き飛ばやのに……』

『素でこれなら魔力強化したらどうなるのだね……?』

『そりゃまあ、星がくだけ——いや、そんなこと言うてる場合やない。衛くん、本気でやっちゃって!』

『ちよつと待ちたまえ! うちの娘が死ぬから!』

などと場に似合わない漫才しているわけだが、衛はある機会を窺っていた。

技術やパワーは互角。ならば、彼が待つのはアレしかない。

ノーヴェが一瞬だけ、身を引いた。衛はそれに誘い込まれるような形で追撃してしまった。

ノーヴェの拳。その手から黄色の光が帯びていた。

「ッ、隊長! それは砲撃です!」

スバルが叫んだところでもう遅い。ノーヴェの砲撃が一直線。しかも、衛の至近距離から放たれた。

砲撃魔法だった。スカさんが備えていない魔法が、彼女は持っていた。魔法少女だからこそ、今のノーヴェは魔法が使える。それは知っていたことなのに、衛はその砲撃を受けてしまった。

スバルは膝について、倒れる衛の姿を想像した。しかし、光が収まったとき衛は立っていた。

いや、むしろ余裕だと言わんばかりにマッスルポーズをとっていた。

「さすがに殺傷設定の砲撃を受けて火傷するのではないかとヒヤヒヤしたが、存外大したことないなあ……」

(いやいや! 普通、あの威力だと消滅しますから!)

BJが焼けて上半身が露になっただけの衛にティアナはツッコむ。ノーヴェは距離を取ろうとしていたが、両腕を掴まれ、逃げられなくなった。

「ゆくぞ。哀れな娘よ。我が等しく慈しみをもった必殺真心奥義……!!」

嫌な予感がする。意思のないノーヴェの脳内が警鐘が鳴り響く。逃げなければ恐らく、最悪なことが起きる。

その警告は正しかったことをノーヴェは後に知る——

「くらか、我が愛。『マツスルホールドオオオオ』!!」

「ぎにやあアアアア!!」

初めて声を出したノーヴェはネコがぶたれたような悲鳴をあげる。彼女の身体からメキメキやらベキベキやらと聞こえちやいけない音が聞こえるが、テイアナ達は目を閉じ、聞こえないようにする。

それがなんになると金髪の女性——アルトリア——は杏子と戦いながら思う。

確かに彼女を傷つけない(?)ようにするならば良い手だ。しかし、彼女はまだこちらの支配下であり、目覚めれば戦闘復帰する。そうなるように設定してある。

衛の奥義は意味はない——と考えていたが、ここでアルトリアは杏子と共に戦っていた少年の姿を見失っていた。

そう、衛が無力化してから後は何をやる?

答えは簡単。

『元に戻す』。

『解錠』!!」

ノーヴェの身体に『神器』を挿し込まれた。彼女に光が起きて、衣装は消え、完全に意識を失った。

悪魔によって縛られた支配下が解除された。

「ッ、忌々しいな」

「隙あり」

シユバツと背後の人物によってアルトリアは手にあるレリックを奪われてしまった。雷斗だ。彼が相手の背後に立ち、早業で彼女からレリックを奪ったのだ。

「貴様……いつから」

「ひっそりとな。まあ、お前らが集中してくれたおかげでらくーにパラシュートで降りてこれたしな」

不敵に笑ってレリックをボールのように上げたり下げたり遊んで

いた。

ヘリはもう一機用意していた——わけではなく、彼はフオワード陣には秘密でヘリに乗っていたのだ。どこにいたのかは、まあこの際どうでもいいとして、彼はその後パラシュートで上手いこと落下してリニアの壁に引っ付いていた。『磁力』を使って、引っ付くことができたのだ。

「おのれ……！　ゴミの分際で」

「なんか聞いていたのと違うな。オイ。テメーホントにアルトリアって言う女か？　真面目そうな騎士って聞いていたけど、なんか違うよな」

「……アタシもそう思っていた。コイツ。悪魔みたいに禍々しいよ」

アルトリアが会わないうちに変わっていた。厳密には黒くなっていった。肌は雪のように白く、瞳もギラギラした黄色。そして服装は青だったはずなのに、黒くなっていた。

「そんなことどうでもいい。貴様を今すぐ、ここで亡き者したい」

「へー……やってみろよ黒化女。どこぞの正義の味方のように心臓を串刺しにしてやる」

アルトリアの顔に僅かなひきつりを感じる。覚えがあるのだろうかとか推測する雷斗だったが、アルトリアが剣を構えたとき、すぐに構える。

そんなとき、だ。

「チツ……時間切れか」

アルトリアは忌々しそうに呟いて雷斗達を睨む。

「覚えていろ。王に対してこのような行いは万死に値する。必ず殺してやる」

「上等だ。返り討ちしてやるからとつと来い」

負けじと悪態をつくど、アルトリアと謎の男はそのまま消える。どうやら転移したようだ。使い魔も空気に溶けるかのように消え去り、残されたのは六課のメンバーとノーヴェのみだった。

「ノーヴェがやられたね」

「残念ね……あの娘ならば天道衛と渡り合えるって期待していたのに」

「まあ、いいじゃん。次はどうしようかなー？　ねえ、シイちゃん」

どこかの世界。暗く、謎の講堂にて悪魔達は思考する。そんな悪魔達の円卓の後ろには、培養ポットがあつた。浮いていたのは女の子。ジェイル・スカリエツィが本来使う予定だった女の子がそこにいた。

—— 彼女はまだ覚めない

—— されど、目覚めたとき何がはじまる……

第百四話 トラウマ劇場とある日常風景（笑）

(??side)

ノーヴェが治療所に送られ、レリックも無事確保した六課。しかし、彼ら彼女らはそれぞれが鬼気迫る顔をしていた。

目の前にある紙々。

大量の文字が書かれたワードテキスト。

印鑑を押しての承認する。

隊員達はまさに戦場にいた。その戦場の名を人は『デスクワーク』と言う……。

「つておわんねエエエエ!! なんで終わらんねんこれエエエエ!」

「うるさいよはやてちゃん! 今、肝心なところを書いているのだから邪魔しないで!」

「そうだよ! みんな大変なんだからいきなり叫ばないで。びっくりしたよ!」

ピシヤリと叱るのはとフェイト。その一方で、頭から煙を出している千香は折り紙をしていた。

「見て見てー、鶴が折れたよおー。アハハハハ!」

「ちよつ、千香ちゃんが壊れたよ!? あ、でも元からか」

なんてな感じにひどいまどかである。対して衛は謎の信仰心を高めていた。

「筋肉よ……我にこの書類を処理する力をオオオオオ!!」

壊れた千香を介抱し出すまどか。

筋肉信仰し出す衛。

カオスである。真剣にやっけていても、どこかで壊れ始めるメンツである。

「そもそもなんで隊長さん達は書類を処理しているの? あん姉ちゃん」

「あー……そりゃ、管理局の化け物メンツの高町達が使い魔を処理していたら周りの線路や山々が削れてな。その反省文やら経費の請求をしているってわけよ」

「うにゃ……よくわからない」

「オメーはまだ知らなくていいんだよ。もっと大きくなってから学んでいけばいいんだよ」

「ツ！ わかった。ありがとうヴィー姉ちゃん！」

にぱー☆と笑顔で応えた少年に姉御肌な二人に何かキユンときた。

「……ヤベエ。これがあの『神威』だとわかっていたとしても結構萌えるな」

「だろ？ 姉ちゃん姉ちゃんってちっこいガキに慕われるのも悪かねーだろ？」

「うー、ガキじゃないもん！」

「これ以上萌えさせるのかテメーはよお!!」

「うにゃ!? いきなり抱き締めないでよ！」

チビソラを含めたまだまだ少年少女なエリオとキャロは、難しいことなので参加はできないのでお茶を用意したり、お菓子を用意したりなど自分達のできることをお手伝いしていた。

隊長陣はチビソラの微笑ましいやり取りに和む——わけもなく、仕事しなくていいなあと羨ましそうにしていた。なお、千香とまどかが手伝わされているのは人手を借りたいからだ。

そんなとき、ほむらがリツカを連れてやって来た。

「ソラ、病院にいく時間よ」

「ええー……」

「嫌そうな顔をしないの。まだまだ病気があるから、ね？」

「わ、わかったよお……」

トボトボとリツカへ付いていくチビソラをまどかは少し暗くなる。チビソラは健康体そのものだが、彼の身体から『弱体化』する細胞がなくなつたわけではない。

この状態異常はガンと同じで細胞から来ているものだ。時間が経

つにつれて、また『神威ソラ』が苦しんだと同じように彼の身体を蝕む。

若返りはあくまで『弱体化』の延命処置なのだ。

ちなみにチビソラは別に病院に行くことに不満はない。むしろ、リツカとほむらで行くことが嫌なのだ。

「さあ、今日も脱ぎ脱ぎしてかわいいお洋服着ましようねー？」

「オレ、男なのに。なんで女の子の服をー？」

「全ては萌えのためよ」

「わけがわからないよほむら姉ちゃん」

トボトボ歩くチビソラの後ろ姿を見ると、ふとまどかはほむらと目があつた。お互いにサムアップし、「任せた！」「任せられた！」とアイコンタクトを交わす。

こうして現在進行形で黒歴史が刻まれていくのだった。

一方、雷斗は『翠屋』二号店にいた。妻のすずかのお腹が膨れているのは、そこに新たな命があるからだ。

そんな彼女の負担を減らすために、急いで帰ってきた雷斗は『神器』を使って超高速的な動きでオーダー、料理、運びを行っていた。

どこぞの死神代行のバンカイのごとく、分裂したかのような残像ができていた。それが見たいがために顧客は一杯一杯来ていた。

「あ、相変わらずスゲーなマスター」

「人外だ。人外がいるぜ」

「俺、この前。マスターのかみさんを口説こうとした男がどうなったか見たぜ。分裂したマスターが一斉に囲んでその男を見ていたぜ」

「んなもん、まだマシだ。一月前なんか強盗がきて、マスターにデバイスが向けられたけどフライパン一つで全員を血祭りにあげたんだぜ」

「床も壁も汚さず、処理するマスターにちよつとチビったわ俺」

常連客はそんなマスターこと雷斗の理不尽な強さに、戦慄する。まあ、彼が本気だしたら、社会的にも抹殺するようなことも辞さない。

そんなマスターに注文する一人の常連客がいた。

彼の名前はヴァイス。六課のパイロットだ。

「マスターのコーヒー上手いなあ。これで美人のボインだったらプロポーズしたのに」

「二次元にしてこい。画面がテメエの恋人だろ」

「何をう。俺が恋人はマイシスターオンリーなんだぜっ?」

「この間、テメエの妹にあつたけど、『お兄ちゃん鬱陶しいなあ』って呟いてたぞ」

「妹はまだ思春期なんだよ……」

視線を逸らすシスコンに、雷斗は呆れたと言わんばかりに嘆息を吐く。

「仕事はどうした」と聞くと、「同僚に押し付けてきた!」とサムアツプで返された。

コイツ、早くリストラするなと雷斗は思った。

(そもそも、コイツは胡散臭いな……)

ここで最初に会ったとき、ヴァイスはチラリチラリとこちらに視線を向けて、しばらくしてから視線を向けることはなくなった。口調も飄々しているようで、何やら含みがありそうな目をしている。

この男はどこかで会っていると雷斗は考えていた。

前世かはたまた今の人生のどこかで。

(まあ、敵意がねーし。しばらくは静観、だな。害があれば始末すりゃ、良い話だし)

そう思いながら雷斗は注文されたケーキをヴァイスの前に置く。イチゴのショートケーキである。

彼はそれを一口含むと「うーん♪」とまったり顔をするのだった。

「んじや、次は激辛ケーキいっとく? 当店自慢の」

「ケーキなのに激辛!」

そのケーキを食べたら病み付きになります。そんなキャッチフ

レーズがあるケーキを注文した客は、今日も火を吹く。

病院に連れて来られたチビソラはシャマルによる診察を終えた。服を着出す彼に、シャマルは苦笑する。

さきほど着ていた服ではなく、フリフリがついた黒のゴシックロリータという服である。

「うう……。スースーする」

「きゃっわっいいいいいい☆」

「富竹フラッシュユ！ 富竹フラッシュユうううう!!」

(ほむらちゃんのキャラが崩壊した……)

悶える萌えの探求者達に、シャマルは額に手を当てる。なんで彼女に女装させるのだこの二人は。

後々、『神威ソラ』に戻ったときに悶えているチビソラの姿のビジョンが浮かぶ。

「それで、異常はあったかしら」

「特にはないですよ。だけど定期的に見ていかないといざって時に大変な目に合いますから」

「既に変よ。チビソラマジかわいいという事件」

「かわいいのは認めますが、あまりいじらないでくださいね。ソラクん、本気で引きこもりそうな気がしてならないから」

「安心してシャマルちゃん。わたし達は萌えのためにこうしているのだから。うふふふふ……」

リツカはチビソラがいてから、この調子である。「昔はこうして女の子の格好させていたわあく♪」と言っていたので、前世でも女装させていたのだろうか。

着せ替え人形にされるチビソラを尻目に、未だに眠るノーヴェに視線を向ける。

ベットで横になっている彼女は穏やか……ではなく、呻き声を上げ

ながら寝苦しそうにしていた。

「く、くるなあ……くるなあ……筋肉う……！」

「これが『マッスルホールド』を受けた人の末路ね……」

衛の超舌殺傷奥義を受けた者は大半が、悪夢にうなされる。

残りのはあの温もりをもう一度と思つてか衛に再びされ、何かに目覚めて同じ筋肉信者へシフトするのだ。

後者であるキャラはこの奥義の温もりを『父なる暖かさ』と絶賛していた。

ちなみにキャラがマッスルモード（どっかの世紀末の霸王モード）になれるらしい。

「……事件が起きたのに、今日も平和ね」

普通のコスプレイヤーなシャマルは窓に視線を少し黄昏るのだった。

機動六課の訓練所。一見、海上の母艦のようなところだが実物化に近い立体映像により、一つのステージとなる。

フォワード勢はそれぞれのポジションごとに訓練をしていた。

ヴィータの相手をするスバル。先陣を切り、時に防衛戦で前にいくというフロントアタッカー。

フェイトの相手をするエリオとキャラ。素早く遊撃するサポート係りというガードウイング。

そしてなのはの相手をするティアナは全ての司令塔であり、動かない砲台というセンターガード。

チームにはそれぞれの役割があり、それを鍛えるのが隊長達の役割だ。一方、チビソラはポジションとしてはフロントアタッカーだ。

しかし、彼は『神威ソラ』としての経験が身体の中に残っているため、本能的に役割を理解し、行動を素早く移れていた。しかも、ガー

ドウイングのような敵を翻弄する役割もでき、サポート係りとしても充分発揮できる。

なので、センターガード以外ならば、どこにいてもポジションとして発揮できる予備軍。いわゆる最高の補欠だった。

しかし、そんな彼なのだが、身体は小さくなっているため、以前のような動きができないでいる。おまけに砲撃などの遠距離攻撃はできない。

よって彼はシグナムと模擬戦をすることになっていた。

「うにゃり!? またへビになった!」

「はは、これも避けるか。神威!」

へビのように伸びたシグナムの剣『レヴァンティン』。それを回避し、じつと彼女の動きを観察していた。地面から生えてくる剣撃には驚いていたが、すっかりガードし、後退する形で避けていた。

(五木——いや今は月村か。奴の言う通り、この少年のポテンシャルはすば抜けている)

曰く『短時間で理解し、それを身体に覚え、実行する。質の悪い話、しばらくすると応用してくる』。

ありえないバトルセンスだ。短時間でシグナムの剣撃を理解し、それを実践しようとする。今、使われているへビのように動く剣はコピーできないが、それ以外の斬撃を合わせてくる。

ゆえにシグナムはこの剣撃のみで戦うことになったのだ。

しかしチビソラはそれがコピーできなければ、その動きを予測を立てて回避し、反撃に移ろうとする。

まさに天才の成せるセンスなのかもしれない。

(当然と言えば当然か……。以前は少し疑っていたが、この少年は英雄と呼ばれる資質がありすぎる……!!)

英雄と呼ばれるには何が必要か。

力、知識、技術はもちろんのこと相手を引き込む魅力が重要である。もちろん、相手を引き込むだけの魅力だけが英雄となる資質とは限らないし、それが力と知識、技術で補える。

また英雄には様々なあり方がある。例えば、軍神『関羽雲長』。中国

では知らないものはいない大英雄であり、三国時代で輝いた武将。その男の武力は戦いにおいて、味方を盛り上げ、敵に畏怖を与えた。また三国と言えど諸葛孔明。軍略において最高クラスである軍師で知らないものはいない。

劉備玄德も英雄だ。下から成り上がり、その魅力で関羽や孔明を引き込んだ蜀の王はまさに英雄だ。

英雄とは力と知識をもって示す者。また王の器を示し、戦力を引き込む者達。

彼らは全ての争いばかりの世界で生き残り、名を示した人の形をした怪物達。

長い説明になったが、シグナムがチビソラを英雄と呼べるくらいの資質を見た理由は、軍神『関羽』と同じ武力。

彼のバトルセンスは戦場においてどこまでも成長する戦力だ。

(いくら相手が強かろうが、数が多かろうがこの少年は逃げない……！今の私が自分より格上であっても食らいつくか！)

チビソラとシグナムの戦力はシグナムに軍配があがる。チビソラの身体に覚えた経験はどうもじゃじゃ馬のようで、動けるときは動くがそれ以外は発揮されないピーキーな性格なのだ。

シグナムの剣が元に戻ると、今度は炎を纏って斬り込む。チビソラの『神器』とぶつかりとシグナムの脚技が、チビソラの身体をとらえようとした。チビソラは負けじと両足でそれを受け止め、足場にして飛び上がって距離をとった。

「対人戦を理解しているようだな！」

「師匠に教えられているもん！」

今度はチビソラの番だ。そう言わんばかりに彼は斬り込む。シグナムはその袈裟斬りを受け流し、拳を入れ込むがチビソラは『神器』を手放し、その拳を柔術で彼女を投げ飛ばした。

(チャンス！)

チビソラは手に『神器』を召喚して、突貫。宙にシグナムへ逆袈裟で斬り上げる。

当たると思い気や、シグナムはニヤリと笑っていたことに気づい

た。『レヴァンティン』が再びヘビのような剣状になり、チビソラを拘束する。

「水浴びして冷やしてこい！」

「うにやアアアアア!?」

チビソラはそのまま訓練所の外——海水へ入水する。プカプカと浮かんで目をグルグルしているので、もはや彼は戦闘不能と物語っていた。

「甘いな。ポジションの動きはできても経験がまだまだ甘いな」

「うひゃー。姐さんホント容赦ねーな」

シグナムとの模擬戦を見ていたヴァイスは目をグルグルしているチビソラを見て、そう呟いた。

「当たり前だ。この男は以前のような強さを持たなければならない。古宮も動いているが、それでもまだ足りない。スカリエツテイのナンバーズなど魔法少女化した少女達を元に戻すためには最強になってもらわないとな」

「以前のソラ少年はどのような感じですか」

「甘さのない強さだったな。私でも勝てるか怪しい」

「それくらいですかい……」

だとしたらまだまだだ。シグナムに勝てるくらいでないと話にならない。

ヴァイスはこれからもシグナムと模擬戦するチビソラに合掌するのだった。

なお、シグナムはどういう意味でチビソラに合掌したのか気づかれ、ヴァイス共々模擬戦することになったのは言うまでもない……。

第百五話 ホテル・アグスタ（え、ラブホじゃないの
こじ!? byまどか）

オークション。珍しい骨董品を売ることを目的としている一種の
売買である。

その会場。ホテル・アグスタという高級ホテルへ機動六課は向かっ
ていた。

公式的なロストロギアはもちろんのこと、密輸の形でこのオーク
ションで売買される一種の取引現場である。それを抑えるわけでも
ないが、今回は護衛として機動六課は出動した。

中と外。それぞれに防衛として配置される。

はやて、フェイト、なのはは中へ護衛として入る。彼女達はもちろ
んオークションに参加という形なので、ドレスアップしていた。

はやては水色を基調にしたドレスだ。羽衣のようなものを腕に巻
き付き、天女のようなドレスである。

フェイトは紫を基調にした胸元を強調としたドレスだ。

なのはは白と赤のドレスでスレンダンサーを強調するようなドレ
スだ。

それぞれが貴婦人と見られてもおかしくない姿に、ティアナとスバ
ルはもちろんこと、キャロは目をキラキラさせていた。

やはり綺麗な女性に憧れるのは少女の当たり前である。

「ふむ、肉が付いてきたとぼやいていたがやはりはやてはスリムであ
るぞー！」

「みんなの前で言うなや！ シバくでっ？」

「既にシバいてるではないか。……ふむ、今度は背筋をシバいてくれ。
はやてのポカポカはマッサージとして気持ちよいぞー！」

「誰かこの旦那にデリカシー教えてや……」

うう………と泣き言を言い出すはやてにツヴァイはよしよしと頭を
撫でる。

一方、なのはとフェイトはデバイスのウィンドから一人の男性に話しかけていた。

「ねえねえ、なのは達綺麗？　綺麗だよな？」

『うん、綺麗だよ。というか、昨晚。雷斗さんの仕事から帰ってから徹夜で警護しているのだけど、なんで僕なのかな？』

「え、暇だったでしょ。アニメとか見ているし」

『仕事帰りから徹夜で警護に駆り出されるってどうなのよー!!　おかげでこっちはハイテンションだよコンチクショー!!』

「あ、アオ。ごめんね。あとで好きなものおごってあげるから落ち着いてね？　ね？」

「駄犬。フェイトちゃんの好意をありがたく思ってたよな」

『毎度のことながら僕の扱いがひどくなってませんかねえなのはさん!?!』

「スカさんとアニメ談義して楽しんでるアオくんにしつ——じゃなかった殺意を持っているのです。にぱー☆」

『殺意!?　なんで嫉妬じゃなくて殺意って言い直したの!?!』

などと男性との会話を楽しむ(?)なのはとフェイト。

夫婦漫才を未だに続けているはやとなのは達を交互に見ながら、ティアナは嘆息を吐いた。

「カオスね……」

「さて、今からアグスタのオークションは骨董品じゃなくて美少女写真集のオークションに変えてしんぜよう!!」

「夢が広がるね！」

「アンタらホント、何しに来たのよ!?!」

同じくドレスアップしているまどかとかと千香にもツツコむティアナである。

まどかはピンクのドレスで、小動物さをアピールするような可憐なもので、千香は大胆に背中を見せる銀色のドレスである。

見た目は最高だが、会話が最悪である。返せ、淑女の形を。

「ねーねー、スバル姉ちゃん。ホテルって何するところなのー?」

「えっと、寝て食べて一日過ごすところ……?」

「ソラくん。ホテルはね。大人の夢の場所なんだよ」

「そーそー。具体的には男と女が合体して、楽しむところ」

「オイいいいいい！ 子どもに何教えるんだよテメエらアアアア
!!」

変態二人に拳骨を落とす雷斗。今回の助っ人である。痛そうに涙目になる変態達に嘆息を吐く雷斗に、ティアナは「ご苦労様です」と
労いの言葉をかける。

だったら手伝えと雷斗は言いたげだが、残念。自分のレベルでは胃痛で倒れるのであるとティアナは自負している。ぶっちゃければ、ツッコむのがめんどくさいのである。

「さて、そろそろ着くけど準備はええ？」

「八神はやて総隊長。ホテルって男と女が合体する場所って教えてもらったけど、合体ってどういうことなの？」

「よっしゃあ。とりあえず、チビソラくんにこんなこと教えたヤツ。

……あとで反省文五十枚やボケ」

子どもになんてことを教えたんじやこのアホンダラと睨みを効かすはやてに、隊員達の冷や汗は止まらなかった。

「ねーねー、アオ兄ちゃん。ホテルでの合体ってどういう意味？」

「えつと、それはこのアグスタが合体変形ロボだからかも？」

「じゃあ男と女が合体するってどういうことなの？」

「それはパイロット同士が意志疎通して、合体ロボを完成させるんだよ。どっかの創世記のようにー」

「うおおー。アグスタスゲー!!」

「いや、きつと違うけど……。まあいいか。誤魔化せまし」

アオと交代する形でなのは達はアグスタ内に入り、アオは仮眠室へ向かう。そしてチビソラ達はそれぞれ護衛の配置についた。

ところ変わってアグスタ内では知り合いに出会ってはなのは達の
テンションは上がっていた。

「あ、ユーノくん。変態の」

「こんにちわユーノ。変態の」

「さりげなく変態はやめてほしいなあ。事実だけど！」

「サムアップして返すなや」

「はは……相変わらずですね」

ユーノと視察官のアコースは彼女達の再会に少し喜ぶ。友人と出
会えたのははやての結婚式以来である。

「まさかはやてがこんな早くも結婚するなんてね。狙っていたのに」

「おや。そうなん？ なんなら今から狙ってみる？ 衛くんとガチバ

トルして納得させること前提でお付き合いたいならええけど」

「すみませんマジで悪かったからごめんさい」

「即座に土下座するほどのことなのかい？」

「ああ。衛さんのガチバトルはマジで身体がいくつもあっても勝てる
気がしねえ……」

冗談抜きでガチチートなのである。結婚式の日に夜天の書の逆恨
みテロリスト達が襲撃してきたが、自慢の『愛』と『勇気』と『筋肉』
でテロリストをまとめ一撃必殺した化け物である。Aランクの魔
導師もいたのだが、SSランクオーバーな衛には勝てるはずもなかつ
た……。

「その後起きたブーケキャッチの女性陣の鬼気迫る勢いにはドン引
きさ……」

「いやー、あんなガチンコバトルまで発展させるなんてね……」

遠い目をしながら思い出すのは誓いのキスが終わり、ブーケを投げ
た瞬間——戦争勃発。ブーケをキャッチすれば次にゴールインする
可能性があるという謎の迷信を信じていたのか、他者を蹴落とし、自
らのゴールインを得るために争った。

もちろんブーケは既にボロボロで花びら一つもなくなっていたし、
最後にキャッチしたのは通りすがりのカラスである。

次にゴールインするのは『アーアー』と鳴くレイブくんだろう

……。

「ぐっ、思い出したただけであのカラスが腹立つの」

「次こそ手に入れてみせる。アオと結ばれるためにも!!」

「アオくんは私のものだよ。このNANOHAちゃんのものなの」

「たとえ、なのはでも負けないよ」

「よろしい。この魔王にかかってこいな勇者ちゃんよ!」

「ノリええな二人は」

フシャーと威嚇し合う二人に、呆れた視線を向けるはやて。外はど
うなっているのだろうかと少し心配していると、パティシエ姿で大
きなケーキを運ぶ雷斗の姿が目に入る。

あれ? 外の護衛じゃなかったつけと思う三人だがユーノは彼女
達に、

「元からここにケーキを作ってもらうために呼んでいたんのさ」

「ちゅーことは元からここに来る予定やなんやな。まあええわ。この
まま中で護衛してもらお」

「その間にお料理をタッパーに入れるんだねはやてちゃん!」

「さすが主婦。少し小汚ない!」

「ちやうわボケ。てか、そんなしたら怒られるわ」

—— という漫才をしながら時間は過ぎていく——

一方、その頃。外にて、ティアナ達を含めて護衛組は配置について
いた。司令塔はシャマルが行い、そこから指示を出す。

チビソラは柔軟しながら、何やら考え込んでいた。

(んー……ティア姉ちゃんの表情堅いなあ。こうなったら千香姉ちゃ
ん直伝の『お尻を撫でようぜ作戦』を実行するべきなあ?)

それをやれば確実に泣かされる。千香もシバき回される。まあ、チ
ビソラに余計なことを教えた報いなのだが、それは実行される前にア

ラートが鳴り響く。

『来たわよ。使い魔……いえ、これはガジェット?!』

「がじえつと?」

「対魔導師の自立思考型の兵器よ。その兵器は魔力を無力化するAMFってフィールドを使って魔法を無効にするのよ」

ティアナの説明通り、AMF——アンチ・マギリング・フィールドは低ランクの魔導師にとって無敵の兵器と相手することになる。

ティアナ達はBランクの魔導師ゆえに、倒せないことはないが如何せん破壊に時間をかけてしまう。

「新人共はそのまま! チビソラもそこにいろ。アタシとシグナム、ザフィーラが蹴散らしてくる!」

「了解」と答えるとヴィータはガジェットがいる森の中へ入った。今から自分の知らない敵が襲撃してくる。

そう思うとチビソラは少し緊張してきた。

ヴィータ達がガジェット達を倒しているのをしばらく見ていると、その映像に映るガジェットの動きに統率が生まれていた。

チビソラは見過ぎさなかつた。小さな羽虫がガジェットの中に入ってきたところを。

(今のは……まさか)

そんなとき、紫の魔法陣が現れる。三角模様を何重にも張り巡らせた陣が、六つ。

チビソラはその魔法陣のことは知らないが、なんとなく理解してから眩く。

「召喚、陣?」

「ツ! 全員、警戒!! やっこさんが来るわよ!」

彼の答えは正しかった。陣からガジェット達が現れた。

おまけに統率がよくとれた動きをしており、ティアナとスバル、キヤロとエリオ、そしてチビソラへと分断された。

「ソラさん!」

「大丈夫! なんとなくだけど、こういうのなんか経験したことがあるなら援軍は不用だよエリオット!」

「エリオですからね!？」

ボケるくらい余裕がチビソラにはあった。相手は統率系統が得意、魔導師かはたまた魔法少女だ。

集団戦に持ち込めば倒せると踏んだのだろう。

「……甘いっての。こちとら、伊達にこんな集団戦法を何百も経験してるっての」

彼らしくない口調で『チビソラ』はそう言った。彼が少しずつ目覚め始める……。

第百六話 F e l t a c t i o n

(??side)

その頃、今回の。ゼスト・グランガイנטツとルーテシア・アルピーノは襲撃犯森の中にいた。

ルーテシアは召喚獣のインゼクトを使ってガジェット達の統率を行っており、ゼストは静観していた。

彼と彼女は本来ならば、スカリエツティに付き従っている者達だが、ナンバーズのクワットロの離反により、悪魔側へと拠点を変えた。ルーテシアは母との再会、ゼストは地上本部のトップであるレジラス・ゲイルが行っていた暗部の真実を聞き出したい。それぞれが目的をもって、悪魔に付き従っているのだ。

「ガリユーが彼女の欲しがっていたものを手に入れたみたい」

「あの女が求めるものか。いったいなんなのだろうな」

「興味ないよ。ゼスト。私は母さんに会うためだけにしていることだから」

「ほう……それが貴様らの動機か」

「……………」

聞き覚えのない男の声。その男は既にBJを着て、戦闘モードになっていた。

身体を鳴らし、敵となるルーテシアとゼストに睨みを効かせていた。

「お前は……」

「ぬ？ 貴様は高町の前の『エース・オブ・エース』ではないか。死んだと聞いているが……いや、この気配からして既に死人の身体か？」

「気配で判断するとは中々、油断できないな。ルーテシア、この場から離脱するぞ。相手が悪すぎる」

「逃がすと思うてか!!」

衛が飛び出し、ゼストはルーテシアの間に割って入る。彼の拳とゼストの槍の柄がぶつかる。

ビリビリと空気が震え、木にいる生き物達が逃げ出す。

「くっ、さすが『筋肉の貴公子』か!」

「転移などさせぬ。アオよ!」

アオは衛の指示により少し離れた位置から結界を張る。

転移を阻害するだけでなく、ダメージを軽減させる特殊結界だ。

なぜあえてダメージを軽減させるのかと言えば、衛の攻撃力は人に向けていいものではないからだ。

受けた人間は確実に軽くても三ヶ月は目覚めなくなる。

「ならば、俺も本気を出さなければな」

「げっ……旦那。マジで?」

懐に隠れていたユニゾンデバイス——アギトは嫌そうな顔をしていた。

衛は「ぬ? リインと同属か?」と物珍しそうにしていた。

ゼストは腹部に力を溜め始め、「はあアアア……!」とどこぞの野菜星人のごとく気を溜める。いや、魔力を溜めていた。

「刮目しろ。このゼスト・グランガイנטツの新たな姿を!」

変身!!」

カツ!!と目映い光と共に視界が白く染まる。視界が元に戻ったとき、衛とアオは驚愕し、見開いた。

戦慄。まさか、そんな、馬鹿な話があつてたまるか。

そんなことはあつてはならないとアオは頭の中で何度も否定する。

衛は「うぬう……」と唸り声。

信じられない姿を見せたゼストに、アオは目を凝らし視界に入れる。

身体に変化はない。

槍も変わってない。

変わったのは、服。旅人がするようなレインコートのような服が変化していた。

……そう——魔法少女が着そうな衣装に！

フリフリの可愛らしい女の子が着るような衣装。

「ご丁寧にズボンではなくスカートで、頭には猫耳カチューシャという……まさにオッサンが着れば悪夢となる姿。」

「ぎゃあアアアアア！ 何あれ!? なんなのあれエエエエエ！」

「ぬ、ぬう……。さすがの我とてあのような格好をした男は、ちよつと……」

「というか衣装が悲鳴あげそうなくらい盛り上がっているんだけど!? 筋肉のせいだ！」

アオにとつてリバースしそうな光景である。

常人からしたら卒倒。ゼストに憧れのある若者なら、絶望で引きこもりそうな姿だ。

「旦那……さすがに魔法少女の力を得たいからってその姿はねえよ」

「何を言う。彼らと渡り合うためにはこの程度でへこたれてはいかない。それにアギトよ。最近、この格好も悪くないし、しっくり着てる」

「気づいて！ 自分が変態になりかけていることに！」

もはや手遅れだろう。

戦友のレジアスが今の彼を見たらどう思うのだろうか。……一撃で吐血して倒れるなどアオは思えた。

オッサンに魔法少女服はある意味最強の兵器だった……。

「さあ、いくぞ！ 魔力の貯蔵は充分か!？」

「むしろSUN値の貯蔵がヤバイ……！」

ゲンナリしそうな戦いが今始まる。

ちなみにルーテシアは既に興味がないのか、地にお絵描きをしていたのは誰も気づかなかつた。

……彼女の描いてる絵が、キン肉マンであることに。

その頃、ガリユーはまどかと千香と交戦していた。

地下駐車場にこっそりとルーテシアの求めた品を持ち出そうとしたとき、まどかと千香と遭遇して交戦することとなった。

魔力の弓矢とシールド^{神器}で接近戦を得意とするガリユーだが、遠距離攻撃とその支援で苦戦するのも無理もない。

彼のミッションは『悪魔』が求めた品をルーテシアに届けることだが、なかなか離脱できない。

「くっ、黒光りするマツチヨさん強い!」

「君はテラフオーマだよな? 火星出身だよな!」

「千香ちゃん。何それ」

「火星産の……G?」

「きゃあああああ! それを早く言ってエエエエ!!」

本気モードとなったまどかは弓矢の数を増やす。

誠に遺憾なガリユーだが、反論しようにも言葉が話せない。

……哀れ。Gと一緒に扱われるガリユーなのだが、そもそも、彼はなんの虫なのかわからない。

まあ、それはさておき逆境に追い込まれたガリユーは次第に追い込まれていた。

ガリユーはやむ得まいと考え、品物を捨て、離脱しようとしたとき。無数の槍が生えていき、まどか達はやむ無く後退する。

『よお、苦戦してんじやねーか』

不敵に笑う赤髪。『サクラキョウコ』という使い魔が参戦してきた。その後ろに、『カナメマドカ』がオドオドしながらまどか達を伺っていた。

「あなた達……!」

「遂にお出ましかい? まあ、ちよっかいかけてたら出てくると思っただけだ」

「マミを殺した使い魔——自分達に似せた使い魔——を目の前にしてまどか達は荒ぶっていた。」

『ガリユー、退きな。ここはアタシらがやる』

ガリユーは頷いて、魔法陣の中へ消えていった。それと同時に『サクラキョウコ』が突貫し、千香のシールドとぶつかった。

金属音と火花が散り、突風が起きる。

『やっぱカテーナー！』

「当たり前だよ。そのそこのシールドと一緒にしないでくれ！」

まどかが魔力の弓矢を向けると『カナメマドカ』は相殺する形で魔力の弓矢をぶつける。

撃ち合いの最中、『サクラキョウコ』と千香は互いの得物をぶつけ合う。

千香の得物はナイフで、『サクラキョウコ』の槍と比べればリーチが短い。

しかし、彼女はそんな相手と何度も遭遇し、交戦してきた。よっていくら武器の性能で差があっても経験において千香が負けることはまずない。

『ちよーうぜー！』

「ウザさこそ変態の本懐さ！」

『んなら、コイツでどうだ！』

『サクラキョウコ』の固有魔法『幻惑』。

分身や相手の視界を惑わせるこの魔法で、千香の視界から『サクラキョウコ』が消える。

代わりに見えたのは、どこかの教会で無数の人形達が踊る世界だ。

千香は咄嗟に背後にシールドを展開すると、

「くっ……」

『へえ、直感で感づいたか！ でもそれだけでどうにかならないぜー！』

直感で動くようにしているが視界に写る偽りの情報で攪乱された千香。彼女の身体に徐々に傷が生じ始める。

「杏子ちゃん！」

『余所見したね！』

「くっ、あ……!!」

魔力の弓矢で相殺してきたまどかだが、気が散ったことで『カナメ

マドカ』に戦いの所有権を奪われる。

千香は膝につくと『幻惑』が解除され、振りかざす『サクラキョウコ』を目の前にする。

『これで一人目だ！』

降り下ろされる槍。あの槍が自身を貫かれたら、確実に自分は死ぬ。

そう思い、まどかが自分の名前を呼ぶ声を聞きながら、彼女は覚悟を決める――

――そんなとき、『彼女』が現れた

『彼女』はリボンで『サクラキョウコ』を縛り上げた。

『彼女』は弓矢を撃つ『カナメマドカ』の四肢をマスキット銃で撃ち抜いた。

紫のドレスを着たその女性は微笑む。

「あらあら……こんなところで喧嘩は駄目よ」

友江マミ――に似ている容姿だが、彼女の髪の色は黒でリボンも黒だ。

友江マミ仲間じゃないのに、なぜか二人はホッと息をついていた。味方なんだと安心していた。

『で、テメーはなにもんだ！』

『通りすがりのお姉ちゃんよ♪』

『んなわけあるか！ テメーみたいなおばさんクセーヤツなんかに――』

ジュドンツ!!と黒髪の女性は『サクラキョウコ』の頭を吹き飛ばした。頭を無くした身体はビクビクと震え、そして最後に黒髪の女性の無数のマスキット銃によって風穴だらけにされて、消え去っていった。

「失礼な娘よね。つい、メツしちやったわ♪」

(『メツ♪』で済ませるレベルじゃない……!)

見知らぬ女性におばさんと呼ぶことが、タブーなのは二人にはよくわかる。しかし、女性は限度というものをすっ飛ばしたようだ。

そんな猟奇的処刑を目の当たりにした『カナメマドカ』は怒りよりも恐怖に支配されていた。

「さてと。それじゃあ、楽しい楽しい質問タイムといきましょう」

ガチャツと銃口を向けられた『カナメマドカ』は涙で顔が汚れ、ガチガチと歯を鳴らして震えていた。

しかし、そんな彼女を救ったのはルーテシアの遠距離魔法陣だった。

どうやらガリユーが彼女を離脱させるために願い出たのだろう。ホツと息を吐いて消えた『カナメマドカ』は消えていき、謎の女性は残念そうに嘆息を吐く。

「残念ね……悪魔ちゃんの居場所が知りたかったのに」

「……あなたはいつたい」

「秘密よ♪」

ヒト指し指を口元に立て、瞬きしたときには彼女の姿はなかった。千香とまどかは狐に化かされたような気分で、呆然としていた。

「しゃんなろー!!」

キャロの拳がガジェットを貫く。吹き飛んだガジェットは、射線方向にいたガジェットに辺り、連鎖爆破を起こす。

出番のないフリードは『きゅくるう……』と黄昏ていた。

かつてのご主人様が様代わりしたら悲しくなるよね。

「あははは……ガジェットって殴れるものだったけ?」

エリオは現実逃避しながら、ガジェットを破壊する。

『つおい少女』ことキャロがガジェットを掴み、そのまま地へ叩きつ

ける。その影響で地面がひび割れ、盛り上がる。

「WRYYYYYYYYY！ 最高にハイッてヤツですウウウウ!!」

「キャラがおかしくなった件……」

その原因は衛のせい。筋肉に染め上げたものの末路はだいたいこんな感じである。

「スバル、いくわよ。クロスシフト!」

一方、ティアナ達はガジェットの破壊に奮闘していた。順調に破壊している彼女だが、どうも焦燥感がある。

彼女は自身が成長しているかどうか実感できてない。

順調に訓練はしている。けど、それだけで果たして足りているのだろうかと毎日疑問に思っていた。

ゆえに、彼女は今から無茶をしようとしていた。

『ツ、ティアナちゃん！ スフィアを六つもだなんて無茶よ!』

「平気ですシャマルさん！ 私はできます!」

ティアナのスフィアと魔力弾がガジェット達を貫く——が、一つはスバルに迫っていた。

「あ……」と気づいたときには近くまで迫っていた魔力弾。

誰もがスバルに直撃すると思っていた——彼女の間にヴィータが魔力弾を弾き飛ばすまで。

「何やってんだよテメェら!! ティアナ。味方になんで撃ってるだよ!」

ヴィータの説教に弁明するような感じでスバルは「自分が悪い」と言う。

ティアナは意気消沈しており、ヴィータは「もういい。すつこんでろ」と後ろへ下がらせた。

さすがに言い過ぎなところもあるが、ヴィータの責める気持ちはわかる。

誤射で味方に直撃させるなどあってはならないミスだ。それが実戦ならばなおさらだ。

ヴィータは二人が下がるのを確認してからガジェットに視線を向ける。そこで驚くべき光景があった。

チビソラが一撃一撃でガジェットを破壊していた。ガードしたり、援護射撃してくガジエツトだが、それにもものともせず斬り伏せる。彼の目に映るそのもの全ては敵。何もかも斬り捨てる。

「オイオイ……まさか」

ヴィータは見た。

彼の戦いを。

彼のあり方を。

彼の生き様を。

その姿は、九年前。『名前を忘れた男』によって化け物にされた管理局員達を皆殺しにした男の片鱗。

その背中は彼女がかつて知る英雄の姿。

「戻ったのか？ 神威……」

背中を見せる彼がフツと意識を失った。周りはガジエツトの残骸。全て破壊したのだ。

(まだまだってところかよ……)

片鱗を見せるチビソラにヴィータは期待感を高くしていた。

ゼストと衛の戦いはなんとも消極的だった。

拳を振るうが槍で弾いてまた距離をとる。まあ、その理由としてはアオの結界がゼストの奇行によってやる気をなくしたからだ。

真剣な場面で戦っていたら、f a t eのヘラクレスがなのはの格好で現れたら士気はあがるのだろう。

……吹き出して愕然する姿が思い浮かぶ。

アオは愕然していた。

『エース・オブ・エース』がまさか魔法少女になるなんて……。誰も想像できないことだろう。

「むっ、ここまでのようだ。では撤退するかルーテシア」

「逃がさぬぞー！」

拳をゼストに振るう。しかし、槍をクルクル回転させてゼストの足元に魔法陣が浮かび上がる。

「くらえ、リリカルマジカルー！」

「やめて!? そのセリフだけはあなたが言わないで！」

悪夢である。リリカルマジカルという詠唱でゼストとルーテシア、アギトは転移した。

逃げられたことに悔やむ衛は地へ拳を落とす。

「おのれ……いつか我が筋肉で思い知らせてみせる！」

「……絶対もう戦いたくない」

そう呟くアオだった。

戦いは終わり、ティアナは裏手で見張りをしていた。

スバルは自分に非があると言いながら、ティアナを励まそうとするも八つ当たりで怒鳴って、彼女をみんなの元へ先に行かせた。

一人残されたティアナは、目に涙を浮かべ悔し涙を流す。

そんな彼女の元に、一人のパテシエが近づく。ティアナが振り向けば、そこには雷斗がいた。

「オイ、無能。なんでここで泣いてやがる。とっと、合流しろ」

「……アンタに関係ないわよ。それと無能で悪かったわね」

「悪いに決まってるだろ無能。味方に誤射したテメエの気持ちなんか知らねーし。ぶっちゃけ、みんなを待たせてウジウジしているのが腹が立つ。とりあえず、合流すんぞ」

「嫌だと言ってるでしょ！ アンタに何がわかるのよ！」

拒絶する。怒鳴って彼に八つ当たり。

しかし、雷斗はものともせず、冷めた視線を向けていた。

「あん？ テメエの気持ちなんか知るかかって言ってるだろ。ギャー

ギャー喚く元気あんなら仲間にも八つ当たりすんじゃないよ」

「ッ……」

そうスバルにも八つ当たりした。それは更に自己嫌悪させるきっかけであった。

ティアナは自分がしたこと、スバルが励ましたのに拒絶し、八つ当たりしたことを恥じた。

雷斗は知らねーよと言わんばかり、後ろポケットに突っ込む。

「失敗したなら次にいかせ。それ以外がダメエがスバルの小娘に報いることだろーが」

「……………」

「それと、その失敗をいつまでも忘れんな。それがダメエを強くするもんだ」

「つーわけでとつと来いや小娘」とティアナの腕を掴み無理矢理連れていく。嫌がる彼女に気にせず、彼は連れていく。

なぜ、彼がこんなことをしたのか理由。

——それは、気に入らないからだ

かつて一人で戦おうとした男がいる。

その男は一人になり、誰にも頼ることなく、心を許すことなく、戦ってしまった。

その果てに彼は傷つき、周りを傷つけてしまった。

そんな男のあり方を見てしまったから、知ってしまったからティアナのあり方に腹立っている。

その男と違って八つ当たりをするし、何より一人でなんとかしようとするのが腹立たせる。

(馬鹿弟子のようにしてたまるかよ……クソが)

雷斗は気に入らない。ゆえにその現状を何とかするように思惑する。

第一百七話 それは違うぜ

(??side)

ティアナの失態はなのはが厳しくお叱りになった。まあ、無理な魔力弾の精製と誤射は悪いと言えば悪い。

ティアナは反省し、無理な魔力弾を精製しない——ということを決めたがそれをコントロールできるように努力することを決意していた。

午後の訓練はお休みにも関わらず、彼女一人で自主トレに励む。

(私が凡人だから……努力しないと追い付けない！)

周りは天才ばかりだ。エリオとキャロはあの歳でBランクの魔導師。加えてフェイトの教え子であるし、キャロは衛の教えを少しばかり受けてる物理最強の召喚術師。

スバルはポテンシャル的には将来性もあり、バックには陸戦魔導師の部隊がいる。

そしてチビソラ。衛はやてが強いと称している管理局では謎の存在——『神威ソラ』——に似た少年。

ポテンシャルは誰よりも高く、そして今回の戦いで彼は覚醒しかけた。ゆえに、彼が隊長達と渡り合える日は近い。

そんな中で自分はなんだ。エリートでもなければ、強くもないただの凡人……。そんなエリート達が集まる部隊で自分だけが平凡で無能。

それが嫌だった。自分は無能なのはわかるが、無能が原因でチームに迷惑はかけたくなかった。

だから人一倍に努力する。誰よりも強くなろうと鍛えぬく。ティアナは四時間休むことなく、トレーニングを続けた——が、やはりもう限界だ。

肩を上下に動かし、息を荒くさせている。疲労で、膝に手をつけていた。

「なーにやってんだ」

「ヴァイス陸曹……」

ヴァイスはずっとティアナの自主トレを見ていた。休むことなく続けたことは立派だと思った。しかし、彼女の自主トレは度が過ぎている。

「あんま根積めし過ぎてるって倒れるぞ」

「大丈夫です。それに、自分はこうでもしないとみんなには追い付けません。なにぶん凡人ですから」

「凡人ねえ……俺としたらお前さんは優秀なんだが」

ヴァイスの言葉に気にせず、ティアナは再びトレーニングを続ける。彼は嘆息を吐いて、彼女のトレーニングを見守る。

（なんつーか孤独の中で生きてるよなコイツ。周りをライバル視するあまり、頼れる人がいないって言うか……）

記憶の中に彼はある一人の少年を脳裏に浮かべた。

その少年は自分より歳が下にも関わらず、孤独の中で戦おうとしていた。

少年には味方がいた。仲間がいた。だが、少年の前から姿を消した……。

少年に対して何か非があったわけでもなく、ただ自分から去っていった。

その少年の背中を見る度に、寂しい気持ちになる。もつと自分にも頼ってほしいと願っても彼はそれを許さない。

だって、そうしたらお前自分もいなくなるだろ？

彼はそう言った。失う理由が誰かに頼ることだから、彼は誰にも身に寄りかかろうとしなくなった。

ヴァイスはふと空を見上げる。満点の星空の中で、ティアナの掛け声と風の音が聞こえる夜の時間は過ぎていく。

その頃、隊長陣はティアナのトレーニングに不安に感じていた。彼女の強さによる固執は異常だ。

なぜ、そんなにも固執するか知らない者もいたので知っている者——衛とはやて、なのは——が説明することとなった。

彼女の兄は若くしてある事件——『最初の使い魔事件』で亡く

なっている。遺体は利き腕しがなく、身体のみ消え去ったという謎の事件だ。

使い魔を知るまどか達の話からすれば、使い魔は人を食べるとのことからおそらく、身体は使い魔達の腹の中だろう。

話を聞いた彼女達はなんとも言えない表情になって空気が沈黙した。

ただ一人、アオは、

（お兄さんの夢のため、か……。じゃあ、ティアナ。君の『夢』はなんだったのかな）

ティアナの夢はディードラの夢だったのだろうか。そうとは言い切れない。

幼い彼女とて何かの夢があつたかもしれない。

何が言いたいのかを説明するとアオは、ティアナはディードラ・ランスターの夢に囚われている。

亡き兄のために、夢を叶えようとする少女の物語。

耳の良い美談だが、実際にそうなれば死者に囚われた質の悪い話ではない。

（なら、彼女はいつか卒業しなきゃ……。亡き兄に……）

囚われた過去。それをなんとかしなかなければならないとアオは拳を握りしめる。

さやかと杏子は『翠屋二号店』にて、雑談していた。今日は二人は出勤することなく、六課の警備で待機していたため、ホテル・アグスタ戦に参加していなかったのだ。

日が傾き始め、そろそろ閉店と言ったところで一人の女性が入店してきた。

片目を眼帯している凛とした女性だ。麗人と言った服装をしたその女性——キアラ・グレアムはさやかと杏子のいる席につく。

「待たせたな二人共」

「全くだキアラ。こちとらうまい棒談義で盛り上がっていたところだぜ」

「チュッパアメでも盛り上がったよねー。特にワサビイカ味」

「あんな味を甘いものに混ぜ合わせるなよ……」

「そうか？ わたしはよく食しているがね」

「オメーの味覚どうなってる!?」

全くその通りなことなのだが、「では本題にさっそくいくぞ」とキアラは話を変える。

「ホテル・アグスタにガジェットが現れている間、こちらでも市街地に使い魔が現れ、また十代前半の女人を誘拐しようとしていたらしい」

「ここ最近、そんな女の子が増えている。」

統計からして行方不明となった少女はちよくちよくいたが今年になって爆発的に増えている。

「なんでまたそんなことを……」

「たぶん、魔法少女の量産だろ。洗脳して仕立てあげりゃ、立派な戦力だ」

杏子の答えにキアラは頷く。現にアオがその現場に赴き、対処した。

衛の部隊『マツスラーズ』ではアオは前線で戦う副隊長である。

そのため、先ほど隊長達と会話に混ざっていたのは情報の共有化なのだが、今はどうでもいいことだ。

アオが戦闘を行ったとき、たまたまミッドに帰還していた執務官ごとキアラが指揮をとっていた。そして、そこで驚くことが起きた。

『魔女』が出現したとお!？」

「ああ。ふと、視界の済みに映る影が気になって見ていると、そこから『魔女』が……な。その『魔女』は形をつくる前にアオが討伐してくれた。それを気に使い魔も消滅していき、残されたのは……」

「誘拐されていた女の子だったと?」

無言で頷くキアラに、杏子の眼に鋭さが強まる。

他人がどうなるうと関係ないが、それでも関係ない人間を巻き込むのは杏子とて許容できない。

「……直に部隊が別々で行動することとなる。そのときになればこのわたしもそこに赴任される」

「つまり、アタシやさやか。まどか達を含めた面子で出動ってことか？」

「左様。そんなことはぜひとも起きてほしくなかった状況だがな」

二手に別れる。それは事件が複数起きる可能性が高いということだ。今回のようなこともその一つだ。

キアラの背景に映る太陽が、ビルによって隠される。それは一つの終わりを示していたような気がした……。

ティアナとスバル。この二人はなのはと模擬戦することとなった。ティアナがヴァイスに注意された後、スバルだけでなくエリオ、キャラが一緒に訓練を誘ってきた。

一人でやりたかったがフォワード勢の仲間意識の熱意にティアナは負け、共に鍛練をした。

まあ、キャラがプロテインを勧めてきたが丁寧に断っていたりもしたが。

そんなこんなで今日の模擬戦でティアナはなのはに勝つことを目標にこれまで練習したコンビネーションを実行した。なのはから見れば危なかつしく、とても気が気でいられないコンビネーションだ。

「スバル。危ないよー！」

「ごめんなさい。でも上手くいきますからー！」

どこがだ。と今日は店を休みにした雷斗は内心毒づいた。

そもそもあんな危ない動きはなのはが教えるはずがない。自分で

考え、練習し、行動したのだろう。

(にしても……なんだ。この鬼気迫るような感じは)

必死——というより、余裕がないような気がしてならない。隊長陣達もそれを理解しているのか表情が優れない。

そして雷斗の予感の中した。

ティアナが背後から魔力のダガーを、スバルは前面から拳を。挟み撃ちの形で攻めてきた。

フツとなのはは冷たい眼差しになり、BJを解除（服装は変わらなかった）し、二人の攻撃を素手で受け止めた。

煙が晴れたとき、ティアナのダガーを掴むなのはの手から血が流れていた。

「おかしいな……。私、すっかり二人に教えたはずだよ？　ねえ、私が教えたことは意味がないことなの？」

なのはは二人をそのままスバルの『ウィングロード』へ投げ捨て、指を銃のようにする。そこから魔法陣が浮かび、すっかり標準を二人に向けていた。

「練習通りしないと、意味がないよ？」

『ショートバスター』。小さな砲撃が二人に直撃する。吹き飛ばすティアナは体勢を立て直して、なのはに『クロスミラージュ』の銃口を向けており、スバルは立ち上がるもなのはのバインドで動けなくなっていた。

「わたしは、強くなりたい！　だから、だから……!!」

なのははティアナの言葉に耳を傾けず、無表情でティアナへ『ショートバスター』を撃ち込んだ。ティアナの魔法は発動することなく、顔を俯かせ、戦意をなくしていた。

既にティアナの戦意はないのにも関わらず、なのはは『ショートバスター』を撃つ——が、それは二人組によって弾かれた。

「なんのつもり？　アオくん、雷斗くん」

フンツと鼻で笑う雷斗に対して、アオはオロオロしていた。「え、あれ？　なんで僕も？」と巻き込まれましたと言ったような表情で雷斗を見ていた。

「高町なのは。テメエ、なんで戦意のない小娘を撃つ必要がある」

「徹底的に潰してこそ、勝利。ってあなたから教わったけど」

「……あ、そうだった。テメエの言う通りだわ」

「オイ」

ビシッとツッコむアオをスルーして、雷斗は「しかし」と言い始める。

「それは生徒にやることじゃーねだろ。現にテメエは教える立場だろ」

「私の教導が間違ってるって言いたいのか？」

「それは違うぜ」

雷斗はなのはから視線を外し、視線を空に向ける。

「教導に『間違ってる』とか『正しい』とかはない。あるのは『伝わっている』か『伝わっていない』ってことだろ」

正解間違いの話ではない。教える側は学ぶ側に何かを教えることが、彼らの使命だ。それに間違いや正解の話は個々の価値観によって違う。

しかし、誰もが共通して正しくない教えと言えるのは学ぶ側が『伝わってない』教え方ではないだろうか。

「ここにいる馬鹿な小娘共はお前の教えが伝わっていないのが証拠だ。だからティアナは生き急いでもうことになった」
「……………」

「ま、テメエの教えは『間違ってる』とは言わねーよ。だが、方法が駄目だ。伝わらねーやり方じゃ、教える側も学ぶ側も、両方にストレスがかかるだろ」

「そこで、だ」と雷斗は続けて言い出す。

『神器』無しの古宮アオと高町なのはの模擬戦を開催してーわけよ」
「なんで!？」

ニヤリと愉しそうに笑う雷斗にアオは「聞いてないよそんなこと!？」とツッコむ。

「ほら、『神器』無しのテメエは凡人だろ。なら、高町とギリギリで戦ってりゃ、馬鹿な小娘二人にも学ぶことあるだろ」

『神器』無しの僕はなのはにボロ負けしてますよ!? しかも全敗!」
「いやー、『神器』無しのテメエの成果がここで見られてよかつたぜ」
「聞いてよ人の話を!」

「へー……『神器』無しで私に挑戦するだ。アオくんは」

ゴゴゴゴ!!となのはの周りに威圧感が。「ひい!」とドン引きするアオは雷斗に悪態を付こうとしたら、既に彼はスバルとティアナを米俵のように抱えて逃げていた。

「あばよ。とつつあん、生きて帰ってこいよ」

「この鬼イイイイ!!」

涙目になるアオになのはは容赦なく砲撃をぶちこむ。回避したアオは『召喚術』で木刀を喚び出し、戦闘体勢に入っていた。

彼は地面に魔法陣を描くが、それを発動されまいとなのはが砲撃の応酬を浴びさせる。戦闘が始まり、枯れは逃げ、なのはが追いかけるという戦いになった。

一方、ビルからビルへ跳んでいる雷斗にティアナは口を開いた。

「……レアスキルなしで、あのははさんに勝てるの?」

「さあな。全敗してるのも事実だし」

「なら……」

「だからと言って勝てないって決めつけるな。全敗だから勝てない?

んなもん、今から勝てば逆転劇だつての」

「それに」と雷斗は続ける。

「俺がいない間に『英雄』って呼ばれてたアイツは、『神器』無しでも化け物だったみたいだぞ」

視線を向けたのは小さくなった英雄。今は立ちながら居眠りしていた。

……ホント、緊張感のないヤツである。

第一百八話 負けたくない少年

古宮アオの要は『神器』である。彼が『救世主』と言われる由縁は、『無血の死神』と同じ『神器』の力があつてこそだ。

そんな要がないかれが仮に魔導師に挑むとする。

惨敗である。理由はまず、彼は空へ飛べない。足場を作つて跳躍はできるが長い間、空中にはいられない。

また彼には遠距離の攻撃やそれに対する防御ができない。回避はできても数回だけで、後は集中砲火に合うだけだ。

つまり、なのはのような遠距離専門の魔導師で、しかも空中戦を得意とする相手には勝てないのだ。

空に飛ばれたら、そこから先はワンサイドゲームだ。一方的に砲撃を撃ち込まれる。

高校二年のなのはと模擬戦をしているアオはまさにそんな状態だった。

リハビリを兼ねた模擬戦で、アオは一方的にやられていた。

「ちよつ、それ反則！」

「勝てばよかろうなの!!」

ジユドンツと砲撃をぶちこまれ、口から煙を出しながらアオは倒れた。これで十戦全敗である。

『神器』のないアオくんってゴミだよね」

「ひどい！ がんばってるのにひどいよなのはさん！」

「事実でしょ。この私に無傷で敗北してるし」

「……………」

痛い話である。もし、『神器』が使えなくなれば、彼は普通に成り下がる。

審判をしていた雷斗は嘆息を吐きながら。

「古宮。テメエの課題は『神器』に頼りすぎるところだ。『神器使い』にとって『神器』はもつとも使う得物だが、それが使えなくなる状況は

ないことはないぞ」

「で、でも……」

「うちの馬鹿弟子でも『神器』無しで数百をぶちのめしたぞ。そこがテメエとヤツの違いだ」

神威ソラと古宮アオの差はまさにそこだ。ソラは『神器』がなくても、変わらない實力を見せられる。それは幾度の国との戦いに勝利したゆえにである。

対してアオが勝利してきたのは自国の内乱である。争いこそ小さく、長く戦ってきたわけでもない。

それゆえ『神器』のみしか使ってこなかった。

「後々、そーゆヤツと出くわすことになるんだ。だから目標として高町を膝まつかせろ」

「ふっ、アオくんごときに負けないよ!」

「テメエはテメエで接近戦に慣れる。目標は俺の攻撃全て防げ」

なのは は にげだした!

雷斗 は 十万ボルトをくりだした!

「あばばばば!」

「こうかばつぐんだな。とりあえず、逃げたら今度はケツにカラシぶちこむから」

「変態! 鬼畜!」

「……あれ、ホントに痛かった」

「されたの!? ガツテム。アオくんの処女も手にいれるつもりだったのに」

とそんな平常運転をぬかすのはである。

アオは駆ける。逃げ回る。

正面からぶつかりたいところだが、過去にあったように彼は空中戦

への土俵に踏み込めば確実に集中砲火を受ける。

アオができることと言えば、なのはから離れ、機会があるまで隠れることだ。

「無駄無駄なの!!」

「うきやあつー!」

しかし、やはりなのはの砲撃はビルごと貫く怪物だ。ビルに隠れようとしたら、そのビルごと破壊した。徐々にビルが破壊されていく中で、アオは思わずなのはにツッコむ。

「管理局がそんなことしていいのか!」

「勝てばよかろうなのアोकくん! 勝てばジャステイスなの!」

「そんなの正義じゃないから! ジェノサイドだから!」

勝てば官軍という言葉があるが、なのはを正義として捉えることしたくない。

現にシュミレーションとは言え、ビルを破壊し、被害総額を増やしているわけなので。

彼女を正義の味方にしたら管理局は確実に財政難に陥るだろう。

「はっ、とっ」とアオはビルを駆け上がりながら、なのはからのスフィアを回避していた。

追尾してくるスフィアに、アオは遂に空中戦へ挑むことを決意する。

足場を作り、その場でスフィアを全て破壊した。

「へえ。やるつもりなんだ」

「さすがに陸戦ばかりじゃ勝てないしね」

「なら、覚悟するの」となのははレジングハートを構える。そこから集束されていく魔力にギョツとアオは冷や汗をかいた。

「い、いきなりそれ!」

アオの足元からベルカ式の魔法陣が浮かぶ。ベルカ式の『プロテクション』という魔法だ。確かに、これならば砲撃は防げないことはないが魔力にある質量で飛ばされる可能性がある。

……さらになのはが今から撃つ砲撃は、はつきり言って自身の最強の砲撃は魔法だ。

その名は――

「これが私の全力全壊!! 『スターライトブレイカー』!!」

元氣玉とかめはめ波を合わせたと言われる最強の砲撃がアオを呑み込んだ。まさに激流に呑み込まれたと言つてもいいくらいだ。質量関係なく、アオは確実に砲撃に流されているはずだとなのは考える。

魔法が収まると、そこにいたのはひび割れた『プロテクション』と服がボロボロになったアオが立っていた。

「……嘘。なのはの砲撃に耐えきつたの!?!」

フェイトの驚愕する声に、なのはは同意していた。ありえない。あのダムから噴き出した激流のような威力を持つ砲撃に真っ正面から耐えきつたのだ。

困惑するなのはに、雷斗はニヤリと不敵に笑う。アオは動揺するのはを好機とばかりに足場を蹴った。

「そ、そんな。どうしてアオさんは……」

「驚いたか小娘。あれがアイツの努力の証だ」

雷斗は隊長陣のいるビルへ着地すると、周りが説明するようにせがまれた。なぜ『プロテクション』のような薄いシールド魔法だけでの大規模な砲撃を耐えきつたのか。

そんな全員に満足した雷斗は得意気に説明した。

古宮アオが使ったのは特殊な『プロテクション』である。彼が構築した術式には、『プロテクション』にベクトルを加えることだ。

魔法をそっくりそのまま跳ね返す『反射』などに使われることもあるが、威力が高い魔法ほどこのベクトルが逆効果になり、身体が吹き飛ばされることがある。

なのでアオが構築したのは逆方向のベクトルではなく、受け流すような形のベクトルにしたというわけだ。

「せやけど、そんな簡単に全ての魔力を流せるはずがないやん。あんな大規模な魔力を真っ正面から受けたら、漏れた魔力が『プロテクション』を食い破るんじゃない……」

「そうだ。はつきり言つて『受け流す』ことは高度な技術力と経験が必要だ。八神はやての言う通り、受け流しきれなかった魔力によつて『プロテクション』が食い破るかもな」

「だけど、と続けて雷斗は言う。」

「アイツの『魔眼』は『全ての流れ』がわかるもんだぞ」「あつー！」

ここにきて声をあげたフェイトだけでなく、全員も思い出した。彼の左目のレアスキル——いや、体質とも言える『魔眼』は全ての流れを読み取ることができる。

動作の流れ、血液の流れなどなどあらゆる流れを読み取る。もちろん、魔力の流れも読み取ることができる。

物質の一つ一つをピースとして捉えることができれば、パズルのように組み立てることができることと等しいのだ。

アオの偉業は魔力干渉と魔力の動きが見えることだ。その凄さがわかるからこそ、雷斗は彼の実力を認めている。

(が、それでもデメリットがある)

そのデメリットこそ、左目の魔眼にある。見えすぎるその眼を使用しすぎるとどうなるか……。

(気づいたようだな。コイツらはこの戦いの勝敗の分かれがなんなのかわかつているようだな)

雷斗はアオに視線を向ける。先ほど飛びかかって放った斬撃は、辛うじてなのはに回避され、なのはに追撃を行っている。

なのははまだまだ動揺しており、スフィアで動きを封じようとしたが次々と破壊される。

今こそ、アオにとつて好機で同時に最後の攻撃の機会だ。

なのはがそれに気づいたとき、アオは確実に負ける可能性が高まる。

(短期決戦だ。時間は長くはないと思え、古宮アオ)

アオの視界には次々と情報が流れていった。どのように魔力が動くのか、そしてなのはがどんな魔法を撃とうとしているのか、全て眼で理解する。

しかし、同時に彼は頭痛と吐き気に襲われていた。

人間の受け入れられる情報を脳で処理できることには限度がある。

例えば、パソコンの入力された全ての情報を脳で処理しようとする。できないことはないかもしれないが、そんなことをすれば時間と労力がとてもかかる。

さらにそれは休憩もない処理なので、脳が行える処理に限界を迎える。つまり、オーバーヒートで脳が壊れる可能性があるのだ。

魔導師もまたこのようになる可能性があるのではないだろうかと思えるが、彼らはデバイスで演算処理を肩代わりしているし、『並行処理』^{マルチタスク}という基本中の基本魔法で高度な演算処理を行っているため、オーバーヒートすることなどまずあり得ない。

……しかし、アオは魔導師のような複数の演算処理ができない。やろうとしても二つの演算処理だ。

ここがなのはとアオとの差が出ている。なのはは『並行処理』を行うことで、魔法の構築、その実行と眼に映る相手はどのように動き、考えているのか二つの思考回路を持っている。

彼女が行う『並行処理』は二つというより、かなりの数で行っているため、魔法の構築、実行の処理が早く終わることができる。

アオはと言うと、できる『並行処理』は最大二つまでなので魔法の構築とその実行はできても、処理に時間がかかる。おまけに相手の動作を見極める眼による情報が膨大に脳に入っているため、彼の情報処理が間に合っていない。

つまるところ、脳がオーバーヒートしそうかギリギリの状態なのだ。

「ぐっ、うっ……」

呻き声をあげながら、なのはの魔法を魔力干渉を付与させた木刀で受け流す。

そして遂に、彼の身体に異変が起きる。

「鼻血……っ？」

「ッ、はあアアアア!!」

彼はもはやなりふり構わず、攻めに制した。防御など気にせず、とにかく攻める。

なのは『プロテクション』で彼の攻撃を防ぐ。

「エロいこと考えてるのかなー？　ねえ、アオくん」

「く、あアアアア！」

「……そんなにエロいこと私にしたいんだ」

「んな、わけ、あるかアアアア！」

ツツコミながら彼は木刀を振るい続ける。相手が離れようとしても、食らいつく。

そんな気迫が彼から感じられた。

(……まあエロいことはバッチコイだけど、どうもアオくんから余裕がなくなったね)

アオに焦燥感で頭がいつぱいいつぱいになったことで、なのはは冷静になっていた。

先ほど優勢だったのに、今の彼が劣勢になっていた。それはなぜか考える。

そして思い至ったのは、

「演算処理の限界だね」

「ッ……」

「うんうん、凶星だね。アオくんの眼は魔導師からしたら天敵と言ってもいいくらいの脅威だよ。でも、同時に自身の脅威だったりする。違う？」

正解だ。気づかれてしまった。

アオの勝利はもはや皆無だ。なぜなら、今までのことを踏まえて導き出されるもの、それはアオは――

「短期決戦しか戦いきれない。それも神威くんよりも」

性能からすればアオの方がソラより上なのだが、『神器』の燃費の悪さと脳への負担がある。

そのため、アオはソラよりも長く戦えない。

なのは気づかれてしまえば、後はあえて持久戦に持ち込む。

そうすれば、アオは力尽きてじっくり料理ができるというわけだ。
「というわけで」

なのはは砲撃をバンバン撃ち放つ。

これには、アオも『ベクトルプロテクション』で受け流すしかない。
強力な砲撃で、彼のシールドはひび割れ始める。

『ベクトルプロテクション』はシールドが厚くない。ベクトル操作
でシールドの層が薄くなっているのだ。

バンバン撃たれてしまえばいくら受け流すと言っても、シールドの
耐久力に限度があるのだ。

その限界を迎えたのは、十七回目の砲撃だった。シールドは砕け、
アオは吹き飛ばされる。

血が噴き出し、次に視界に写ったのは獰猛な笑みを浮かべて砲撃を
放とうとするなのはの姿。

「ぐ、がアアアアア！」

真つ正面から。それも防御もとれないまま桜色の光線がアオを呑
み込んだ。

タツと降り立ったなのはは地へ叩きつけられたアオを見る。彼は
ボロボロになりながらも、立とうとしていた。

木刀を杖にし、立ち上がることはできたがもはや戦える状態ではな
い。

「ここまでだよアオくん。あなたは私に勝てない」

神器を使わず、『エース・オブ・エース』に挑むことはそもそも無謀
なのだ。チビソラであっても、なのはの本気には勝てない。

雷斗であつても神器を使わずして勝利はありえない。

『神器使い』達は『神器』があつてこそ、化け物になれるのだ。
「なんで立とうとするの？ これ以上は苦しいことだらけだよ？」

なんとなく彼女は聞いた。この戦いは既に決した。これ以上は無
意味だと。

しかし、彼は立ち上がる。それはなぜか聞きたい。

アオは「なんだ。そんなことか」と言つて。

「負けたくないから……。何がなんでも、なのはに認められたいから。僕は何度でも立ち上がるよ……」

アオの言葉にフォワード勢は耳を傾ける。

「僕ははつきり言つて『神器』がないとただの無力な人間だよ。いくら『魔眼』があつても、これは魔法があればこそ発揮できるものだよ。……でも僕は魔法が苦手だ」

「できてても身体強化と軽いプロテクションくらいだしね」

「恥ずかしい話……勉強は得意じゃない」

孤児の彼が学んだのは最低限の礼儀と計算である。

文字そこそこで、覚えることと言つても生きるための最低限のことしか彼は知らない。

「ホントなんの取り柄なんてないんだよ僕には。ソラさんのような、才能の塊じゃないし、ティアナののような努力の天才にもなりきれない」

だから、と続ける。

「悔しいから、僕は彼らに蒔けないために努力してきた。雷斗さんの教えに従つてこれなんだ！」

「……！」

「理想のために戦つてきた僕は、非常な現実の中で生きてきたソラさんと比べたらまだまださ。けど、いつかあの人に追い付きたい。そして越えたい！」

それが古宮アオの目標。彼が目指すべき到達点。

極めて遠く、果てしなく長い道のり。実現は不可能に近い。

「でも、君はもう戦えないよ。そんな身体で何ができるの……？」

なのはは気を緩めていた今だからこそ、彼は人指し指と中指を立てる。ニコツと笑つて彼は、消える。

「えっ……」

そんな馬鹿な。消えることなんてあり得ない！となのはは困惑し、冷静でいられなくなった。

そして全員が「あつ」と気づいたときには、背後。宙で回りながら

木刀を振りかぶるアオの姿だった。

「ッ、レイジング——」

「遅い！」

ズバァンツと脳天から決められた斬撃がなのはの意識を飛ばす。手加減したつもりだが、脳を揺さぶられ、それなりに応えたはずだ。

「ホント……ソラさんみたいな天才が羨ましいよ」

できないことをあっけなくしちゃうもの。とアオは呟いて仰向けに寝転がった。

第百九話 和解と……

「よし起きろタコ」

「グエツ」

腹部に衝撃を受けて、ティアナは目を開ける。

そこは医務室のベッドの上だった。彼女は疲労でいつの間にか寝ていたようだ。

「い、いきなり何をしているのですか」

「いつの間にか寝ていたこのバカの眠気覚ましだ」

「バイオレンスです。女の子にやることじゃないですよ」

「安心しろ。俺は男女平等にぶちのめす主義だから」

（そんな平等嫌だわ……）

苦笑しながらシャマルはティアナを介抱しながら、事の結末を教えた。

なのはは神器無しのアオによって敗北した。何百回の敗北の末に彼は白星を手に入れたようだ。

敗北の決めては『送還術』という『召喚術』とは真逆の転移魔法だった。

『神器』など持ち主に武器や召喚獣を喚ぶとは逆に術者を召喚したモノを送るといふ魔法だ。

アオの持ち物は木刀のみで、ならば『送還術』は発動できないのはとティアナはフェイトと同じようなことを言っていた。

そのとき、雷斗が答えた。

「最初に描いていた魔法陣を使ったんだよ。アイツが魔法を使うのに、わざわざ地面に描く必要がある。なら、脳内でプログラミングで構成した魔法を使えば言い話だ。ユーノ・スクライアのようにデバイス無しの魔法をな」

最初に描いた魔法陣。あれこそ、『送還術』を発動させるための、自分の領域を示すマーキングだった。

「……スゴいですね。それを計算してやったことが」

「えつとね……どうもアオくんは意図して使ったわけじゃないみたい」

「は？ だってそれがあつたからこそ勝てたんじゃ……」

「いいえ、あれはアオくんがなのはちやんの『スターライトブレイカー』なんかの超極大砲撃魔法から逃れるために用意していたみたいなのよ……」

つまり逃げるためのマーキングが勝利に導いてしまったという――偶然。運良く勝ってしまったということである。

「この人も爆笑していたわ……。『こんな偶然もあるだな。てかワロタ（笑）』って……」

「たりめーだ。んな、勝ち方されたらもう失笑どころか爆笑だわ」

「な、なんなのですかそれ。納得できません……!」

「でもこれが実戦……命のやり取りだったら高町なのはは死んでいたぜ？」

雷斗の言葉にティアナはゾツとした。どんな強い人でも、油断や奇策においてあつけなく敗北する。そして命を落とすという話が今このとき、シャマルの口から出たのだ。

納得できないのはわかる。

認めたくないのはわかる。

けど、もしも。なのはアオのような敵と戦い敗北することはあり得ないこともない。

それが低確率であれど、いつか起きるのだ。

「ティアナ。今回の件で俺が何を伝えたいかわかるか」

「何を……ですか？」

「それが今回の宿題だ。まあ、答えられなくてもいずれ話すつもりさ」

「意地悪よねー雷斗くんは」

「三十路のオバサンは黙ってる」

シュバツ（拳が飛び込む）

ガシツ（拳を受け止める）

「……あらあら、誰がオバサンですって？ 私は永遠の十七歳。云わ

ば女子高生よ」

「オバサンが女子高生なんて、マニアックなヤツしかなびかねーよ」

「その喧嘩買ったわ。衛くん、直伝の拳を受けてみなさい……!!」

ボクサーのごとくスパークキングをかけるシャマルに雷斗はどこ風吹こうが、気にせずヒョイヒョイツ避けながら、ティアナに言う。

「お前はもう部屋で休んでろ。ま、宿題を考えながらな」

「はあ……では」

お大事にーと言われてからティアナは自室に戻り、自分がしでかしたことを後悔していた。

自分勝手な行動で、なのはに失望されたのではないかとマイナスな考えを浮かべる。

そんなとき、アラートが鳴り響く。何かと一斉が顔をあげる。

東部海にてガジェットと水生生物に模した使い魔達がウロチョロしているようだ。

ヘリポートに集まる面々だが、空中戦になることからまだまだ浅いフオワード勢は待機メンバーとされるがティアナだけ外される。

実質、今回の出撃から外されたということである。

「わたしが言うこと聞かないからですか……」

「ティアナ……」

「わたしは教えを守り、練習もしつかりしています。わたしはみんなみたいな才能がないです……だから、たくさん練習して追い付こうと！」

「黙れ」

とても冷めた声がフオワード勢から聞こえた。

スバルじゃない。エリオでもキヤロでもない。

隊長達は一言も口を開いていない。

では誰だ。今の少年の声は。

「隊の教えを守らないものが、集団に加わるな。目障りだ」

「ソラ……っ？」

いつもの少年らしくない。キラキラしていて、真っ直ぐ純粹そうな瞳が、とても暗く光がない瞳になっていた。

「アンタに……アンタにわたしの気持ちかわかるの!？」

「わからんし、どうでもいい。オレは和を乱す存在と共にいたくないだけだ。それで死者が出たら誰が責任をとる？ 隊長達に矛が向けられるに決まってるだろ」

「ッ……」

今回の任務で失敗したら、もし死者が出たら隊長達に責任追求される。

だからと言ってチビソラみたいな子どもに言われっぱなしなのがシヤクなので反論しようとしたとき。

「彼の言う通りさティアナ・ランスター」

「キアラ執務官……」

眼帯をつけた美女が、チビソラを擁護する。

「私情で我々に危険をもたらさないでくれたまえ」

「私情だなんて。わたしは……!」

「私情だろうが。貴様は自らのミスを、失態を晴らしたいがために此度の任務だろう!」

「ッ!」

凶星だった。なのはやみんなから失望されたくなくて、無理でもがんばろうとした。

まだがんばれると思っていた。だけど、もう限界だった。

疲労で何時間も寝ていたのがその証拠だ。

「貴様はがんばっている。それは認めよう。しかし、なんのためにがんばっている？ なんのために戦おうとする」

「……それは……」

何も言えなかった。兄の失態を愚弄した上官はもういない。兄の仇討ち、と言っても犯人はわからない。

ティアナは自分のためしか戦おうしていない。それを指摘され、黙り込んでしまった。

「戦う目的、理由を得てから任務に挑みたまえ。……ここは学校のよ

うな場所ではない。命を懸けた戦地だ。子どものように喚くならば、ここから失せろ」

キアラは厳しいことを言っただけなのはには残るように命じてからチビソラの後ろ襟首を掴んで、引っ張ってヘリコプターに乗り込んだ。「うにや!?! なんてオレも!?!」

「偉そうにティアナを注意しただろ。ならば、貴様は乗る資格はある」
「キアラの姐さん。本音は？」

「乗り込んでいる友江さやかと友江杏子の足場作りの要因だ。彼女達のためにステージ作りしたまえ、労働奴隷」

「まさかの奴隷扱い!?!」

いつもの雰囲気に戻ったチビソラを引き連れて、ヘリコプターは出発した。

残されたフォワード勢は、ティアナをなぐさめようとしたとき、シャーリーが手招きしていたのでそれについていくのだった。

シャーリーが見せたのは高町なのはの過去だった。一緒にいたなのはは抵抗したものの、雷斗にグルグル巻きにされ、恥ずかしい過去を暴露されることとなった。

フェイトとの出会いと闇の書の事件、そして撃墜事件までの詳細を映像を通して話された。シグナムもキアラの言った通り、ティアナが磨きあげた技は誰のために使うものかと問いただした。

もちろん、それには答えられなかった。

そんなとき、雷斗が紅茶を入れたティーカップをティアナの前に置いた。

「ま、誰のためになって聞かれても今は答えなくていいさ。けど、お前の努力は無駄じゃなかったのは事実だ。それは誰もが認めている」

「だけど……」

表情を暗くするティアナに雷斗は「やれやれ」と呟く。

「キアラは戦う目的、理由を捜せって言っていたら？ それはシグナムが言っていたこととおんなじさ」

「あ……」

「自分のためでいい。他人のためでいい。テメエが大切何かを守りたいと思えるもののために戦えばいい。そのピンクおっぱいのようにな」

「月村雷斗の言う通りだ。貴様がそれを理解したとき、もつと強くなるさ。……あと、月村。貴様の嫁に通報しといた。セクハラを受けたとな」

「ヤバス」

雷斗は逃亡を図ろうとしたが、背後には微笑む妊婦が……。アイアंकローを決められ、ジタバタするが手から『メキヤツ!』と何かが碎ける音が聞こえて大人しくなった。

「では失礼します。主人がお世話になりました」

「ああ。ほどほどにな」

そのまま雷斗は退場していくところを苦笑する面子だった。

そんな中で、ティアナは雷斗に言われた宿題に関して考えた。彼が伝えたかったこと。それがなんなのか。

ふと、彼女は思い立った。

「レアスキルとも言える『神器』無しの『神器使い』って、魔導師に勝てるかしら……」

「勝てないよ」

答えが否と口に出したのは、グルグル巻きから解放されたなのだった。

『神器』無しの神器使いなどただ頑丈な一般人に等しい。つまり、アオくんはたまたま勝てたと言われているけどそれは『注目される力ない凡人』が『強力な力を持つ天才』に打ち勝ったということなんだよ。ティアナが言う凡人が天才を凌駕するのはこのことなんだよ」

「釈然としませんね……」

「世の中、そういうものだよ。あと、ティアナは自分に才能ないとか

言ってるけど、嫌みしか聞こえないから」

「それあなたが言いますか」

「だって、なのは幻術苦手だもーん」

『キャピッツ』となかなか痛い仕草をとるなのはの言葉に驚き、ティアナは目を丸くする。なのはくらいならばそんな魔法はあっさりできると思っていたから。

「使えないわけじゃないよ。でも、実戦で使うとなるとどうしてもティアナのような完成度が低い幻になるんだ」

「い、意外ですね」

「そーそー。だからティアナは才能があるよ。私がそれを保証する」

司令塔としても。

魔導師としても。

彼女に才能がないはずがない。才能がなければ、Cランク止まりの魔導師になっていたはずだから。

「そんなティアナにこれね。モードリリース」

ティアナのデバイスのリミッターを解除するのは。彼女のダガーをより強化するように設定されていた。

「焦らなくていい。一歩ずつでいいから、みんなで強くなっていこ？」

「はいっ」

なのはの胸で泣きつくティアナを彼女は優しく抱き締めていた。

ところ変わって東部海上空。チビソラは足場が必要な杏子とさやかのために、魔力のフィールドを維持していた。

「あん姉ちゃん。なんか、違和感があるんだけど」

「奇遇だな。アタシもだ。ドーもコイツら、レリックやロスログとか目指して無さそうなんだ」

東部海から先へ向かったとしても、あるのは港町くらいだ。町を破壊するためにならわかるが、それで進行スピードが遅すぎる。それがなんとも釈然としなかった。

「そういえばさやか姉ちゃんは？」

「あそこでヒヤッハーしてる。なんか、囲まれているけど」

そろそろヤバイなーと思う杏子がさやかの援軍に出ようとしたとき、上空から殺気を受けて彼女は槍で防御をとる。縦からの一閃を受け止め、杏子は襲撃者を蹴り飛ばす。

「テメー……！」

「久しいな羽虫」

黒い鎧で身を包んだ少女。アルトリアが透明の剣を構えていた。彼女もまたチビソラと同じフィールド系の足場に立っていた。

「どっかにチビソラとおんなじ魔法を使ってるヤローがいるな」

「この魔法は便利だ。いつでも空中で陸戦をすることが出来る」

「……んで、テメーは何しに来やがった。まさか、妨害のつもりか？」「まさか。こんなものただの戯れに過ぎん。まあ、強いてあげるならば向こうの剣士に用がある」

アルトリアの視線には剣戟を打ち合うさやかと『ミキサヤカ』の姿。拮抗しているように見えて、実際はさやかがリードしていた。

そして、『ミキサヤカ』の両腕を斬り飛ばした。

「これで終わりよ!!」

『ミキサヤカ』へ斬りかかるさやか。勝利を確信する中でアルトリアはニヤリと口を歪ませる。

「たわけめ」

次の瞬間後、さやかを呑み込もうとするくらいに『ミキサヤカ』の身体が大きく開いた。中身は黒いドロドロした何かで、さやかはそれに呑み込まれてしまった。

「さやかー！」

「貴様あー！」

キアラと杏子は呑み込んださやかを救出しようとするために、ドロドロとしたものへ突っ込む。すると、ドロドロしたものが形を取り始

め、一人の女性の姿になり始めた。

その姿は誰もが知る女性の姿。青い衣装が黒になり、瞳がダークブルー。

サーベルの刃は白から黒へ。マントも紫に染まっていた。友江さやかか黒化した姿がドロドロした何かから現れた。

戸惑う杏子に、キアラは咄嗟に彼女と共に身を引いた。

彼女の判断は正しかった。海上から無数のサーベルが飛んできた。あと少し遅れていたら、針ネズミにされていただろう。

「どうだ？ 使い魔と融合した彼女は」

「最悪だよコンチクショー!!」

目を血張らせた杏子が怒りのあまりに叫ぶ。アルトリアは満足したのか、黒い穴を開け、さやかと共に闇に沈み込んだ。

「待ちやがれ！ さやかを。さやかを返しやがれエエエエ！」

杏子とチビソラはアルトリアへ突っ込む。アルトリアは透明化を解除させ、一つの剣を見せつける。

かつて黄金だった剣は黒々と光始め、そして二人に降り下ろす。

「勝利する剣!!」
エクスカリバー

轟ツツツ!!と景色を呑み込もうとする黒い光が二人に襲いかかる。チビソラは『解錠』に移ろうとしたが、間に合わず、杏子はチビソラを守るかのように抱き締める。

しかし、黒い一閃は二人から逸れ、海上を抉るだけで終わった。

フェイトの魔力光線とキアラの『支配』で放射線上から逸らすことに成功したのだ。

「ふん……まあいい。目的を達したことだしな」

黒い闇に完全に沈み、姿を消したアルトリアとさやか。

杏子はフィールドを拳で打ち付け、慟哭をあげる。

「チクシヨウがアアアア!!」

親友を奪われた一人の女性が悲しみの声をあげ、小さな勇者は呆然として闇へ消えた姉と呼んでいた女性の名前を口に出していた。

「さや、
か……」

第一百十話 休日

(??side)

さやかを奪われた杏子は彼女を捜すために、六課から出た。もちろん、衛達は止めたがそれでも彼女は聞かず、出て行ってしまった。

まどかとほむら、千香はただ彼女の気持ちを考えていた上でそれを止めていたつもりだが、杏子を止めることができなかった。

誰もが暗い表情をするなかで日々が過ぎていくことのある日。なのはは一つの提案してきた。

「今日は休暇にしようよ」

みんな疲れている。精神的にリラククスが必要だと思い、休暇を提案したのだ。

そんなわけで各々が、お休みでリラククスタイムへ洒落込むわけである。

閑話休題

エリオとキャロは遊園地へ遊びに——は行かずに、まさかの筋肉を鍛えるお店に訪れていた。

保護者とも言えるフェイトに二人にお洒落な格好をさせ、遊びに行かせるつもりだったがキャロの行きたいところはなんと『エクセレントエレガント アームストロングなわが腕よ』というマッスル専門の店だった。

笑顔で宣言したとき、周囲の空気が凍りついたのは無理もない。可憐で汚れを感じさせないかわいい女の子が、かんとも男くさい専門店へ行くことを所望したのだから。

エリオとフェイトは遊園地に行くことを推奨したが、頬を膨らませて駄々を捏ねてきたため、なんとも言えなくなった。

「(え、エリオ……いつも遠慮がちなキャロが我が儘を言ってるのだけど。これは、納得するべき……かなあ?)」

「(納得したらキャロの女の子としての人生が終わります)」

キツパリとエリオはボソボソとフェイトに話した。

原因であるキャロは首を傾げてから「筋肉♪ 筋肉♪」と謎の歌を歌い始めていた。フリードもノリノリで「きゅ、きゅきゅつきゅ♪」と鳴いているわけで……。

……原作仕事しろと、誰かが言いそうな光景である。

そんなこんなで二人のデート（絶対違う）を見送ったフェイトは、たまたまラジコンを使って遊んでいたチビソラの後ろ襟首を掴み、通りがかったまだガーゼをつけていたアオの顔をアイアンクローで捕獲して、人気のない場所に向かった。

そこで彼女は二人にお願いしていた。

「二人のデートを尾行してもらえないかな？」

「ええー……」

「いや、それは……」

「ダメ……？」

フェイトの涙目&上目遣いにアオは断ることができず、了承した。巨乳で美女の上目遣いで断れる男子はいな——

「え、やだ」

——くはなかった。チビソラはお断りした。

「なんでオレがそのでーとってヤツについていかなきゃならないの」

「君はねえ……フェイトの頼みが聞けないのかい」

「だって『でーと』って知らないし、何よりそれ楽しいかどうかかわかんねえし」

そうだった。チビソラは『神威ソラ』から退化化したソラだ。身体の経験は身に覚えているが、知識が子どもになつているためデートがなんなのかわからない。

フェイトはまずチビソラにデートのことを説明すると、様々な疑問をぶつけた。

「なんで女の子に『ご馳走しなきゃならないの?』」

「どうしてわざわざ手をつなぐの?」

「どうかそれって楽しいの?」

と言った『恋』を知らない疑問である。デリカシーの無さと言えば、一級品とも言える。最終的にはフェイトが「アオがおいしいものをご馳走してくれる」と言って納得させることに成功した。

ホントにチョロいチビソラである。

「うう……なんでこうなるの。僕のおこづかいが……」

「まあまあ。アオにお礼するから、ね?」

「どんなお礼?」

「私のブラ。パンツは履いてないからごめんね」

「いろいろツツコミたいけど、それを僕がもらってどうしろと!」

「んつと……クンカクンカ?」

「変態じゃないか!」

「え、千香もしてることをアオはしてないの? 男の子なら当たり

前ってまどかも言っていたよ?」

「なんとと言う悪意ある誤解!」

世の男子が血涙するほどの誤解である。……一部は領きそうだが。

ティアナはヴァイスの魔導バイクを借りて、スバルを後ろを乗せてツーリングをしていた。魔導バイクとは少し魔力を動力源として動くガソリンで生じる排気ガスではなく、魔力を吐き続けるなんとも空気に優しいものである。

そんなバイクを乗りながらティアナはふと、隣に並ぶ車に目を向けた。

車と言えど二輪で走る車だ。

魔力やガソリンを吐かない上に、己の力を動力源とするそんな車――

——THE・MAMATHARI!!

「いやいやいや！　なんでチャリンコが魔導バイクと並んで走ってるの!?!」

もつともである。普通に考えたら明らかに並走できるはずがないのだ。

そんな『MAMATHARI』を走らせる女性。ショートヘアで美人な女性がティアナに向けて言った。

「すまない！　ここから先へ進めばサトーココノカドーか！」

「え、あ……はい」

「感謝するっ。よし、待ってる！　タイムセールス!!」

謎の美女はそんなセリフを叫んでからティアナ達を追い越した。ティアナとスバルは呆然と、その様を見ていた。

「ママチャリってあんなに速かったっけ……」

「相手の脚力しだいよ。ええそうよ。大丈夫。もうこれ以上、変なのが私達の前に現れることがないわ」

「ティアナ、それフラグみたいだよ」

「ほら」と指を向けると背後に薄紫のロングストレートの女性が前籠に高校生くらいの少年を乗せて、背後から近づく衛から逃げた。

……二人ともママチャリを漕がしながら。

「待てスピード違反共！　ママチャリでその速度で走るのは道路交通法には引っかけからないが、人身事故を起こせば死人が出るぞ！」

「関係ありません。私の騎乗スキルはA+。今日この日、風になると決めました！」

くわっ！と女性が言った。対して高校生くらいの少年はツッコむ。

「だからって僕を巻き込むの!?!」

「いきますよペガサス号!!」

「名前をつけるな！」

ギユンツ！とティアナ達を追い越し、前方でママチャリチエイスを行う二人。するとカーブの辺りで薄紫の女性のママチャリはガードレールをぶち抜き、空へ飛び上がる。

「……やりすぎちゃいました」

「シンジ、オウチ、カエル」

と謎の発言を残して落下していきティアナ達の視界からいなくなった。衛もそれに続き、視界からいなくなるが二人を担いでママチャリを空中で走らせていた。もう一度言う——『空中で』だ。

「ヌウハハハハハ!!」と高笑いしながら、衛はそのまま無限の彼方へ消えていった。

ティアナはバイクを一度止めて、衛が消えた空をじつと見ていた。

「ティア……あれ。なんだったの？」

「ガードレールの精霊が見せた幻よ」

本気で疲れてるなど内心嘆息を吐くティアナだった。

その頃、キャロとエリオのデートを尾行する子どもと青年がいた。わざわざサングラスをかけて、なぜかスナイパー銃をエリオに向けてるのがチビソラで、嘆息を吐きながら腕組をしているアオである。

「こちらモツコリ13。ターゲット、いかがわしい店に入った。発砲の許可を、どうぞ」

「いや、いかがわしい店じゃなくてプロテイン専門店だから。てか、何そのコードネーム。明らかにそっちの方がいかがわしいよ」

『SM喫茶だったら許す。どうぞ』

「いや許すなよ。許したらこの小説が消滅するから」

メタ発言するアオも危険と言えば、危険なのだがトランシンバーで会話し合うフェイトとチビソラにちよこちよこツツコミながら、キャロとエリオのデートを見守る。

そしてベンチに座り、ソフトクリームを食べる二人だが、キャラダ
け生き生きしているのにエリオだけゲンナリしていた。

(あんだけ『筋肉』ばっかの店や人に会えばなあ……)

キャラロの行きたいところはやはり筋肉を鍛えるか筋肉を称える店
ばかりである。なぜ、そんな店がちよこちよこあると言えは衛が原因
である。

衛が懲らしめた犯罪者の大多数が筋肉の素晴らしさを広めようと
ミッド市街地に散布したのである。

筋肉ハザードがここで始まっていたのだ。

「楽しかったね！ 特にエリオくん。将来が楽しみって言われていた
から期待大だよ！」

「期待されなくなかったよ……。というか、公園の向こうに座ってい
る青いジャージのおじさんの目が怖いんだけど……」

「あ。あの人は筋肉じゃなくてエリオくんのような男の子をホイホイ
食べちゃう人だから近づいちゃ駄目だよ？」

「お尻がムズムズする……」

青いジャージのおじさんはエリオをしばらく熱く見つめた後、普通
のサラリーマンのお兄さんがトイレに入るのを見ると、彼もトイレに
入っていった。トイレから「アーツ!!」と悲鳴がアオの耳に届く。

チビソラには届かせないように塞いでいたため、気づかれることな
くお兄さんが犠牲になった。

「……末恐ろしいものを見た気がするよ」

「筋肉を鍛えれば大丈夫だよ！」

「いや僕がゲンナリしてる理由はそのせいだから。というか、なん
で筋肉なの？」

エリオの質問にキャラロは照れくさそうにハニカミながら、語りはじ
めた。

彼女は集落で暮らしていたがある日、自身の力の暴走で追い出され
た。追い出された彼女はフェイトと衛と出会い、そしてエリオと出
会った。

この頃はまだ自分に自信がなく、力を恐れていた。そんな彼女の相

談に乗った……いや乗ってしまったのが衛である。

「本当の自分は臆病で弱い。衛さんはそう言っただけに私に勇気づけてくれたんだ」

「そうなんだ……」

「それでも自信が持てない私に衛さんは、

『そういうときは成りきれ。己を道化にしてみせろ。臆病ゆえに知る弱さを、仮面を身に付け誤魔化してみよ』

って言ってくれたんだ」

「だから私は」と続けて彼女は力強く断言した。

「衛さんのような筋肉こそ至高という思想を持てば強くなるってことがわかったの!!」

「それは違うよ!?!」

どこぞの学級裁判の言葉の弾丸のごとく否定するエリオだが、キヤロはキラキラ目を光らせていた。

……そんな様子を見ていたアオはなんとも言えない表情になっていた。

「……そりゃ、ないよ。仮面を身に付けるからと言って筋肉を求める女の子になるなんて」

誰も予想できない展開である。

「はあ……まあ、キヤロ。ほどほどにね」

「ちなみに今の目標はエリオくんをマッチョにすることだよ！ 将来の旦那様はマッチョじゃなきゃ！ ふんすっ」

「なんてありがた迷惑!!」

哀れ。エリオは変態のターゲットになってしまったようだ。

「南無南無……エリオ。君に幸あれ」

「こちら『モッコリ3』。エリオが告られました。撃っちゃっていいですか『おっぱい総督』」

「だからそのコードネームやめて！ 明らかにアウトでしょ!」

コードネームがいろいろ危なかったことツツコむアオをスルーし、チビソラとフエイトの通信は続いた。

『駄目です。むしろビデオカメラ用意して撮ってきて。結婚式で流す

から』

「了解」

「アンタらしい加減にしろ！」

もうどうにかしてくれとアオは頭を抱えた。

そんな感じに時間は過ぎていき、しばらくエリオとのデートを見守っていると、配水管の穴から足首に鎖が繋がれた金髪少女が現れた。

キャロとチビソラは少女に近づき、棒でツンツンしていた。ふと何かを思いついたかのようにアオに向けて言った。

「あ、これってスリラーの映画撮影？」

「ムーンウォークしなきゃ」

「しなくていいから！ ゾンビじゃないから！」

と言ってアオはトランシンバーでフェイトに報告するのだった。

第百十一話 女の子を保護して終わりと思っていたら……

ティアナとスバルが合流したフォワード陣はチビソラとアオに、女の子を保護することを頼み、二人は地下にあると推測されるレリックを回収に向かった。

女の子の足首の複数のケースがあつた痕跡のため、おそらく残りは地下にも……と思つて二人は暗闇の下水道の道を進んでいた。

今後の予定としては、103部隊のスバルの姉、ギンガ・ナカジマと合流するつもりだ。

「暗いね……こうも視界が悪いと前に進みにくいよ」

「エリオくんのフラッシュなら……！」

「僕はポケットなモンスターじゃないから無理」

「大丈夫。このわざマシンがあれば、エリオくんでも覚えられるよ」

「どこでそんなもの手に入れたの!？」

「フェイトさんの引き出し。十万ボルトにしようか迷つた」

「なんでそんなものをフェイトさんが持つてるの!？」

謎のディスクを取り出すキャロにエリオのツツコミは冴え渡る。

それはさておき、フラッシュを覚えることなく、魔力の球体による光で前を照らしていた。

そもそもフラッシュなんて、周りを明るくさせてしまうので敵に感知されるリスクが高いし、奇襲される可能性もある。

二人が前を進んでいると銀のアタッシュケースが落ちていた。

「見つけたね」

「何事もなくなくてよかったよ」

「エリオくん。それフラグだから」

「なんの?」

「ヒロインか主人公の親友がマミるフラグ」

「ちよつと待つて! そんなフラグ嫌だよ!」

が、エリオの願いも空しく。目の前に現れた人型の使い魔がアタツシユケースを奪いにきた。

敵と知るや否やエリオはデバイスを起動させ、使い魔の拳に槍の柄をぶつけて軌道を逸らさせた。

「この人……いや、人なのか?」

「ガリユーは人じゃない」

コツコツと暗闇から現れたのは、薄紫の少女——ルーテシアだ。彼女の傍らには、ユニゾンデバイスのアギトがふんぞり反って、フヨフヨと浮いていた。

「そのケースを渡しな。痛い目に遭いたくなきゃ——」

「やあー!!」

キャラコがアギトに向けてアタツシユケースをぶん投げた。

「うお! あぶねーな!」

アギトは受け止めることなく避けたため、アタツシユケースはそのまま水道へ落ちて流れていく。

沈黙がしばらく続いてから、アギトがキツとキャラコを睨み付ける。

「いきなり何しやがる!」

「え、だって渡せって言ったから」

「だからって、投げるのか!? こんな成りのアタシに向けて投げるのか!?!」

「だってあなたが渡せって言うっていたから、キャラコはあなたに渡したじゃないですか」

吠えるアギトにエリオはキャラコを擁護する。

「……アギト」

「……………」

そしてルーテシアとガリユーは半目でアギトを見つめる。

「え、アタシのせい!?! これアタシが悪者なの!?!」

うがーと吠えるアギトに、エリオは呆れながら流れていくアタツシユケースに向けて駆けていく。アタツシユケースを回収してから、エリオは挟み撃ちするような立ち位置で話始める。

「二応、回収しましたがこれからどうしますか?」

「当然。奪う」

「最初からそう言えはいいよ。……そうしなきゃ、合法的にボキボキにできないからー!」

「こわっ。このピンクこえーよ!!」

キャラがズドンツと地を蹴り、ルーテシアも同じく地を蹴った。そして二人の拳がぶつかり、空気に振動がはしる。

「へえ……すごい筋肉だね!」

「……あなたも」

「君、名前は?」

「ルーテシア・アルピーノ。筋肉の強さを極限まで極めようとする者……」

「面白いよ! 私と同じ同志が敵対するなんて!」

そのまま拳と足をぶつけ合い、格闘を始めるキャラとルーテシア。

エリオとガリユーは呆然とそれを見ていた。

「……ルーテシアちゃんって格闘できるの?」

「……昔はガリユーに任せっきりな召喚術師だったんだが、八神衛の『筋肉演説』諸君、見よ。このマッスルを!!』をタイミング悪く見ちまって、それで目覚めた」

「タイミング悪くって……」

「ルーテシアのお袋でちよつとな……」

エリオはなんとなく察した。……落ち込んだときに、前向きで感動できるものを見ると、影響されやすいものなのだ。

そんなこんなでガリユーを含めた使い魔軍団とエリオ達の戦いが幕開けた。

一方、その頃。ガジェットや使い魔の集団を市街地から駆逐するために、なのはとフェイトが飛び回って魔力弾を発射していた。

それなりの数はいるが、苦戦するまでもない。なのはとフェイトは

スイスイと敵を駆逐している中で、ヒュンツと黒色の一線が飛び込んできた。

フェイトは『バルドイツシュ』で弾き飛ばし、投擲してきた犯人を空中から見据える。

彼女の表情から喜色が失われた。なのも同様に「信じられない」と言った顔になる。

「さやか……ちゃん？」

青い衣装が黒になり、瞳がダークブルーとなり、サーベルの刃は白から黒へ染めたさやかが無数のサーベルを浮かせて、フェイト達を見ている。

さらに、黒い穴からアルトリアも現れる。

「邪魔させてもらうぞ」

「邪魔するなら帰ってほしいのだけど」

「はいそうですかと言うと思ってるのか？ たわけめ」

ロングアーチからの情報伝達より、ガジェットと使い魔の援軍が来ると二人の耳に届く。苦虫を噛む想いで、その援軍を無視しなければ敵の二人を撃破することが不可能だ。

「くっ、このままだと搬送中のヘリに……！」

「てか、なんか援軍増えてない!？」

急に援軍が増えた気がしてならないのはに、アルトリアはご丁寧に答えた。

「偽りを交えたものだ。そう簡単には落ちないぞ」

ナンバーズのクワットロという女性のIS『シルバーカーテン』の能力だ。幻影を交えた援軍のため、仮に二人が撃退に向かったとしても切りがない。

フェイトとなのはが敵の二人に構えようとしたとき、ビルからピンクの魔力矢が敵二人に向かって飛んできた。

回避した二人が見たものは、ビルで弓を構えるまどかの姿だ。

「邪魔者がつぎつぎと……」——「なっ」

アルトリアが驚愕したのは、さやかの背後から赤いものが飛び込んできた。

槍を構えた杏子だ。偶然にも捜していた彼女が、さやかを見つけ、そして仲間のピンチに助太刀するために突貫してきたのだ。

さやかは杏子に押し倒されるように、ビルから落とされる。杏子はまどかとフェイト達に向けて言った。

「ここはアタシとアイツに任せて先に行け！」

まどかは頷くと、ビルから跳び上がり、空中に魔力の足場を作りながらフェイト達と合流した。

フェイト達は『アイツ』とは何か聞こうとしたとき、その正体がわかった。

『ドコでもドア』が出現し、そこにいたのは金髪のオッドアイの青年。テンプレ踏み台転生者のような容姿のくせにして、かなりまともな男。

「……ナレーションさんの紹介ひどくない？」

「何を言ってるのかさっぱりだぞ古宮アオ」

「あー……気にしないで。単なるメタ発言だから」

「わけがわからない……ぞー！」

白い『全てを開く者』とアルトリアの黄金に輝く黒い剣がぶつかる。

金属音が響き、二人の戦いが幕開けた。

その頃。追撃するような形で、ガジェットと使い魔の軍団を駆逐するフェイト達。

そんな最中、はやてのリミッターの限定解除が許可された。はやての遠距離広域魔法で一掃するという作戦だ。

フェイトとなのは、まどかはガジェットと使い魔達をはやてに任せてヘリの擁護に向かう。

……その一方。映像から彼女達の動向を見ているものがいた。

執務室にて、中年の髭を生やした男と眼鏡をかけたインテリ系の美

人の女性がはやての魔法を見ていた。

彼の名前はレジアス・ゲイツ。地上本部のトップだ。

レジアスは六課の素性を知ると顔をしかめる。地上本部は治安部隊として勤めてきたが、聖堂教会のようなわけのわからない団体をバックにし、ポツとの出の部隊に活躍を奪われるとなると面白くないのだ。

「所詮は元犯罪者の分際が」

「問題発言です。公式の場ではお控えください」

「わかっておる！ 視察の準備へ向かえ。もしかしたら、ヤツらの失態が公になり、審議に持ち込めるかもしれんからな」

嗜虐的と言わないものの、嫌な笑みを浮かべるとレジアスの娘であるオーリスは思う。部屋から出たレジアスの背後からクスクスと笑う少女が現れた。

「貴様か……順調か？」

「ええ。順調よ。それにしても面白いことになってるわね」

「ふんっ。貴様の手など借りずとも我々はやっていける。いずれ、貴様を逮捕してやる」

「お好きにどうぞ。私はただ予言通りストーリーに進めるだけよ」

悪魔『一ノ瀬シイ』はカリムの予言を知っていた。なぜそのようなことをする必要があるのか甚だ疑問に感じるレジアスだが、下らないと一蹴してそのまま悪魔から離れた。

残された悪魔は愉悦な笑みを浮かべる。

「暇潰しに来てみたら、存外楽しいものだわ。……フフ、さてと。こちらもいい加減に『アレ』を回収しないと……ね」

『アレ』は『彼』の一部。

死んだことにより、不安定な『継承』により時渡りした『彼』の武器。

た ——それがなんなのかは……このとき、誰も知るよしもなかった

キャロとルーテシアは息を荒くし、疲労を見せ始めた。

「もう……くたくた」

「やる、ね……はあはあ」

キララとガリユートの目が光、ルーテシアとキャリーケースを小脇に抱いて脱兎のごとく飛び出す。

「ナイスガリユート！」

「あつ。待て！」

「待つかバアーカ！　そこで大人しくしてやがれ！」

目眩ましアギトが投げた魔力弾で視界が光に包まれる。目が白く染まり、回復まで時間がかかることは間違いがなかった。

（よし……ここでルーラーの転移で——っ!?）

アギトの魔力感知に大きな反応がとらえた。その大きな反応はガリユート目掛けて、ハンマーを振りかざしていた。

「ぶっ飛ばやゴルアアアアア!!」

ガリユートはキャリーケースを捨てルーテシアを庇うように、抱き締め、ハンマーに飛ばされた。壁へ叩きつけられ、砂煙に姿は隠された。

「て、てめえーは……！」

「あたしのこと知ってるのか？　まあいいや。公務執行妨害と違法魔法使用によりたいほ——」

「守護騎士ロヴィータ!!」

「オイゴルア！　せっかく決まっていたのにその呼び名で全て台無しじゃねーか!!」

シャウトするヴィータ。

「ツ、まさかこの人が成人年齢にも関わらずウサギパンツが装備できる永遠のロリの人っ？」

「ああ、そうだぜルーラー。あれが女神とうたわれた伝説のロリだぜ」
「テメエら。アイゼンの錆びにしてやるーかオイ！」

額に青筋を立てるヴィータのことをディスプレイするルーテシアとアギト。すると、キャロがポンツと手を叩く。

「あ。そういえばフェイトさんの下着をマジマジ見ていたってある人が言っていました」

「あ。それ、私も。『アダルトな下着で悶々するヴィータんに萌えましたぞ』って」

とんでもないフレンドリーファイヤーにヴィータの顔は真っ赤になる。

「誰だ！ あたしの恥態を暴露しやがったヤローは！」

「ヴィータ隊長が追いかけている犯罪者です」

「アイツの仕業かアアアア!!」

ここ一番にシャウトするヴィータ。彼女が追いかけている犯罪者の名は『変態紳士』と呼ばれ、世に言うストーカーである。

ストーカーと言っても幼い少年少女のみで、ただ柱の陰から息を荒くして様子を伺う無害(?)な変質者である。

彼の掲げるコンセプトとは『イエス・ロリ！ ノータッチ!!』というどこかで聞いたことありそうな言葉である。

なお、ヴィータが捕まえようとしたものの、彼のポテンシャルで全て逃走させられている。……さらに哀れなことにヴィータも彼の対象になってしまった。

彼女の私生活はもちろん、後ろから変態が見えたらヤツだと彼女は思っている。

「ぜってー錆びにしてやる！ 捕まえるとかもうどうでもいいからぶちのめしてえ!!」

「ヴィ、ヴィータ隊長落ち着いてください！」

「そうです！ エリオくんの言う通りです！ フェイトさんのようなアダルティでセクシーな下着に憧れるのは子どもの心理として当然ですから！」

「いや、あたし。もう成人してるし！ 憧れるどころか着けてるし！」

「……家中、鏡でね」(ボソツ)

「ワリーかゴルアアアアア!!」

「ああもう。ルールーも煽るな！」

ルーテシアの一言で修羅と化したヴィータ。

ちなみに地中に待機していたナンバーズことセインと言うと。

(……………デバン、マダツスカ?)

正気じゃない状態にも関わらず、空気を読んでスタンバっていた……………。

その頃。アオとアルトリアの戦いは拮抗していた。

救世主と呼ばれた彼の剣技が互角——いや、それ以上にアルトリアは上回っていた。

まるで英雄と戦っているようなそんな気分だ。彼女の剣技は、熟練された技ばかりだ。

鏢競り合いに持ち込み、彼女に話しかける。

「君は英雄なのか……………」

「その通りと答えておこう」

力付くで引き離され、アルトリアの剣が黄金に輝く。

魔力が剣に集まっているところ、大きな技がくる。そう予想したアオは迎え撃つような形で構える。

仮に避けたとしても余波でビルから先まで届きそうだと彼は予想して迎え撃つという形で、攻撃を抑えるつもりだ。

『約束された——』

そのとき、アオは大きな魔力の剣が振りかざされた同時に彼は横構えのまま、地を蹴って、飛び出した。

『——勝利の剣!!』

降り下ろされた黄金に輝く魔力の剣はアオの身体を呑み込もうとしていた。

大きな激流のごとく魔力が吹き出し、その魔力にアオは一閃を与える。

次の瞬間、魔力の激流は打ち消された。アオの『解錠』で、結合された魔力の塊は分散され、消滅したのだ。

これに対してアルトリアは驚愕で動きを止めてしまった。アオはその隙を狙って、彼女の剣を飛ばした。

剣先をそのままアルトリアに向けたまま、アオは呟く。

「……やはりそうですか。あなたの真名がやっとわかりました」

剣先を向けた彼は彼女が何者なのかを告げる。

『エクスカリバー』の担い手『アーサー・ペンドラゴン』。それがあなたの正体だ」

フンツとアルトリアと鼻で笑う。その通りだと言わんばかりに。

「どうしてあなたのような英雄が……!」

「なに。最初は普通に召喚され、徐々に黒く染められて与しただけのこと。まあ、あの頃の私はただの愚か者だ」

「愚か者……?」

「そうだ。王の選定をやり直し、相応しい王を見つけ出す。過去を否定することで滅び行く国が救えると信じていたと言ってもいい。だが、今の私からすればくだらない。そんなことしても意味がない。むしろ、王が民を支配すること正しい王のあり方だろう」

王とは何かアオにはわからない。けれど、彼の友である二人の王は民のために戦っていた。

だからそんな考えを持つようになってしまったアルトリアに、歯を噛む想いで睨み付ける。

「民のために戦うことは間違いじゃない。それもまた王のあり方だ」

「だが、それで私は国を滅ぼした。間違っていた」

「間違っていたかもしれないね。けど、それを否定するのは許しちゃいけない」

たとえば自分が導いたものが間違いだとしても後悔しちゃいけない。それがアオの持論だ。

そんなとき、アルトリアはふとある視線を向けるとニヤリと笑う。いったい何を……と思った刹那。アオの胸から腕が生えた。

「かはっ……!?!」

「いただくわ」

抜き取られていく。そんな感覚に支配され、アオの身体は脱力して

いく。

「くっ、そ……」

目が沈む。アオはそのまま意識を黒く染められて、倒れた。

悪魔はクスクスと笑いながら、両手に抱えるものを抱き締める。

やっと私の手に……とそう思っていたとき、銃声が鳴り響く。

悪魔がその場から離れると、銃弾が地面に突き刺さっていた。

「あら……誰かと思えばあなたとはね」

「そこに寝転んでいる動物を返してほしいわ。高町なのはがうるさくなるから」

しれっとひどいことを言うほむらは銃口を悪魔に向けたままだ。悪魔はクスクスと笑いながら、「好きにどうぞ」と答える。

今のアオは神器が抜かれている。もう彼は既に……と思っていたが、彼は呼吸していた。

顔色が悪いが、まだ生きている。それが信じられないほむらに、悪魔は答え合わせをするかのように言い出す。

「彼の神器は、元々彼自身のモノじゃないのよ」

「どういうこと……?」

「神威ソラはかつて、五木雷斗——今は月村だったわね。彼の神器を使っていた頃がある。それはわかっているわよね?」

だからどうした……と言い出そうとしたとき、ほむらの思考に何か引掛かる。

そうだ。ソラの神器は『全てを開く者』のみ。

雷斗の神器は『継承』されていたから使えた。

ならば……。

「ソラの神器をアオが『継承』していた……?」

「厳密には『継承』された彼の神器が不安定だったから、たまたま取り込むことができたってことかしらね」

「でも、彼が死んだときにはそんなこと……!」

「鹿目まどかが『継承』し、後にあなたと戦った。そして、その後の記憶にはあなたはないからねえ」

悪魔の言う通り、ほむらはあのとときの記憶が曖昧だ。いったい何が

起きたのかさえ思い出せない。

それなのに悪魔はなぜ知っているのか疑問に感じるが、今はアオの神器の正体が知りたかった。

「彼の神器はソラの神全てを開く者器なの？」

「ええ。あなた達の戦いの後、時空の裂け目が出来て、そこから時渡りしたのよ。つまり、古宮アオの神器は神威ソラの神器の一部なのよ」信じられない話だが、辻褄があっている。おそらく悪魔の話は嘘じゃない。

アオに命の別状がないので、安心したが、悪魔がなぜ『全てを開く者』を求めたのかがほむらにとって謎だ。

「それをどうするつもり？」

「さあ？ 教えてあげないわ」

舌打ちして、ほむらは銃弾を悪魔に発射。悪魔とアルトリアは黒い穴の中へ逃げていった。

「ああ、それと……へりにいる彼。危ないわよ？」

悪魔のその声を聞き届けた直後。凄まじい音が遠くから響き渡った。

ほむらがアオの元へ到着する前。杏子とさやかかの戦いは終盤を迎えていた。

突くと斬るの応酬。時には、払い、捌き、受け流す。

『ケタケタケタ』

「さやかかの顔で不気味に笑ってんじゃねー！」

ヌンチャクのように分かれた槍の持ち柄が、さやかかの身体に直撃。くの字に曲がり、路地裏の壁へ叩きつけられる。

「観念してさやかの中から出ていけ」

矛先を向けると、さやかかの不気味な笑みは止んだ。いや、鎮まった。

められてしまうのよ！」

「あとクワットロ姉様が魔法少女服を着るのは………ないわー」

「やる気なくせに、私の衣装にケチをつけるの!？」

「年齢考えろよオバサン」

「まだオバサンじゃないわよお!？」

さりげなく年齢を指摘され、大ダメージなクワットロ。まだ若いし、お洒落したいお年頃。

だから魔法少女服はセーフの………はず。

哀れなことに謎の変態の仕業により、クワットロの思考は少し残念になっていた。

スカさんを裏切った理由は立派な悪役になるためだったりするのだが……。

「そんなんだから、世間一般から『ダメガネ』とか『残念なお姉さん(メガネタイプ)』って呼ばれるんですよ」

「これでも私、がんばってるですよお！」

「あとマイシスターズ他のナンバースから、『泣き虫クワ姉様』って呼ばれますよ」「うわあーん！ デイエチちゃんがいじめるう！」

……原作の彼女はもつと残忍で最低最悪の性格なのだが、変態のせいで自分の行動に自信を無くし、挙げ句の果てには空回りすることばかりが起きるようになってしまった。

「いいもん！ 悪魔ちゃんにナデナデしてもらって褒めてもらうもん！」

「気持ち悪いですよ。あと、悪魔さんがクワットロ姉様の名前のこと、『女の子の名前……なの?』ってデイスってました」

「もう、誰にも頼らない……」

遂には『の』の字を地面に書き始めたクワットロ。デイエチは無表情ながら、そんなクワットロにホクホクしていた。

……妹がいつの間にかDSになっていたことにクワットロは気づかない。

「あ。そろそろ撃てますよ」

「そお? なら、撃っちゃえー!」

「はい！　そこでクワットロ姉様。掛け声！」

「え、ええ!?　た、たまやあく……う？」

「んだよ。つまんねーな」

「デイエチちゃんがいじめるうー！」

ブワツと泣き始めるクワットロを無視してデイエチの砲撃が発射された。

彼女の武器はバズーカーの形をしたもので、遠距離から相手を駆逐する。

一応、全力ではないもののへりをスクラップに変えることは造作もない。

そんな砲撃がへりに直撃。クワットロとデイエチはそう思っていた。

しかしへりは謎の花形のシールドにより守られて、無傷だった。

「えっと……何あれ？」

「失敗しました。まさかロー・アイアスじゃないですか」

「紅茶さんがいるのぉ!？」

クワットロがデイエチにツツコんでいる頃。へりには紅茶さんではなく、紅茶を飲みながら、手を前に出す女性がいた。

優雅に紅茶のカップを置くと、寝ている金髪の少女にプニプニしているチビソラに向かって言う。

「もう安全だよ。だから落書きしていいよ」

「ホント千香姉ちゃん！　じゃあ　最初は猫さんから！」

「患者に落書きしないでください！」

チビソラの計らいでへりに連れてこられた千香を叱るシヤマルだった。

そしてクワットロとデイエチはこの後、どうなるか予想し、飛行して逃げ出そうとするも、フェイトが追いかけてきた。

「ど、どうしよおデイエチちゃん！」

「こんなときは姉様の『シルバーカーテン』です」

「そ、そうねえ！　えい！」

『シルバーカーテン』を発動し、フェイトを攪乱する作戦に出るク

ワットロ。しかし、フェイトは真つ先にこちらに向かってきていた。「ど、どどどうしてえ!？」

「……姉様。幻覚が私達と同じではなくては、攪乱できませんよ」

クワットロが出した幻覚は全てが『ちよつと危なげな先輩後輩の男同士のカップリング』だった。

攪乱どころか、味方にできえ、クワットロの思考回路を疑ううっかりである。

「そもそもなぜBLですか。男同士なんて気持ち悪いじゃないですか」

「気持ち悪くないもん！ 美少年と美青年達が愛し合うその姿は儂くも、美しく萌える展開なんだもん！ デイエチちゃんのような百合のカップリングしか興味ない変態さんとはわけが違うもん！」

「百合は正義です」

どうでもいいことを言い合うその姿に、フェイトは嘆息を吐きながら、電撃の魔法を使って撃ち落とそうとした。

悲鳴をあげながら、回避する二人に更なる恐怖が訪れる。上空からはやてが広域空間魔法を使おうとしていたのだ。

「姉様!」

「ええ！ 今度こそ!」

『シルバーカーテン』を使って攪乱してみせるとクワットロは力を込めて使った。

ここで気づくべきだが『シルバーカーテン』を発動しても呑み込まれて意味がないのだが、残念なことにクワットロは気づかない。

さらにイメージした幻覚も悪かった。

無数に現れた。

愛し合う。

衛とゼストのカップリング達。

悪夢がはやての目の前に広がる。

「姉様……。なぜこの幻覚ですか？」

「な、なんとなく……?」

「ガジェットのときはマシなのに、なぜこういうときに限って……。本当にメガネですね」

「どゆことお!?」

呆れるデイエチに対して、はやては身体を震わせて、叫ぶ!

「男なんかと浮気するなや!　せめて女と浮気しろやボケエエエエエ
!!」

「そつち!」

男に負けるというプライドを傷つけられたはやての全力の黒い球体が周囲を呑み込んだ。

その後、クワットロとデイエチはセインによって逃避できたが、煤だらけだったそうな……。

さてその頃。衛は……。

「ライダー悪いんだ。全てライダーが悪いんだ……!」

「泣くなシンジ。それではエヴァに乗れぬぞ」

「碓じゃないよぞ僕は!!」

事情聴取を行っていた。

第一百十三話 変態達の狂騒歌

(?? side)

病室のベッドの上で、アオは目をゆっくり開けた。知らない天井が眼前に広がる。自分はなぜここに……と思考した瞬間の後。

気づいた。気づいてしまった。

——もう僕に、『神器』^{戦う力}がない

病室の扉が開けられると、そこから花束をもったフェイトといつも通りのほむらが入ってきた。

彼女達はアオがどうなったのか説明してくれた。悪魔に神器を抜き取られた彼が目覚めたのは、三日後だった。

抜き取られたことにより、アオがどんなに召喚術を行使しようと、『神器』は喚び出されることがなかった……。

「そっか……あの神器はソラさんの」

「ええ。時渡りの末にあなたの元にたどり着いたのよ。あと、五木雷斗に聞いたところ。『神器』の継承は自身と相手の魔力がフィーリングしなければできないそうよ。あなたとソラの魔力がたまたま適したから継承できたらしいわ」

また完全に魔力が合わなければ、継承された神器が召喚される確率は下がる。そうなれば、すぐに神器が喚び出せず、戦闘において致命的になる。

だからこそ、雷斗が神器をソラへ継承するとき、自分の魔力とソラの魔力を完全に合わせていたらしい。

そしてアオの場合は奇跡的な偶然により、継承が成り立った。たまたま同じ顔の、同じ名前の自分に出会うようなものだ。

誰も予想できるはずがないまさに、聖剣に選ばし勇者みたいなものが古宮アオという孤児だった。

しかし、もう今の彼は勇者でなければ救世主でもない——ただ
の人。もはや、戦う力はない普通で平凡な存在になってしまった。
自分の手から『神器』が喚び出されることがないことに、アオは顔
を伏せる。

フェイトが何か言おうとしたが、それはほむらが遮る。彼女は首を
横に振り、そしてフェイトを連れてアオを一人にすることにした。
アオは窓へ顔を向ける。

「……くそ」

静かに彼は涙を流した。

一方。アオが涙を流している頃に、キアラはチビソラの手を引きな
がら、病院の廊下を歩いていた。

「ねーねー、キアラ姉ちゃん。なんで元気ないのー？」

「……む。すまない。気にするな」

キアラは内心ため息を吐いていた。せつかく合流できた杏子がま
たどこかへ行った。

さやかを追いかけているのだろう。

親友が大切なのはわかるが、冷静になれないところが彼女にはあ
る。

まどかの話によると前世で親友と心中するような形で、『魔女』に
なったさやかを共に亡くなったようだ。

それを覚えているからこそ、彼女はさやかを一人にしたくない。し
てたまるか。今度こそ、さやかを……。という想いが強くなっている
ようだ。

だからこそ、普段は冷静でツツコミ役な杏子は独断専行してしまっ
たのだろうか。

(ままならないものだ。友のために戦う女を見つけることすらできな
いとは)

杏子の独断専行は許してはならない。そうしてしまえば、いずれど
こかで杏子は敵に討ち取られるかもしれないからだ。

一人で行動するよりも、誰かに頼れるチームで行動することがベス

トなのだが。

(それに懸念がまだある……)

チビソラの『神威ソラ』としての記憶が少しずつ浮き彫りつつある。それは戦力増強的な意味では、六課の助けになる。

しかし、同時に不安がある。チビソラが片鱗を見せた翌日に、洗髪していた彼の髪が少し抜けた。

数本程度ではない。百本くらいは抜けていた。チビソラはびっくりして騒ぎだしたのは良い思い出だが、日に日に彼の動きに元気がなくなっているような気がするキアラである。

「こほこほ……」

「風邪でもひいてるのか?」

「うん。なんかちよこつとダルいけど、平気!」

元気よく返事するチビソラ。しかし、キアラは嫌な予感がしてならなかった……。

高町なのはは保護した少女と倒れたアオの見舞いに来ていた。先発として見舞いに向かったフェイトとほむらとの交代である。

なお、フェイトは最後まで看病すると言っていたが「そこまでする必要はないよ」ということを建前に「抜け駆けさせるか!」と彼女と火花を散らしていたりする。

そう易々と好感度を上げさせてたまるかと、なのはは静かに燃やしていた。それを見ていたシグナムはやれやれと嘆息を吐く。

「それならいつそのこと押し倒してしまえば」

「前にセクシーな下着を装備してやってみただけど、裸族モードのフェイトちゃんに妨害された」

「既の実証済み……だと!」

「うん。んで、騒ぎになって最終的に千香ちゃんが珍獣となって追わ

れることになっちった。テへ☆」

「なんとシニールな光景だ……」

シニールどころかカオスである。なお、たまたまトイレから帰っていたまどかはそれを見て、「リボンで迫ればいいのに」と呟いていたことをなのはは知らない。

知ったところで、アオの理性崩壊に役立つことになるだろう。

二人が少女の部屋に向かってしていると聖王教会のシスター。シャツハ・ヌエラから通信が届く。

なんでも保護していた少女が抜け出したとか。

シャツハは至急捜索に向かっているらしい。

保護した少女は人造魔導師——プロジェクトFによって創造された生物兵器だった。そんなものが市街に出て、癩癩を起せばどんな大惨事になるかわからない。

シャツハの言い分は至急に捕縛する必要がある、と。

なのははそんなシャツハに落ち着くようにいい聞かせる。

「大丈夫。あんな小さな子はそれほど危険じゃないよ」

『しかし……』

「うん。どこかの管理局世界の市街地でマッスル大戦を勃発して、市民の一部をハザードさせたことに比べたら微々たるものだよ」

『どんな大惨事ですかそれ!?!』

「鎮圧したはやてちゃんはMVPだね。『ラグナロク』を見たのはあれ以来ないかな。それでも衛くんはピンピンしてたけど」

『はやてさあん……』

同情せざる得ない。変態達の狂騒歌をなんとか鎮圧できたものの、元凶が減んでいない件。彼がいる限りマッスルハザードは止まらぬだろう。

そんなことよりも少女である。あの六歳くらいの女の子がそれほど遠くには行っていないはずだ。

なのはは中庭へ足を運ぶと、そこにはベンチに座る三人の人影があった。

一人はアオだ。なぜか遠い目をしながら、「どうしよ……これ」と呟

きながら現実逃避。

その隣にいるのは例の金髪少女だ。「きゃつきやつ」と笑いながら、アオにじゃれつき、彼の顔をおもちゃにしていた。

そんな彼女の隣にいたのは——うん、わからない人だ。

衛のような筋肉モリモリ。

服装はワイシャツのないスーツ姿。

そして顔には不気味な仮面。

……その不気味な仮面なのだが、どこかで見たような気がするのではである。主にエルフの少年が時オカリナを駆使したり、仮面を使って変身したりするゲームに出てきたラスボスの仮面さんだ。

明らかな不審者になのははセットアップしようとしたとき、シャツハがBJ姿で降り立ち、三人の元へ駆ける。

トンファーをそのまま振り抜き、「ん？」と振り向いたアオの顔面を捉えた。金髪少女はさりげなくアオを盾にして、逃げていた。そして隣にいた不審者は「シユワツ！」と叫んで回避していた。

ゴロゴロガツシャーンツとアオが向こうにあるベンチにぶつかり、目をグルグルさせていた。

なのはは息を吐いているシャツハに肩をチョンチョンし、振り向いた彼女に向けて満面な笑みを浮かべて言った。

「あの人、六課の一員だよ？」
「えっ」

ホントに知らずにやっちゃったのかこの暴力シスターは。となのはは内心そう思いながら苦笑する。

あわあわしだすシャツハを、なのはの嗜虐心が撥られるが、それよりも回避した謎の不審者に視線を向ける。

「それであなた、誰。明らかに不審者ですと言った感じだけど」
「失礼な。ワガハイは不審者ではない」

「いや見た目からしたら不審者なんだけど。てか、あなたの身体から答えを出すと、絶対にあの筋肉男関係なんだけど」

「むっ！ 貴様。天道衛の知り合いなのか！」
「そうだけど。あなたのこと知らないけど」

「ならばお答しよう！」

仮面を脱ぎ捨てバツとポーズをとる不審者改め、変態。

「

あるときは筋肉の至高を目指す探求者——

あるときは小さな子どもを影から守る守護者——

そしてまたあるときは、全国のロリコン達に真のロリコンとは何かを伝える伝導者——

そう、ワガハイこそが『愛と正義とロリ』を守る戦士——ロリコン紳士なり!!」

『『デイバインバスター』』

さりげなく憑依召喚していたのはは能面の表情のまま、至近距離から発射。しかし、ロリコン紳士は焦げが少しっただけで無傷だった。

「ふははははは！ 全国のロリがいる限り死なぬ、屈さぬ、なびかぬ!!」

「残念なのです。にぱー☆」

「むっ!? 背後にロリの気配!」

「チツ。羽入を感じつきやがったよコイツ」

悪態ついているなのはにキョートンとするシャツハだったが、ふと思いついた。

そう、この変態こそが騎士ヴィータがもつともぶちのめしたい男なのだ。

エターナルロリという称号を広め、履いてる下着を暴露され、しぶとく付きまとったり、他の幼い子どもとさりげなく遊んでいるという比較的平和な犯罪者予備軍である。

ドキュメンタリーに出たとき、びっくり仰天で茶を吹き出したヴィータがなつかしい。

『イエス・ロリ・ノータッチ!!』『ノー・ロリーライフ・ノーライフ』という名言を残している。

「なのはさん！ この変態を捕まえましょう！」

この変態は一人では対処できない。シャツハはそれなりの実力者だが、さすがに衛クラスとも言える相手を一人でしたくない。

しかし隣にいる『エース・オブ・エース』と一緒にならば……。と考えたシャツハだが、なのははBJを解除して言った。

「だが断るの」

「な、なんでですか!？」

「いや、正直。衛くんクラスだと私たち二人でもさすがにキツイから………ぶっちゃけ、本気出すのめんどくさいし」

「最後のは本音ですよね!？」

「あと、ここ病院だから暴れたら駄目だよ。そこんところわかってる?」

「うっ」

「そんなのだからシャツハは『バゼット』と呼ばれるんだよ」

「誰ですかその人。なんか、一緒にされたくないのですが!？」

的確に指摘された上に、罵倒されたことに納得いかないシャツハ。脳筋暴力執行者かつダメツトさんと同じなのは嫌なようだ。

「この手の変態は関わらない方がいいの」

「しかし……!」

「つべこべ言っていると、六課の一般協力者を『バゼット』しましたってはやてちゃんにチクるのですよ? にはー☆」

「ものすごく悪い笑顔だこの人!」

真の悪が隣人にいた。まあ、憑依状態の彼女が残忍かつえげつないのはスタンダードなので、何も言えないが。

するとロリコン紳士は口を開いた。

「ふむ。安心をお嬢さん。ワガハイは幼い子どもをただ影からハアハアしながら見守る愛の戦士——ゆえに手を出すなどありえぬ!」

「不安すぎますっ!」

「そして十五歳を超えたおばさんになどにはなびかぬ」

「誰がおばさんですか!」

守備範囲が低い位置にあるこの変態にシャツハは吠えた。なのは

は「誰がおばさんだ。コラ」と青筋を立てていた。

ふと、ロリコン紳士は腕時計を見る。

「むっ！ いかん。小学校の下校時間だ！ では、ワガハイは今日のパトロールに行くぞ。さらばだ!!」

「待てー！ パトロールなら、そのカメラを置いていきなさいー!!」
シャツハの声に耳を傾けず、ロリコン紳士は空へ跳躍し、どこかへ翔んでいった。

なのははそれを見送ってから、口を開く。

「それよりもアオくんを助けたら?」

「……あっ」

ただいま金髪少女が持つマジックペンで顔を落書きされているアオに、やっと思いついたシャツハだった。

第百十四話 えーと……？

(??side)?

友江杏子は『魔女』となったさやかを見つけ、戦っていた。親友をどう助けるか具体的には考えていないが、とにかく声をかけ続けながら、さやかの攻撃をさばっていた。

(……ホント、なつかしいよ。まどかのヤツがまだ普通の女だった頃と同じようなことしてる)

無駄かもしれない。？ 無意味かもしれない。

だが、それでもやってみないとわからない。

『魔女』の剣を滑らせ、懐へ肉薄。そこから何度も何度もさやかの名前を叫び続ける。

『キョ……う……う……』? 「ツ！」

変化が訪れた。声は届いている。

そんな希望を得た杏子はこのやり方が有効であると、確信した。

杏子は柄を握り締め、自ずと飛び出そうとした——矢先。?

銃声。それが鳴り響く。

肩から鮮血が流れ、杏子の顔が苦痛で歪む。

『ちようどいいタイミングね』

『アケミホムラ』と『カナメマドカ』という使い魔達が現れた。

『ミキサヤカを泳がせて正解だったわ。あなたを満身創痍に追い込めたものですよ? 「これも全てテメーの策ってか……!」? 『うんうん。サヤカちゃんに吊られて、あなたが離反することは想定のうちだったもんね♪』

さやかを魔女化させたのは杏子を離反させ、一人にさせるため。彼女の周りには味方はいない。

確実に彼女を仕止めるのが、今回の狙いだ。

『でもサヤカちゃん意識が取られそうだよね? 『仕方ないわ。彼女ごとと友江さやかをやりましょう』? 「仲間じゃねーのかよ! テメーらは!」

杏子が噛みつくように怒鳴ると、二人はうつすらと嘲笑を浮かべた。

『使い魔に仲間も何も無い。それは魔法少女が一番わかっていることでしょ?』? 「外道共が……。ぜってーぶちのめす」? 『それができるのかしら? 今のあなたに』

『アケミホムラ』に指摘されるように、さやかはまだ不安定で味方とは言いきれない。実質、三人を相手にしなければ杏子は好戦的に口を歪めた。

「上等だよ。こちとら、一人で戦うのは慣れっこだ」

彼女の最後の戦いが始まる。その結末を知るものは、この場にいた者とずっと見物している者のみ……。

?

(アオside)?

金髪少女の名前はヴィヴィオ。彼女はあのへりに乗っていた保護された子どもらしい。

そんなヴィヴィオがずっと、僕のズボンの裾を握り締めていた。

「ぱぱあ」? 「いや、なぜパパ? というか、僕に子どもはいないからなのは、レイハさん下ろして」? 「だが断るの」? 「ことわるのー」
なのはを真似るヴィヴィオ。母の真似をする子どものようなという微笑ましい光景のだが、悲しいかな。

レイハさんの砲口からピンクの魔法陣が点滅している。

「そもそもなんで僕がパパなの!? どこにパパ要素があるって言うの!?!」? 「あふれんばかりの……母性でしょうか?」? 「母親でしょそれ! シャツハさん」? 「そうだよ! どちらかと言えば私にこそ相応しいの! 証拠としてこの胸と尻をー」? 「オイいいいいい!」
ヴィヴィオの前で変なこと言うのやめてえー!

す、スタイルが良いのは認めるけどさ。小さな女の子の前でそれはやめてほしい。

将来、天ヶ瀬さんのようになったらどうするんだよ。

バリインツ!!

「騒ぎを聞き付け変態参上!」? 「余計なものが増えた!」

窓ガラスを突き破って登場する天ヶ瀬千香。窓ガラスを割るなよ。修繕費どうするつもりだよ。

「それはもちろん、男の甲斐性的な?」? 「絶対やだ!」? 「領収書には機動六課のアオ様について書いてるから!」? 「何やってるのこの人!」

なんで僕が割られたガラスの代金を払わなくちゃいけないんだよ!

文句を何度も言いそうになるがヴィヴィオの前で怒鳴るのは気がひけたので、呑み込んだ。

くっ、なんで僕がこうなる。

「ぱぱあ、ぱぱあ」? 「なんだいヴィヴィオ」? 「ごりらさん」? 「いやいや病院にゴリラさんとか……」?

「ウホー!」?

「いたよ!」?

ゴゴ丁寧に斜め四十五度のお辞儀をしてから通りすぎたし!

「この病院の三割がゴリラさんの患者さんですよ」? 「いやなんでゴリラ!」? ゴリラっぽい人ならわかるけど、なんで生のゴリラさんが患者として入院してるの!」? 「宿敵のワニと決闘でこのシーズンになるとよく入院してくるのですよ」? 「いや知らないしどうでもいいんですよ!」? 「ちなみに残りの七割は様々な変態です」? 「病院を変えようかヴィヴィオ!」? ここにいたら変な覚えちゃうから!」? 「ぱぱあ、おぱんつつてかおにつけるものなの?」? 「既にもう手遅れ!」?

目の前でパンツを仮面にしている海パンの男が通りすぎる。

どっかで見えたことある変態モンスターなんてだけど!

「騎士カリムもなぜヴィヴィオさんをここに入院させたのでしょうか……」? 「犯人はあの予言者かアアアア!!」

おのれ、カリム。お前だけは許さん。絶対ヴィヴィオを変態化させないぞ!

「どうでもいいけど、お父さん化していない?」? 「アオくん」? 「自覚が

ないのでしょねきつと」? 「確かに。……はっ。じゃあ、ヴィヴィオちゃんのママになれば実質アオくんと夫婦!? ヴィヴィオちゃん、ママと呼んでもいいよ!」

「まあー」

「ピンポイントに覚えてほしくないもので呼ばれた!」

なのはが騒いでいるけど、僕はヴィヴィオを守ることを燃やしていた。その後、フェイトが現れて更なる混沌に陥ることを僕はまだ知らない? ?

(?? side)?

ところ変わって誰も通らない路地裏。戦いの決着はついていた。

敗者は壁にもたれ、また逃げ出していた。

勝者はいなかったのだ。

杏子は致死量が越えそうなくらいの血を流し、さやかは元の姿に戻っていた。

「チツ……さやかを助けるために自爆技を使っちゃった」

かつて使った自爆技で、身体が吹き飛ばず、五体満足であることは奇跡だったとしか言いようがない。

しかし、もう彼女は助かることはない。さやかはどうなるかはわからないが、彼女は魔女化によってエネルギー無理矢理使われ、衰弱していた。

このままだと二人は助からない。せめてさやかだけでも、と杏子が頭で浮かべていたとき、黒髪の女性が現れた。

ドリルのようにクルクルとしたヘアースタイルで、メイド服の穏やかな女性だ。

「あらあら。こんなところにいたのね」? 「あ、んたは……」

女性の顔は暗くて見えない。しかし、なぜか懐かしいと思えた。

「しばらく眠りなさい。後はお姉ちゃんに任せてちょうだい」

杏子は息を引き取るかのように、眠りににつき、女性は二人と共に消えた。

その後、彼女達の行方を知るものはいない。